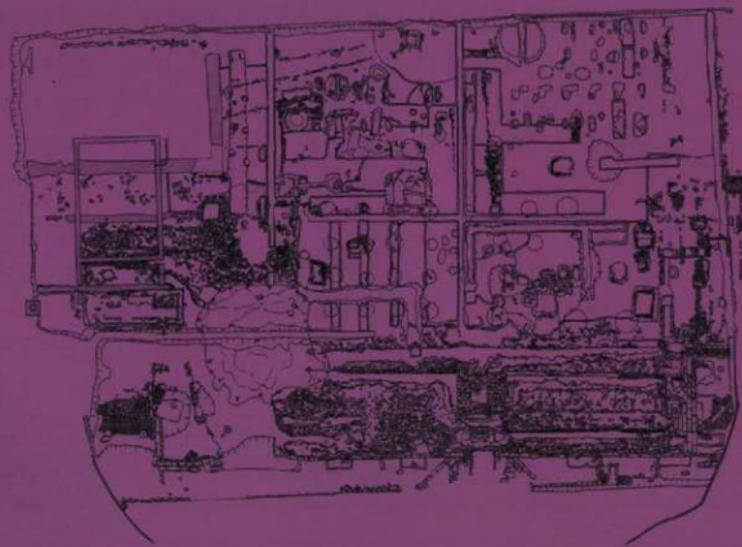


首里城跡

—正殿地区発掘調査報告書—

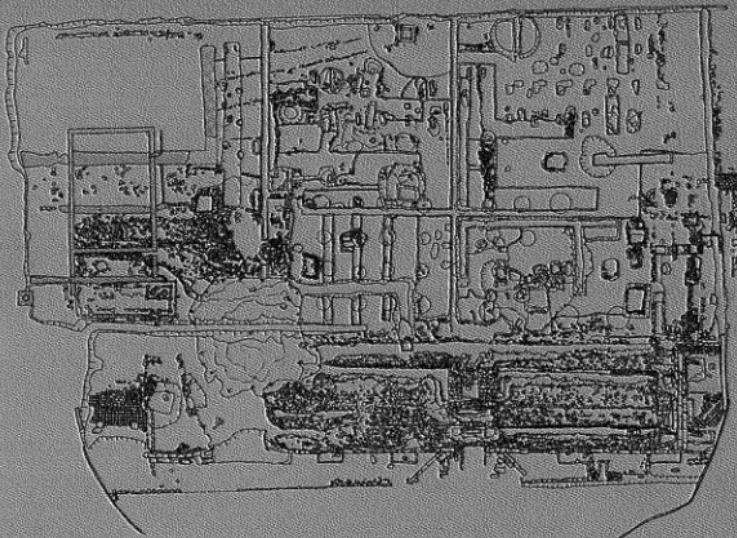


平成28(2016)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

首里城跡

—正殿地区発掘調査報告書—



平成28(2016)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

首里城跡

—正殿地区発掘調査報告書—

平成28（2016）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は、沖縄県教育庁文化課が昭和 60・61 年度に実施した、首里城跡正殿地区的発掘調査の成果をまとめたものです。

本調査における特筆すべき成果としては、正殿建物の基壇を構成する石積みを複数確認したことが挙げられます。この遺構の存在により、正殿は第一尚氏王代から沖縄戦前までの間に少なくとも 7 回建て替えられ、また建て替えの度に建物の規模が西側へ拡張していったことが明らかになりました。その他にも、雑石を積み上げた方形石組みや、軟弱な地盤を改良するための蜋燭地業、熊本鎮台沖縄分遣隊が駐留した際に構築された廐跡など、様々な遺構が検出されました。

遺物についても、多種多様な資料が大量に出土しました。これらは、首里城で最も重要な施設であった正殿の様相だけでなく、琉球王国の政治及び文化の一端を窺うことができる貴重な発見といえます。

このような成果を掲載した今回の報告書が、首里城はもちろん沖縄県の歴史・文化を理解する資料として活用されるとともに、地域における文化財の保存活用のために役立てば幸いです。

最後に、様々な御指導・御助言・御協力を戴きました諸機関及び関係各位に心から感謝申し上げます。

2016（平成28）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 下地 英輝

例　　言

1. 本報告書は、沖縄県那覇市首里当麻町に所在する「史跡　首里城跡」正殿地区的発掘調査及び資料整理の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査は昭和60・61年度に実施し、資料整理及び報告書作成は昭和62～平成3年度、平成21・22・27年度に実施した。
3. 本業務は、昭和60～平成3年度までは沖縄県の単独事業として沖縄県教育庁文化課が実施し、平成21・22・27年度は内閣府沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所が沖縄県と委託契約を交わし、沖縄県教育委員会の指導のもと、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。
4. 発掘調査及び資料整理に際して、以下の諸氏や機関に協力・指導・助言等を戴いた。記して謝意を表する。
(五十音順、敬称略　※所属名は当時)
上原 静（沖縄国際大学）、大橋 康二（佐賀県立九州陶磁文化館）、久保 喬康（京都国立博物館）、
新郷 英弘（芦屋塗の里）、當眞 崑一（グスク研究所）、向井 真（金沢大学国際文化資源学研究センター）、
森 達也（愛知県陶磁美術館）、矢島 律子（町田市立博物館）、渡辺芳郎（鹿児島大学）
史跡首里城跡整備委員会、内閣府沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所、首里城復元検討委員会
5. 本書の編集は、当センター職員の協力を得て新垣力が行った。執筆分担は下記の通りである。なお、第3章第3節については當眞崑一・上原静両氏の報告（1986年「首里城正殿跡の調査」『月刊文化』No.269）、1987年「首里城正殿跡の発掘調査」『紀要第4号』、1988年「51 沖縄県首里城正殿跡』『日本考古学年報39』）に多くを依拠しているが、解釈等に誤りがある場合は編集担当の責任である。
新垣 力…第1章、第2章、第3章第1節・第3節・第4節1③～⑥・2～4・9・18、第4章
山本 正昭…第3章第4節1①・②・13
亀島 慎吾…第3章第4節5・6
新垣 有一郎…第3章第4節7・8
大堀 皓平…第3章第4節10～12・14～17
上原 静…第3章第2節・第3節、第4節7・8・13
當眞 崑一…第3章第3節
6. 本書に掲載した写真は、発掘調査状況を當眞崑一・上原静が、遺物を矢船章浩・領家範夫が主に撮影した。
7. 発掘調査で得られた遺物及び実測図・写真等の記録は、全て沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

目 次

序	
例言	
第1章 経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査・整理の体制	1
第3節 調査・整理の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の方法と成果	11
第1節 調査の方法	11
第2節 層序	11
第3節 遺構	21
第4節 遺物	37
1 中国産陶磁器・土器	37
①青磁	37
②白磁	61
③青花	66
2 その他の輸入陶磁器・土器	102
①タイ産陶磁器・土器	102
②ベトナム産陶磁器	102
3 本土産陶磁器	111
4 沖縄産陶器・土器	126
①施釉陶器	126
②無釉陶器	143
③陶質土器	159
④瓦質土器	159
5 カムイヤキ	159
6 土器	159
7 瓦	168
8 塚	172
9 錢貨	234
10 煙管	234
11 玉類	257
12 円盤状製品	258
13 金属製品	261
14 石製品	290
15 骨製品	319
16 土製品	320
17 ガラス製品	321
18 自然遺物	322
①貝類遺体	322
②脊椎動物遺体	326
第4章 総括	333
報告書抄録	

図目次

第1回 沖縄本島の位置···	5	第79回 沖縄座陶器・土器10(無袖陶器2)···	116
第2回 古墳城跡の位置と周辺の遺跡···	6	第80回 沖縄座陶器・土器11(無袖陶器3)···	118
第3回 古墳城跡の史跡指し範囲と調査区···	7	第81回 沖縄座陶器・土器12(無袖陶器4)···	120
第4回 古墳城跡(17世紀後半~18世紀前半作成)にみる調査区···	8	第82回 沖縄座陶器・土器13(無袖陶器5)···	122
第5回 香里古地図(18世紀初頭作成)にみる調査区···	8	第83回 沖縄座陶器・土器14(無袖陶器6)···	124
第6回 沖縄県古里里田団(明治初期作成)にみる調査区···	9	第84回 沖縄座陶器・土器15(無袖陶器7)···	126
第7回 古里里城跡・本丸台・沖縄分遣御城跡にみる調査区···	9	第85回 沖縄座陶器・土器16(無袖陶器8)···	127
第8回 古里里城跡(昭和6年頃作成)にみる調査区···	10	第86回 沖縄座陶器・土器17(陶質土器)···	129
第9回 田統塚 大学校会配団(1950~1994年)にみる調査区···	10	第87回 沖縄座陶器・土器18(瓦質土器1)···	131
第10回 グランド設定図···	13	第88回 沖縄座陶器・土器19(瓦質土器2)···	132
第11回 縮率···	13	第89回 沖縄座陶器・土器20(瓦質土器3)、カムイマヤ、上器···	133
第12回 見通し断面図···	17	第90回 明朝系丸瓦1~5···	134
第13回 見通し断面図···	19	第91回 明朝系平瓦1~5···	135
第14回 造構配図···	20	第92回 瓦1(明朝系瓦1)···	136
第15回 I~V期基準重ね図···	23	第93回 瓦2(明朝系瓦2)···	137
第16回 I期基準···	24	第94回 瓦3(明朝系瓦3)···	138
第17回 II期基準···	25	第95回 瓦4(明朝系瓦4)···	139
第18回 III期基準···	26	第96回 瓦5(明朝系瓦5)···	140
第19回 IV期基準···	27	第97回 瓦6(明朝系瓦6)···	141
第20回 V期基準···	28	第98回 瓦7(明朝系瓦7)···	142
第21回 VI期基準···	29	第99回 瓦8(明朝系瓦8)···	143
第22回 VII期基準···	30	第100回 瓦9(明朝系瓦9)···	144
第23回 その他の造構1(SW1~2)···	31	第101回 瓦10(明朝系瓦10)···	145
第24回 その他の造構2(SW3~6)···	32	第102回 瓦11(明朝系瓦11~大和系瓦1)···	146
第25回 その他の造構3(SW7~10)···	33	第103回 瓦12(大和系瓦2)···	147
第26回 その他の造構4(SW11~13)···	34	第104回 瓦13(大和系瓦3)···	148
第27回 その他の造構5(SW17~SP3)···	35	第105回 瓦14(大和系瓦4)···	149
第28回 その他の造構6(SW1~2)···	36	第106回 瓦15(大和系瓦5)···	150
第29回 中国產陶器···	39	第107回 瓦16(大和系瓦6)···	151
第30回 中国產陶器2・土器5(青磁5)···	41	第108回 瓦17(大和系瓦7)···	152
第31回 中国產陶器3・土器5(青磁3)···	43	第109回 瓦18(大和系瓦8)···	153
第32回 中国產陶器4・土器4(青磁4)···	45	第110回 瓦19(大和系瓦9)···	154
第33回 中国產陶器5・土器5(青磁5)···	47	第111回 瓦20(大和系瓦10)···	155
第34回 中国產陶器6・土器5(青磁6)···	49	第112回 瓦21(大和系瓦11)···	156
第35回 中国產陶器7・土器8(青磁7)···	51	第113回 瓦22(大和系瓦12~高麗系瓦1)···	157
第36回 中国產陶器8・土器8(青磁8)···	53	第114回 瓦23(高麗系瓦2~明朝系12)···	158
第37回 中国產陶器9・土器8(青磁9)···	55	第115回 瓦24(明朝系瓦13)···	159
第38回 中国產陶器10・土器8(青磁10)···	57	第116回 瓦25···	160
第39回 中国產陶器11・土器11(青磁11)···	59	第117回 瓦26···	161
第40回 中国產陶器12・土器12(白磁1)···	62	第118回 瓦27···	162
第41回 中国產陶器13・土器13(白磁2)···	64	第119回 瓦28···	163
第42回 中国產陶器14・土器14(青花1)···	67	第120回 瓦29···	164
第43回 中国產陶器15・土器15(青花2)···	69	第121回 瓦30···	165
第44回 中国產陶器16・土器16(青花3)···	71	第122回 瓦31···	166
第45回 中国產陶器17・土器17(青花4)···	73	第123回 瓦質の部品名称···	167
第46回 中国產陶器18・土器18(青花5)···	75	第124回 瓦質の分類···	168
第47回 中国產陶器19・土器19(青花6)···	77	第125回 瓦1···	169
第48回 中国產陶器20・土器20(青花7)···	79	第126回 瓦2···	170
第49回 中国產陶器21・土器21(青花8)···	81	第127回 瓦3···	171
第50回 中国產陶器22・土器22(青花9)···	83	第128回 瓦4···	172
第51回 中国產陶器23・土器23(青花10)···	85	第129回 瓦5···	173
第52回 中国產陶器24・土器24(青花11)···	87	第130回 瓦6···	174
第53回 中国產陶器25・土器25(青花12)···	89	第131回 瓦7···	175
第54回 中国產陶器26(ぬ袖陶器1)···	91	第132回 瓦8···	176
第55回 中国產陶器27(ぬ袖陶器2)、無袖陶器···	93	第133回 瓦9···	177
第56回 中国產陶器28(その他の陶器2)···	96	第134回 瓦10···	178
第57回 中国產陶器29(その他の陶器3)···	98	第135回 燐瑠···	179
第58回 中国產陶器30(その他の陶器4)···	100	第136回 玉環···	180
第59回 その他の輸入陶器2(タケノ産陶器・土器1)···	103	第137回 円筒状製品1···	181
第60回 その他の輸入陶器2(タケノ産陶器・土器2)···	105	第138回 円筒状製品2···	182
第61回 その他の輸入陶器3(ハナム産陶器・胡鉢産陶器1)···	107	第139回 金屬製品1···	183
第62回 その他の輸入陶器4(朝鮮老南陶器2)···	109	第140回 金屬製品2···	184
第63回 本土產陶器1···	112	第141回 金屬製品3···	185
第64回 本土產陶器2···	114	第142回 金屬製品4···	186
第65回 本土產陶器3···	116	第143回 金屬製品5···	187
第66回 本土產陶器4···	118	第144回 金屬製品6···	188
第67回 本土產陶器5···	120	第145回 金屬製品7···	189
第68回 本土產陶器6···	122	第146回 金屬製品8···	190
第69回 本土產陶器7···	124	第147回 金屬製品9···	191
第70回 沖縄座陶器・土器1(ぬ袖陶器1)···	127	第148回 金屬製品10···	192
第71回 沖縄座陶器・土器2(ぬ袖陶器2)···	129	第149回 金屬製品11···	193
第72回 沖縄座陶器・土器3(ぬ袖陶器3)···	131	第150回 金屬製品12···	194
第73回 沖縄座陶器・土器4(ぬ袖陶器4)···	133	第151回 金屬製品13···	195
第74回 沖縄座陶器・土器5(ぬ袖陶器5)···	135	第152回 金屬製品14···	196
第75回 沖縄座陶器・土器6(ぬ袖陶器6)···	137	第153回 石器2···	197
第76回 沖縄座陶器・土器7(ぬ袖陶器7)···	139	第154回 石器3···	198
第77回 沖縄座陶器・土器8(ぬ袖陶器8)···	141	第155回 石器4···	199
第78回 沖縄座陶器・土器9(無袖陶器1)···	144	第156回 石器5···	200

図目次

第157回 石製品6	301	第163回 石製品12	313
第158回 石製品7	303	第164回 石製品13	316
第159回 石製品8	305	第165回 石製品14・漆	318
第160回 石製品9	307	第166回 骨製品	319
第161回 石製品10	309	第167回 土製品	320
第162回 石製品11	311	第168回 ガラス製品	321

図版目次

図版1 中国產陶器類・土器1(青磁1)···	40	図版68 瓦8(明朝系瓦8)···	192
図版2 中国產陶器類・土器2(青磁2)···	42	図版69 瓦9(明朝系瓦9・大和系瓦1)···	194
図版3 中国產陶器類・土器3(青磁3)···	44	図版70 瓦10(大和系瓦2)···	195
図版4 中国產陶器類・土器4(青磁4)···	46	図版71 瓦11(大和系瓦3)···	198
図版5 中国產陶器類・土器5(青磁5)···	48	図版72 瓦12(大和系瓦4)···	200
図版6 中国產陶器類・土器6(青磁6)···	50	図版73 瓦13(大和系瓦5)···	202
図版7 中国產陶器類・土器7(青磁7)···	52	図版74 瓦14(大和系瓦6)···	204
図版8 中国產陶器類・土器8(青磁8)···	54	図版75 瓦15(大和系瓦7)···	206
図版9 中国產陶器類・土器9(青磁9)···	56	図版76 瓦16(大和系瓦8)···	208
図版10 中国產陶器類・土器10(青磁10)···	58	図版77 瓦17(大和系瓦9)···	210
図版11 中国產陶器類・土器11(青磁11)···	60	図版78 瓦18(大和系瓦10)···	212
図版12 中国產陶器類・土器12(白磁1)···	63	図版79 瓦19(大和系瓦11)···	214
図版13 中国產陶器類・土器13(白磁2)···	65	図版80 瓦20(大和系瓦12・高麗系瓦1)···	216
図版14 中国產陶器類・土器14(青花1)···	68	図版81 瓦21(高麗系瓦2・明朝系瓦10)···	218
図版15 中国產陶器類・土器15(青花2)···	70	図版82 瓦22(明朝系瓦11)···	220
図版16 中国產陶器類・土器16(青花3)···	72	図版83 磁1···	222
図版17 中国產陶器類・土器17(青花4)···	74	図版84 磁2···	224
図版18 中国產陶器類・土器18(青花5)···	76	図版85 磁3···	226
図版19 中国產陶器類・土器19(青花6)···	78	図版86 磁4···	228
図版20 中国產陶器類・土器20(青花7)···	80	図版87 磁5···	230
図版21 中国產陶器類・土器21(青花8)···	82	図版88 磁6···	232
図版22 中国產陶器類・土器22(青花9)···	84	図版89 磁7···	233
図版23 中国產陶器類・土器23(青花10)···	86	図版90 磁8···	236
図版24 中国產陶器類・土器24(青花11)···	88	図版91 磁9···	238
図版25 中国產陶器類・土器25(青花12)···	89	図版92 磁10···	240
図版26 中国產陶器類・土器26(褐釉陶器)···	92	図版93 磁11···	242
図版27 中国產陶器類・土器27(褐釉陶器2、無釉陶器)···	94	図版94 磁12···	244
図版28 中国產陶器類・土器28(その他の陶器類・土器1)···	97	図版95 磁13···	246
図版29 中国產陶器類・土器29(その他の陶器類・土器2)···	99	図版96 磁14···	248
図版30 中国產陶器類・土器30(その他の陶器類・土器3)···	101	図版97 磁15···	250
図版31 その他の輸入陶器類(イギリス陶器類・土器1)···	104	図版98 磁16···	252
図版32 その他の輸入陶器類(イギリス陶器類・土器2)···	106	図版99 磁17···	254
図版33 その他の輸入陶器類(イギリス陶器類・土器3)···	108	図版100 球管···	256
図版34 本土產陶器類1···	110	図版101 五環···	257
図版35 本土產陶器類2···	113	図版102 円錐状製品1···	258
図版36 本土產陶器類3···	115	図版103 円錐状製品2···	260
図版37 本土產陶器類4···	117	図版104 金属製品1···	265
図版38 本土產陶器類5···	119	図版105 金属製品2···	267
図版39 本土產陶器類6···	121	図版106 金属製品3···	269
図版40 本土產陶器類7···	123	図版107 金属製品4···	271
図版41 本土產陶器類7···	125	図版108 金属製品5···	273
図版42 沖縄產陶器・土器1(施釉陶器)···	128	図版109 金属製品6···	275
図版43 沖縄產陶器・土器2(施釉陶器2)···	130	図版110 金属製品7···	277
図版44 沖縄產陶器・土器3(施釉陶器3)···	132	図版111 金属製品8···	279
図版45 沖縄產陶器・土器4(施釉陶器4)···	134	図版112 金属製品9···	281
図版46 沖縄產陶器・土器5(施釉陶器5)···	136	図版113 金属製品10···	283
図版47 沖縄產陶器・土器6(施釉陶器6)···	138	図版114 金属製品11···	285
図版48 沖縄產陶器・土器7(施釉陶器7)···	140	図版115 金属製品12···	287
図版49 沖縄產陶器・土器8(施釉陶器8)···	142	図版116 金属製品13···	289
図版50 沖縄產陶器・土器9(無釉陶器1)···	145	図版117 石製品1···	292
図版51 沖縄產陶器・土器10(無釉陶器2)···	147	図版118 石製品2···	294
図版52 沖縄產陶器・土器11(無釉陶器3)···	149	図版119 石製品3···	296
図版53 沖縄產陶器・土器12(無釉陶器4)···	151	図版120 石製品4···	298
図版54 沖縄產陶器・土器13(無釉陶器5)···	153	図版121 石製品5···	300
図版55 沖縄產陶器・土器14(無釉陶器6)···	155	図版122 石製品6···	302
図版56 沖縄產陶器・土器15(無釉陶器7)···	158	図版123 石製品7···	304
図版57 沖縄產陶器・土器16(青質土器)···	161	図版124 石製品8···	306
図版58 沖縄產陶器・土器17(灰質土器1)···	163	図版125 石製品9···	308
図版59 沖縄產陶器・土器18(灰質土器2)···	165	図版126 石製品10···	310
図版60 沖縄產陶器・土器19(灰質土器3)・カムィヤキ・土器···	167	図版127 石製品11···	312
図版61 瓦1(明朝系瓦1)···	176	図版128 石製品12···	314
図版62 瓦2(明朝系瓦2)···	178	図版129 石製品13···	315
図版63 瓦3(明朝系瓦3)···	180	図版130 石製品14···	317
図版64 瓦4(明朝系瓦4)···	184	図版131 石製品15・漆···	318
図版65 瓦5(明朝系瓦5)···	186	図版132 骨製品···	319
図版66 瓦6(明朝系瓦6)···	188	図版133 土製品···	320
図版67 瓦7(明朝系瓦7)···	190	図版134 ガラス製品···	321

図版目次

図版135 骨格遺体1···	323	図版169 電鋸調査状況20···	364
図版136 貝類遺体2···	324	図版170 電鋸調査状況21···	365
図版137 骨頭遺体3···	325	図版171 電鋸調査状況22···	366
図版138 脊椎動物遺体1···	327	図版172 電鋸調査状況23···	367
図版139 脊椎動物遺体2···	328	図版173 電鋸調査状況24···	368
図版140 脊椎動物遺体3···	329	図版174 電鋸調査状況25···	369
図版141 脊椎動物遺体4···	330	図版175 電鋸調査状況26···	370
図版142 脊椎動物遺体5···	331	図版176 電鋸調査状況27···	371
図版143 脊椎動物遺体6···	332	図版177 電鋸調査状況28···	372
図版144 空中零真1···	339	図版178 電鋸調査状況29···	373
図版145 空中零真2···	340	図版179 電鋸調査状況30···	374
図版146 空中零真3···	341	図版180 電鋸調査状況31···	375
図版147 空中零真4···	342	図版181 電鋸調査状況32···	376
図版148 着手前状況1···	343	図版182 電鋸調査状況33···	377
図版149 着手前状況2···	344	図版183 電鋸調査状況34···	378
図版150 電鋸調査状況1···	345	図版184 電鋸調査状況35···	379
図版151 電鋸調査状況2···	346	図版185 電鋸調査状況36···	380
図版152 電鋸調査状況3···	347	図版186 電鋸調査状況37···	381
図版153 電鋸調査状況4···	348	図版187 電鋸調査状況38···	382
図版154 先端調査状況5···	349	図版188 先端調査状況39···	383
図版155 先端調査状況6···	350	図版189 先端調査状況40···	384
図版156 先端調査状況7···	351	図版190 先端調査状況41···	385
図版157 先端調査状況8···	352	図版191 先端調査状況42···	386
図版158 先端調査状況9···	353	図版192 先端調査状況43···	387
図版159 先端調査状況10···	354	図版193 先端調査状況44···	388
図版160 先端調査状況11···	355	図版194 先端調査状況45···	389
図版161 先端調査状況12···	356	図版195 先端調査状況46···	390
図版162 先端調査状況13···	357	図版196 先端調査状況47···	391
図版163 先端調査状況14···	358	図版197 先端調査状況48···	392
図版164 先端調査状況15···	359	図版198 先端調査状況49···	393
図版165 先端調査状況16···	360	図版199 先端調査状況50···	394
図版166 先端調査状況17···	361	図版200 先端調査状況51···	395
図版167 先端調査状況18···	362	図版201 先端調査状況52···	396
図版168 先端調査状況19···	363	図版202 先端調査状況53···	397

表目次

第1表 青銅集計表···	CD収録
第2表 青銅觀察一覧···	CD収録
第3表 白銀集計表···	CD収録
第4表 白銀觀察一覧···	CD収録
第5表 青花集計表···	CD収録
第6表 青花觀察一覧···	CD収録
第7表 桜釉陶器集計表···	CD収録
第8表 桜釉陶器觀察一覧···	CD収録
第9表 無釉陶器集計表···	CD収録
第10表 無釉陶器觀察一覧···	CD収録
第11表 その他の中国唐物陶器・土器集計表···	CD収録
第12表 その他の中国唐物陶器・土器觀察一覧···	CD収録
第13表 ダイテ陶磁器・土器集計表···	CD収録
第14表 ダイテ陶磁器・土器觀察一覧···	CD収録
第15表 ハナム津陶器集計表···	CD収録
第16表 ハナム津陶器觀察一覧···	CD収録
第17表 朝鮮高麗陶器集計表···	CD収録
第18表 朝鮮高麗陶器觀察一覧···	CD収録
第19表 本土陶器集計表···	CD収録
第20表 本土陶器觀察一覧···	CD収録
第21表 泥調度施釉陶器集計表···	CD収録
第22表 泥調度施釉陶器觀察一覧···	CD収録
第23表 泥調度施釉陶器集計表···	CD収録
第24表 泥調度施釉陶器觀察一覧···	CD収録
第25表 陶質土器集計表···	CD収録
第26表 陶質土器觀察一覧···	CD収録
第27表 瓦質土器集計表···	CD収録
第28表 瓦質土器觀察一覧···	CD収録
第29表 カミナリ集計表···	CD収録
第30表 カミナリ觀察一覧···	CD収録
第31表 土器集計表···	CD収録
第32表 土器觀察一覧···	CD収録
第33表 瓦質土器集計表···	CD収録
第34表 瓦質土器觀察一覧···	CD収録
第35表 塗装汁表···	CD収録
第36表 鉢質陶器集計表···	CD収録
第37表 鉢質陶器觀察一覧···	CD収録
第38表 鉢質陶器集計表···	CD収録
第39表 漆質集計表···	CD収録
第40表 壁質陶器觀察一覧···	CD収録
第41表 壁質の形状・素材別集計表···	CD収録
第42表 五類集計表···	CD収録
第43表 五類觀察一覧···	CD収録
第44表 円盤状製品集計表···	CD収録
第45表 円盤状製品觀察一覧···	258
第46表 円盤状製品觀察一覧···	CD収録
第47表 金属質品集計表···	CD収録
第48表 金属質品觀察一覧···	CD収録
第49表 石質品集計表···	CD収録
第50表 石質品觀察一覧···	CD収録
第51表 骨質品集計表···	CD収録
第52表 骨質品觀察一覧···	CD収録
第53表 土質品集計表···	CD収録
第54表 土質品觀察一覧···	CD収録
第55表 ガラス製品集計表···	CD収録
第56表 ガラス製品觀察一覧···	CD収録
第57表 貝類集休等集計表···	CD収録
第58表 貝類集休等種別一覧···	322
第59表 民俗の生息場所傾向(黒住1987)の作成···	322
第60表 脊椎動物遺体集計表···	CD収録
第61表 脊椎動物遺体種別一覧···	326

第1章 経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

首里城跡の復元整備は、沖縄県本土復帰の年である昭和47（1972）年に、沖縄県教育庁文化課（以下、文化課）が戦災文化財復元整備事業として歓迎門及び周辺城壁の整備に着手したことを嚆矢とする。沖縄戦で灰燼に帰した首里城の復元は県民の悲願であり、以後も官民の連携した取り組みで久慶門などの復元及び修理工事が進められたが、沖縄戦後に建設された琉球大学の移転に伴い、その跡地利用法として首里城一帯の公園化が有力となつたため、これまでの城門や城壁に加えて、正殿を含む城郭内側区域の復元整備を行う気運が高まつた。國も昭和57（1982）年に決定した第二次沖縄振興開発計画の中で、「首里城跡一帯の歴史的風土を生きしつつ、公園としてふさわしい範囲について整備を検討する」と提言し、それを受けて沖縄県土木建築部は昭和59（1984）年に復元整備の指針となる「首里城公園基本計画」を策定した（首里城公園基本計画調査委員会 1984）。

文化課も上記の流れに応じるように、同年度に発足した史跡首里城跡整備委員会（以下、整備委員会）で整備基本構造の検討に着手した。整備委員会では正殿の復元や首里城跡の遺構調査を含む様々な事項を調査・審議し、特に後者に関しては、事前の発掘調査に基づく復元整備を行うこととの基本的条件を示した（史跡首里城跡整備委員会 1998）。この提言に沿う形で、文化課は昭和60（1985）年度から県単独事業による首里城跡正殿地区（以下、正殿地区）の発掘調査を開始した。

第2節 調査・整理の体制

発掘調査は昭和60・61年度に文化課が実施した。資料整理は発掘調査終了後の昭和62年度から文化課により漸次的に進められてきたが、報告書作成に係る本格的な業務は、沖縄県教育庁文化財課の指導のもと、平成27年度に沖縄県立埋蔵文化財センター（以下、当センター）が実施した。以下に体制の詳細を記す。

発掘調査（昭和60・61年度）

事業主体：沖縄県教育委員会 教育長 米村幸政（昭和60年度）、池田光男（昭和61年度）

事業所管：沖縄県教育庁文化課長 比嘉賀幸（昭和60・61年度）

課長補佐 西平守勝（昭和60・61年度）、糸数兼治（昭和60年度）

文化振興係長 大城真幸（昭和60年度）、小橋川順市（昭和61年度）

調査担当…文化財班 主任専門員 当眞嗣一（昭和60年度）、専門員 上原靜（昭和60年度）

文化財係長 當眞嗣一（昭和61年度）、専門員 上原靜（昭和61年度）

調査補助…文化財調査課託員 島袋聖子（昭和60・61年度）

資料整理・報告書作成（昭和62・63年度、平成元～3・21・22・27年度）

事業主体：沖縄県教育委員会 教育長 池田光男（昭和62年度）、高良清敏（昭和63～平成2年度）、

津留健二（平成3年度）、金武正八郎（平成21・22年度）、

諸見里明（平成27年度）

沖縄県教育庁文化課長 比嘉賀幸（昭和62年度）、宜保榮次郎（昭和63～平成3年度）、
大城慧（平成21・22年度）

課長補佐 当間一郎（昭和62・63年度）、平田與進（平成元年度）、

上江洲均（平成元・2年度）、伊佐慎一（平成2・3年度）、

知念勇（平成3年度）

文化振興係長 小橋川順市（昭和62・63年度）、仲里哲雄（平成元～3年度）

総括…主幹兼文化財係長 當眞嗣一（昭和 62・63 年度）、
主幹兼埋蔵文化財係長 安里嗣尊（平成元・2 年度）、埋蔵文化財係長 大城慧（平成 3 年度）
資料整理担当…専門員 上原靜（昭和 62～平成元年度）、主任専門員 上原靜（平成 2・3 年度）
沖縄県教育庁文化財課長 萩尾俊章（平成 27 年度）
記念物班 班長 島袋洋（平成 21・22 年度）、
副参事兼班長 金城亀信（平成 27 年度）
指導主事 久高健（平成 21・22 年度）、主任専門員 長嶺均（平成 27 年度）
事業所管：沖縄県立埋蔵文化財センター 参事兼所長 玉栄直（平成 21 年度）、
所長 守内泰三（平成 22 年度）、下地英輝（平成 27 年度）、
副参事 盛本熙（平成 27 年度）
総務班 班長 嘉手苅勤（平成 21・22 年度）、新垣勝弘（平成 27 年度）
主任 村吉由美子（平成 21 年度）、主査 本永恵（平成 22 年度）、
新里靖・比嘉睦（平成 27 年度）
総括…調査班 班長 金城亀信（平成 21・22 年度）、上地博（平成 27 年度）
資料整理担当…主任 新垣力（平成 21・22・27 年度）、知念隆博（平成 21・22 年度）
主任専門員 山本正昭、主任 大堀皓平、専門員 亀島慎吾（平成 27 年度）
資料整理補助…臨時の任用専門員 新垣有一郎（平成 27 年度）
資料整理作業員・埋蔵文化財資料整理嘱託員（平成 21・22・27 年度）
安里綾子・新垣利津代・新垣裕子・伊佐えりな・喜屋武朋子・久貝祐子・砂川みなみ・平良貴子・
玉城実子・知花香織・仲村綾乃・並里千佳・比嘉紗恵里・諸久村泰子・又吉純子・宮城友美・
宮里美也子・矢舟章浩・山城由紀子・領家範夫
印刷製本 有限会社金城印刷

第3節 調査・整理の経過

発掘調査

前節で述べたように、正殿地区的発掘調査は昭和 60・61 年度の 2 ヶ年にわたって進められた。調査予定範囲 1,350 m² のうち、昭和 60 年度は正殿正面側 270 m²、昭和 61 年度は残りの 1,080 m² を対象とし、期間は前者が 7 月～10 月までの約 4 ヶ月間、後者が 7 月～翌年 3 月までの約 9 ヶ月間をそれぞれ要した。また昭和 60 年度は一般県民にも発掘調査への参加を募り、最終的に延べ 400 人（うち大人 102 人・児童生徒 298 人）が現場での作業に従事した。その他、昭和 60 年度には本調査と並行して、正殿建物の位置把握を目的に調査予定地の四隅で確認調査も実施した。

資料整理・報告書作成

遺構図面や写真の整理を先行して進め、平成 3（1991）年度に遺構写真を主体とする調査記録を刊行したが、膨大な量の出土遺物については将来に向けて洗浄・注記・分類等の基礎整理や実測及びトレーク作業を断続的に行っていった。その後、内閣府沖縄総合事務局沖縄記念公園事務所の協力により、平成 27 年度から本格的な資料整理が実施できることとなった。業務内容は編集及び原稿執筆を中心とし、これまでに作成した実測図の修正・追加等は最低限に留めた。文字原稿や写真も含めてパソコンの編集ソフト（インデザイン）にて D T P 印刷用の編集を行い、最終的には全て PDF ファイルとして作成し、印刷製本業者へ入稿した。

印刷製本業務は、当センターにおいて県内印刷業者の割り振りを行ったうえで、12 社による指名競争入札を実施し、落札した有限会社金城印刷が担当した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

首里城は那覇市の東側、首里当蔵町3丁目1番地に所在する。首里台地と称される標高100m前後の琉球石灰岩丘陵上に築かれており、東西410m、南北273m、面積46,167m²を誇る県下最大規模のグスクである。東側に那覇市の最高所（標高165.7m）である弁ヶ嶽がそびえ、多くの河川が首里城を取り巻くように配されるなど、すぐれた風水思想に基づいた王都に相応しい環境が整えられている。この丘陵の南側には、安里川の浸食により比高差70~80mの比較的急な斜面が形成され、地形を利用した掘り込み式の古墓が点在している。

首里城周辺の地質の特徴として、前述した琉球石灰岩の下層に新第三紀鮮新世の砂岩・泥岩からなる島尻層群が基盤となっている点が挙げられる。スポンジ状の構造で高い透水性を有する琉球石灰岩と、不透水層である島尻層群が組み合わされることにより、首里の各地では両者の不整合部分からの湧水が多数確認されている。

首里城内の基盤層も例に漏れず、琉球石灰岩や赤土（島尻マージ）と島尻層群に大別される。今回調査区の「正殿地区」は琉球石灰岩を基盤層に持つと考えられるが、現況の地表面はグスク時代に客土で平場を造成した結果であることが判明している。

第2節 歴史的環境

現在のところ、首里城の創建について明確に触れている史料は確認されていない。察度43（1392）年に察度王が建造したと伝わる數十丈の高樓（高世層理殿）を首里城内の施設とする説もあるが、より信頼性の高いものとしては「安国山樹華木之碑記」が挙げられる。尚巴志6（1427）年に建てられたこの碑文には、首里城北西側で人工池の龍潭を掘り安国山に華樹を植えたとの記述がみられるため、尚巴志王代（1422~1439年）に周辺の整備を行えるような状況であったこと、つまり当該期に王城としての基本的な構造が確立していた可能性は高い。そして尚真・尚清王代（1477~1555年）には外郭の拡張や周辺施設の整備が進み、現在のような姿に近づいていったと推定される。

今回調査区の「正殿地区」は、かつて琉球国の政治及び儀礼を司る中枢施設「正殿」が存在した場所である。正殿の規模は『首里城正殿実施設計報告書』によると、約1.9mの基壇上に築かれた正面約29m×側面約17m・二層三階の高さ約16mの木造建物で、正面約14.4m・奥行約2mの玄関部分を取り付け、さらにその中央に唐破風様式の向拝（正面約9.2m・奥行約2.3m）が敷設される。これらは尚育12（1846）年に実施された最後の正殿重修記録をまとめた尚家文書を参考にしているが、『李朝実錄』にみられる朝鮮人染成等の見聞録（高良1988・1996、池谷・内田・高橋2005）や、明代の鄭若曾が著した『鄭陽雜著』所収の琉球國圖（沖縄県史料編集室2003）にも同様の建物が登場するため、二層三階の木造建築という基本的な構造は15世紀後半から継続していることが理解できる。この建物がいつから存在したかは判然としないが、後述するI期基壇の時期が15世紀中葉以前と考えられることから、遅くとも尚巴志王代（1422~1439年）頃には当地区に一定規模の建物があったと想定される。ちなみに、首里城はかつて正殿が南面し、美福門を正門としていたとの伝承もあるため、I期基壇に伴う建物が南面する正殿に相当する可能性も考慮する必要があろう。また、隣接する淑順門西地区では13世紀後半~14世紀初頭の遺物包含層が確認され（沖縄県埋文2013b）、察度王代以前の様相を示唆する成果として興味深い。

正殿は史料によると、4度の火災に遭遇している。最初は尚金福4（1453）年に勃発したとされる王位繼承に伴う内乱（いわゆる志魯・布里の乱）で、後述するII期基壇の化粧石に認められる被焼がこれに由来すると考えられる。また城内の他地区でも、同時期の火災に関係するとみられる発掘調査成果が複数得られている（沖縄県文化課1998a、沖縄県埋文2005・2010・2013c・2014など）。2度目と3度目は尚質13（1660）年と尚貞41（1709）

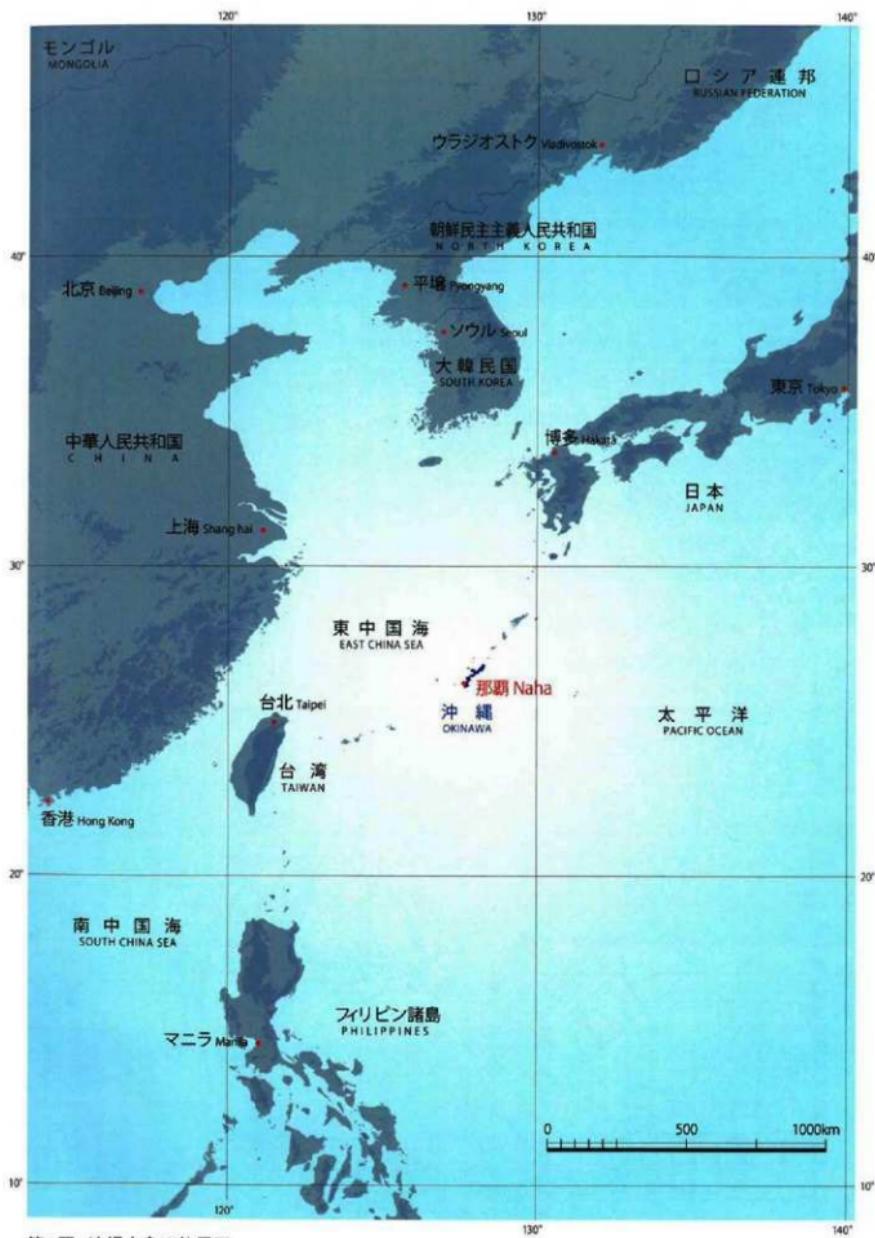
年の失火がこれに相当する。御内原西地区（沖縄県埋文 2007a）では両時期のいずれかと想定される焼土面を検出しているが、正殿地区では現在のところ当該火災の所産と思しき痕跡は不明である。4度目は沖縄御朝に受けた米軍の砲撃によるもので、VII期基壇を含む首里城全体が甚大な被害を被った。これについては後述する。

上記のように、正殿は首里城内の中枢施設として、琉球国が存続する間は再建や重修を繰り返し、その機能を維持してきた。しかし、明治 12（1879）年に沖縄県の設置及び琉球王府の解体が進行されると、首里城も歴史の荒波に翻弄されていく。まず、琉球处分の同年から首里城に駐屯した熊本鎮台沖縄分遣隊（以下、分遣隊）は、城内の建物や石垣などを各所で改築した。この頃首里城は建物・土地とも陸軍省の管轄となり、軍事施設であつた同所へは容易に立ち入ることができず、分遣隊が撤退する明治 29（1896）年までの間に城内がどのように改変されたか、その詳細は現在も判然としない。正殿については世宗殿や寄満とあわせて兵卒の寝室に使用され、また正殿と北殿を繋ぐ廊下には便所（便所）が設けられたとされる。このうち、かねて跡は今回の発掘調査で確認されている。ちなみに、分遣隊が撤退時に龍柱を持ち帰ろうとした話は有名だが、切削痕の残る龍柱片や再設置に用いたと考えられる金属製錠も出土しており、当時の様相を理解するうえで重要な資料といえる。

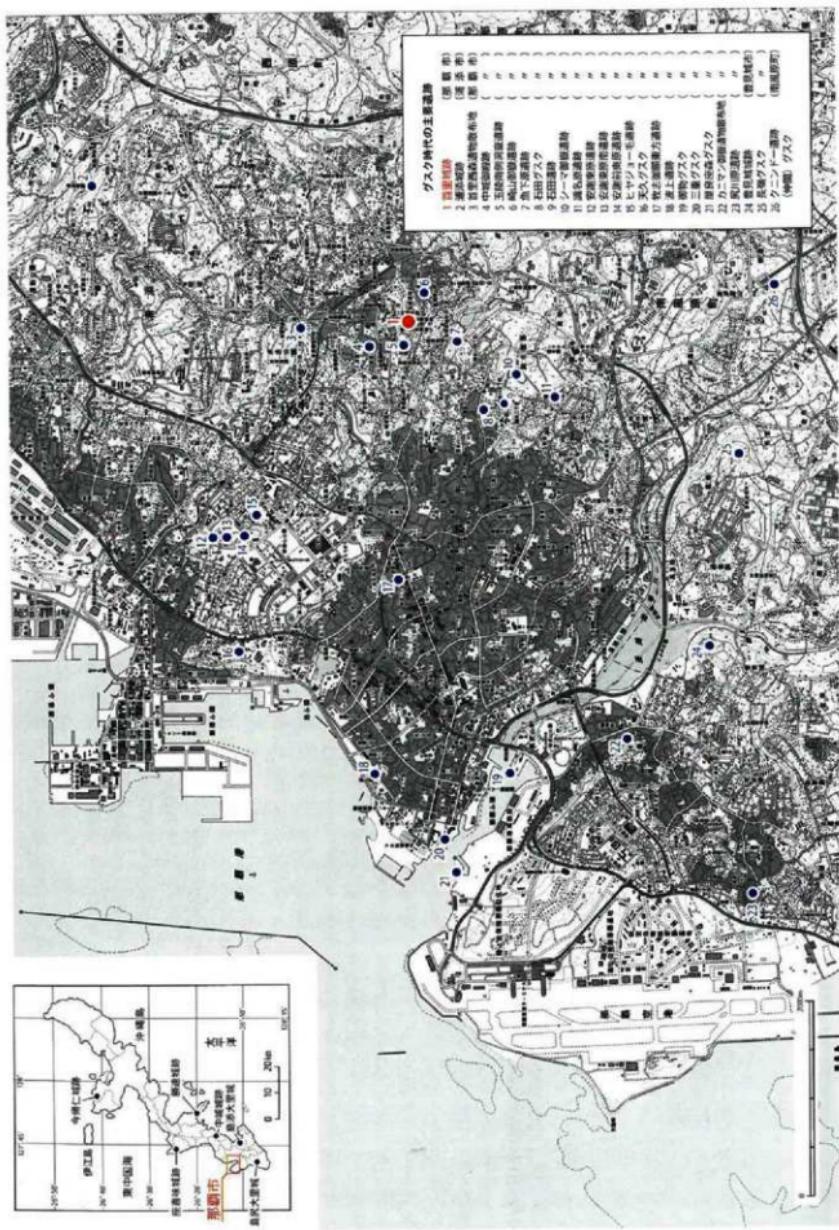
分遣隊が撤退した後、首里城は学校や役所施設として使用されるようになる。同年 11 月から翌年 9 月まで沖縄県師範学校が城内の建物を仮校舎として使用したを契機に、師範学校付属小学校の移転（明治 31 年 4 月～翌年 4 月）、沖縄県臨時土地整理局の設置（明治 33 年 8 月～同 37 年 3 月 3 日）、校舎火災に伴う沖縄県師範学校の再移転（明治 37 年 1 月 14 日～同 41 年 7 月）、首里区立工業徒弟学校の移転（明治 37 年 4 月～大正 7 年 1 月）、首里区立女子工芸学校の移転（明治 41 年～昭和 9 年）、首里尋常高等小学校五学年三学級の移転（明治 42 年 4 月～同 45 年 4 月）、沖縄県立中学校分校の設置（明治 43 年 4 月～翌年 4 月）、首里尋常高等小学校三年以上高等科まで 14 学級の移転（明治 44 年～翌年 4 月）、首里女子尋常高等小学校分校教場の移転（明治 45 年 4 月～）などが確認されている。この時、首里城は昭和 30 年代後半に首里区が願い出した「建物及び敷地の払い下げ」が許可されていたが、老朽化していく建物や施設の修理及び管理を行う財政力が不足しており、明治・大正の 2 度にわたって正殿の取り壊しが協議された。特に大正 12（1923）年には正式に決議されたものの、末吉麥門冬・鎌倉芳太郎・伊東忠太の尽力により、内務省神社局長から県庁へ取り壊し中止を命じた電報が打たれ、首里城は破壊の危機を免れた。その後、大正 13（1924）年に沖縄神社の拝殿となつた正殿は、大正 15（1925）年國宝に指定され、昭和 9（1934）年 3 ～ 4 月頃には解体修理が落成した。

このようにして、正殿は往時の威容を幾分か取り戻したのだが、戦争の時代に突入していたこともあり、首里城はまたも軍隊の駐屯地となつた。昭和 19（1944）年、城内にあった首里第一国民学校校舎の一部を第 9 軍團（武部隊）が兵舎に使用したのを皮切りに、南風原から移動してきた第 32 軍司令部が地下に壕の構築を開始した。十・十空襲で那覇が焼土と化したため、首里城も偽装の必要性が指摘され、正殿屋根の一部をオオタニワタリで偽装する試みもあったとされるが、翌年には米軍の砲撃を浴びて灰燼に帰した。今回の調査で複数確認された爆弾破壊跡は、この時に生じたものである。

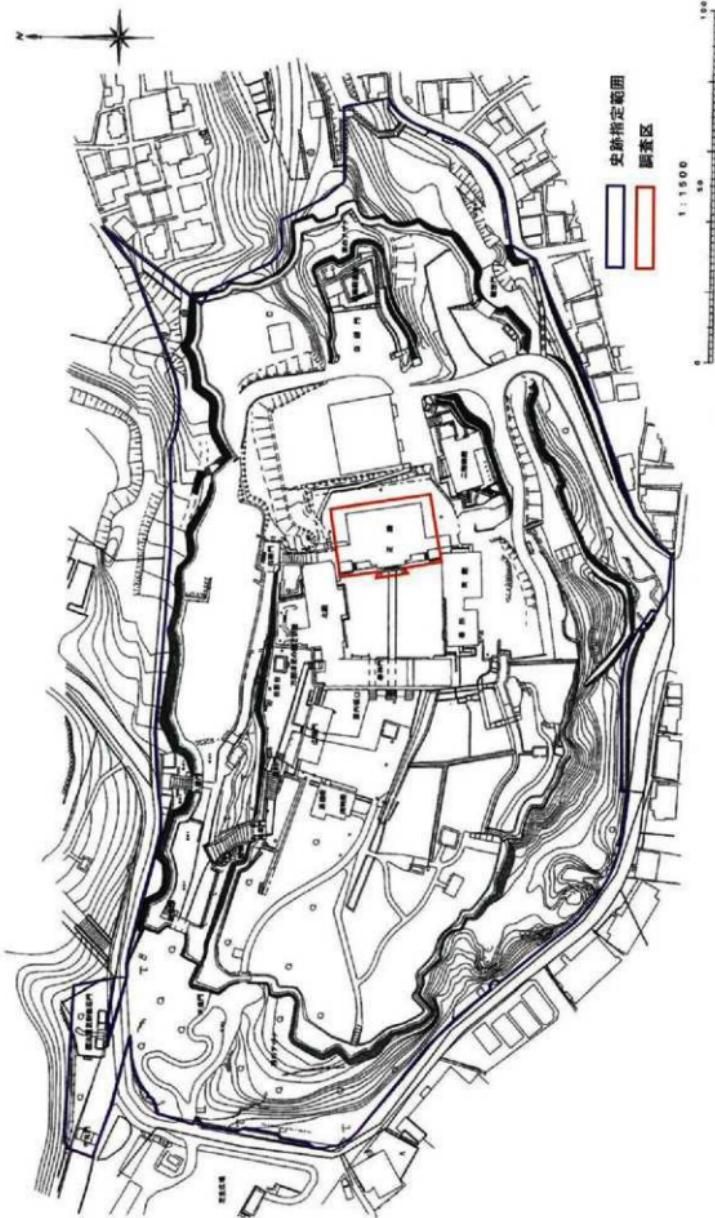
戦後、跡地には昭和 25（1950）年に琉球大学が開学した。その際、校舎の建設やそれに伴う大量の土砂移動などが進み、一帯は旧地形の面影がわずかに偲ばれる状態にまで変貌を遂げた。しかし、正殿地区には主に駐車場として利用され、建物の工事で掘削された範囲は一部にとどまる。今回の調査で多くの成果を得ることができたのは、結果として当時の状況が功を奏したといえよう。その後、首里城は昭和 47（1972）年の沖縄県本土復帰とともに国の史跡に指定されたが、昭和 59（1984）年に琉球大学の移転が完了した跡地を公園として利用することが決定したため、現在も復元整備が進められている。ちなみに、平成 12（2000）年には「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として、9 件の資産とともに世界文化遺産に登録されている。また首里城公園は平成 26（2014）年度実績で 2,522,395 人が訪れており、平成 27（2015）年 4 月 25 日には開園から数えて入園者 5,000 万人を達成するなど、沖縄有数の観光地でもある。



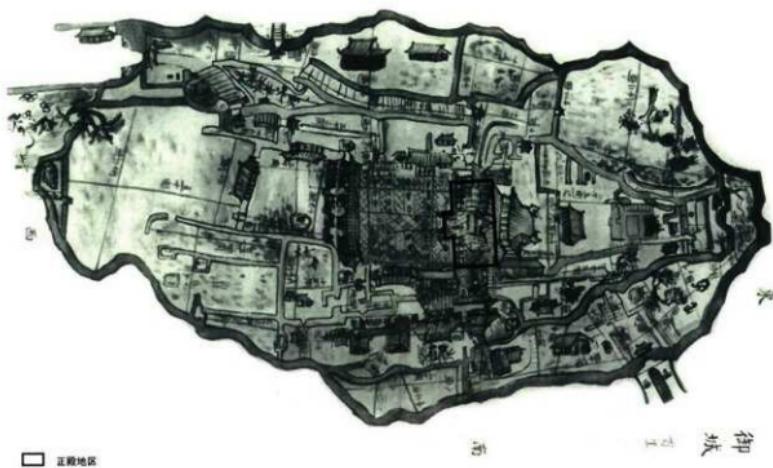
第1図 沖縄本島の位置図



第2図 首里城跡の位置と周辺の遺跡

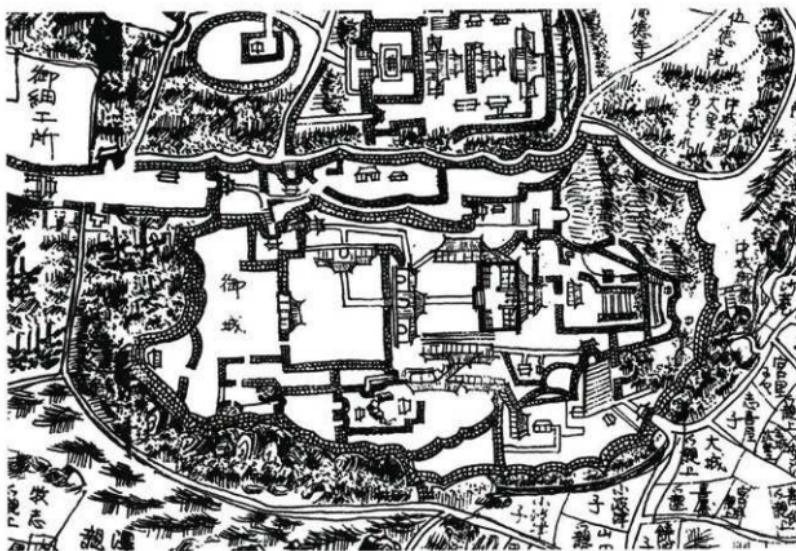


第3図 首里城跡の史跡指定範囲と調査区



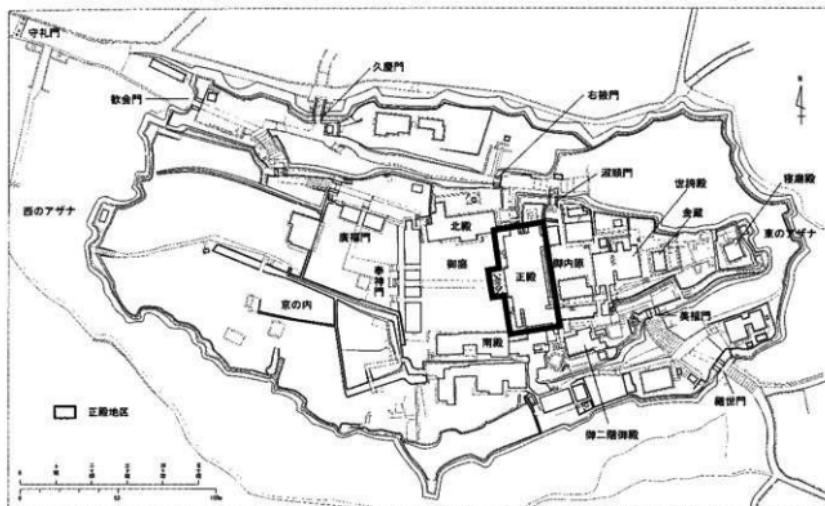
第4図 首里城絵図（17世紀後半～18世紀前半作成）にみる調査区

※東京大学史料編纂所蔵、安里 2013 に加筆



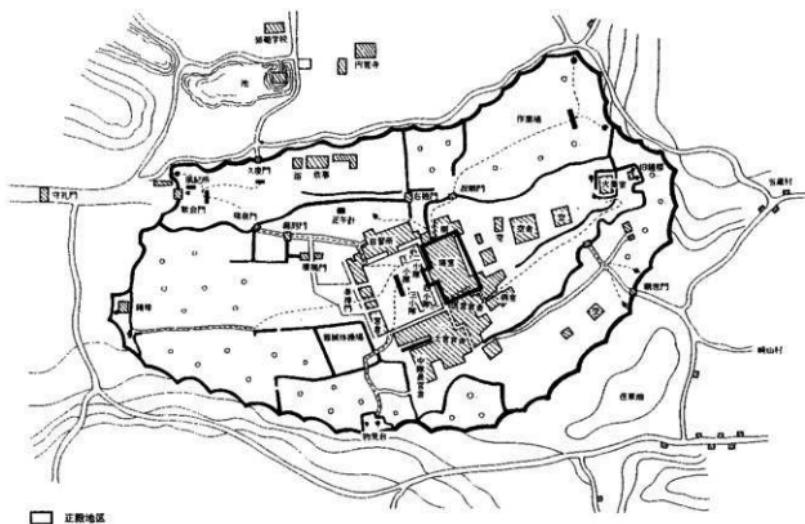
第5図 首里古地図（18世紀初頭作成）にみる調査区 □ 正式地区

※沖縄県立図書館蔵



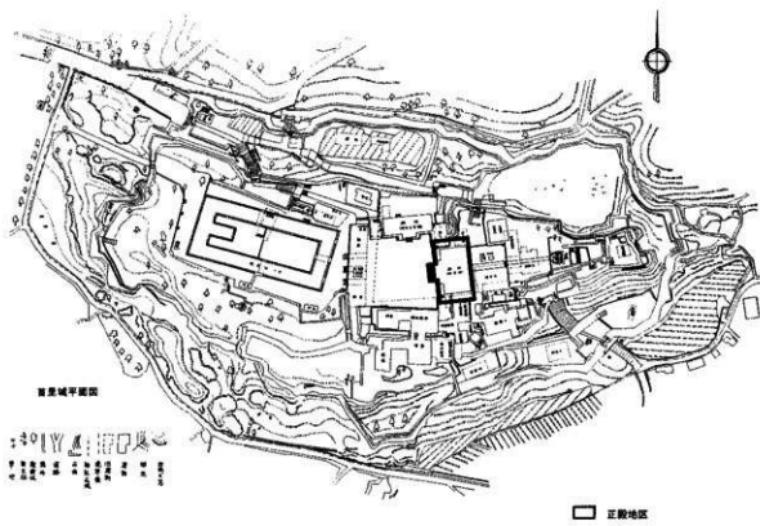
第6図 沖縄県首里旧城図（明治初期作成）にみる調査区

※那覇市歴史博物館蔵、原図をトレース

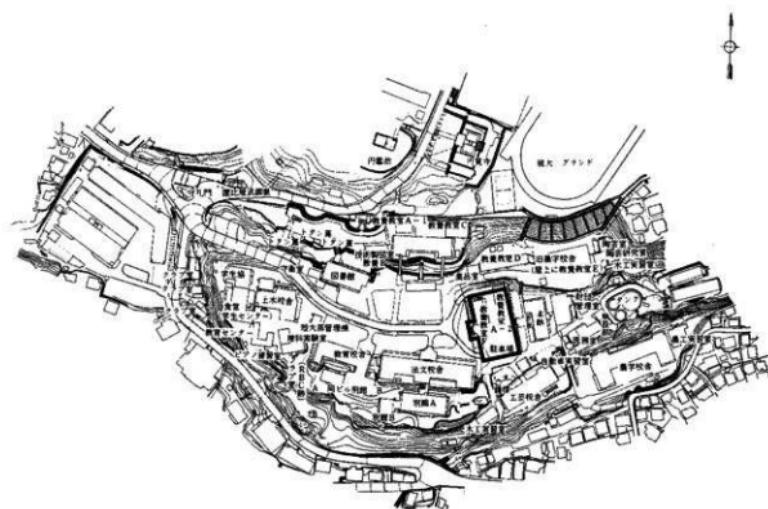


第7図 旧首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図にみる調査区

※(財)沖縄県文化振興会 公文書管理部 史料編集室蔵



第8図 旧首里図(昭和6年頃作成)にみる調査区 沖縄県立図書館蔵



第9図 旧琉球大学校舎配置図（1950～1984年）にみる調査区

正體地區

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

前章で述べたように、今回の発掘調査は公園整備工事に先立つ正殿の遺構確認を目的とするもので、全体の調査予定範囲 1,350 m²のうち、昭和 60 年度は正殿跡正面側の 270 m²、昭和 61 年度は残りの 1,080 m²をそれぞれ対象に調査を実施した。

発掘調査や公園整備工事で使用する基準点の座標値及び方位は、測量法に定める平面直角座標系第 15 系（以下公共座標系）に據るものとしたが、今回の調査区は方位が甚だしく偏り（公共座標系の北を西へ 8° 59' 36" 振った数値が調査方位）、かつ複雑な遺構が検出されていることから、局地座標（X23, 602, 014、Y22, 110, 704）を基準点として 3 m グリッドを設定した。グリッドは南から北にアルファベットと算用数字の組み合わせ（K 0～10、L 0～7）と、東から西に算用数字（91～104）を付したラインでそれぞれ表し、南東隅の杭を示準してグリッドを呼称した（第 10 図）。遺物の取り上げは基本的にグリッドに基づいているが、複数のグリッドにまたがる遺構や遺構検出面の下層を掘削したトレーンチなどはこの限りではない。

現地での写真撮影は 35 mm のフィルムカメラ、または適宜 6 × 7 サイズの中判フィルムカメラを用い、フィルムはカラー・白黒・リバーサルの 3 種類で対応した。なお、報告書に掲載する写真是 DTP 印刷に対応するため、フィルム等をスキャナで読み込んだデジタル画像を使用した。

第2節 層序

正殿地区の堆積層は基本的に 7 枚からなり、各層とも子細にみると分層される。調査区の中央部と北側で堆積状況に若干の違いが認められることから、中央東西トレーンチ 1 と同トレーンチ 2 の二つに分けて記述する。層位図は第 11 図に示す。

① 正殿地区中央部（AA'、BB'、CC'、DD'、FF'、GG'）

- I a 層 石灰岩コーラル層。調査区全体に広がる造成層で、旧琉球大学が駐車場を設置するために持ち込んだ客土である。層厚は平均 30 cm で水平に堆積する。本層の上にアスファルトが敷かれている。
- I b 層 瓦礫層。I a 層の直下にあり、旧琉球大学の整地前に存在した堆積層と解されるが、上面が水平になるため、現状は削平された結果と考えられる。層は広がりを持たず、凹凸面の窪み部分にわずかに残存する。層の名称通り明朝系瓦を主体とする遺物が出土する。
- I c 層 炭化物を多く含む瓦礫層で、貝殻・獸骨・焼土などの自然遺物を含む。本層も上層同様広がりを持たず、部分的にしかみられない。
- I d 層 暗灰色粘土層。井戸周辺に認められる灰色のクチャ層である。人工遺物はみられない。井戸構築時に持ち込んだ客土である。
- II 層 黄褐色石灰岩粉混練層。厚さ 30～40 cm で水平に堆積する造成層。L 2 ラインまで広がる。
- II a 層 礎石下の柱状石灰岩礫層。幅約 60 cm・深さ 1.4 m に達する筒状の堆積で、蟻蟻地業に相当する。層中には 20～30 cm 大の石灰岩岩塊や瓦層の混入がみられる。
- II b 層 II 期基壇の後背部に位置する石灰岩塊層。化粧石積みの裏込めに相当する。同層は直径数 cm から 30 または 40 cm の角錐で構成されるが、これらは密着しておらず部分的に間隙もみられる。
- III 層 赤土混入暗褐色土層。層厚約 30 cm で水平に堆積する造成層で、赤土と暗褐色土が細かな互層状を呈す

る。層中に貝殻・歯骨・炭化物を含む。

- IV層 黄褐色石灰岩塊及び礫層。94 ラインから西側に向けて一気に厚く堆積する造成層。最も厚い部分は建物中央に相当する部分で約 1.4m を測る。本層は子細にみると岩塊や礫の大きさが単一ではなく、粗密の違いがみられる。
- V層 暗赤褐色土混入粘土質層。93 ラインから西側に確認される層で、粘土質のため乾燥すると亀裂が生じる。本層の上面は 94 ライン付近から大きく抉られるように西側へ傾斜し、それに従って層厚も薄くなる。層厚は最も厚い 93 ラインで約 70 cm、西側部分では最も薄く約 20 cm となる。出土遺物は大和系瓦などが確認される。
- VI層 明褐色と黒灰色土が薄く互層状に堆積する粘質土層。層厚は約 40 cm だが、92 ライン付近から西側へ傾斜しながら薄くなり、94 ラインではほとんど確認されない。直上の V 層を造成する際に削平されたと考えられる。
- VII層 地山の赤土層。地山面は 92 ラインから漸次西側へ傾斜し、中央觀察窓の交差部分で水平となる。V 層と VI 層を造成する際に一部が削平されたと考えられる。

②正殿地区北側

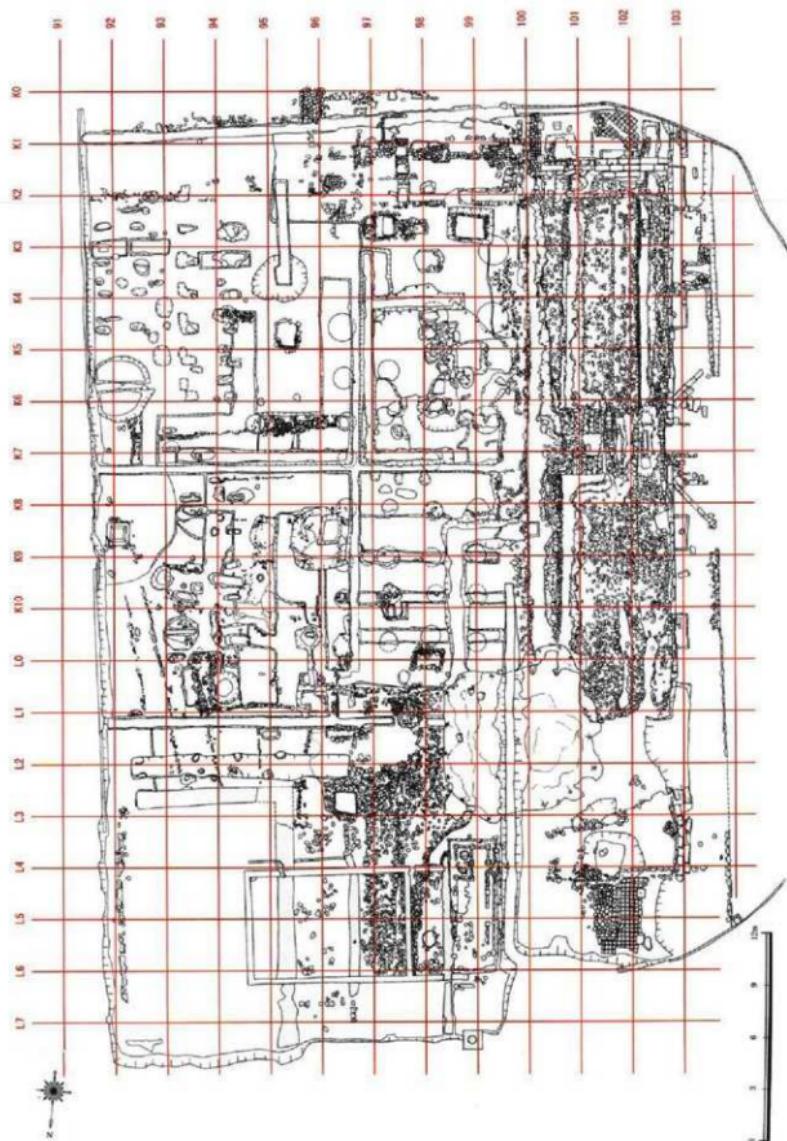
トレンチ調査の結果、東西間で堆積状況に若干の違いが認められることから、それぞれ分けて報告する。

(1) 西側トレンチ (HH')

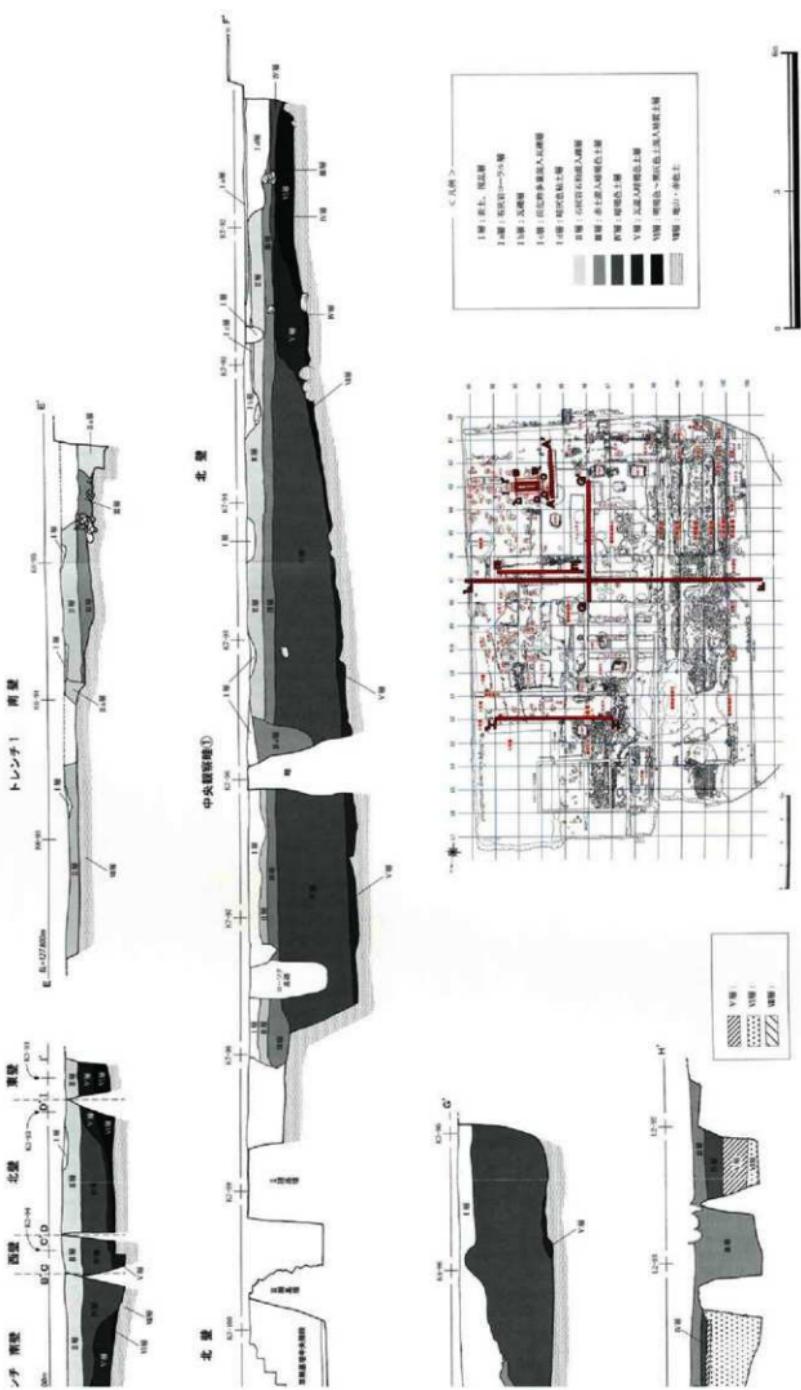
- I 層 表土擾乱層である。土砂混じりの瓦礫層で、部分的に残存する。
- II 層 黄褐色石灰岩粉混礫層。I 層と同じく部分的にみられる層である。
- III 層 赤土混入暗褐色土層。層厚は約 20~30 cm で水平に堆積するが、南側の建物跡側に比較すると薄い。
- IV 層 暗赤褐色土層。粘性が強く、層中に縞状ないし斑点状に赤褐色土が混入する。本層は建物地区にはみられない。
- V 層 黄褐色石灰岩礫層。土質は細かく、部分的に広がる。層厚は安定しておらず、厚い部分で 30 cm、薄い部分で数 cm になる。
- VI 層 石灰岩瓦礫層。著しく瓦が堆積する部分と少なく石灰岩が占める部分とムラがみられる。とくに北側に移行するにつれ、瓦は多くなる。石灰岩の間が間隙をつくるものもある。しまりがない。厚さ 80~100 cm。ただし、L 2-95 グリットライン上の石列の西側では薄くなる。
- VII 層 L 2-95 グリットライン上にある石列の西側にみられる石灰岩礫層。10~20 cm 大の礫が主体をなす層。約 140 cm の堆積層。その下は黒色粘土混じり土層になる。

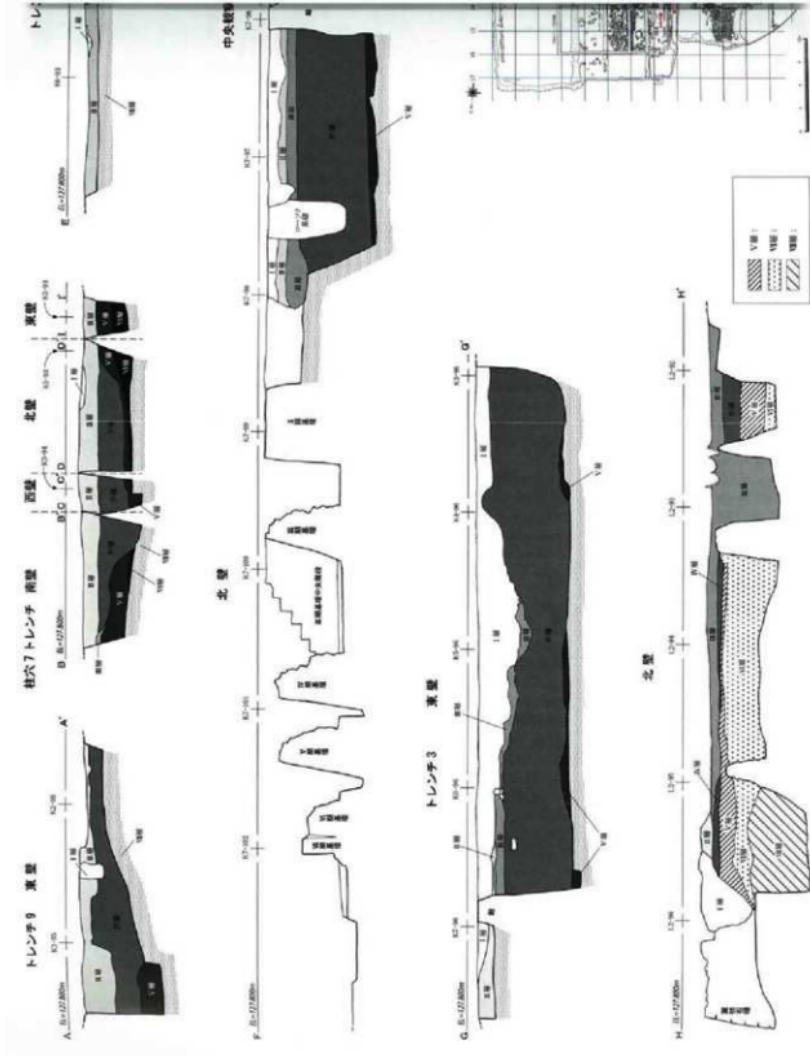
(2) 東側トレンチ (HH')

- IV 層 暗赤褐色土層。粘性が強く、層中に縞状ないし斑点状に赤褐色土が混入する。本層は建物地区にはみられない。また、95 ライン上にある石列の東側で堆積状況に大きく差異が認められる。
- V 層 暗褐色瓦礫土層。約 60 cm の水平の堆積層。瓦が水平方向に堆積している。土層には間隙もみられる。遺物も多くみられた。
- VI 層 灰白色のコーラル層。礫は 1~2 cm と細かいもので構成されている。

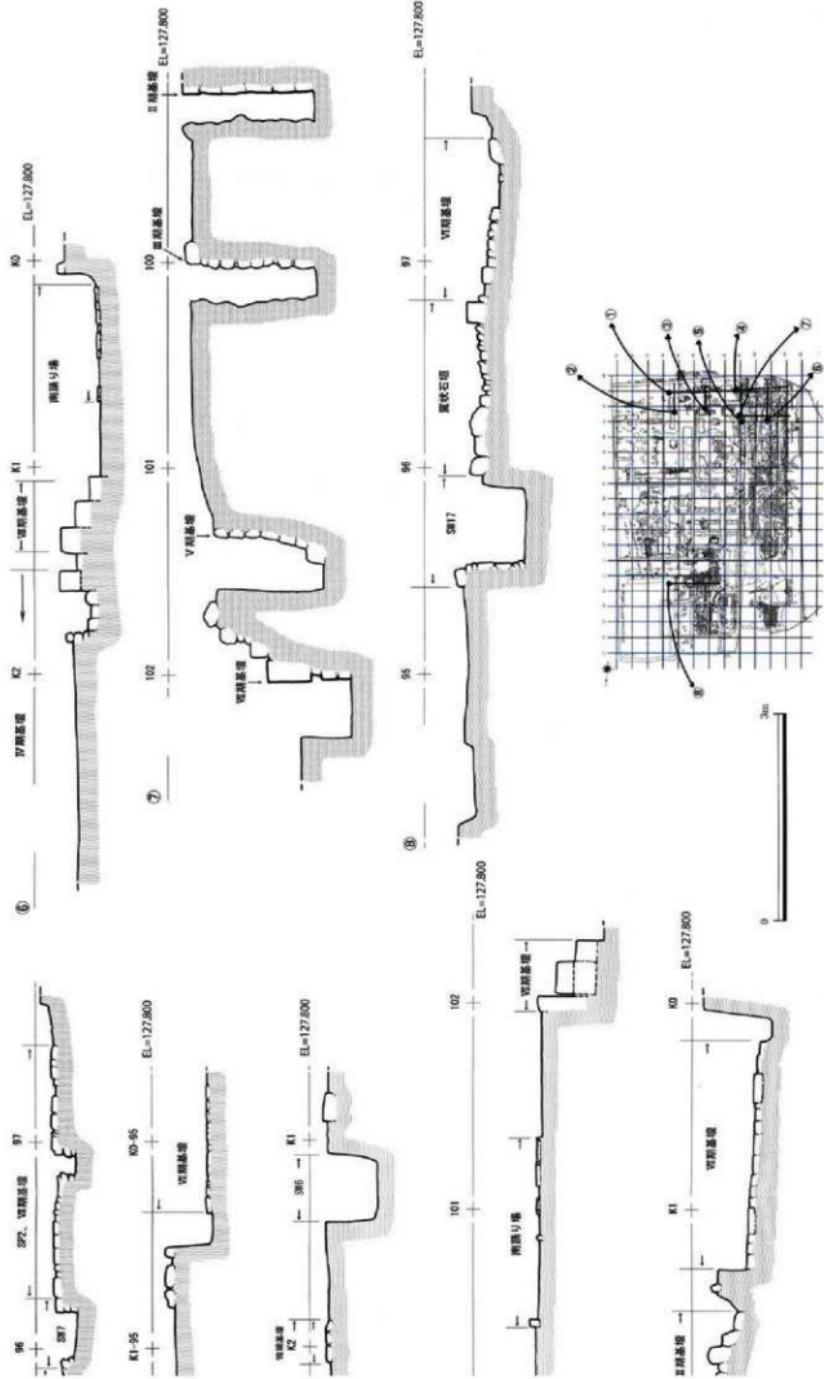


第10図 グリッド検定図

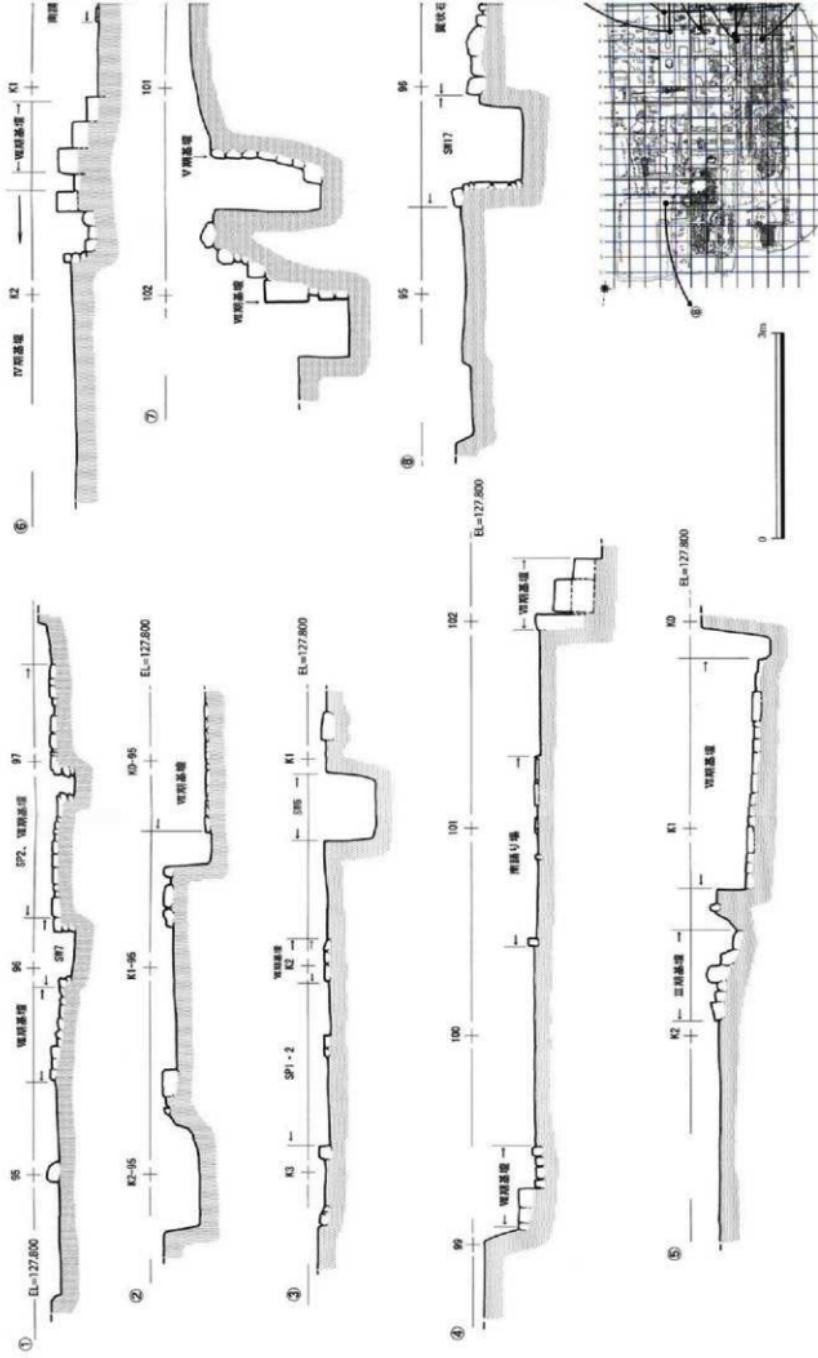


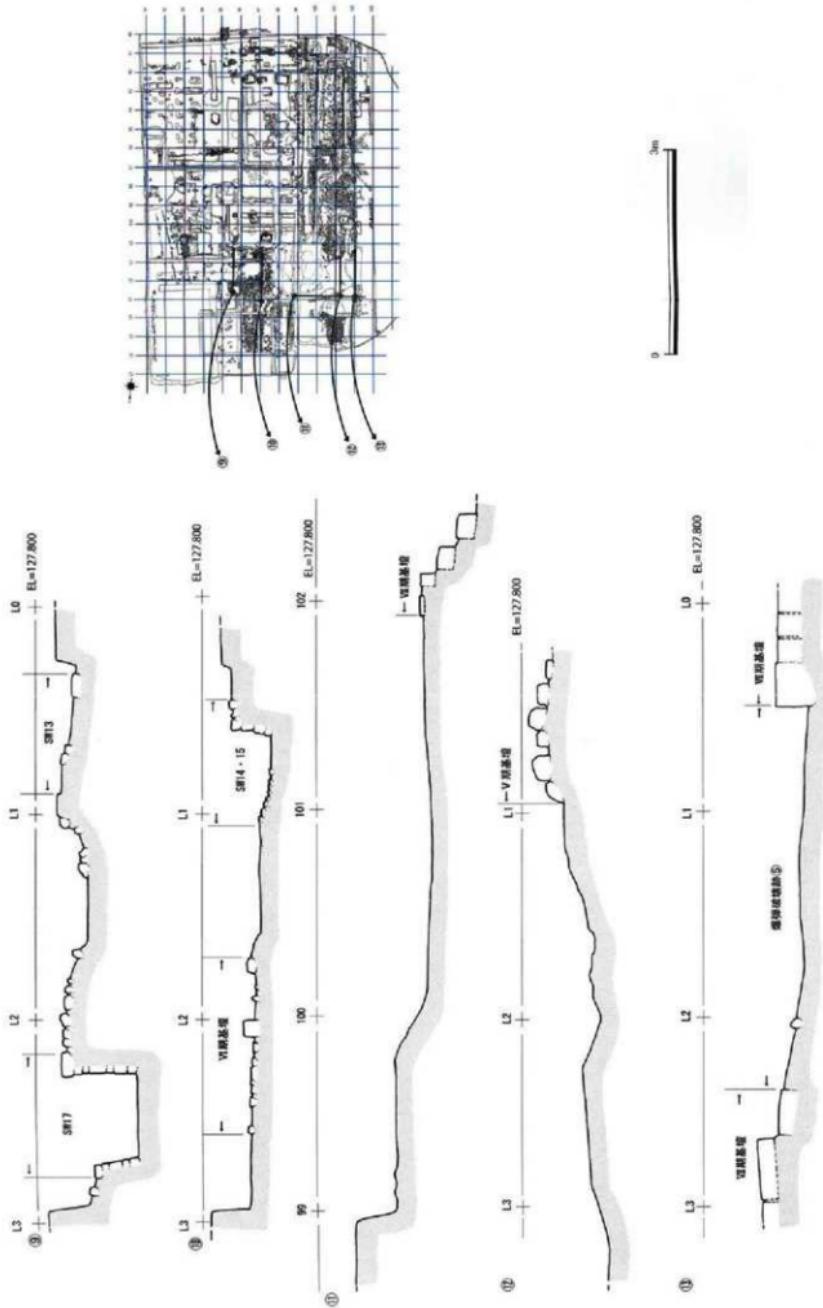


第11回 罷序

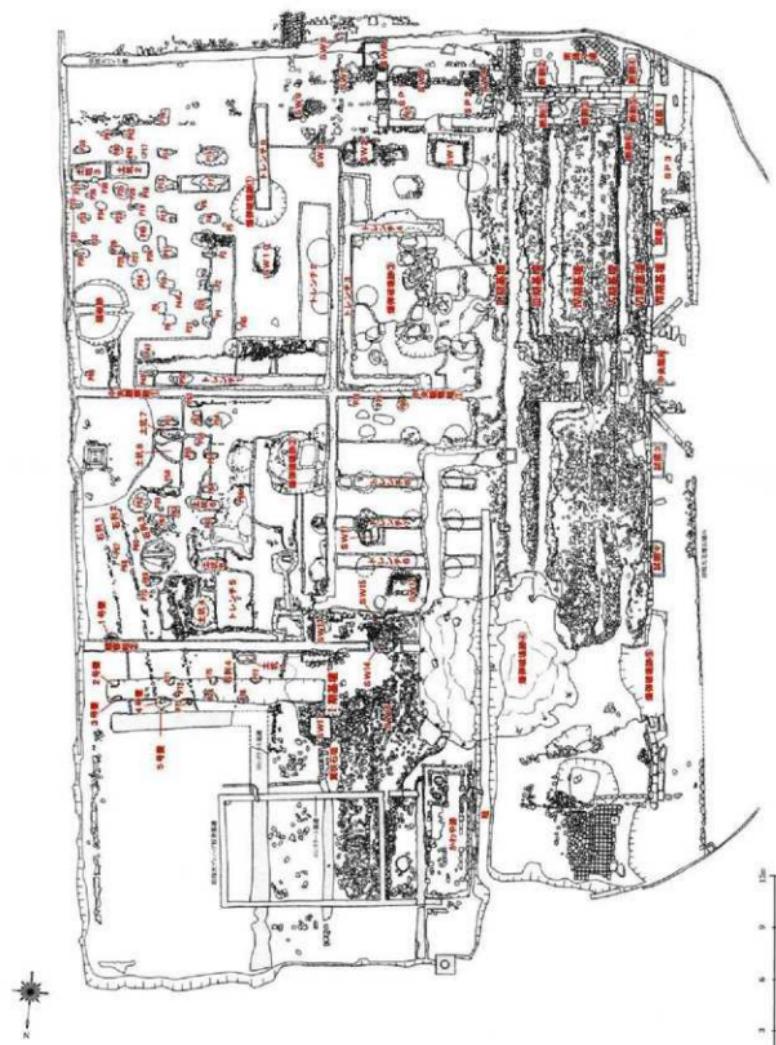


第12图 互通立交平面图 1





第13圖 見通分析面圖2



第14圖 通棟配置圖

第3節 遺構

1 基壇

正殿建物（想定含む）の土台を構成する基壇石積みで、今回の調査により6基検出された。またこれらとは別に、Ⅱ期基壇の下層から大和系瓦の多量に出土する包含層が確認されたため、当該地区では少なくとも7回にわたって正殿建物（想定含む）が建て替えられたと判明した。以下、遺構別にその詳細を記す。

①Ⅰ期基壇（第16図）

I.1・2-96で検出された包含層で、Ⅱ期基壇の翼状石垣北面下層に主として広がる。これは一部の試掘調査でしか確認されておらず、包含層の範囲及び遺構の詳細については不明である。しかし、大和系瓦が多量に出土することから、当地区に浦添城跡や勝連城跡のような瓦葺きの建物があった可能性は高い。この建物が正殿になるのか否かは検討の余地があるものの、かつてこの場所に存在した建物を示す痕跡といえる。ちなみにこの包含層は、年代・性格とも御内原北地区で確認された造成遺構5層（沖縄県埋文2010）に類似する。

②Ⅱ期基壇（第17図）

今次大戦で消失したⅦ期基壇から約8m後方（東側）に位置している。Ⅰ期基壇との関係をみると、前述した包含層を削平してその上部に構築しており、基壇の高さは現地表面と考えられるところから約1.6mを測る。基壇石積みは北側と西側を確認したが、正面に相当する西側は50cm×70cm程度の切石を化粧石に用いており、精巧な布積みで構築されている。この化粧石の表面は赤く変色し剥落が著しく、周辺からの出土遺物にも被熱資料が多くみられるため、大きな火災に遭遇したと考えられる。出土遺物の検討からは志魯・布里の乱（1453年）に相当する可能性が高い。このほか当該基壇は、北側に幅約3mの翼状石垣が取り付き、調査区南西側で南殿のⅠ期基壇（沖縄県文化課1995）と接続する。基壇の上面には廻廊地業の痕跡が多数残り、それから推算すると最小規模で短軸約12.6m（約14間）×長軸約22.7m（約25間）の礎石建物があったと想定される。また建物跡の約4m後方（東側）には、足場と仮称したピット列が2本確認されている。

③Ⅲ期基壇（第18図）

Ⅱ期基壇の前方（西側）約2mに位置しており、前期から規模が拡張されたと考えられる。基壇石積みはⅡ期基壇と同じく北側と西側を確認したが、正面は30cm×40cm程度の化粧石を雜石積みで構築し、石積みの勾配も70～80度となっていることから、使用石材及び工法ともⅡ期基壇に比して粗雑である。正面中央部には6段残存（全長は12段と推定）で幅約3.7mの石階段が、北側には約2mの翼状石垣がそれぞれ取り付く。ちなみに石階段の表面がほとんど磨り減っていないため、当該基壇の使用時期が短かった可能性もある。このほか、当該基壇は調査区南西側で南殿のⅡ期基壇（沖縄県文化課1995）と接続する。基壇の上面には、Ⅱ期基壇と同様に礎石を据えた跡がみられるため、それから推算すると最小規模で短軸約12.8m（約14間）×長軸約24.4m（約27間）の建物があったと想定される。また建物跡の約5.8m後方（東側）には足場と仮称したピット列が2本あり、南側には短軸約3.7m×長軸約10mの性格不明遺構（SP1）が確認されている。

④Ⅳ期基壇（第19図）

Ⅲ期基壇の前方（西側）約3mに位置しており、前期から規模が拡張されたと考えられる。基壇石積みは南側の一部と西側を確認した。正面に相当する西側はⅢ期基壇と同サイズの石材を雜石積みで構築しており、当初は補強用の裏石積みと想定していたが、調査区南西側で南殿のⅢ期基壇（沖縄県文化課1995）と接続したため、正

殿の基壇石積みと判断した。基壇の上部が残存しておらず、建物跡の様相は不明である。

⑤V期基壇（第20図）

IV期基壇の前方（西側）約1.6mに位置しており、前期から規模が拡張されたと考えられる。基壇石積みは正面に相当する西側のみを確認した。残存状態は悪く、30cm×40cm程の化粧石が部分的に一段検出されたに過ぎない。当該遺構も調査区南西側で南殿のIV期基壇（沖縄県文化課1995）と接続したため、正殿の基壇石積みと判断した。建物跡の様相は不明である。

⑥VI期基壇（第21図）

VII期基壇化粧石の裏込めのようにもみえる雜石積み（石材のサイズは人頭大程）と南側の一部がこれに相当し、規模もV期基壇と同じである。この基壇については、VII期基壇に伴う石階段の下にわずかに残存する石段の一部と、正面石積みにつながる両南北面の翼状石垣の取り付き、超町南西側で接続する南殿のV期基壇（沖縄県文化課1995）などから判断した。基壇の上部が破壊されているため、建物跡の様相は不明である。また南側には短軸約3.7m×長軸約8.5mの性格不明遺構（SP2）が確認されている。

⑦VII期基壇（第22図）

沖縄戦で焼失する前の正殿が建てられていた基壇で、最も前方（西側）に位置する。基壇石積みは南側と西側が確認され、それぞれに石階段が取り付く。残存する化粧石はII期基壇のサイズに近い切石を用いており、調査区南西側で南殿のVII期基壇（沖縄県文化課1995）と接続する。

2 石列（第14図）

拳大程度の雜石を用いており、K9～L0-92、K10～L2-93、L1・2-94の範囲で合計4基検出された。石列と称しているが、一部で断ち割り調査を実施したところ下段部分が確認されたため石積みの可能性が高い。当該遺構の性格について、同様の遺構がみられる御内原北地区の状況（沖縄県埋文2010）から想定すると、当該地区に平場を設けるための造成工事に伴う遺構、つまり土留め用の石積みと考えられる。

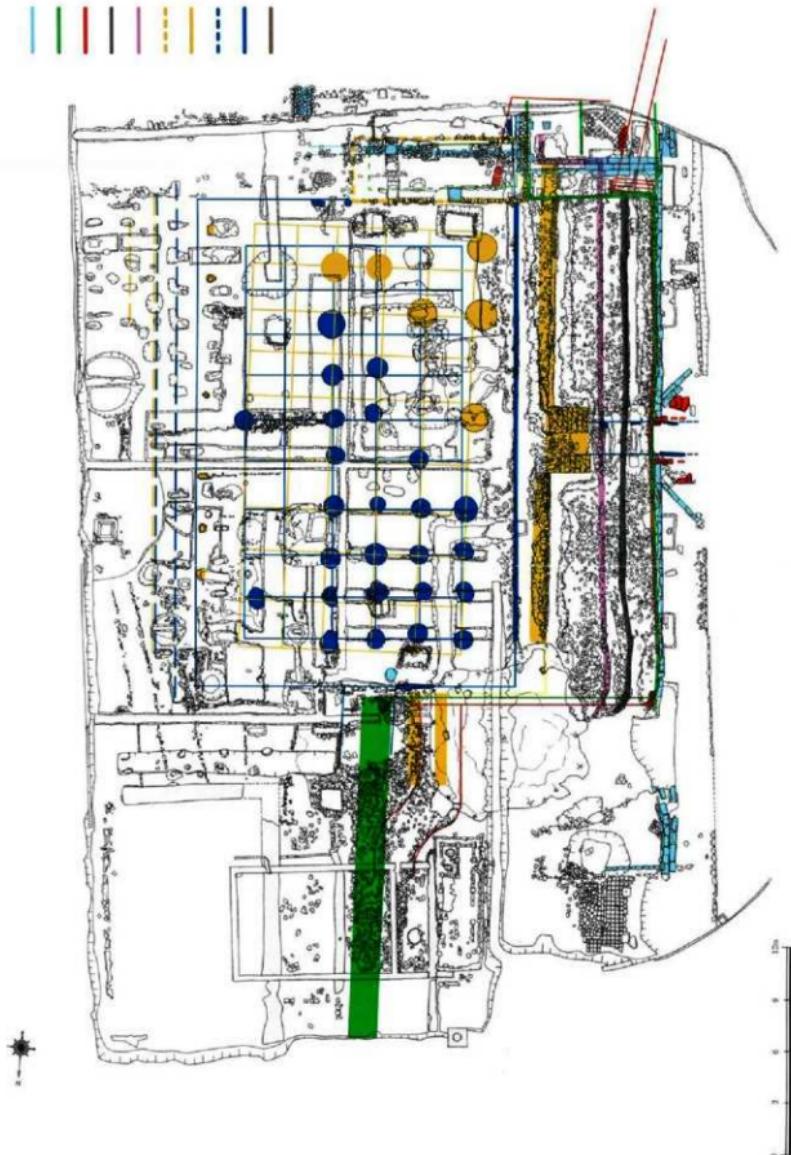
3 方形石組遺構（第23～27図）

SWと略記したもので、いずれも拳大～人頭大程の雜石を積み上げて構築し、床面は石敷き・岩盤・土と様々である。総数17基検出されており、一部を除きII期基壇正面から東側で建物跡の周辺に分布する傾向がみられる。基本的な性格としては生活ゴミの廐棄坑と考えられる。

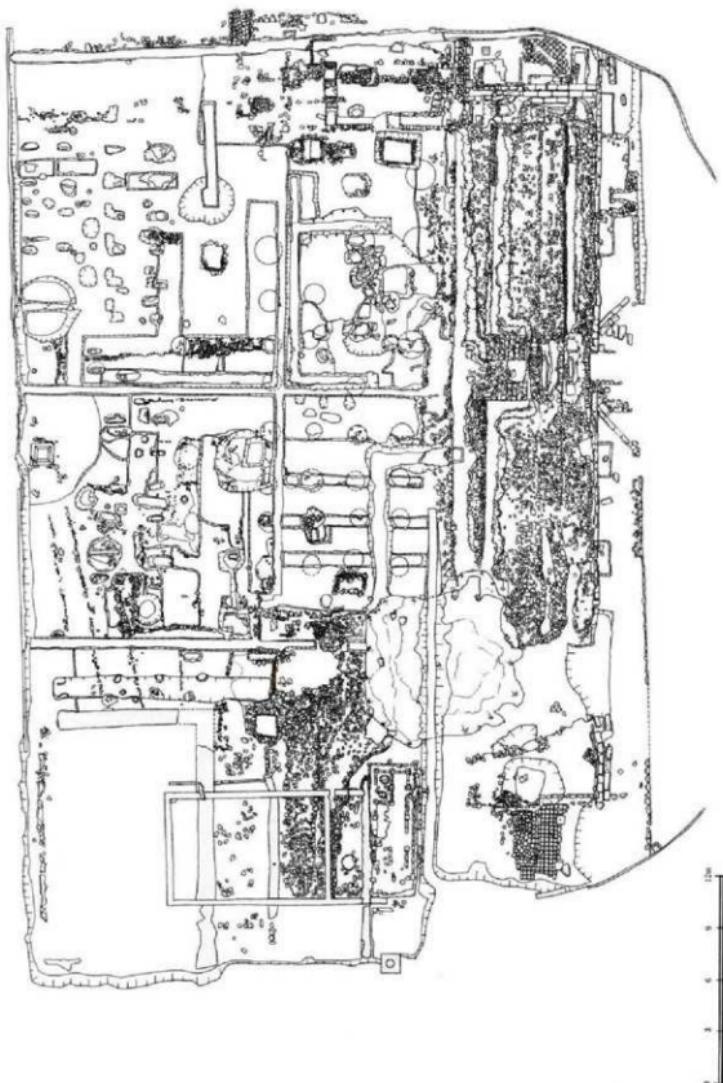
4 かねや跡（第14図）

L3～5-98・99で検出された。熊本鎮台沖縄分遣隊が首里城内監視留時（1879～1896）に構築したとされる廐跡で、便槽等に用いたと考えられる陶器製の埋甕が2基確認されている。本調査では検出と図化にとどめたが、当該遺構はその後右掖門及び周辺地区（沖縄県埋文2003）や、敵順門西地区（沖縄県埋文2013）の調査でも再度検出され、特に後者では詳細に精査されている。

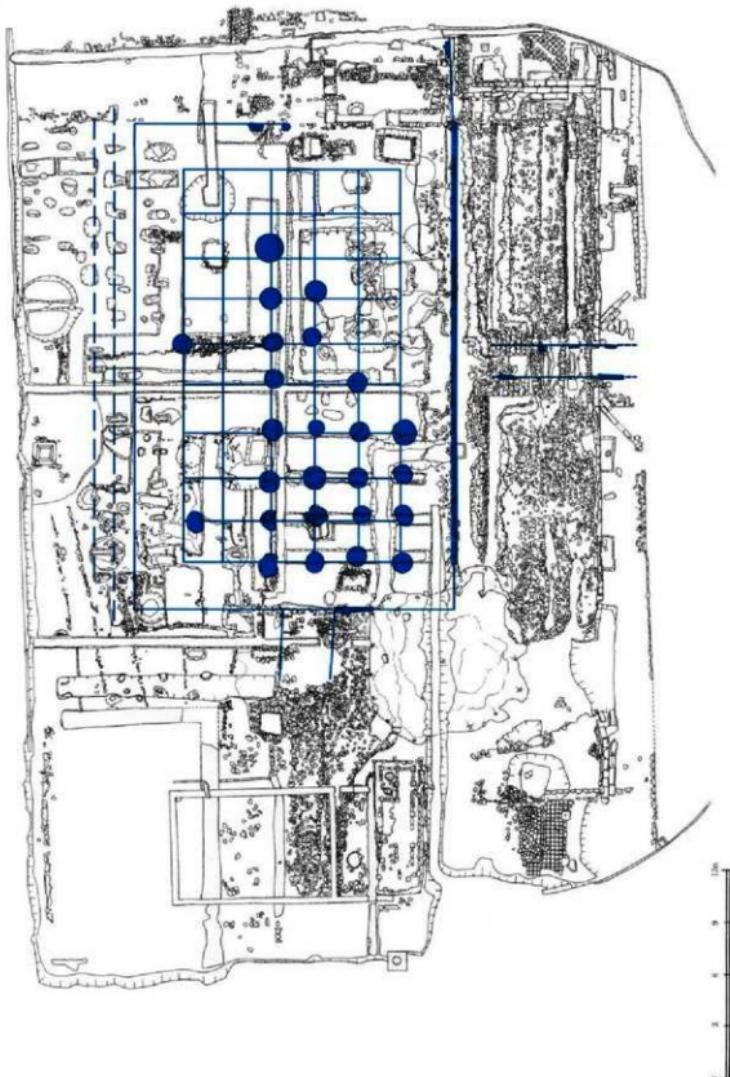
V防護基準
 V防護基準(2)
 V防護基準(1)
 V防護基準
 IV防護基準
 III防護基準
 II防護基準
 I防護基準
 離島本島の港場
 運搬船港
 日防護基準の港場
 日防護基準

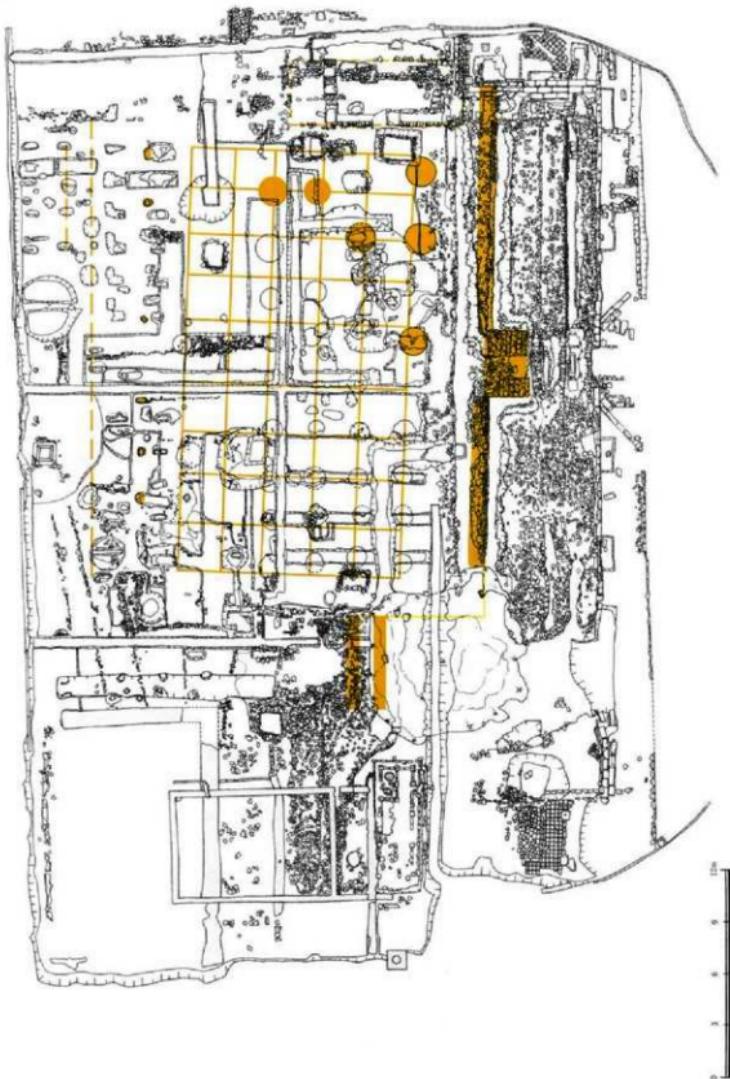


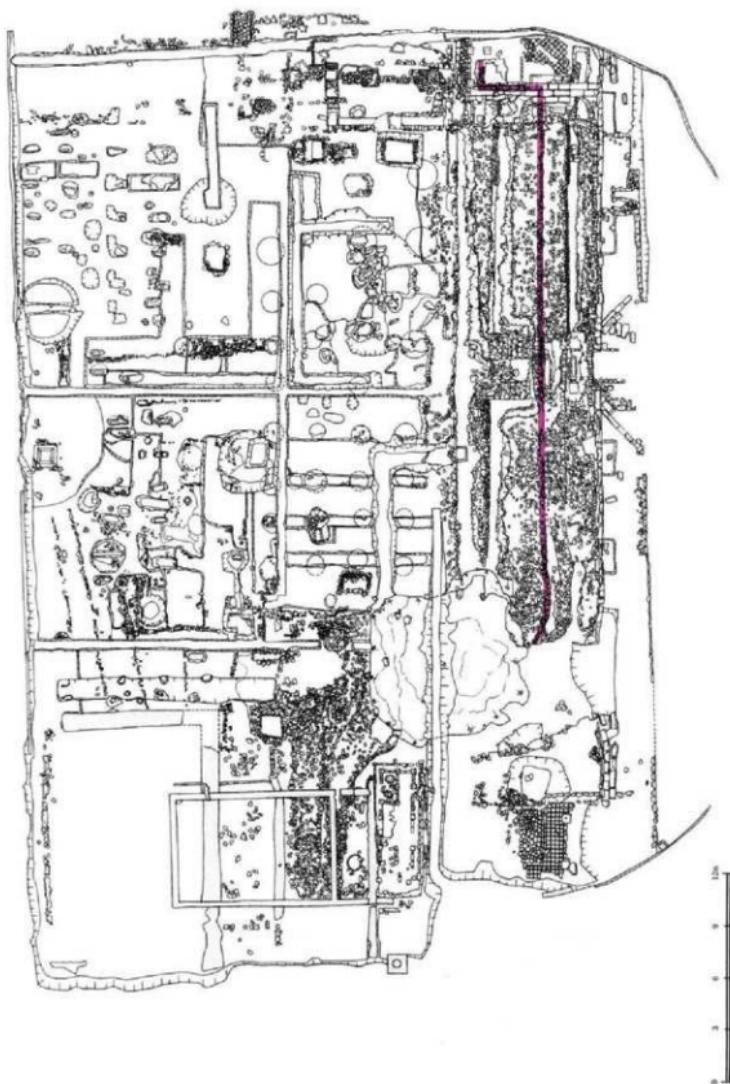
第15図 1～7防護基準港たな図



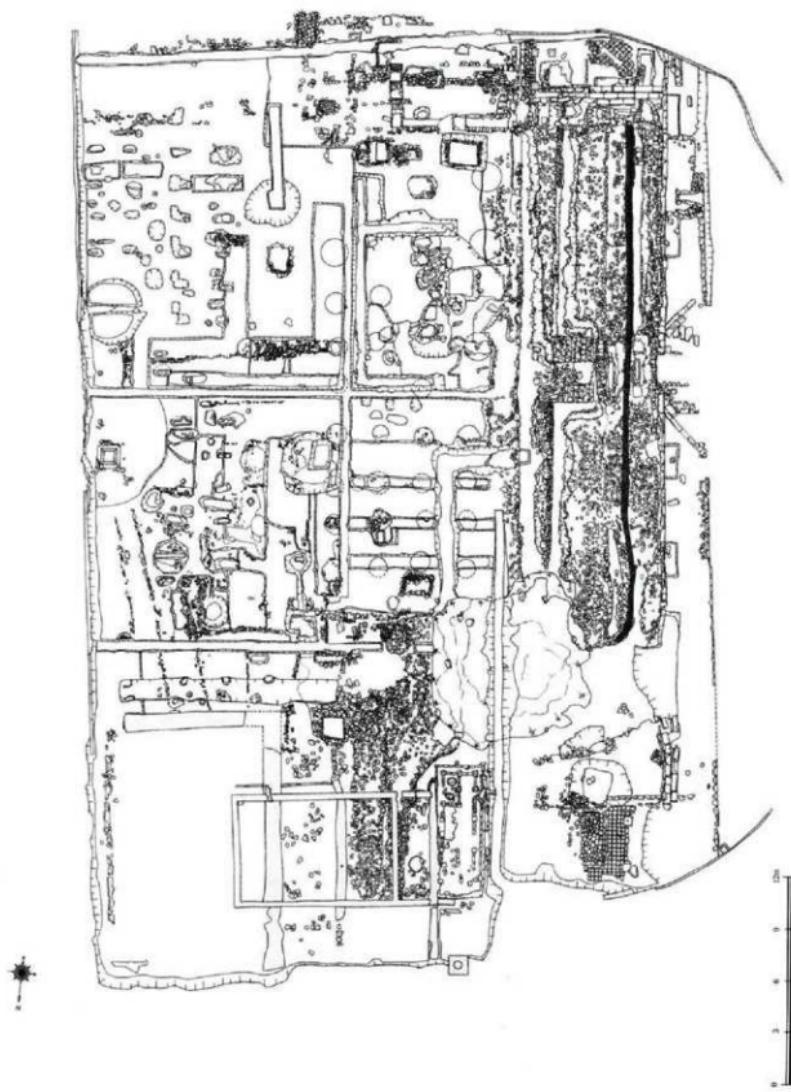
第16圖 1. 原始圖







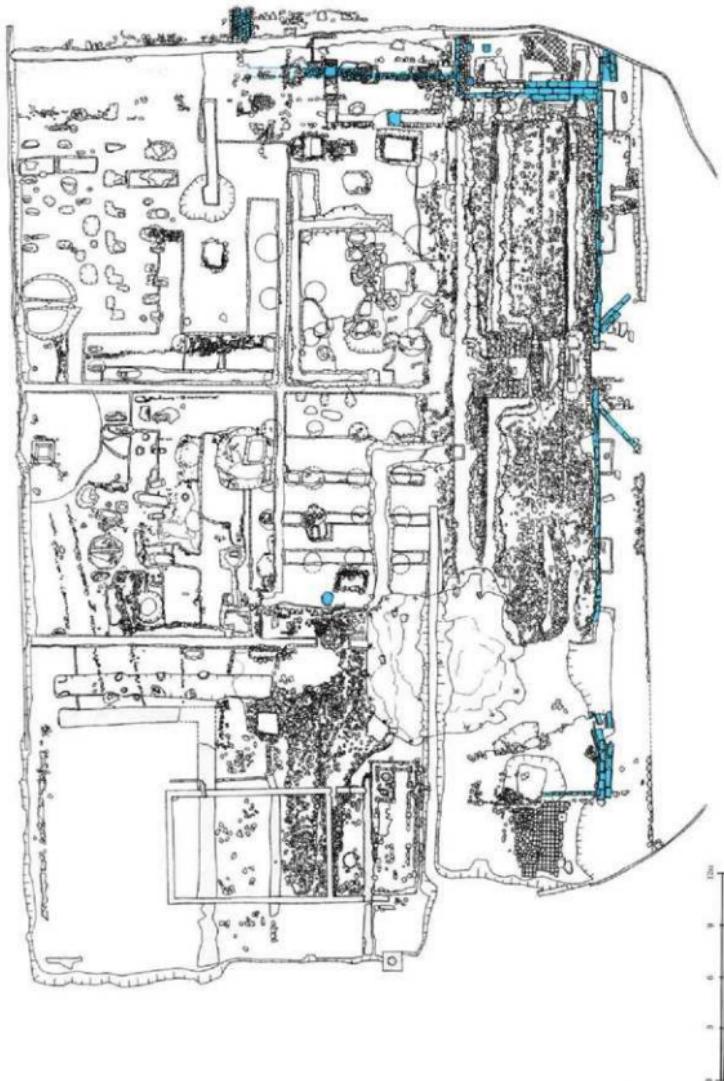
第19图 IV层墓室



VI高架2
VI高架1

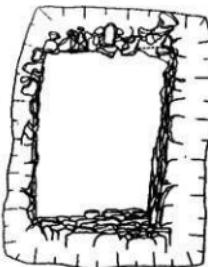


第21图 VI高架

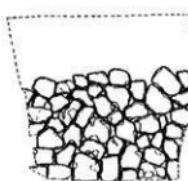


第22圖 崔顯墓

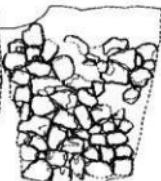
SW1



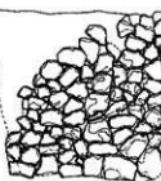
EL=127.800



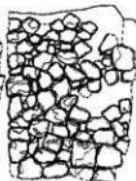
南壁



西壁



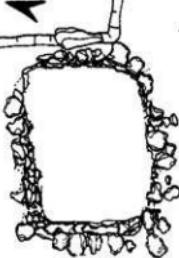
北壁



東壁

K1
96 ライン

SW2



EL=127.800



北壁



東壁



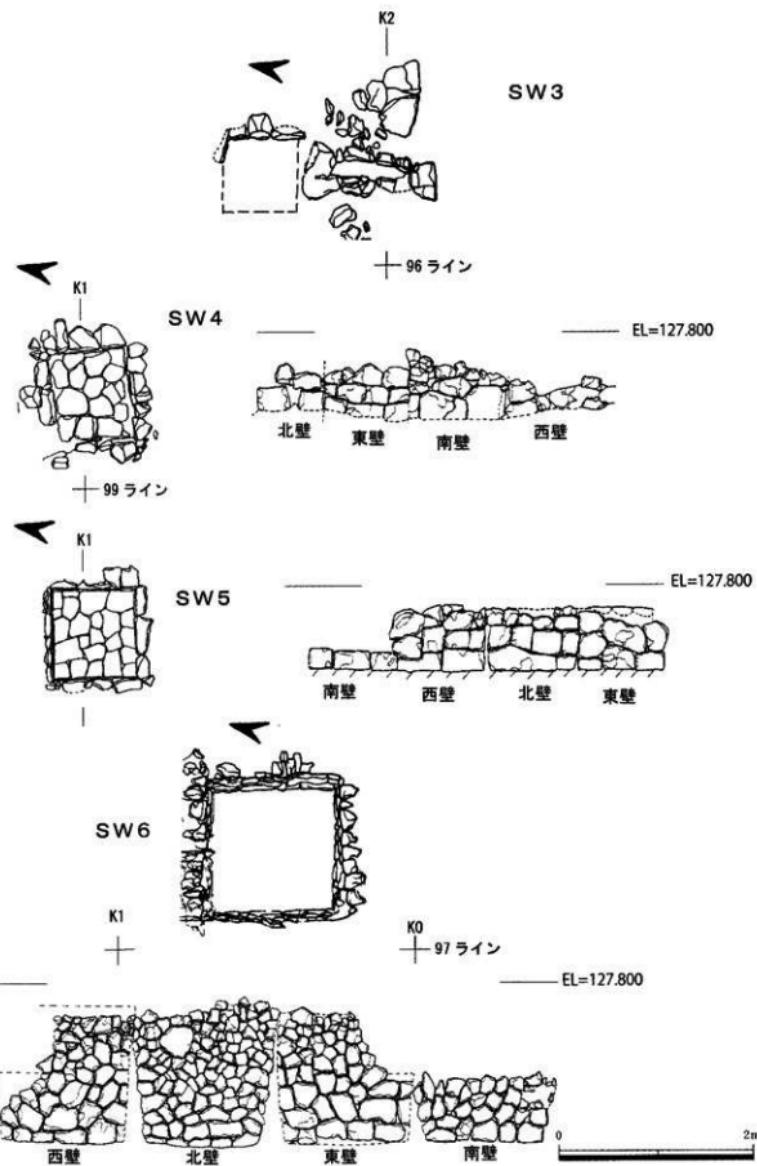
南壁



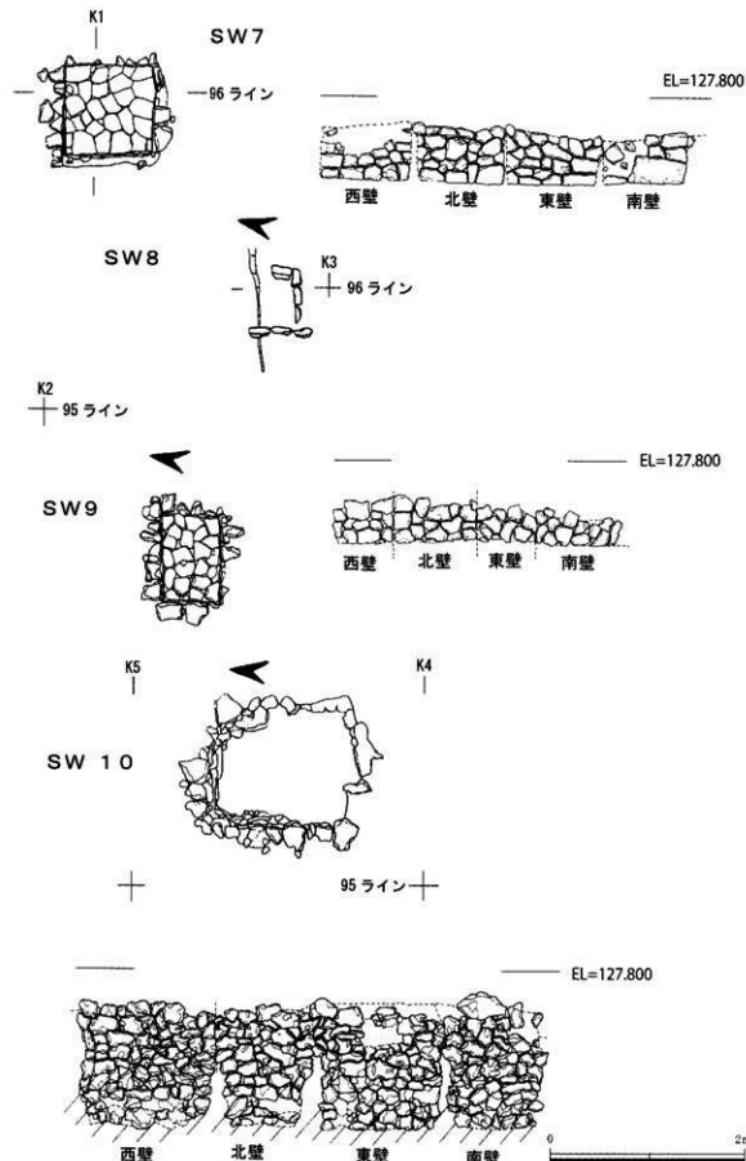
西壁

0 2m

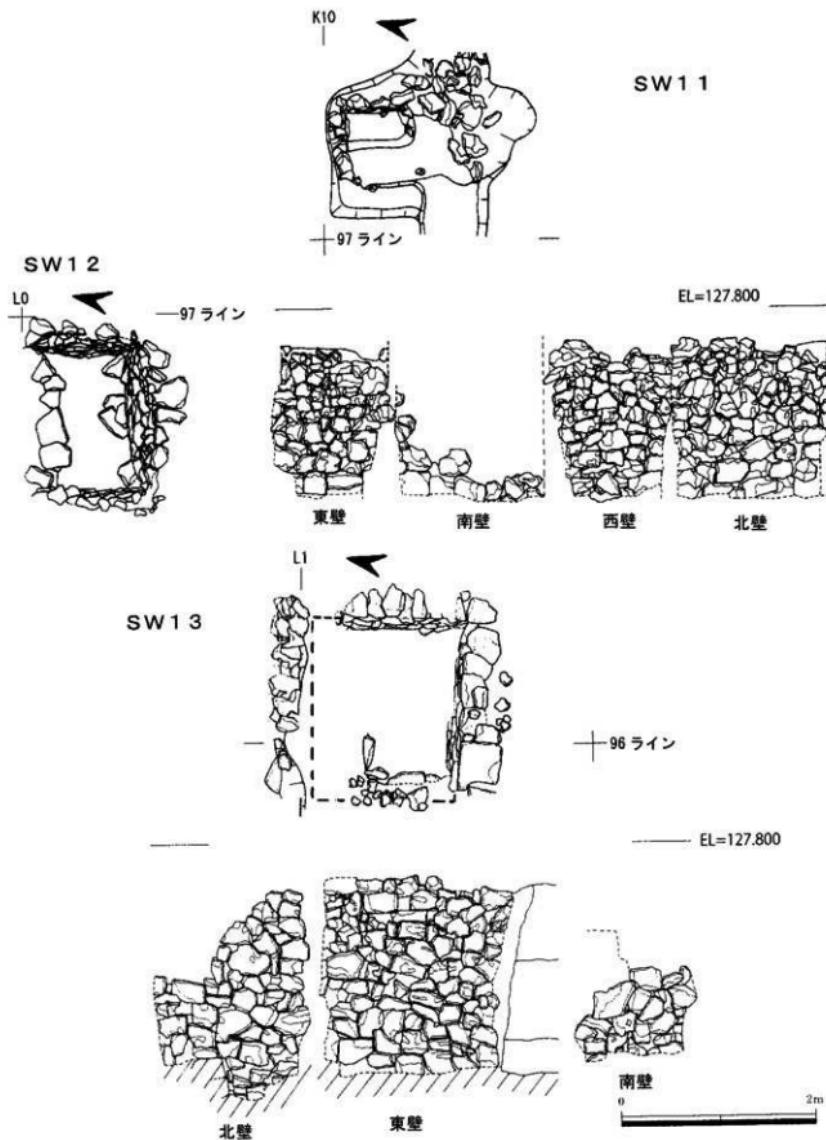
第23図 その他の遺構1 (SW1・2)



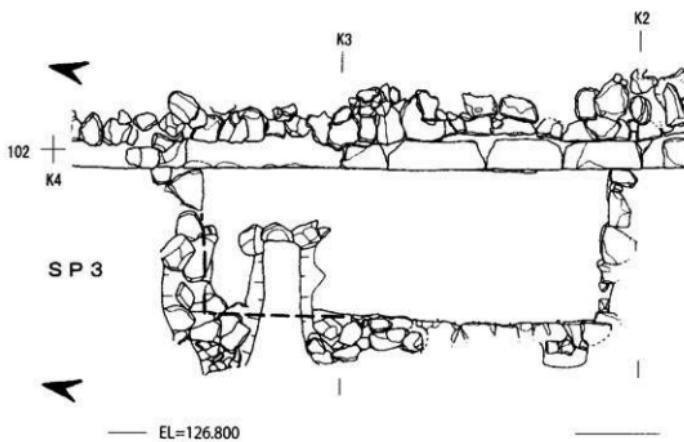
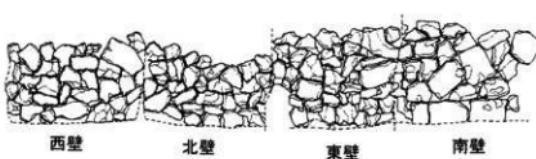
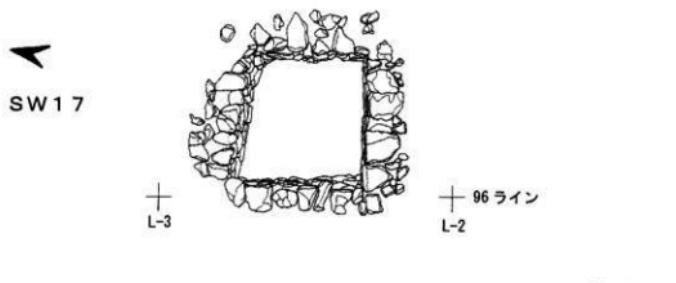
第24図 その他の遺構2 (SW3～6)



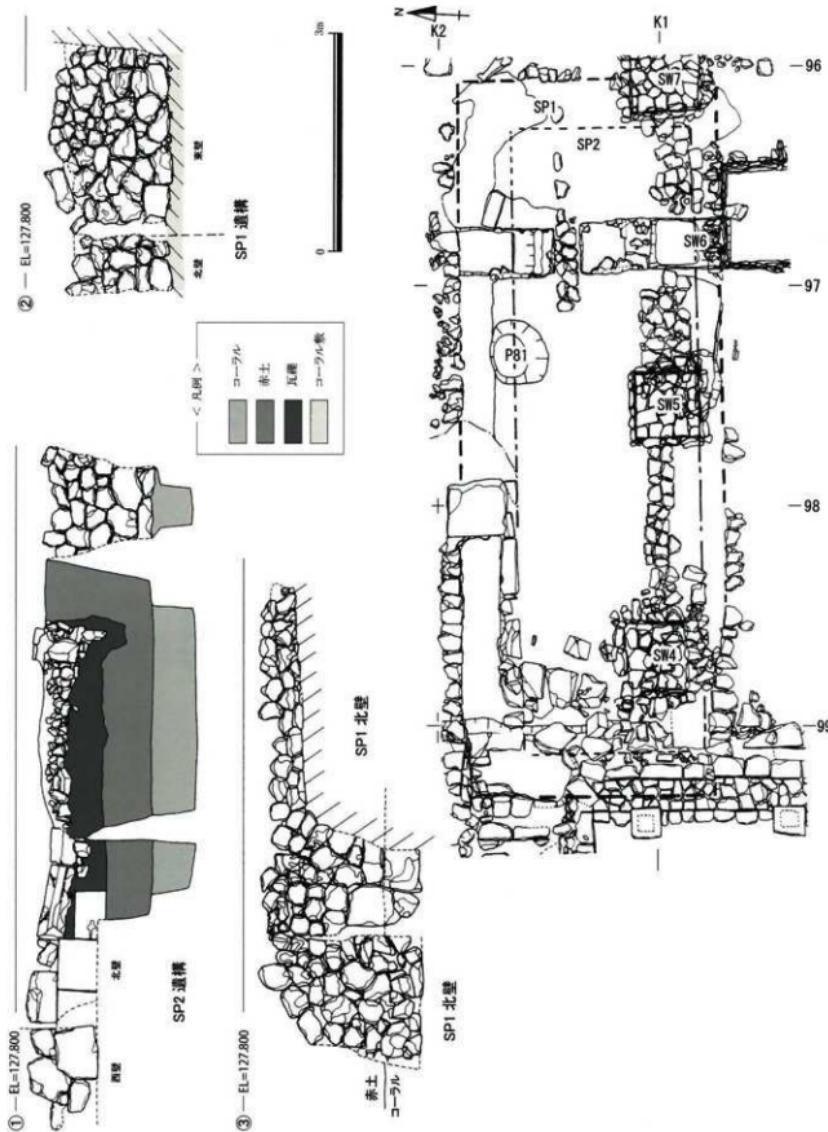
第 25 図 その他の遺構 3 (SW7 ~ 10)



第26図 その他の遺構4 (SW11～13)



第 27 図 その他の遺構 5 (SW17・SP3)



第28図 その他の遺構6 (SP1・2)

第4節 遺物

今回の調査では、中国・タイ・ベトナム・朝鮮・日本・沖縄の各地で生産された陶磁器類をはじめとして、瓦及び埠・錢貨・煙管・玉類・円盤状製品・金属製品・石製品・骨製品・土製品・ガラス製品・自然遺物などの多種多様な遺物が大量に出土した。これらは時期的に14世紀後半～19世紀を主体とするが、14世紀前半以前に遡るものや近代に位置づけられる資料もみられる。また今回得られた遺物の特徴として、かつて正殿があったという場所の特性を示すもの（火災等による被焼資材、特殊な用途の陶磁器類、琉球錢、大量の建築部材など）を多数含む点が挙げられる。以下、種類別に報告する。

1 中国産陶磁器・土器

①青磁

青磁は総計3,075点出土しており、その大半が龍泉窯系である。器種別では碗が最も多く出土しており、其次に皿、盤と続く。また壺や瓶、鉢といった大型の器種も多く出土しており、擂鉢や水注、器台、高足台付杯や象棋の駒といった特殊な器種も多く見られる。全体を概観すると二次的な被焼によって変色や砂粒が溶着したり、煤が付着した資料も比較的多く見られることから、火災等に遭った可能性が高い。なお、碗、小碗、皿、杯、盤、壺、瓶、香炉については分類を行ったので、以下にまとめる。

(1) 碗 A類 口縁部が外反する碗で、外面胴部にはヘラ描きによる蓮弁文や草花文が、内底面には刻花文等が主に見られる。口縁部の形態で以下の3つに細分される。

A-1：口縁部が緩やかに外反する。高台は低く、外底面は蛇の目状に釉剥ぎされる。

A-2：口縁部が「く」の字状または外反が急になる。高台は低く、外底面は円形に釉剥ぎされる。

A-3：口縁部が僅かに肥厚する。口縁部の肥厚が玉縁状となるaと玉縁状にならずに口唇部に向けて漸次肥厚するbとに細分される。底部は内面高台から外底面が露胎となる。

B類 口縁部が直口の碗で、外面胴部には細蓮弁文や雷文帯、内底面には刻花文等が主に見られる。口縁部の形態で以下の3つに細分される。

B-1：口縁部の立ち上がりが斜めになる。外面高台下部は斜めに面取りされ、高台内面全体が露胎または外底面が円形に釉剥ぎされる。

B-2：口縁部の立ち上がりが急となる。外面高台下部は斜めに面取りされ、高台内面が蛇の目状に釉剥ぎされる。

B-3：口縁部が僅かに肥厚する。口縁端部で肥厚するaと口唇部に向けて漸次肥厚するbとに細分される。外面高台下部は斜めに面取りされ、疊付は尖る。外底面は露胎となる。

C類 小振りな碗で口縁部が直口する。

D類 大きく「ノ」の字状に口縁部と高台が離れる。口縁部から胴部にかけてはほぼ直に移行し、高台は低くかなり厚みを有する。釉は疊付けから外底面にかけて露胎となる。福建・廣東碗系とされる。

(2) 杯 A類 口縁部が外反する杯で外面胴部に文様が見られるものもある。

B類 口縁部が内傾する杯。

C類 高足台が付く杯。やや厚手で口縁部は外反する。馬上杯。

(3) 皿 A類 口縁部が外反する皿。外面胴部には無錫蓮弁文が、内底面には刻花文が見られる。高台は低く、

高台内の内削りは浅い。高台内面から墨付にかけて露胎となる。

A-1：口縁部の外反が明瞭で、稜線を有し大きく屈曲する。

A-2：口縁部の外反が緩やかで、丸みを有しながら屈曲する。

B類 腰部が折れ、口縁部が外反する皿。高台は低く、高台内の内削りは浅い。高台内面から墨付にかけて露胎となる。

B-1：口縁部が肥厚しないaと口縁部が玉縁状に肥厚するbとに細分される。

B-2：口縁部が肥厚しないaと口縁部が玉縁状に肥厚するbとに細分される。

B-3：八角皿で口径がやや大きい。

C類 腰折れが無く、口縁部が僅かに外反する。高台は低く、高台内の内削りは浅い。高台内面から墨付にかけて露胎となる。

C-1：口縁部が玉縁状に肥厚する。

C-2：口縁部の肥厚が扁平状になる。

(4) 盤 口縁部 A類 口縁部が鈎縁状となる盤。

A-1：口縁端部を上方に摘み上げる。大きく上方へ摘み上げるaと、摘み上げが簡略化され口縁端部の断面形が三角形状となるbとに細分される。

A-2：口縁端部の摘み上げはされず、平坦に仕上げる。

B類 口縁部が外反する盤。

底部 A類 器壁が厚く、低い高台をつくる。外底面は蛇の目状に釉剥ぎされる。

B類 高台が基筒底状となる。釉薬が外面高台から外底面にかけて施される。

(5) 蓋 A類 酒会蓋などの大型品に対応すると考えられるもの。器形から以下の2つに細分される。

A-1：鍔と掛けりが付く。全体的に器壁は厚くなる。

A-2：端部が「く」の字状に折れる浅い蓋。

B類 小型の蓋などに対応すると考えられるもの。

(6) 壺 A類 肩が張り、胴下部が窄まる壺。酒会壺。

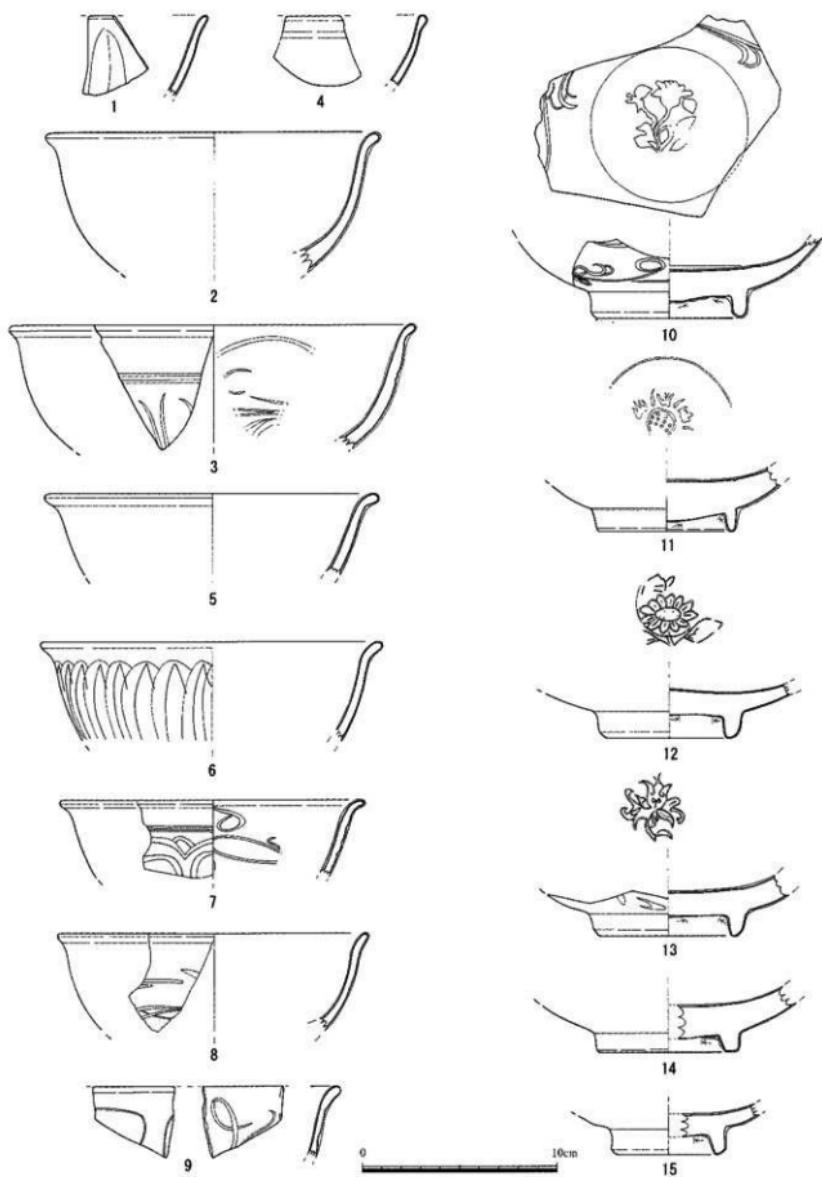
B類 胴下部が膨らみを有する壺。

(7) 瓶 A類 口縁部が外反する長頸瓶。

B類 口縁部が直行する短頸瓶。

(8) 香炉 A類 脊部が膨らみを有して底部から高台へ移行する三足香炉。大型の香炉で獸足となる。

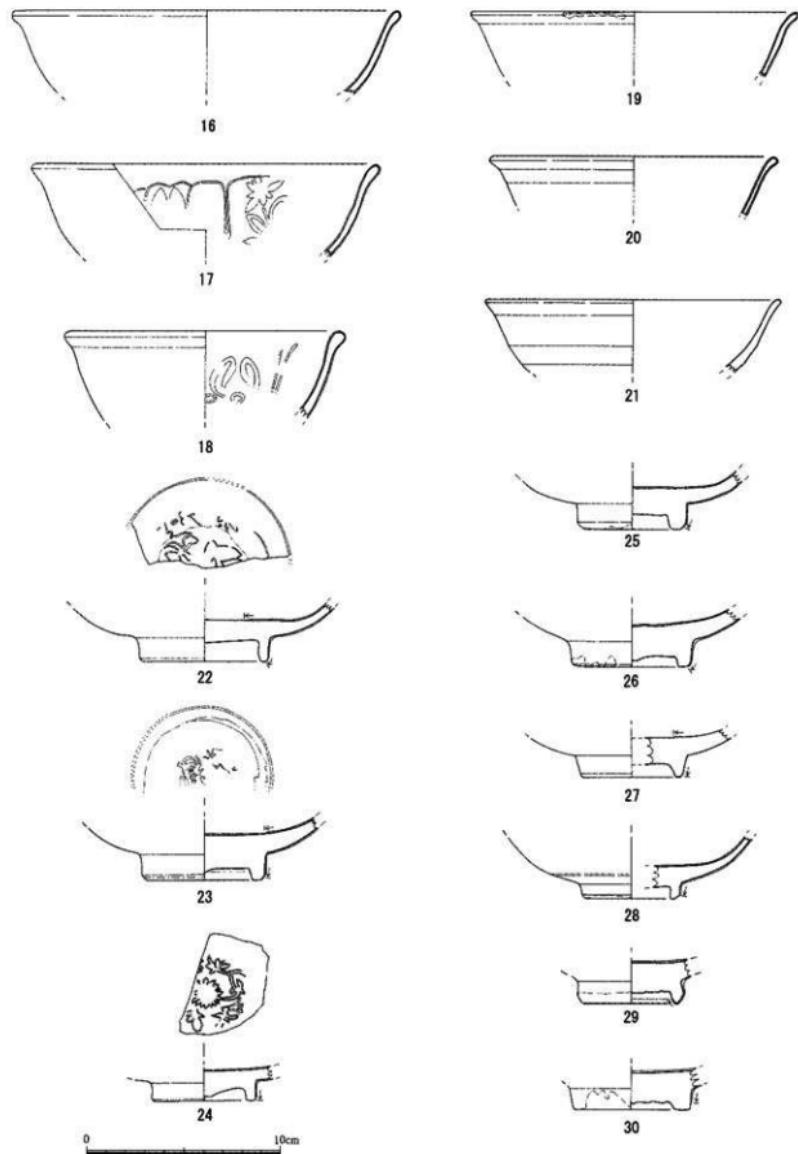
B類 腰部を入れ、口縁部へ胴部が直行する三足香炉。



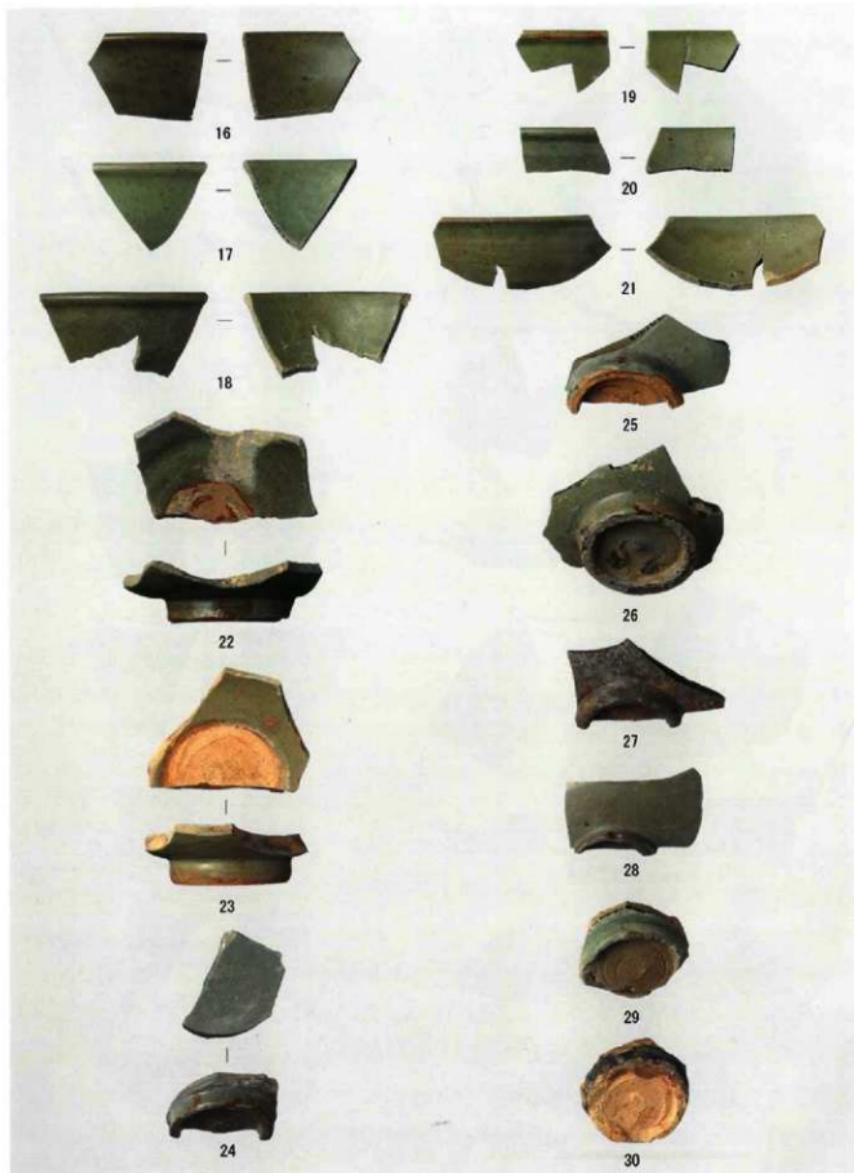
第29図 中國産陶磁器・土器1(青磁1)



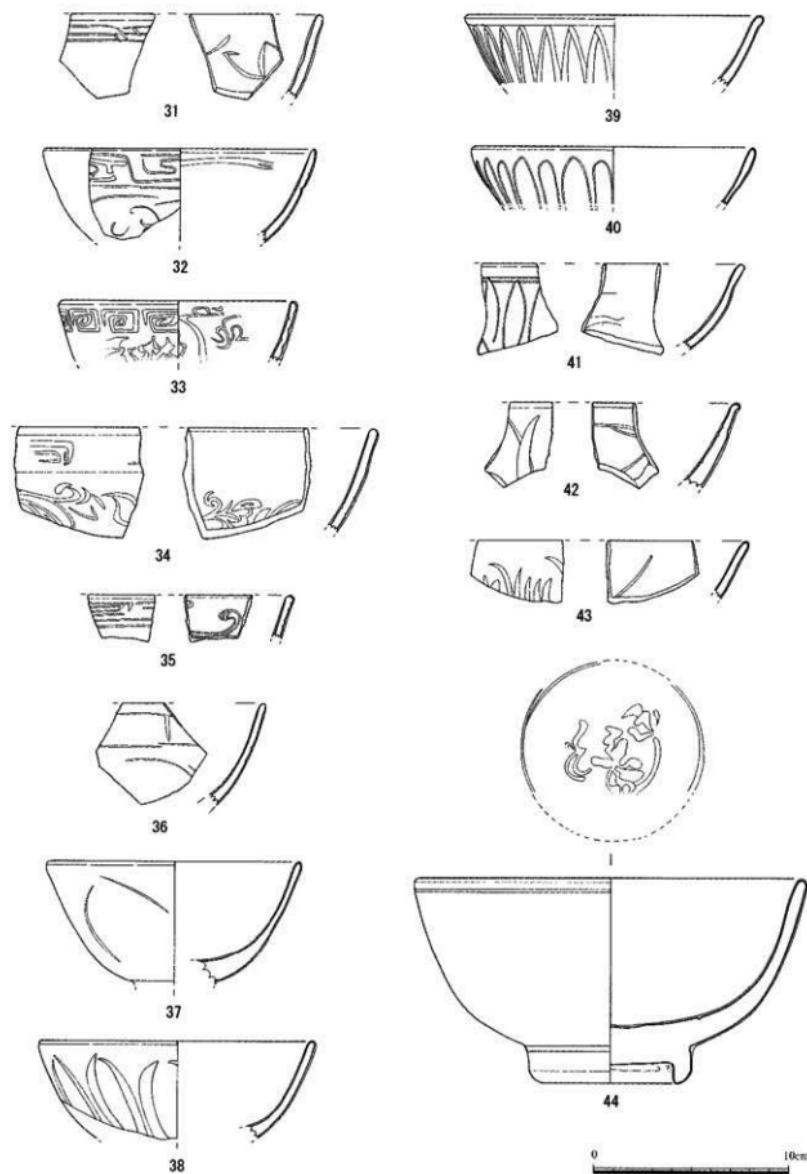
図版1 中国産陶磁器・土器1(青磁1)



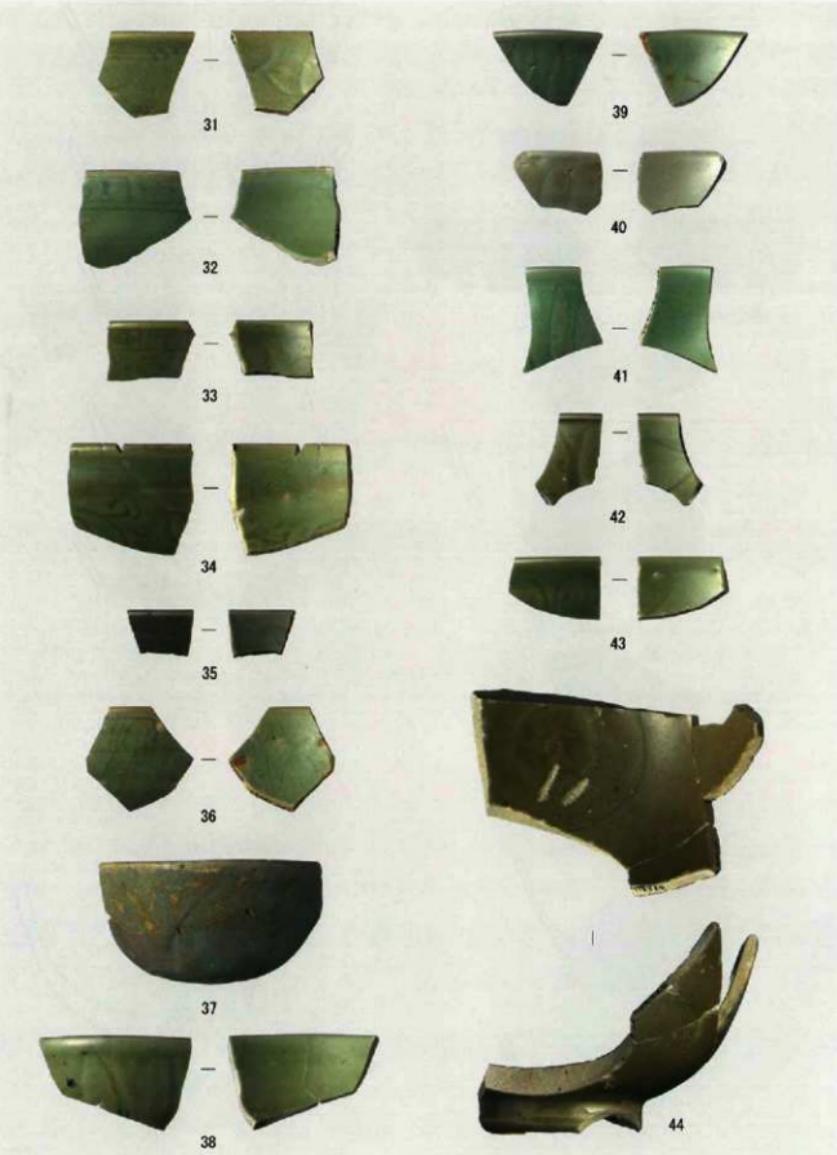
第30図 中国産陶磁器・土器2(青磁2)



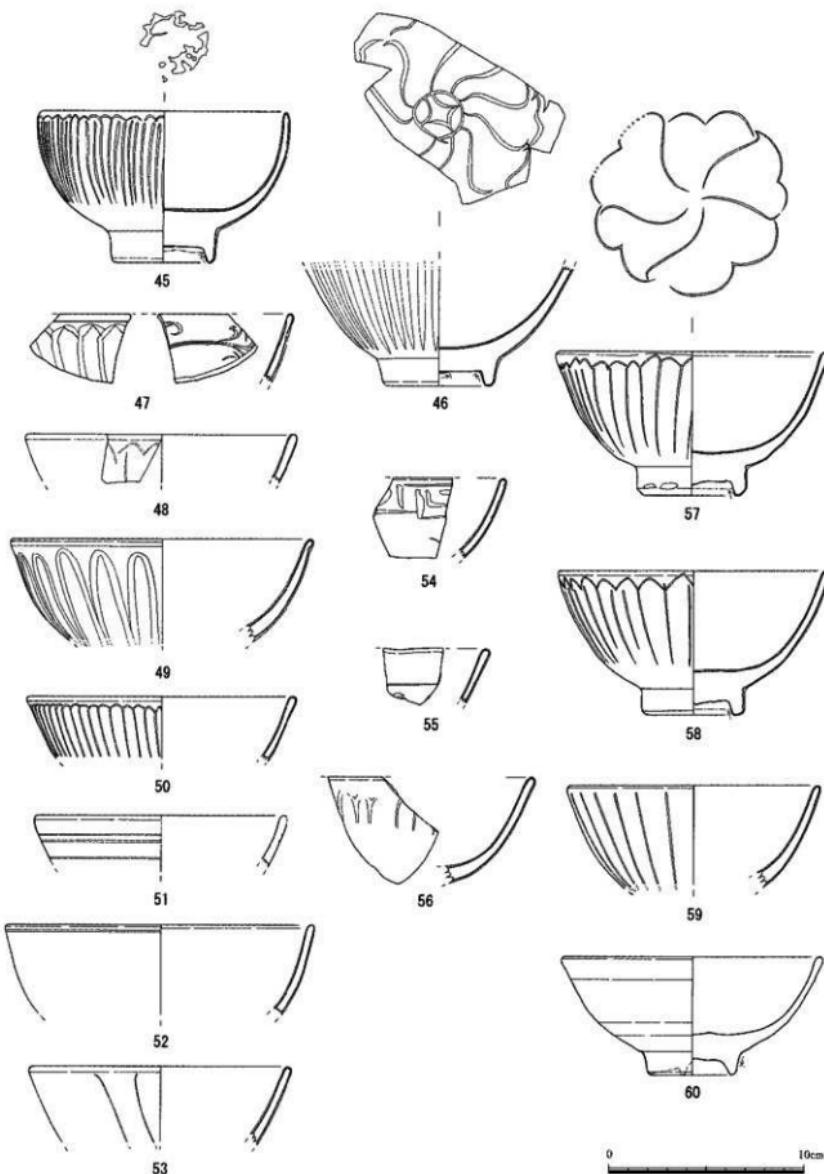
图版 2 中国产陶磁器・土器 2(青磁 2)



第31図 中国産陶磁器・土器3(青磁3)



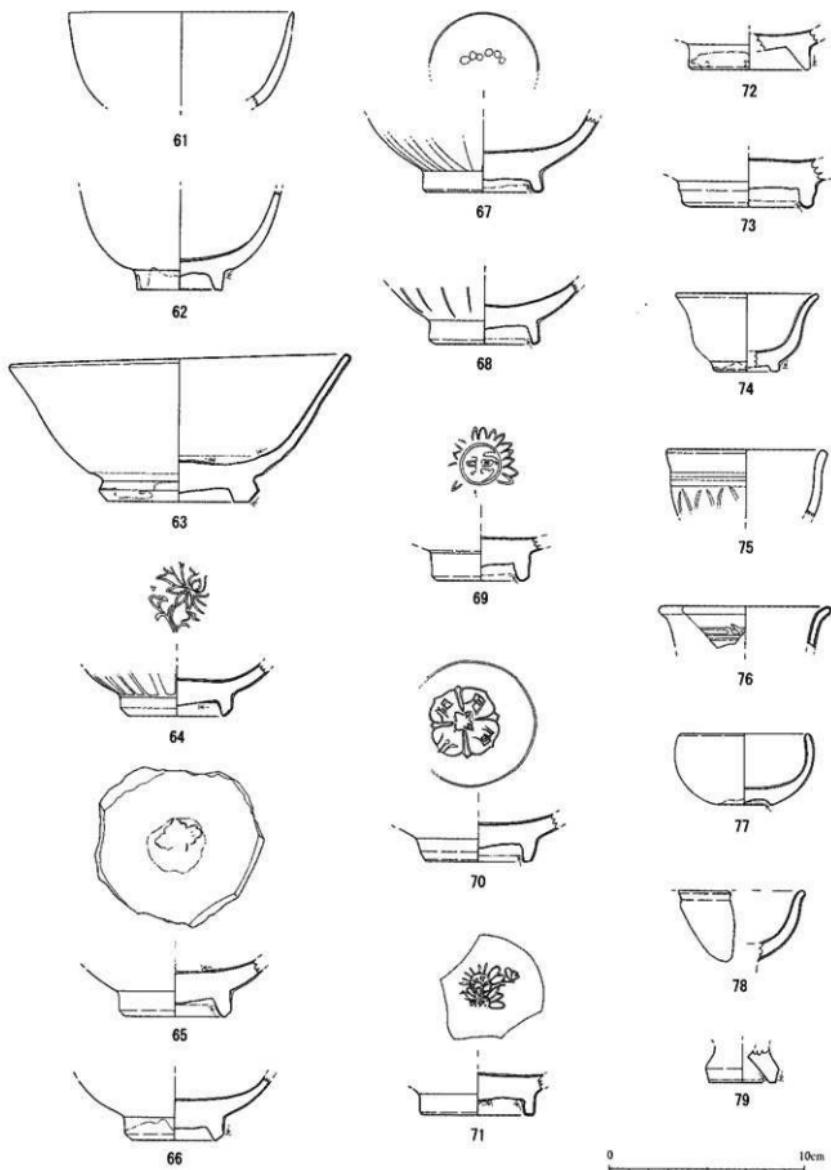
図版3 中国産陶磁器・土器3(青磁3)



第32図 中国産陶磁器・土器4(青磁4)



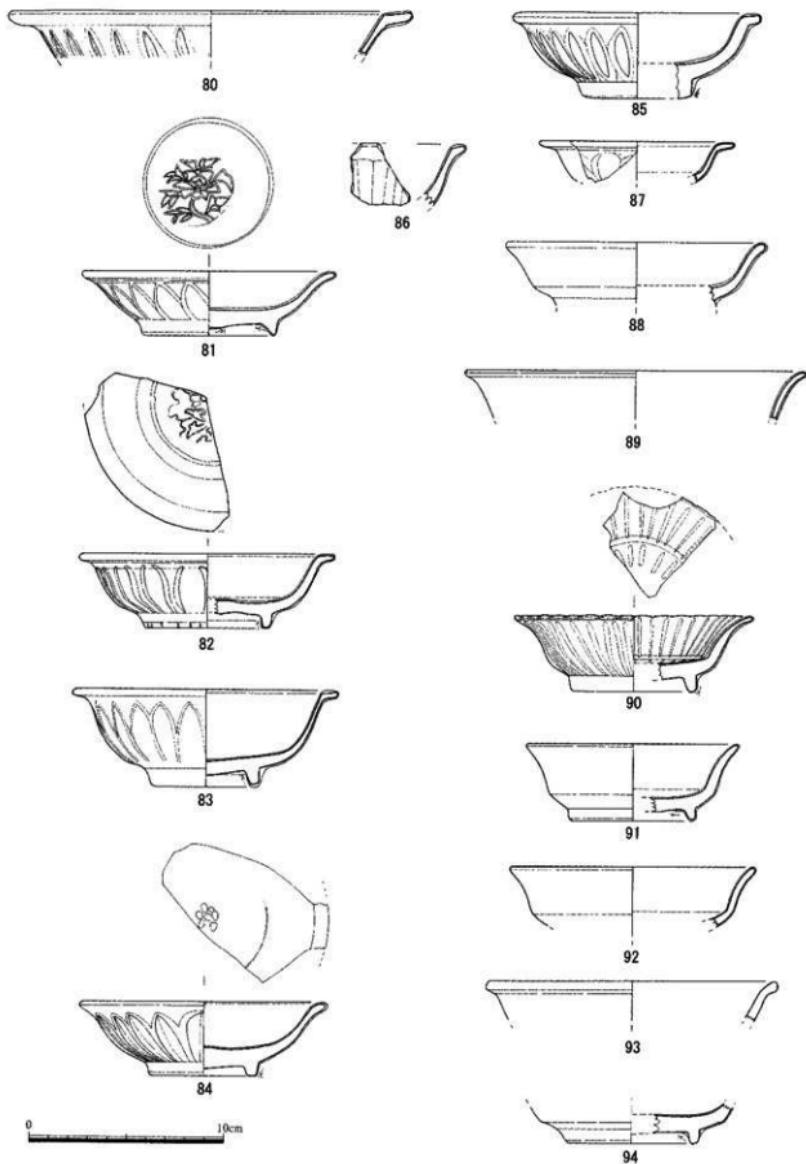
図版4 中国産陶磁器・土器4(青磁4)



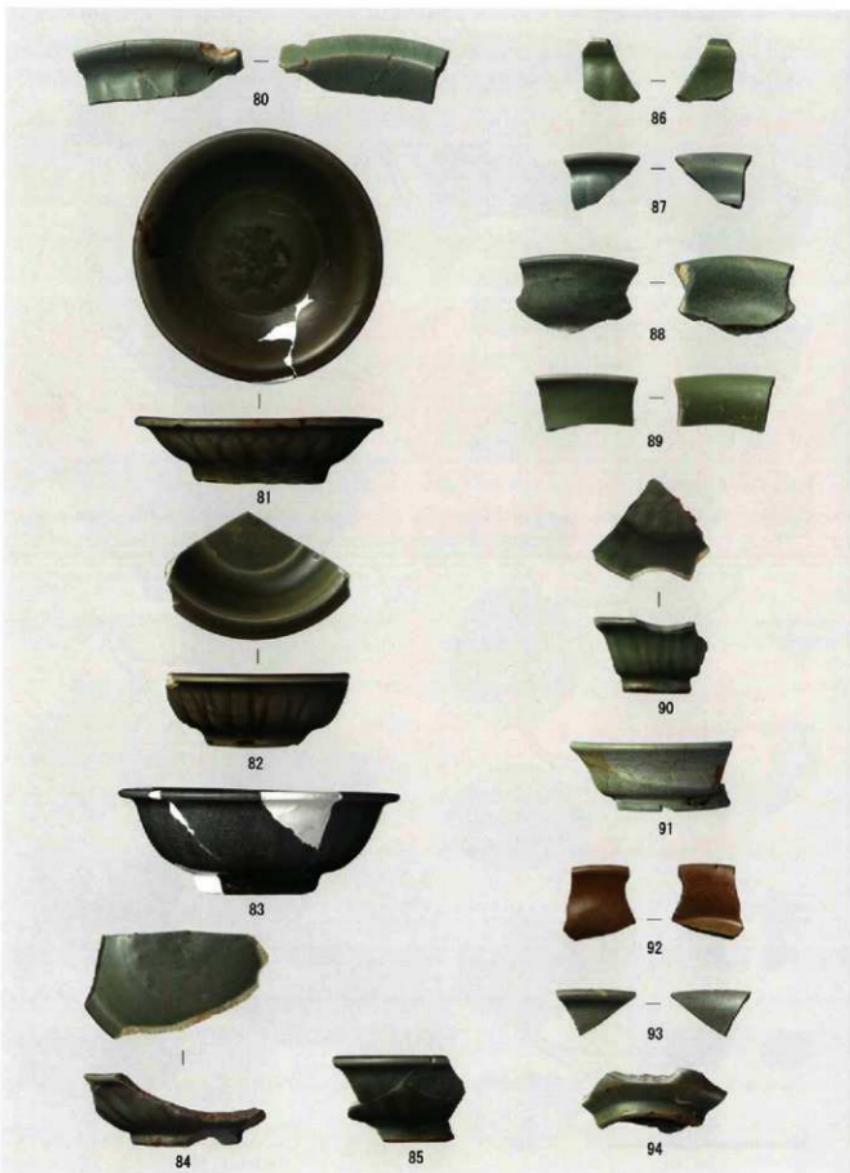
第33図 中国産陶磁器・土器5(青磁5)



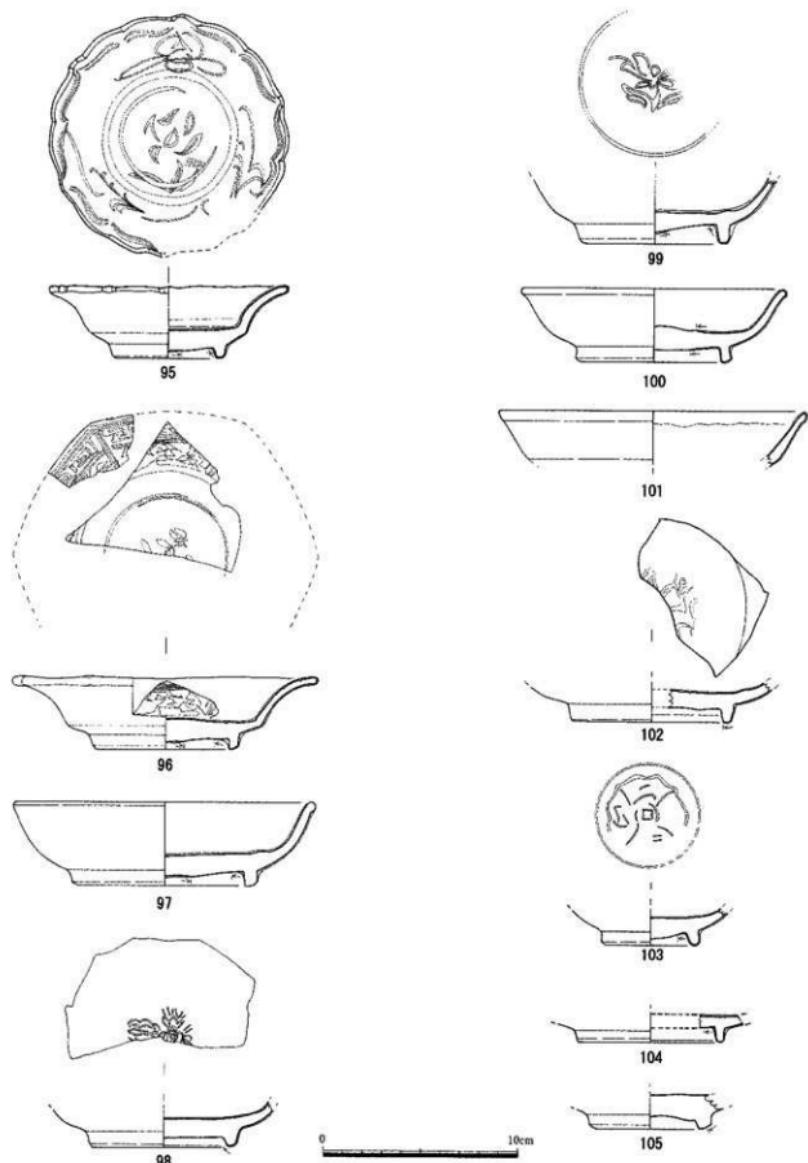
图版5 中国产陶磁器・土器5(青磁5)



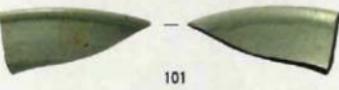
第34図 中国産陶磁器・土器6(青磁6)



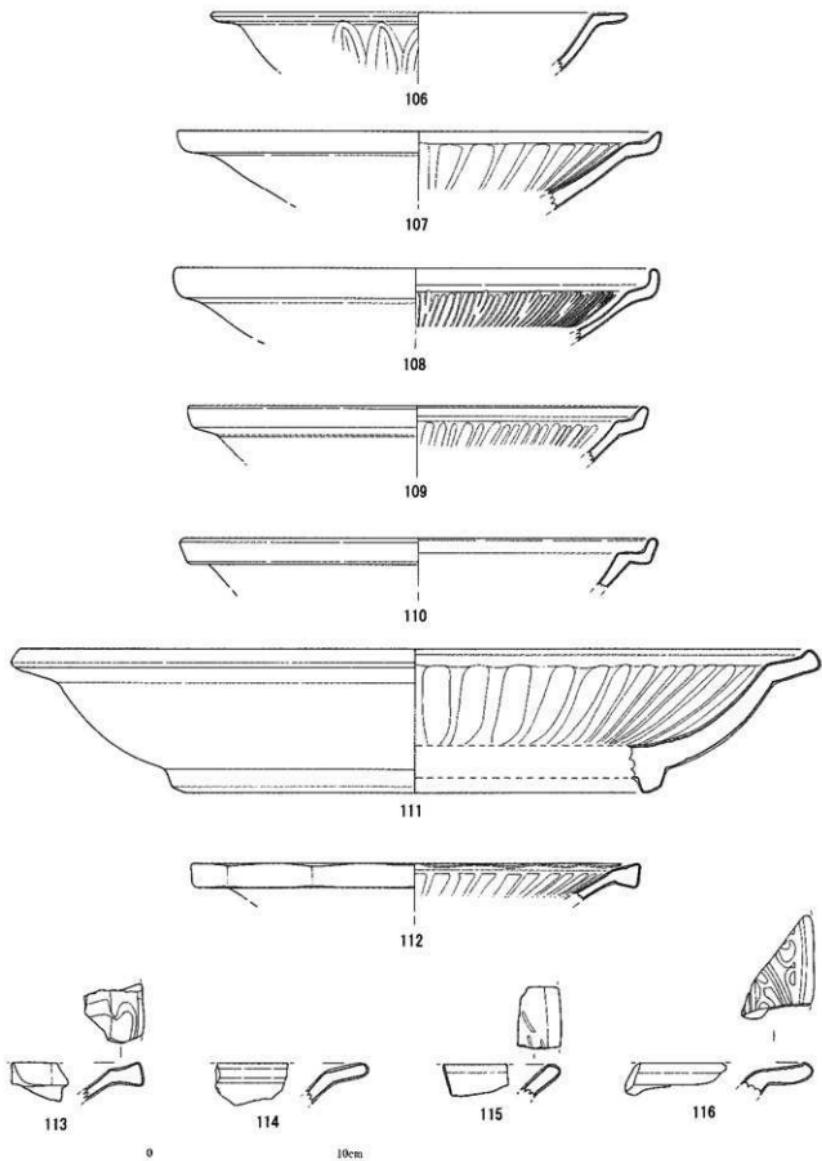
図版6 中国産陶磁器・土器6(青磁6)



第35図 中国産陶磁器・土器7(青磁7)



图版 7 中国产陶磁器・土器 7 (青磁 7)



第36図 中国産陶磁器・土器8(青磁8)



106



112



107



113



108



114



109



115



110



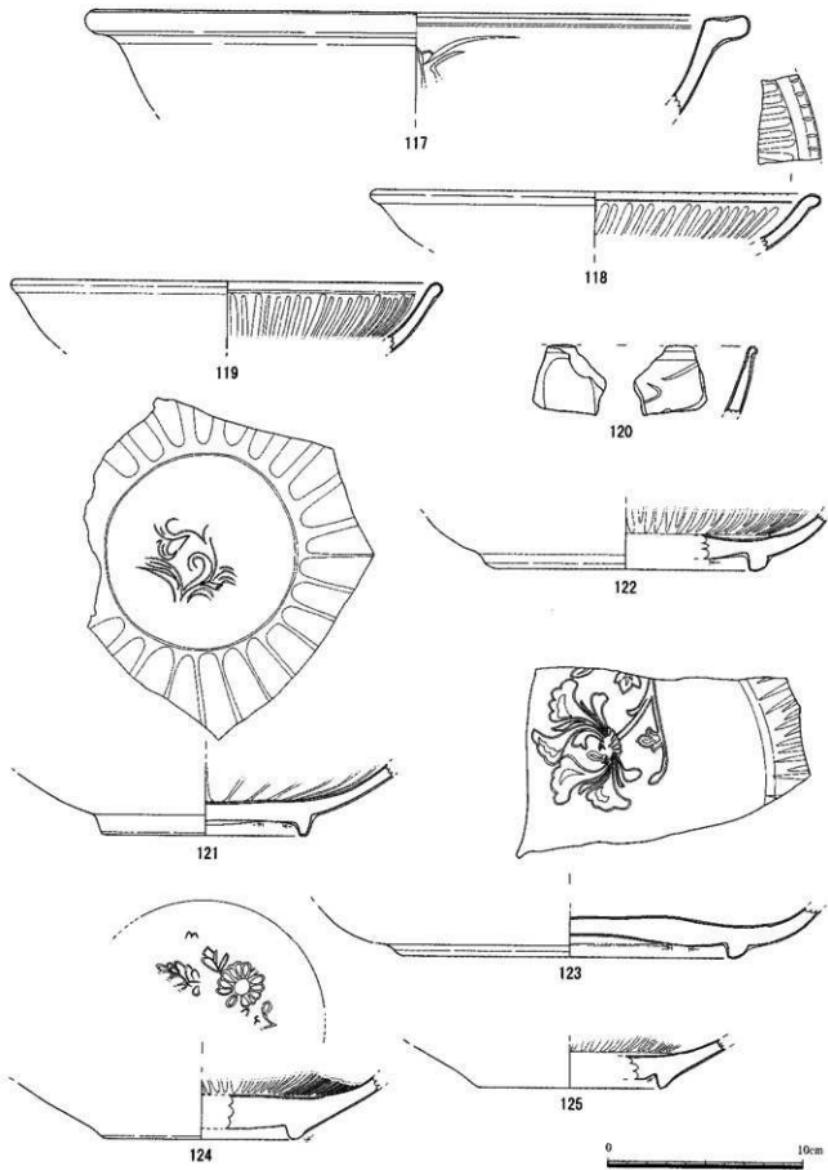
116



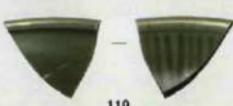
111



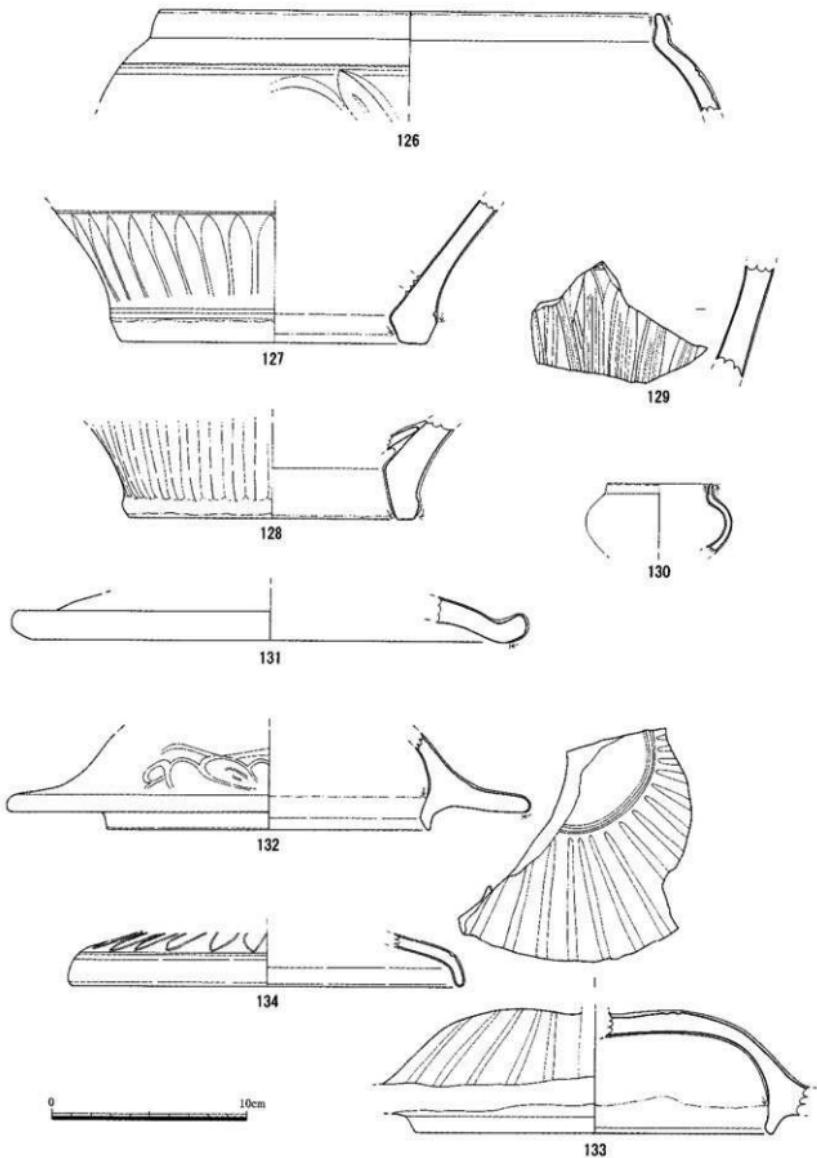
图版 8 中国产陶磁器·土器 8 (青瓷 8)



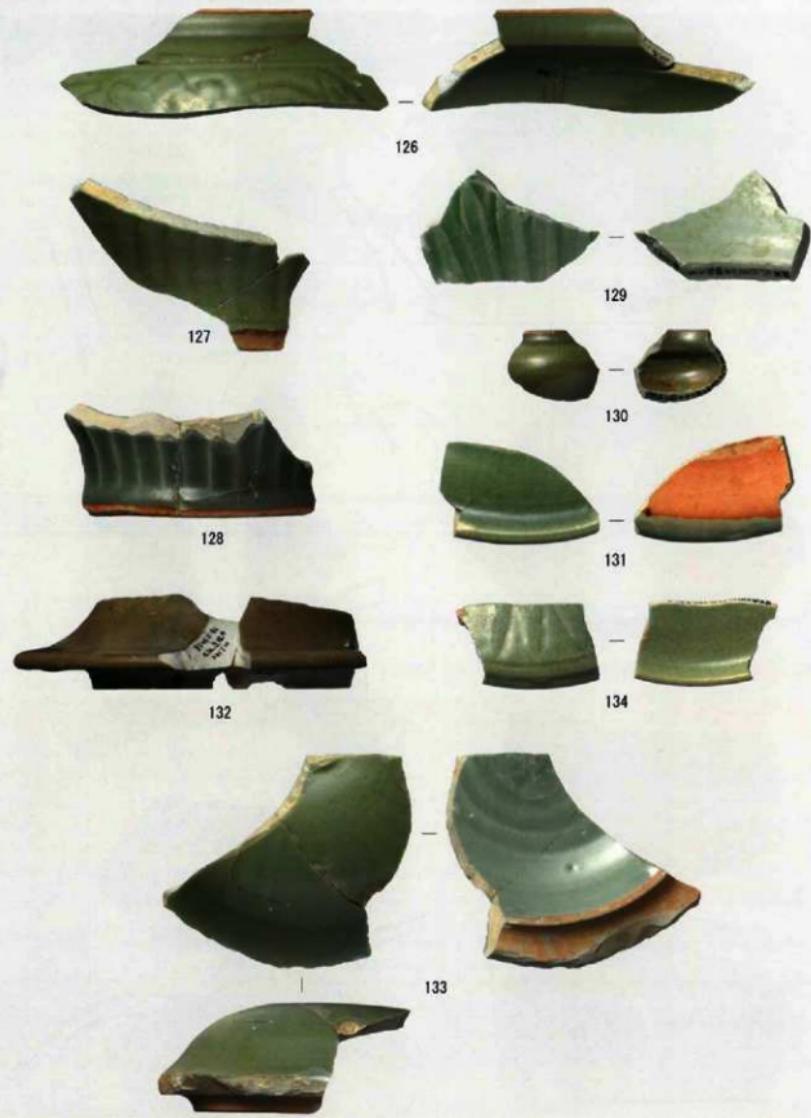
第37図 中国産陶磁器・土器9(青磁9)



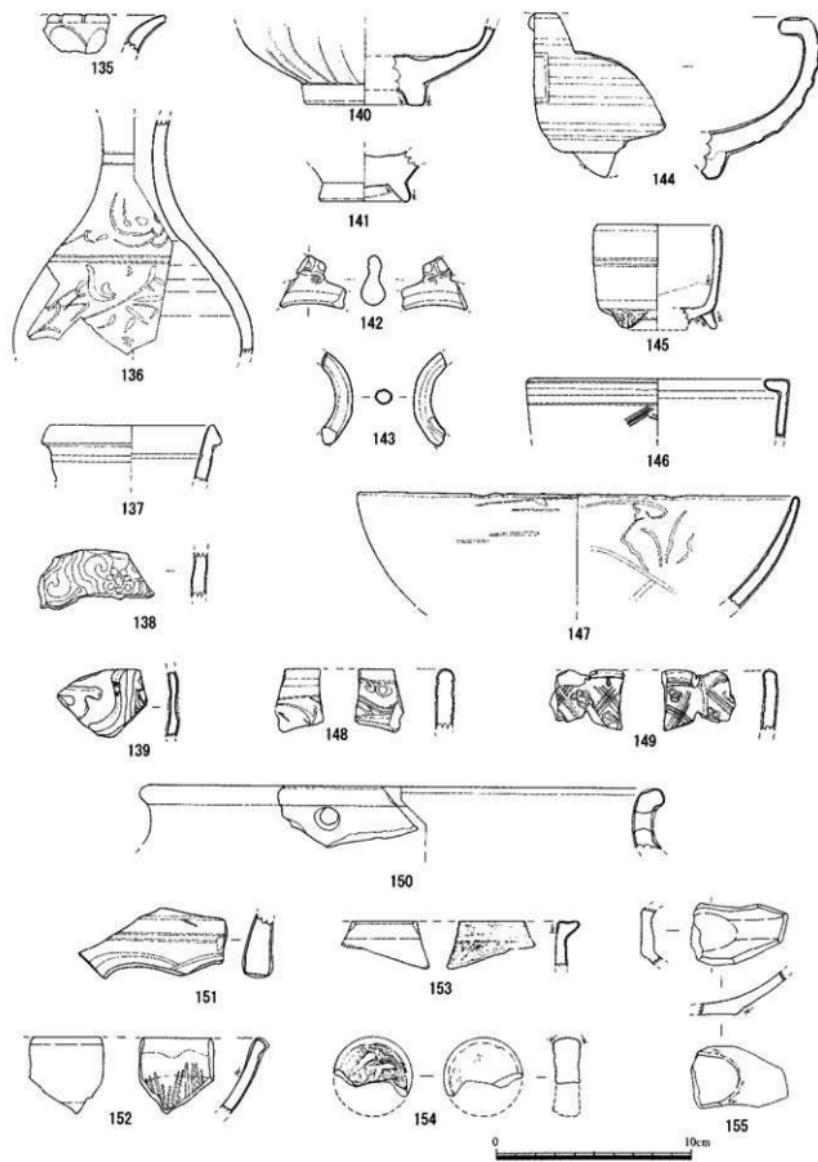
図版9 中国産陶磁器・土器9(青磁9)



第38図 中国産陶磁器・土器10(青磁10)



図版 10 中国産陶磁器・土器 10(青磁 10)



第39図 中国産陶磁器・土器11(青磁11)



图版 11 中国产陶磁器·土器 11(青磁 11)

②白磁

白磁は総計 519 点出土している（第3表）。徳化窯系や閩清窯系、景德鎮窯系、福建・廣東系など中国南部で製作された資料が大半を占めている。これらの中には二次的な被熱によって変色や砂粒が溶着したり、煤が付着した資料も比較的多く見られることから、火災等に遭った可能性が高い。器種に関しては碗・皿などの小型の製品が主体であり、少数であるが、瓶、壺といった大型製品も出土している。概ね 14 世紀後半から 17 世紀頃までのものが出土しているが、12 世紀後半から 13 世紀前半頃の玉縁口縁碗も 1 点出土している。文様は施されていないものが大半であるが、一部に内底面にはスタンプによる花文や字款や外側洞部にヘラ描きによる草花文が見られるものや、外底面には呉須で字款が描かれるものがある。以下、特徴的な資料を第 40・41 図に示し、個々の観察所見は第 4 表に記す。

（1）碗 A類 口縁部が玉縁状に肥厚する碗。肥厚部はやや扁平となる。

B類 口縁部をおぼ直口する碗。底部の疊付けは水平に切られ、外面底部際は段を有する。肩部は大きく膨らむ。

B-1：直口口縁碗。釉薬が外面洞下部から露胎となる。

B-2：口縁部が僅かに外反する。

C類 口縁部が大きく外反する碗。高台は低く、ハの字状に開く。

C-1：高台外面までは施釉され、疊付から外底面にかけて露胎となる。

C-2：疊付以外は施釉される。全体的に器壁は薄い。

D類 薄手の口縁部が直口する碗。高台は低く、高台内の内縁りは浅い。底部は内外面共に露胎となる。

E類 直口部が直行する碗で、口縁端部が僅かに肥厚する。高台は疊付から外底面にかけて露胎となる。

（2）杯 A類 口縁部が外反する八角杯で、高台には抉りが見られるものもある。

B類 口縁部が大きく開く杯で、高台が基筒底状となる。

C類 口縁直下で屈曲させて外反する杯。

（3）皿 A類 腰部が折れる厚手の外反皿。

B類 腰部が折れる薄手の外反皿。

C類 口縁部が直口する皿。

C-1：やや厚手で高台には抉りが 4 カ所見られる。疊付けのみ露胎となる。

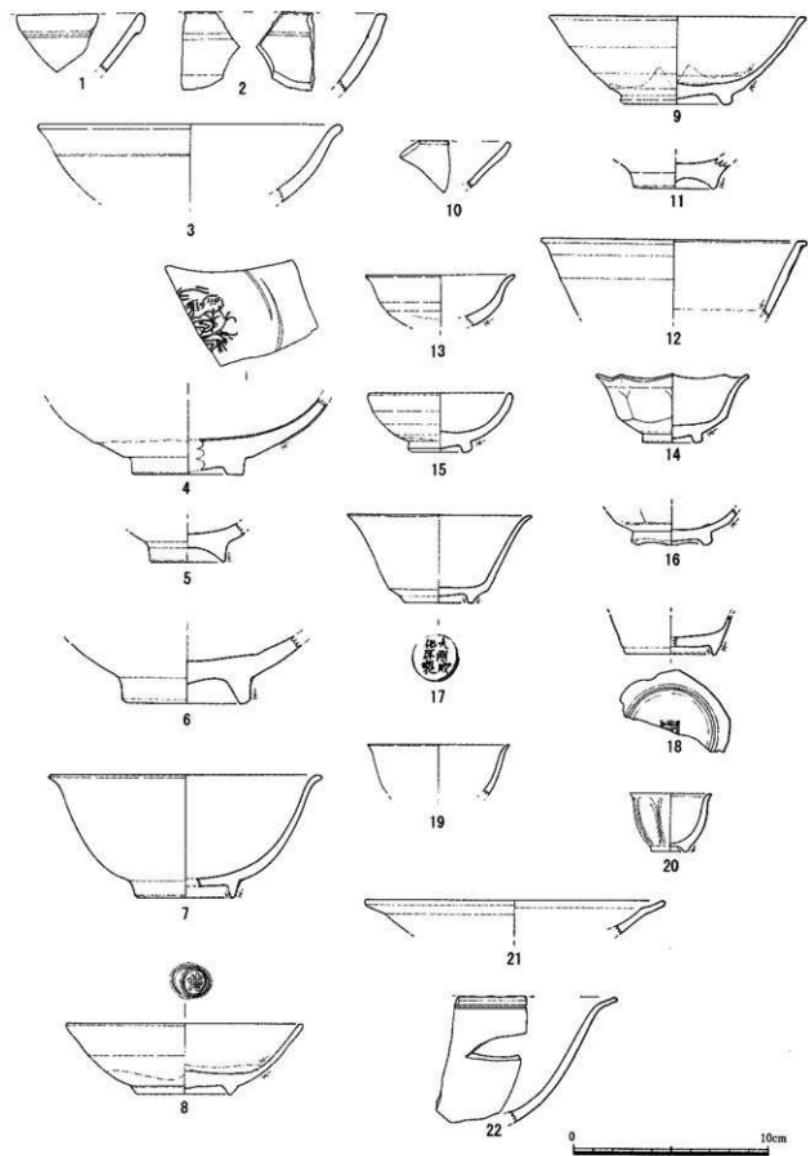
C-2：薄手で高台は基筒底状となる。内外面共に洞下部から底面にかけて露胎となる。

D類 大振りの外反皿もしくは盤。全体的に器壁は薄い。

D-1：口縁部は外反し、高台は低く、内傾する。肩部には膨らみを有する。

D-2：口縁部は外反し、高台は低く、内傾する。肩部は膨らみを有さず、高台から口縁部にかけて大きく外反する。

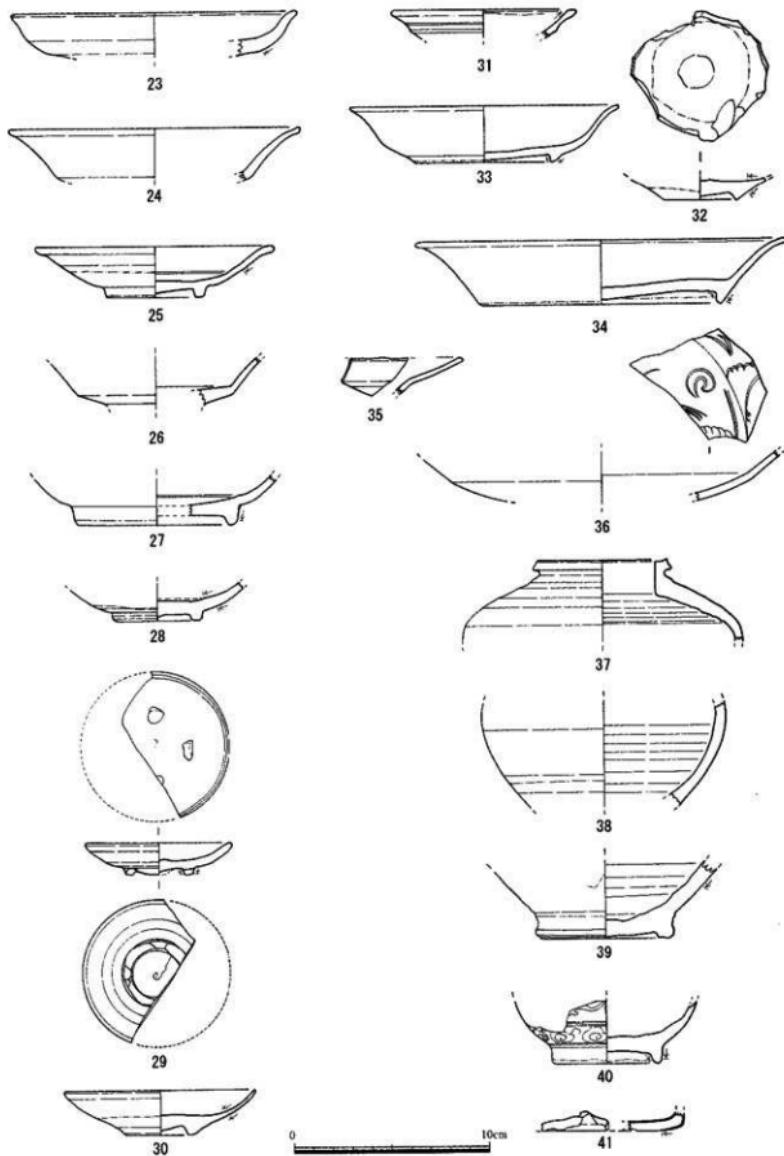
E類 口縁部が「く」の字状に大きく外反し、鉗状になる。全体的に器壁は薄く、腰部は膨らみを有する。



第40図 中国産陶磁器・土器 12(白磁 1)



图版 12 中国产陶磁器・土器 12(白磁 1)



第41図 中国産陶磁器・土器13(白磁2)



图版 13 中国产陶磁器·土器 13(白磁 2)

③青花

青花は総数1,871点出土している（第5表）。年代は15～19世紀に位置づけられ、窯跡別だと景德鎮窯・德化窯・漳州窯のほか、詳細は不明だが福建省や広東省などの中国南部地域で生産されたと考えられるものなどがある。器種は碗・小碗・小杯・皿・盤・鉢・小壺・瓶・水注・壺とそれに伴う蓋が得られているが、青磁や白磁と同じく二次的な被熱による溶着や変色が認められる資料もある。以下、器種別の分類概念を記し、個々の観察所見は第6表に示す。

碗は年代でみるとグスク時代と近世に大別される。グスク時代の資料は口縁部が端反を呈するもの（1～11、26）、口縁部を鋸縁状に折り高台が「ハ」の字形に開くもの（12・13）、口縁部が直口するもの（24・25、27、32～44、68）、直口口縁で腰部に棱を持つもの（28～31）などがみられる。このうち、1～11は小野正敏氏の分類（小野1982）によるとB1群、27と68はC群、28～31はD群にそれぞれ相当し、12と13は沖縄分類（瀬戸ほか2007）のC'類に相当する。近世の資料は口縁部を鋸縁状に折るもの（14・15、59～62）、端反口縁を呈するもの（16～23、63・64）、直口口縁で内底と外底を露胎にするもの（65～67、69～80）、型成形で口縁部が端反または直口するもの（81～91、94・95）、端反口縁だが腰部の張りが弱いもの（92・93）などがある。このうち、端反口縁の16～23は森毅氏の分類（森1995）によるとB3群に相当し、鋸縁状口縁の製品は上田秀夫氏の分類（上田1991）によるとA～IV類に相当する。また直口口縁のものは漳州窯系（65～67、69～75）と福建・広東系（76～80）に細分できる。

小碗は口縁部が端反または鋸縁状を呈するもの（96・97）、型成形で端反口縁となるもの（108～115、122）、端反口縁だが腰部の張りが弱いもの（116～121）などがあり、このうち96と97は森分類（森1995）の小杯I類に相当する。大半が近世に位置づけられる。

小杯は基筒底状の底部から筒状に立ち上がり端反口縁となるもの（125）、腰部の張りが強く口縁部が直口するもの（126）、高台付きの端反口縁で輪轉成形のもの（127）と型成形のもの（128）などがみられる。全て近世の資料である。

皿は口縁部が端反を呈するもの（^{129、131}_{～134}）、基筒底で口縁部が直口するもの（135～140）、高台付きで口縁部が直口するもの（141～144）、口縁部内面に棱を持ち兜鉢状に開くもの（145～152）、型成形で口縁部が端反となるもの（153・154）など様々な資料がある。このうち、129～134及び135～140は小野分類（小野1982）のB1群とC群に相当し、141～144は上田分類（上田1991）のA～III類、145は森分類（森1995）のF群粗製にそれぞれ相当する。

小皿は口縁部が直口する型成形のもので、外面に成形時の痕跡が残る（155・156）。近世の資料である。

盤（157）は鋸縁口縁で口唇部を花弁状に成形する。グスク時代に位置づけられる。

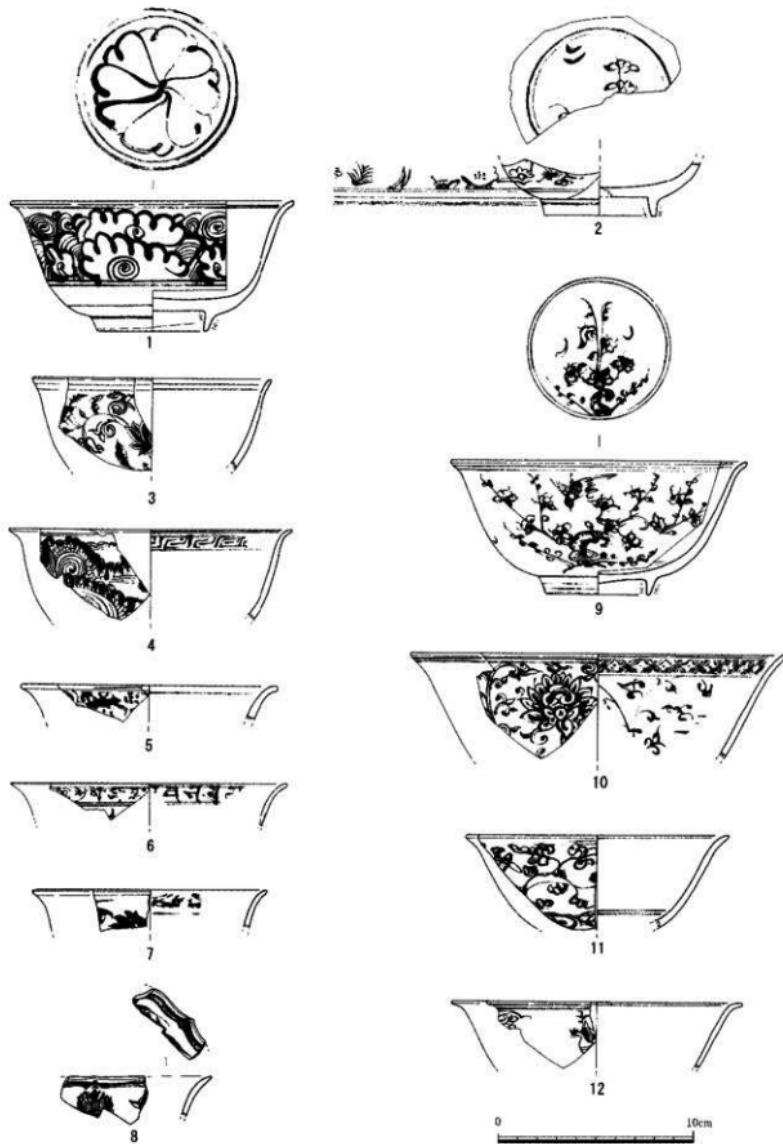
鉢（159・160）は底部から斜め上方に立ち上がり、内底を蛇の目状に釉剥ぎする。近世の資料である。

小壺（161）はグスク時代の資料で、最大径を肩部に持つ広口の無耳壺である。

瓶は多様な器形がみられるが、特徴的な資料としてはいわゆる玉壺春瓶（163・164、166～168、170）、体部が瓢形を呈するもの（169）、蓋付きの梅瓶（180・181）などが挙げられる。全てグスク時代の資料である。

水注は仙壺瓶とも称される資料で、玉壺春瓶の胴部に注口と把手を貼付する（175・176）。グスク時代に位置づけられる。

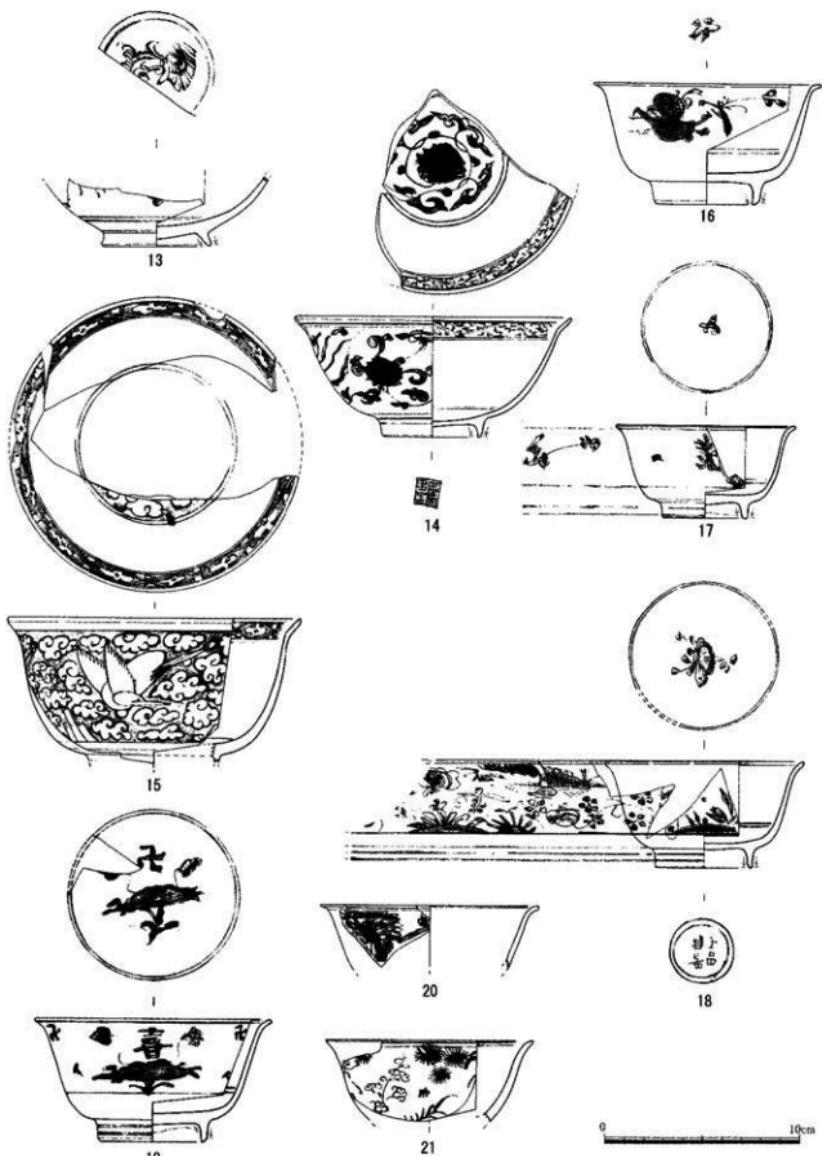
壺はいわゆる酒会壺（179）とそれに伴う蓋（178）が確認されている。グスク時代の資料である。



第42図 中国産陶磁器・土器 14(青花1)



图版 14 中国产陶磁器・土器 14(青花 1)



第43図 中国産陶磁器・土器 15(青花2)



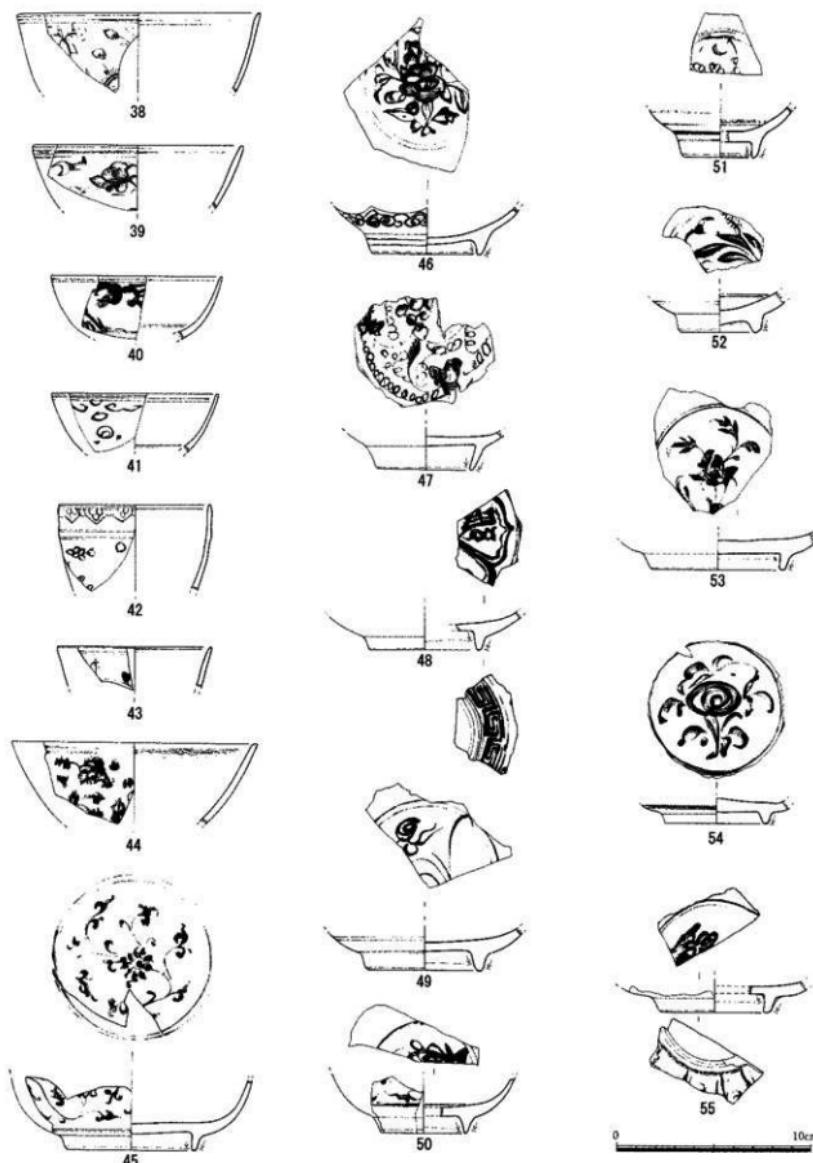
図版 15 中国産陶磁器・土器 15(青花 2)



第44図 中国産陶磁器・土器 16(青花3)



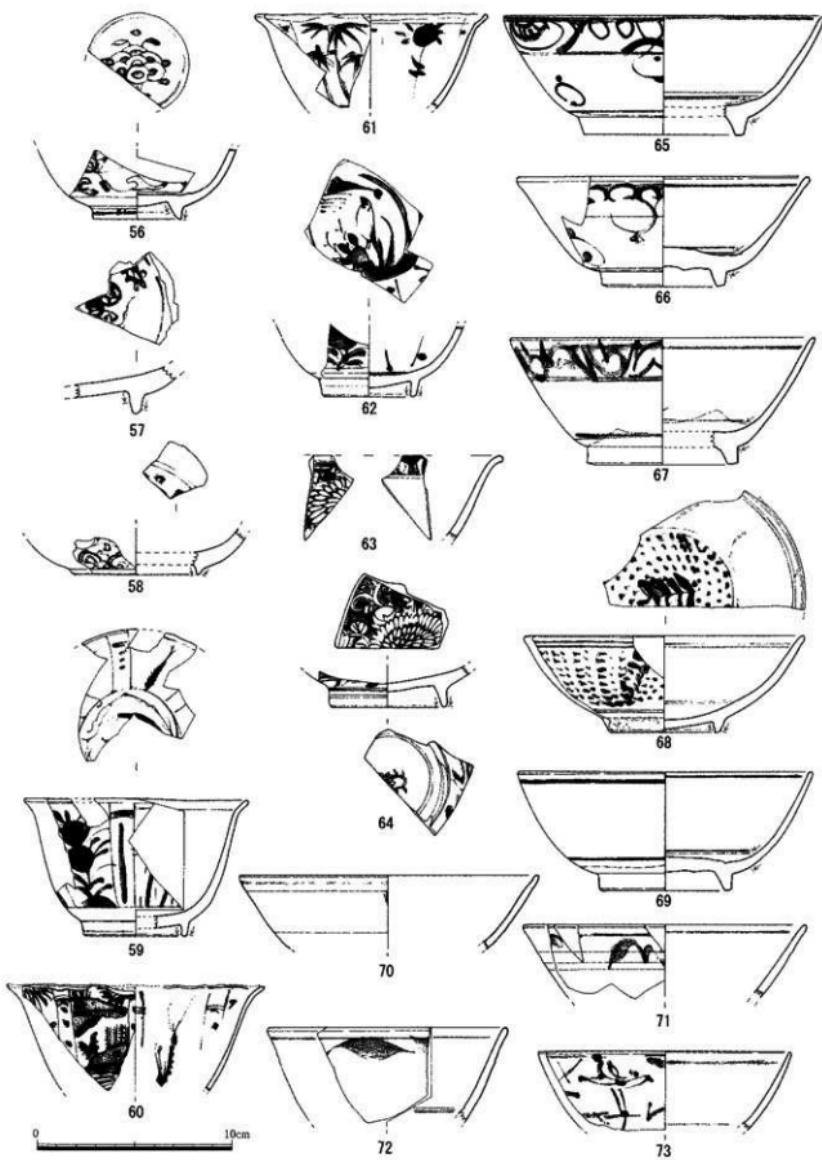
図版 16 中国産陶磁器・土器 16(青花 3)



第45図 中国産陶磁器・土器17(青花4)



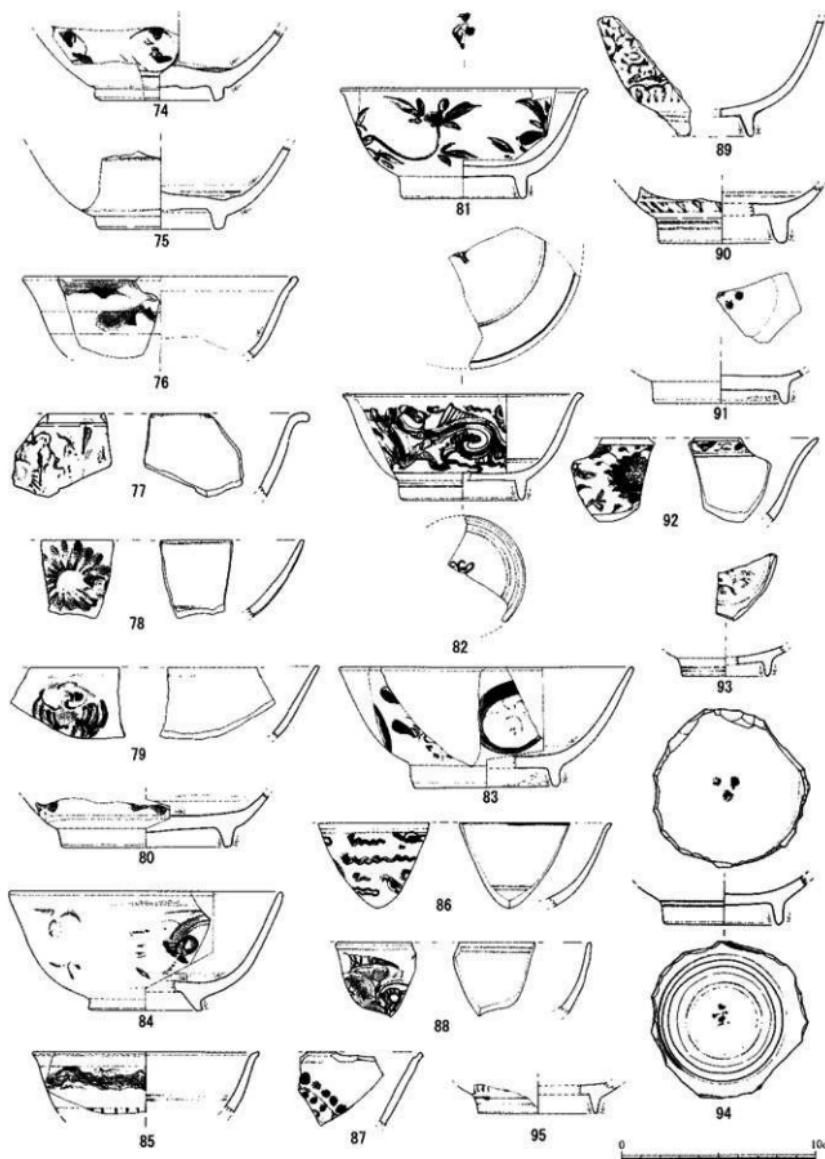
图版 17 中国产陶磁器·土器 17(青花 4)



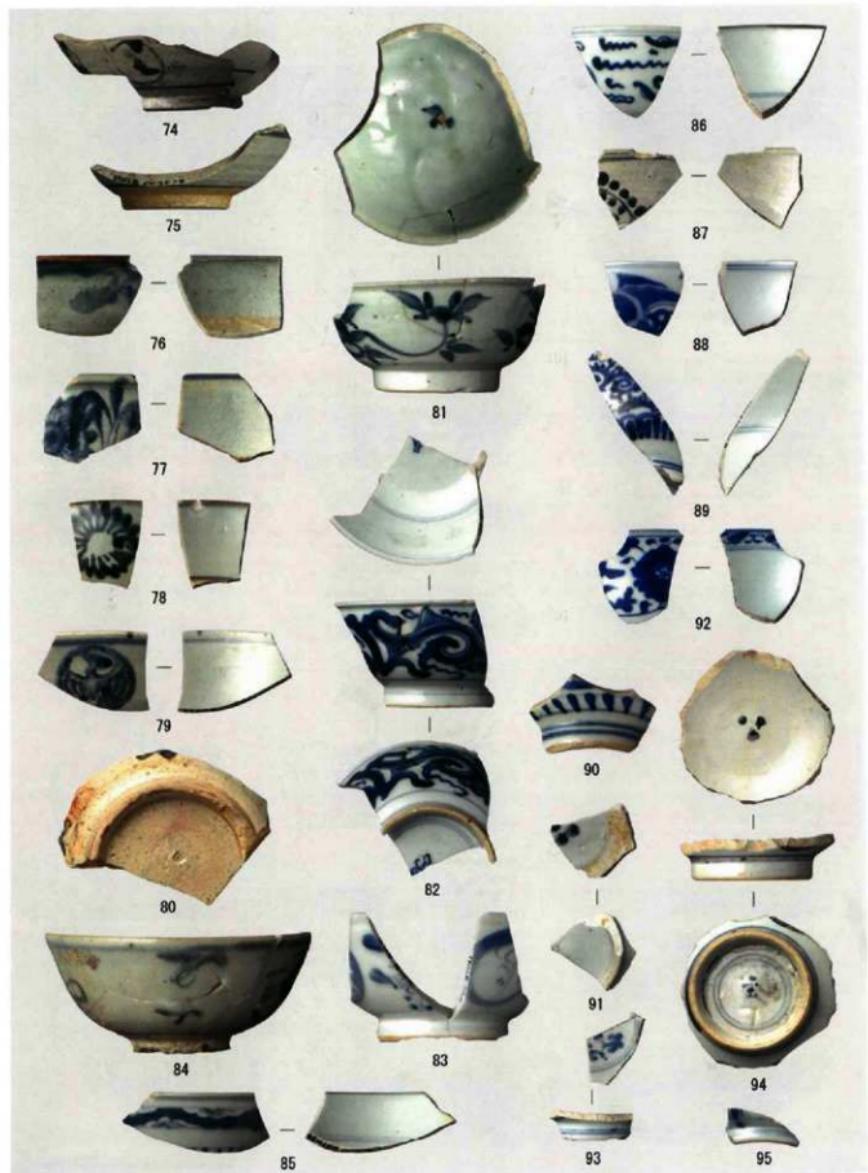
第46図 中国産陶磁器・土器18(青花5)



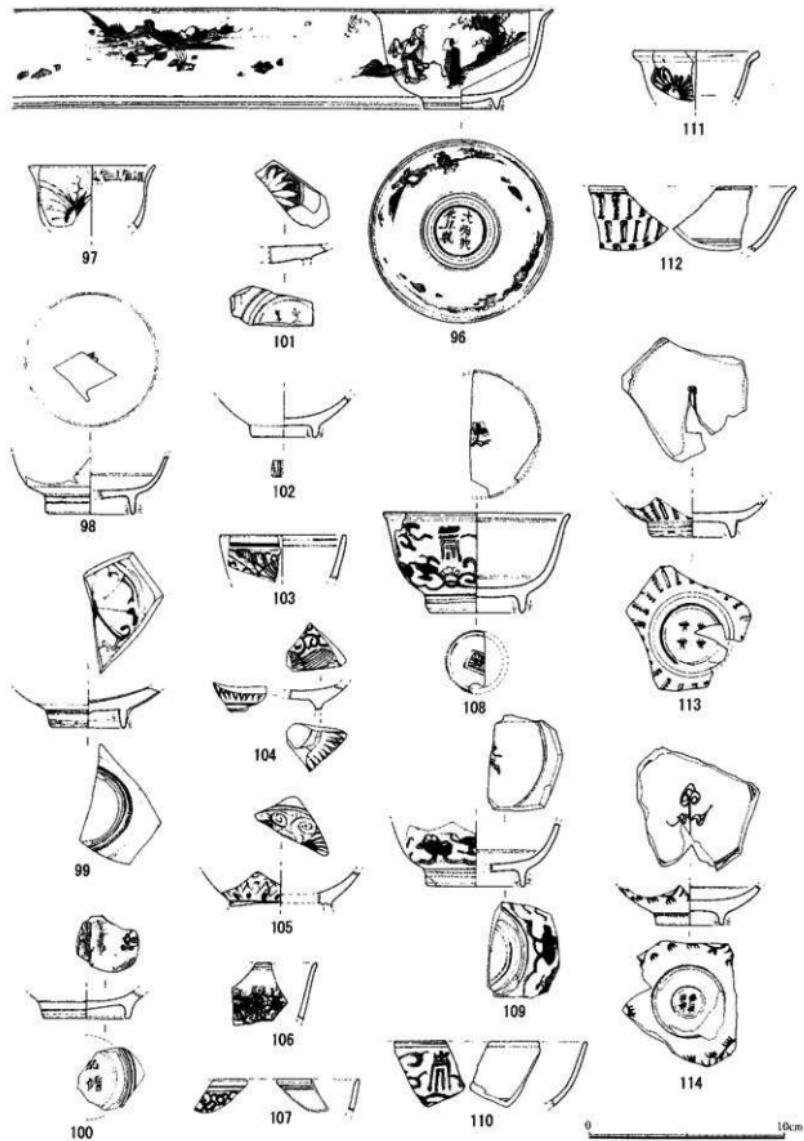
图版 18 中国窑陶磁器·土器 18 (青花 5)



第47図 中国産陶磁器・土器 19(青花 6)



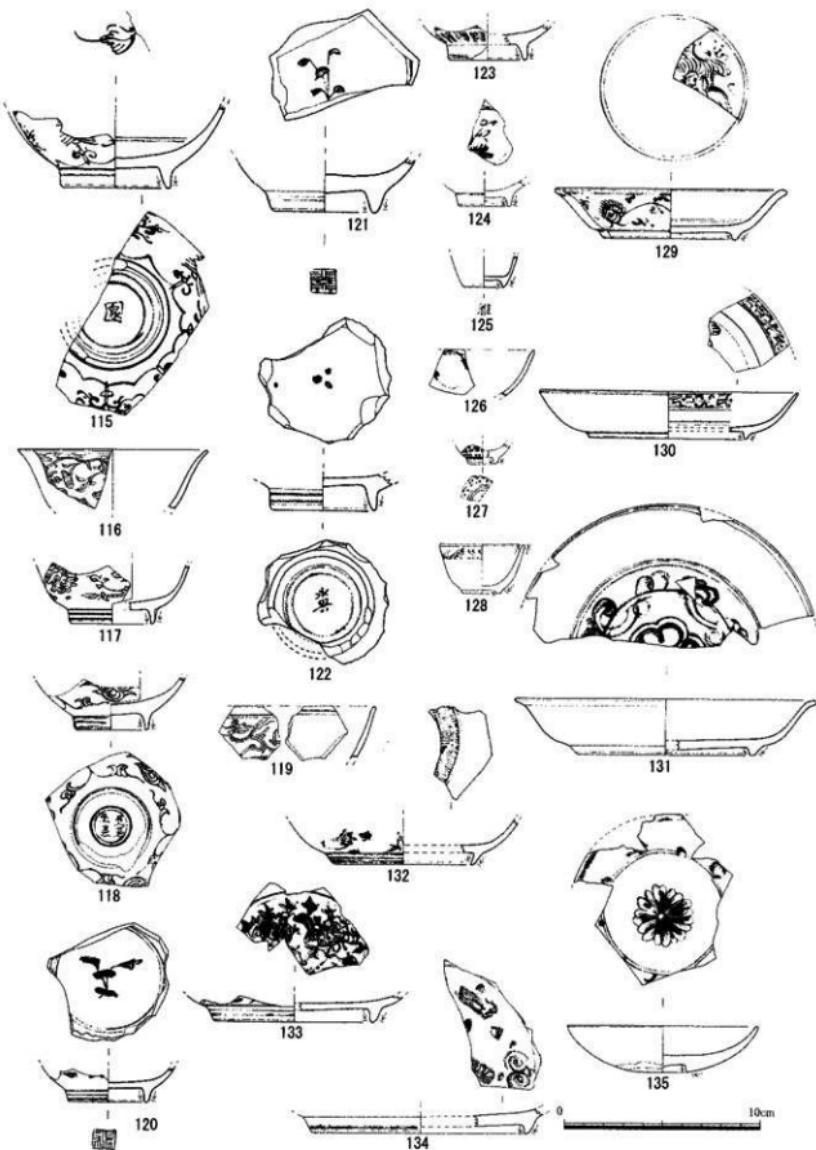
図版 19 中国産陶磁器・土器 19(青花 6)



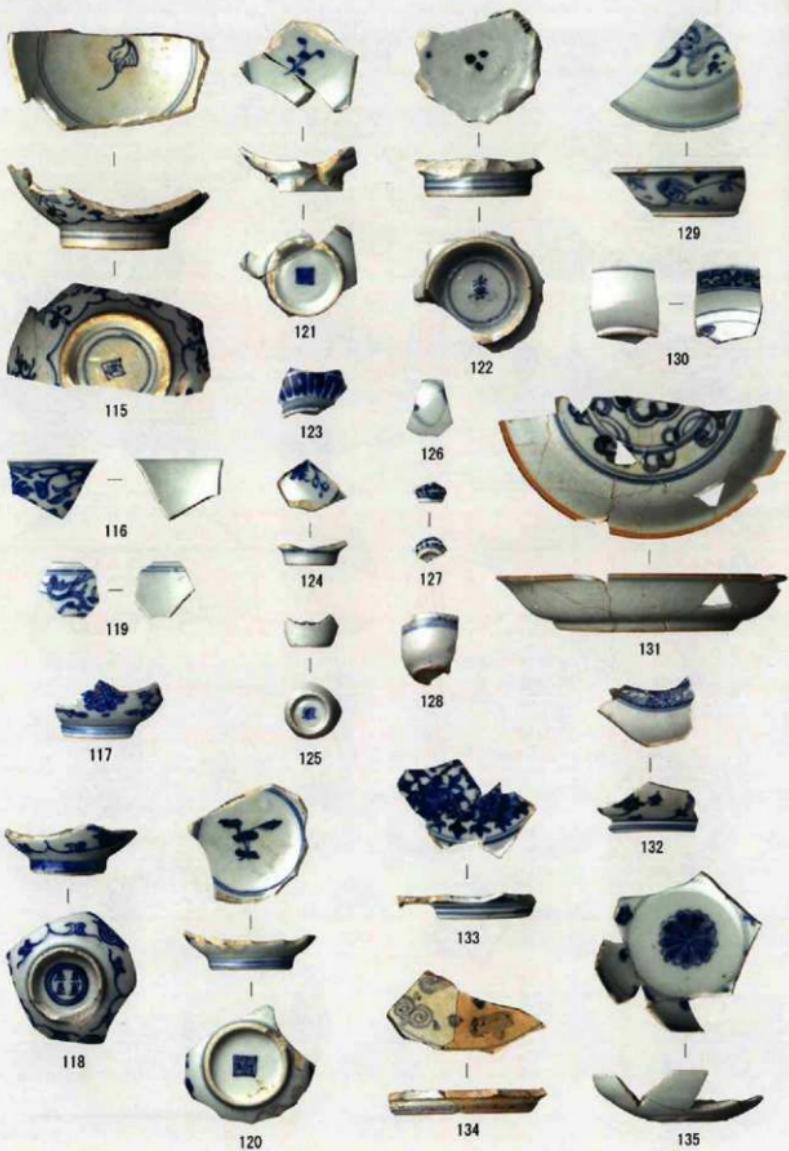
第48図 中国唐陶磁器・土器20(青花7)



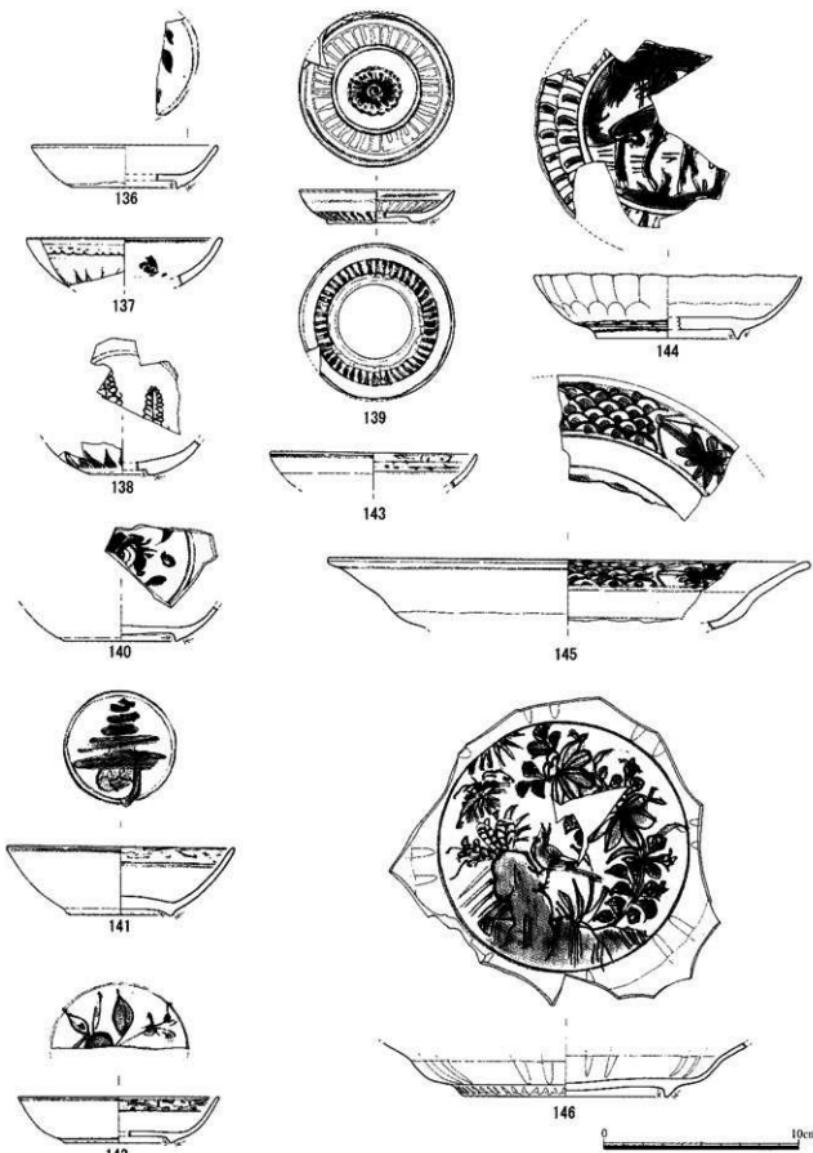
图版 20 中国产陶磁器・土器 20(青花 7)



第49図 中国産陶磁器・土器 21(青花 8)



図版 21 中国産陶磁器・土器 21(青花 8)



第 50 図 中國産陶磁器・土器 22 (青花 9)



136



139



144



137



143



138



140



145



146



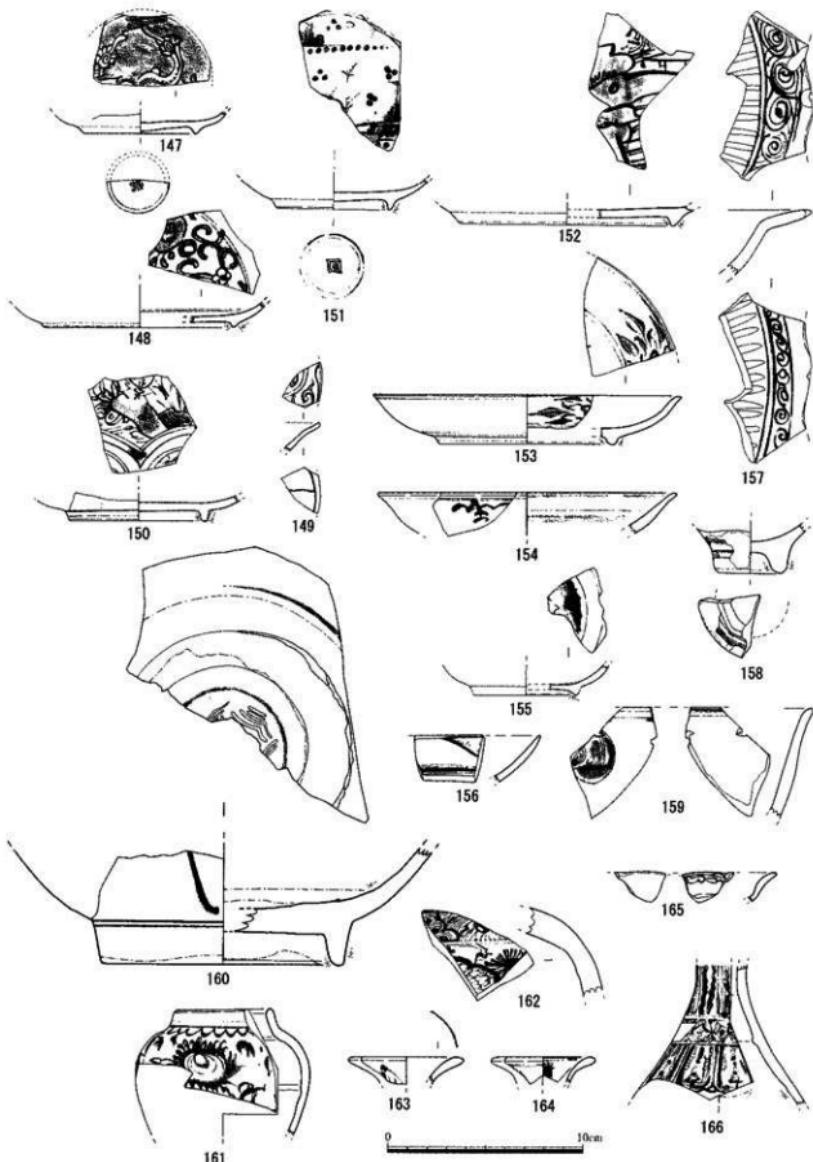
141



142



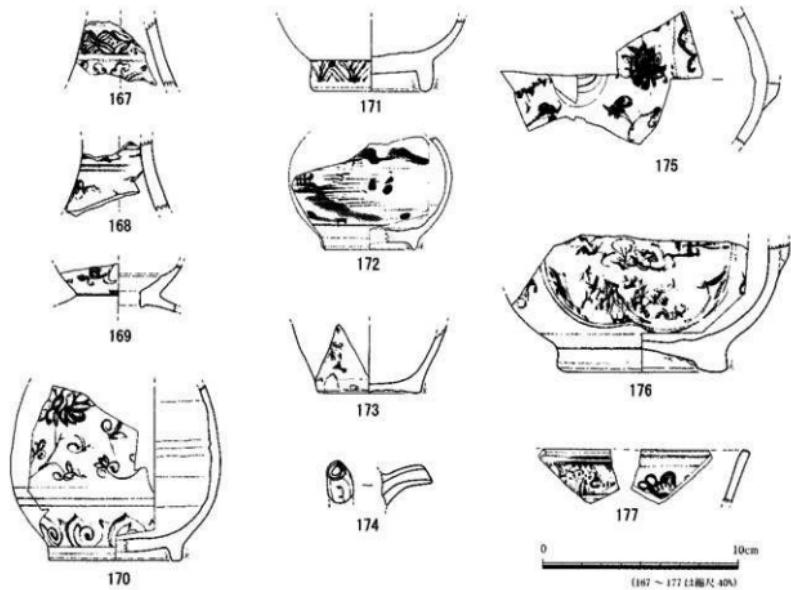
图版 22 中国产陶磁器・土器 22(青花 9)



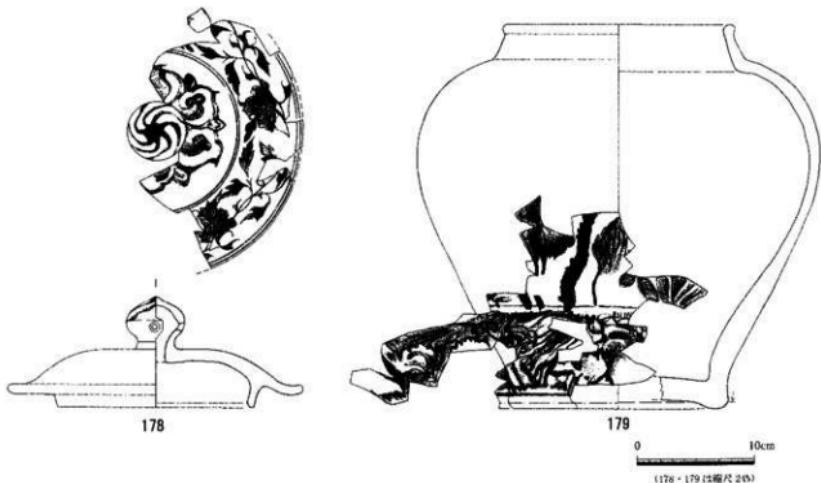
第51図 中国産陶磁器・土器23(青花10)



図版 23 中国産陶磁器・土器 23(青花 10)



0 10cm
(167 ~ 177 は縮尺 40%)

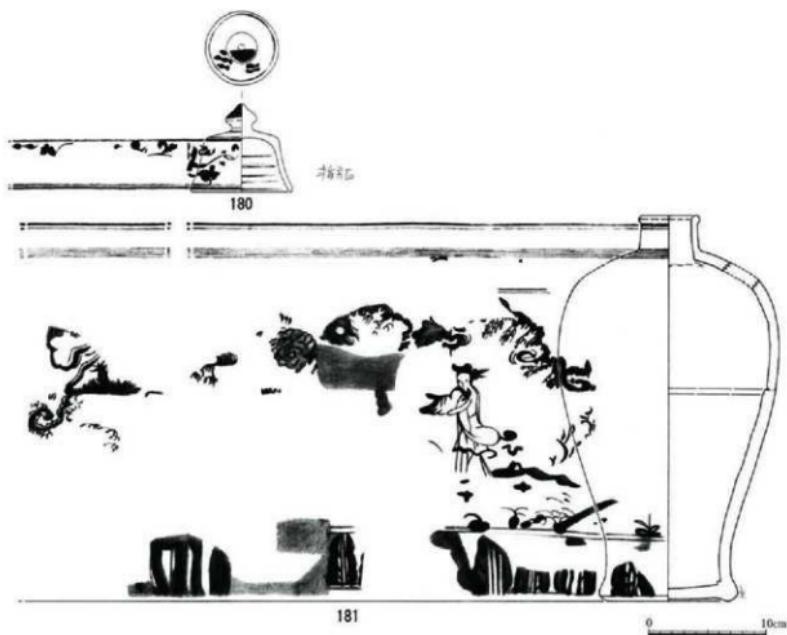


0 10cm
(178 ~ 179 は縮尺 25%)

第 52 図 中国産陶磁器・土器 24(青花 11)



図版 24 中国産陶磁器・土器 24 (青花 11)



第 53 図 中国産陶磁器・土器 25(青花 12)



図版 25 中国産陶磁器・土器 25(青花 12)

④褐釉陶器

総数10,883点出土しており（第7表）、中国産陶磁器類の中で最も多い。器種は大形壺・中形壺・小形壺・急須・鉢がみられ、いずれも福建省や広東省など中国の南部地域で生産された製品が主体と考えられる。以下、鉢を除いた4器種の特徴的な資料を第54・55図に示し、あわせてその概要を記す。個々の観察所見は第8表に譲る。

（1）大形壺

1と2は張りの強い肩部外面に施成時の目跡を巡らせる無耳壺で、沖縄での出土例及び量が最も多く確認されている資料である。沖縄分類（瀬戸ほか2007）の5類に相当する。3、5、9、11、13・14は横耳が貼付される四耳壺と考えられる。3、13・14は上げ底状に成形した底部で、5は外面に線彫りで文様を描く胸部、9と11は玉縁状に肥厚する口縁部となる。沖縄分類（瀬戸ほか2007）の3類に相当する。4は全形が算玉状を呈する四耳壺と想定されるもので、口縁部を玉縁状に肥厚する。沖縄分類（瀬戸ほか2007）の4類に相当する。6は肩部の張りが弱い無耳壺で、外面に叩き成形時の痕跡が残る。8、12、15は口縁部を外側に折り曲げる長頸の多耳壺である。15は外面に龍文を貼付する。沖縄分類（瀬戸ほか2007）の1類に相当する。10は頸部が直線的に立ち上がり、口縁部の断面形態がT字状を呈する無耳壺と考えられる。沖縄分類（瀬戸ほか2007）の6類に相当する。

（2）中形壺・小形壺

16・17は田中克子氏の提唱した「薄胎施釉陶器」（田中2001）に相当する薄手の壺である。当該資料は茶入として使用された可能性も考えられ、その場合は前者が大海、後者が肩衝と称される。

（3）水注

7は大形の水注と考えられる。口縁部を断面T字状に成形し、外面には把手の基部が認められる。

⑤無釉陶器

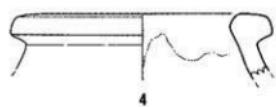
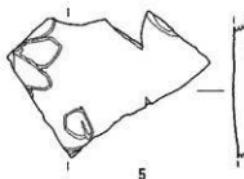
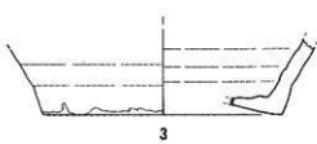
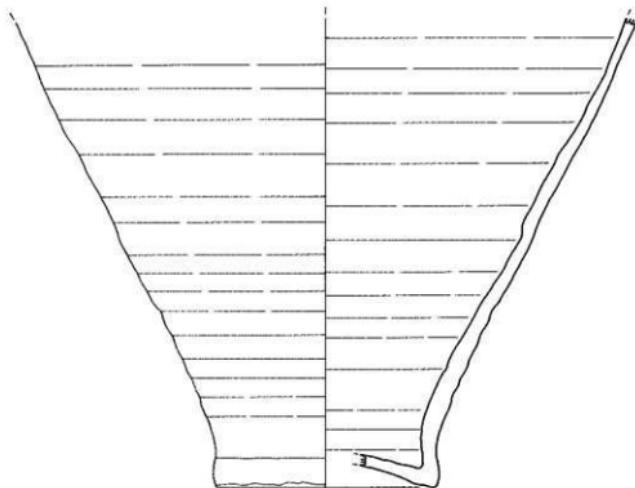
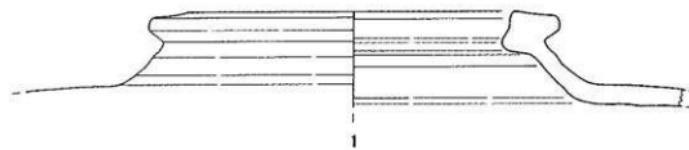
総数14点出土しており（第9表）、器種は鉢と急須が確認されている。前述した褐釉陶器と比べて量的には及ばないが、産地は同様に福建省や広東省などの中国南部地域と考えられる。以下、器種別に特徴的な資料を図化し、その概要を記す。個々の所見については第10表に示す。

（1）急須

18は球形の胸部に棒状の把手を貼付するもの。19は口縁部を内側に折り返して成形しており、肩部の張りが弱い中形壺の可能性もあるが、今回は急須として扱う。

（2）鉢

20は平底の底部から斜め上方に立ち上がり、口縁部外面を玉縁状に肥厚するもの。沖縄で出土する無釉陶器の鉢としては一般的な資料といえる。21は直口口縁を呈する大形の製品で、口唇部に蓋受状の段を有する。

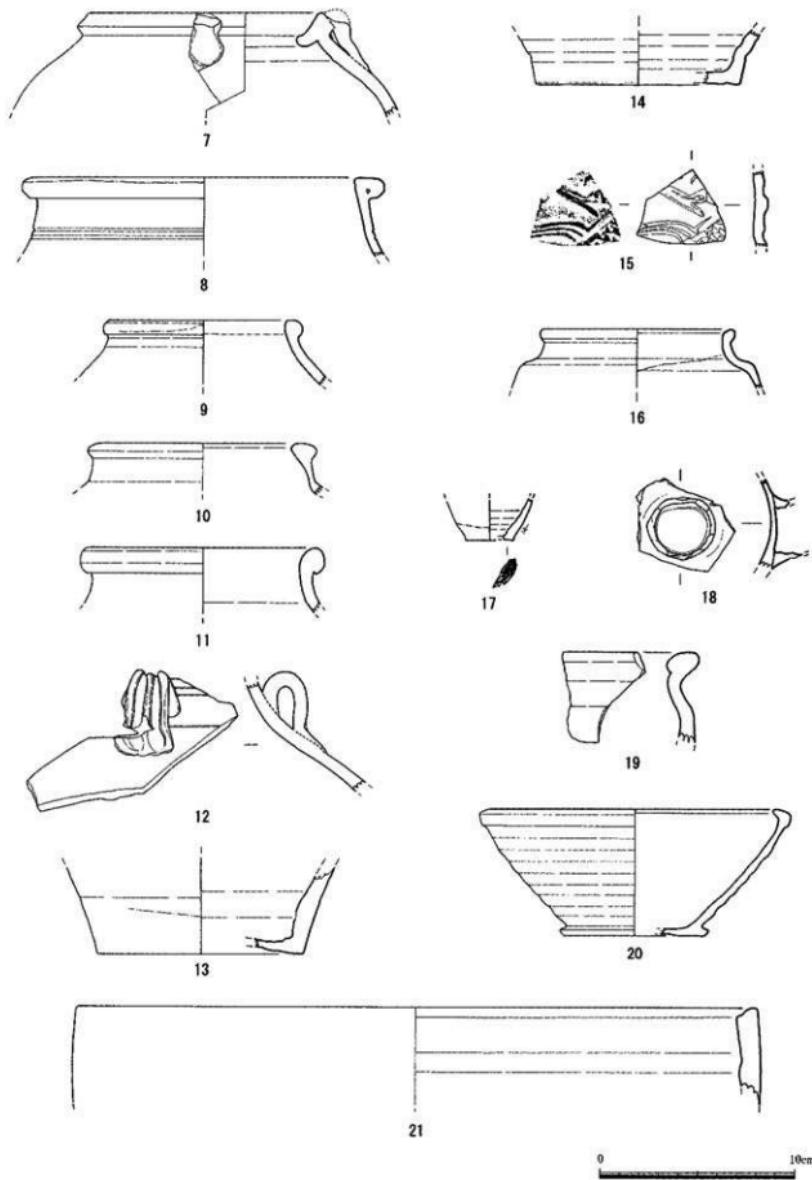


0 10cm

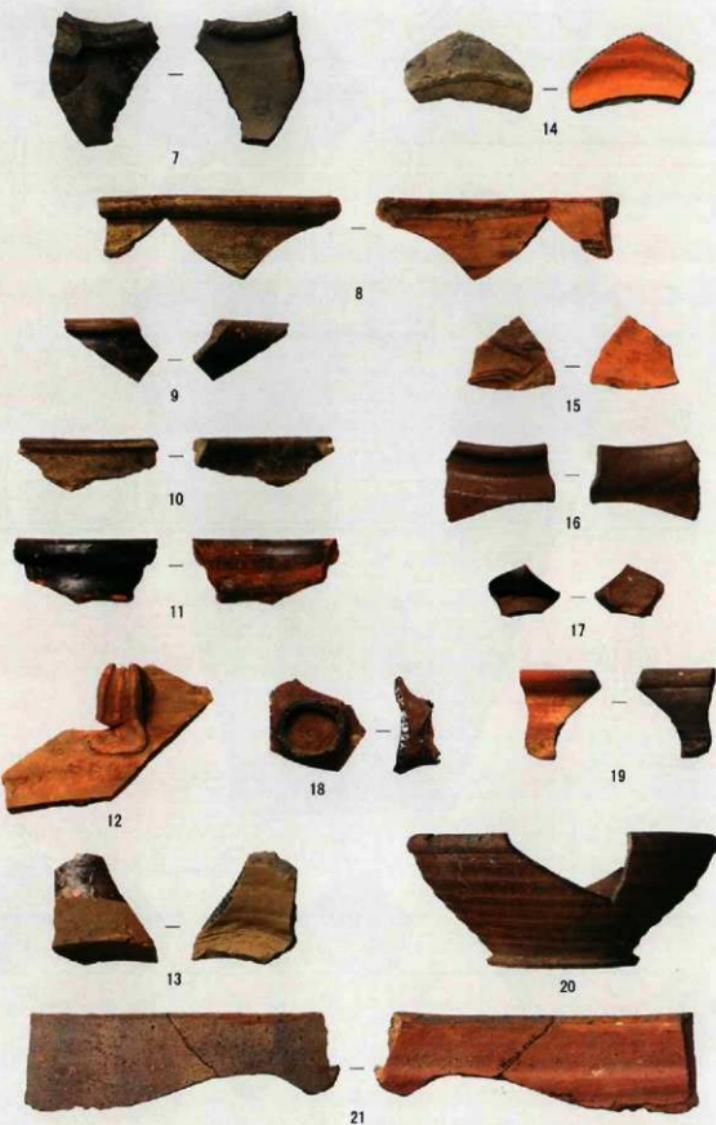
第54図 中国産陶磁器・土器 26(褐釉陶器 1)



图版 26 中国古陶磁器·土器 26 (褐釉陶器 1)



第 55 図 中国産陶磁器・土器 27 (褐釉陶器 2, 無釉陶器)



図版 27 中国産陶磁器・土器 27(褐釉陶器 2, 無釉陶器)

⑥その他の陶磁器・土器

(1) 色絵（第56図1～16）

当該資料は五彩と粉彩をまとめたもので、総数28点出土している。器種は碗（1～10）・小碗（11）・皿（12・13）・盤（14）・小皿（15・16）などが確認されている。年代・窯跡・製作技術から細分が可能である。

(2) 泉州窯系器（第56図17・18）

皿が総数6点出土している。口縁形態から端反のA類（17）と、内轉するB類（18）に大別される。

(3) 琉璃釉（第56図19・20、第57図21～32）

総数56点出土しており、碗（^{19～21}_{28, 31}）・小碗（22～25）・小杯（26・27）・瓶（29・30）・壺（32）など様々な器種が確認されている。年代・窯跡・製作技術から細分が可能である。

(4) 楢釉染付（第57図33～37）

総数21点出土している。33・34は端反口縁の小碗で、外面に白土の盛り上げ、外底に呉須で圓線を巡らせる。35～37は端反口縁の小杯で、内底と外底に呉須で文様及び銘款を施す。

(5) 青磁染付（第57図38）

総数5点出土している。38は端反口縁の小碗で、外面に青磁釉、内面と外底に呉須で文様及び銘款施す。

(6) 天目（第57図39～43）

喫茶用と考えられる碗が総数344点出土している。森本朝子氏の分類（森本1994）によると、39～42は高台際を水平に削る特徴からVII類に、43は丸碗の器形からIX類に相当する。

(7) 華南三彩（第58図44～51）

当該資料は三彩と綠釉をまとめたもので、総数18点出土している。三彩では鶴形や長胴丸壺形の水注（44～48）と平底の盤（49）、綠釉では花弁状に成形された皿（50）と外間に線彫文様を施す瓶（51）を図化した。

(8) 銀線釉（第58図52～54）

胎土の特徴が華南三彩に類似する軟質陶器で、酒会壺の蓋（52）と身（53・54）が総数13点出土している。

(9) 翡翠釉（第58図55・56）

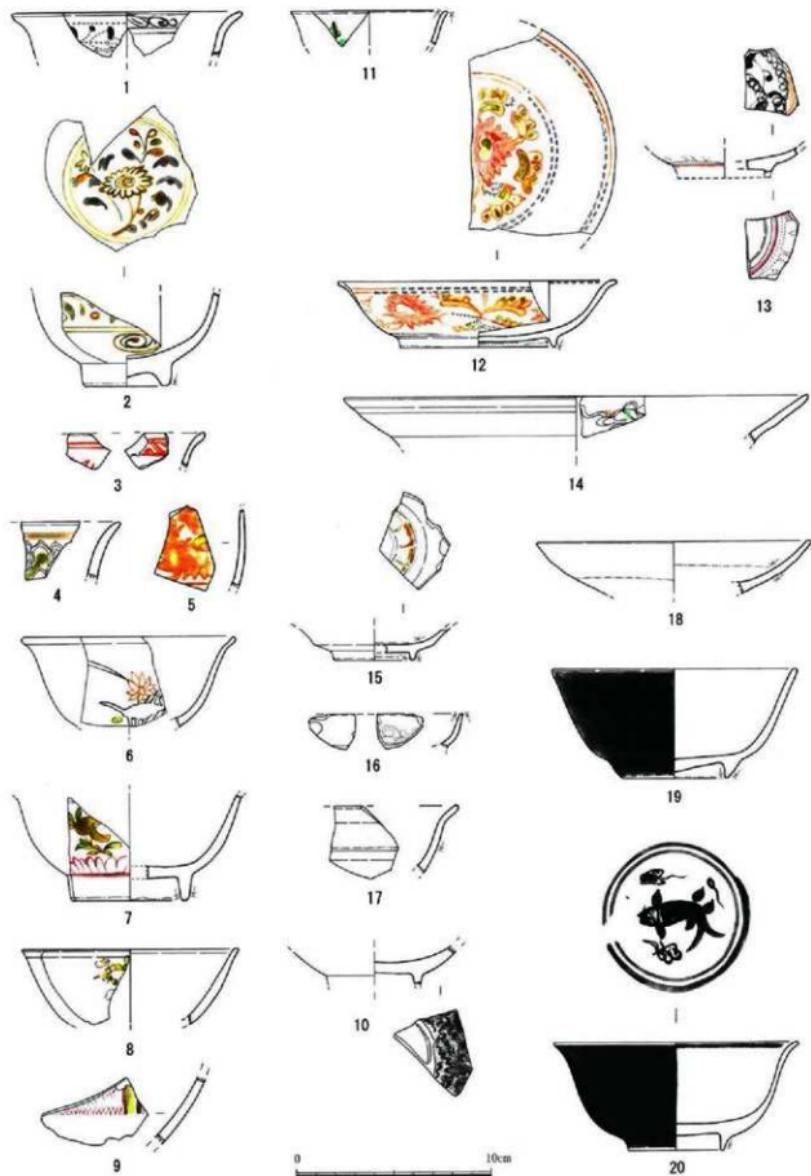
総数8点出土しており、その中から瓶（55）と筒形の三足香炉（56）を図化した。

(10) 鉄絵（第58図57・58）

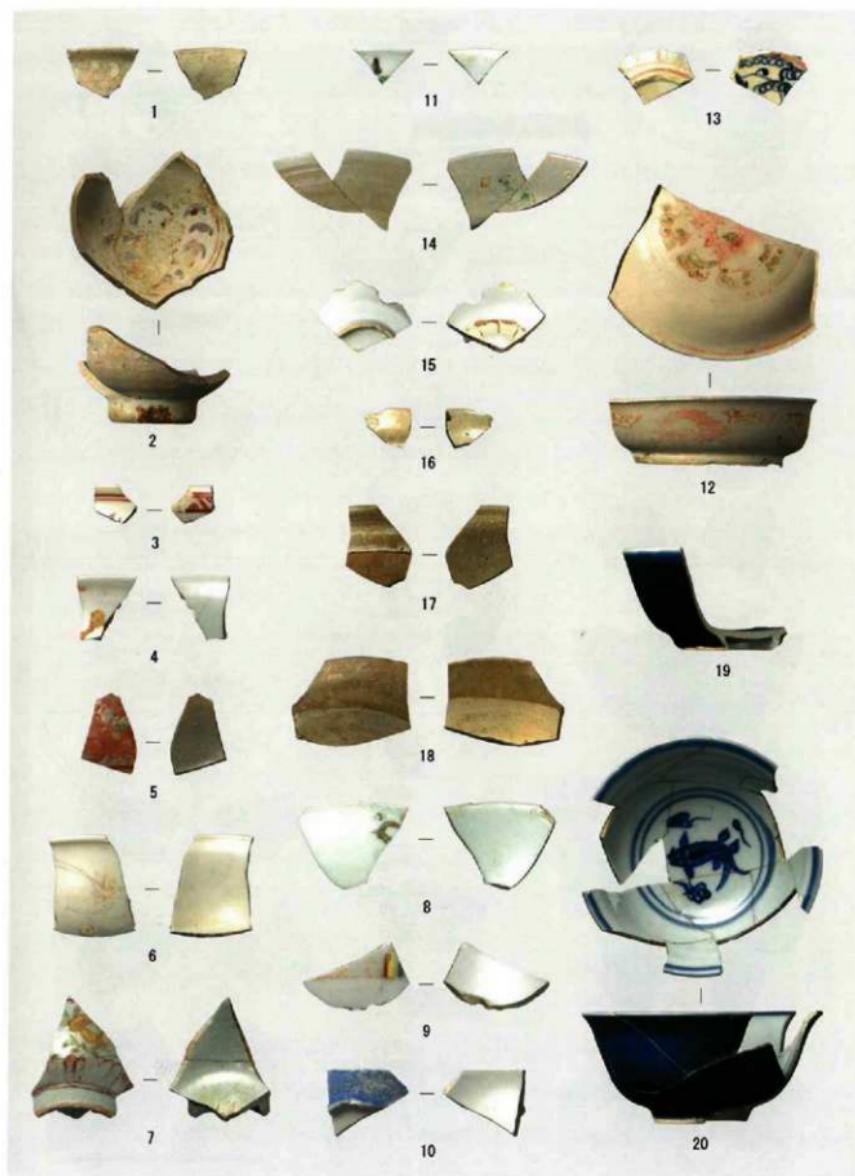
総数5点出土している。57・58はいずれも酒会壺と考えられる。

(11) 土器（第58図59）

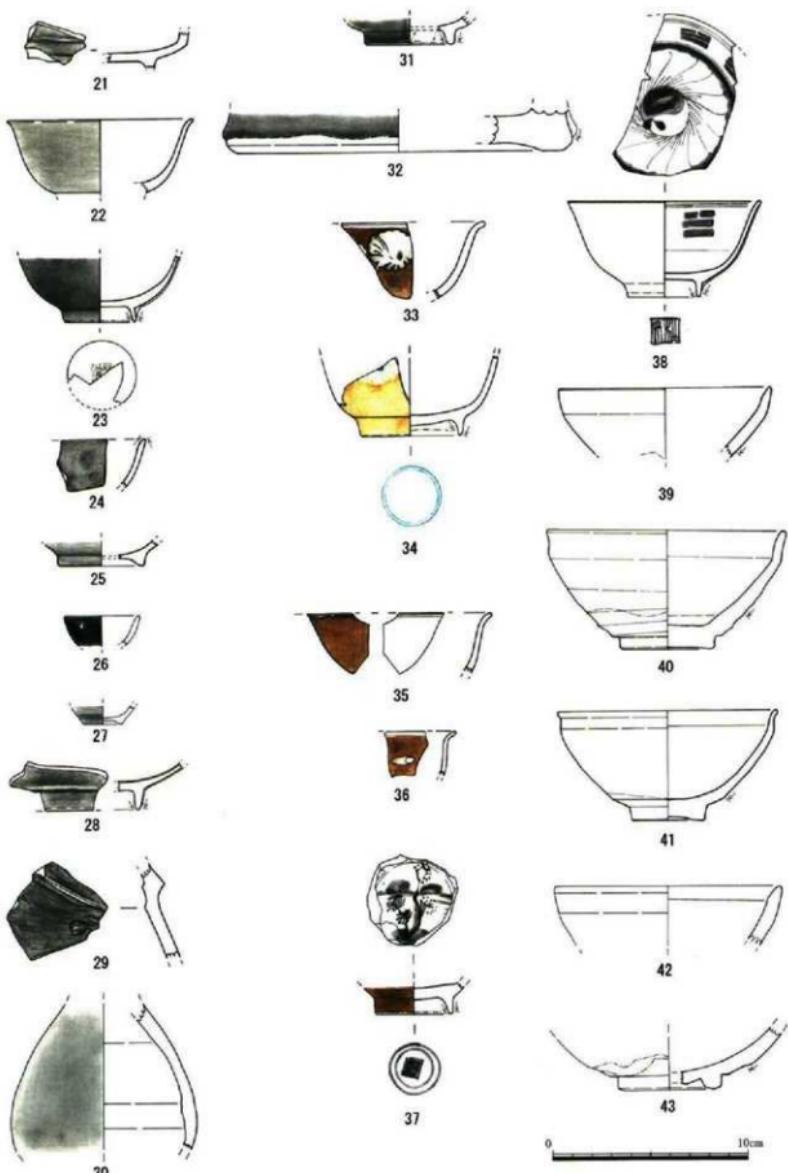
総数288点出土している。全て円盤形の板状製品で、楢釉陶器壺（第54図1・2）の蓋として使用されたと考えられる。産地については沖縄産との意見もあるが（沖縄県文化課1998a）、今回は当該項目で扱った。



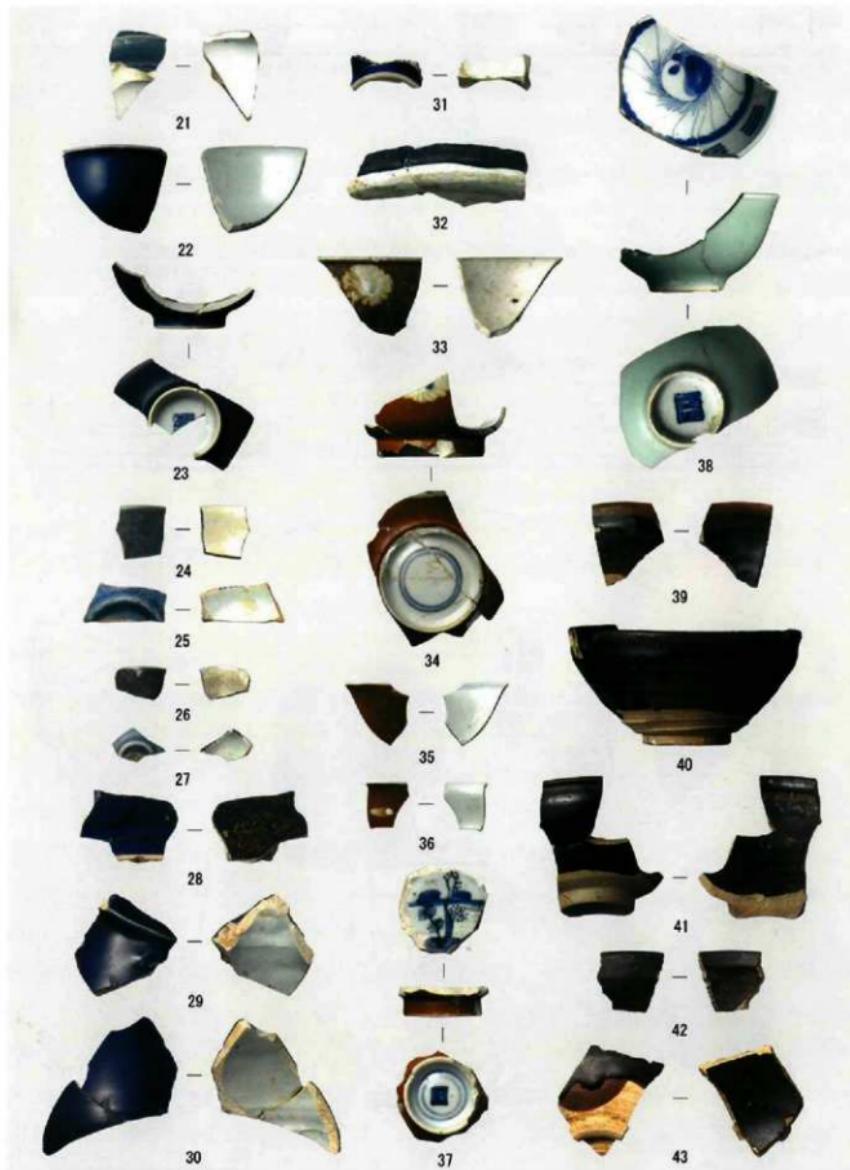
第 56 図 中国産陶磁器・土器 28 (その他の陶磁器・土器 1)



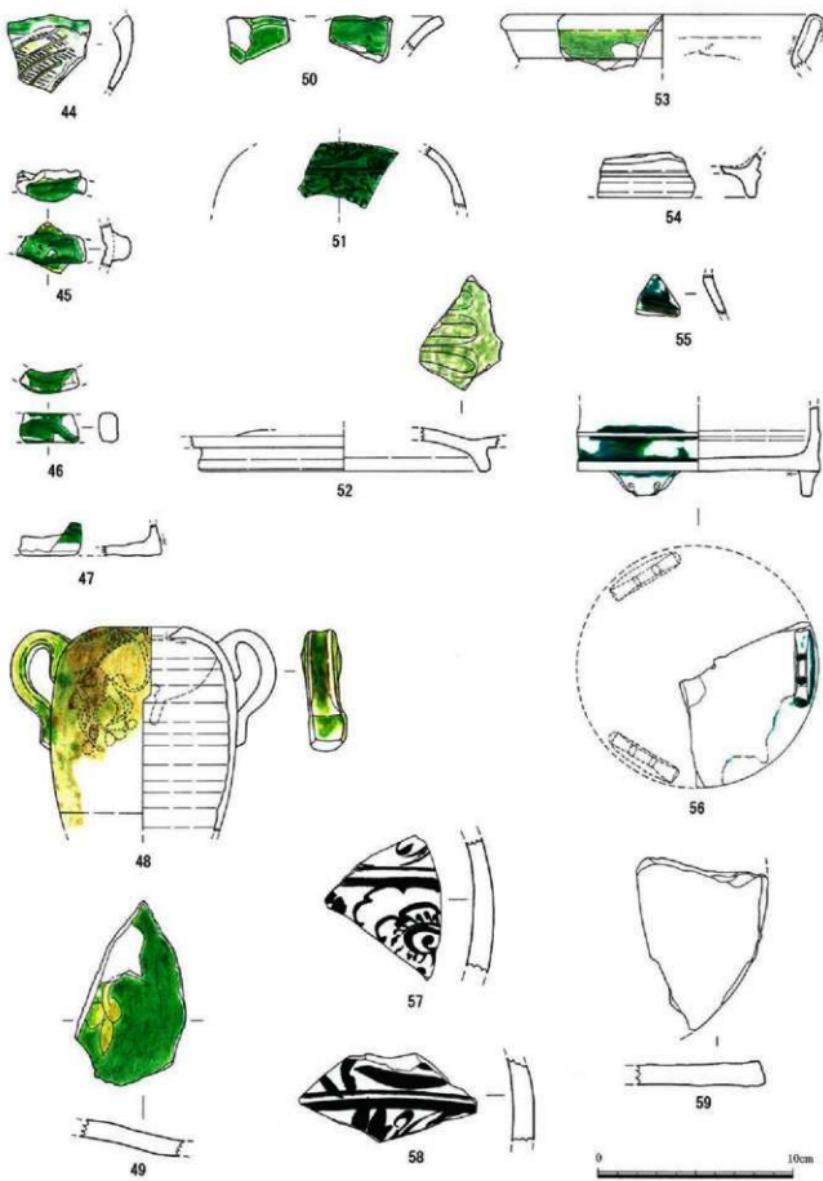
図版 28 中國産陶磁器・土器 28 (その他の陶磁器・土器 1)



第 57 図 中国産陶磁器・土器 29 (その他の陶磁器・土器 2)



図版 29 中国産陶磁器・土器 29 (その他の陶磁器・土器 2)



第58図 中国産陶磁器・土器30(その他の陶磁器・土器3)



図版 30 中國産陶磁器・土器 30 (その他の陶磁器・土器 3)

2 その他の輸入陶磁器・土器

ここでは中国産以外の輸入陶磁器類として、タイ・ベトナム・朝鮮で生産された製品を紹介する。以下、種類別に特徴的な資料を第59~62図に示し、個々の所見は観察表（第14、16、18表）に記す。

①タイ産陶磁器・土器

(1) 楔釉陶器

出土量は2,479点を数え、タイ産陶磁器類の中では最も多い。器種は壺・瓶・小壺が確認されている。

壺は口縁部がラッパ状に開き端部を断面T字状または玉縁状に肥厚するA類（1~10）と、口縁部の開きが弱く素地が粗いB類（12・13）に大別される。向井瓦氏の分類（向井2003）によると、前者はシーサッチャナライ長頸四耳壺または短頸四耳壺、後者はメナムノイ短頸II類四耳壺に相当する。14~16は器壁が薄い平底の瓶で、17は小壺の底部と考えられる。いずれもシーサッチャナライ窯産。

(2) 無釉陶器

器壁の厚い大形無耳壺と考えられる資料（18）が1点出土している。バンブーン窯産。

(3) 鉄絵

いわゆる玉壺春瓶に近い形態と考えられるもの（24）が1点出土している。シーサッチャナライ窯産。

(4) 土器

ハンネラとも称される硬質の上器で、蓋と身（壺か）が総数53点確認されているが、前者が出土量全体の8割強を占める。19~23は蓋甲がくぼみ底端部を上面に折り曲げる蓋で、中央に宝珠形の撮を有する。

②ベトナム産陶磁器

(1) 青磁

体部が斜上方に開き、外面に錦運弁文を施す碗（25）が1点得られている。

(2) 鉄絵

3点出土しており、うち動物を象ったと思われる水注（26）と、置物の台座と考えられるもの（27）を図化した。

(3) 花青

総数10点で、器種は碗・壺・水注・瓶が確認されている。28~30は端反口縁の碗で、外面に吳須と鉄絵で文様を描く。西村昌也氏・西野範子氏の分類（西村・西野2005）によると断面扁平形トチンB-2類に相当する。31は型抜き後に貼り合わせて成形した龍形水注で、32は把手を持たない小壺と考えられる。

(4) 色絵

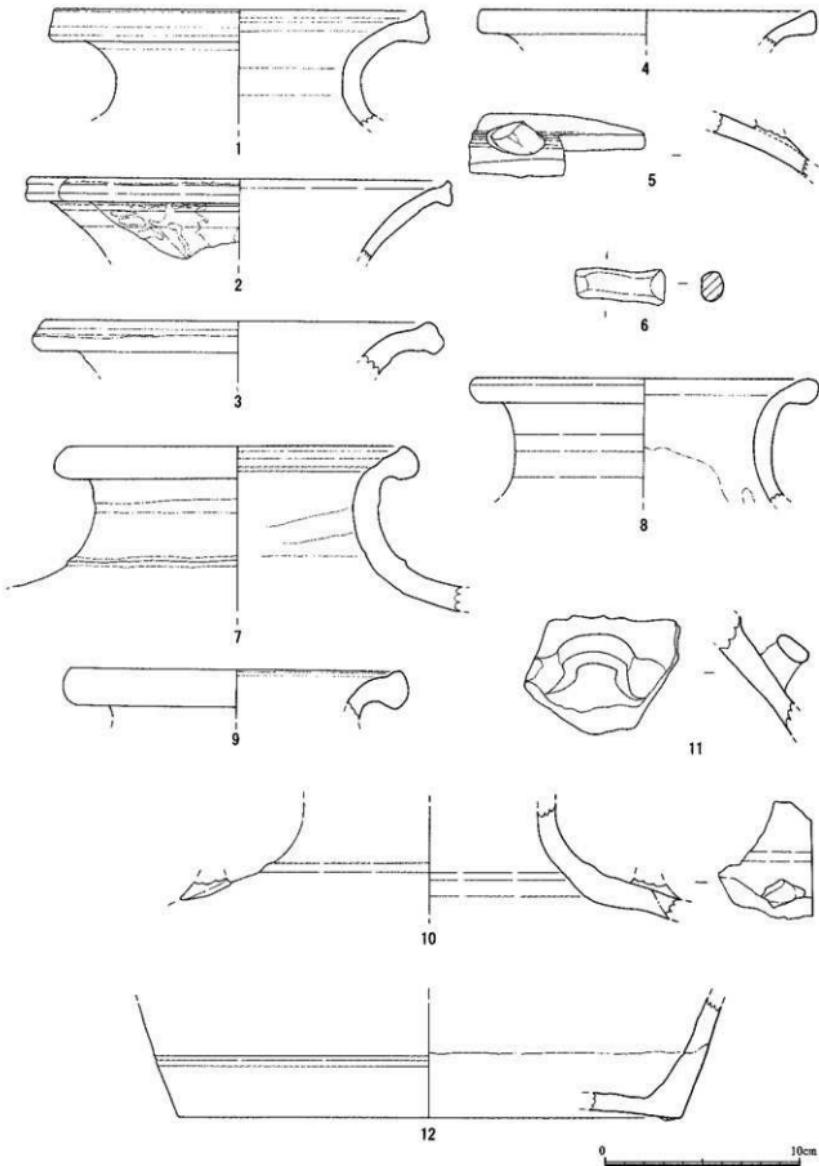
4点出土しており、その中から器壁の薄い小壺（33）を図化した。同遺跡の御内原北地区（沖縄県埋文2010・2013c）で出土した薄手の白磁に類似する資料とみられる。

③朝鮮産陶磁器

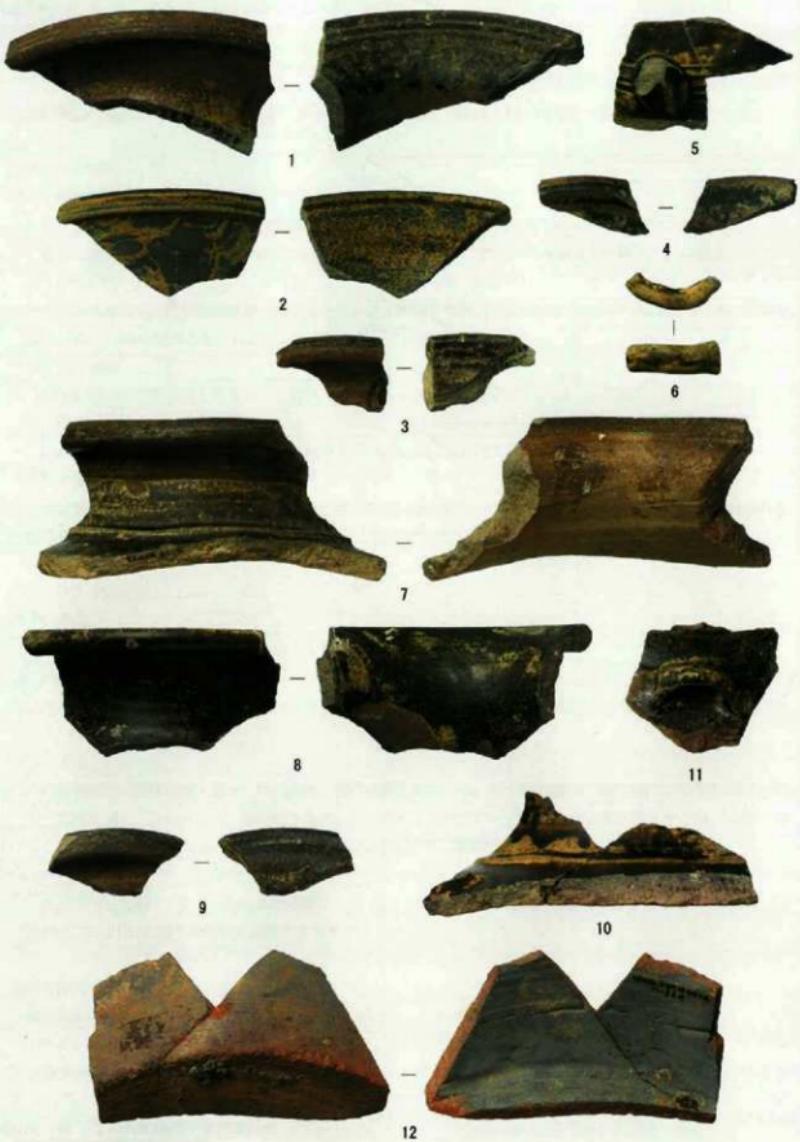
象嵌青磁のみが総数66点出土しており、器種は碗・皿・瓶が確認されている。碗は端反口縁（34）

と直口口縁（35）に大別され、皿は器高が低く直口口縁を呈する（36~43, 50）。瓶は梅瓶（53）

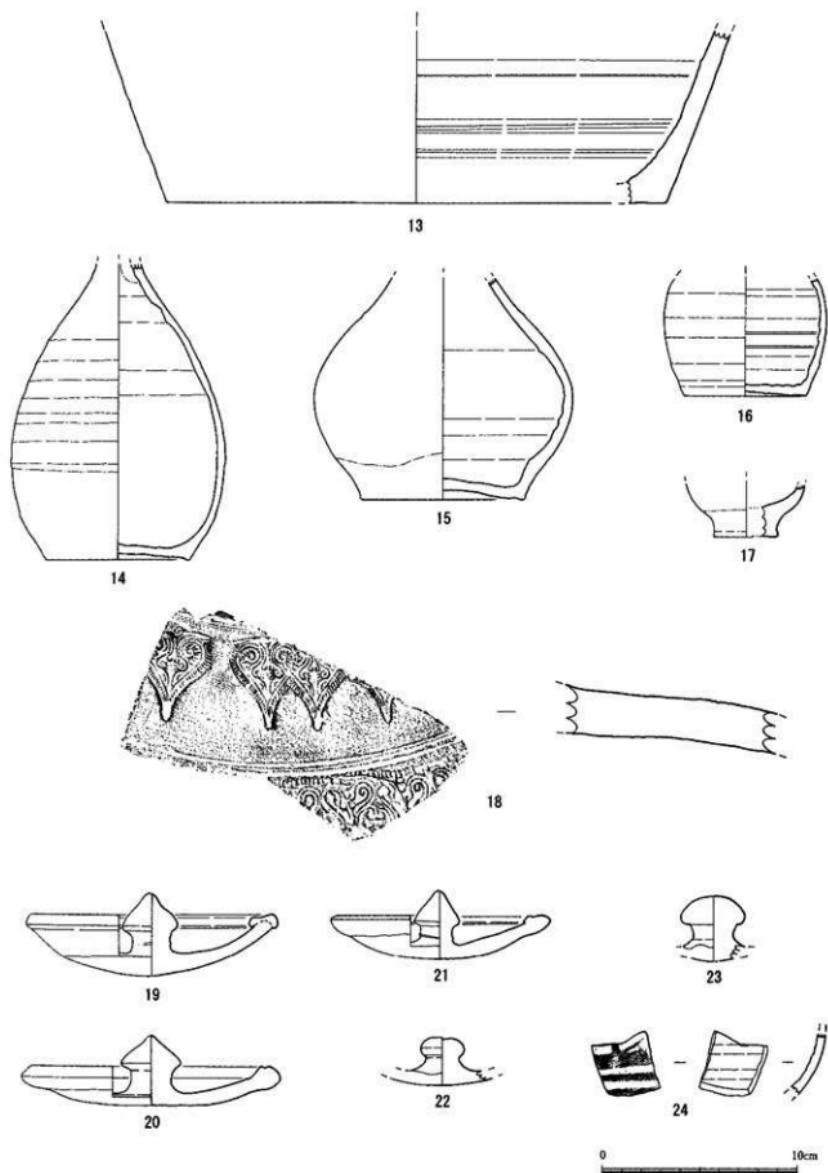
と玉壺春瓶に近い形態のもの（54）が得られている。森本朝子氏・片山まひ氏の分類（森本・片山2000）によると、いずれもV-1類または2類に相当する。また今回は参考資料として、かつて手塚直樹氏が報告した同地区採集の碗（52・手塚1980）も再録した。



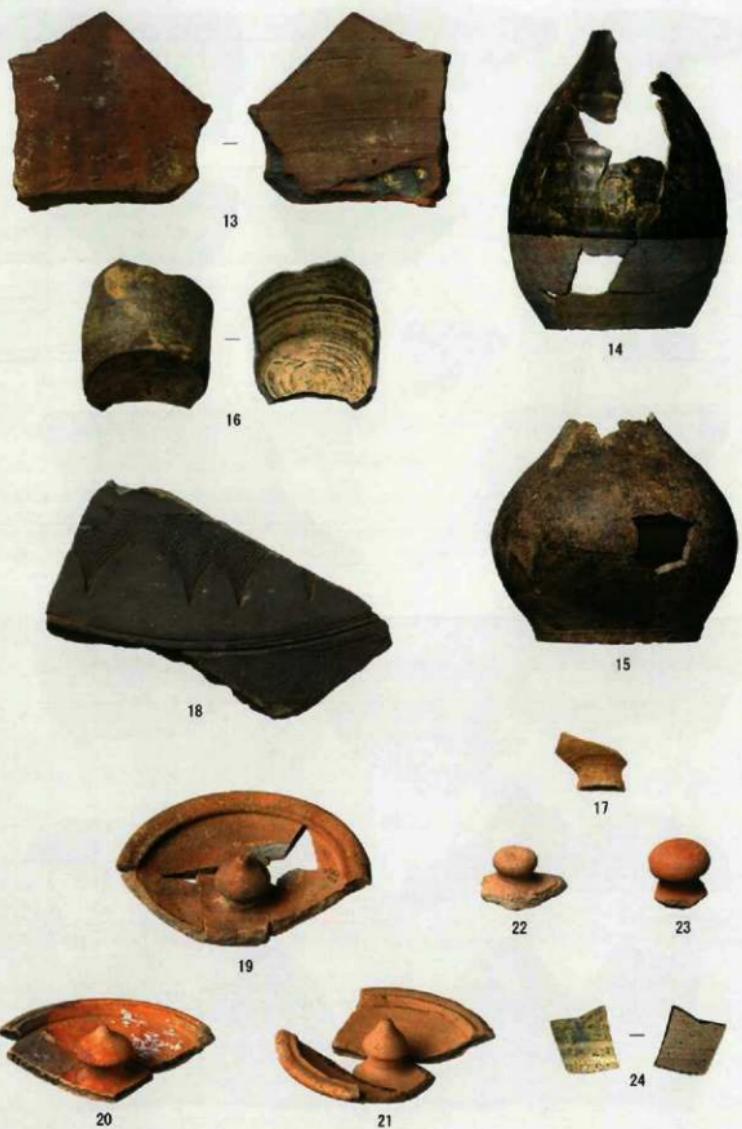
第 59 図 その他の輸入陶磁器 1 (タイ産陶磁器・土器 1)



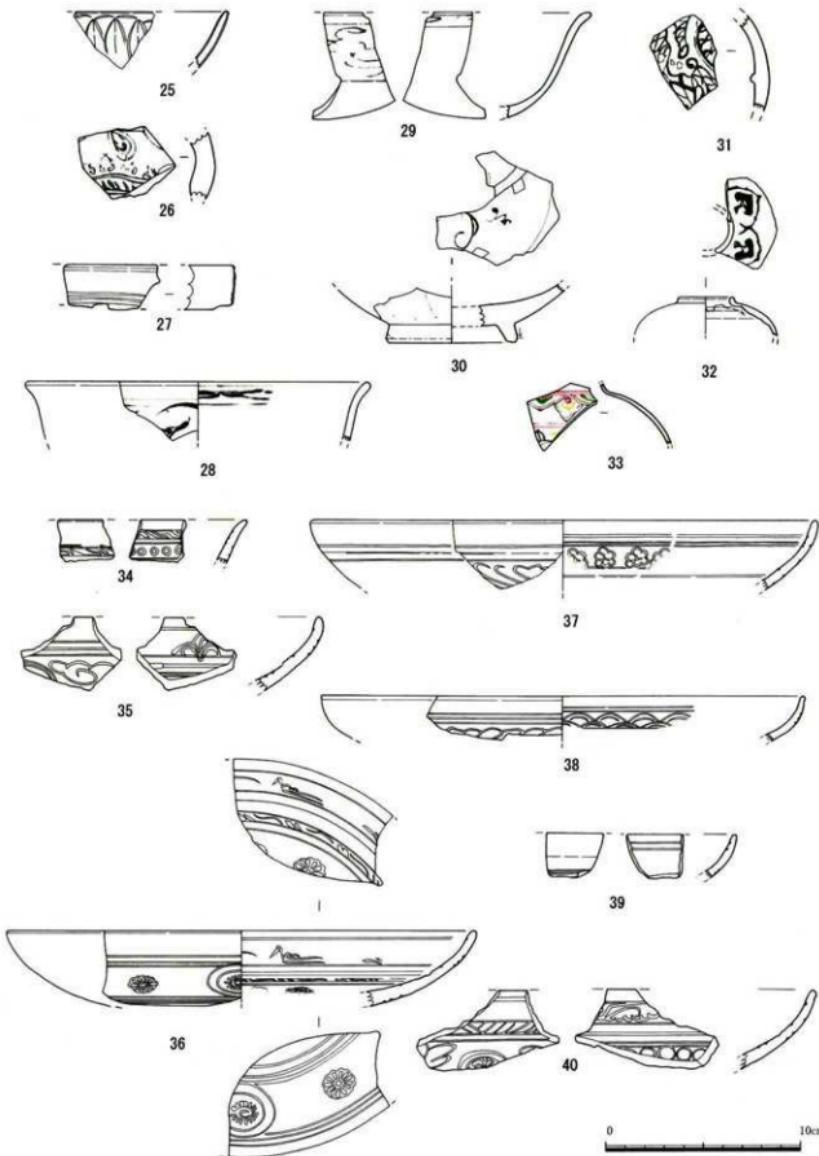
図版 31 その他の輸入陶磁器 1(タイ産陶磁器・土器 1)



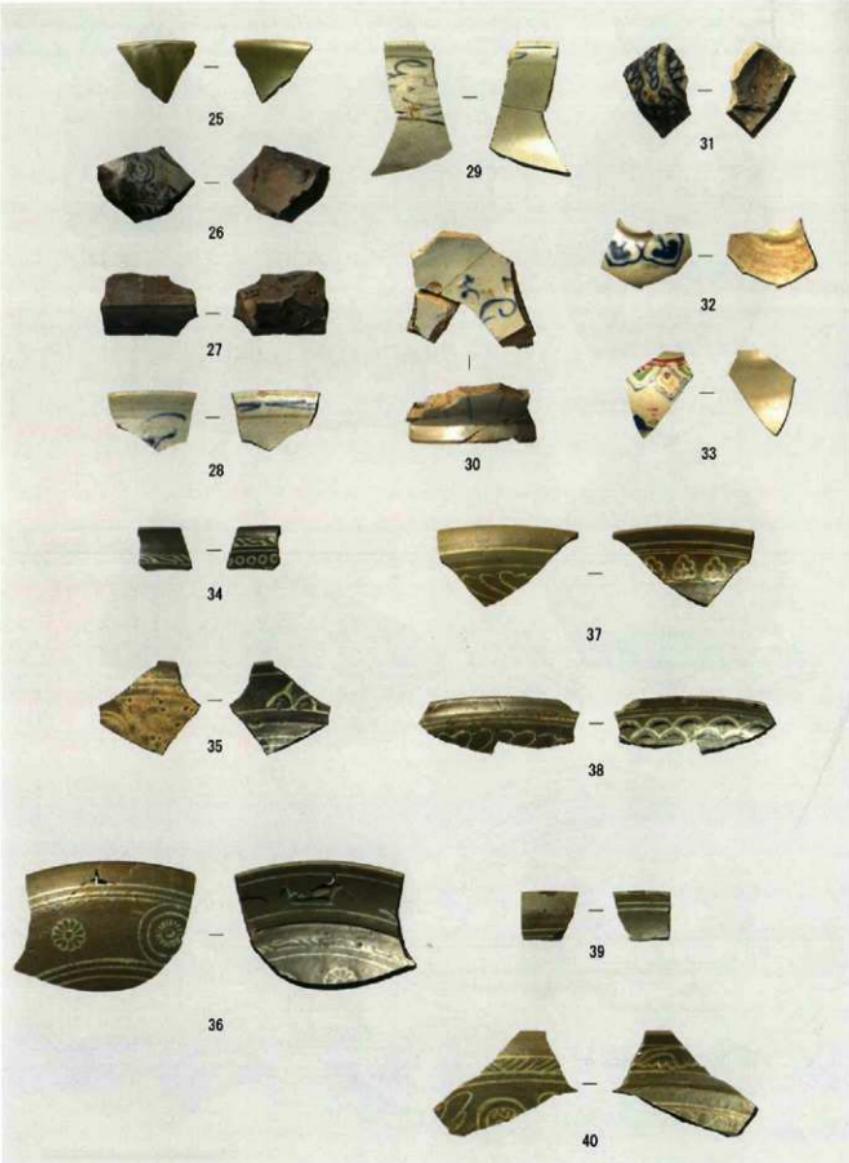
第 60 図 その他の輸入陶磁器 2 (タイ産陶磁器・土器 2)



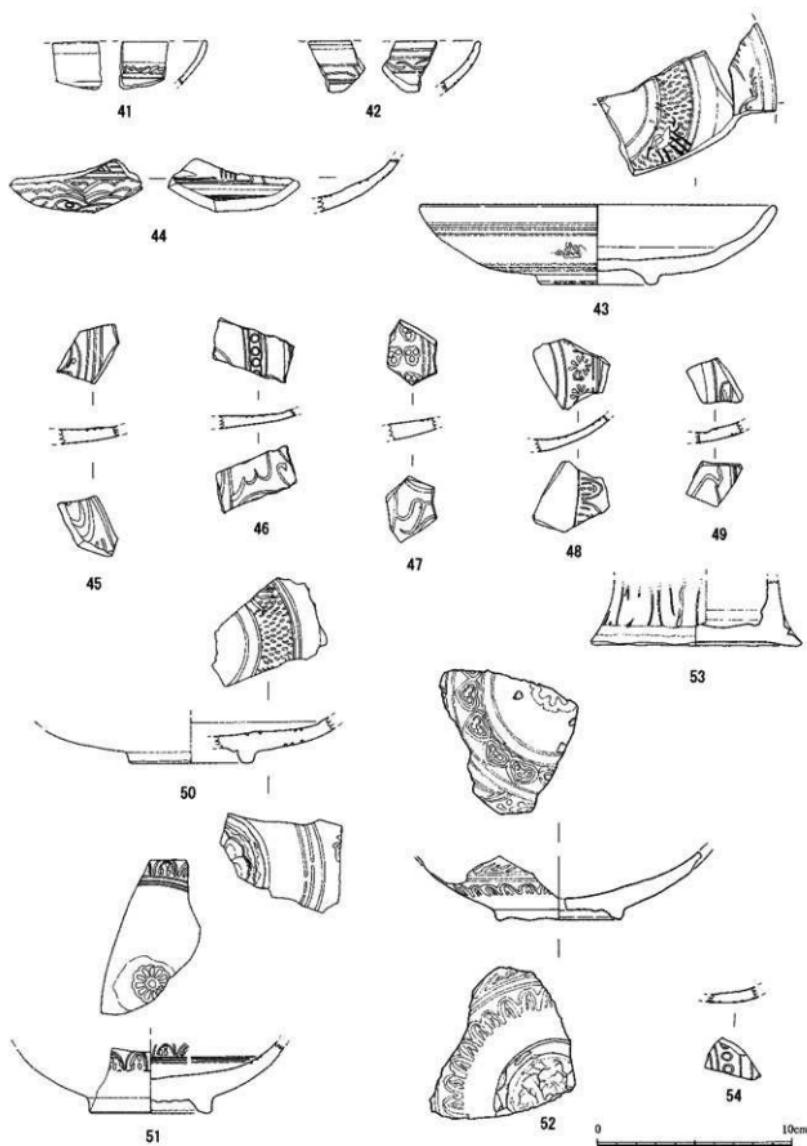
図版 32 その他の輸入陶磁器 2 (タイ産陶磁器・土器 2)



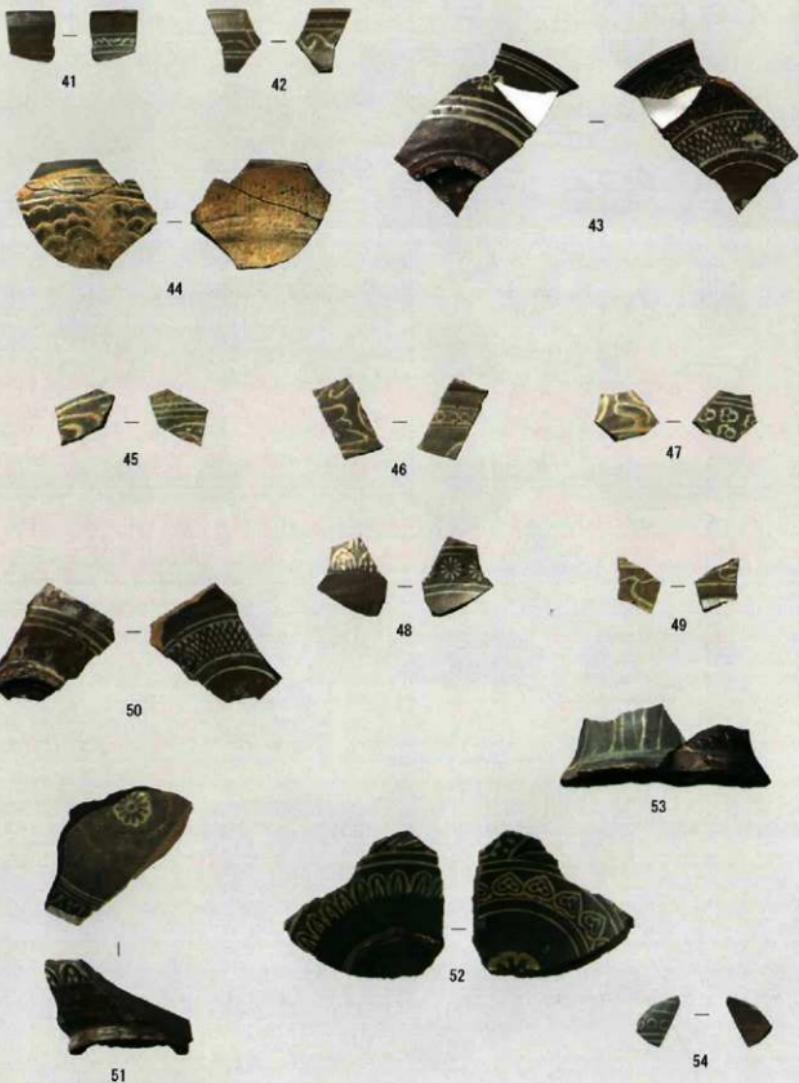
第 61 図 その他の輸入陶磁器 3 (ベトナム産陶磁器, 朝鮮産陶磁器 1)



図版 33 その他の輸入陶磁器 3 (ベトナム産陶磁器、朝鮮産陶磁器 1)



第62図 その他の輸入陶磁器 4(朝鮮産陶磁器 2) No.52(手塚氏報告資料)は集計には含まれない。



図版 34 その他の輸入陶磁器 4 (朝鮮産陶磁器 2)

3 本土産陶磁器

総数3,005点出土している(第19表)。年代は15~20世紀と幅広く、产地も備前・肥前・薩摩・京または信楽系・瀬戸及び美濃などバリエーションに富む。年代別の傾向をみると、15~16世紀(グスク時代)は備前、17~19世紀(近世)は肥前・薩摩・京または信楽系、19~20世紀(近代)は肥前・瀬戸及び美濃の製品がそれぞれ優位となる。以下、特徴的な資料を図化するとともにその概要を述べ、個々の詳細は第20表に譲る。

①磁器

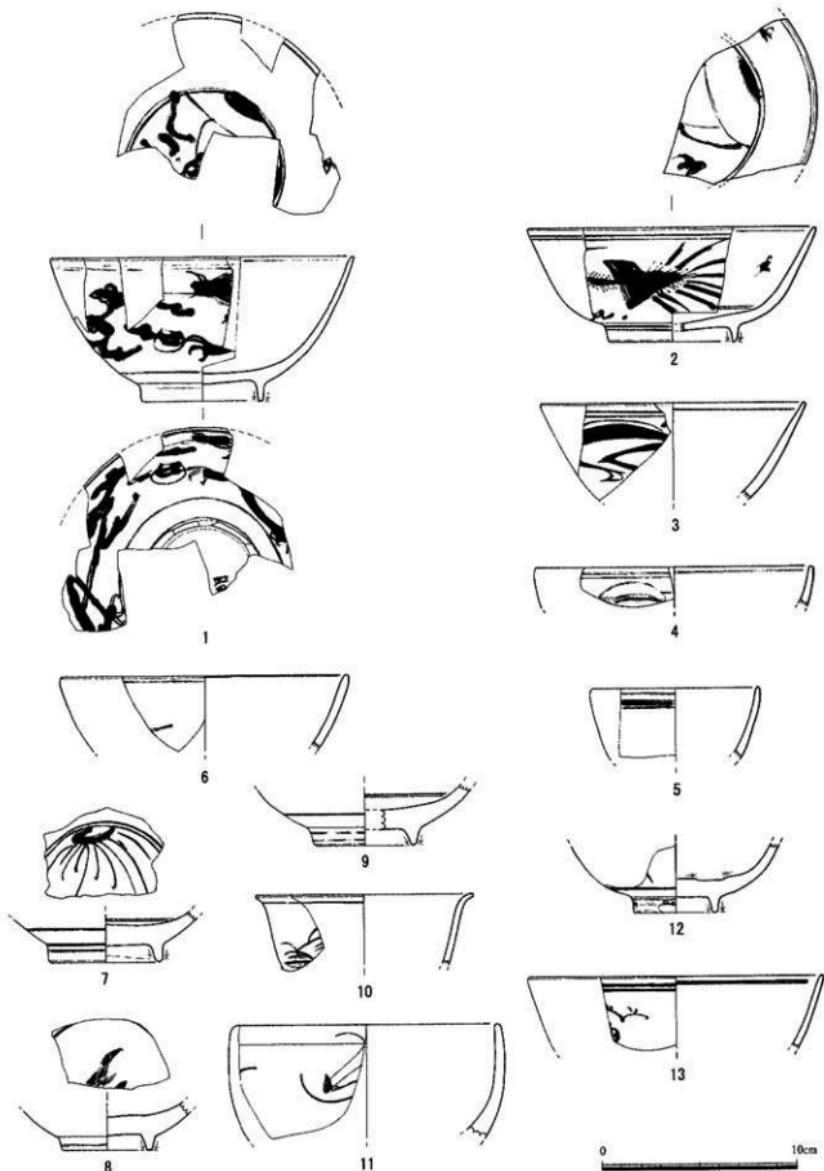
総数2,472点出土しており、年代でみると近世と近代に大別される。近世の製品は染付(1~34)・青磁(35)・色絵(36~38)が確認されており、ほとんどが肥前産と考えられる。

染付は碗・小碗・小杯・皿・蓋・瓶などの器種がみられる。碗は直口口縁で疊付を釉剥ぎするもの(1~9、13)、同様の器形で内底と疊付を釉剥ぎするもの(12)、端反口縁のもの(10)がある。小碗は口縁部が直口するもの(14~15、17~19)と鼈口状を呈するもの(16、20)に大別され、小杯は端反口縁のもの(23)が認められる。皿は直口口縁で内底を蛇の目状に釉剥ぎするもの(24~25)と、同様の器形で蛇の目凹形高台を有するもの(26)など様々である。
瓶はいわゆるラッキョウ形の徳利(31~32)と、底部からやや直線的に立ち上がるものの(33)、胸部が球形に張るもの(34)がみられる。青磁はラッキョウ形徳利の底部と考えられるもの(35)が得られている。色絵は碗に対応する蓋(36~37)と瓶(38)が確認されている。36は中国産の可能性もあるが、今回は本項で扱う。

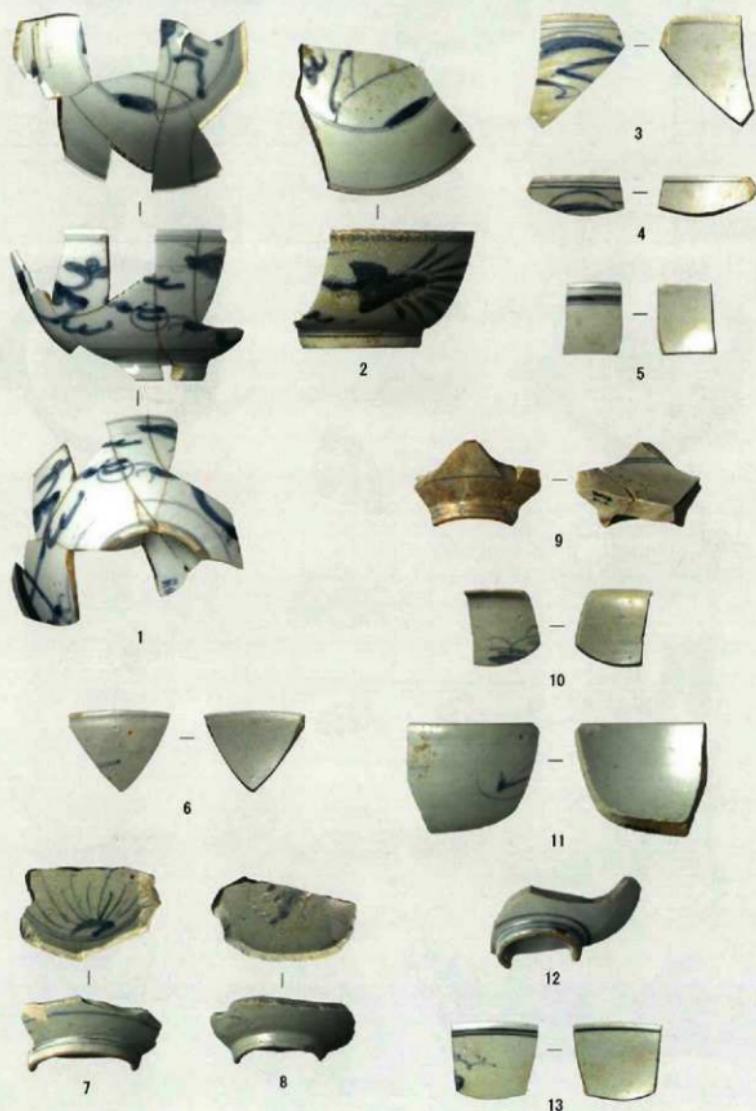
近代の製品は染付と白磁で、器種は碗・小碗・小杯・急須・皿・大皿・鉢・筒物・火入・瓶などが確認されている。碗は腰部の張りが強い直口口縁のもの(39~43)と、底部から斜め上方に広がるもの(44~45)がある。小碗は体部が半球形のもの(46~49)と筒状に立ち上がるもの(50)がみられ、小杯は端反口縁(51)を呈する。急須は胸部が球形をなすもの(52)と、底面を上げ底状態に成形するもの(53)がある。皿(55~57)と大皿(58)はいずれも器高が低く口縁部が直口するという類似の特徴を持つ。筒物は腰部に丸みを持つもの(60)と、腰部に稜を有する段重と考えられるもの(61)がある。62も類似の器形だが、内面が露胎となることから火入と判断した。63は平底の底部から筒状に立ち上がる瓶と考えられる。

②陶器

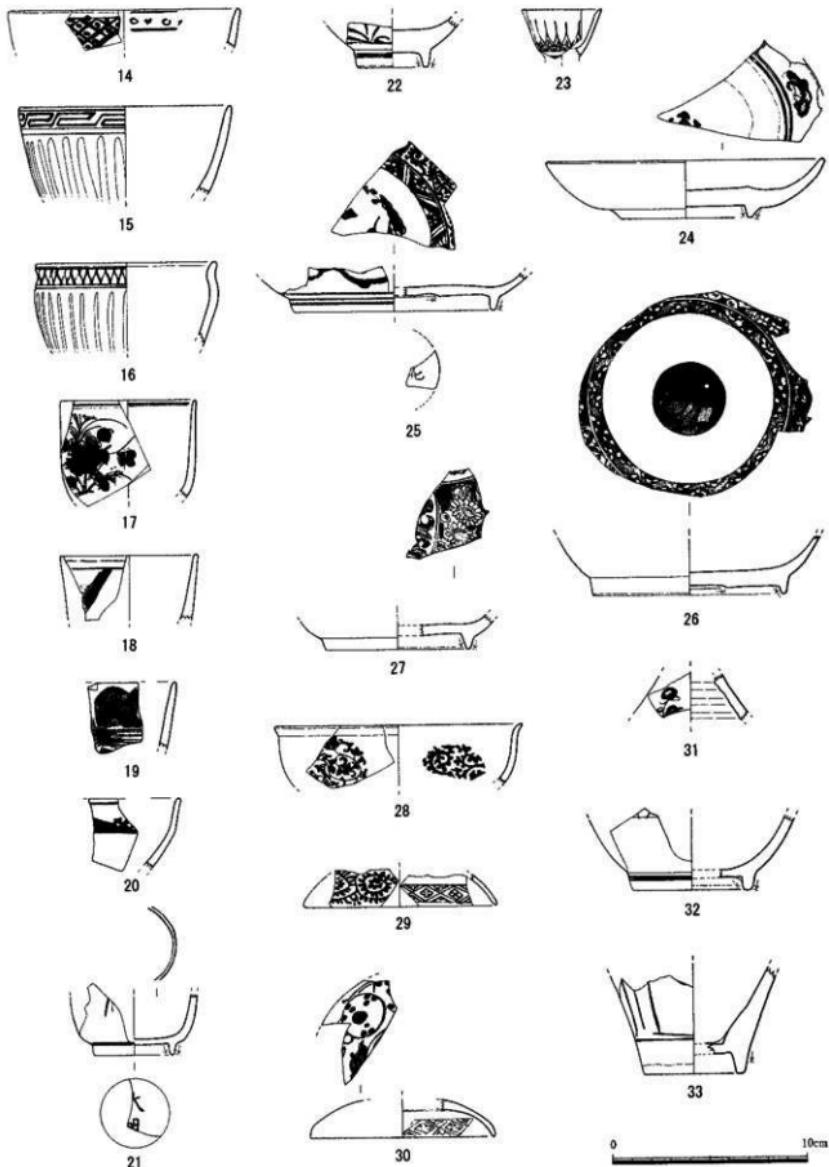
総数533点出土している。こちらも年代でみると近世と近代に大別され、碗・小碗・皿・大皿・擂鉢・鍋・急須・壺・壺・瓶などの器種が確認されている。碗は口縁部を鼈口状に捻り返すもの(64~65)、口縁部が直口する半球碗(66~71)、腰部に稜を持つもの(72~74)がみられる。これらの多くは器形の特徴から呪茶に用いられた可能性が高い。小碗は体部が半球形のもの(76~80)と腰部に稜を持ち体部が筒形を呈するもの(82)がある。皿は腰部に稜を持つもの(83)、直口口縁で内底を釉剥ぎするもの(84~85)、内底に上絞付を施すもの(86)、口縁部内面に稜を持ち鉄縁状に成形するもの(88)など様々な資料が認められる。大皿(90・91)は口縁部が鉄縁状を呈し、内面に白土の刷毛目装飾を施す。擂鉢(92)は口縁部を内側に折り曲げ外面下端が突出するもので、備前焼編年の中世4b期~5期(乗岡2005)に相当する。鍋は体部が球形を呈し口縁部を外側に折り曲げ、口縁部外面に紐状の把手を1対貼付する(93・94)。急須は体部が球形で最大径を胸部下位に持つもの(96~98)と、体部が算玉状を呈するもの(99)がみられる。壺は薄手で小振りのもの(102~103)と前者に比して厚手の製品(104~105)に大別される。いずれも内面に叩き成形の痕跡が残る。その他、ラッキョウ形徳利または玉壺春瓶に類する器形の瓶(108、113)や、小瓶もしくは小壺(107、109~111、114)など、近代の資料を中心に多様な形態がみられる。



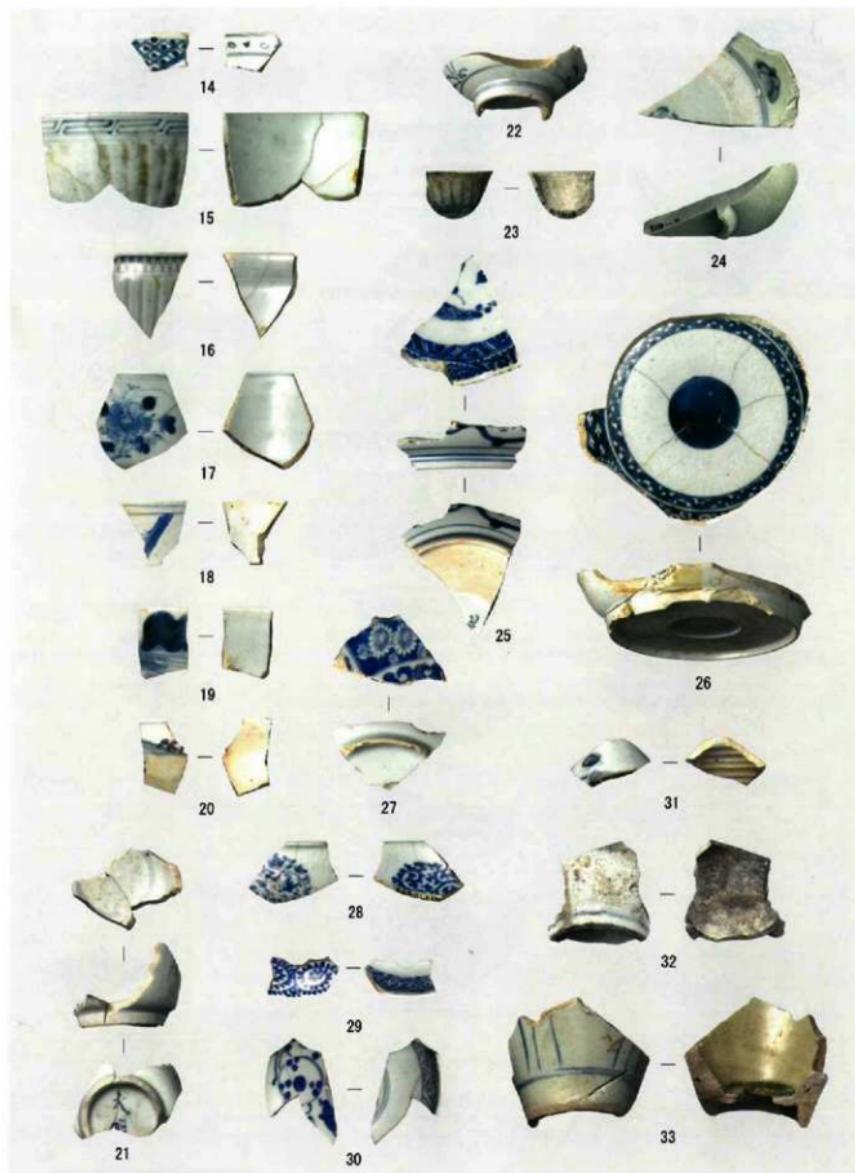
第63図 本土産陶磁器 1



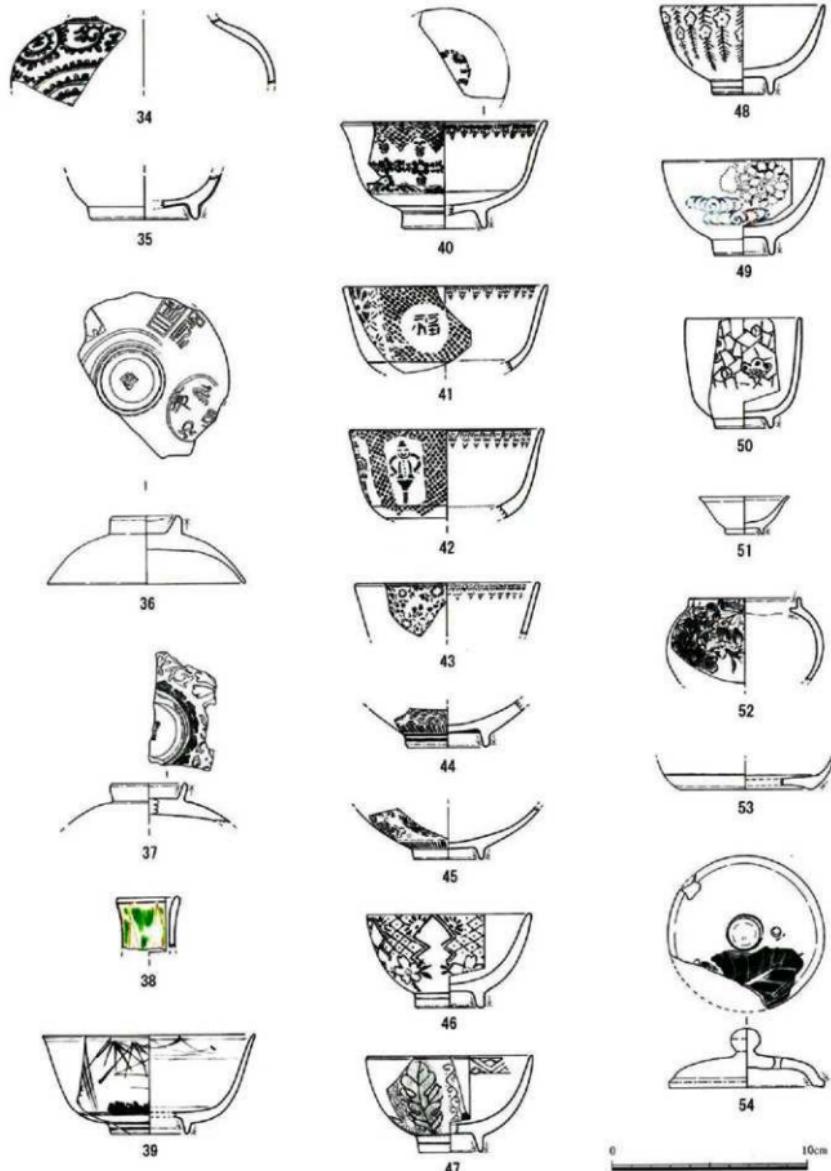
图版 35 本土产陶磁器 1



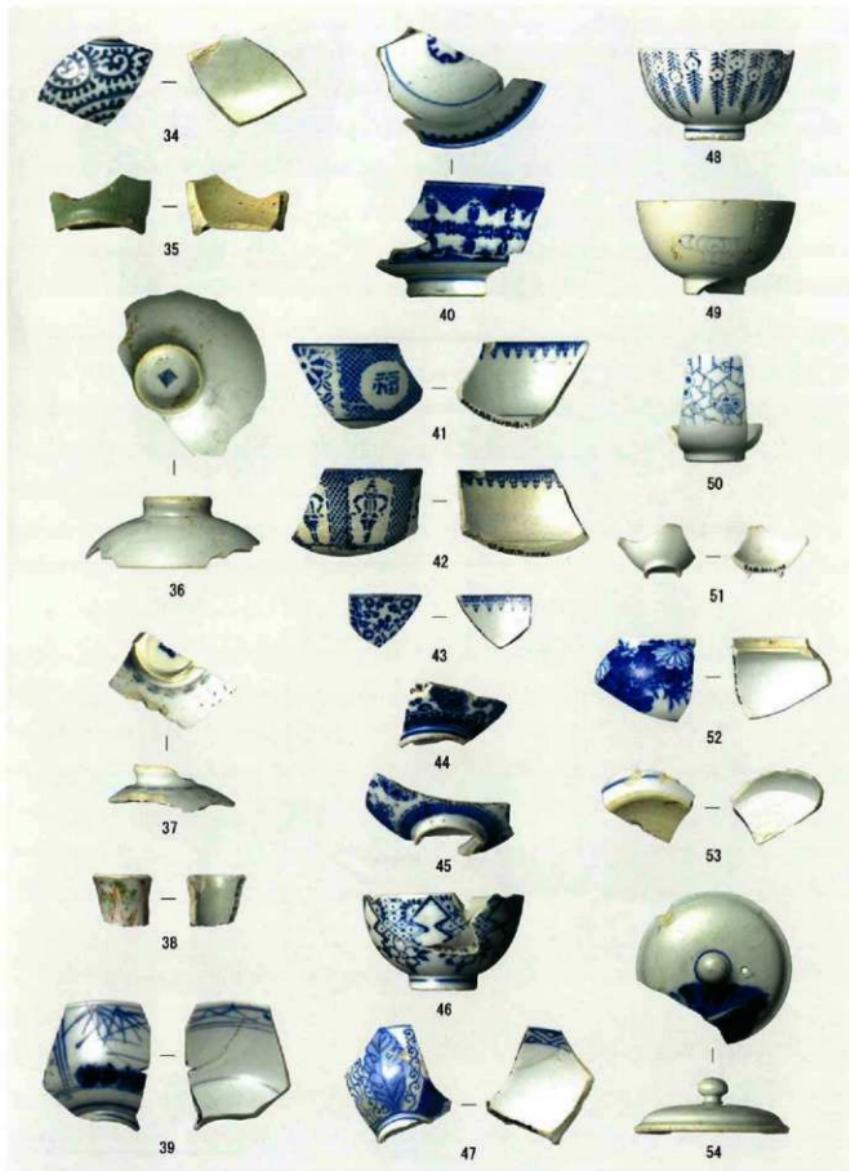
第64図 本土産陶磁器2



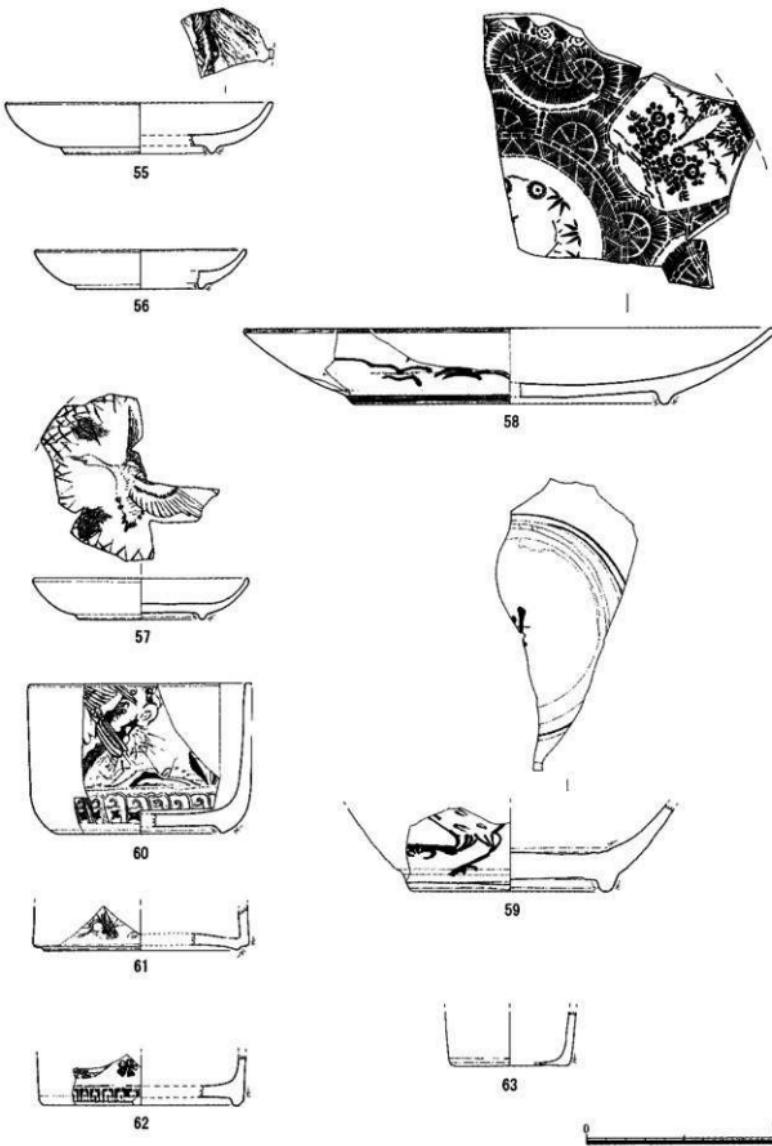
図版 36 本土産陶磁器 2



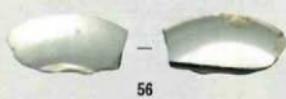
第65図 本土産陶磁器 3



図版 37 本土産陶磁器 3



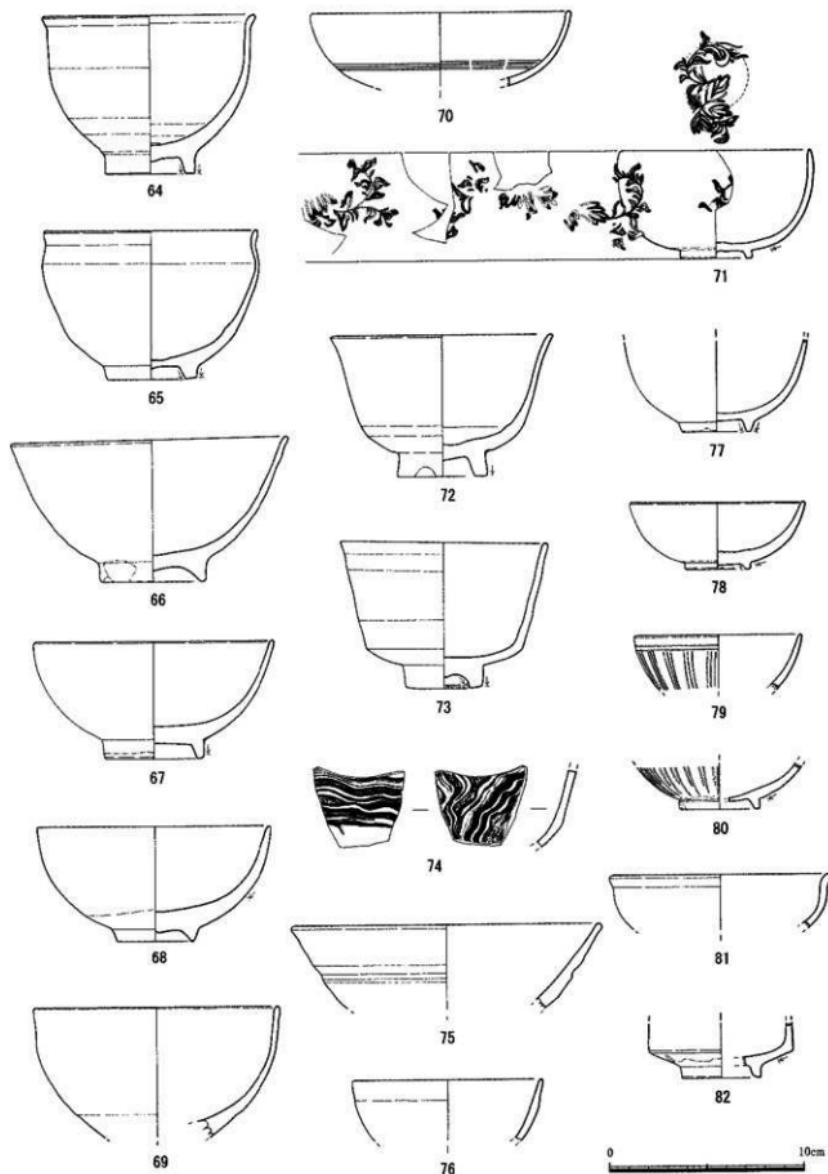
第 66 図 本土産陶磁器 4



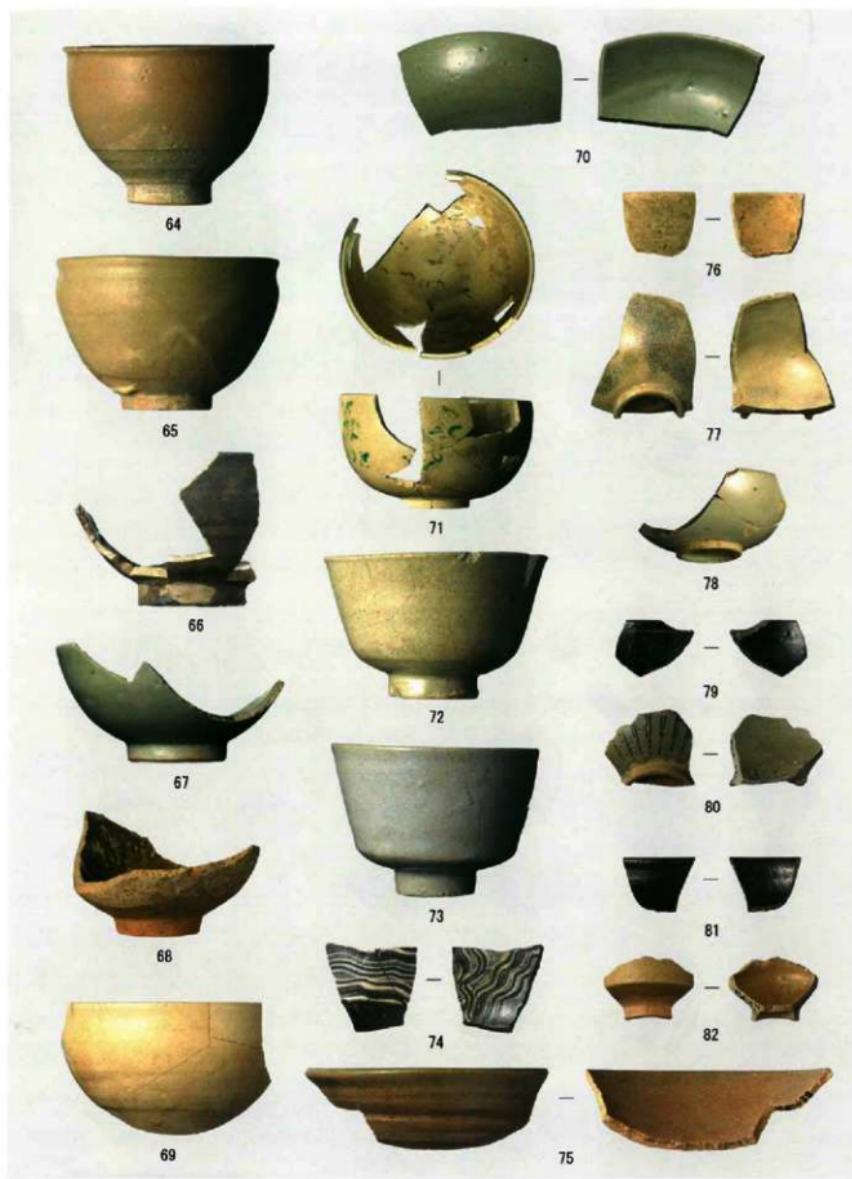
59



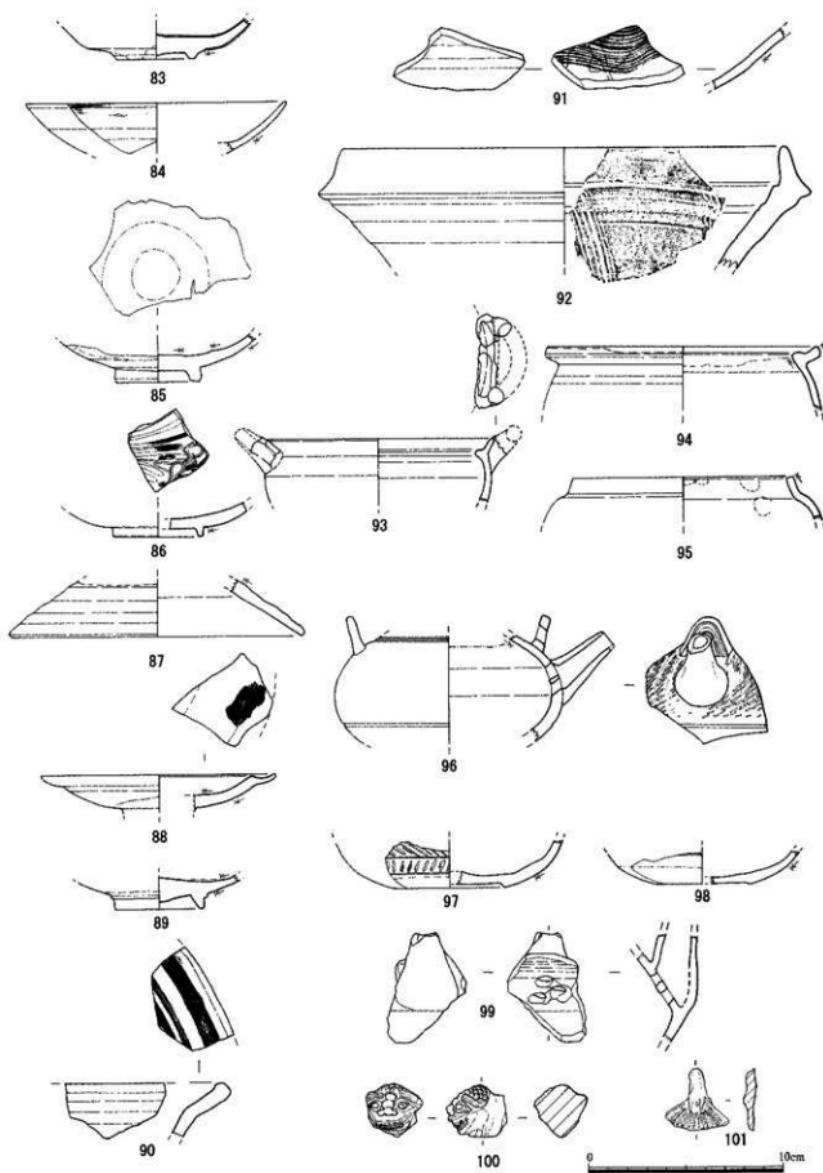
図版 38 本土産陶磁器 4



第67図 本土産陶磁器 5



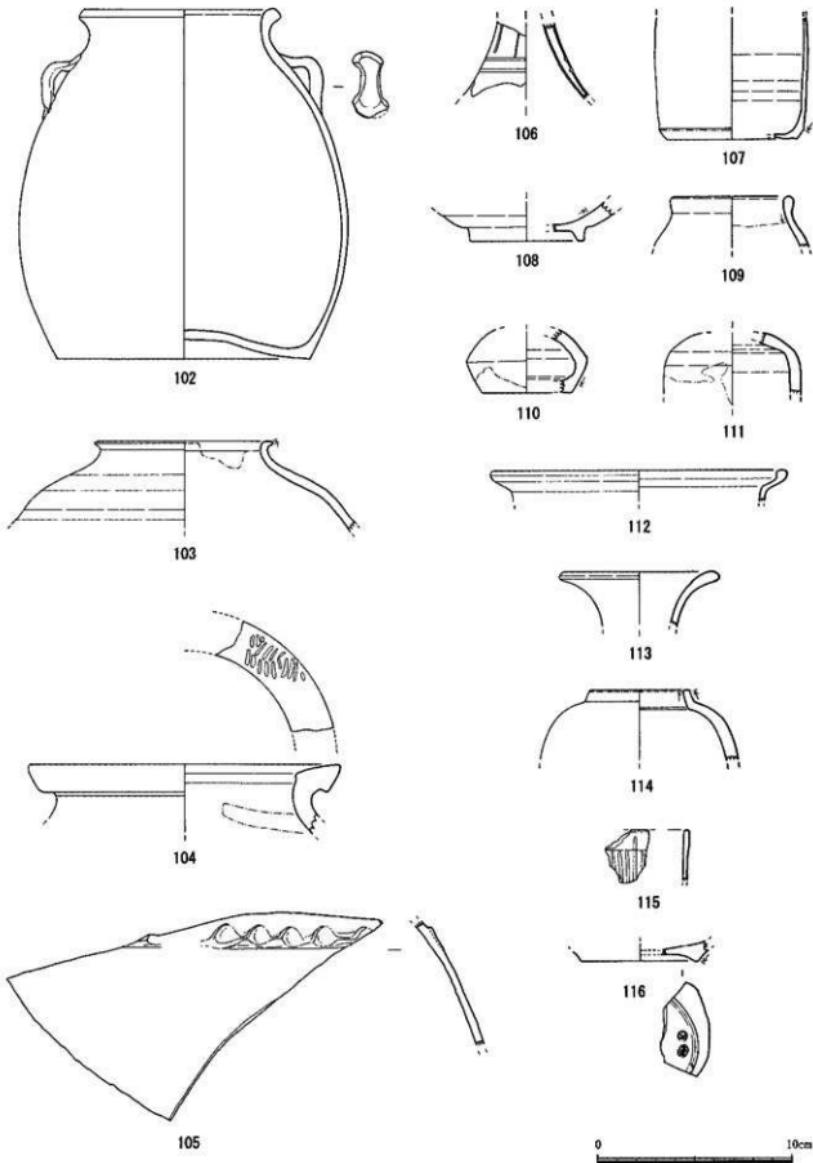
図版 39 本土産陶磁器 5



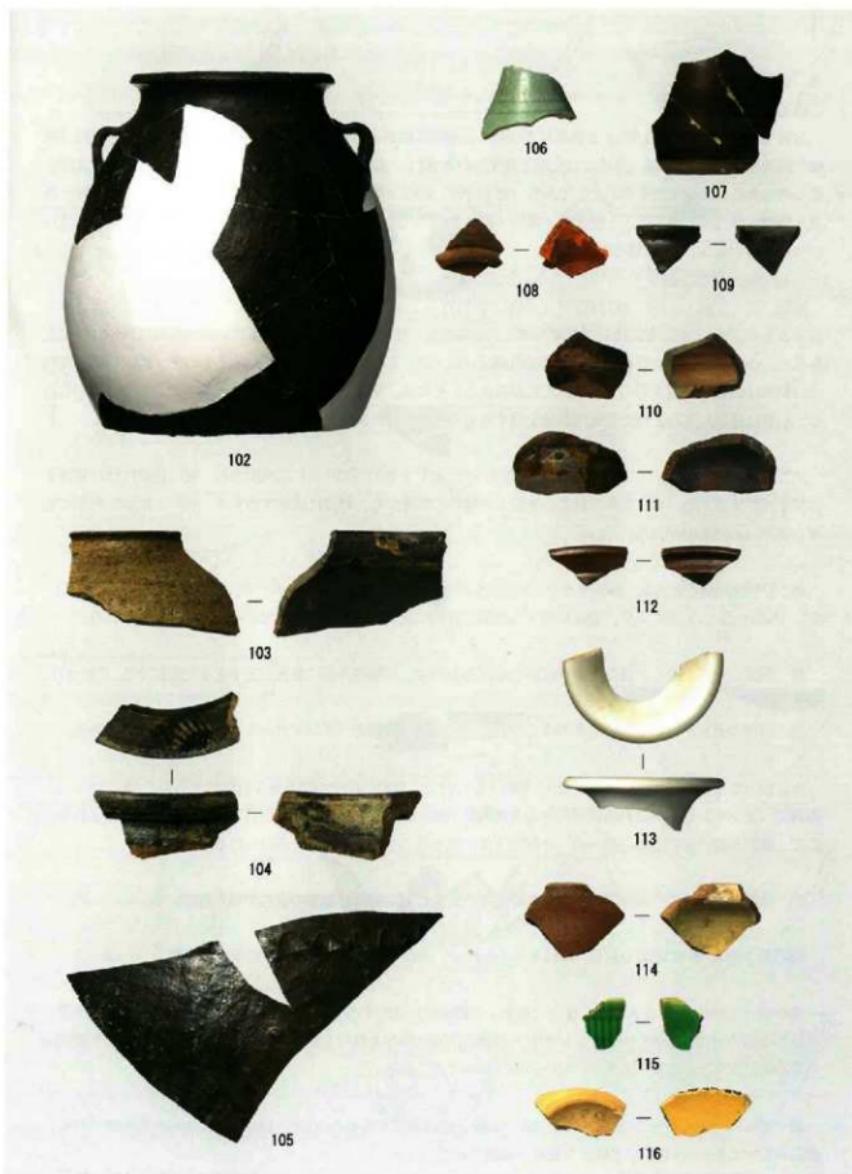
第 68 図 本土産陶磁器 6



図版 40 本土産陶磁器 6



第 69 図 本土産陶磁器 7



图版 41 本土产陶磁器 7

4 沖縄産陶器・土器

①施釉陶器

方言で「ジョウヤチ（上焼）」と称される一群で、器面に釉薬を塗布する製品を指す。釉薬には灰釉・鉄釉（黒釉や褐釉を含む）・透明釉（素地に白化粧を施すものを含む）・緑釉がみられ、それに具須や上絵付などで文様を描く例もある。総数4,261点出土しており（第21表）、器種は碗・小瓶・小杯・皿・大皿・鉢・壺・鍋・瓶・急須・袋物・酒注・火炉・火入・燈明具・置物・碍子及びそれに対応する蓋などが確認されている。以下に器種別の分類概念を記し、詳細は観察表に示す。

碗類（碗・小碗・小杯）：碗は底部から斜め上方に立ち上がるもの（1～5）、腰部に丸みを持たせ端反口縁を呈するもの（6）、前二者に比して器壁が厚く高台脇を削らないもの（7～18）、直口口縁のもの（19～21）などがある。小碗は腰部に丸みを持たせ口縁部が端反（22・23）または直口（24～28）するもので、端反口縁の資料には脚部に面取りを施すもの（30～33）もみられる。その他、平底で口縁部を竈口状に成形するもの（34）もある。小杯は腰部に丸みを持たせ端反口縁を呈するもの（39～41）が確認されている。

皿類（皿・大皿）：皿は口縁部の形態から端反（42、45）と直口（43・44）に大別され、更に後者には口唇部を波状に成形するもの（44）もみられる。大皿も口縁部の形態から、鉄線に成形するもの（46）と断面三角形に肥厚させる（49）ものがある。

鉢：器形は前述した大皿に類似するが、口縁部を断面三角形に肥厚させるもの（50）、鉄線に成形するもの（51・52）、内湾するもの（53・54）、端反口縁で口唇部を波状に成形するもの（55）など様々な資料がみられる。

鍋：脚部が球形を呈し口縁部を外側に折り曲げるもので、口縁部外面に紐状の把手を1対貼付する（59～61）。

壺：肩部の張りが弱い短頸のものが多く、特に62と65は方言で「アンダガーミ」と称される資料である。

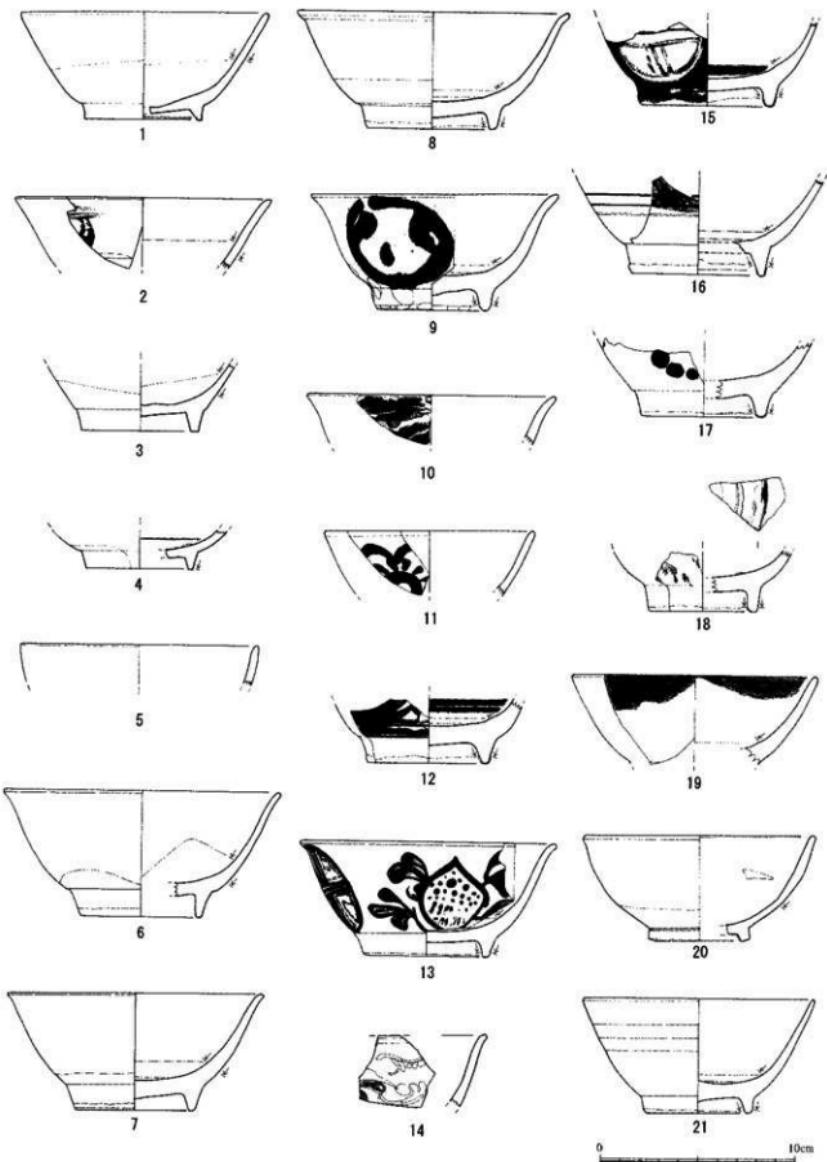
水注類（急須・酒注）：急須は最大径を脚部下位に持ち、肩部に板状の把手を1対貼付するもの（67～80）と、方言で「アンビン」と称される高台付きの大形製品（81・82）がある。酒注は方言で「カラカラ」と称されるもので、体部が橢円形のもの（83～85）と脚部下位に稜を持つもの（86～89）がみられる。

瓶：徳利形（90）や、脚部が球形で短頸のもの（97）など、様々な器形の資料が得られている。

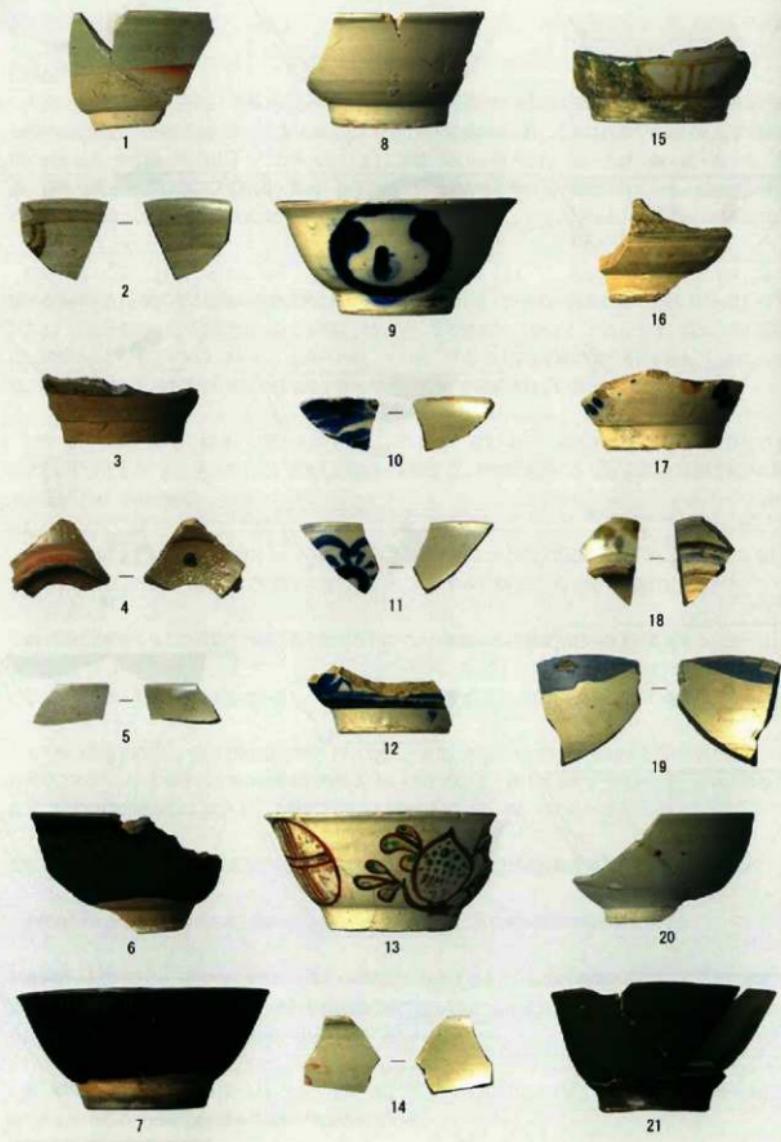
燈明具：98と99は秉燭である。脚付きの小形杯で、内底中央に燈芯用の筒状突起を有する。

焜炉類（火炉・火入）：火炉は口縁部の形態から鉄線状に成形するもの（100）、内湾口縁のもの（102・103）、直口するもの（101、104）がある。いずれも口縁部内面に突起を貼付して受部を有する。火入は屈曲した腰部から直線的に立ち上がる筒形のもの（106～109）が多くみられる。

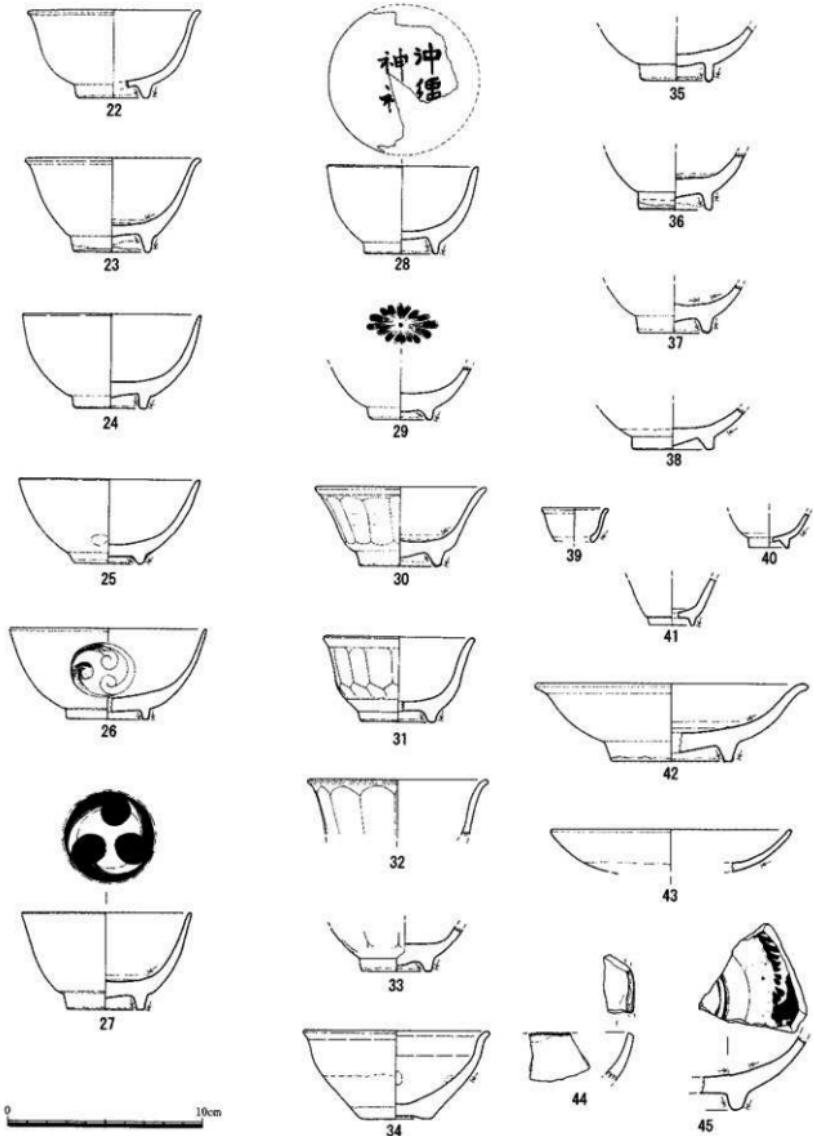
蓋：急須に対応するもの（112～119、122・123）、碗に対応するもの（121、126）、壺に対応するもの（124）、鍋に対応するもの（125）など様々な資料が確認されている。



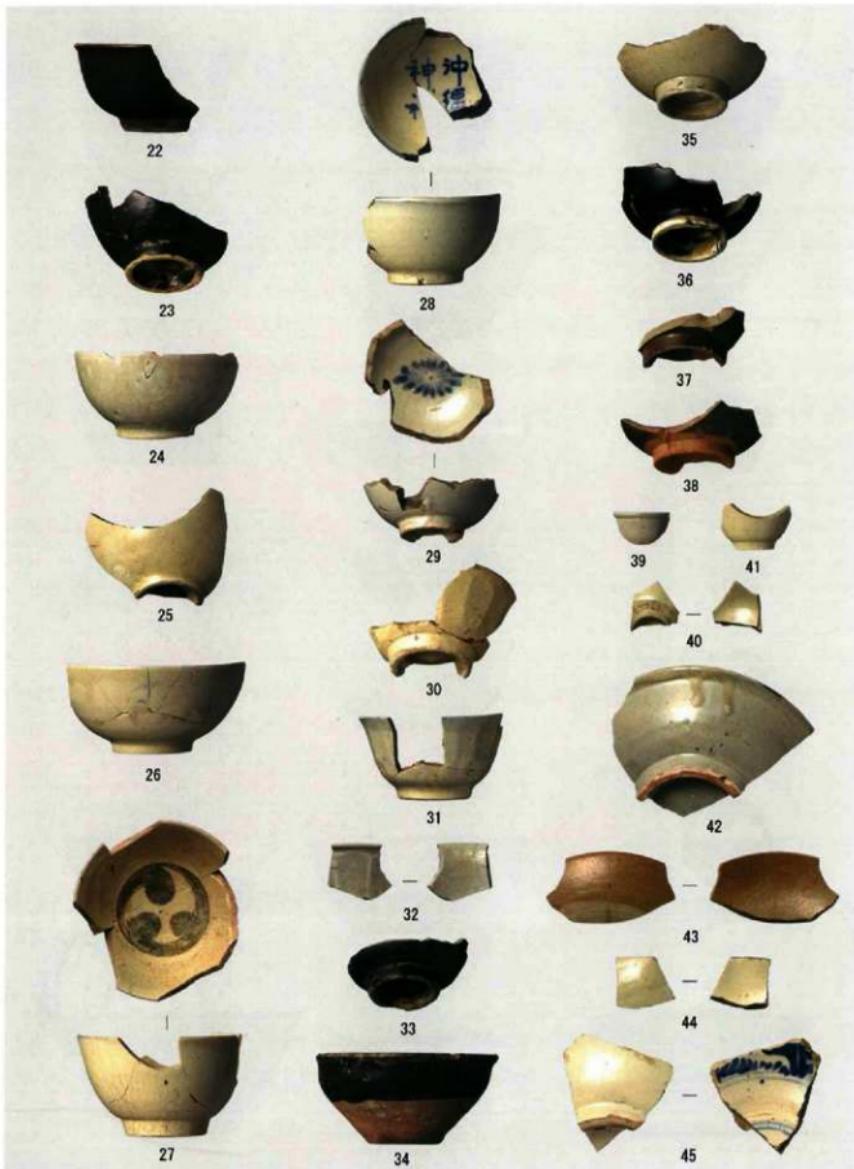
第 70 図 沖縄座陶器・土器 1 (施釉陶器 1)



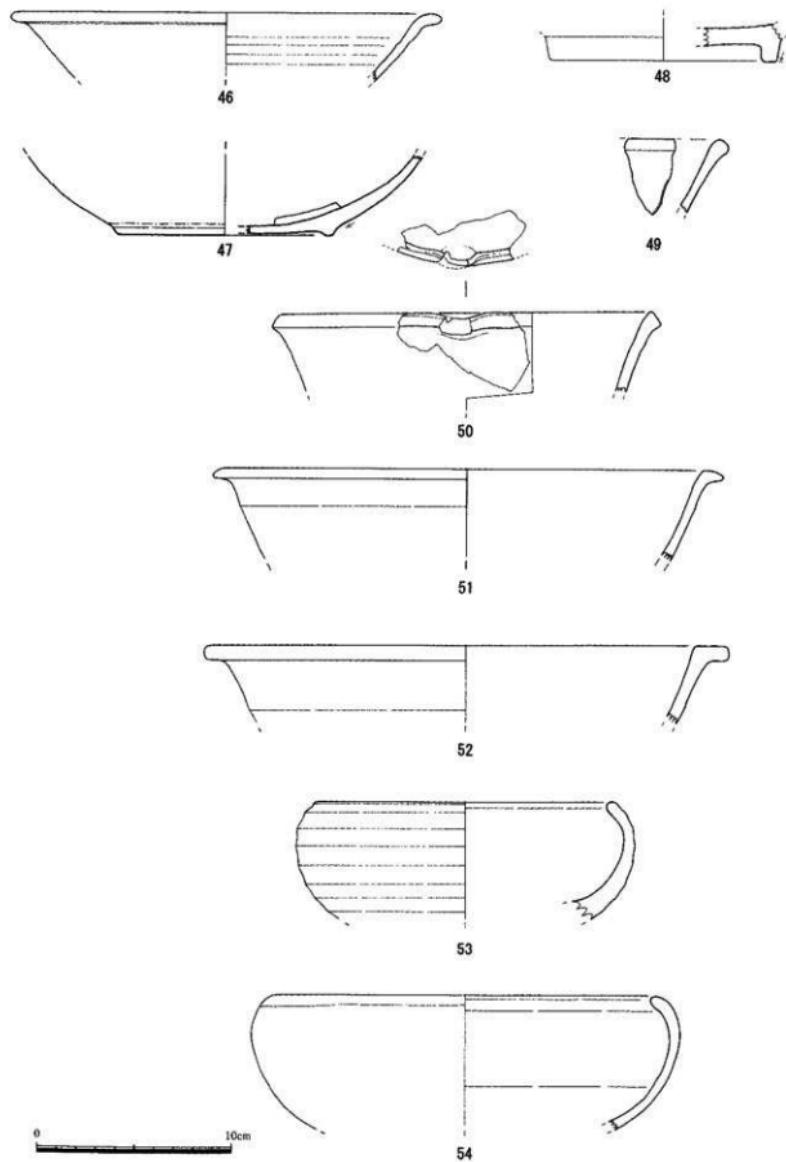
図版 42 沖縄産陶器・土器 I (施釉陶器 1)



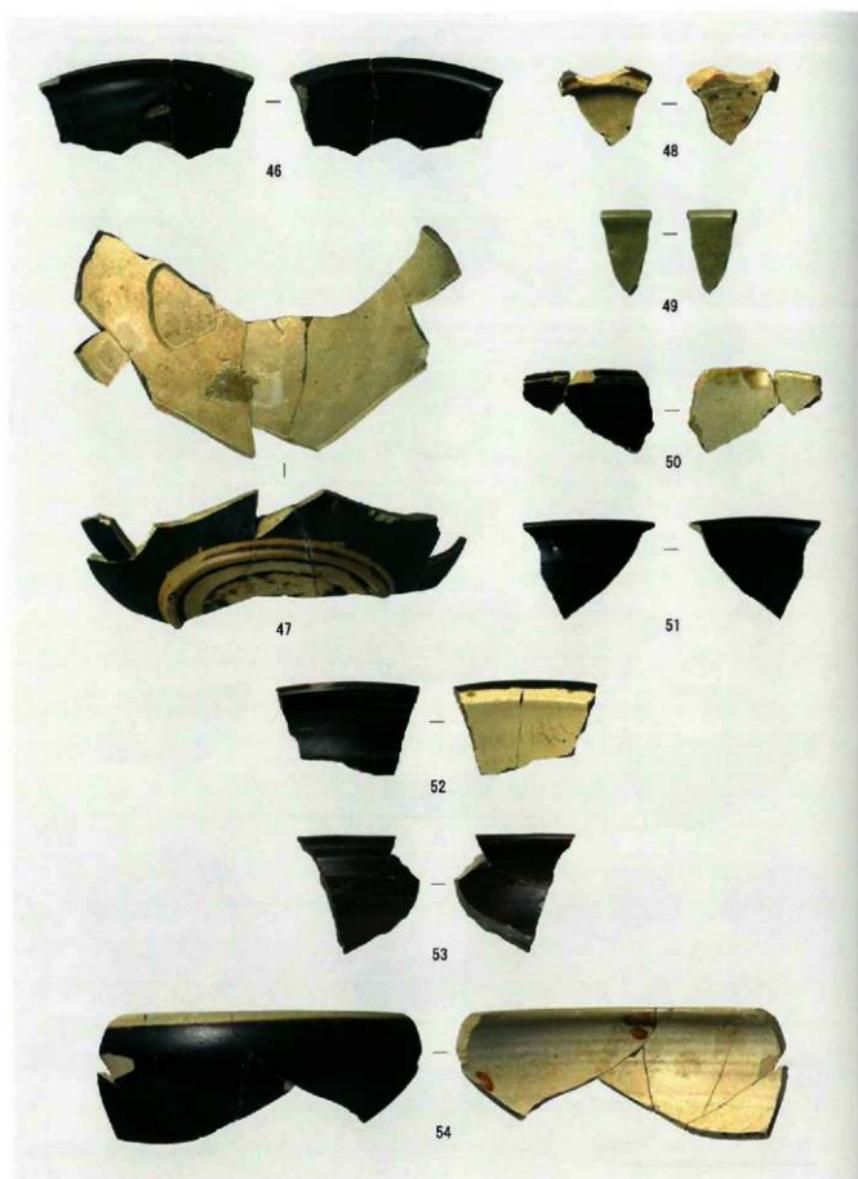
第71図 沖縄産陶器・土器2(施釉陶器2)



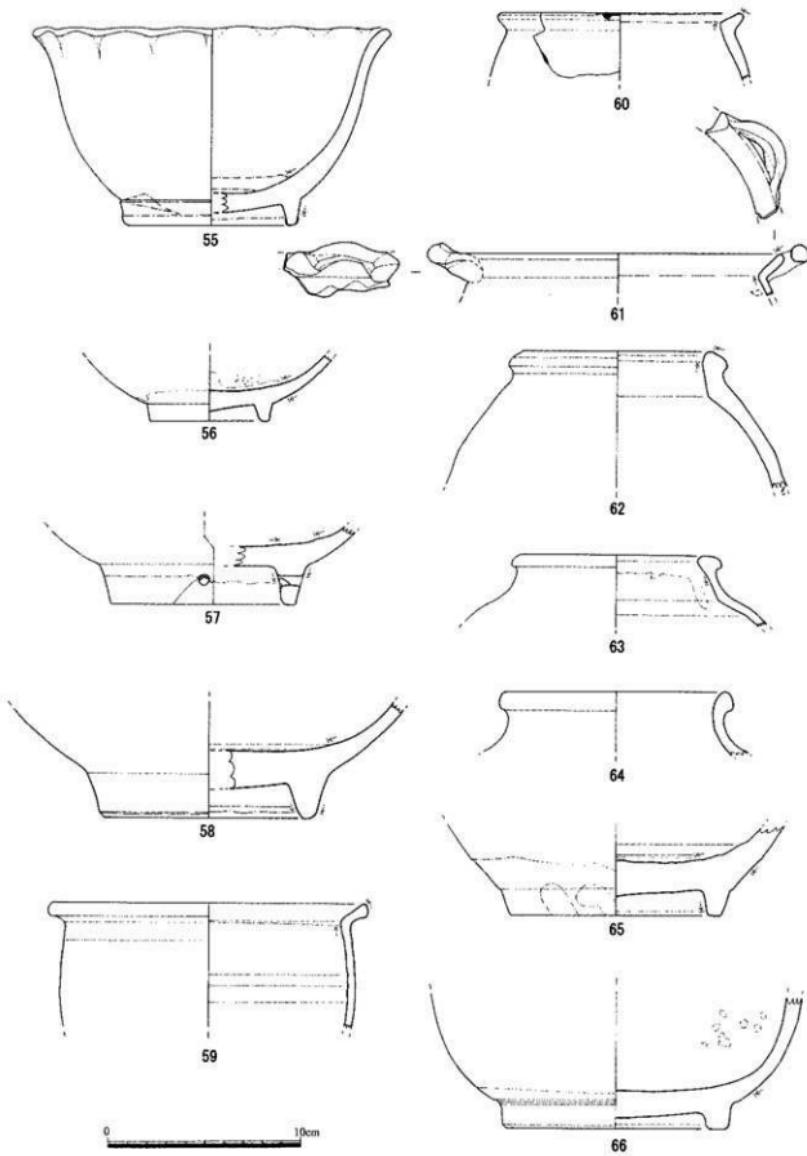
図版 43 沖縄産陶器・土器 2 (施釉陶器 2)



第72図 沖縄産陶器・土器3(施釉陶器3)



図版 44 沖縄産陶器・土器 3(施釉陶器 3)



第73図 沖縄産陶器・土器4(施釉陶器4)



55



56



57



58



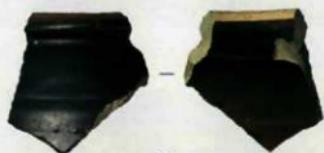
59



60



61



62



63



64

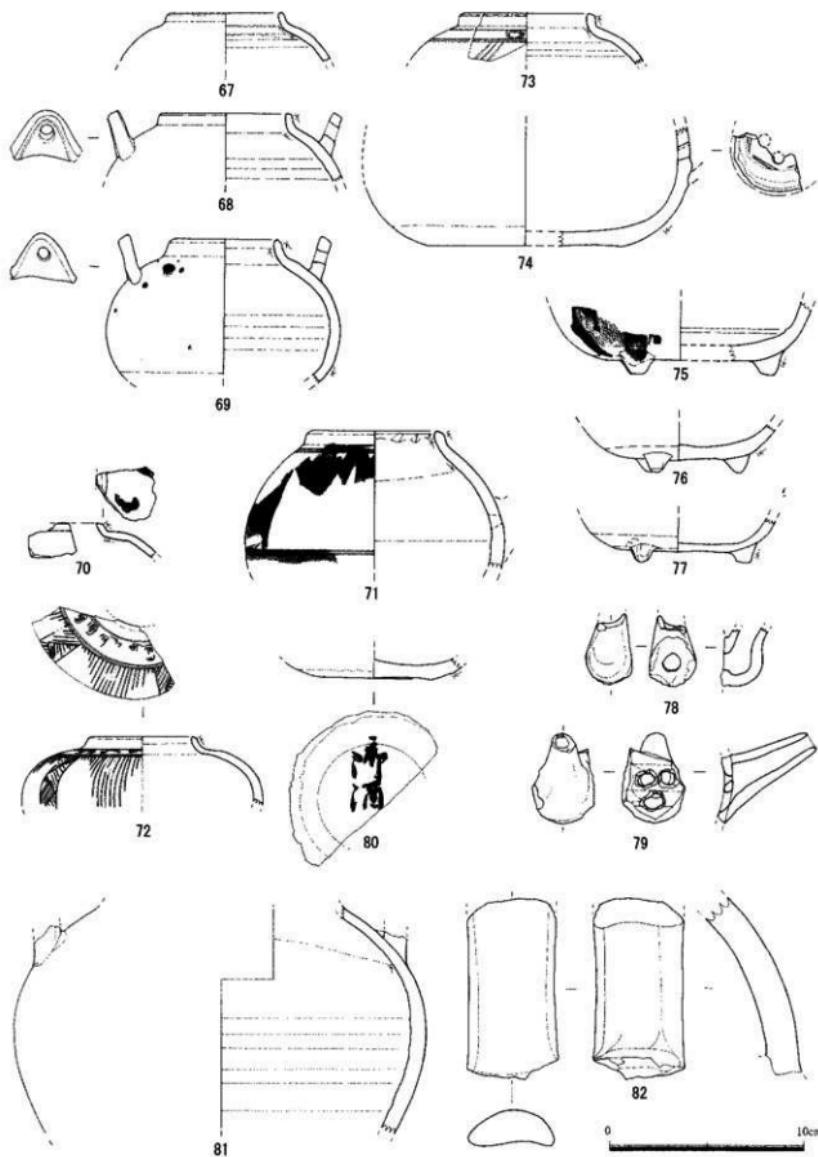


65



66

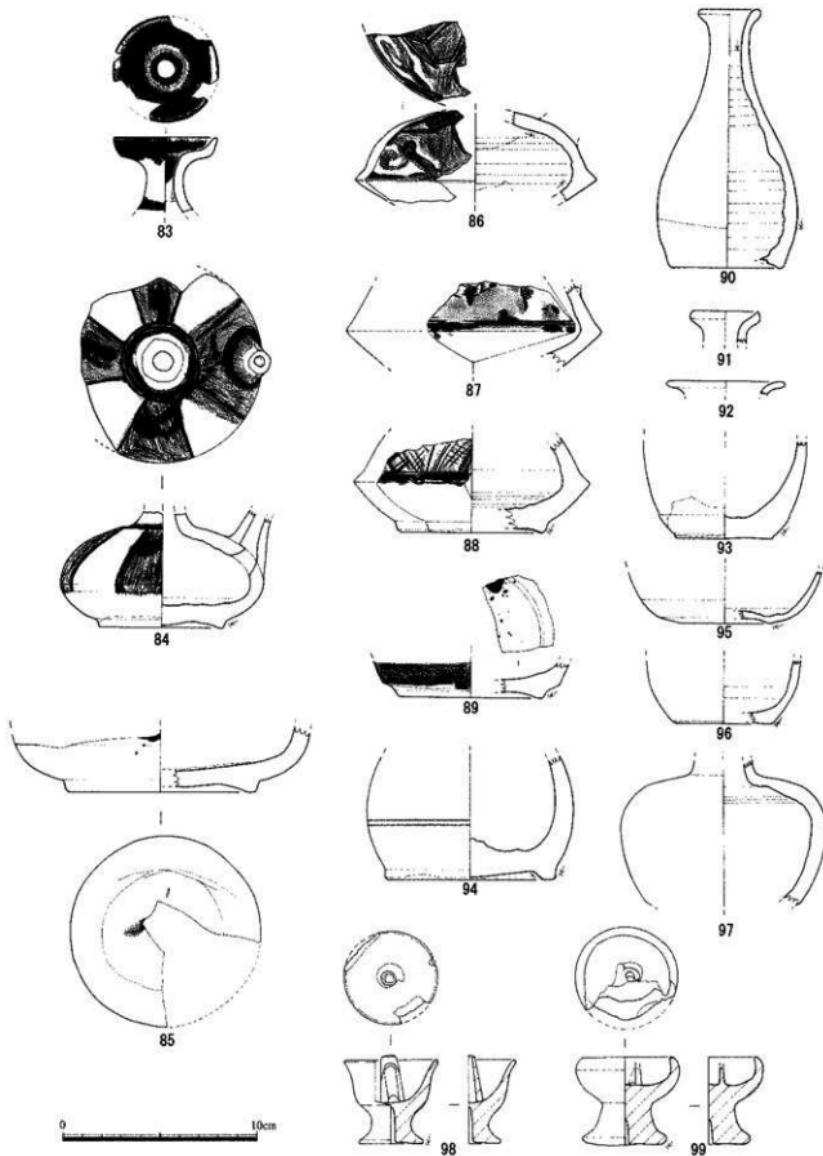
圖版 45 沖繩產陶器・土器 4 (施釉陶器 4)



第74図 沖縄産陶器・土器5(施釉陶器5)



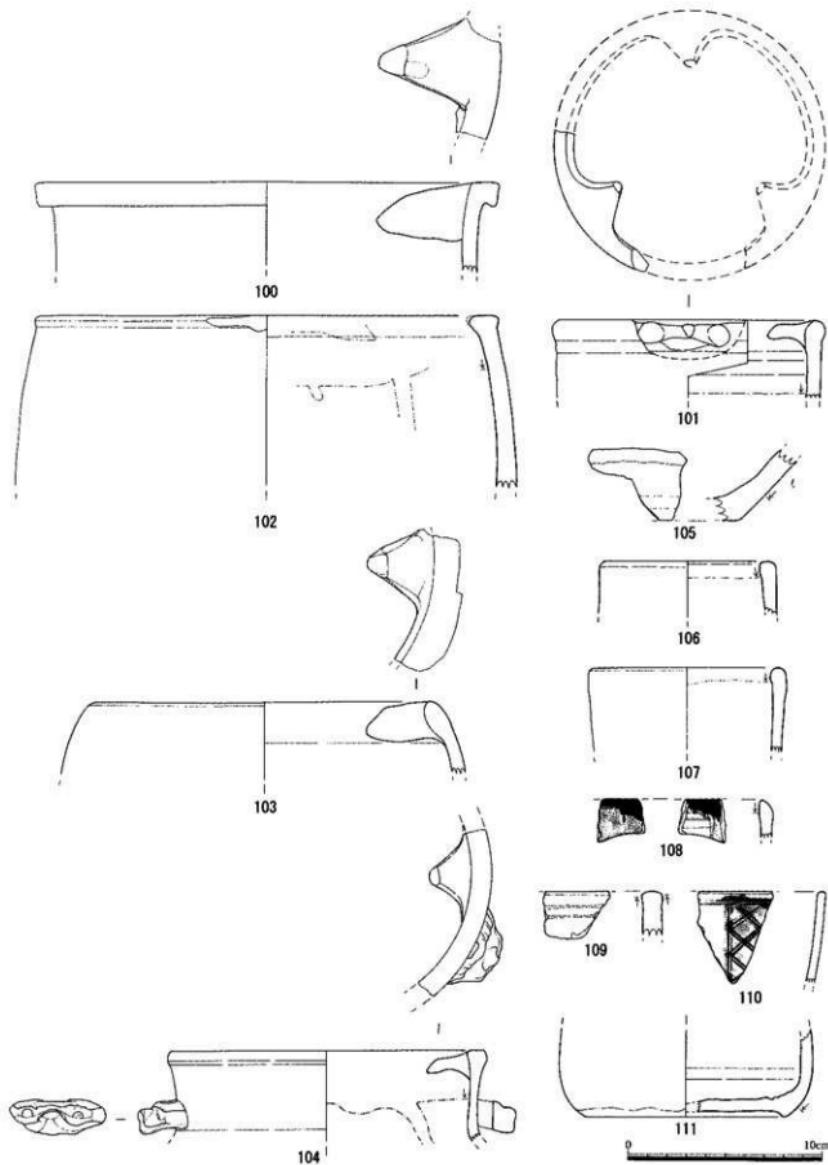
図版 46 沖縄産陶器・土器 5 (施釉陶器 5)



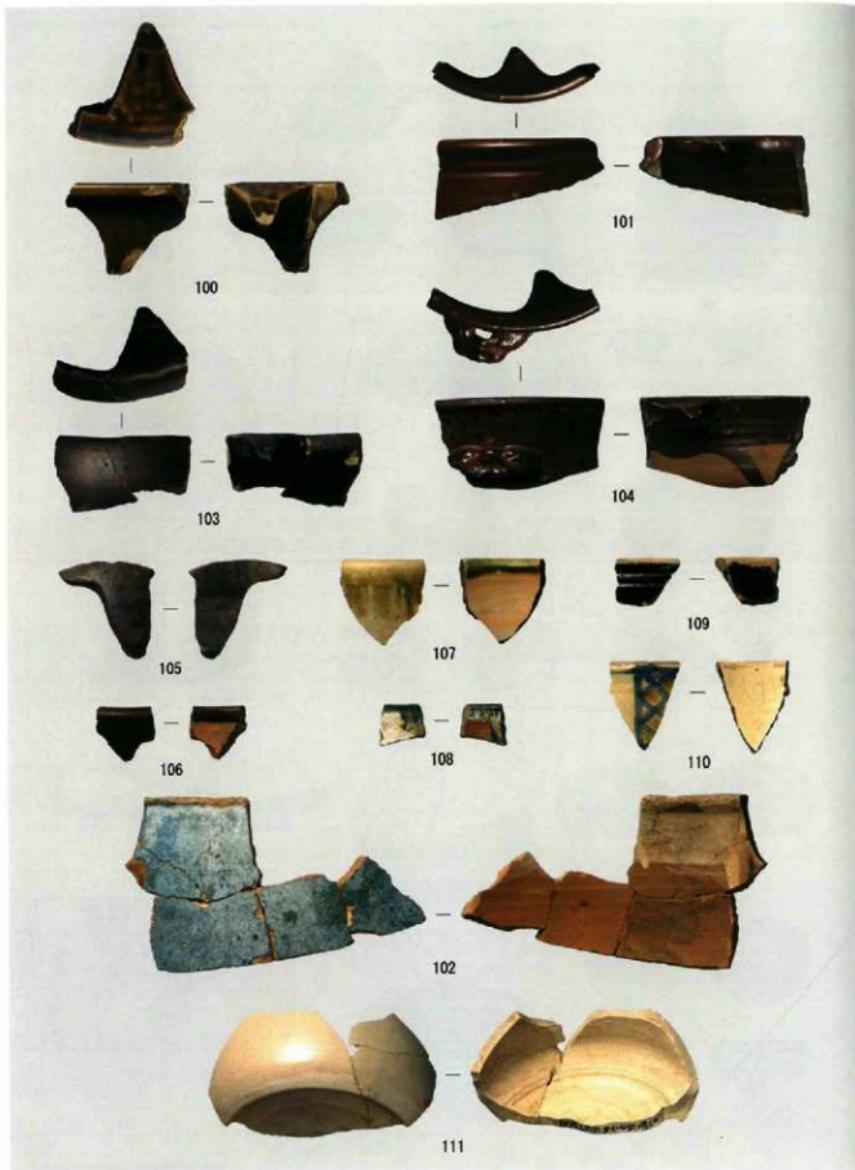
第75図 沖縄産陶器・土器6(施釉陶器6)



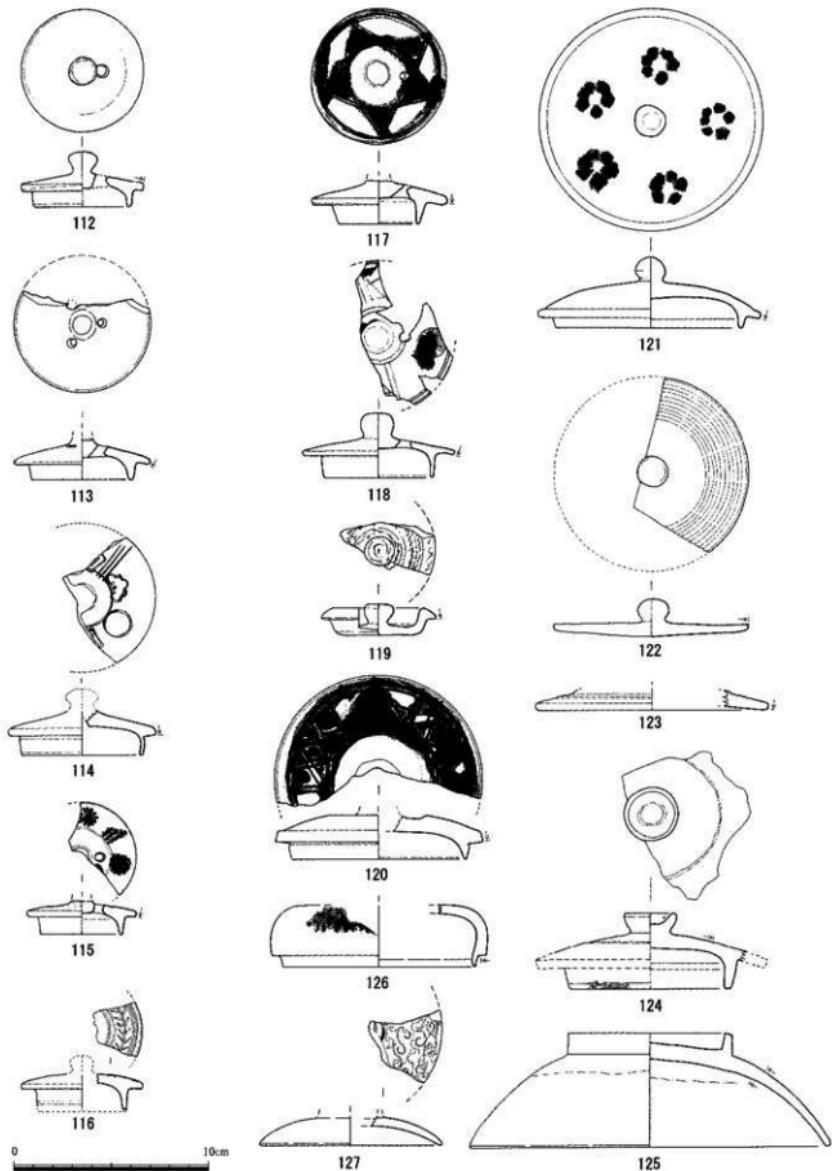
図版 47 沖縄産陶器・土器 6 (施釉陶器 6)



第76図 沖縄産陶器・土器7(施釉陶器7)



図版 48 沖縄産陶器・土器 7(施釉陶器 7)



第 77 図 沖縄産陶器・土器 8 (施釉陶器 8)



圆版 49 沖縄産陶器・土器 8(施釉陶器 8)

②無釉陶器

方言で「アラヤチ（荒焼）」と称されるもので、一般に高火度で焼成された焼き締め陶器を指す。基本的に無釉の製品を主体とするが、泥釉やマンガン釉が施されるものもある。また一部には、薩摩焼の影響を色濃く残す「初期無釉陶器（沖縄県埋文 2010、新垣 2013a）」の範疇に含まれる資料もみられる。総数 3,133 点出土しており（第 23 表）、器種は碗・皿・大皿・鉢・擂鉢・壺・小壺・甕・瓶・火炉・燈明具・陶管・筒物・厨子及びそれに対応する蓋などが確認されている。以下に各器種の分類概念を記し、個々の所見は観察表に示す。

碗：高台付きの底部から斜め上方に開く器形で、口縁部は一般に直口（1）または端反（2、4・5）を呈する。3 は口縁部を S 字状に捻る籠口の特徴から、天目として使用された可能性が考えられる。

皿：平底の底部から斜め上方に開き、口縁部が直口するもの（6・7）。燈明皿の可能性もある。

大皿：皿と同じく平底の底部から斜め上方に開き、口縁部が直口するものと（8、13）、高台付きの底部を持つもの（9～12）があり、一部の資料には焼成時の貝目が残る（12・13）。ちなみに 8 は甕の蓋になる可能性もあるが、今回は大皿として扱った。

鉢：口縁部を折り返し（14）または肥厚させるもの（15～17）と、端部を舌状に仕上げるもの（18～20）、また肩部に丸みを持たせざる縁部を錫鋳物に成形するもの（21・22）がみられる。底部は全て平底と考えられる。

擂鉢：口縁部下位を屈曲させ外面に突帯を成形するもの（23）、口縁部下位の屈曲が弱く外面に稜を持つもの（24、26）、口縁部を錫鋳物に成形するもの（25、28）がある。底部は基本的に平底だが、27 のように小形の擂鉢を高台状に有するものもみられる。擂鉢編年（安里ほか 1987）によると 23 が I 式、24 と 26 が II 式、25、27・28 が IV 式に相当する。

急須：球形の胴部に棒状の把手を貼付するもの。口縁部内面には受部を成形する（29～31）。

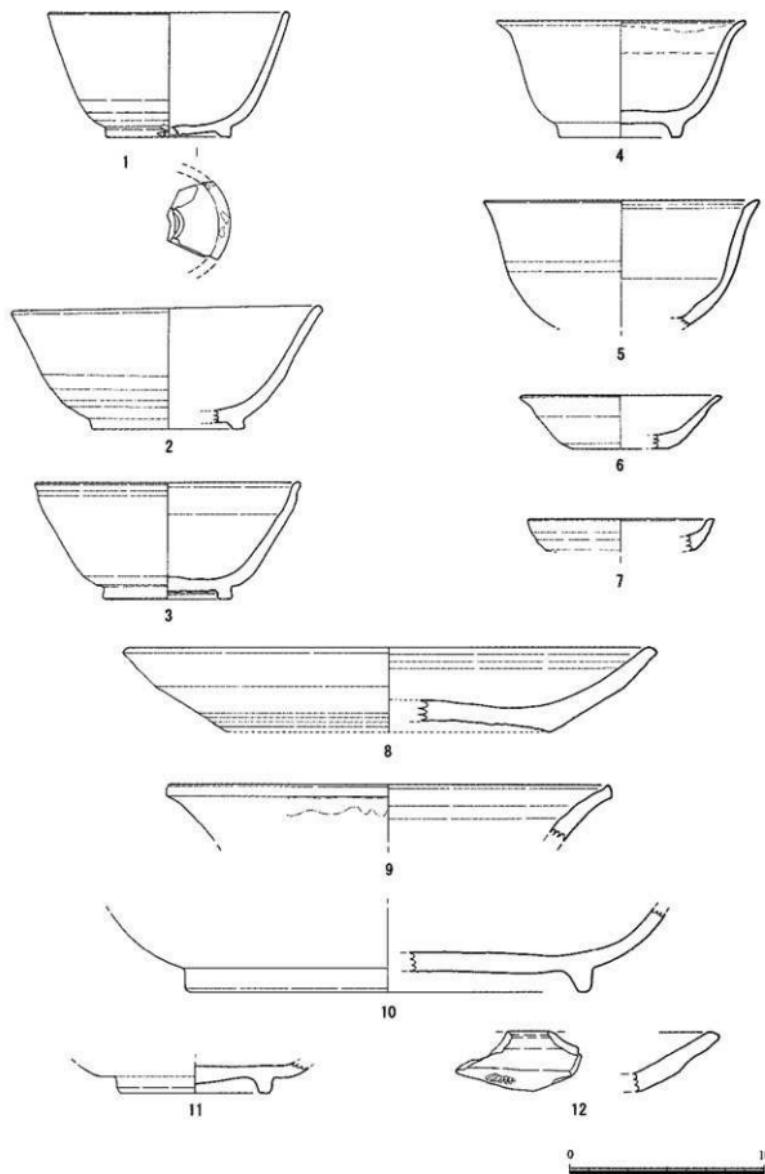
瓶：徳利形（32、34）や、直線的に立ち上がる長頸瓶（33）、高台付きのもの（35）、胴部または全体が方形になる角瓶（36～40）など、多様な資料がみられる。特に角瓶は、形態や装飾の特徴から金属製品を模倣したと考えられる。

壺：口縁部の形態が錫縁状（41～43、46）、舌状（44・45）、玉縁（47）と様々で、法量も大小各種の製品が確認されている。

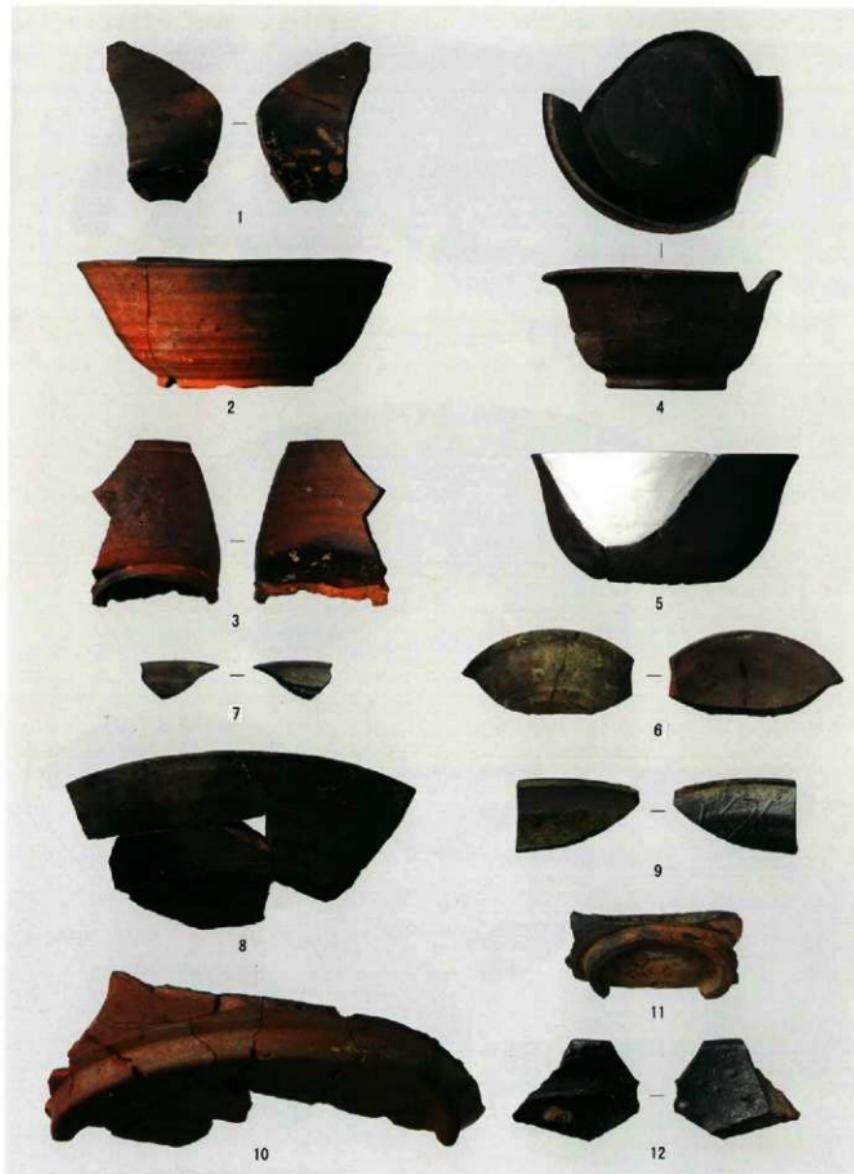
火炉：肩部で内側に屈曲し口縁の上面が三葉形を呈するもの（49～51）。

蓋：円盤形で蓋甲中央に紐状の把手を貼付するもの（52・53）、底と持手を有するもの（54）、高台付きの皿を伏せた形態のもの（55・56）などがある。52 と 54 は急須に対応すると考えられる。

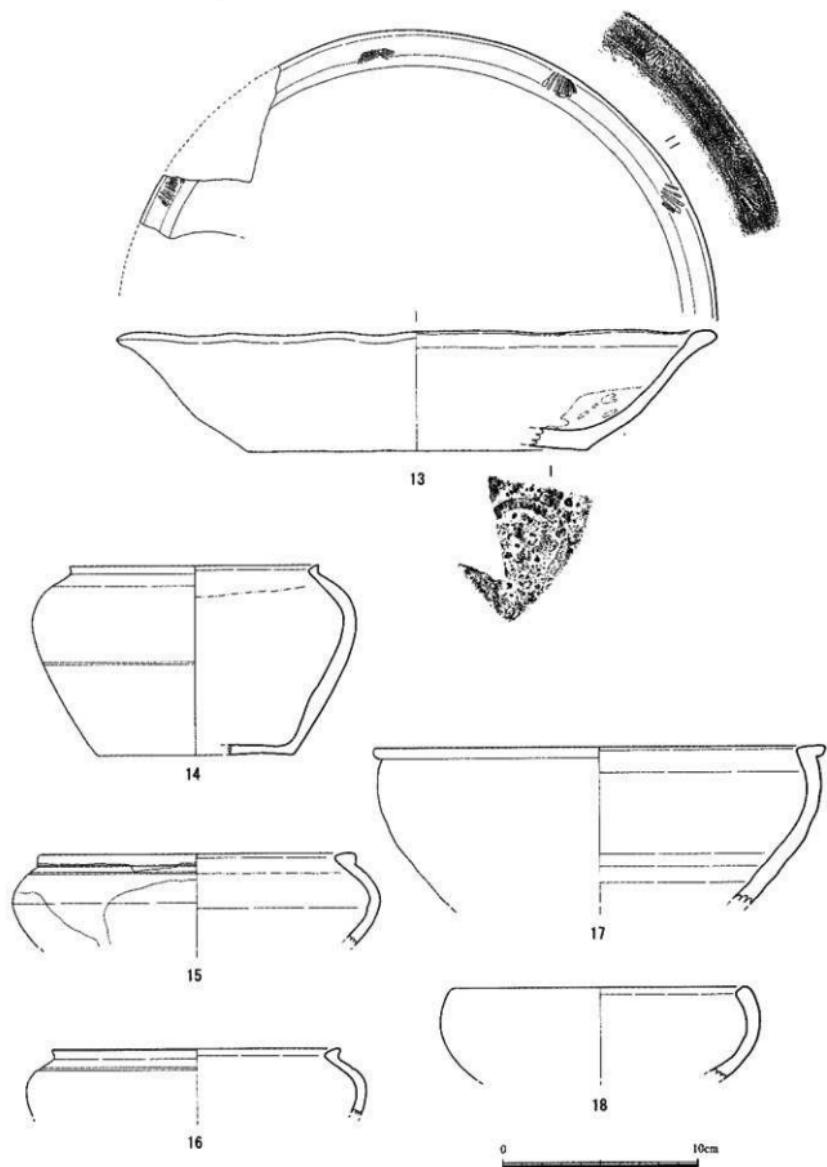
甕：口縁部を錫鋳物に成形するもの（57、59）、外表面を肥厚させるもの（58、60）、外表面に折り返すもの（61）がみられる。



第 78 図 沖縄産陶器・土器 9(無釉陶器 1)



図版 50 沖縄産陶器・土器 9(無釉陶器 1)



第79図 沖縄産陶器・土器10(無釉陶器2)



13



14



15



16

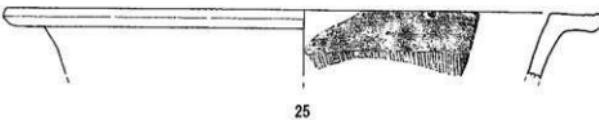
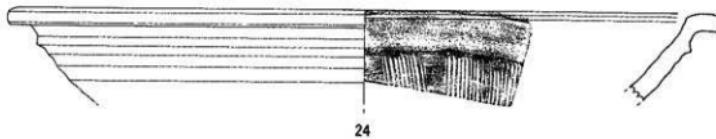
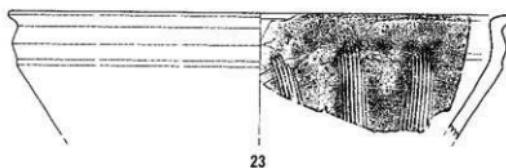
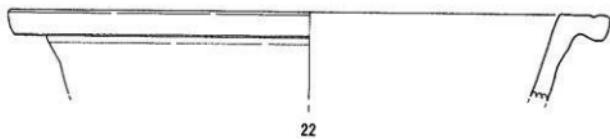
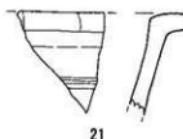
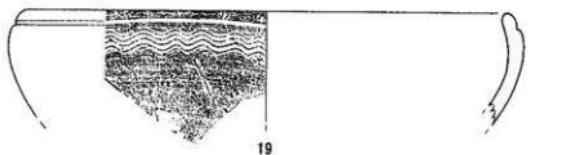


17

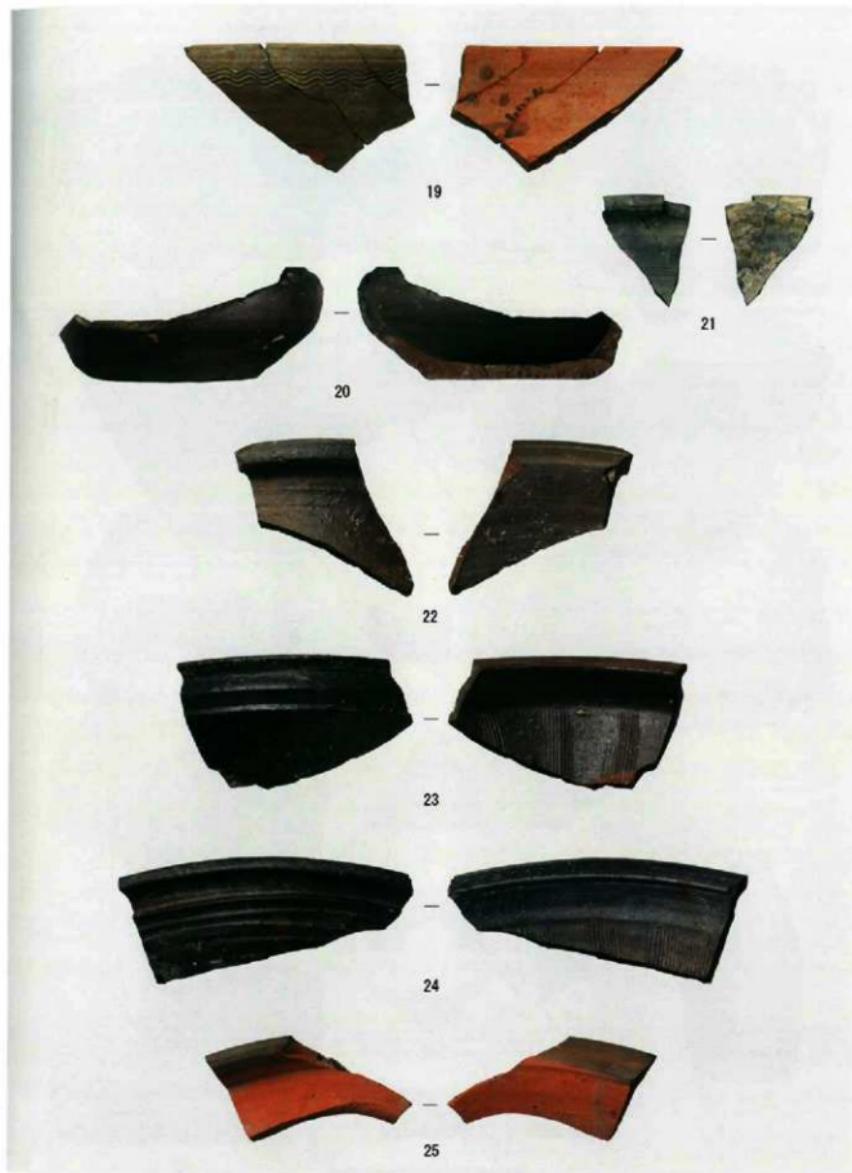


18

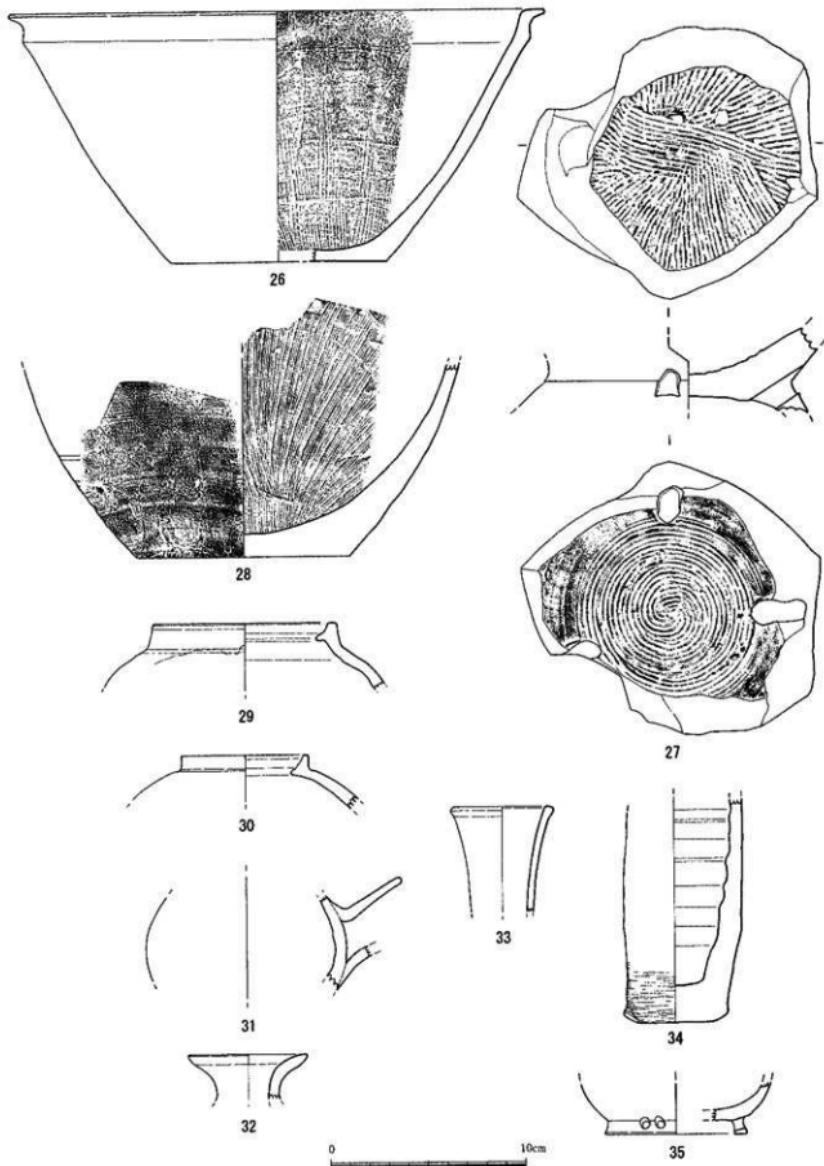
図版 51 沖縄産陶器・土器 10 (無釉陶器 2)



第 80 図 沖縄産陶器・土器 11 (無釉陶器 3)



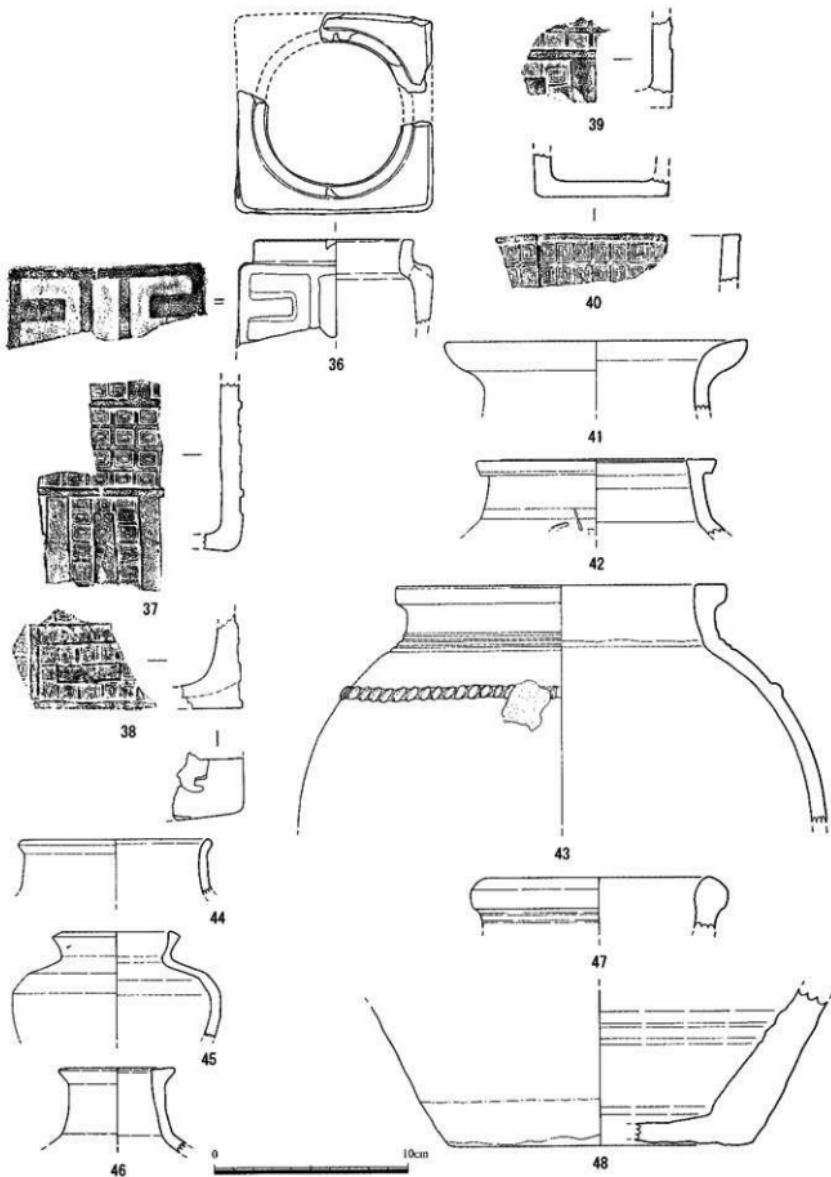
図版 52 沖縄陶器・土器 11 (無釉陶器 3)



第 81 図 沖縄産陶器・土器 12(無釉陶器 4)



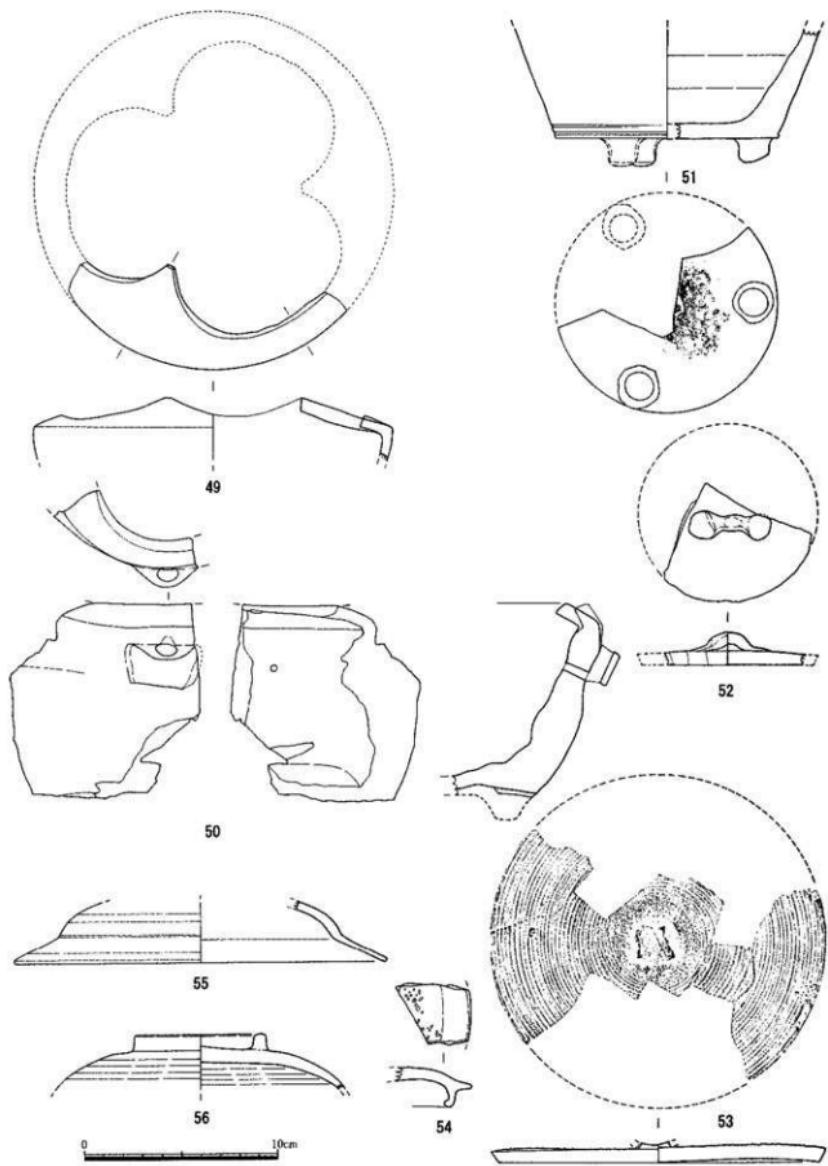
図版 53 沖縄産陶器・土器 12 (無釉陶器 4)



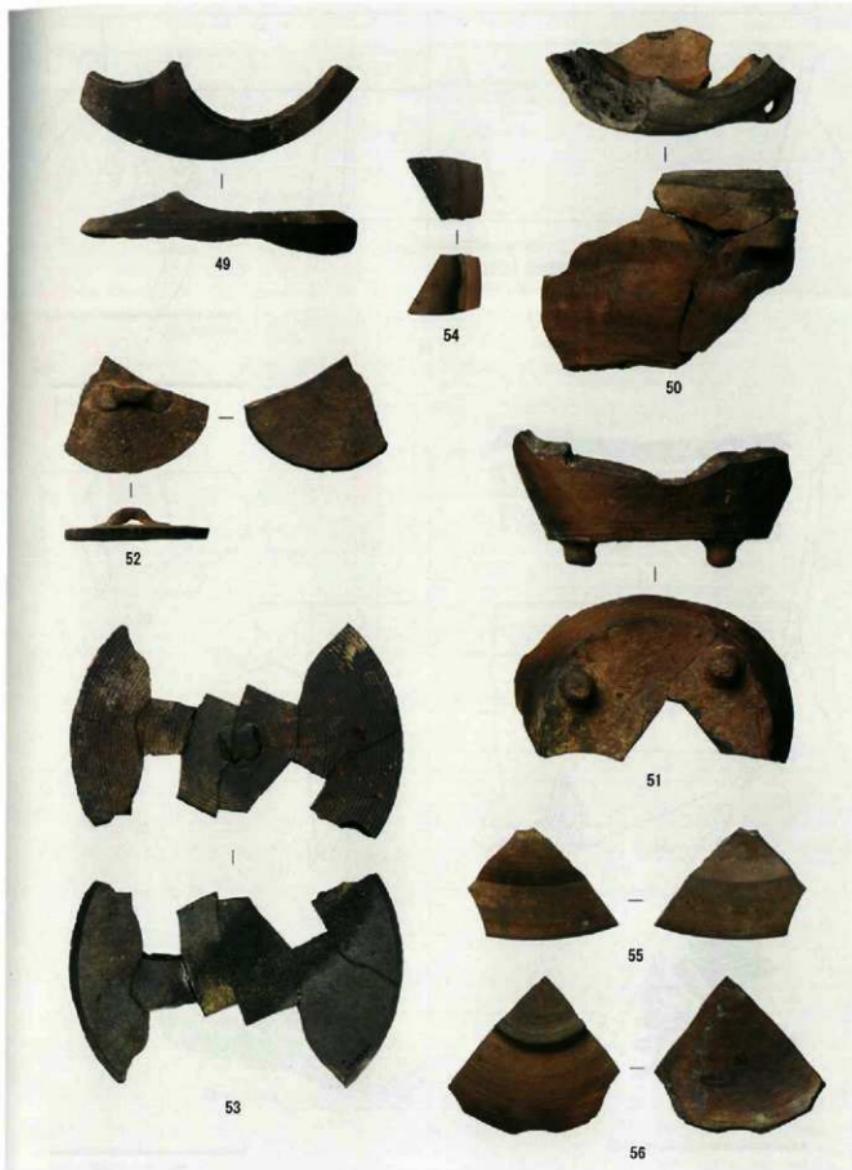
第82図 沖縄産陶器・土器 13(無軸陶器 5)



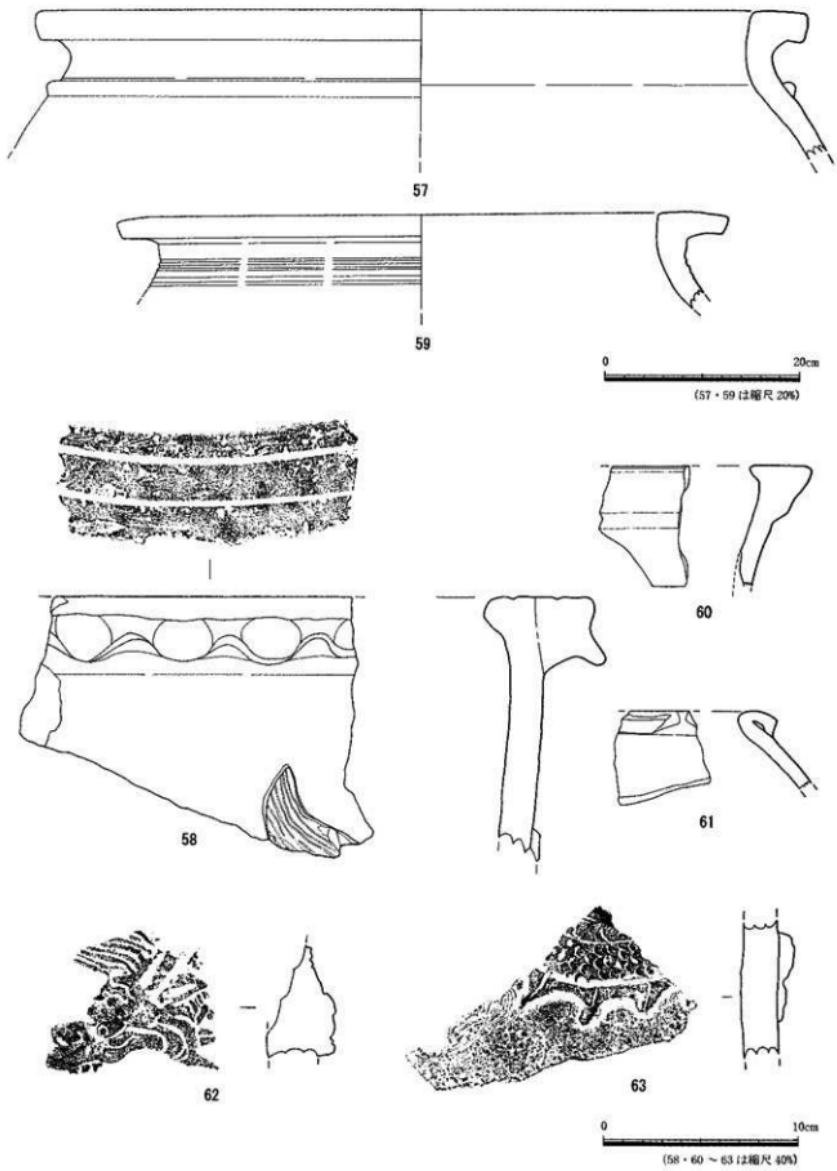
図版 54 沖縄産陶器・土器 13(無釉陶器 5)



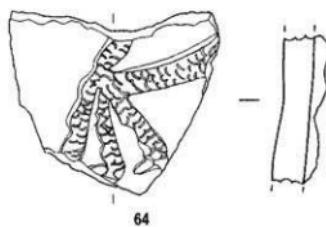
第 83 図 沖縄産陶器・土器 14 (無軸陶器 6)



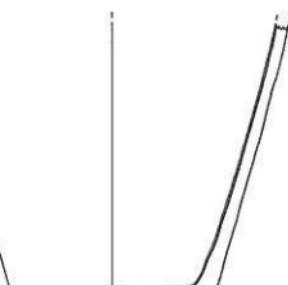
図版 55 沖縄産陶器・土器 14(無釉陶器 6)



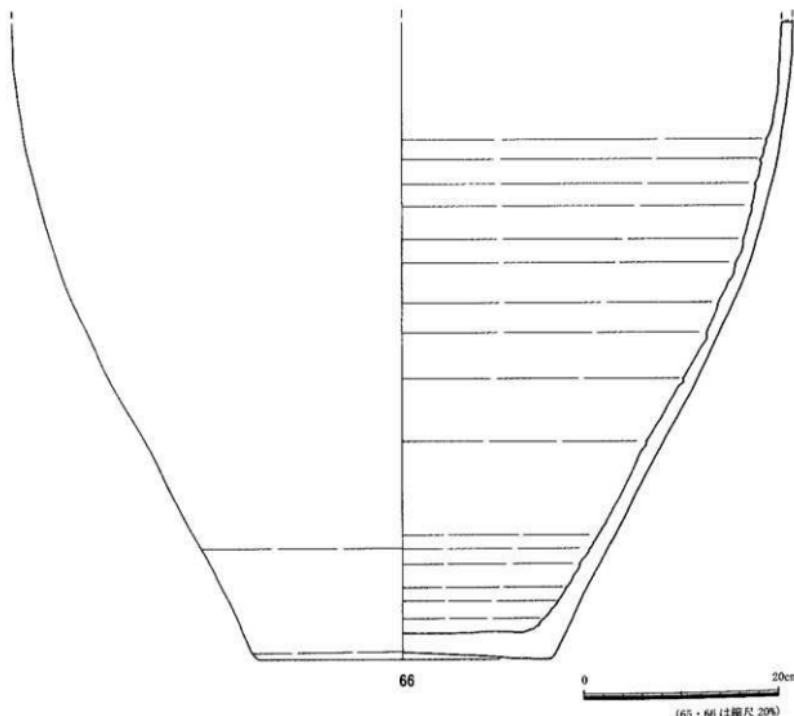
第 84 図 沖縄産陶器・土器 15(無釉陶器 7)



0 10cm
(64・65は縮尺 40%)

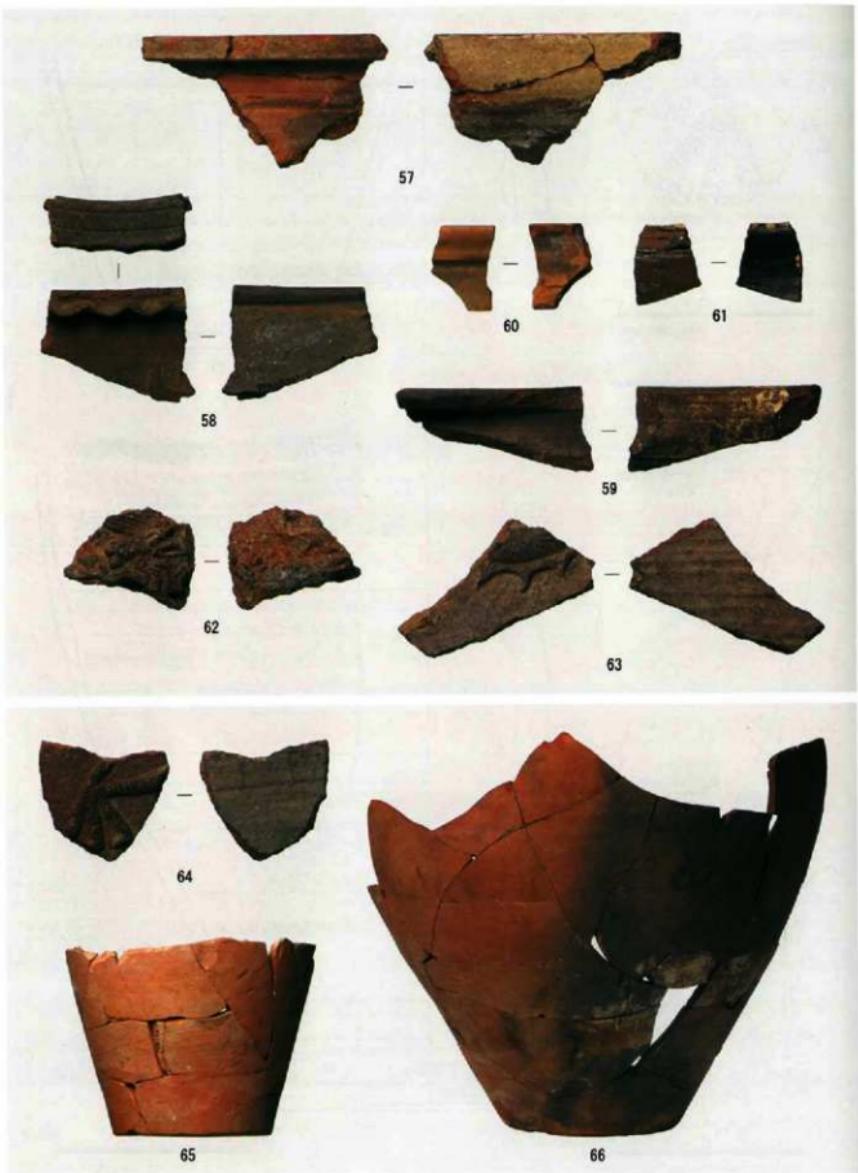


65



0 20cm
(65・66は縮尺 20%)

第 85 図 沖縄産陶器・土器 16(無釉陶器 8)



図版 56 沖縄産陶器・土器 15 (無釉陶器 7)

③陶質土器

方言で「アカモノ」または「カマグワーヤチ」と称される軟質の土器群で、総数1,035点出土している（第25表）。火周りで用いる道具が主体のため一般に焼成不良であり、触ると粉末が付着するものが多い。器種は鍋・火炉・土瓶・鉢・皿・熔熔・甕・七輪・土管・土鉢やそれらに対応する蓋が得られている。以下に図化資料の特徴を記し、詳細は観察表（第26表）に示す。

鍋（1・2）は胴部が球形で口縁部を外側に折り、口縁部の外面に紐状の把手を1対貼付する。土瓶は腰部に棱を持ち全形が算玉形を呈するもの（3～5）と、胴部が球形のもの（6）がみられる。蓋は高台付きの皿を伏せた器形のもの（7）と、蓋裏に柄を有するもの（8・9）がある。前者が鍋、後者が土瓶にそれぞれ対応する。火炉は胴部が球形で口縁部内面に受部を貼付するもの（10）や、底部から簡状に立ち上がるものの（11）を図化した。その他、口縁部が内湾する平底の鉢（14・15）や、フライパン状製品とも称される熔熔（16）などが確認されている。

④瓦質土器

瓦質土器は総数79点得られており（第27表）、その中から特徴的な資料21点を図化した。今回出土した瓦質土器は本土産または本土系と思われるもの（1～6、9、13～21）と、沖縄産の製品（7・8、10～12）に大別される。前者で最も多い資料は、口縁部を内湾もしくは内側に折り曲げる器高の低い鉢（1～6）である。用途は、器形及び文様の特徴や獸足のような脚部が貼付される底部（13・14）から火鉢と考えられる。これ以外にも播鉢（9）・壺（15）・風炉（16）・火炉（17～21）など様々な器種が確認されている。後者には植木鉢（7・8）・備鉢（10）・浅鉢（11）がみられる。このうち8は胴部の形態や器高の低さから、いわゆる盆栽鉢の可能性が想定される。

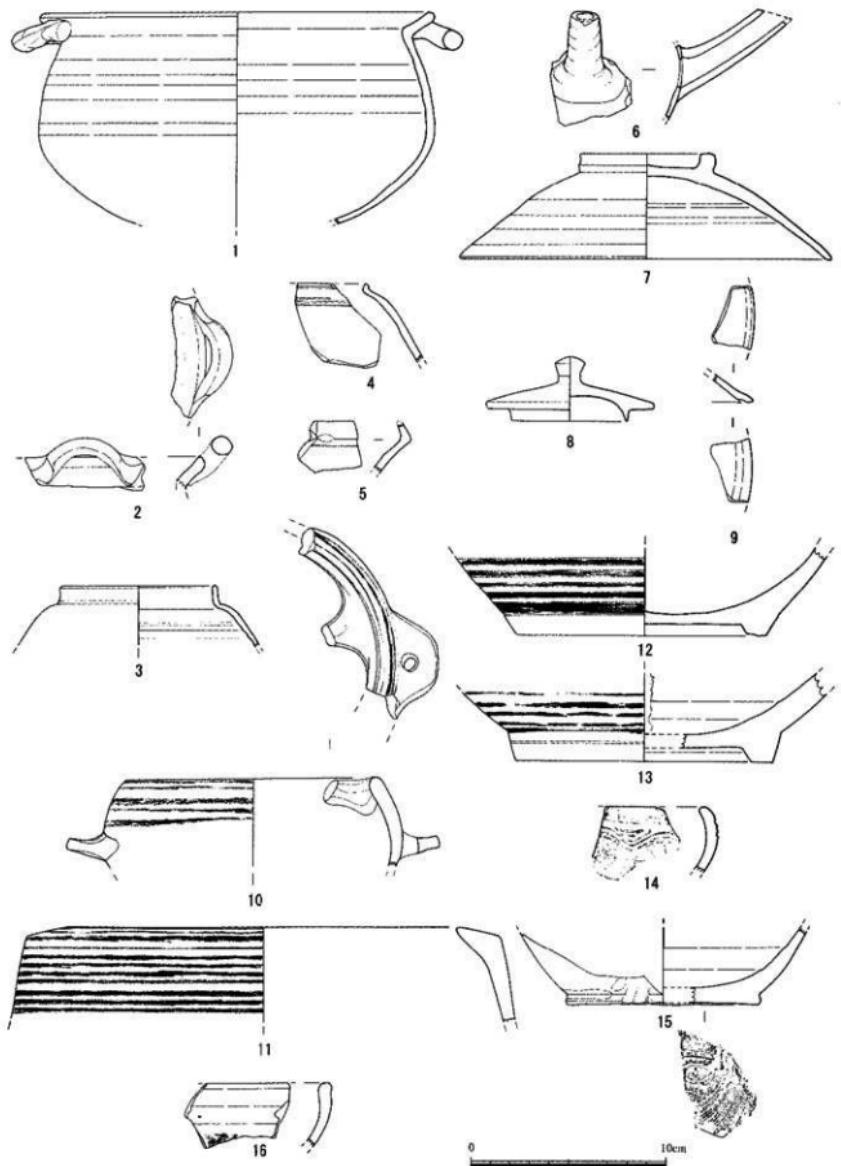
5 カムイヤキ

徳之島のカムイヤキ古窯跡で製作されたと考えられるもので、8点出土している（第29表）。その中から、今回は接合・復元の可能な1点を第89図に示して報告する。22は新里亮人氏の分類（伊仙町教委2005）によると壺形でB群の資料である。詳細は観察表（第30表）に記す。

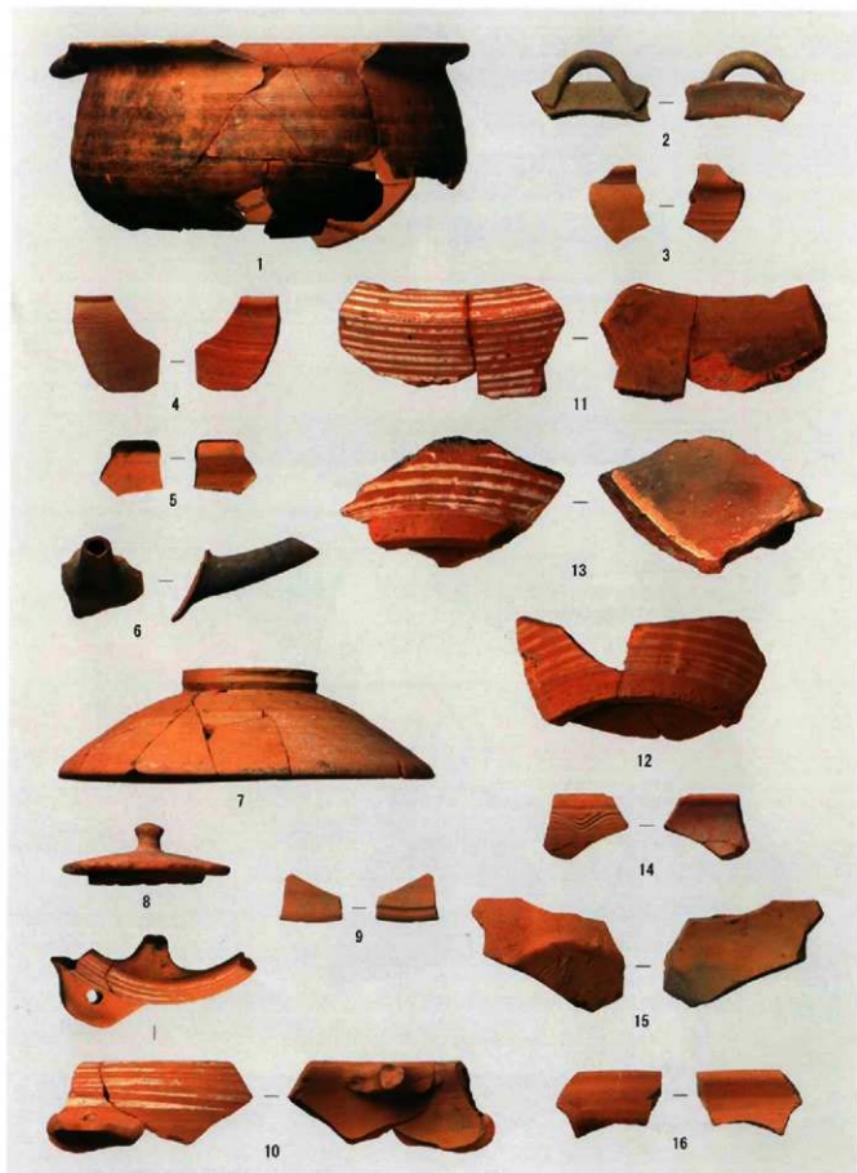
6 土器

グスク土器、宮古式土器などが総数156点出土している（第31表）。資料のほとんどが小破片で全形の窺える資料はないが、器形的な特徴があるものについて第89図に示して報告する。グスク土器の分類については、宮城弘樹氏と具志堅亮氏の研究成果（宮城・具志堅2007、具志堅2014）を基準に行っている。また胎土の混入物などの特徴から、宮古諸島を中心に出土する土器と考えられる資料が出土しているが、破片資料のみで明確に分類することが困難なため、ここでは宮古式土器と一括して報告する。これらの分類は新里貴之氏の成果（新里2015）を基準とした。

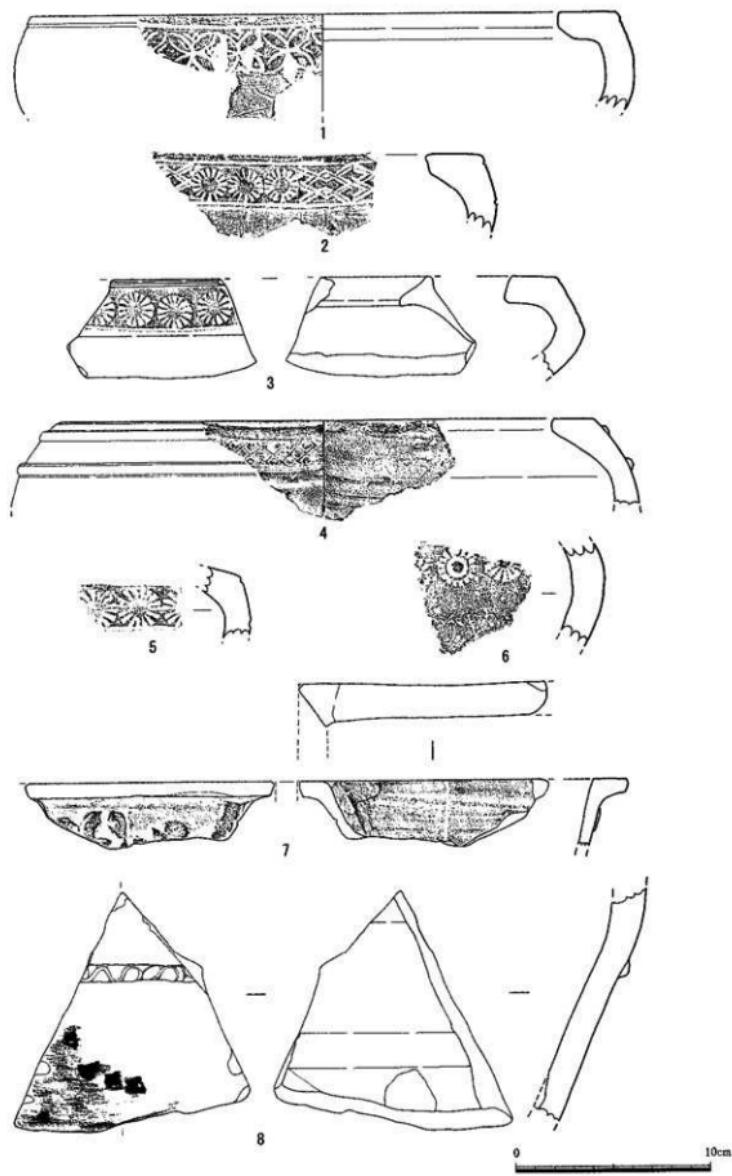
23は当地区で出土する他の資料と胎土の混入物や器形が異なることから、貝塚時代前期の土器の可能性がある。24はグスク土器で口縁が肥厚する資料である。具志堅氏の分類によるとⅢ類になる。25はグスク土器の頸部で、具志堅氏の分類によるとⅣ類になる。26・27は外面が黒色を呈し磨かされている。胎土に白砂や赤色粒が混入するなど、その特徴から宮古式土器に分類されるものである（新里2015）。28はグスク土器の底部資料で図上復元を行っている。個々の詳細については、観察表（第32表）にそれぞれ記す。



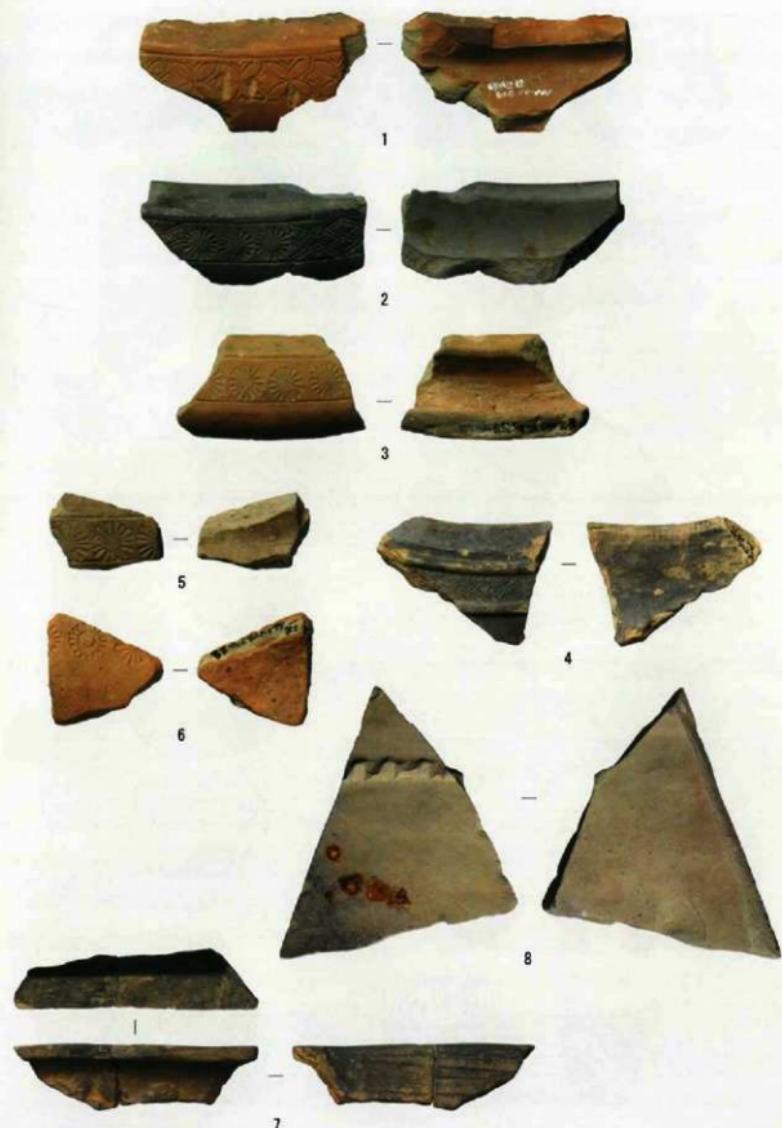
第 86 図 沖縄産陶器・土器 17(陶質土器)



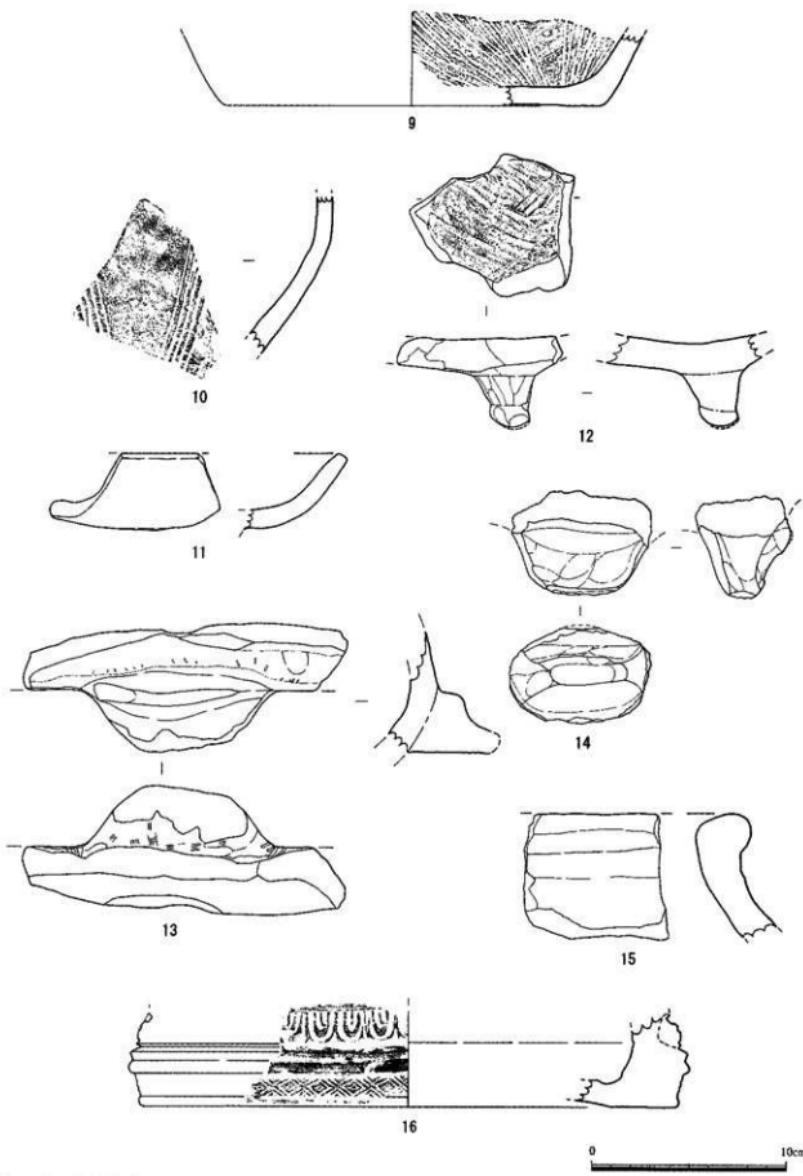
図版 57 沖縄産陶器・土器 16(陶質土器)



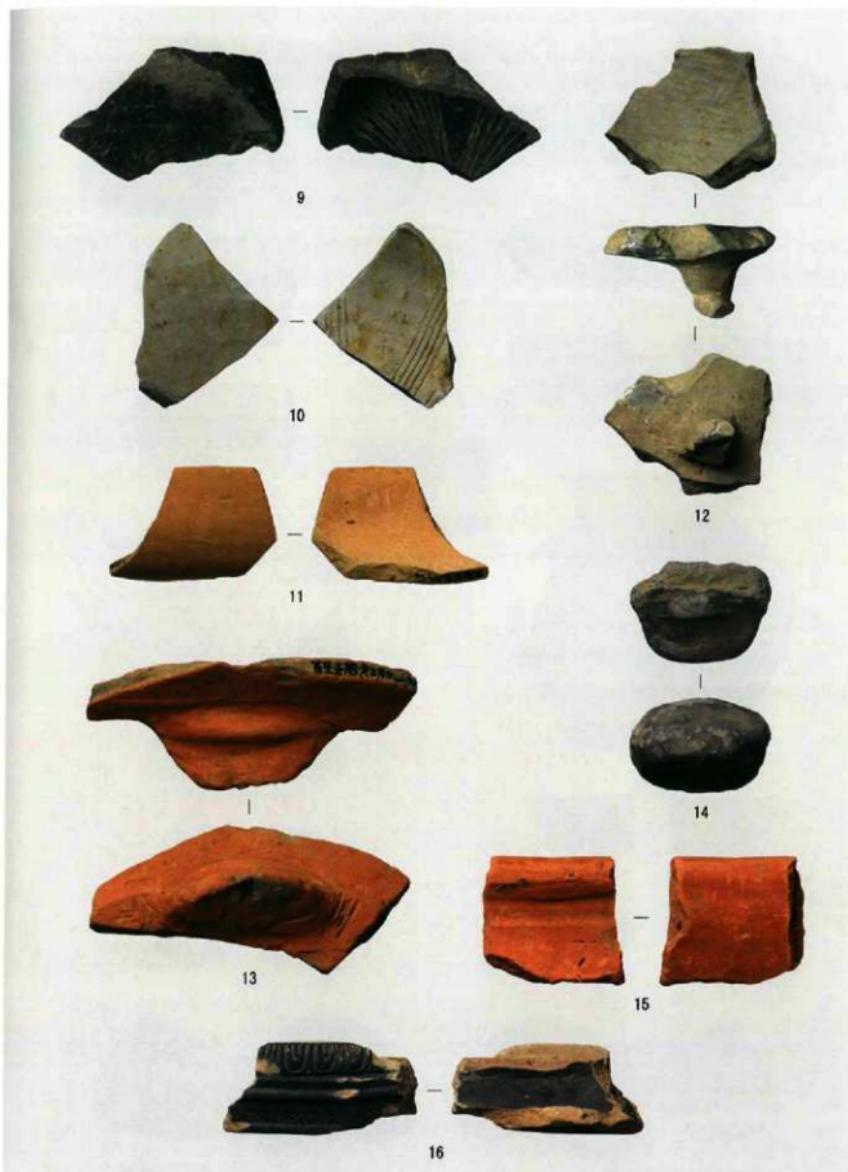
第 87 図 沖縄産陶器・土器 18(瓦質土器 1)



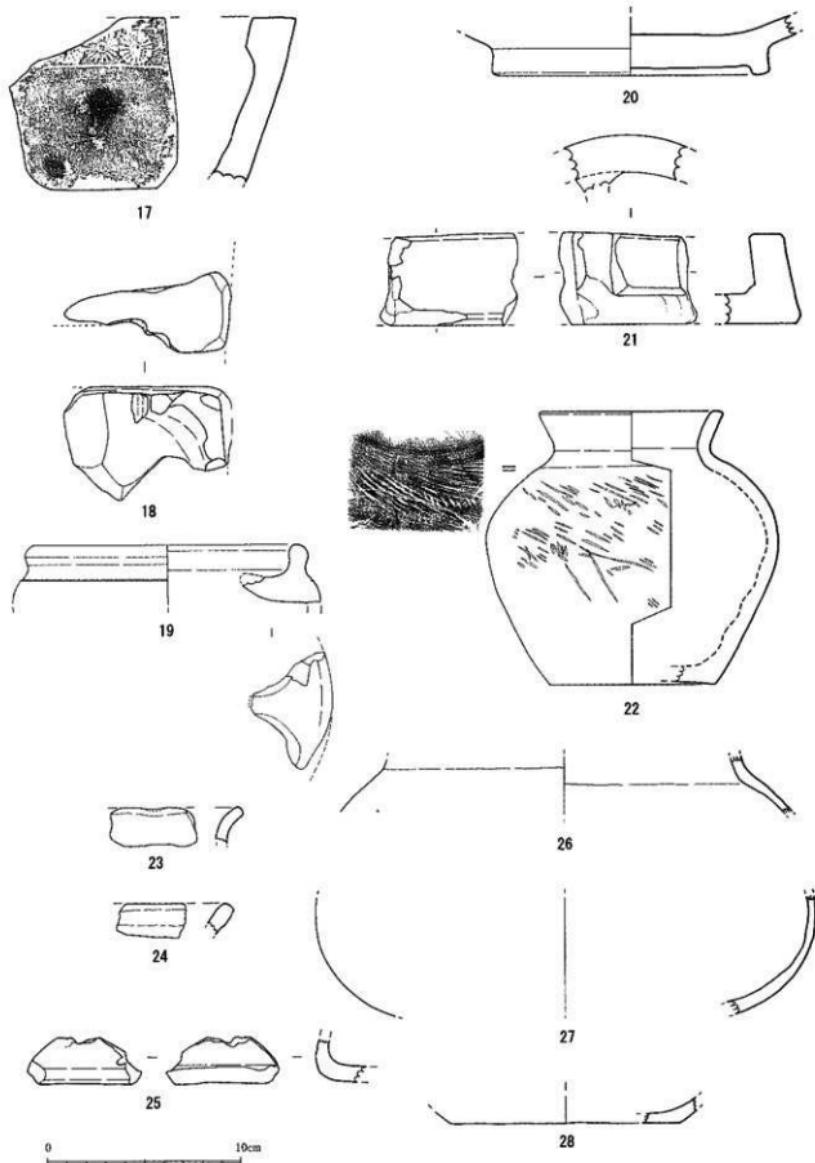
圖版 58 沖繩產陶器・土器 17(瓦質土器 1)



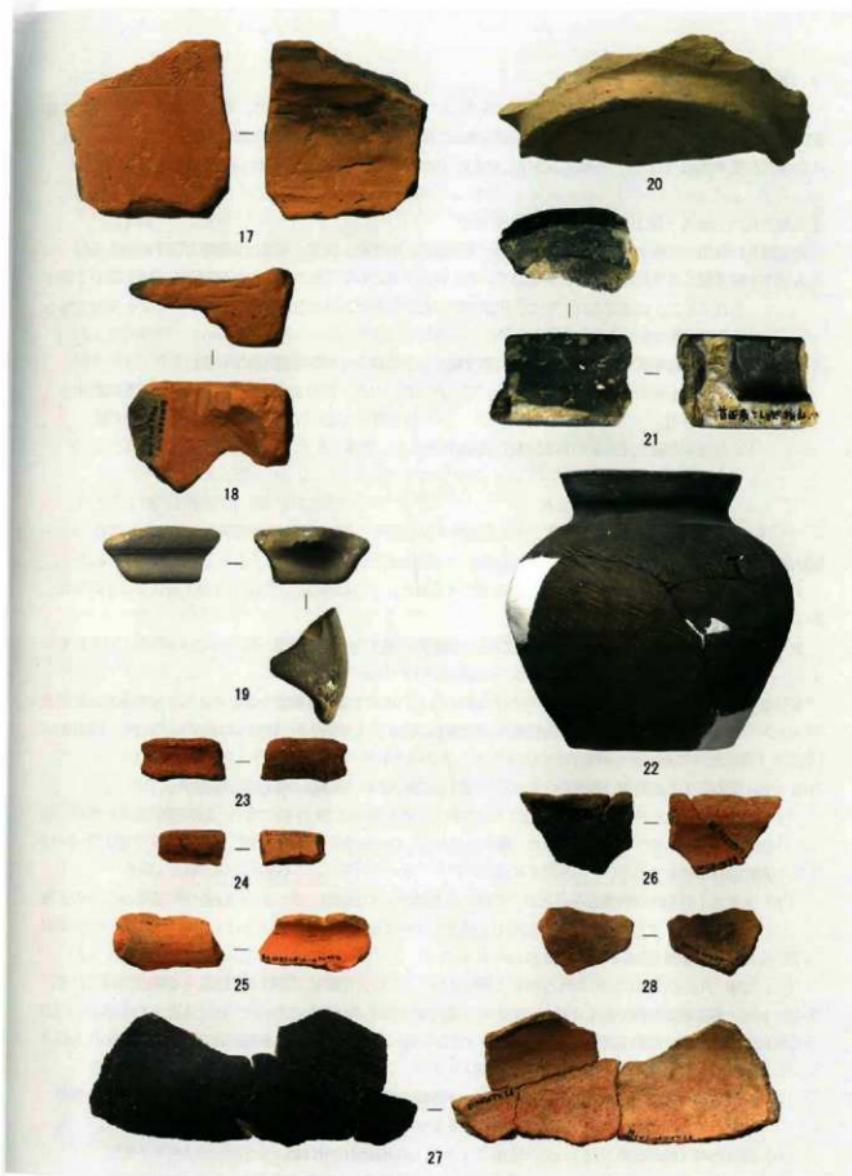
第 88 図 沖縄産陶器・土器 19(瓦質土器 2)



図版 59 沖縄産陶器・土器 18(瓦質土器 2)



第89図 沖縄産陶器・土器20(瓦質土器3)、カムイヤキ、土器



図版 60 沖縄産陶器・土器 19(瓦質土器 3)、カムイヤキ、土器

7 瓦

首里城跡正殿地区から出土した屋瓦は 60,395 点（コンテナ 660 箱分）に上る。その種類はグスク時代の高麗系瓦と大和系瓦、近世以降の明朝系瓦、近世大和瓦からなり、前3種類の比率は高麗系瓦が 274 点（1%）、大和系瓦が 8,664 点（14%）、明朝系瓦が 51,354 点（85%）をなす。以下、分類しその概要を報告する。

①高麗系瓦（分類A：第 113 図 165～第 114 図 182）

高麗系瓦は冒頭にも示す通り出土量は僅かで、その種類も軒平瓦、丸瓦、平瓦の3種類と限定的である。

A-1：軒平瓦。瓦当部片が僅かにえらされている。高麗系瓦の軒平瓦はこれまでの研究から瓦当形態が2種類存在することが確認されていて、正殿地区の出土資料は瓦当が方形を呈する1タイプで、瓦当文様も1種類と少ない。

A-2：丸瓦。玉縁を有する丸瓦である。打捺文様は羽状文様タイプが確認されている。

A-3：平瓦。平面形がほぼ長方形を呈する瓦で、凸面側の打捺文様や文字銘の違いから3種類を確認することができる。

1) 癸酉年高麗瓦匠造銘のある平瓦 35 点

2) 大天銘のある平瓦 5 点

3) 格子文様のある平瓦 2 点

②大和系瓦（分類B：第 102 図 86～第 113 図 164）

大和系瓦は断ち割りトレンチ部分からまとめてえられた。それ以外の出土製品も含めて分類すると軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、雁振瓦からなる。

B-1：軒丸瓦。現在沖縄県内で出土している2種類の三巴文様と蓮華文様が得られている。出土量としては個体数をみるため瓦当部と丸瓦部分の破片に分けて集計した。

B-2：軒平瓦。軒平瓦は瓦当文様を中心に分析すると、唐草文様の5種類を確認することができた。ただ全体を残すものがみられず、いずれも破損資料が多いことから、瓦当部と平瓦部分に分けて、集計を試みた。

B-3：丸瓦。丸瓦は色調、大きさ、凹面の文様、凹面の処理、個体数の観点から報告する。

(1) 色調：色調は灰色と褐色の2種類に大別される。その比率は 56 対 44 である。破損資料が多いため、玉縁部・端部・筒部の三部分に分けた。個体数をみるため端部角が総数 224 点で、2 倍すると、およそ 112 点の個体が推定される。

(2) 大きさ：形態的な特徴をみると、玉縁の長さは小：4 cm未満、中：4.1～5 cm、大：5.1 cm以上の三種に分けてみた。また、端部凹面の面取りの長さも 1～7 cmまでの8段階に分けて観察した。完全形の資料をみると、全長は 40.6 cm、筒部 24 cm である。

(3) 文様：丸瓦の凹面に認められる叩き文様の種類は、羽状文、雷文、魚文、繩目文、その他に分けられる。また、基本的に玉縁で消し作業が行われていて、いずれも消えかかるもので不明としたものも多い。凹面にも製作作業に関わる痕跡がみられる。それは刺繡状の細圧痕である。横部分は同じ個体においても長さの差が大きいため、縦方向の組間隔を計測してみた。

(4) 凹面痕跡：出土資料にみる圧痕はすべて、刺繡状のみの資料である。この網状の縦縦間の長さを測り、その状況を観察した。1.5 cm以下のものから 4.1 cmのものの 7 段階に分けてその傾向をみてみた。

(5) 端部処理：端部面取りは 1 cm以下から 7.1 cm以上の 8 段階に分けた。

(6) 個体数：玉縁の数では 188 個体、端部角からの推算では 341 個体が推定される。

B-4：平瓦

- (1) 色調：平瓦は色調が灰色と褐色を帯びるものがある。量的には58対42である。
- (2) 大きさ：平面形はほぼ縦長の四角形で復元資料から縦38cm、横20cmの大きさになる。また、その厚みは差がみられ3種類に分類される。
- (3) 厚み：平瓦の大きさに反映していると推定される。薄手：1.1～1.4cm、中手：1.5～2.5cm、厚手：2.1～2.5cmとして分析した。
- (4) 侧面：側面の形態的な違いがあり、a～dの4種類に分類した。端部にもその面取りの長さの違いがあり、1cm以下から7.1cm以上の種類がみられた。個体数をみると角のみを集計すると総数12点で、完全形に4個体の角があることから、4で割った結果3点の個体数が推定される。
- (5) 端部処理：1cm以下から7.1cm以上の間に8段階に分けてその長さのあり方を計測してみたい。
- (6) 文様：平瓦は基本的には撫で整形が全体になされているが、わずかに叩き文様がみられる。文様は×状文である。

個体数：端部角からの推算では3個体が推定される。

B-5：雁振瓦、雁振瓦はその大きさと形態から2種類に分けられる。

- I型（小形）は丸瓦部が小さく、両側に平坦な平瓦が付く形の瓦である。20点
凸面の文様は1種類で、102は代表的なものである。
- II型（大形）は丸瓦部が大きく、また、両側に付く平瓦は大きく湾曲した造形の瓦である。65点
凸面の文様は2種類確認された。裏面の整形も特徴的でI型とは造形方法が異なり、形式的な推移を想定できる。

③明朝系瓦（分類C：第92図1～第102図85、第114図183～第115図195）

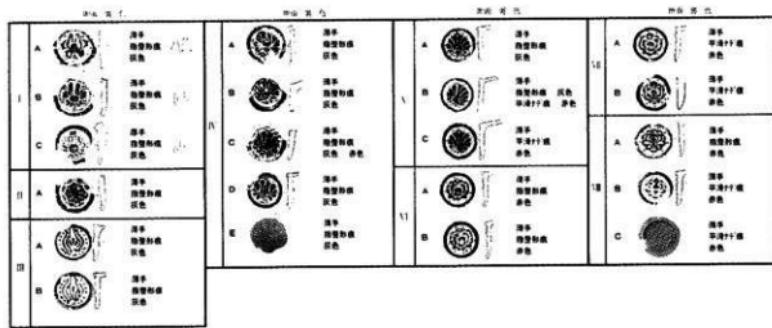
今調査で最も多く出土した瓦群である。軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、役瓦と種類及び形態ともバリエーションが認められた。

C-1：軒丸瓦。文様は8種類から構成されている。色調別には灰色系瓦と赤色系瓦に区分される。その比率は1対1になる。色調と文様との関係をみると、灰色系瓦は牡丹文様と菊文様があり、第I文様系、第II文様系、第III文様系に分類される。他方、赤色系瓦は牡丹文様系に限定され、第II文様系、第III文様系になる。

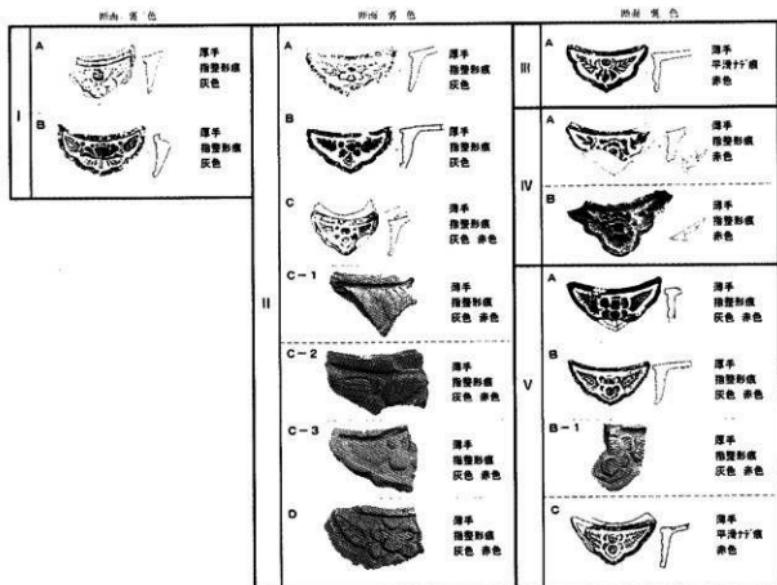
C-2：軒平瓦。文様は5種類から構成されている。軒丸瓦と同様に色調で灰色系瓦と赤色系瓦に分類される。色調と文様との関係をみると、灰色系は第I文様系と第II文様系に分けられ、赤色系では第III文様系に限定される。

C-3：丸瓦

- (1) 個体数：出土瓦は破片化していることから、部位別に分類し、それぞれ特徴を明らかにした。部位別に玉縁部、端部、筒部の3種類に分ける。
- (2) 大きさ：玉縁部はその形態、大きさ、整形で細分を実施した。玉縁の長さの基本的な大きさは、指本数と添える指の形に関係するものと思われる。以下の3タイプに分けることにした。平面的な形態と断面に特徴があり、玉縁の頂部にやや面を成すもの、なさず斜面をとるものと長さは共通するが、形状に差があり、長短とグレーブ分けが難しいものも認められる。
- 短いタイプ=3.5～4.0cm
中タイプ=4.0～5.0cm
長いタイプ=5.0cm以上のもの



第90図 明朝系軒丸瓦分類一覧



第91図 明朝系軒平瓦分類一覧

- (3) 端部整形：端部は面取りの有無で大別し、面取りの有るものはその幅の長さで6種類に細分し観察した。1cm未溝、1～2cm未溝、2～3cm未溝、3～4cm未溝、4～5cm未溝、5～6cm未溝の6種である。面取りの現状は、4～5cm未溝、5～6cm未溝のものは殆どみられない。幅のある面取りは概して浅くなっている。他方、1cm未溝、1～2cm未溝のものは急傾斜で深くなるものも認められる。面取りされないタイプも概して多くみられる。そして、端部側は面取りがなされないものの、布などで1～2cm未溝程度押し広げられている。面取りが浅く弱いものも認められ、その多くが幅広くなされている。また、一見すると施されていないか、僅かに端部1cm範囲になされるものと勘定するものもある。
- (4) 付着物の状況：漆喰、セメントの使用が顕著である。セメントは漆喰の上に重ねた状態になるもので、後の補修を感じさせる。セメントの色は暗灰色で色調からも区別がなされる。マンガン釉が塗布された丸瓦も絶対的に少ないものの存在している。マンガン釉の塗布される範囲は凸面側全体である。ただし、玉縁の上面は行われない。

C-4：平瓦

- (1) 大きさ：凹面に撫でを施す平瓦で、赤色瓦に限定されるが、凹面に縱化方向の撫でが行われている。ただし、大和瓦の様な光沢があり、全面に徹底するものではない。方向は広端から狭端側方向に幅約3cmの道具で撫で、布目が消えている。この瓦のもう一つの特徴としてマンガン釉が使われている。
- (2) 付着物の状況：マンガン釉の塗布される平瓦である。その殆どが狭端側の半分にみられる。大形の箇で内面と外面に施す。そのため内外面のレベルの差がわざわざにみられる。この狭端側の凹面両側には丸瓦の截った跡である漆食の付着があり、マンガン釉の範囲が丁度中空にさらされている範囲と重なる。マンガン釉の施されないケースにおいても、漆食は狭端側の両側に残る。重ねが正殿の場合は二枚重ねである。
- (3) 整形：凸面の撫での特徴。赤色瓦では狭端側の撫では概して強く撫でるものと、極めて弱くなれるものがある。あるケースは指が二本程度である。一方、灰色瓦の場合は指撫での強いものはきわめて少ない。広端面側は赤色瓦の場合は指が3本程度の強い横撫でがなされ、三条の凸線が走る。灰色瓦の場合は道具により行われ、同様の幅で一定の幅広の断面がみられる。
- (4) 平瓦の整形痕について：広端側の凹面にはとくに赤色瓦の場合、指3本の撫で溝が横走している。それが灰色瓦になると、道具を用いたような幅広の帯状へこみとして横走る。

C-5：役瓦、雲形、花形、龍頭、茎など漆喰の付着した製品、大形丸瓦、特殊な丸瓦などからなる。ここに前者の漆喰に貼り付けて使用するものは手造ね成形である。

- (1) 雲形：製品はその大きさにより小形、中形、大形の三種類に分類される。小形は約20cm、中形は約25cm、大形は約35cmとなる。得られた量は小形が20点で、描かれた渦巻きの数により、一巻き、二巻き、三巻きの3種類がみられる。詳細にはさらにそれぞれ分類される。焼成例には赤色が占める。中形は4点、破損が著しいため巻の数は確定することができない。赤色が4点。大形は19点、一巻き、二巻きまで確認された。他は不明。色調はそれぞれ1点ずつ。不明破片からなる。造形は総て手づくりであり、細かく凸状の裝を作りながら描いている。しかし、その造形を反転した凹状の線で描く製品もみられる。試みに粘土をもって写しとると、明らかに凸状装になるもので、昭和初期の修理時に応急処置として、現存製品をかたどって製作したものとみられるもので、当然ながら昭和7年時の製品として断定されるものである。当製品の利用は大棟や降り棟の側面部分に貼り付けられたもので、その使用を窺わせるよう裏面及び側面の半分までが漆喰の付着痕を留めている。
- (2) 花形：牡丹の花や茎、葉などをデザイン化したものである。3種類を確認することができる。いずれも褐色系と灰色系からなる。量的には僅かではあるが、明らかに瓦質に造形された粘土製品である。これらも雲形製品と同じく裏面や側面の半分以上に漆喰の付着痕を留めるため、壁状の部分に張り込めたもので

あることが理解される。

④近世大和瓦（分類D）

出土量は極めて僅少であるが、軒平瓦、軒丸瓦が認められる。軒丸瓦は殆ど扁平化した巴文様を瓦当にもつもの。他方、軒平瓦は唐草文様の瓦が認められる。

小結

正殿地区出土の瓦は高麗系瓦、大和系瓦、明朝系瓦、近代大和瓦の4タイプからなる。I期基壇の周辺からは大和系瓦を中心として瓦が大量に出土することから、建物に葺かれていたと考えられる。年代は廃棄層の陶磁器から15世紀中葉以前と判断される。II期基壇からVI期基壇までは瓦の明確な出土ではなく、おそらく板葺きの可能性が高い。大量に表土層を覆う明朝系瓦は、最後のVII期基壇に帰属するものであろう。なお、高麗系瓦の出土は極めて微量であるため、当該地域に存在した建物に使用したのではなく、流れ込みや、当時の造成土に混入していたものとみられる。

8 塙

塙はその機能と平面形態からI～IVの4タイプに大別される。Iは平面形が長四角形で、複数組み合わせて使用するもので、かみ合わせの凹凸面の違いからA～Cに分けられる。IIは下駄状の突起を成形するもので、一つ独立して説明する。IIIは平面的に敷いて機能するもので、平面形が正方形と三角形の2タイプが存在する。IVは平面形が長方形で漆食などの接着材を併用して積み上げて使用するタイプである。以上これらはさらに色調により違いがみられ、それぞれ特徴を有する。

I 嘴み合わせタイプ（灰色）

平面形が長方形で、長軸の側面が短軸の両側面に段差が成形され、それぞれをかみ合わせて使用される。当該製品はその他の製品に比較し概して厚く、還元焼成の灰色色調の製品に偏在する。用途は暗渠など埋設で使用するものとみられる。

- A 長方形。蓋としての機能が窺われる。
- B 長方形。底に敷かれる用途が推測される。
- C 長方形。暗渠の側面を構成するものである。

II 下駄状タイプ（灰色）

平面形が長方形をなし、厚手はみられない。最大の特徴は下駄状に歯がつくもので、その端部にかかりを造るものとそうでないものがある。このタイプは還元炎焼成のみで、酸化炎焼成のものはみられない。色調は灰色を呈する。

III 塙（平面敷き用）

平面形が正方形と三角形を呈するのが基本形態である。還元炎焼成の灰色系製品と、酸化炎焼成の赤色系製品の二群に分け、厚み、その他成形で細分した。

灰色製品

1 正方形

A a 類：一辺の長さが 24~26 cm タイプで、5~6 cm 台の最も厚いタイプと、3~4 cm の比較的数の多いタイプからなる。

A b 類：薄手のタイプである。側面に X 状の線描を残すものがある。

2 三角形

B a 類：5~6 cm 台の厚みのあるタイプである。成形には基本的に四角墻を対角線から切り取って二枚にしたもので、切り取った側面に横方向の線痕がみられる。表面に○大のスタンプを残すものがある。スタンプは明瞭でいずれも目立つ表面になされている。基本的には灰色であるが、酸化のためか褐色を帯びるものも含まれる。側面に二本の平行する線描がみられる。

B b 類：3~4 cm 台の薄手をこのタイプとした。対角線の切り取り側面に X 状の線描をみとめる。

赤色製品

1 正方形

A a 類：上記の A a 類と同様。

B b 類：3~4 cm 台の極めて一般的なもので、出土量の多いものである。薄手である。

2 三角形

B b 類：3~4 cm 台の薄手。側面に右上から左下の斜め方向に二本の線描を施すものがみられる。

転用された墻

後述の積み重ねて使用する墻と同様な痕跡を残すものがある。成形技法としては、既にある墻に 13 cm ほど切り込みを入れ、打削したもので、その破断面がみられる資料である。

C 類：横 13 cm、厚み 3.5 cm 台のものである。丁寧に割り切り線がのこり、割取り面も比較的平面を確保しているもの。

D 類：横 12~13 cm、厚み 3.5 cm 台で、打削により、その後の調整も丁寧ではない凹凸面の割れ面を残すものである。いざれも表裏面に大量の擦痕を残し、積み重ねて使用した後述の資料と同じ使用をなすもので、転用したものと判断される。大きさも後述の積み上げ様の墻と共通している。

IV 墙 (積み重ね用)

専ら重ねて使用するために造形された墻である。上記の墻と形状、大きさに違いがあり、まず御食が表裏面に大量に付着し、一部の資料に二枚重なった状態で出土をみたものもある。明らかに積み上げて壁状にしたものとみられる製品である。平面形が長方形の板状で、色調により赤色と灰色があり、また、その大きさ、厚みなどから数タイプに分けられる。

灰色製品

還元焼成焰の灰色製品で、大きく A~C の 3 タイプになる。そしてそれぞれに厚みによる違いが認められる。

A 類：横 12 cm、縦 23.8 cm、厚み 3.4 cm のもので、現時点では小形である。

B 類：横 16 cm、縦 29 cm、厚み 3.3~4 cm。この種類は長軸の一側面に削りがあり、湾曲した側面を特徴とする一群がある。それで、B 1、B 2 にわけられる。

C 類：横 22.2 cm、縦 32.5 cm、厚み 4.4 cm の厚いものと、横 22 cm、縦 33.5 cm と大きさはほぼ類似するが厚み 3.5 cm の薄いものがある。それぞれを a b に細分した。

赤色製品

酸化焼成焰の赤色である。A、Bの2タイプに分類される。このタイプにも灰色製品同様に厚みや大きさによりサブタイプに細分される。

A類：横11cmから11.5cm、縦31cm、厚み4~4.5cmである。灰色製品よりやや縦長の形をなしている。

B類：明らかに厚みに違いがあることから二分される。a類は横15.5~17cm、厚み3.5cmの薄手と、b類の横17cm、縦33~34cm、厚み4.2~4.4cmの厚いものがある。このグループには側面の角を取り除いた丸くしたものがある。

C類：大きさは灰色製品には見られないものである。この種類も厚みで2タイプに分けられる。a類は縦・横ともに18~18.5cm、厚み3.0~3.6cmと薄いものと、b類の4.0~4.5cmの厚いものがある。なお、前者のa類には僅かであるが厚み2.8cmと極薄の種類もみられた。

D類：このタイプは保存状態が悪く完形は得られていない。横が19.8cmと最も長くなる。厚みは3.2cm、今一つは横が20.5cm、厚みが4.3cmとなるもので、この種類も2種類みられることから細分できる。

整形形状と保存状況

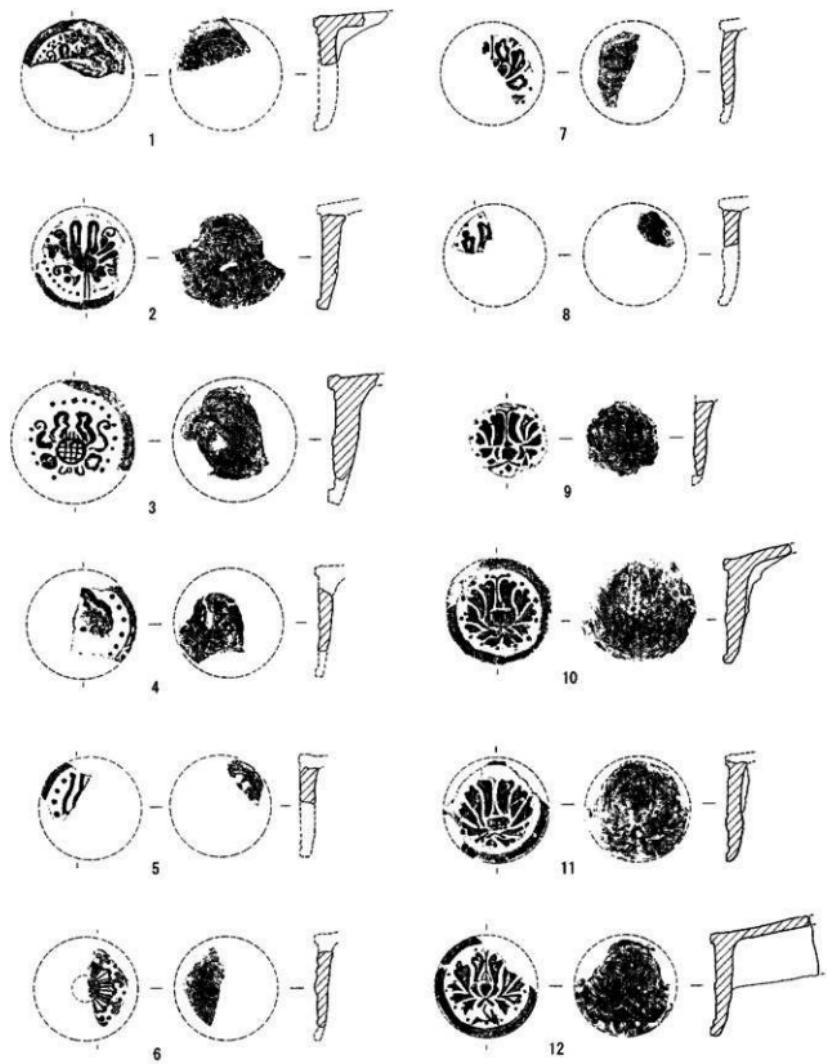
一様に漆喰が付着し、積み重ねて使用したことが推測される。表面にマンガン釉が塗布されるものもある。

刻印及び線描き

壇の側面に手描きによる単純な線で印したものである。灰色に17種、赤色に8種確認され、種類の量としては灰色に多くみられる傾向がある。刻印は表面にスタンプしたものである。壇の表側の表面に大、大の字に二が加わったもの、分銅形の刻印がみられる。ことに大の文字には陽刻と陰刻の2タイプがみられる。線描きは表面に幾何学的に施したものと側面に印したものがある。壇の表面にチェス盤のように線描きをしたものである。

煉瓦

酸化焼成焰による赤色の規格品である。大きさが横10.8cm、縦22cm、厚み6cmの直方体である。上記の壇にみられたバリエーションがなく、その大きさ、形、変化はみられない。出土量は53点である。漆喰の付着したもの、そうでないものからなる。

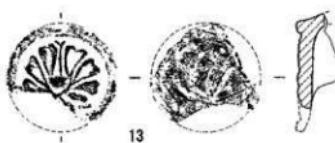


0 20cm

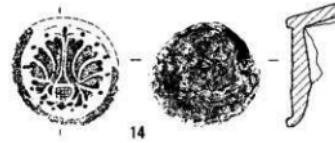
第92図 瓦1(明朝系瓦1)



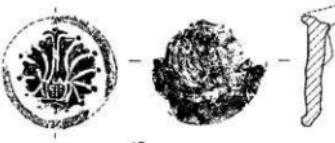
图版 61 瓦 1 (明朝系瓦 1)



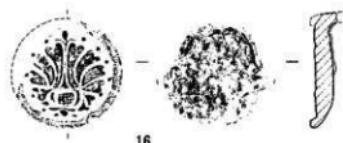
13



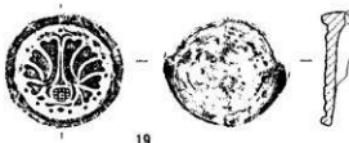
14



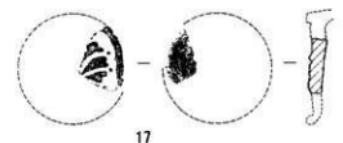
15



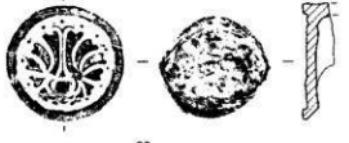
16



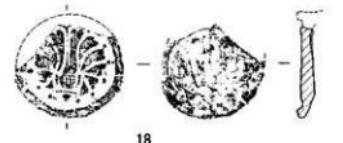
19



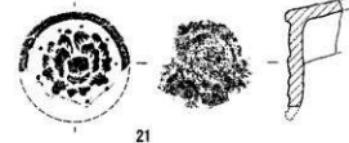
17



20



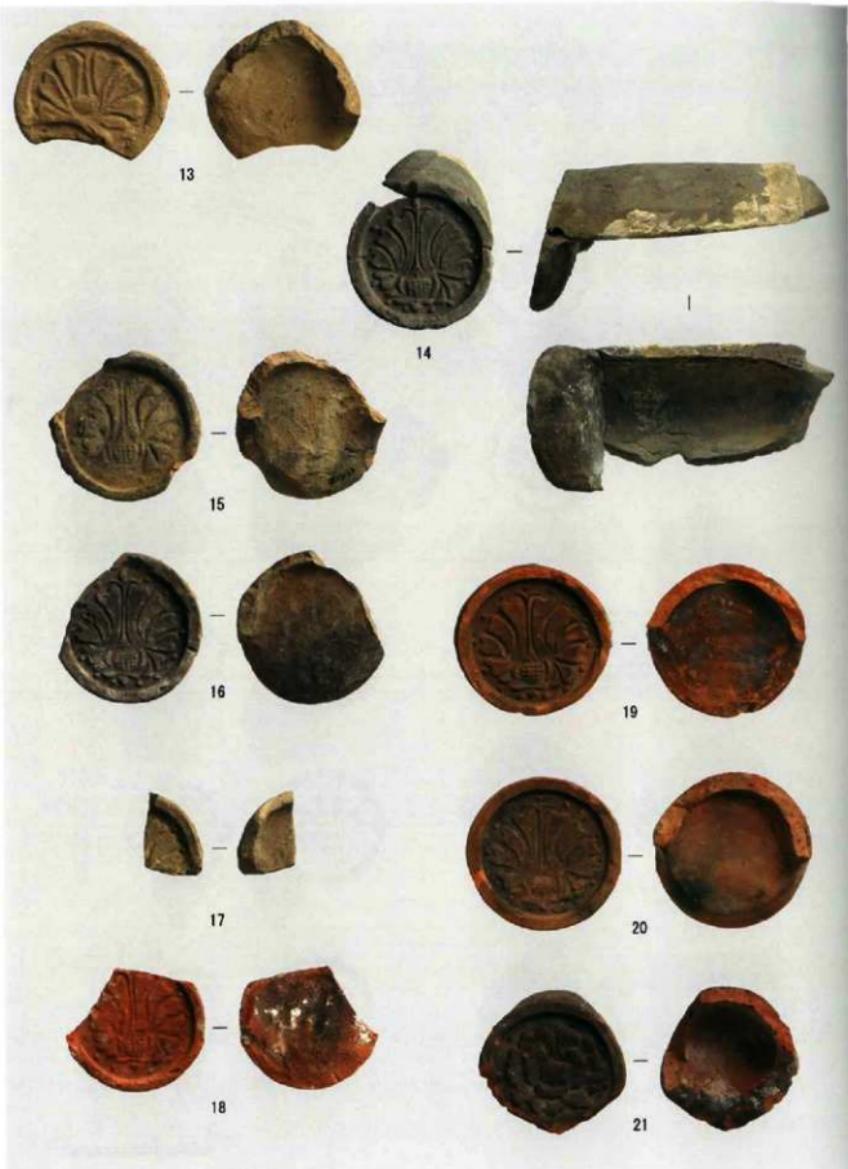
18



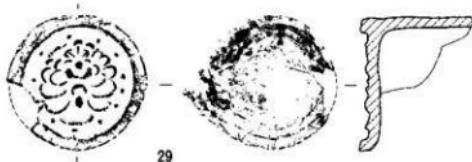
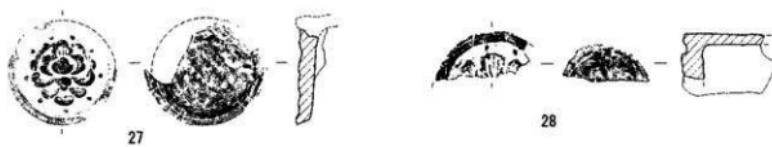
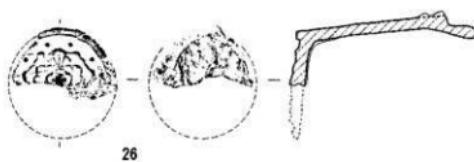
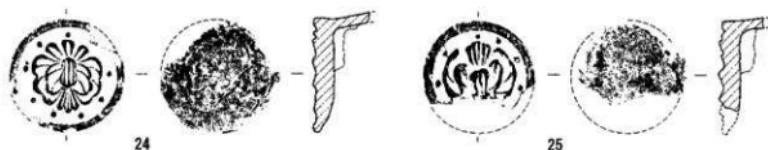
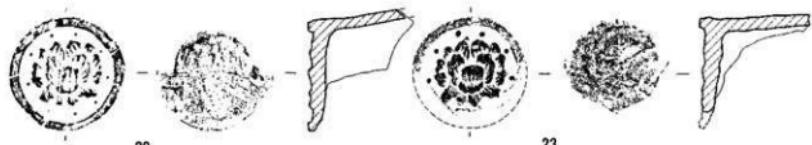
21



第93図 瓦2(明朝系瓦2)



图版 62 瓦 2 (明朝系瓦 2)

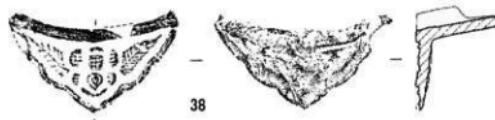
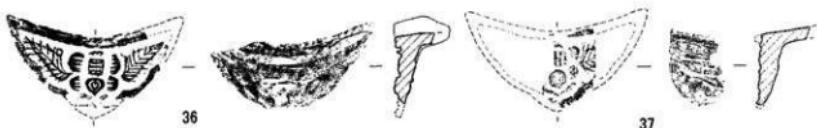
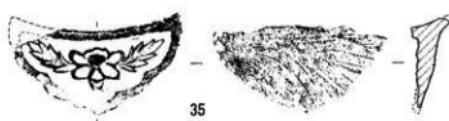
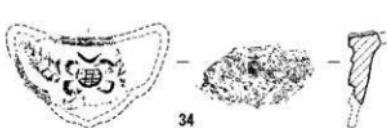
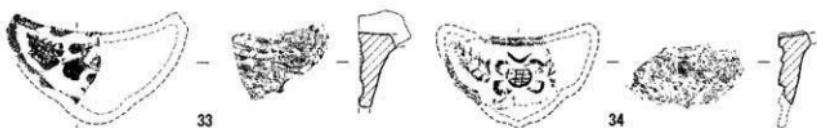
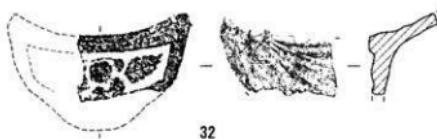
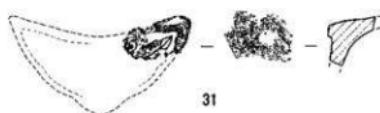
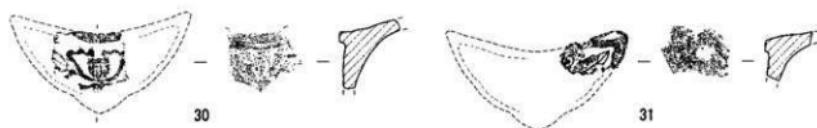


0 20cm

第94図 瓦3(明朝系瓦3)

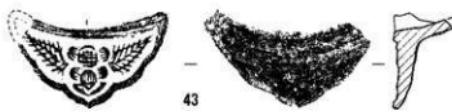
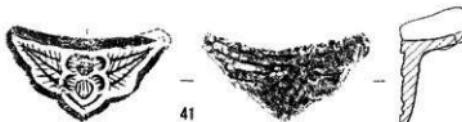
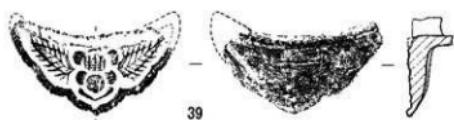


图版 63 瓦 3 (明朝系瓦 3)



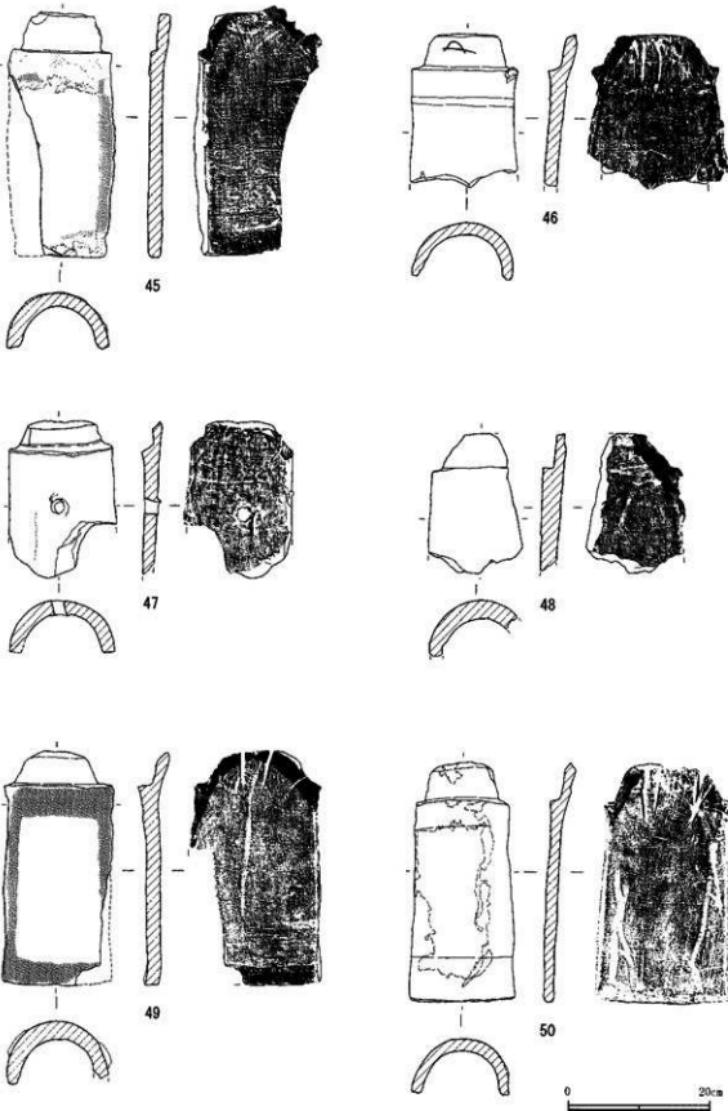
0 20cm

第95図 瓦4(明朝系瓦4)



0 20cm

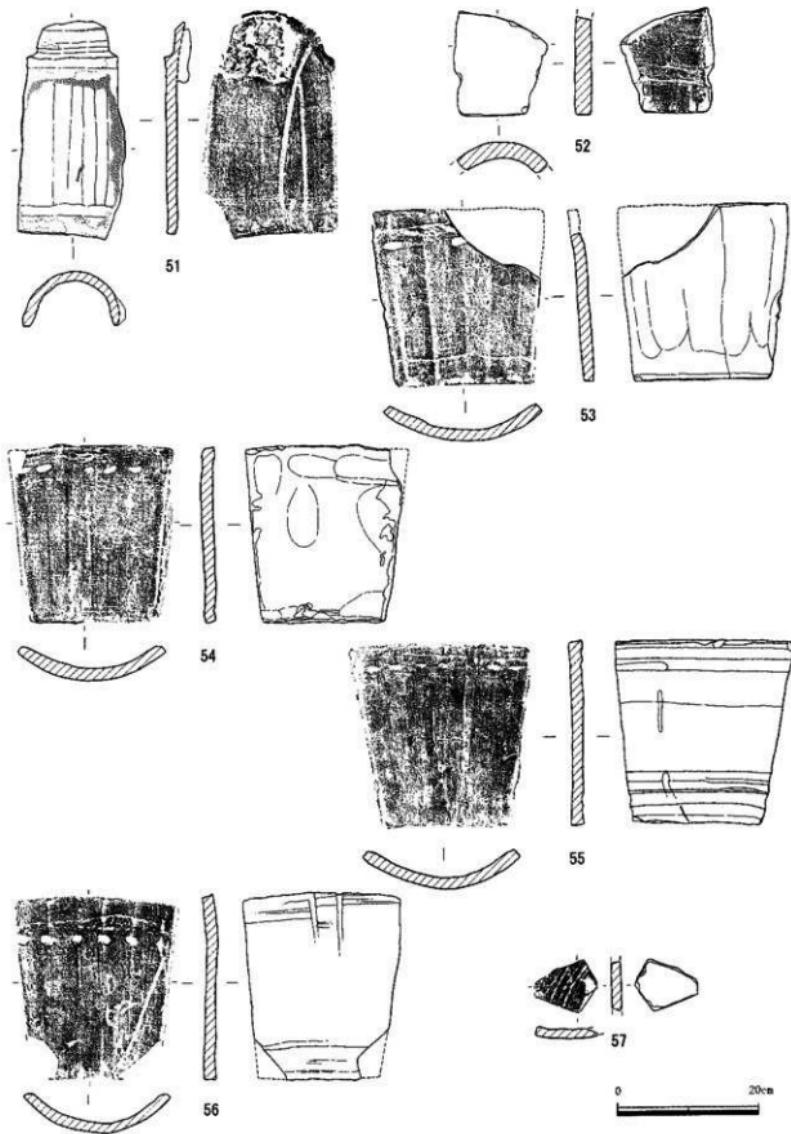
第96図 瓦5(明朝系瓦5)



第97図 瓦6(明朝系瓦6)



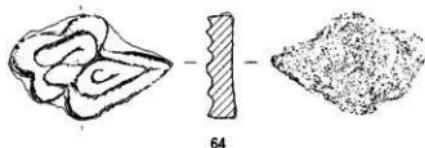
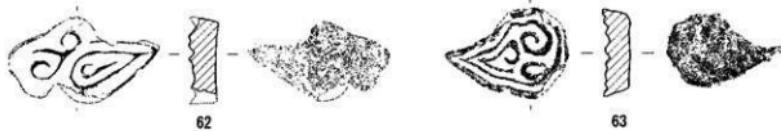
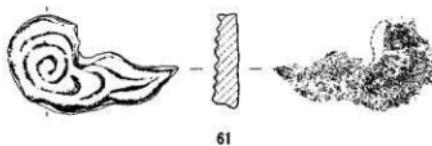
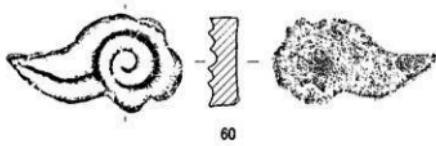
图版 64 瓦 4 (明朝系瓦 4)



第98図 瓦7(明朝系瓦7)



圖版 65 瓦 5 (明朝系瓦 5)



0 20cm

第99図 瓦8(明朝系瓦8)



58



59



60



61



62



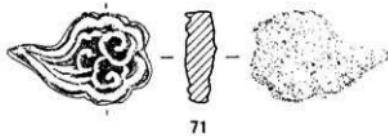
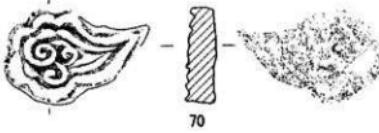
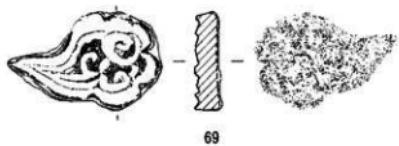
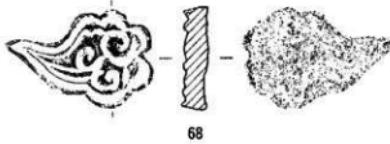
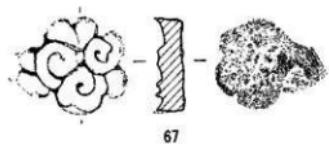
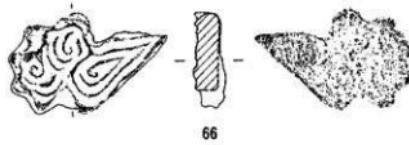
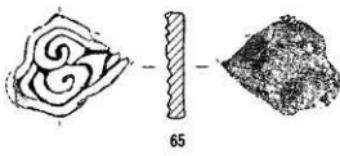
63



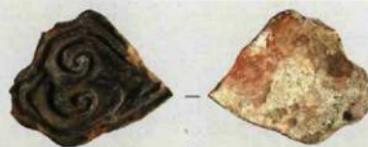
64



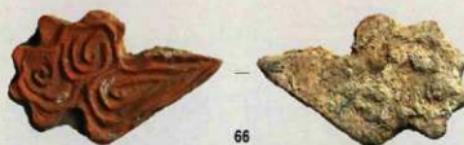
图版 66 瓦 6 (明朝系瓦 6)



第100図 瓦9(明朝系瓦9)



65



66



67



68



69

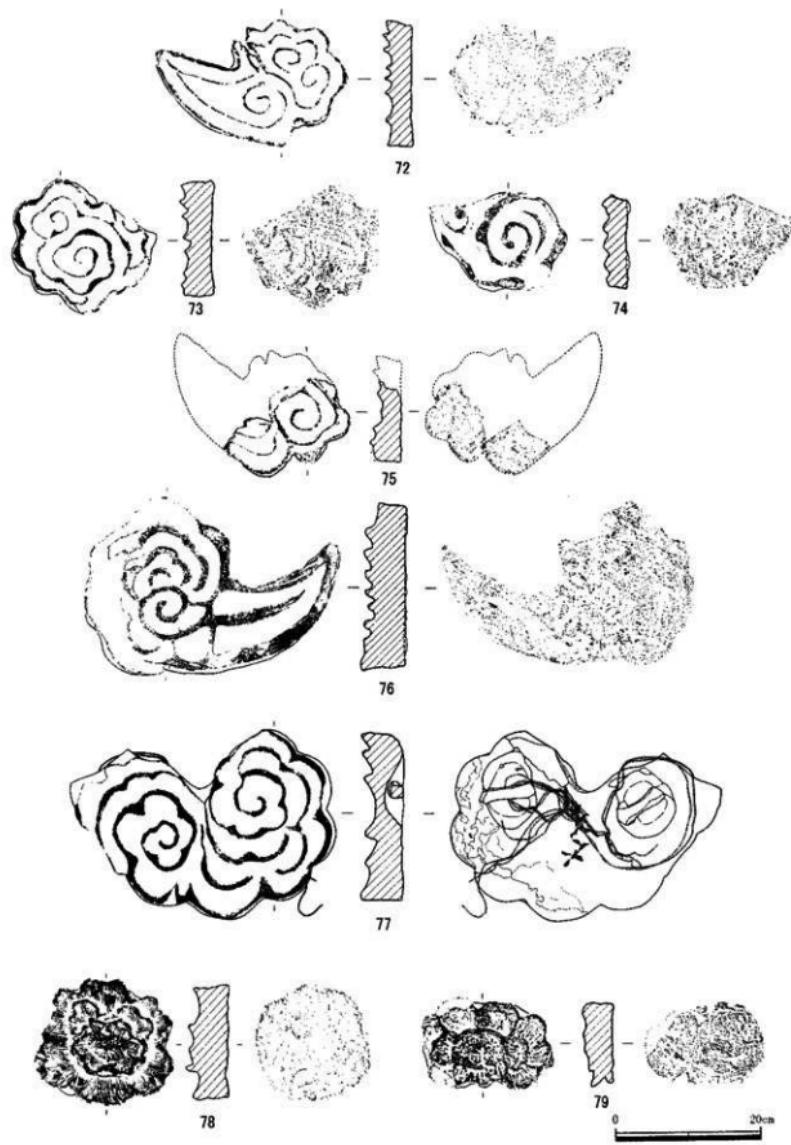


70



71

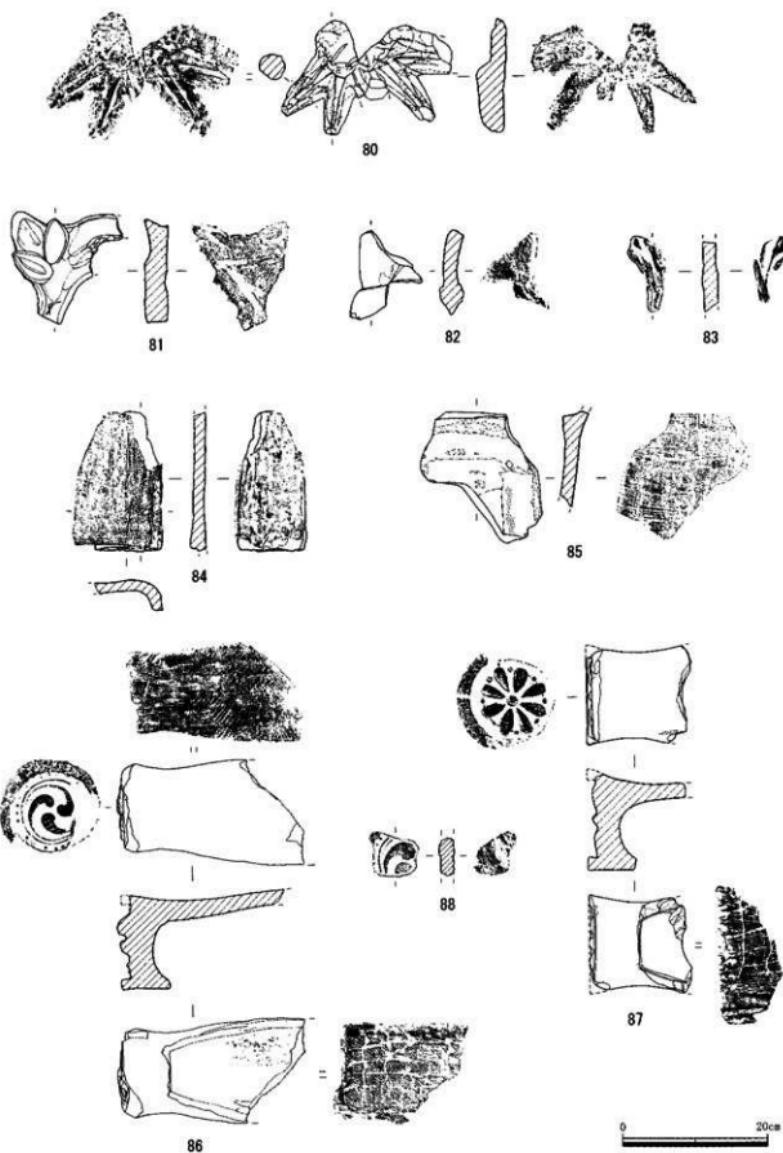
圖版 67 瓦 7(明朝系瓦 7)



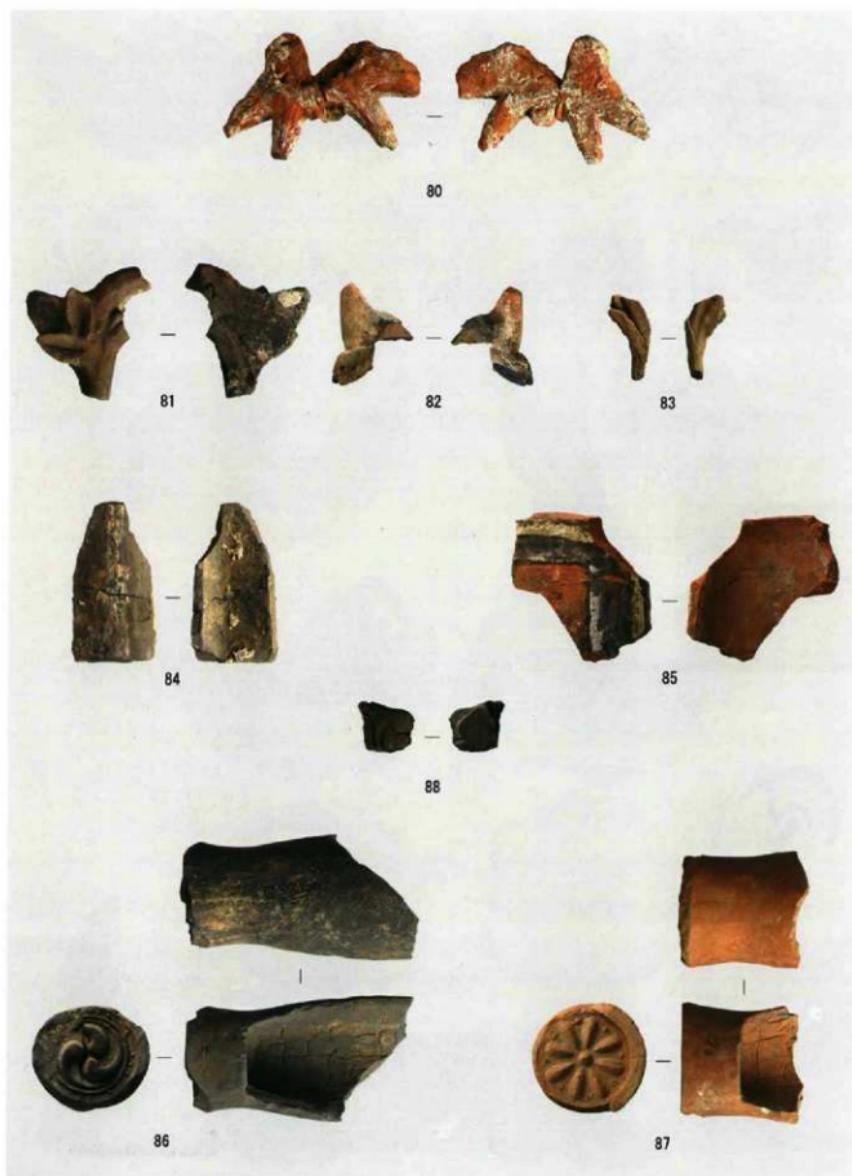
第 101 図 瓦 10 (明朝系瓦 10)



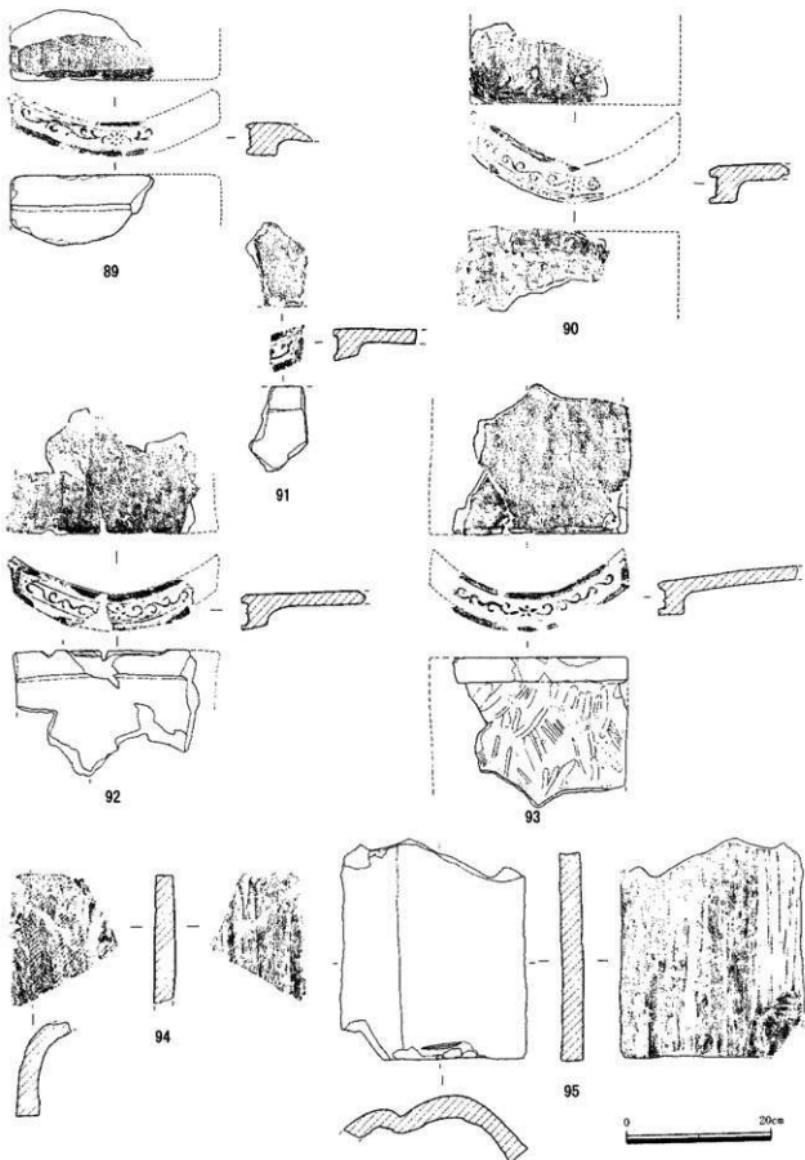
图版 68 瓦 8(明朝系瓦 8)



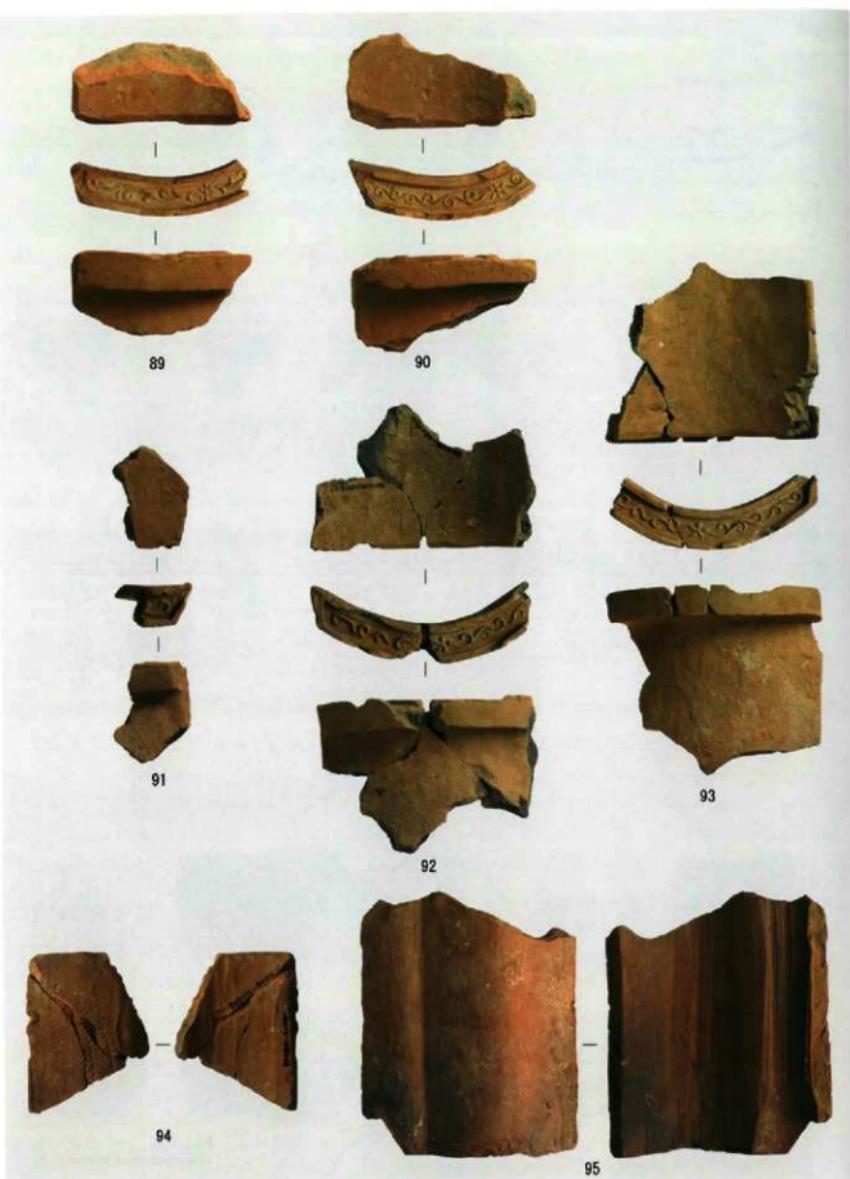
第102図 瓦 11(明朝系瓦 11, 大和系瓦 1)



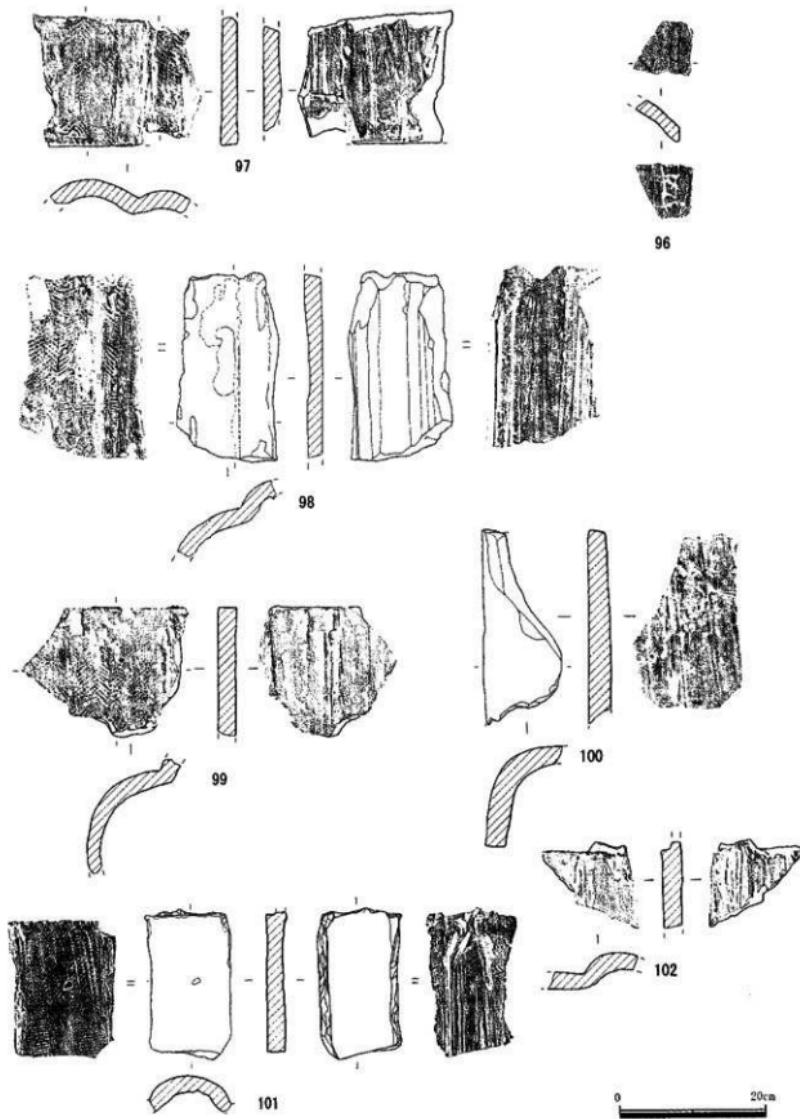
图版 69 瓦 9 (明朝系瓦 9, 大和系瓦 1)



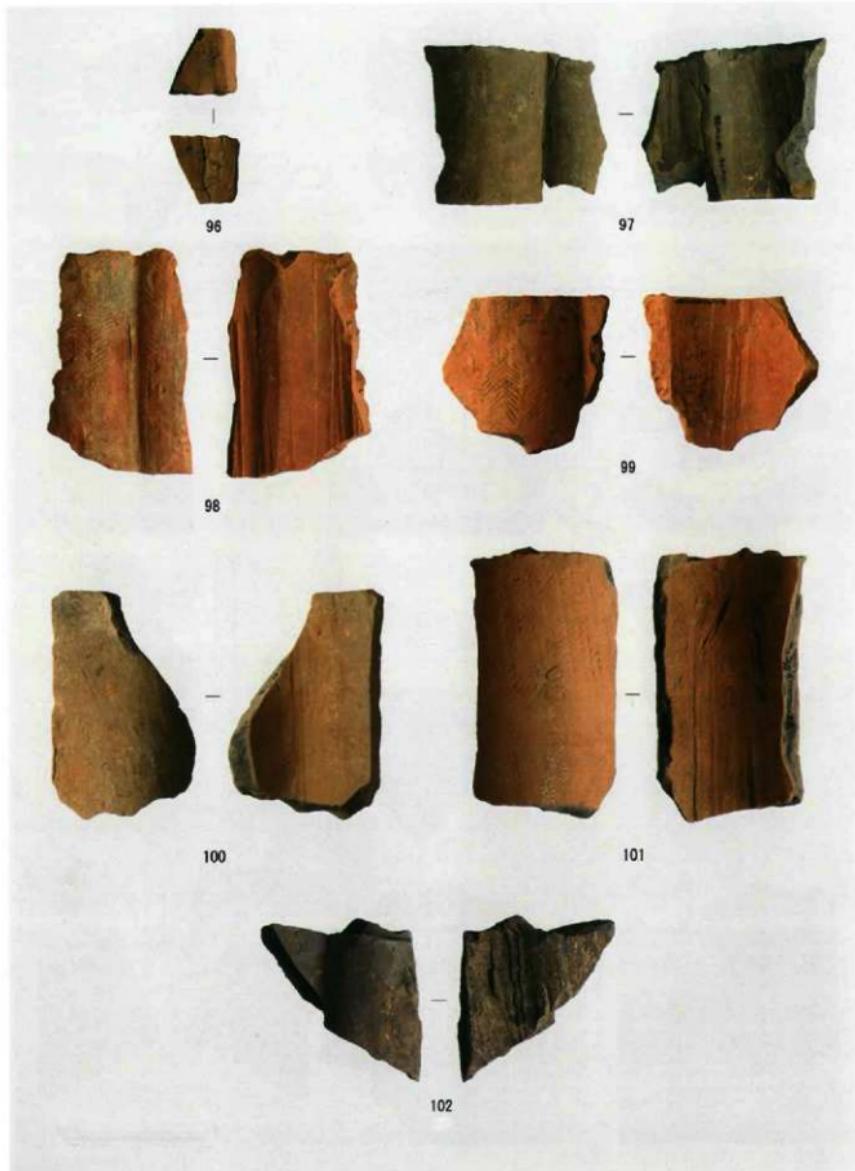
第 103 図 瓦 12 (大和系瓦 2)



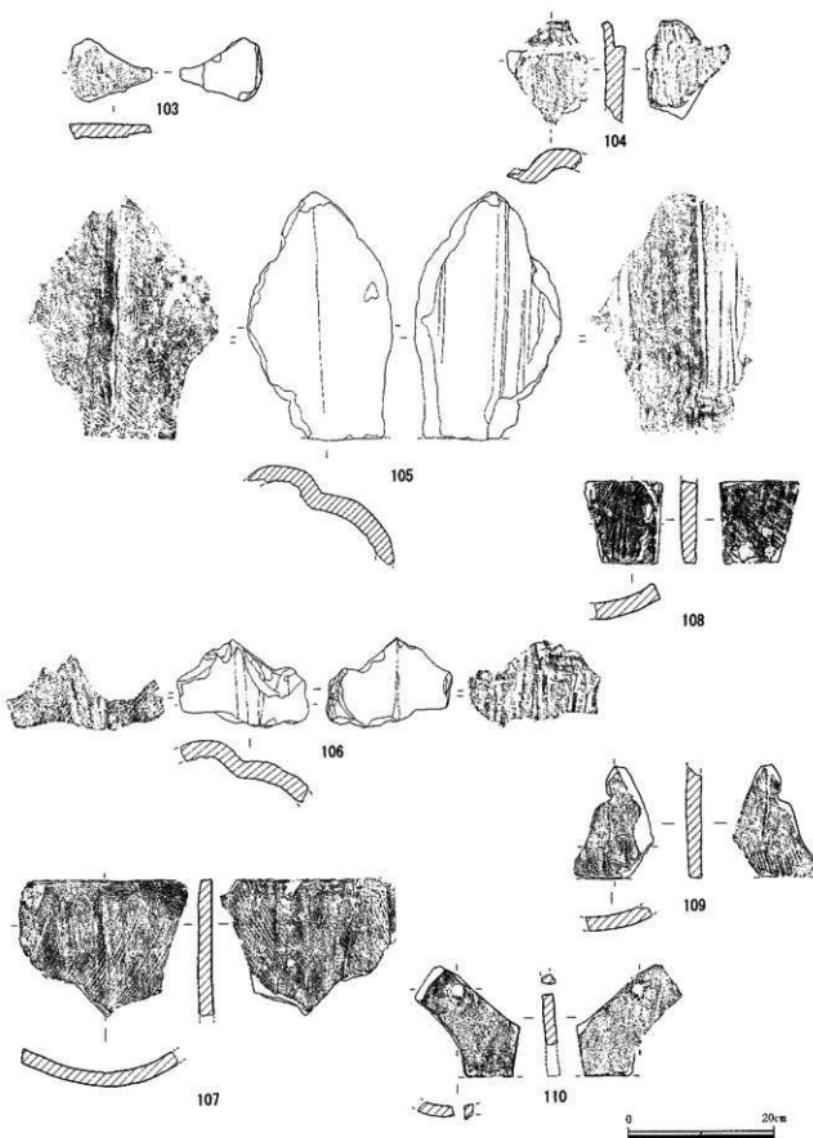
圖版 70 瓦 10 (大和系瓦 2)



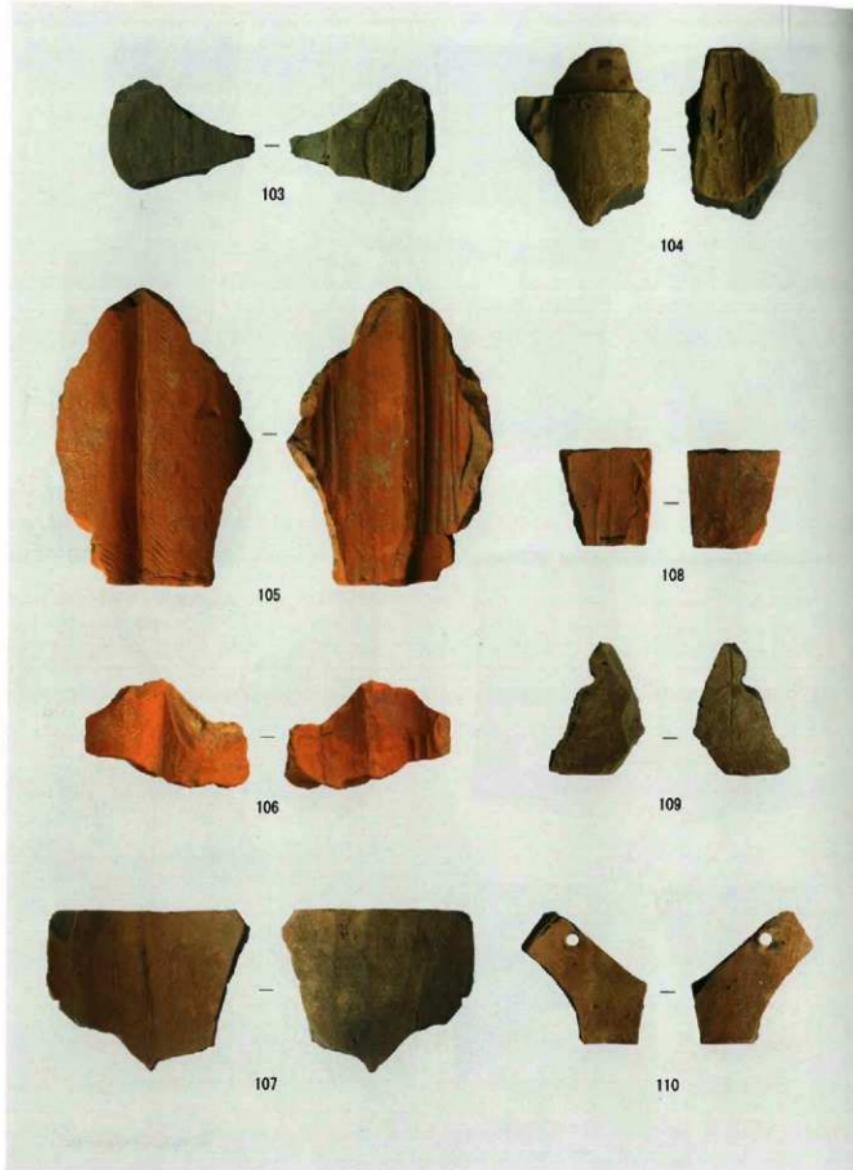
第104図 瓦13(大和系瓦3)



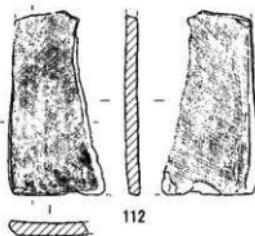
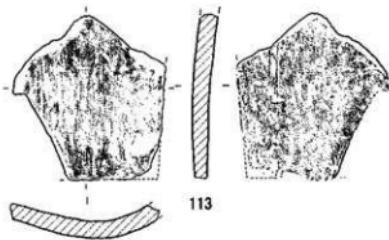
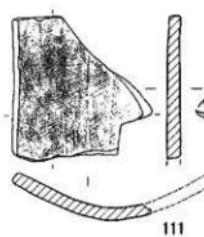
图版 71 瓦 11 (大和系瓦 3)



第105図 瓦14(大和系瓦4)



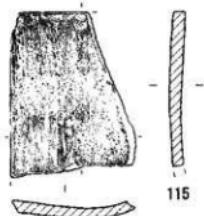
图版 72 瓦 12 (大和系瓦 4)



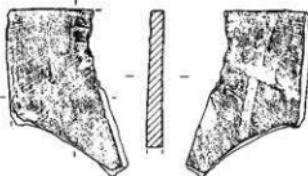
113



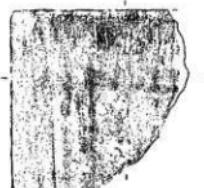
114



115



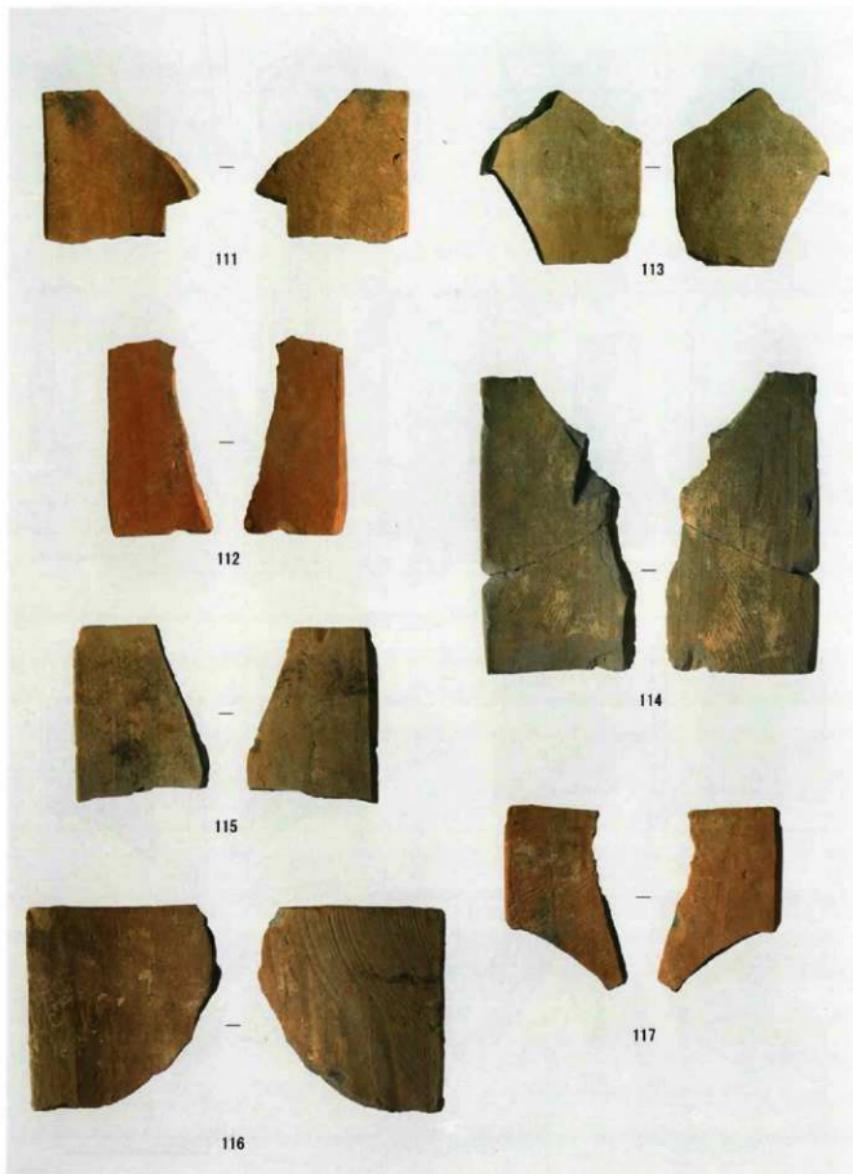
117



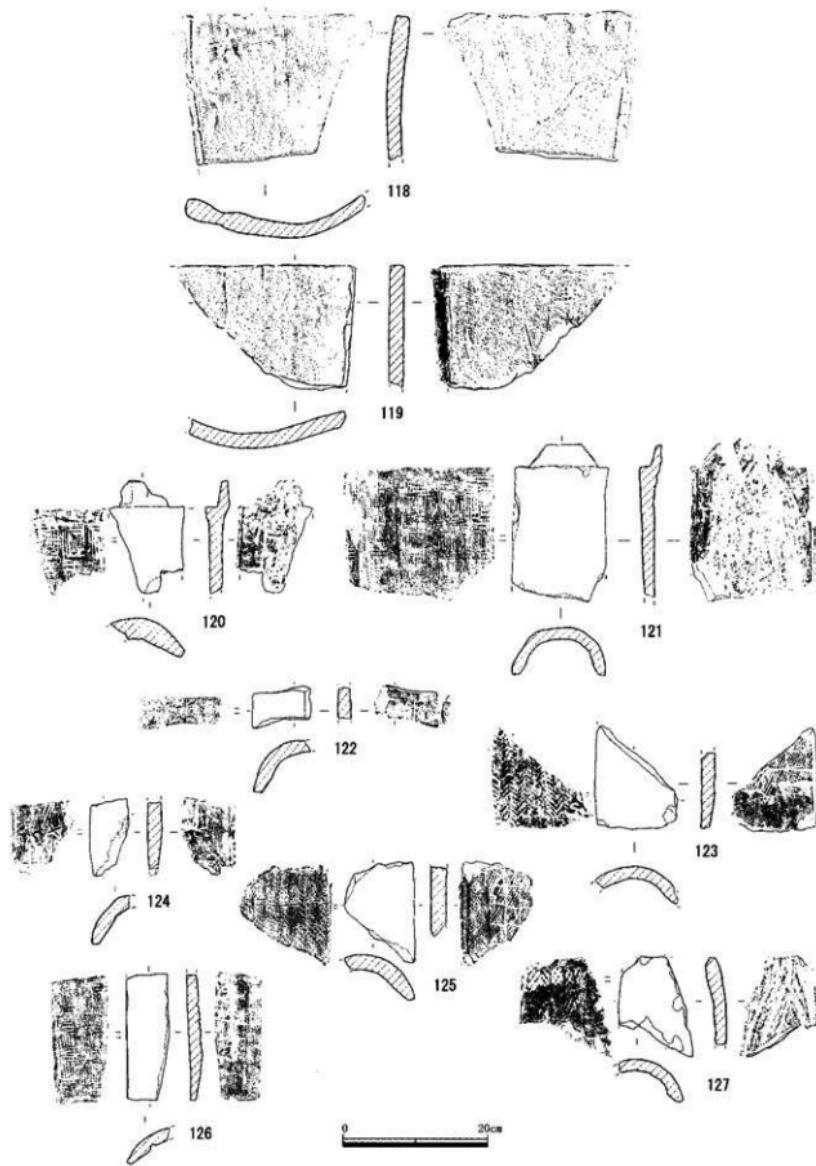
116



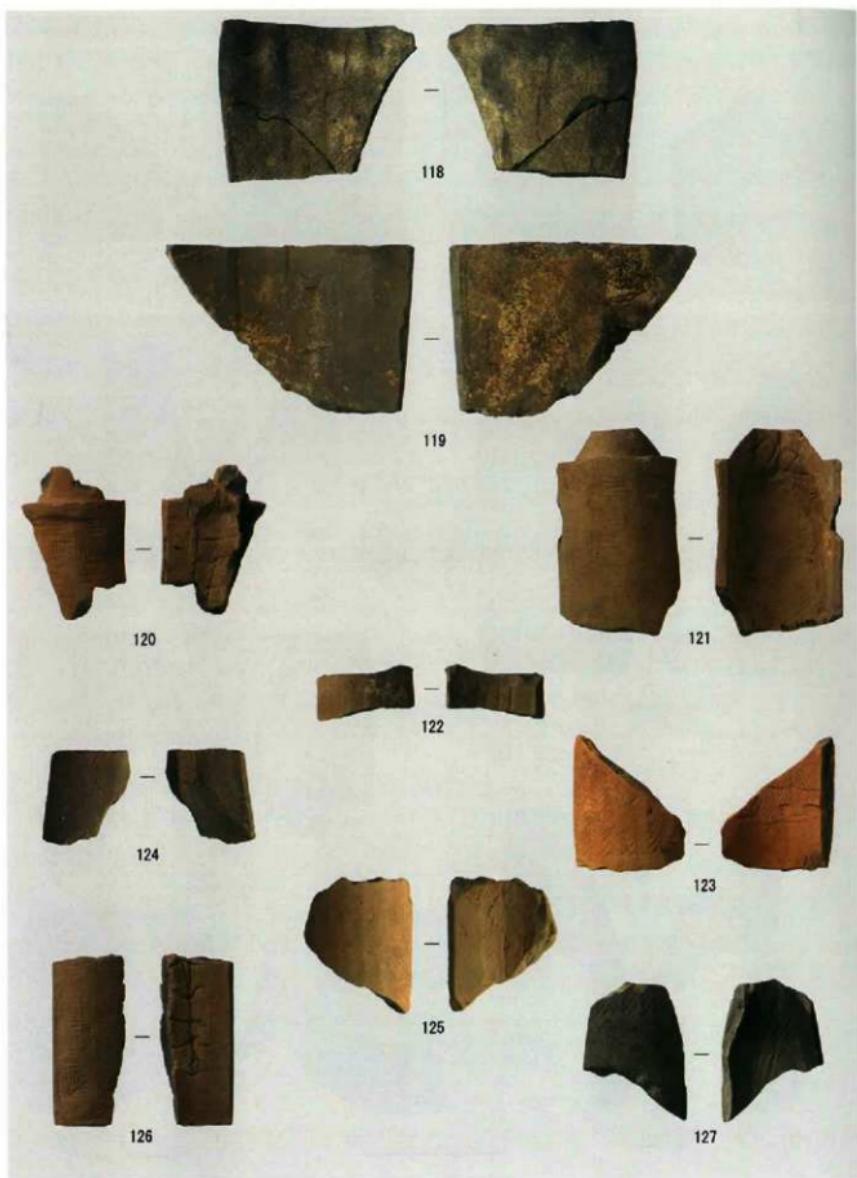
第 106 圖 瓦 15 (大和系瓦 5)



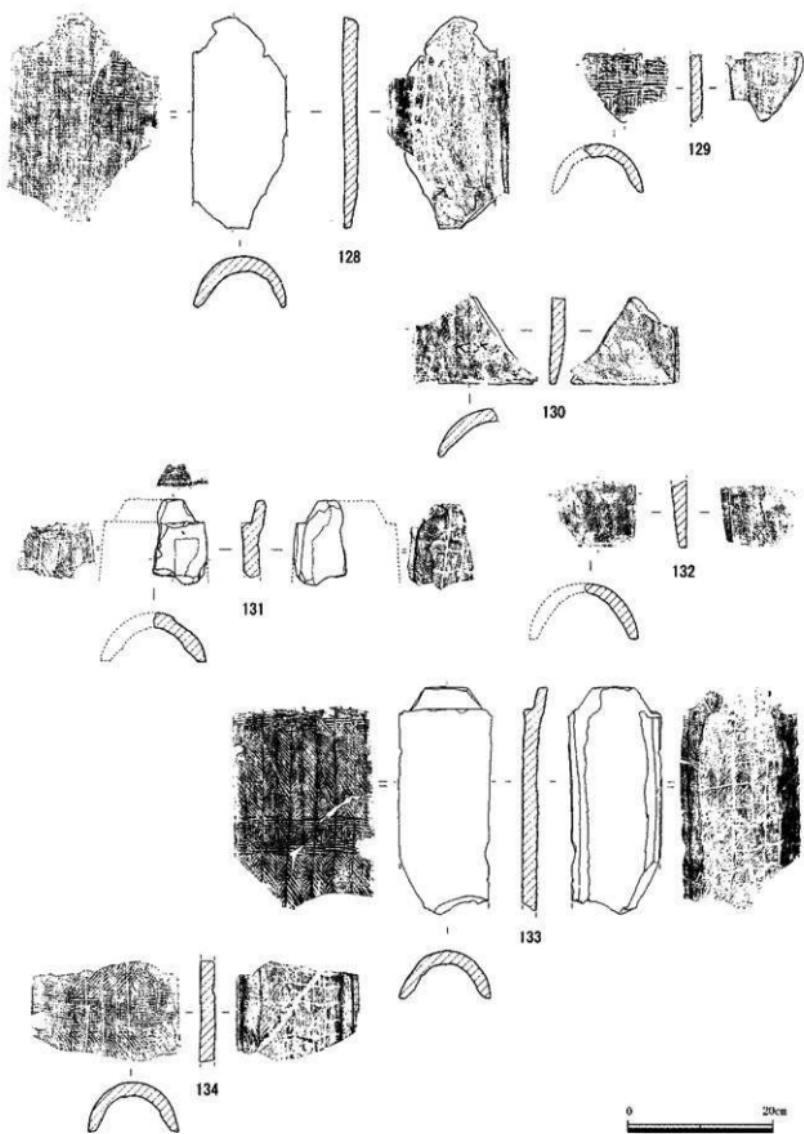
圖版 73 瓦 13 (大和系瓦 5)



第 107 圖 瓦 16 (大和系瓦 6)



圖版 74 瓦 14 (大和系瓦 6)



第108図 瓦17(大和系瓦7)



128



129



130



131



132

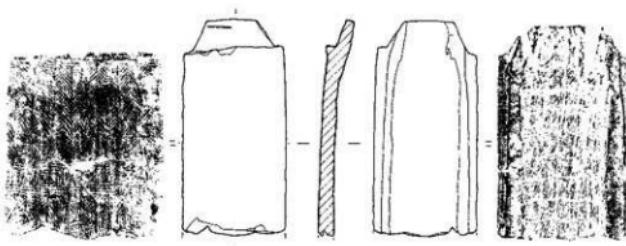


133



134

图版 75 瓦 15(大和系瓦 7)

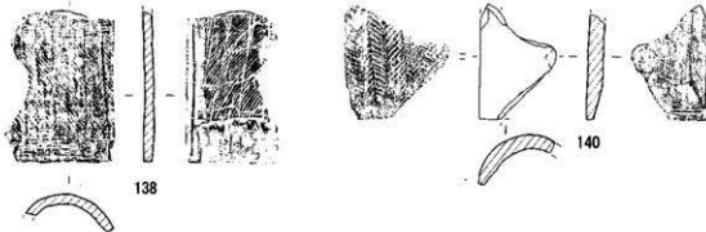


135



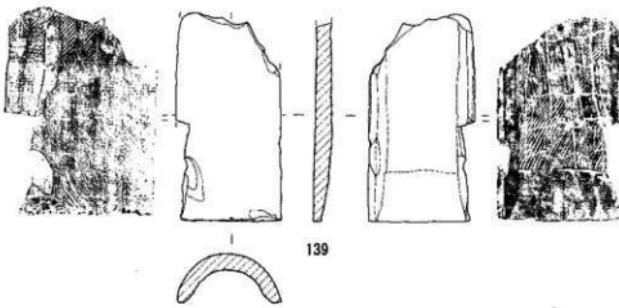
136

137



138

140



139

0 20cm

第 109 図 瓦 18(大和系瓦 8)



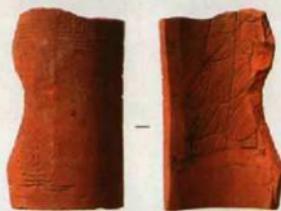
135



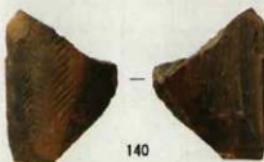
136



137



138

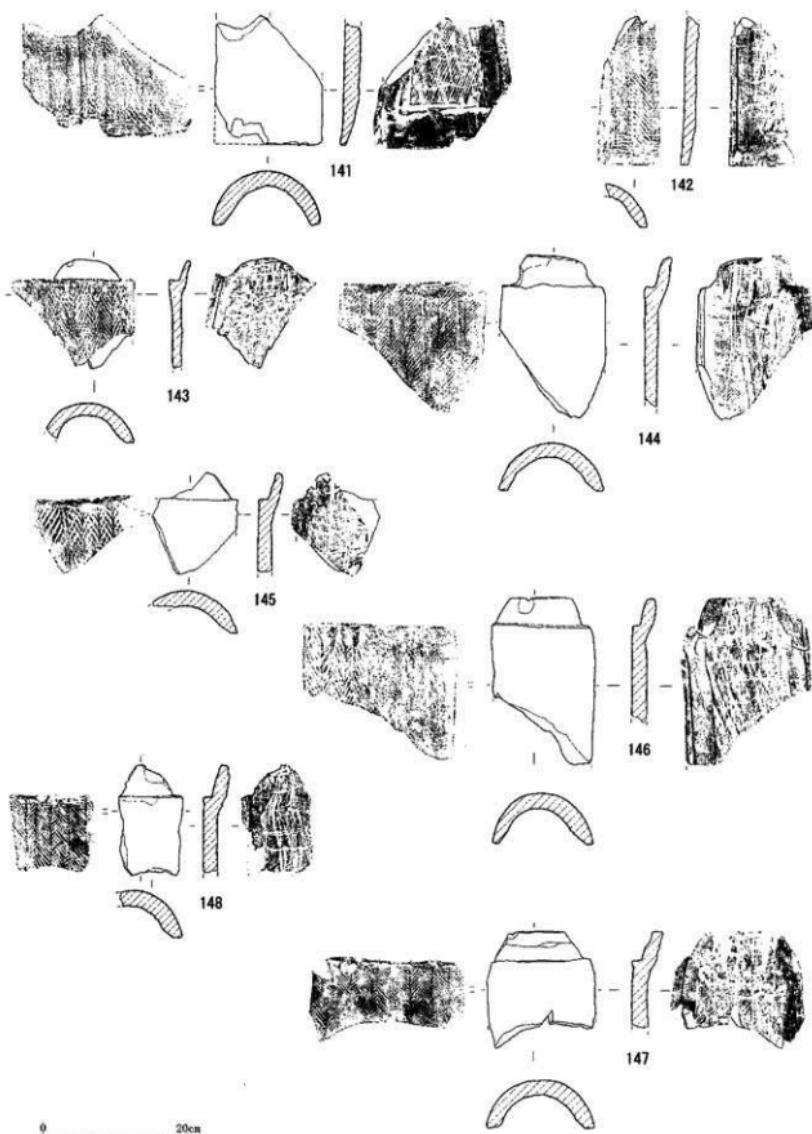


140



139

图版 76 瓦 16(大和系瓦 8)



第 110 図 瓦 19 (大和系瓦 9)



141



142



143



144



145



146



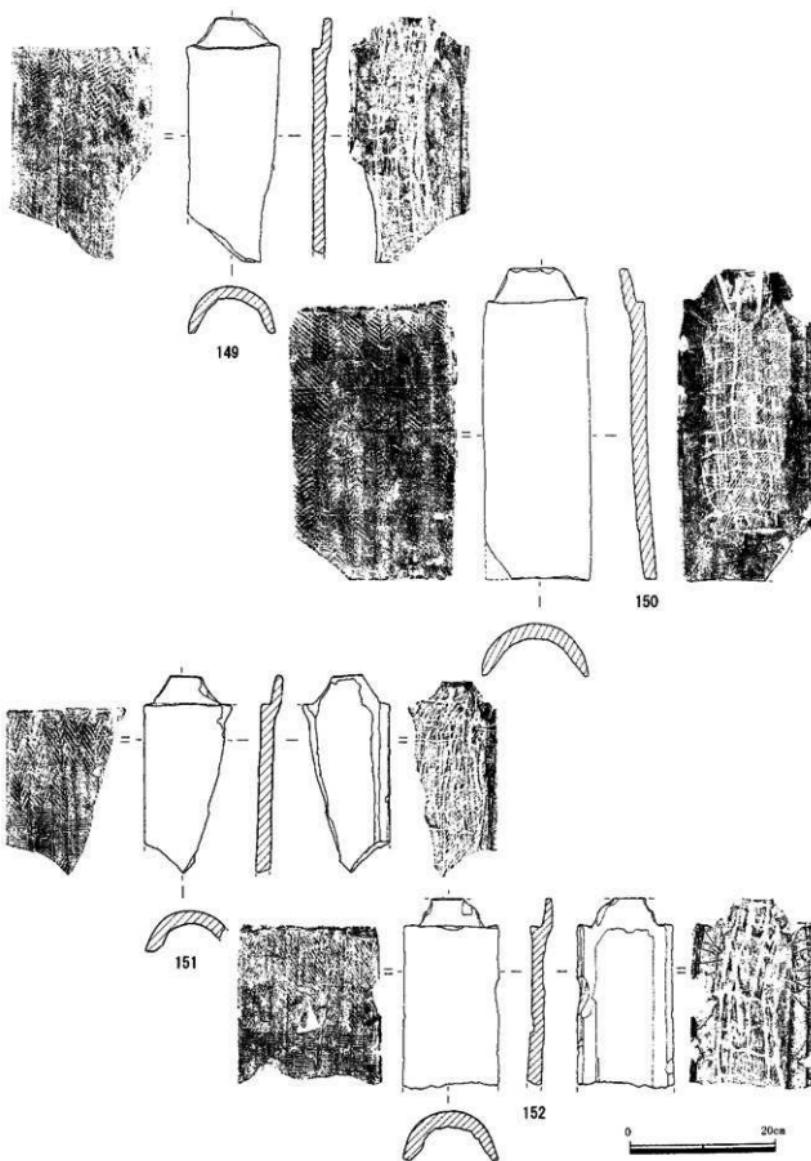
147



148



图版 77 瓦 17 (大和系瓦 9)



第111図 瓦20(大和系瓦10)



149



150

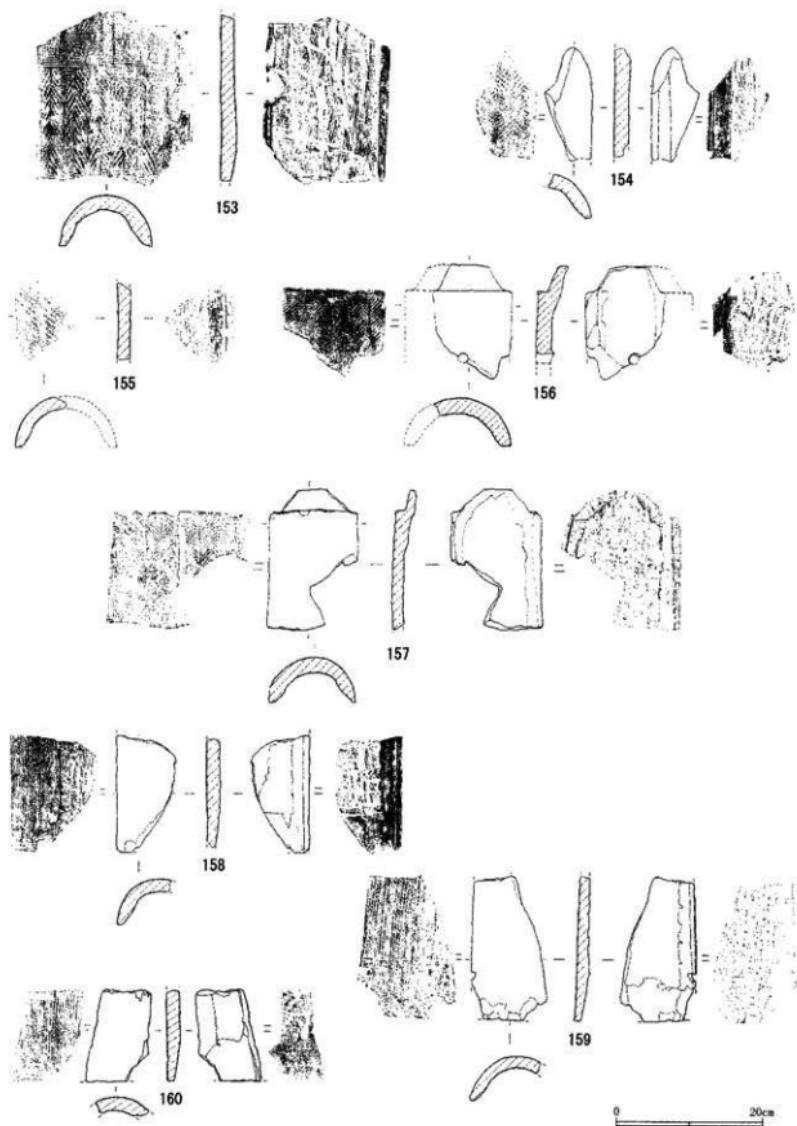


151



152

图版 78 瓦 18(大和系瓦 10)



第112図 瓦21(大和系瓦11)



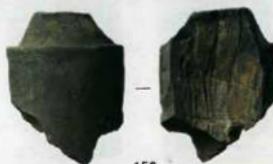
153



154



155



156



157



158

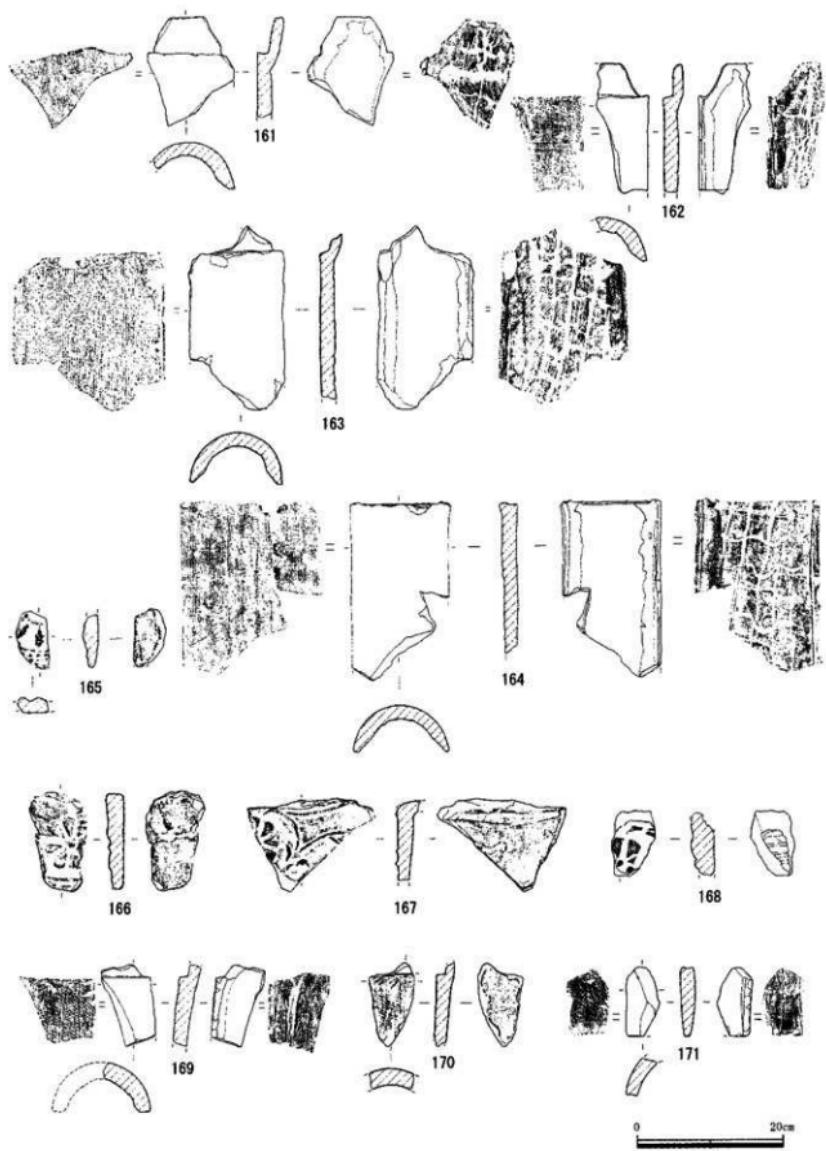


159



160

圖版 79 瓦 19 (大和系瓦 11)



第113図 瓦22(大和系瓦12,高麗系瓦1)



161



162



163



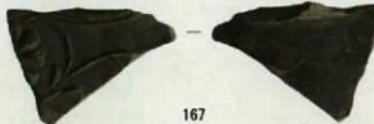
164



165



166



167



168



169

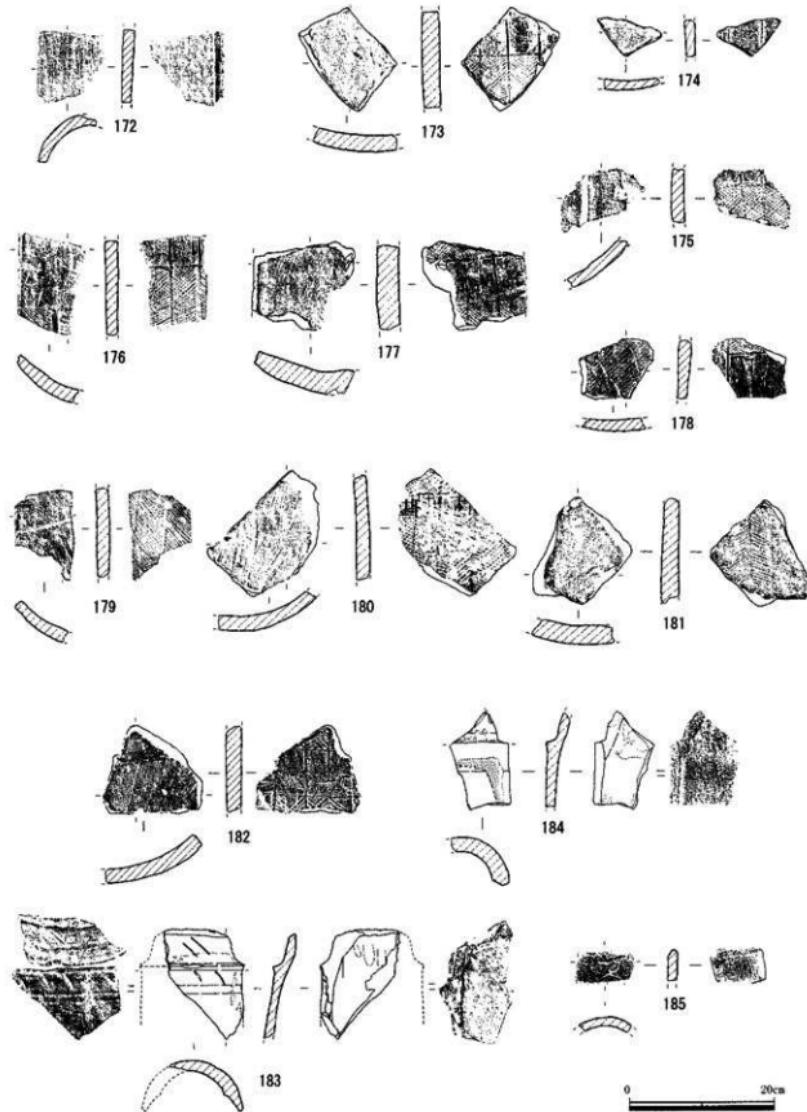


170

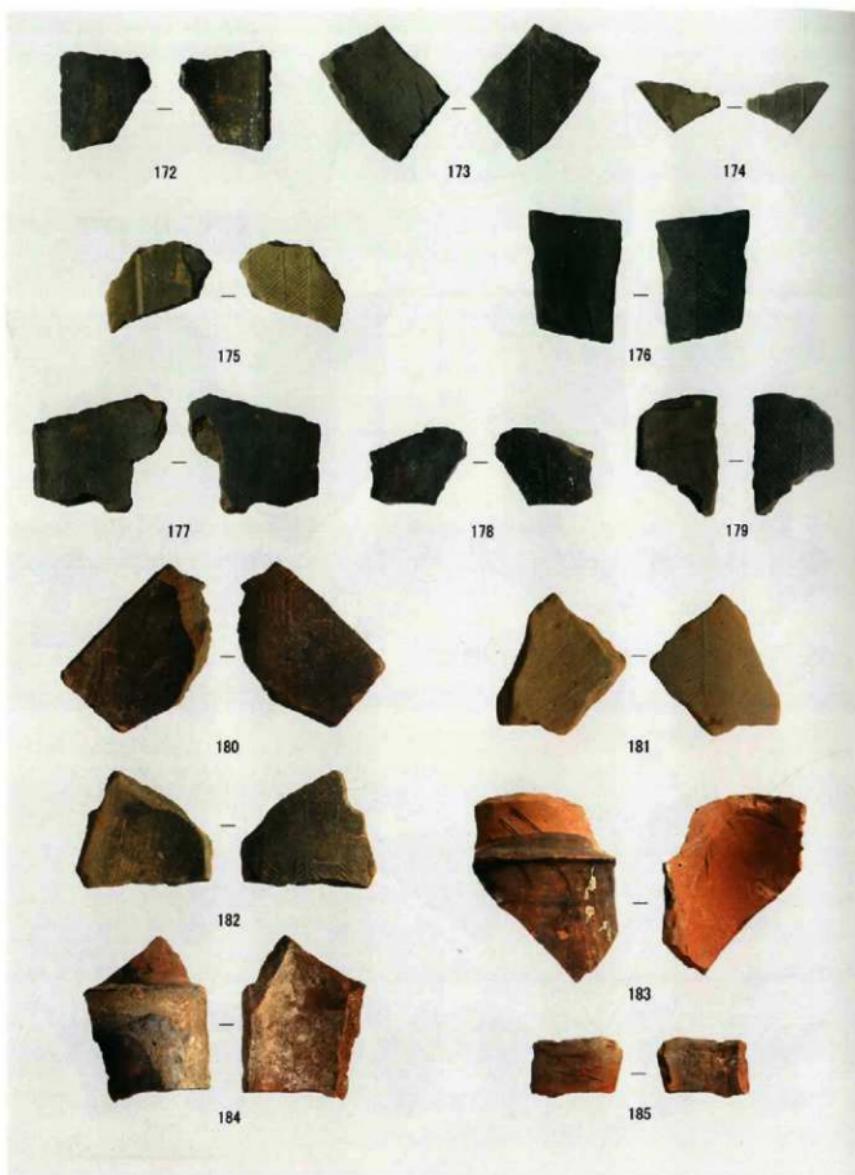


171

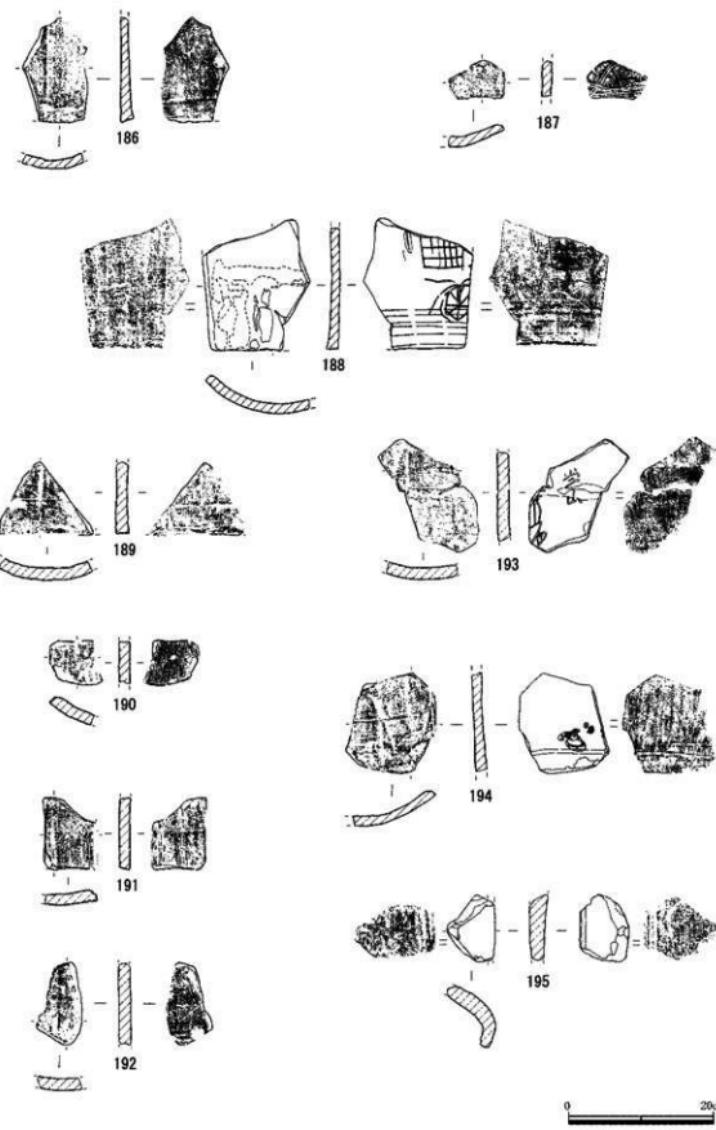
圖版 80 瓦 20 (大和系瓦 12, 高麗系瓦 1)



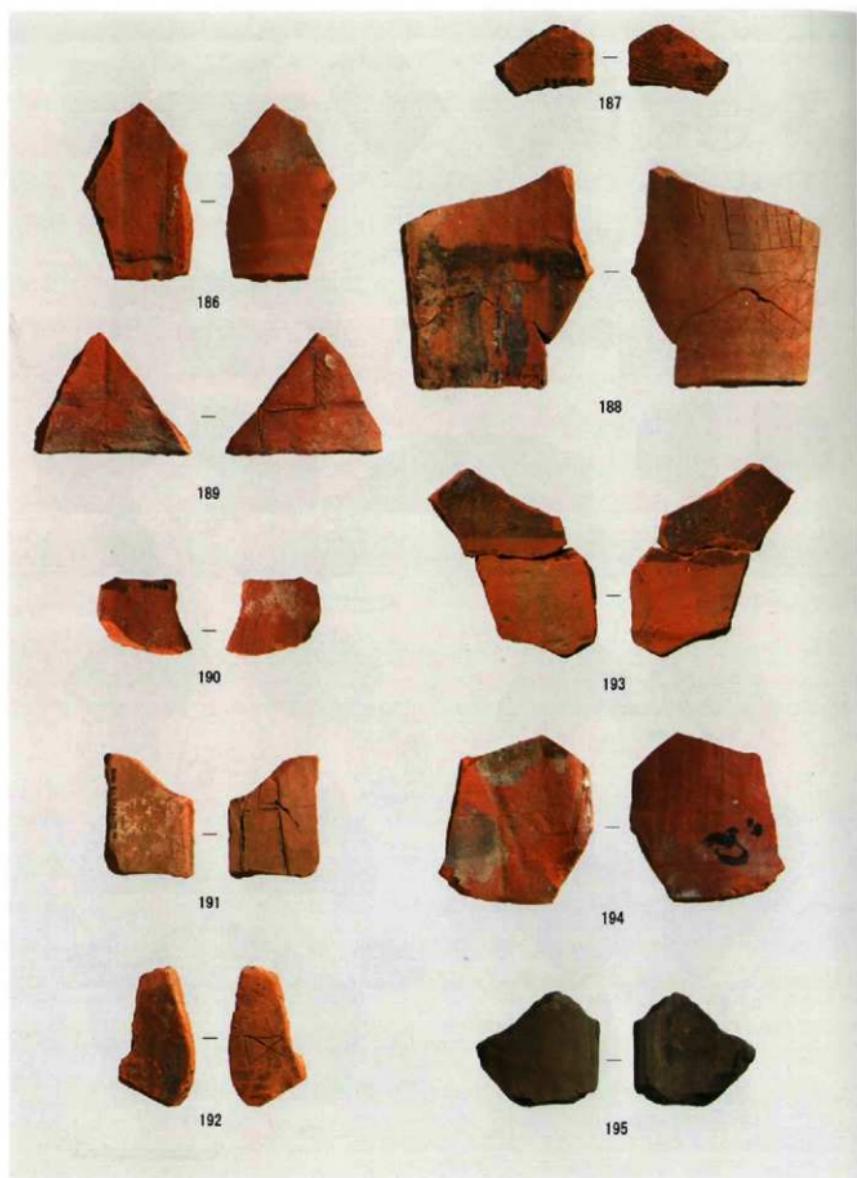
第114図 瓦23(高麗系瓦2, 明朝系瓦12)



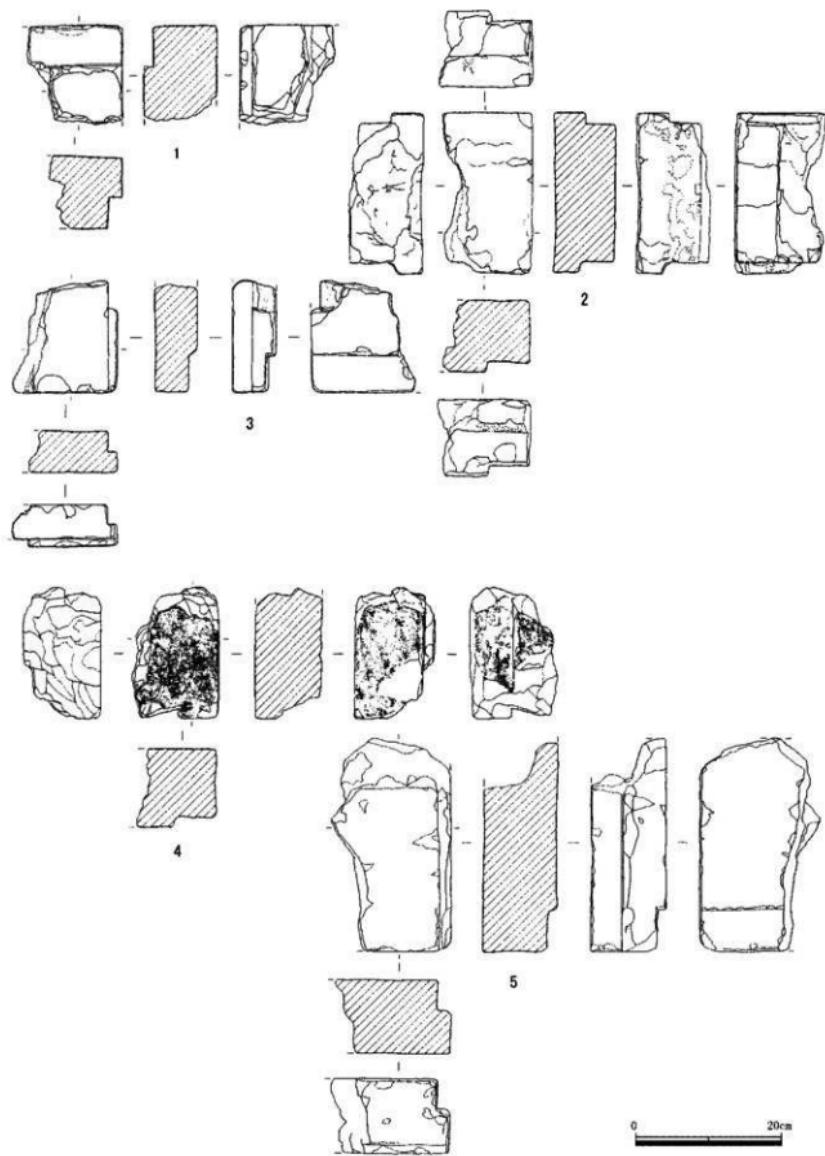
图版 81 瓦 21 (高丽系瓦 2, 明朝系瓦 10)



第 115 圖 瓦 24 (明朝系瓦 13)



图版 82 瓦 22 (明朝系瓦 11)



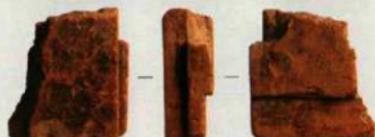
第116図 塚1



1



2



3

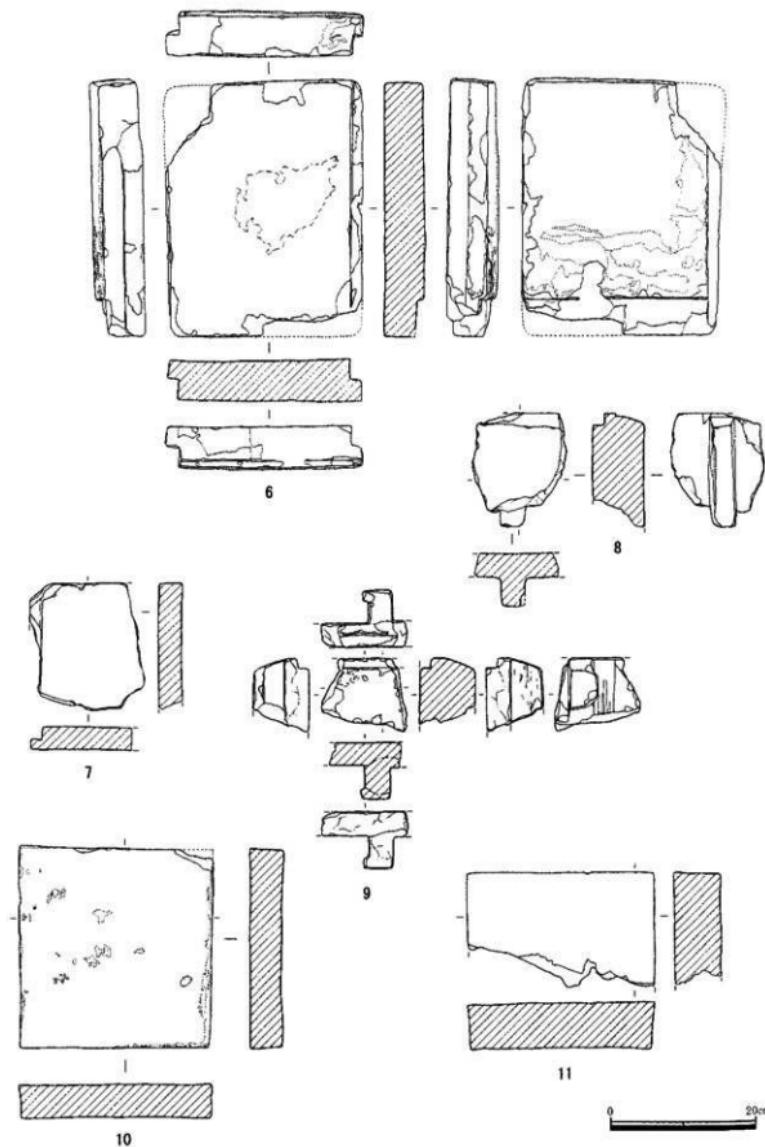


4



5

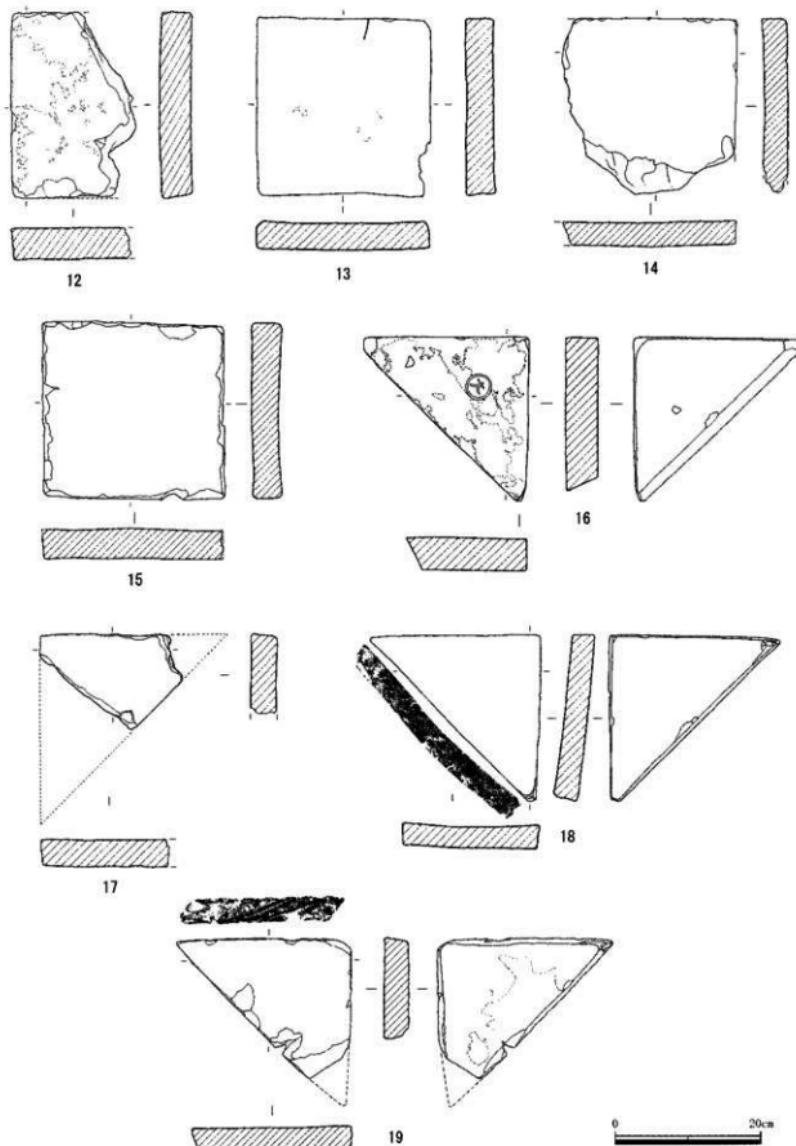
圖版 83 填 1



第117図 塗2



圖版 84 填 2



第118図 墓3



12



13



13



14



15



16



17



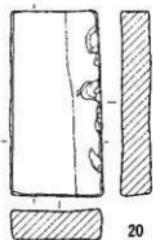
18



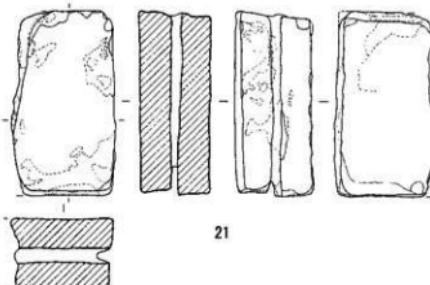
19



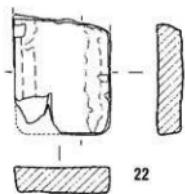
图版 85 填 3



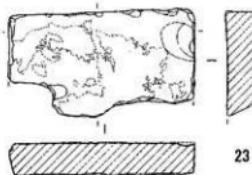
20



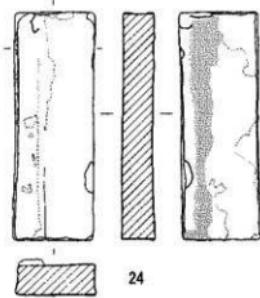
21



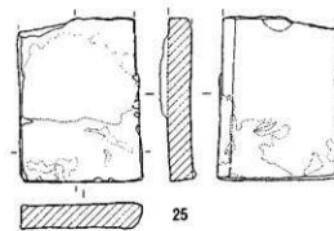
22



23



24



25



第119図 塙4



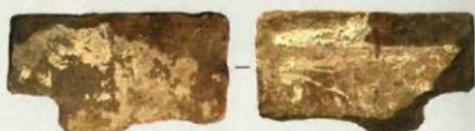
20



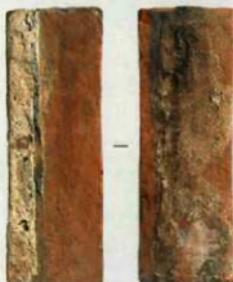
21



22



23

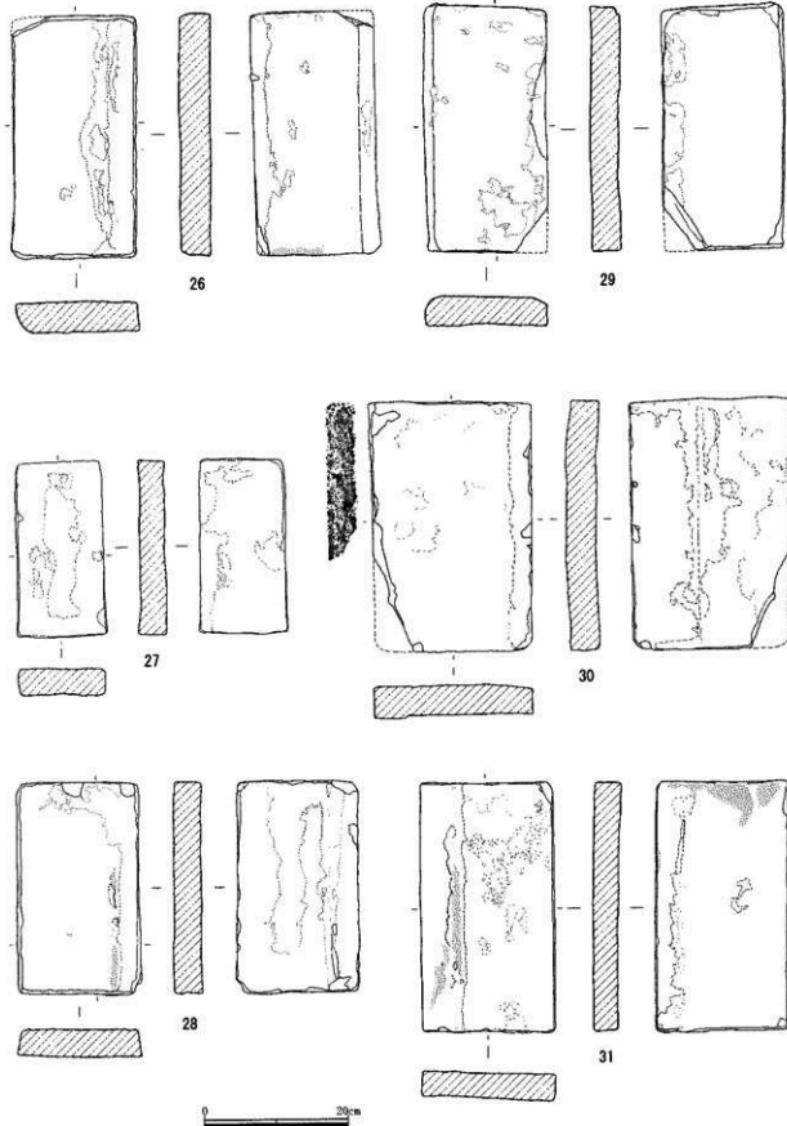


24



25

图版 86 墓 4



第120図 塙5



26

29



27

30

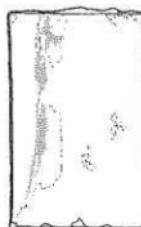


28

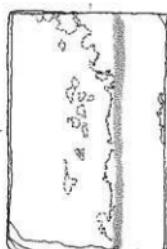


31

图版 87 填 5



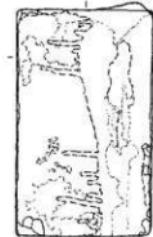
32



33



34



35



0 20cm

第121図 墳 6



32



33

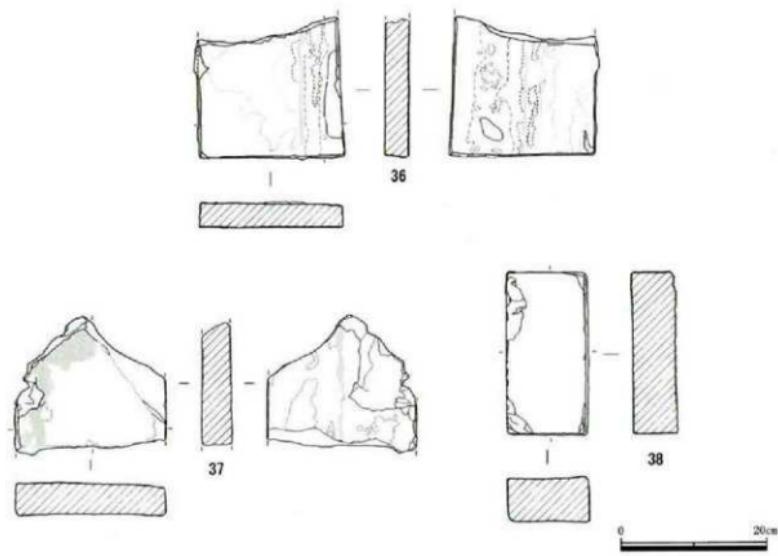


34



35

圖版 88 填 6



第122図 墓7



図版89 墓7

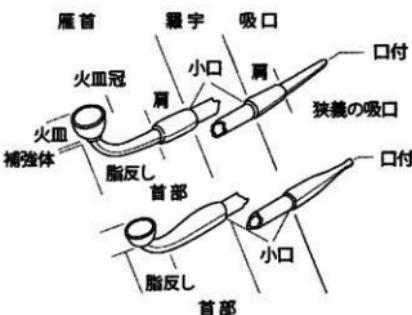
9 銭貨

正殿地区からは総数802点の銭貨が出土している(第37表)。产地別では中国・日本・琉球・満州・米国などがあつた。年代別だとグスク時代と考えられる資料が中国銭44種367点・琉球銭2種19点の計46種386点、近世のものは中国3種3点・日本1種38点の計4種41点、近代は日本銭5種65点・満州銭1種1点・米国銭1種5点の計7種71点がそれぞれ確認されている。その他、無文銭・輸銭・不明銭なども計304点が得られている。

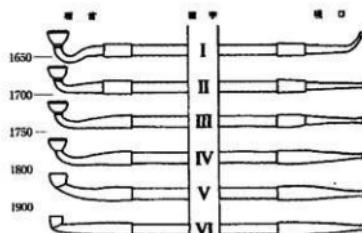
以下、特徴的な資料を第125~134図に示し、個々の詳細は観察表(第38表)に記す。

10 煙管

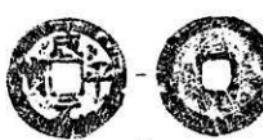
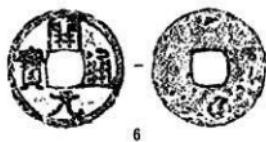
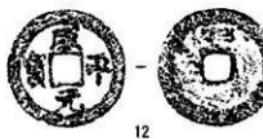
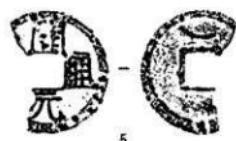
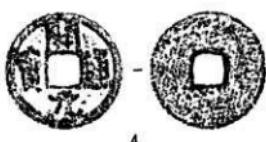
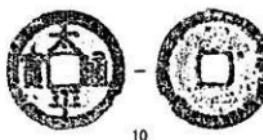
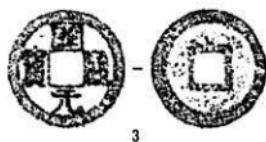
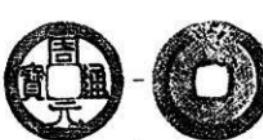
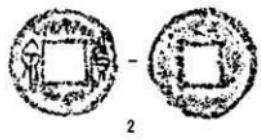
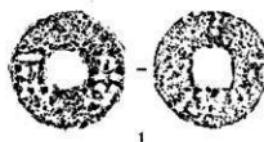
正殿地区からは、非金属製の雁首54点、金属製雁首6点、非金属製吸口15点、金属製吸口8点、延べ煙管2点の全85点が出土している。非金属製は瓦質もしくは瓦を転用した円筒形(1・2)、無軸の面取り形(3~9)、施釉の丸形(13、15、17、19)の3種があり、うち面取りが最も点数が多い。また指頭正痕が表面に残るもの(10)が1点のみ得られている。吸口は太形(11~12、14、16、18)と細形とがあるが、この地区ではいずれも施釉太形のみ確認された。なお、県内では希少な肥前産染付の吸口が1点のみ確認されている。金属製は古泉による江戸遺跡における金属製煙管の分類を参照すると、雁首でIII類からVI類、吸口はIV類~VI類が確認されている。ただし雁首・吸口とも年代の新しいV・VI類が主体である(20・21)。



第123図 煙管の部位名称

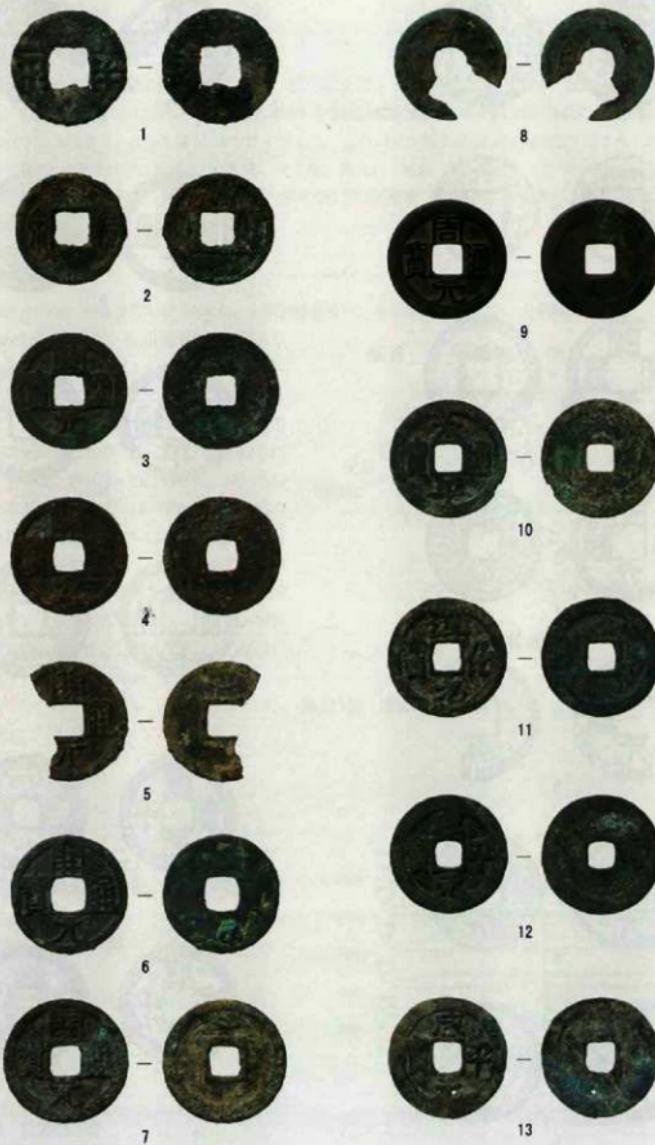


第124図 煙管の分類

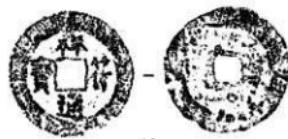


0 5cm

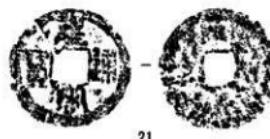
第 125 図 錢貨 1



圖版 90 錢貨 1



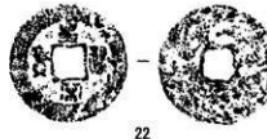
14



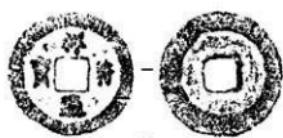
21



15



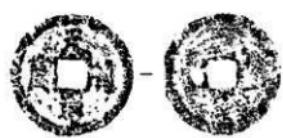
22



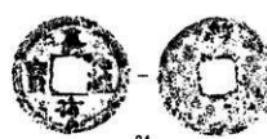
16



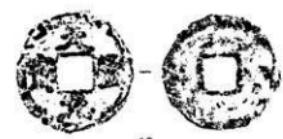
23



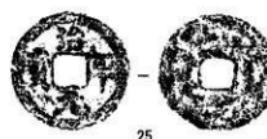
17



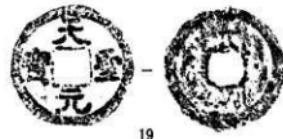
24



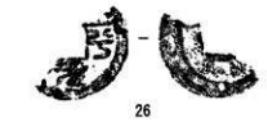
18



25



19



26



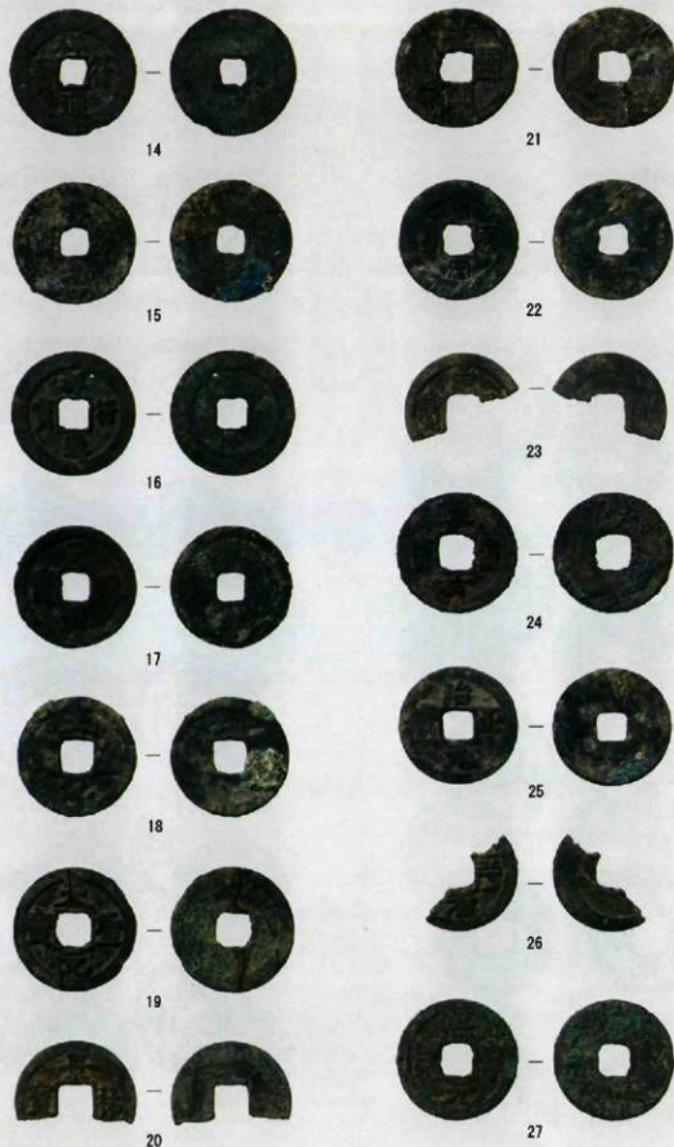
20



27

0 5cm

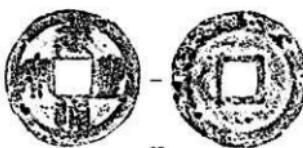
第 126 図 錢貨 2



圖版 91 錢貨 2



28



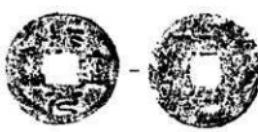
35



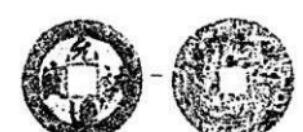
29



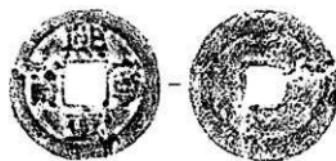
36



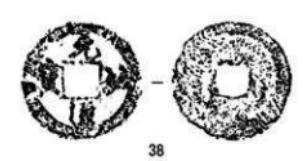
30



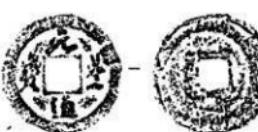
37



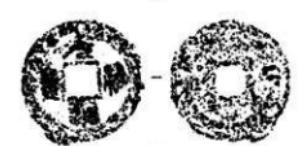
31



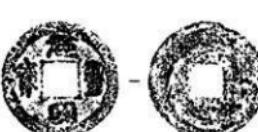
38



32



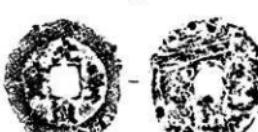
39



33



40



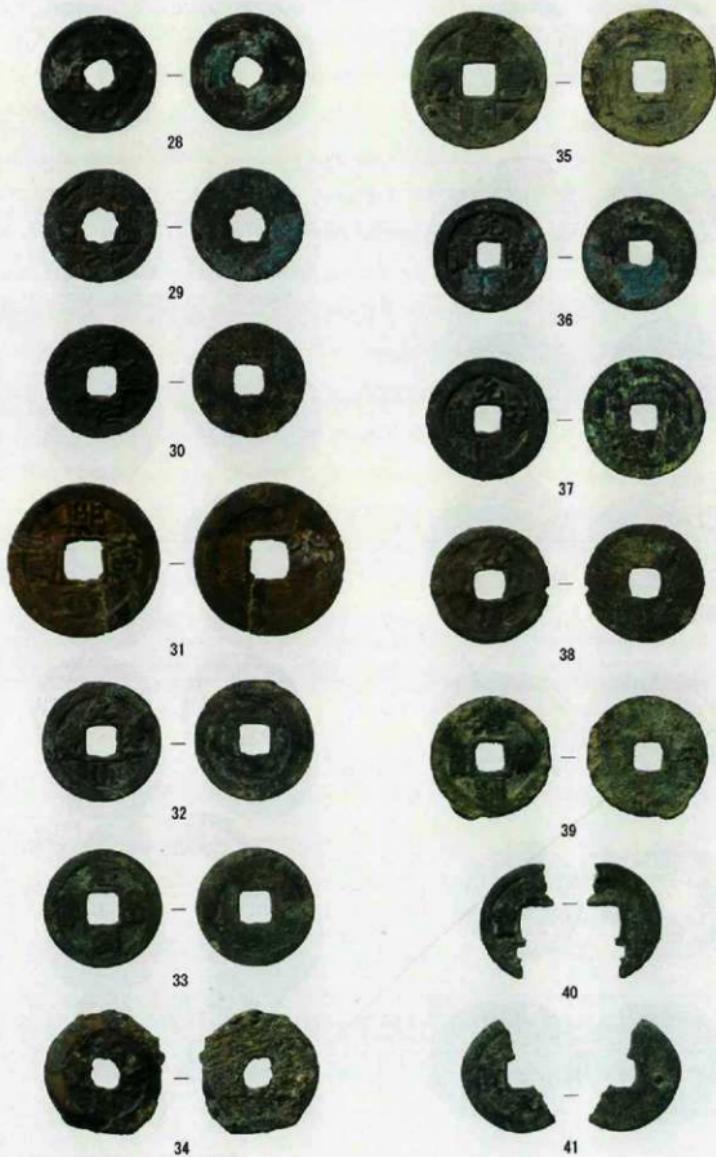
34



41



第127図 錢貨3



図版 92 錢貨 3



42



49



43



50



44



51



45



52



46



53



47



54



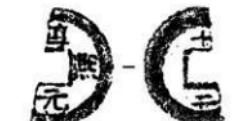
48



49



50



51



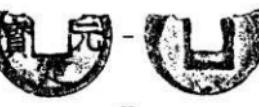
52



53



54



55

0 5cm

第 128 圖 錢貨 4



42



49



43



50



44



51



45



52



46



53



47



54



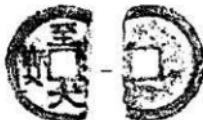
48



55



図版 93 錢貨 4



56



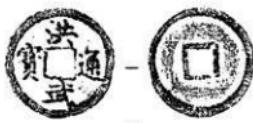
63



57



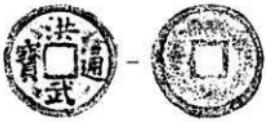
64



58



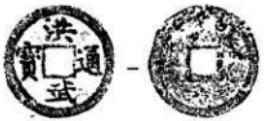
65



59



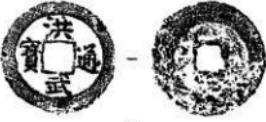
66



60



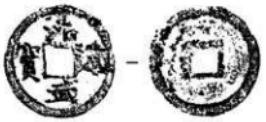
67



61



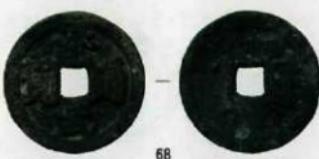
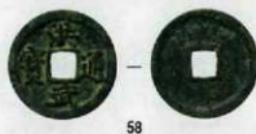
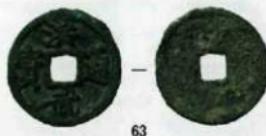
68

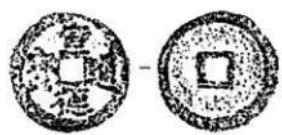
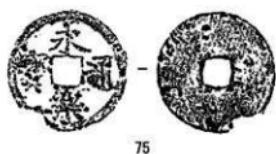
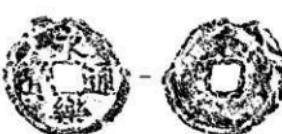
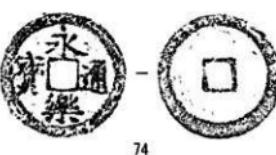
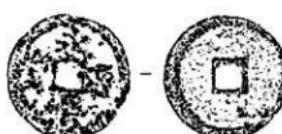
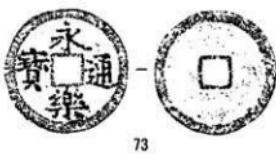
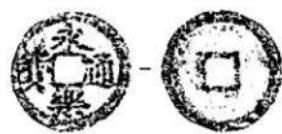
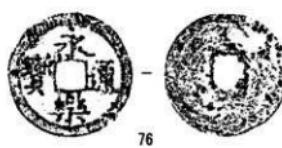


62

0 5cm

第129圖 錢貨5





0 5cm

第130図 錢貨6



69

70

71

72

73

74

75



76

77

78

79

80

81

82

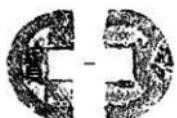
圖版 95 錢貨 6



83



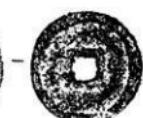
90



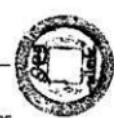
84



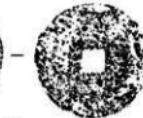
91



85



92



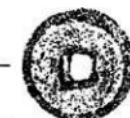
86



93



87



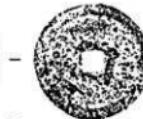
94



88



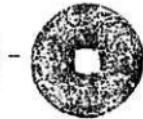
95



89



96



0 5cm

第 131 図 錢貨 7



83



90



84



91



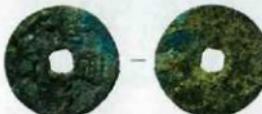
85



92



86



93



87



94



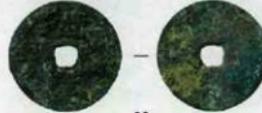
88



95

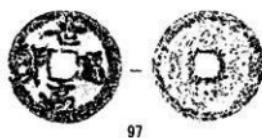


89



96

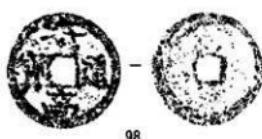
圖版 96 錢貨 7



97



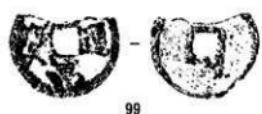
104



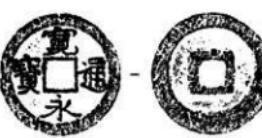
98



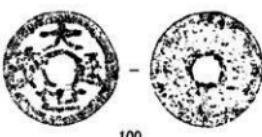
105



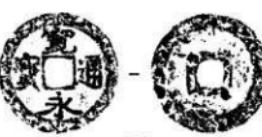
99



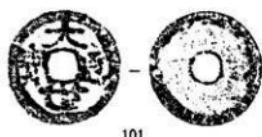
106



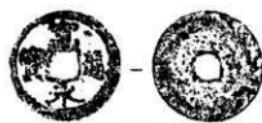
100



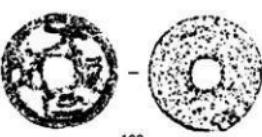
107



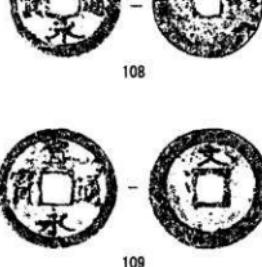
101



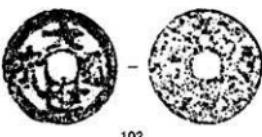
108



102



109



103



第132図 錢貨8



97



104



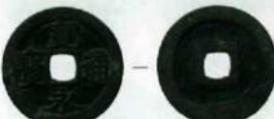
98



105



99



106



100



107



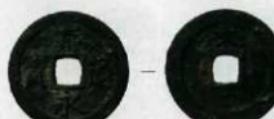
101



108



102



109



103

图版 97 钱货 8



110



117



111



118



112



119



113



120



114



121



115



123



116



124



0 5cm



110



117



111



118



112



119



113



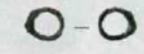
120



121



122



123



124



116





125



132



126



133



127



134



128



135



129



136



130



137



131



138

0 5cm

第134図 銭貨10



125



132



126



133



127



134



128



135



129



136



130



137

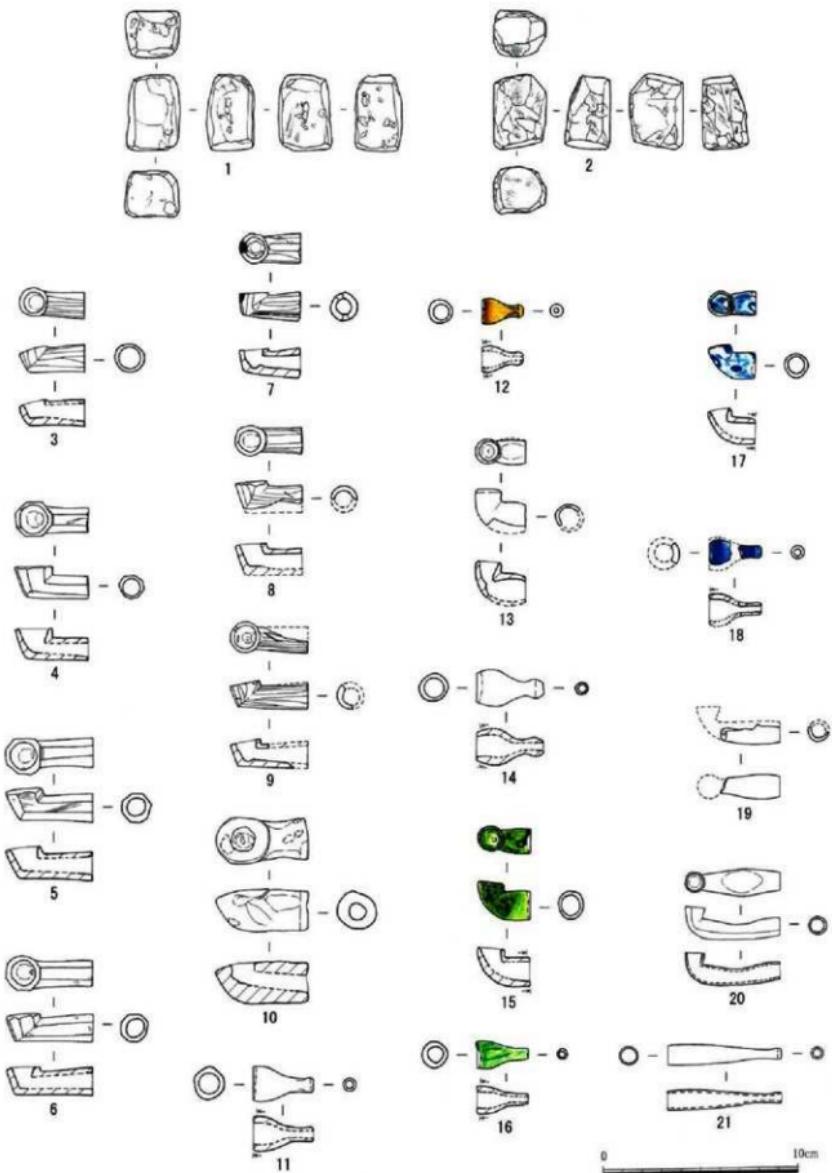


131



138

圖版 99 錢貨 10



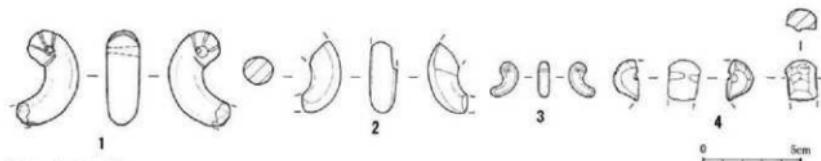
第135図 煙管



图版 100 烟管

11 玉類

全391点が出土し、勾玉、ガラス玉、小玉が確認された。勾玉には丁子頭勾玉（図版101-1）が含まれる。またガラス小玉は球形や扁平形のものを中心にして377点が得られ、9種確認される色調では、水色・青色が約70%に及んでいる。



第136図 玉類



図版101 玉類

12 円盤状製品

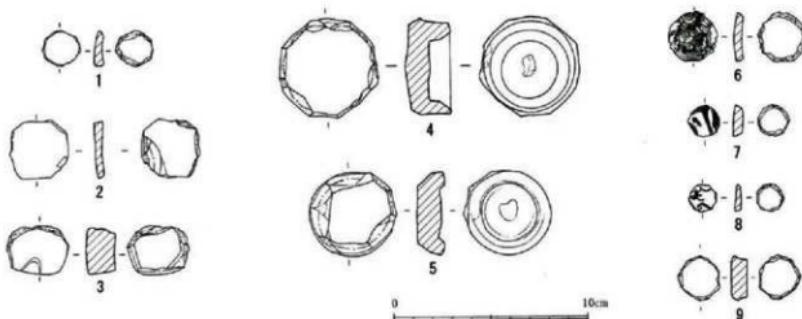
正殿地区からは全97点の円盤状製品が出土している。(第44表)。これを素材から第45表のように分類してデータ集計を行うとともに、特徴的な28点を第137・138図に示している。図示資料の個別の特徴については観察表(第46表)に譲り、ここでは全体的な傾向について記載する。

加工方法は、円盤状製品加工前の破損部を残す資料(1~3、14、16~18、20~26、28)から理解されるように、破損した陶器等の有用部位の周縁を打削して加工している。ただし押圧剥離とみられる方法(6、7)や、研磨(15、19)も確認された。また、一部に方形のもの(2、3、16、20)や三角形(27)も確認された。

素材には14種が利用されている。中でも中国産褐釉陶器が5割強と最も多い。これは当該素材に含まれる壺が大きいため、1個体から多数を作出できることが反映したとみられる。また2.0cm以下の小形製品は磁器、2.0~4.5cmの中形に施釉陶器、4.5cm以上の大形は瓦が主要となることが読み取れる。企図する製品の大きさが素材選択に影響していることが理解される。

素材	記号	点数	%
中国産青磁	cc	8	8.2%
中国産白磁	cw	1	1.0%
中国産青花	obu	3	3.1%
中国産施釉陶器	og	1	1.0%
中国産褐釉陶器	obr	53	54.6%
中国産土器	op	2	2.1%
タイ産褐釉陶器(セラマティカ)	tbs	5	5.2%
タイ産褐釉陶器(カムイ)	tbm	2	2.1%
本土産施釉陶器	jg	1	1.0%
沖縄産無釉陶器	oe	5	5.2%
明朝系赤瓦	rt	9	9.3%
明朝系灰瓦	gt	5	5.2%
細粒砂岩	ss	1	1.0%
ガラス	gr	1	1.0%
	計	97	100.0%

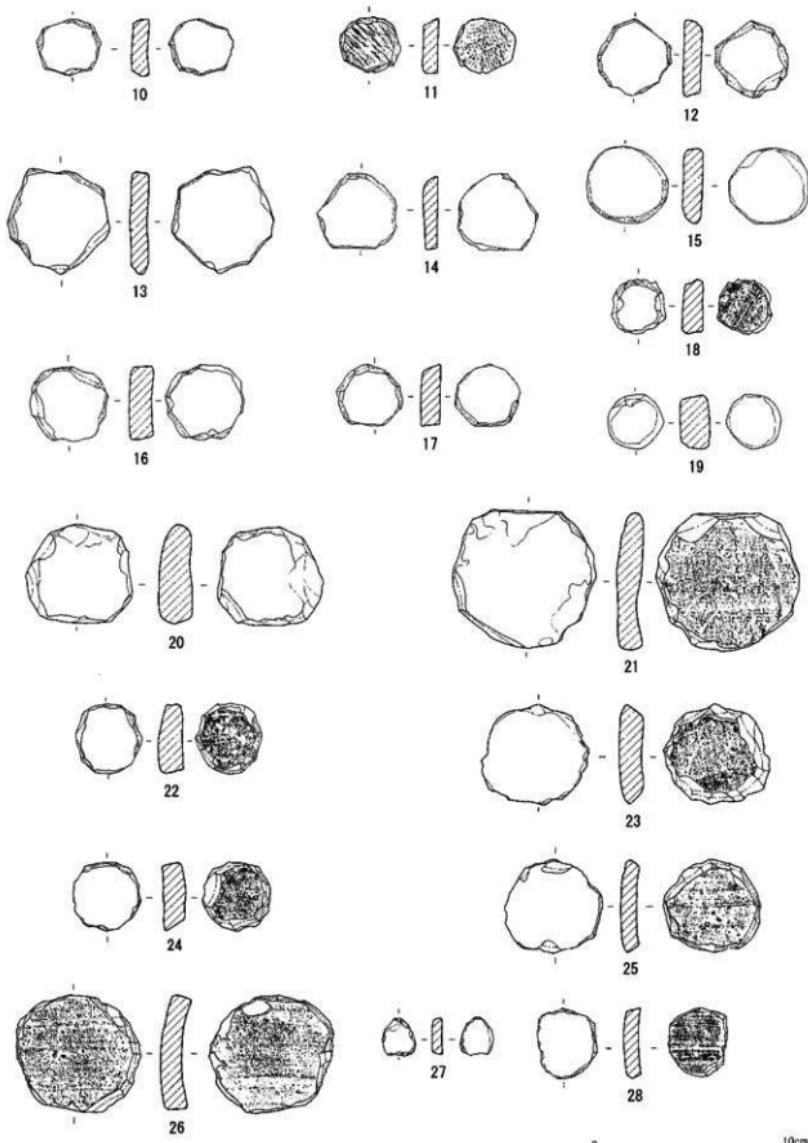
第45表 円盤状製品の分類別出土点数及び割合一覧



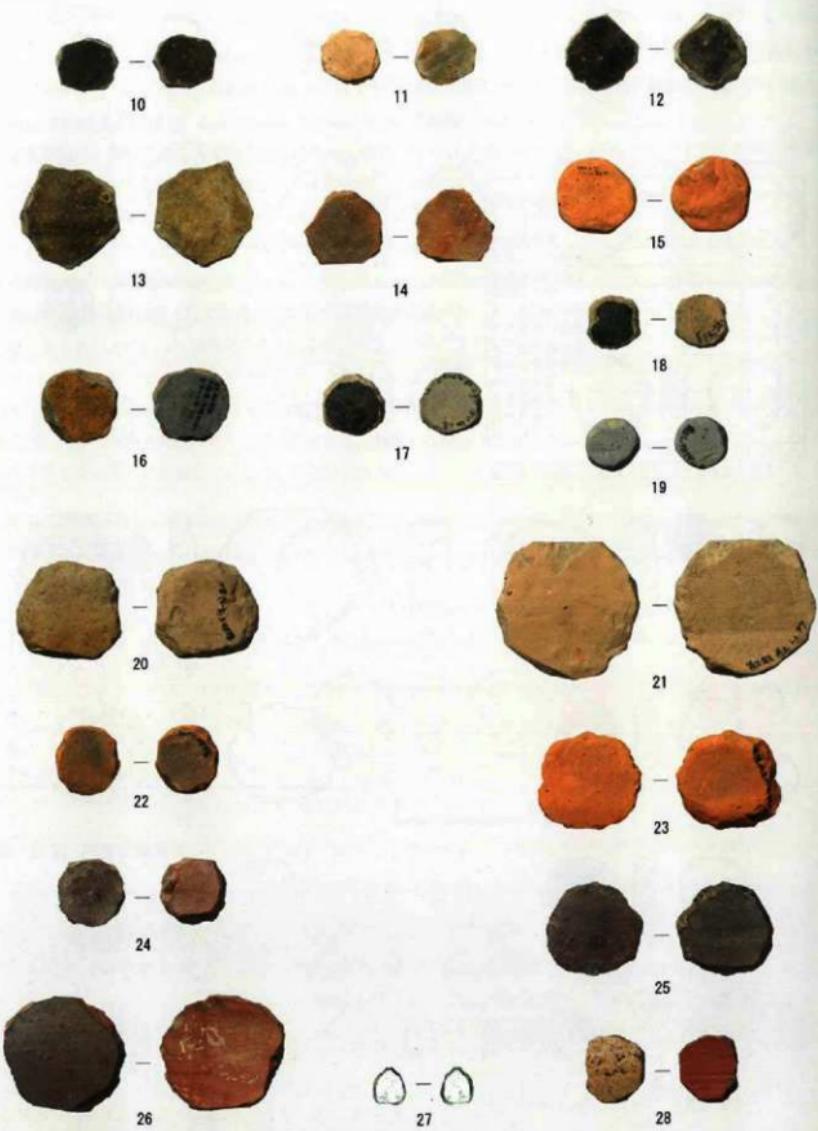
第137図 円盤状製品 1



図版 102 円盤状製品 1



第138図 円盤状製品2



圖版 103 円盤状製品 2

13 金属製品

金属製品は総計16,000点を超える量が出土しており（第47表）、種類別にみると①梵鐘、②銅釘・銅錐・笠・取っ手・鍵・飾り金具といった調度品や建物の部材に附属する金具類、③八双金物・小札・矧ぎ板・鎖帷子・釣・切羽・刀身・鎌などの武具・武器類の金具、④香炉や瓶といった銅器類、⑤鉄釘などが確認されている。以下、主に機能が判明しているものについて詳述する。

①梵鐘（第139・140図）

梵鐘破片は総計163点出土している。ことに、梵鐘は正殿跡の中央部に位置する今大戦時の爆弾穴（直径約10m）や正殿跡の北側地区から、いわばバラバラの状態で検出された。出土した堆積土層が擾乱されていることもあり、建物との位置関係や使用状況等については不明である。

得られた梵鐘破片は、青銅の覆う銅塊として、巨視的に5枚と若干の小片からなる。いずれも加熱による溶解や外圧などにより平板状に変形し、僅かに乳、袈裟帶、駒の爪などの部位から辛うじて鐘の一部であることが分かるにすぎない。

1は、笠形から肩部に移行する角部の破片である。丸く湾曲し立体的になるはずの笠形が肩部とともに扁平になっている。笠部分に横位の凸線が3本とそれに連結した縦帶と乳が僅かにみられる。縦帶は5本の線で構成され、笠形の線に比べ幾分細くなる。笠部分の線幅は約4cm、縦帶の幅は約9.5cm、胴部の厚さは2cmをはかる。

2は、池ノ間の上端資料で、横帶と乳を僅かにみることができる。池ノ間には銘文の一部の文字が残り、線書きの楷書体で、「天上人間」と確認される。天の文字の上には横帶が付いているため、銘文の文字配置とし一番上段になっているものと判断される。文字の左右側は、溶け変形して他の文字の存在を確かめようがない。文字の大きさは約4cm内の枠内におさまる整然とした印象をもつ。

3は、胴部の比較的大きな破片で、押しつぶされ扁平になり縦の亀裂が入っている。横帶は3本、縦帶は4列を数え、乳は横位に4列を認める。当該資料の池ノ間は空白の空間があることから、銘文を刻まない区域もあつたことが理解される。横帶幅は約4.5cm、縦帶幅は約11.5cmになり胴部の厚さ2cmをはかった。なお、梵鐘の形態について、僅かに残された駒ノ爪の口径（73cm）や胴部状況から考えると、確かに比較的大きな部類の鐘であったことがうかがわれる。また全体観としては、円覚寺殿前梵鐘、天王寺（元天竜精舎）梵鐘に近いものであつたのかもしれない。

4は、胴部の資料で縦帶と横帶の角が残っている。乳は当初の形態が保存されていて、径が3.3cm、高さ2.3cmをはかる。

5は、駒の爪の部分で下帯に唐草文様が施されている。駒部分から口径を復元すると約73cmになる。駒の爪幅は7.6cmを計測する。

6は損傷によりヒビが幾筋もあり、大きく変形している。駒の爪の部分で下帯に唐草文様が施されている。駒の爪幅は7.6cmを計測する。表面には二次的に被熱を受けたために火張れが著しく、裏面には釘等の銅製品がかなりまとまって溶解しているのが付着している。5と同一個体か。

7は胴部資料で全体的に二次的な被熱で表裏面共に溶解している。かろうじて原形を留めている状態である。5cm以上の厚みを有しており、鉄釘が3点、錢貨が5点以上溶着している。また、溶解した用途不明の銅製品や、大量の炭化物が表面に付着している。

8は多数の梵鐘片と銅釘、鉄などの小型製品が二次的な被熱により、まとまって溶着している。梵鐘片は変形が著しく部位は不明。表面に線刻で文字が刻まれるのが確認できるが、損傷により判読不能である。

9は7片以上の梵鐘の胴部片が二次的な被熱により、まとまって溶着している。梵鐘片の厚みは3cm前後で、

一部に陽刻による縦帯、横帯文が確認できる。

②建具・調度品類（第141～146図）

銅釘は全長8cm以下で短いものでは2.3cmのものも見られる。建材ではなく調度品や飾り金具を留める紙としての用途が主であったと思われる。調度品の取っ手も見られ、また取っ手を留める紙が附属している。27のように紙には座金具が附属しているものも見られる。飾り金具では31のように彫金されるものも見られる。櫃などの隅小縁に付く飾り金具で、端部が三雲状に象られている。表面には細かな蓮華唐草文を毛彫りで描いており、空間部には魚々子を充填している。密な充填ではなく間隙が処々に見られることから、在地で製作されたものと思われる。

調度品類の鍵周辺に取り付く飾り金具である30は掛かり孔が見られる。33には鍵の内部機構と思われる金具が附属している。35、37は調度品類の脚部や隅角部を覆う飾り金具で31と同様の魚々子打ちがなされている。また、35では蹴り蹴りの技法が窺える。これらも在地で製作されたものと思われる。92・93は瓶や壺などの大型銅製品の一部で、文様構成から中国産であると思われる。首里城京の内側からも銅製品の把手部分が出土していることから、首里城内に複数の中国産の銅製置物があったと思われる。

③武器・武具類（第141～146図）

頭部を構成する兜の頭頂部の八幡座ならびに矧ぎ板が出土している。39では矧ぎ板を少し重ねながら、頭部を構成していることが窺えるまとまった資料である。裾には鎖帷子が取り付くことも窺える。40・52も矧ぎ板を重ねて接続しているのが窺える資料である。55・56、58の鉄片も多く出土しており、それらは幅広の矧ぎ板である可能性が指摘される。とくに矧ぎ板同士を鈍で留めていないため、筋兜であると思われる。

鎧については沖縄県内でもあり類例の無い資料として48の障子板や49の脚板、50の冠板など胸廻りの鎧金具が一式で出土していることは注目される。最も武具で出土しているのは小札で、札頭が斜めのものに限られている。また三つ目札は出土していない。

八双金物は鍍金されているものや透かし彫りの意匠のものなどがみられる事から、彫金並びに鋳造において高い技術的を有していたことが窺われる。

刀装具については鉗、切羽等が出土しているが、注目されるのは90の長柄武器の刀身である。柄近くで大きく屈曲し、切っ先は反りが見られる。このような形状の長柄武器は管見の限りでは例が無く、その使用方法などは不明である。

④その他（第141～146図）

上記以外にも用途が不明の銅製品は多く出土しているが、用途が判明している資料の中でも91の銅鏡片は注目される。鏡背には圓環が1条あり、内区と外区で分けられている。菊花文が陽刻で内外区共に不規則な配置で施されている。花弁は獨立つ。鏡体は薄く、縁は肥厚し断面形は台形状となる。文様と形態から13～14世紀にかけての和鏡であると思われる。

94の銅製印についてばかり小型であること、撮み部分に孔が見られることから、携帯用の銅製印である。字款は判読不明。

38は正殿前に配置されていた大龍柱の上部と下部を繋いでいた綱である。大龍柱は熊本鎮台沖縄分遣隊が引き上げた際に柱の根本から切断された。その後、元に戻す際に金具で留めた。古写真との照合で、形態と表面の滑り止め状の文様から当該綱が大龍柱を留めていた綱であることが判明した。

⑤鉄釘（第147～151図）

出土した鉄釘の中で近代の洋釘が最も多く出土しているが、本項では近世以前に使用された角釘を主に取り扱う。鉄製の角釘は総計5,467点、鋸は151点出土している。釘の長さは20cmを越えるものから5cm未満のものまで、多様な規格の釘が出土している。胴径が大きく、長いものは建築部材として、胴径が小さく、短いものは調度品などに使用されていたものと考えられる。釘の全長で9タイプに分類を行った。以下にその分類を示す。

- Aタイプ：長さが20～24cm
- Bタイプ：長さが16～19.5cm
- Cタイプ：長さが15cm
- Dタイプ：長さが12～13cm
- Eタイプ：長さが10～11cm
- Fタイプ：長さが7～8cm
- F'タイプ：長さが7～8cmで胴部が細身。
- Gタイプ：長さが6cm
- G'タイプ：長さが4cmで胴部が細身。

それぞれのタイプにおいて頭部が斜めに面取りされているものが見られた。それらは観察表にて各タイプ名の前に「カット」と附した。また、全長とは別に釘の頭部の形態並びに胴部の厚みと長さとの関係から、以下のように分類される。

- I類：頭が逆L字形をなす。
- II類：頭が平ノミ状に平坦になる。
- III類：頭は逆L字形で、身の部分が極太をなす。
- IV類：頭が逆L字であるが、その部分が著しく長いもの。

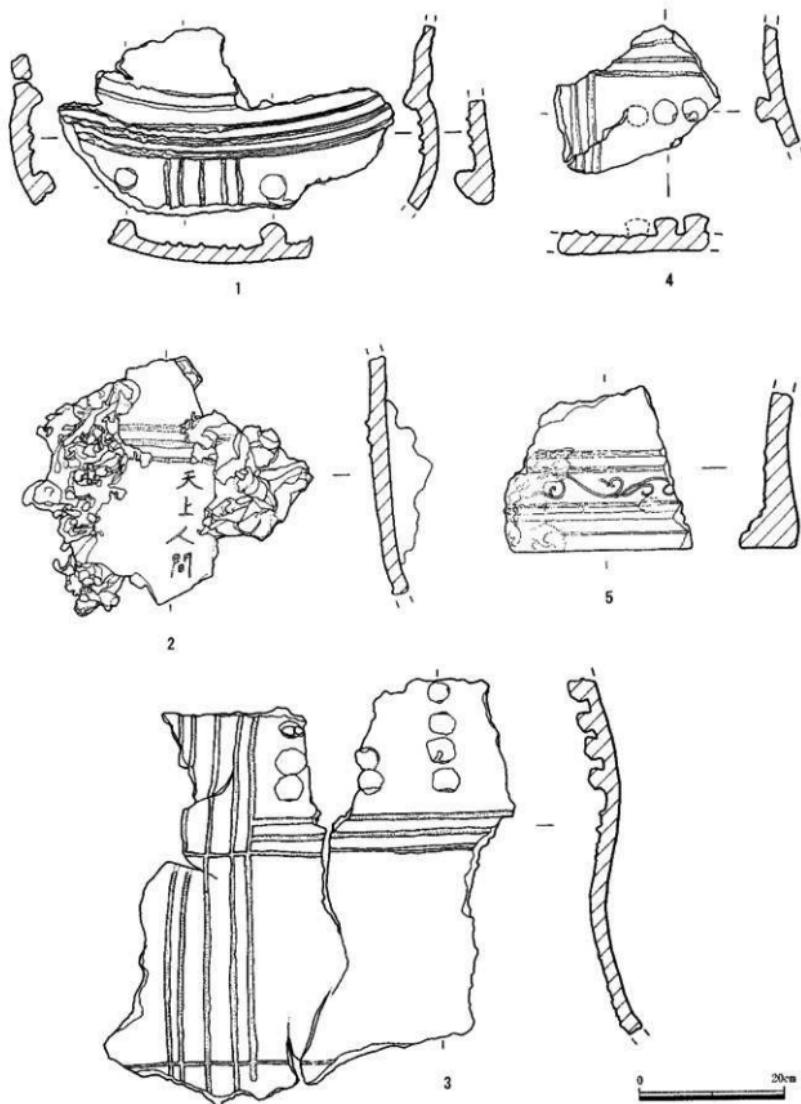
102～115はI類に、116～135はII類に、136～140はIII類に、157・158はIV類にそれぞれ同定される。

鉄製釘は長さが16～19cmのBタイプが最も多く出土しており、次に多いのが20～24cmのAタイプとなっている。これらは主に建築部材として利用された可能性がある。一方でGタイプやFタイプといった長さが10cm未満の釘は少ない。これらから、かなり大きな木材を打ち付けるために長めの釘を用いたものと思われる。また、頭部形態ではI類が9割近くを占めていることから、頭部形態が統一された規格であったことが窺える。出土状況から見るとSW2とSW1との間からF、Gタイプがまとまって出土している他にII期基壇の前面部からもF、Gタイプがまとまって出土している。

頭部に孔を有する有孔釘は頭部がノミ状に平たいAタイプ（出土総数5点）と頭部を丸く收めるBタイプ（出土総数20点）に大別することができる。Bタイプは孔が大きく、棒状の素材を折り返して孔をつくっている。また、Aタイプと比較して胴部径が大きい。

鋸は断面形態の違いで断面角形タイプと断面丸形タイプの2つに大別することができる。出土点数は前者が71点、後者が71点と全く同比率であることから、両形態が併用されていた可能性が高い。また、全長21cmが7点、16cmが29点、13cmが19点、10cmが75点、10cm未満が15点と10cm前後の規格が全体の半数以上を占めている。出土状況はI、II、IV期基壇に係る遺構から出土している。

頭部と断面形が円形となる洋釘(151～156)は5,404点と出土した鉄釘の中でも5割方を占めている。



第139図 金属製品 1



1



4



2

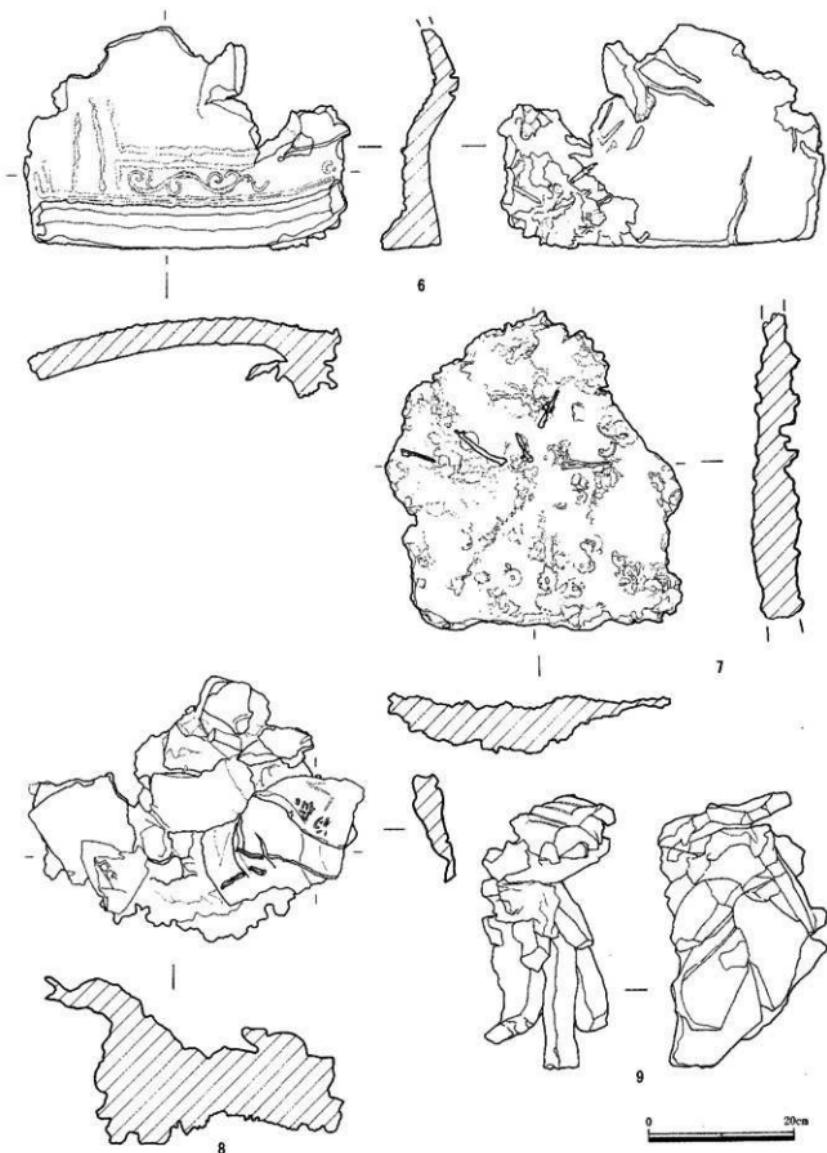


5



3

圖版 104 金屬製品 1



第140圖 金屬製品 2



6



7

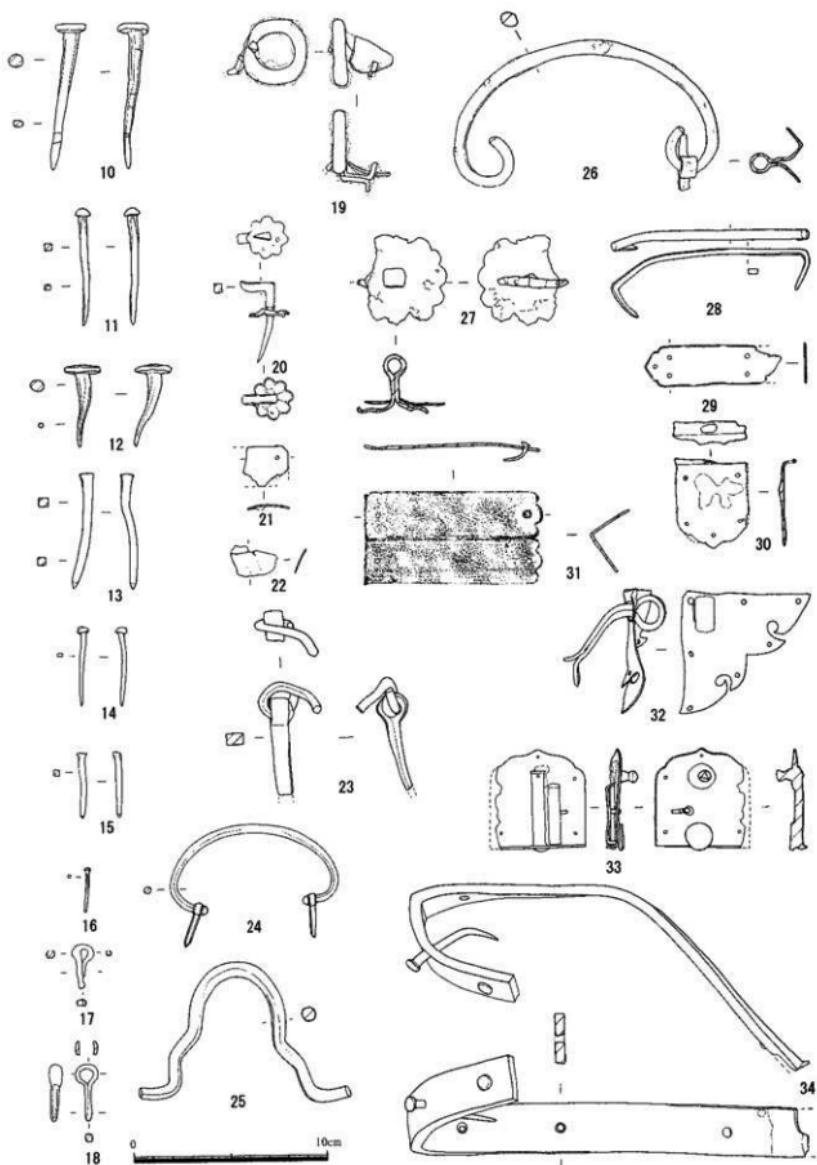


8



9

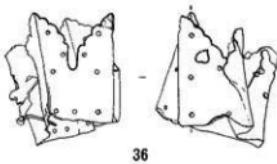
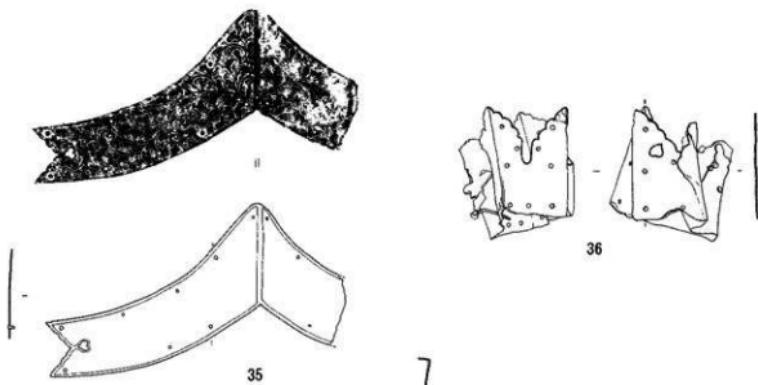
圖版 105 金屬製品 2



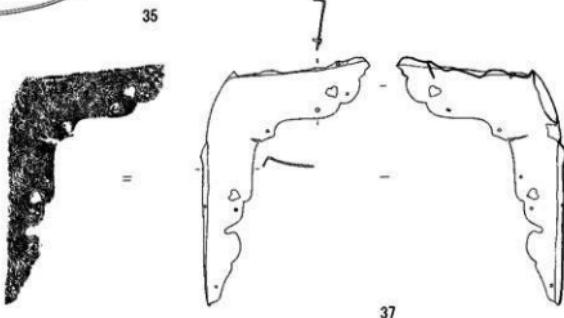
第 141 圖 金屬製品 3



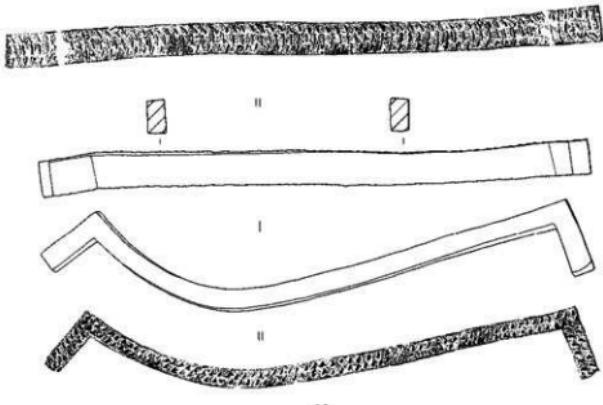
圖版 106 金屬製品 3



36



37



38



第 142 図 金属製品 4



35



36

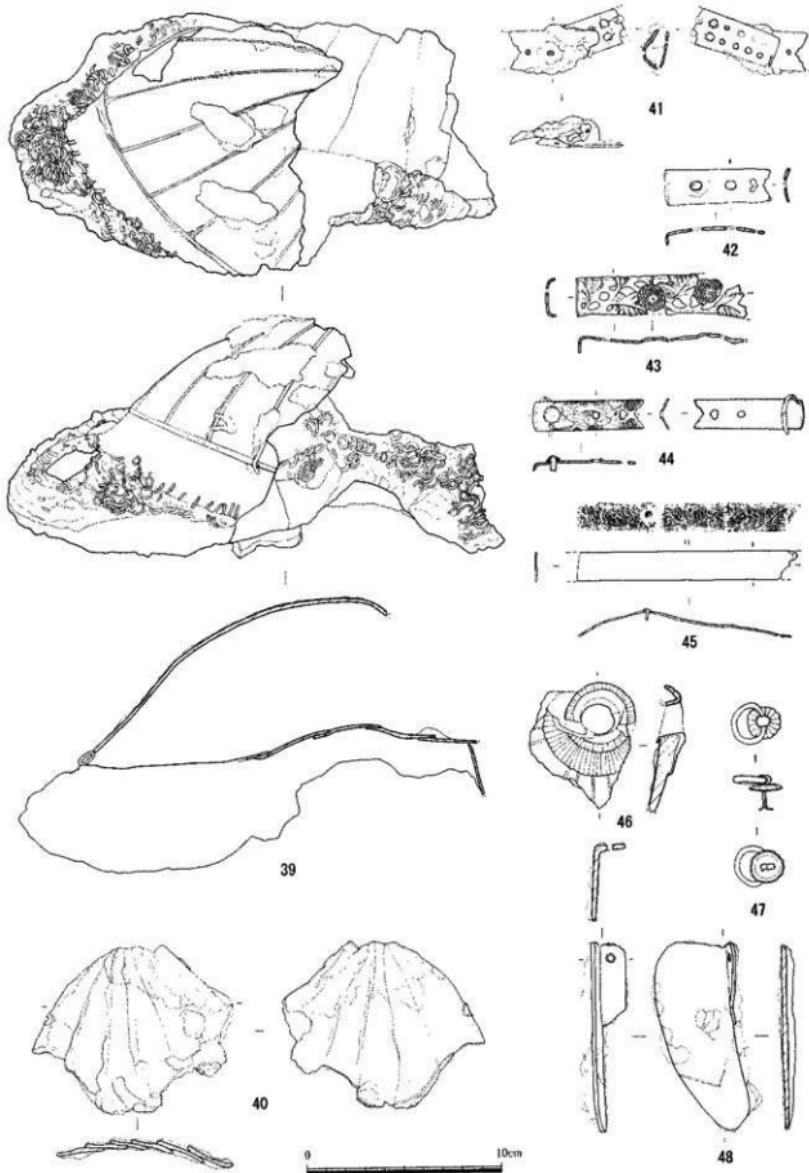


37

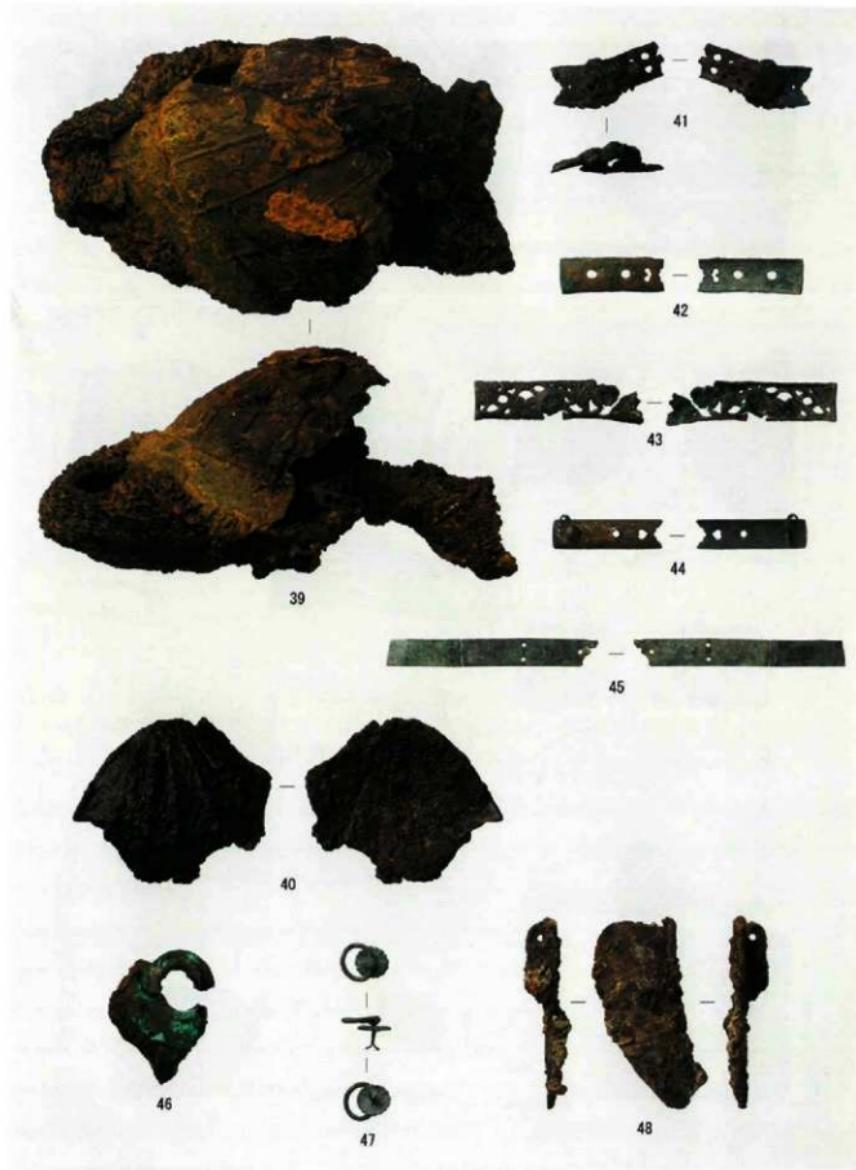


38

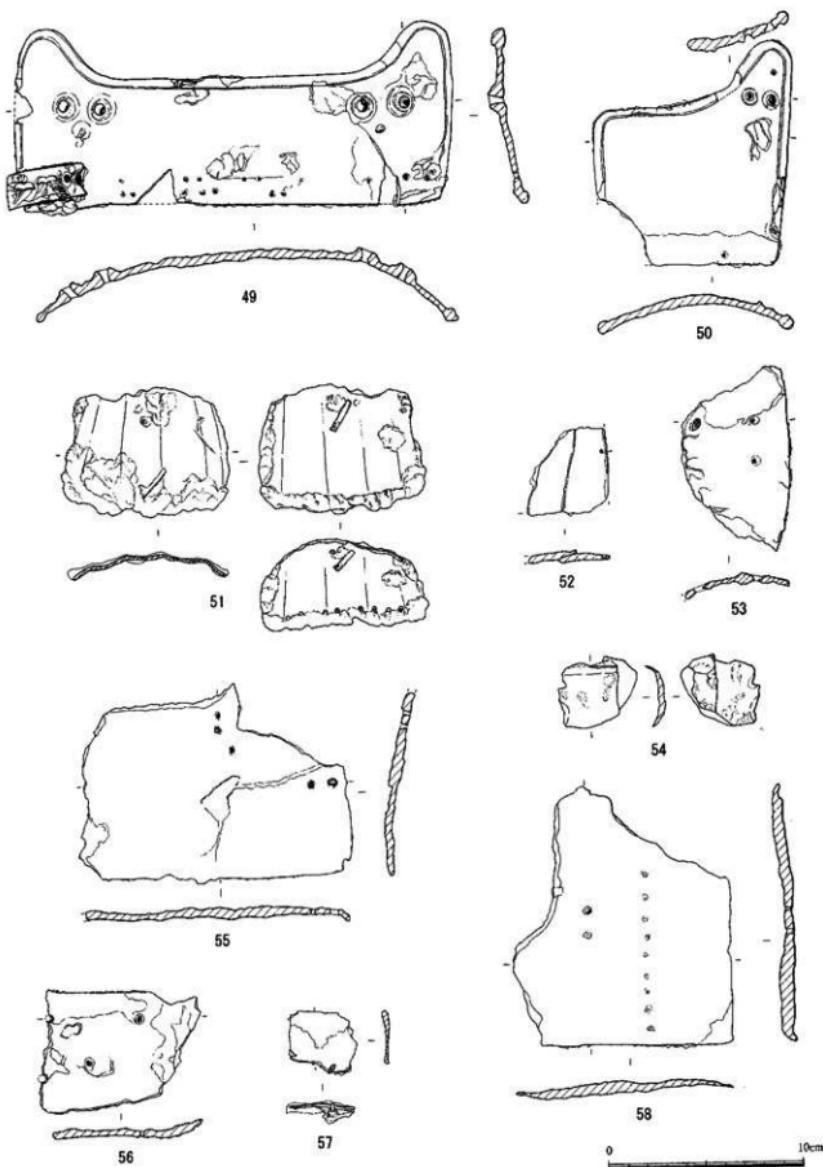
國版 107 金屬製品 4



第143図 金属製品 5



图版 108 金属制品 5



第144図 金属製品 6



49



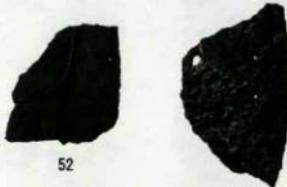
50



—



51



52



53



54



55



56

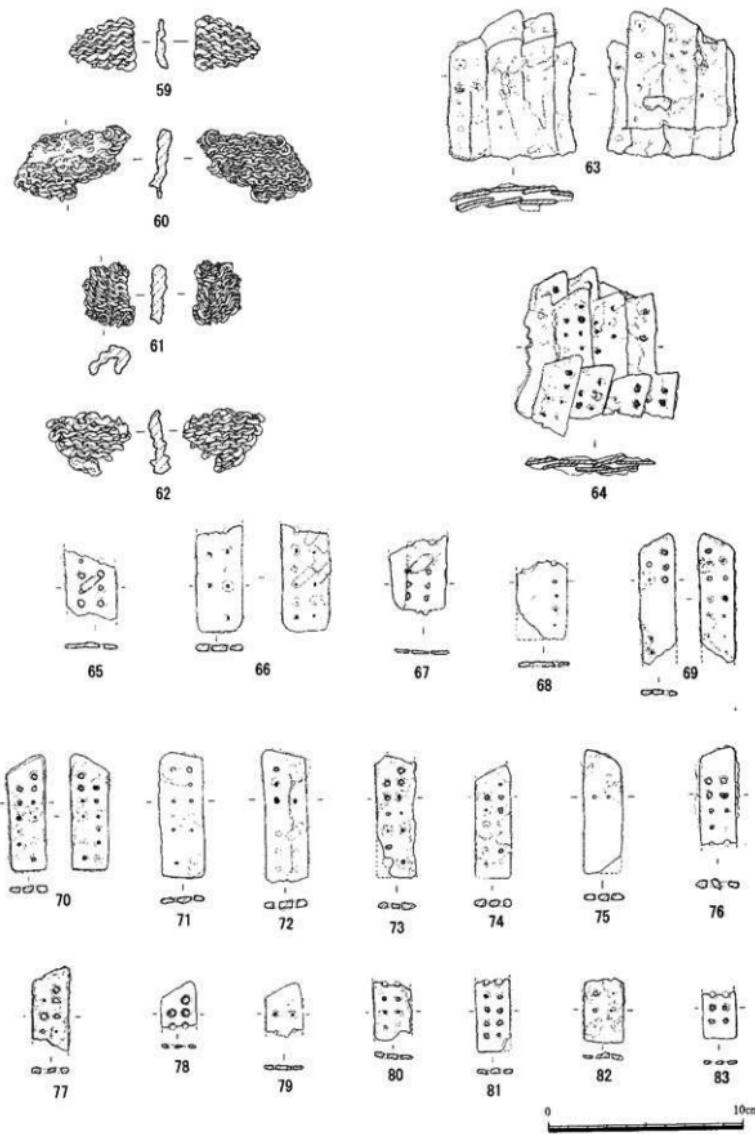


57

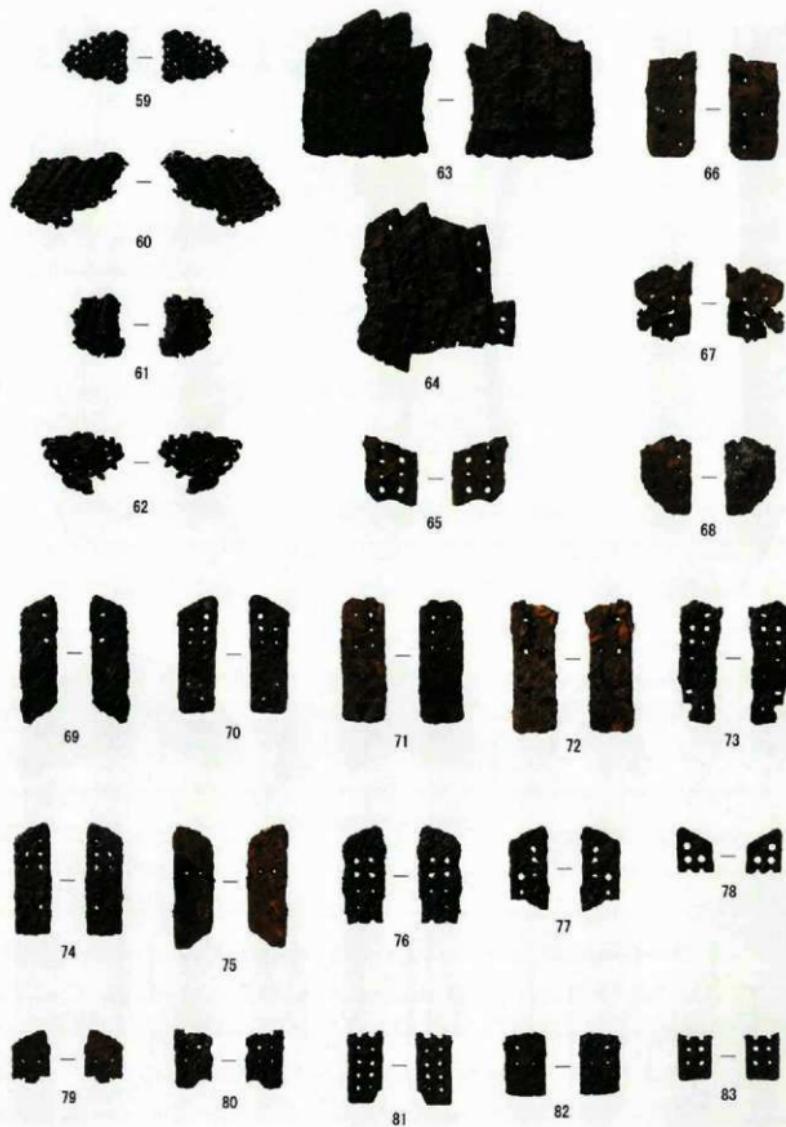


58

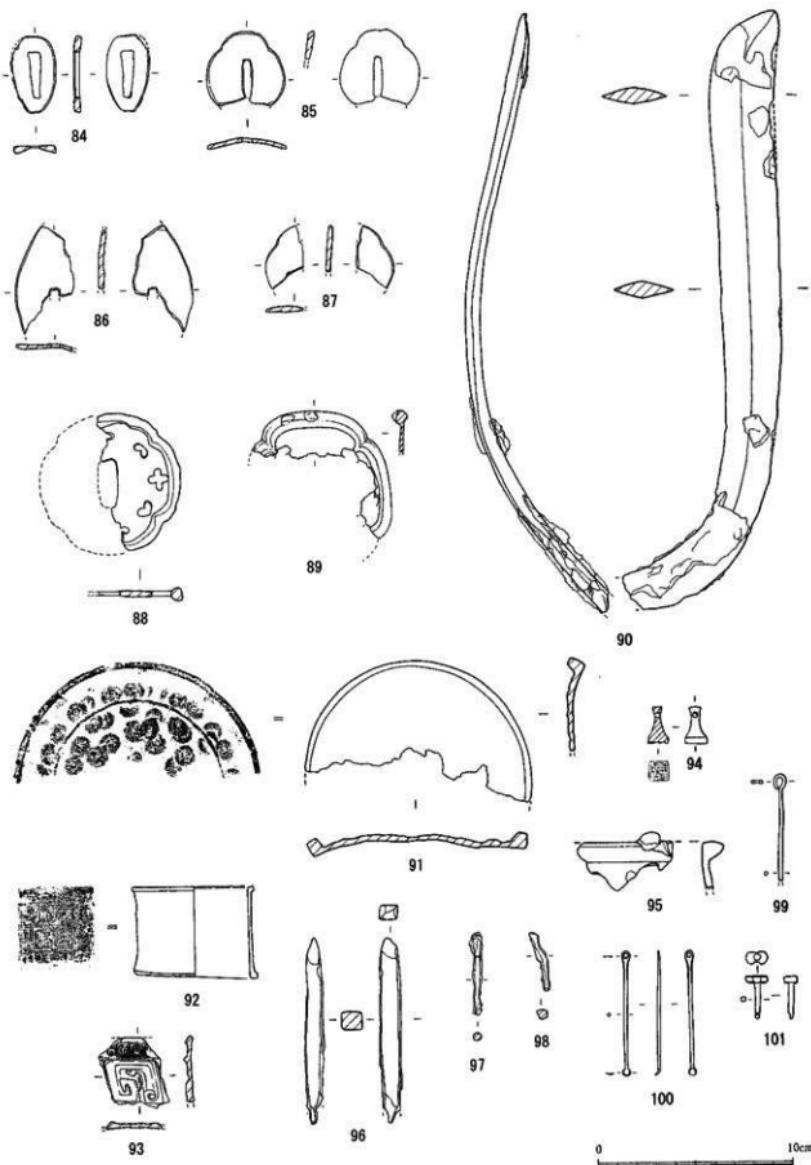
圖版 109 金屬製品 6



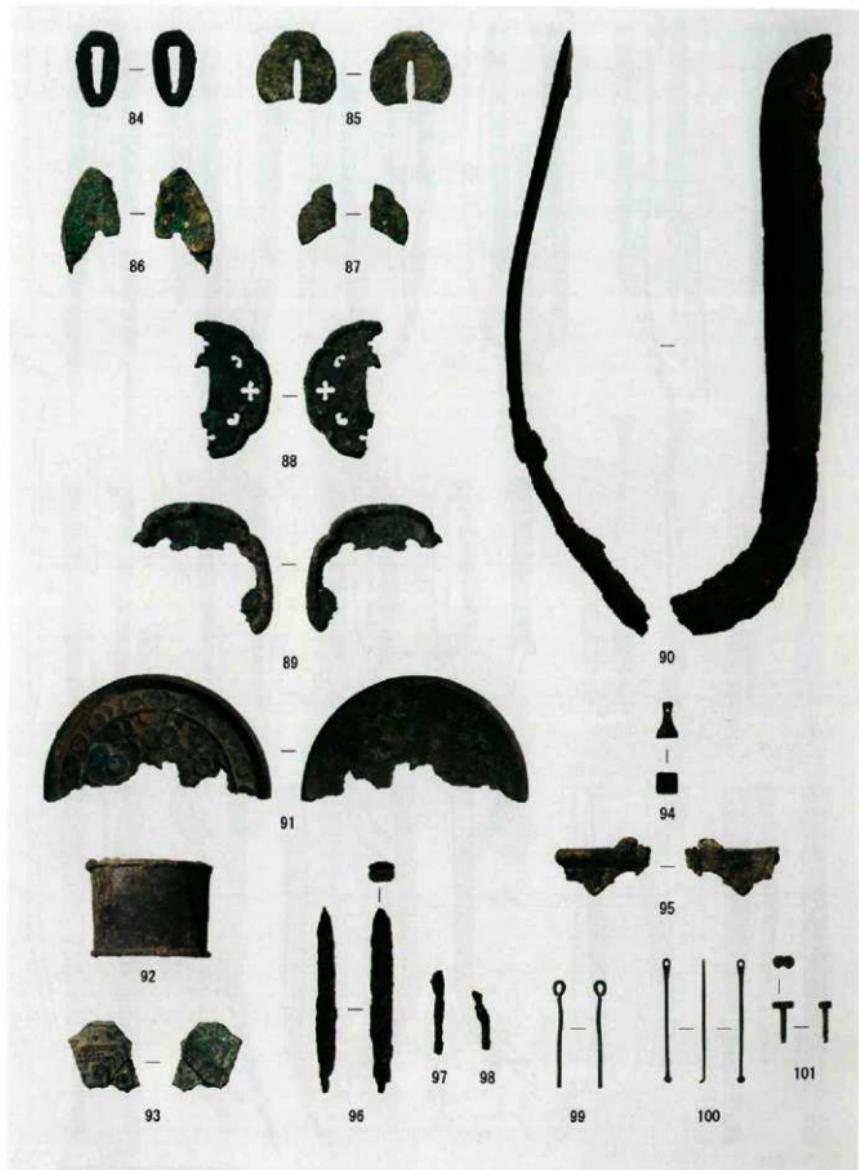
第145図 金属製品 7



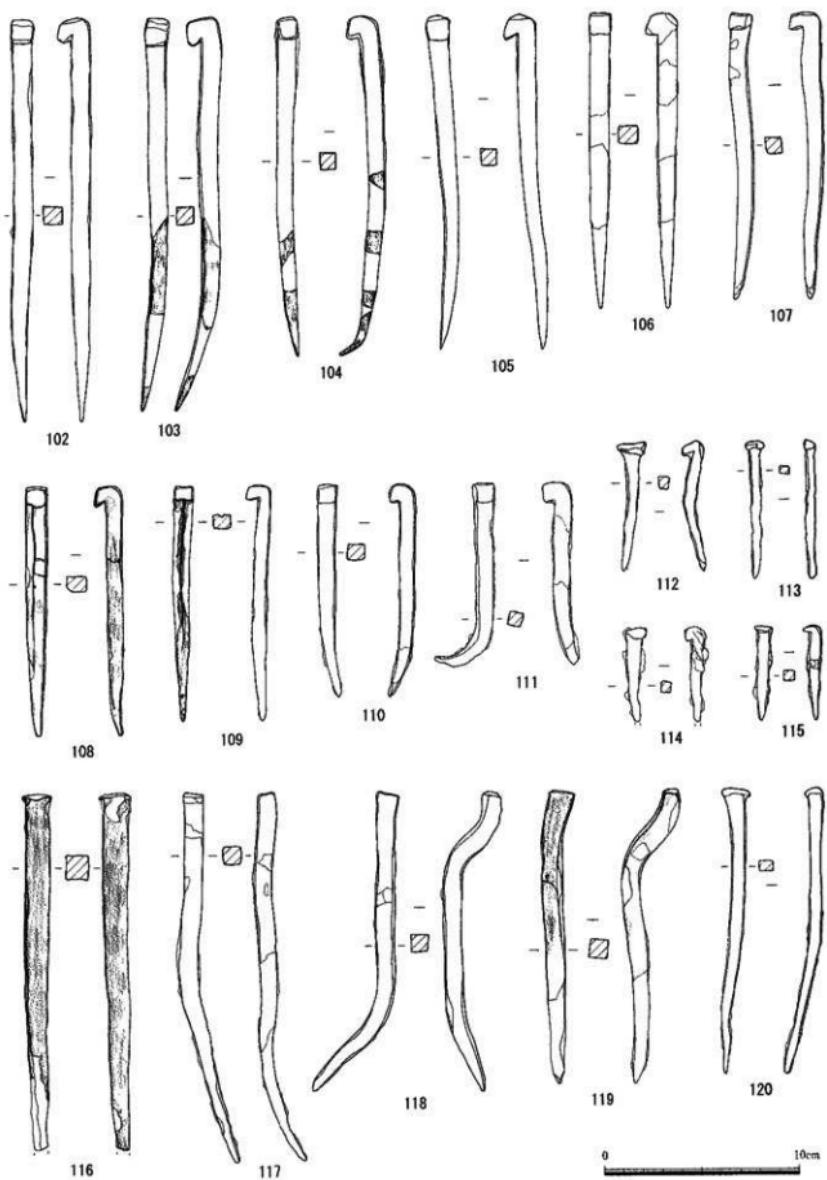
図版 110 金属製品 7



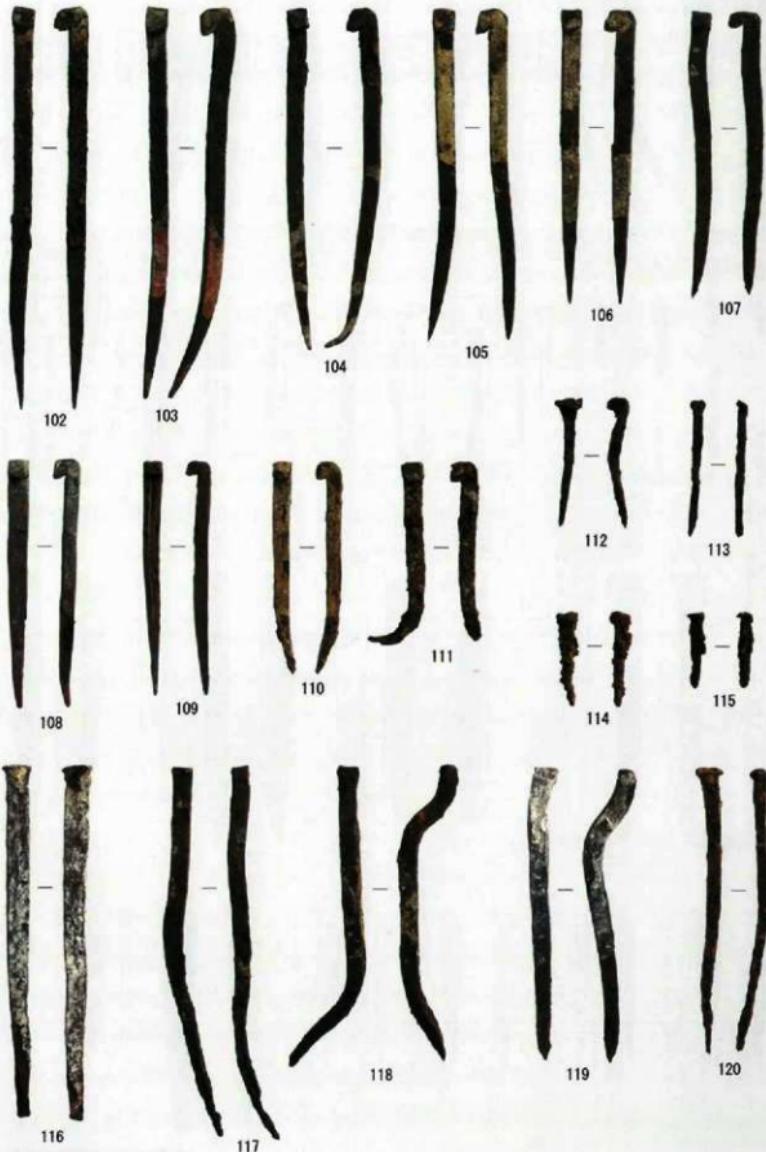
第 146 図 金属製品 8



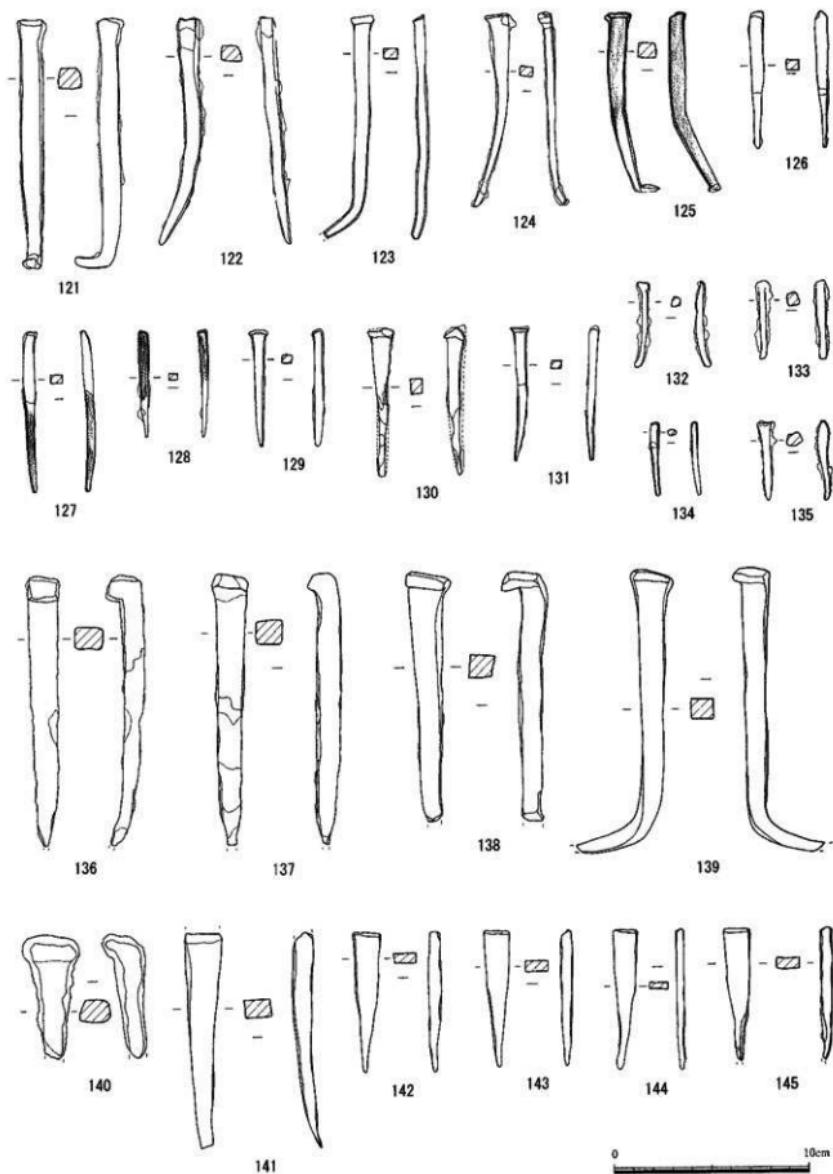
图版 111 金属制品 8



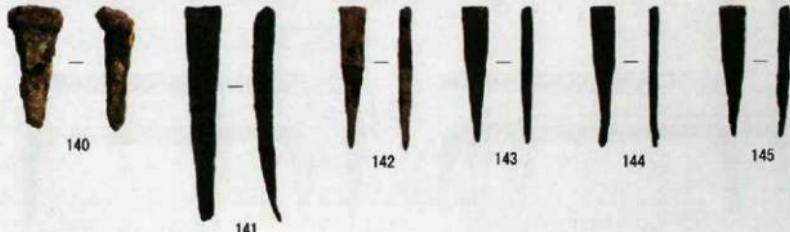
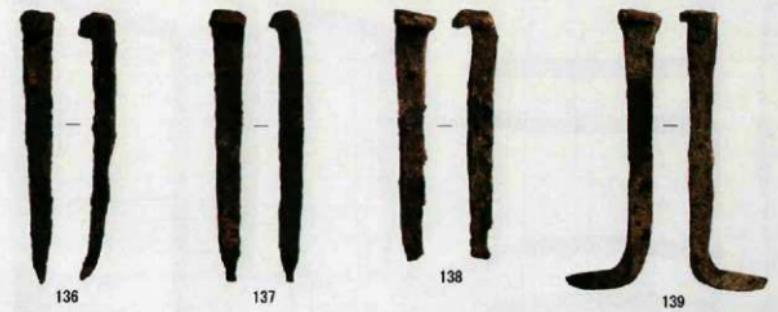
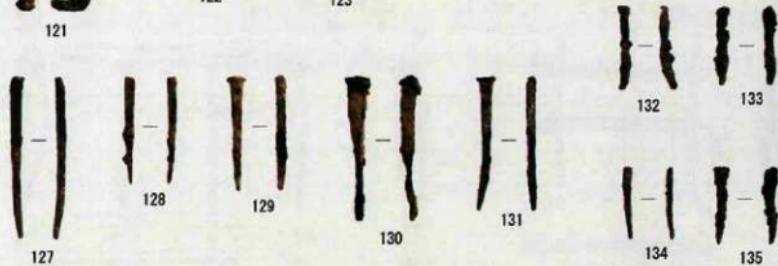
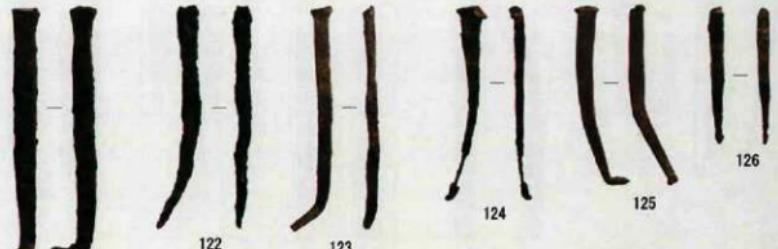
第 147 図 金属製品 9



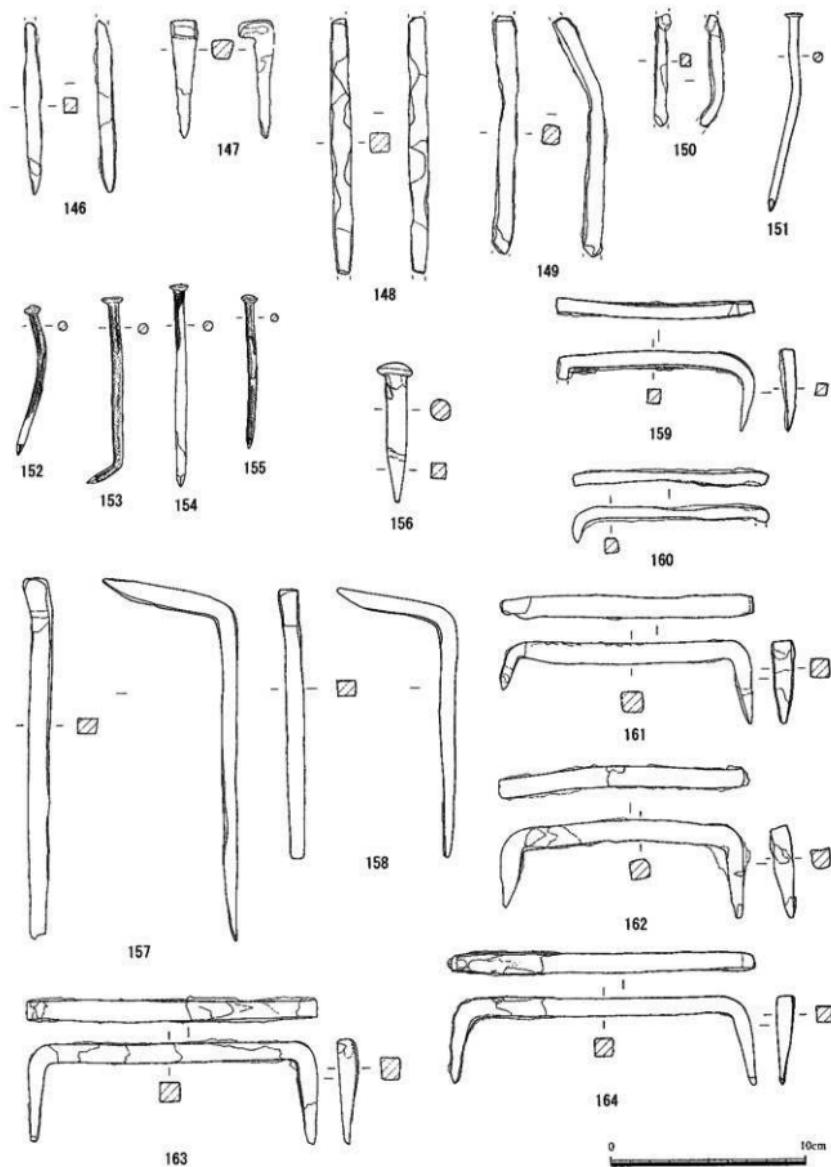
図版 112 金属製品 9



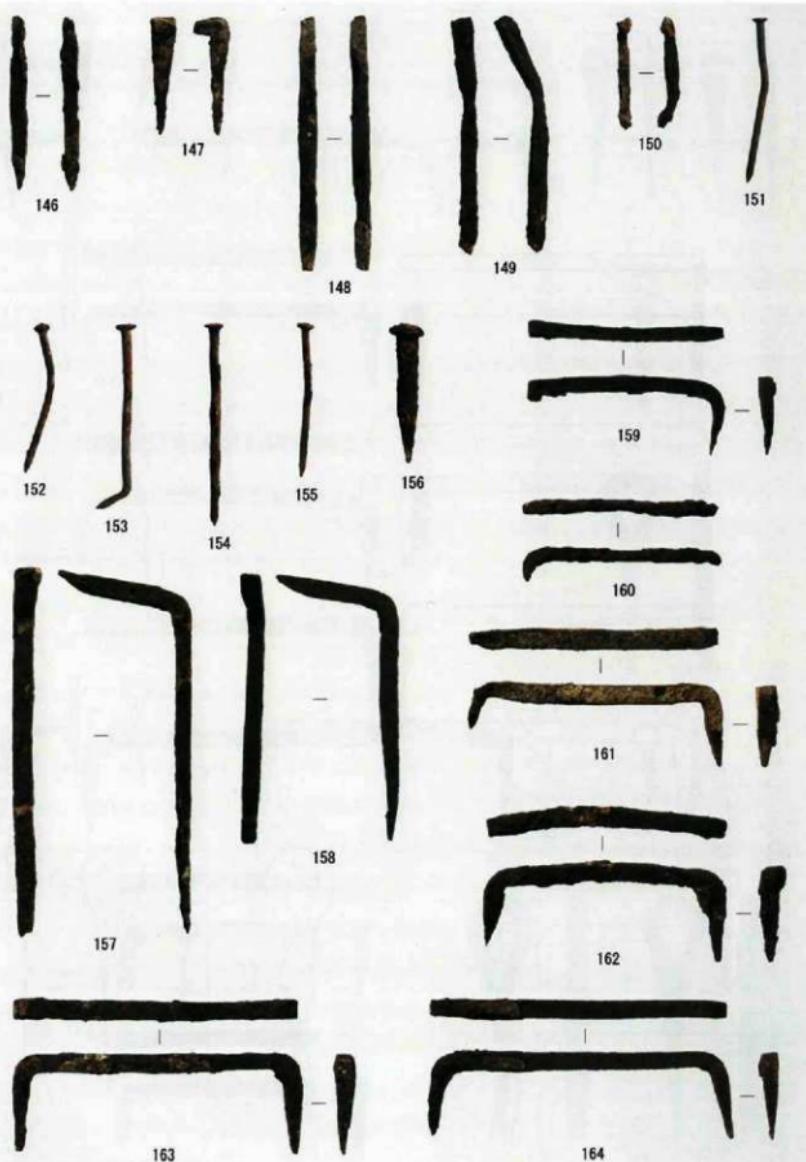
第148図 金属製品 10



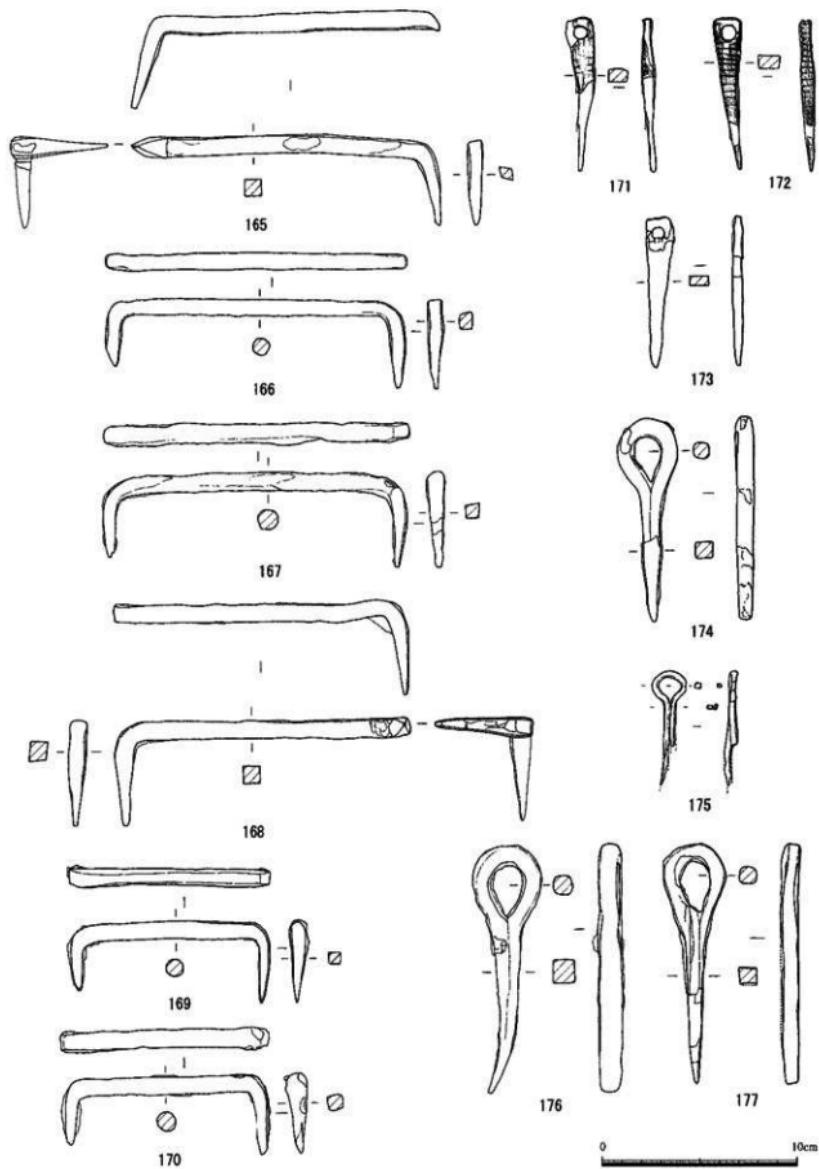
圖版 113 金屬製品 10



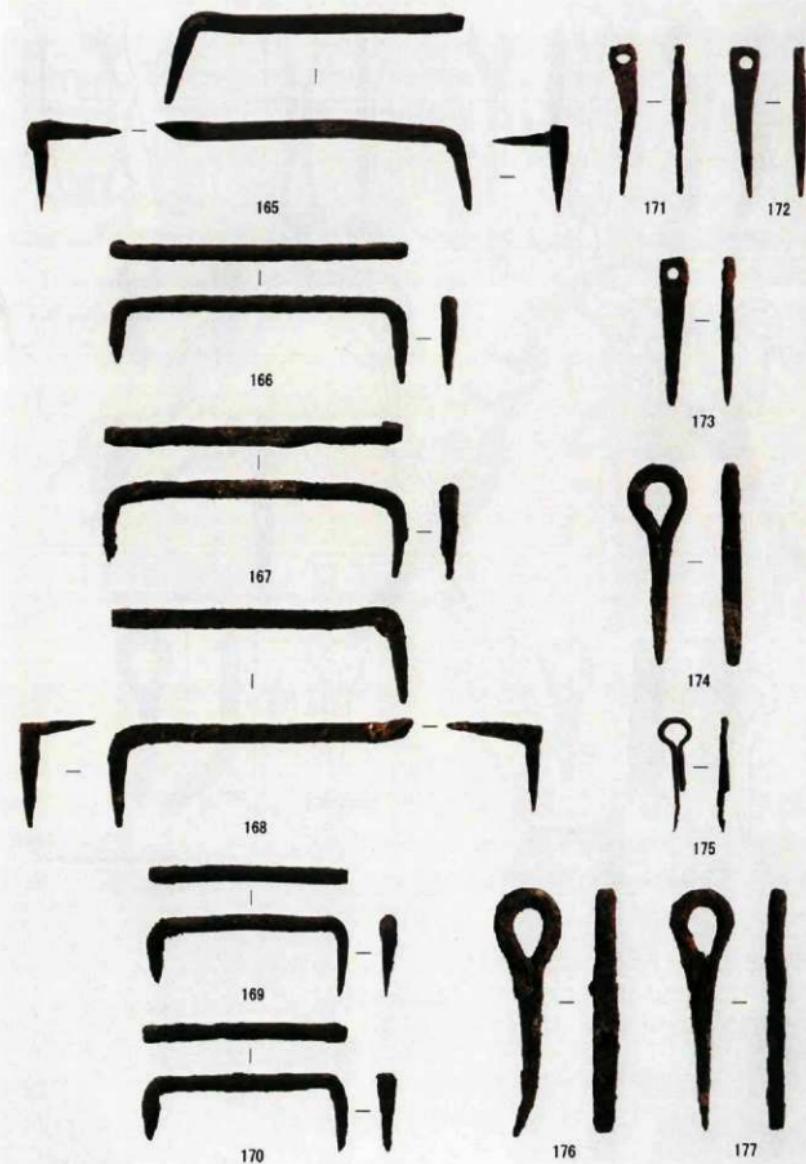
第149図 金属製品 11



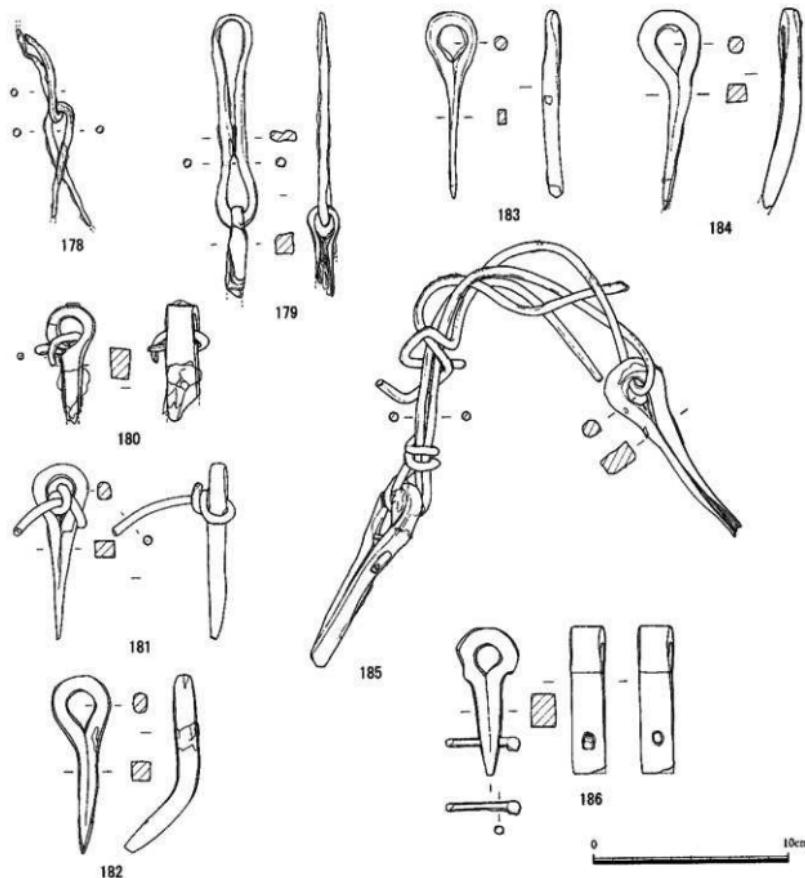
図版 114 金属製品 11



第150図 金属製品 12



図版 115 金属製品 12



第151図 金属製品 13



178



179



183



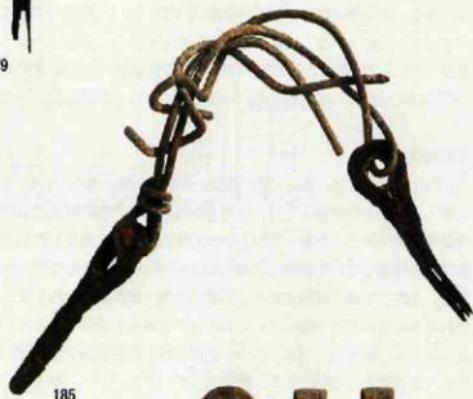
184



180



181



185



182



186

14 石製品

①石造物

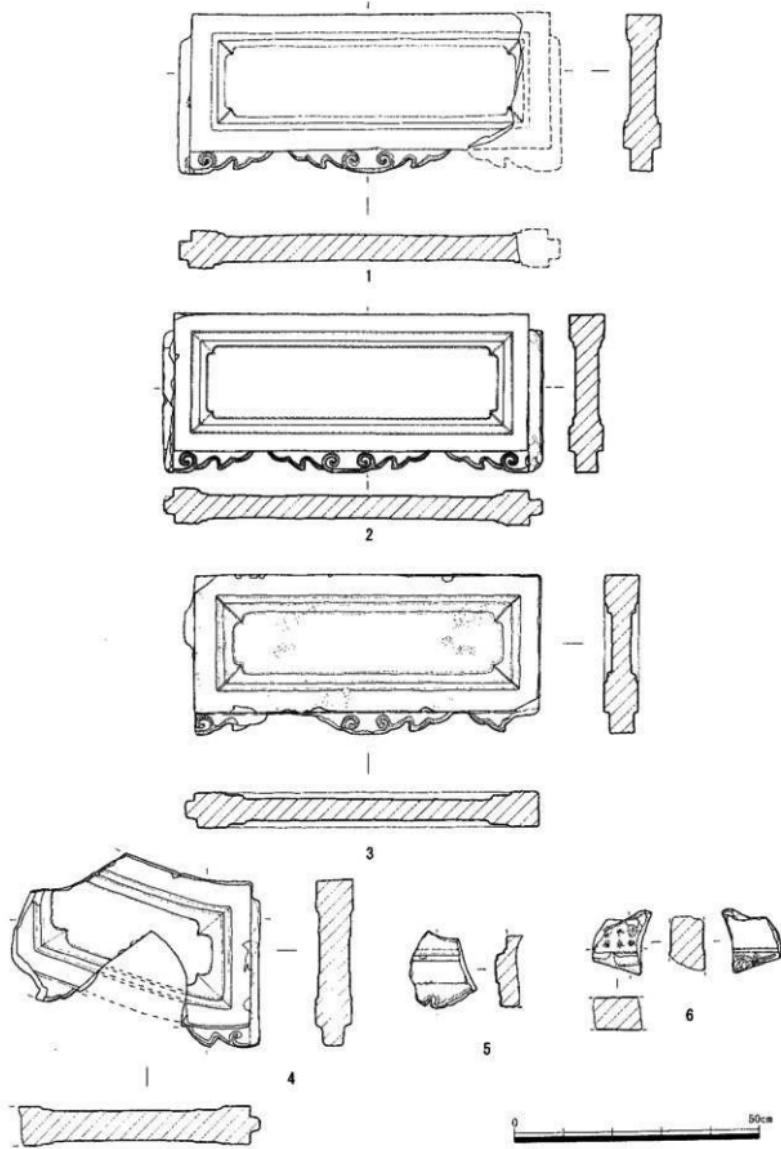
建材として利用された石造物及びその破片2,758点、石製品133点、人為的に持ち込まれたとみられる石材214点が得られている。石造物は高欄の各部位、龍柱、礎石、礎盤、石碑などのが得られている。純点数530点に上る高欄片は、階段部も含めて多く残り、接合によりほぼ往時の状態まで復元できるものも含まれている。礎石は整形加工と自然石利用とがみられ、礎盤は装飾された下部と無装飾の上部とが得られているが、下部礎盤は装飾部片のみで、本体部は明確な資料が確認されていない。龍柱はほぞ穴の残る資料が得られており、これは明治期の切断を示す痕跡である。確認された資料は切断後の上部龍柱のものが多く、明確な下部資料は1点のみである。なお、これら石造物は、持送り石を除いて細粒砂岩（ニービスフニ）が主要だが、高欄や龍柱の一部に県外石材の溶結凝灰岩製が、礎盤の一部に中国産とみられる輝緑岩製が含まれており、利用石材の変化がみてとれる。

②石製品

石硯、文鏡、石臼、碁石、駒、玉器、石筆、石球、石盤、火打石など11種の石製品が確認された。硯・石筆・石盤などの石製文具は、近世末から近代頃の赤間鏡をはじめ、背面使用者名の釘書から概ね近世末から近代の本土産である。石筆・石盤も学制の導入とともに普及したものであり、同様に近代に帰属する資料である。首里城が機能していた時期に帰属するとみられる資料として、石臼は3点得られているが、いずれも茶臼の下臼部で、主溝8分画の資料である。石球は土製・青銅製の弾丸も出土していることから石弾と推察され、弾丸と目される各材質の資料が揃っている点は注目される。美石である玉を素材とした玉器は中国的な風潮を反映した製品と目され、碗もしくは皿のほか、装飾がみられる製品などが確認される。文鏡、碁石、駒、砥石、火打石は帰属年代が判然としない。他方、磨製石斧やスクレイパー、敲石磨石類といった先史時代からグスク時代の前半期の可能性のある資料も確認されている。

③石材

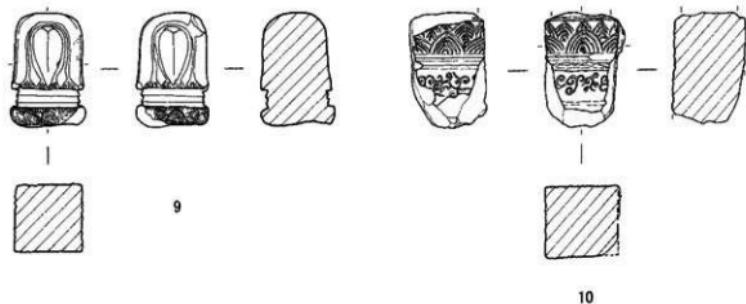
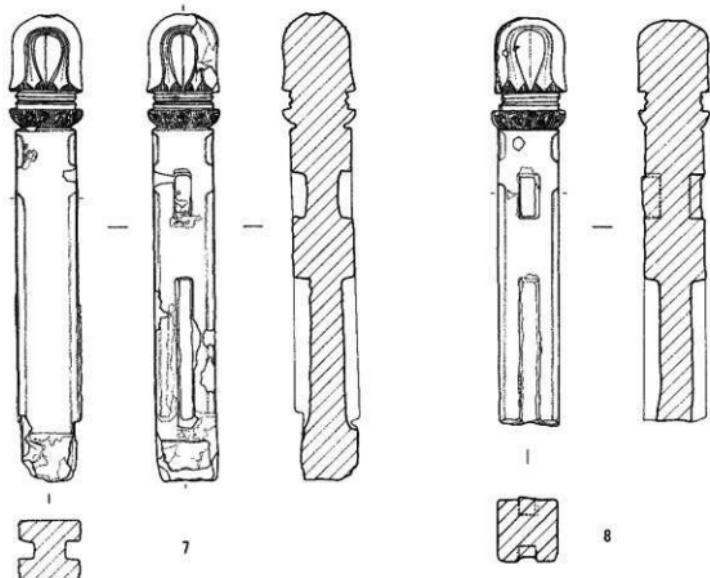
15種が認められた。そのうち最も多いのは細粒砂岩で、他に緑色千枚岩や砂岩といった本島北部もしくは慶良間諸島に分布する石材が多い。また上記の玉器に関連する翡翠や軟玉、水晶・石英なども僅かながら確認され、首里城内の美石加工の可能性を示す資料として理解される。また自然石の中でも扁平な円盤で、平坦面がやや平滑なものを玉砂利の可能性がある資料と目した。玉砂利とした資料は、上記と同様に砂岩が主体で、他に粘板岩、頁岩、緑色岩などが確認された。



第152図 石製品 1



図版 117 石製品 1



第 153 図 石製品 2



7

8

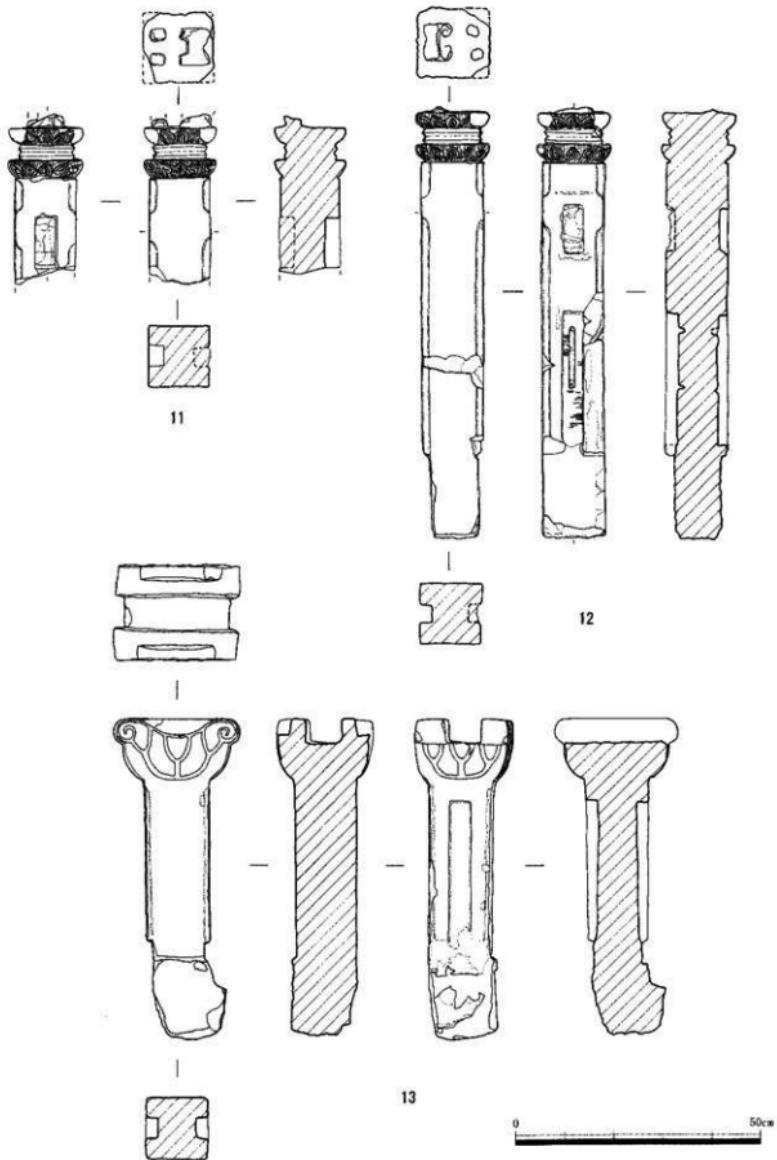


9



10

圖版 118 石製品 2



第154図 石製品3



11

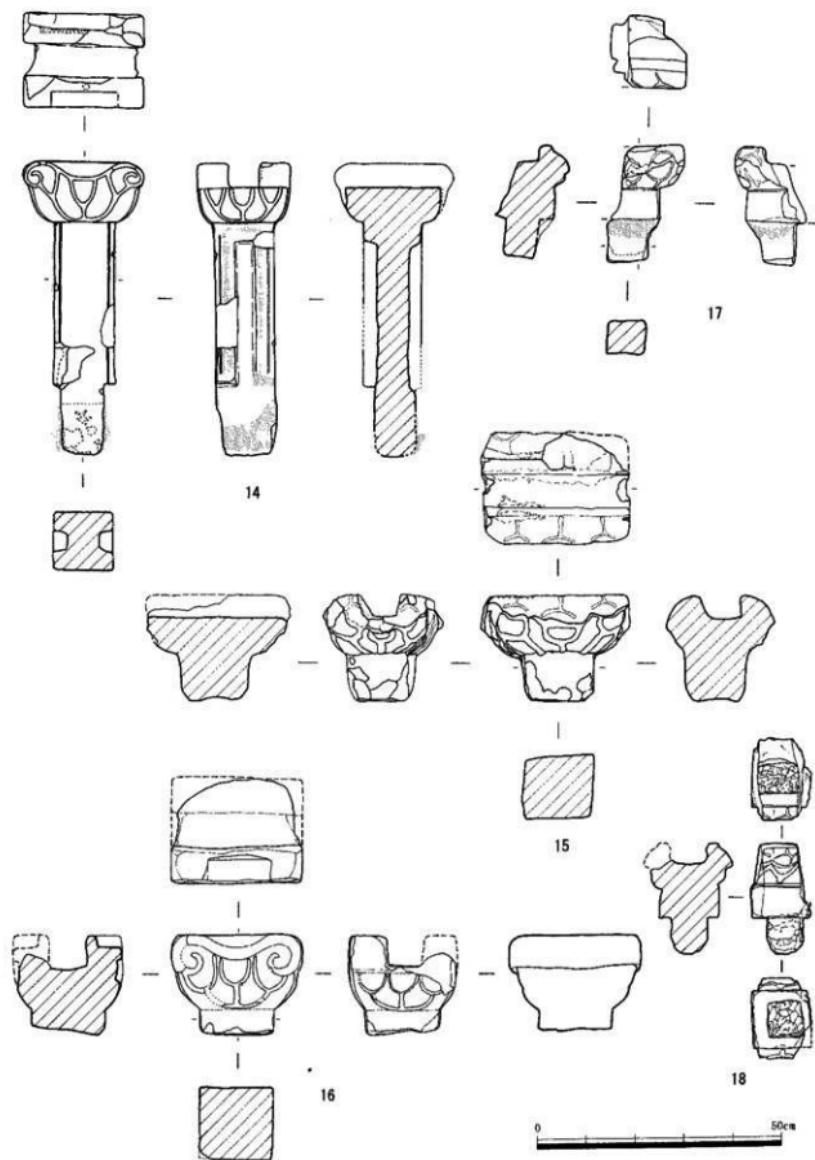


12



13

圖版 119 石製品 3



第155図 石製品4



14



17



15

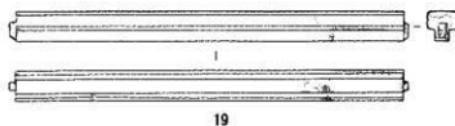


18

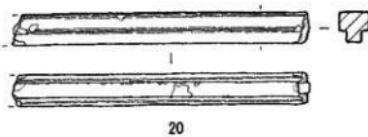


16

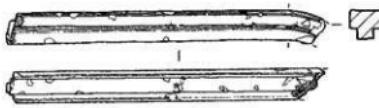
圖版 120 石製品 4



19

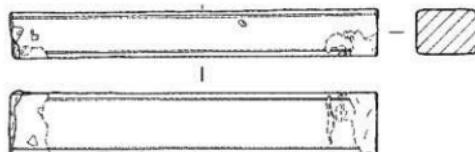


20

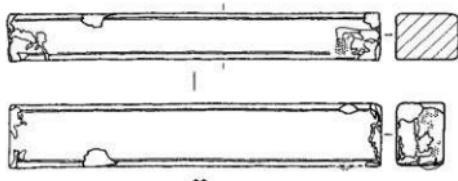


21

0 100cm
(19～21は縮尺5%)



22



23

0 50cm
(22・23は縮尺10%)

第 156 図 石製品 5



19



20



21

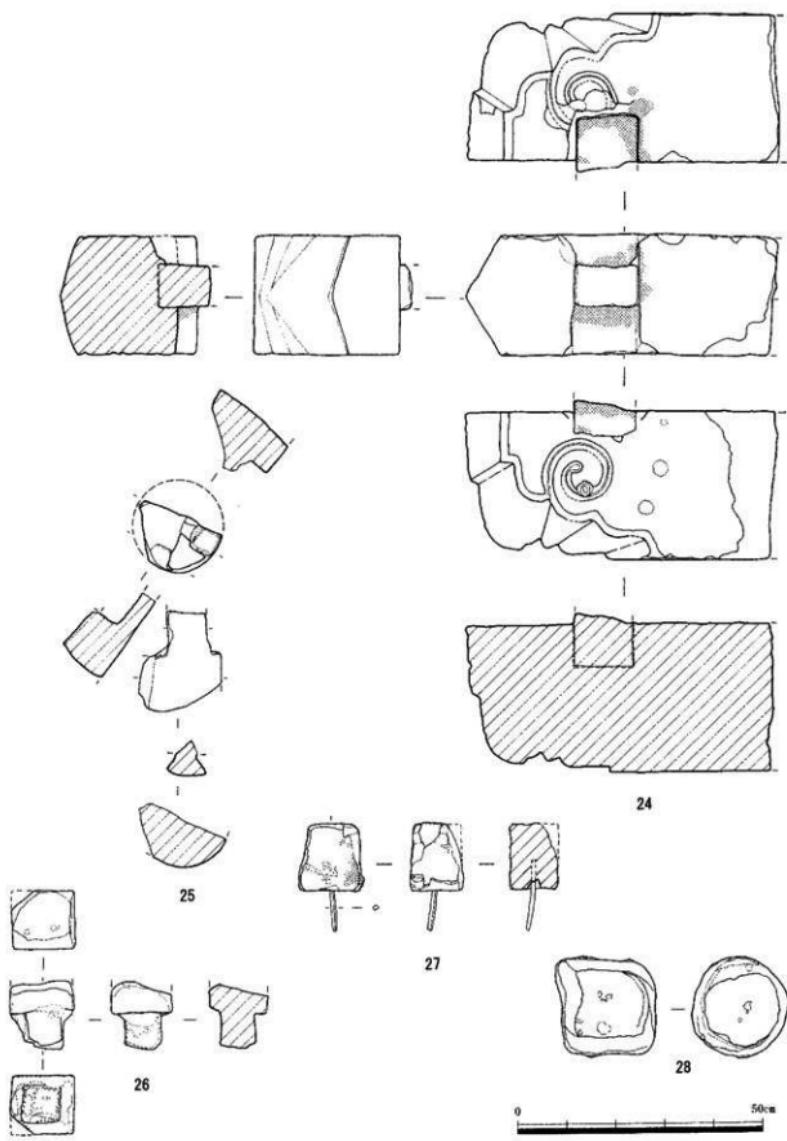


22

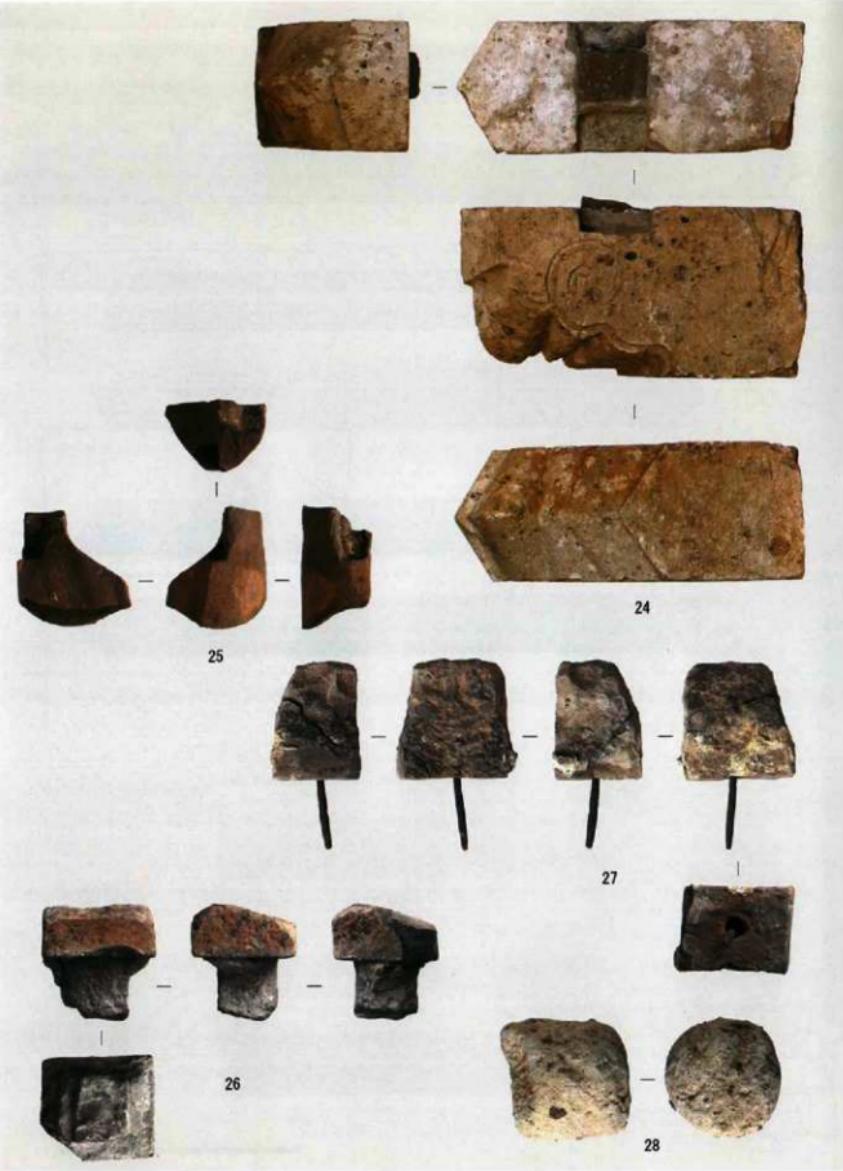


23

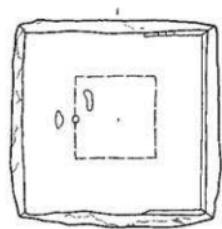
圖版 121 石製品 5



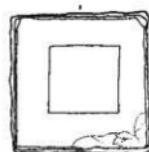
第157図 石製品 6



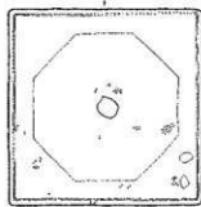
図版 122 石製品 6



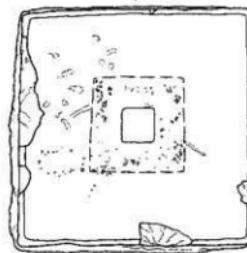
29



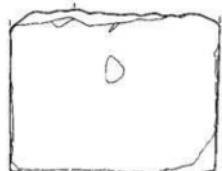
30



31



32



33



第 158 図 石製品 7



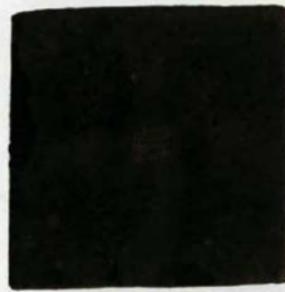
29



30



31

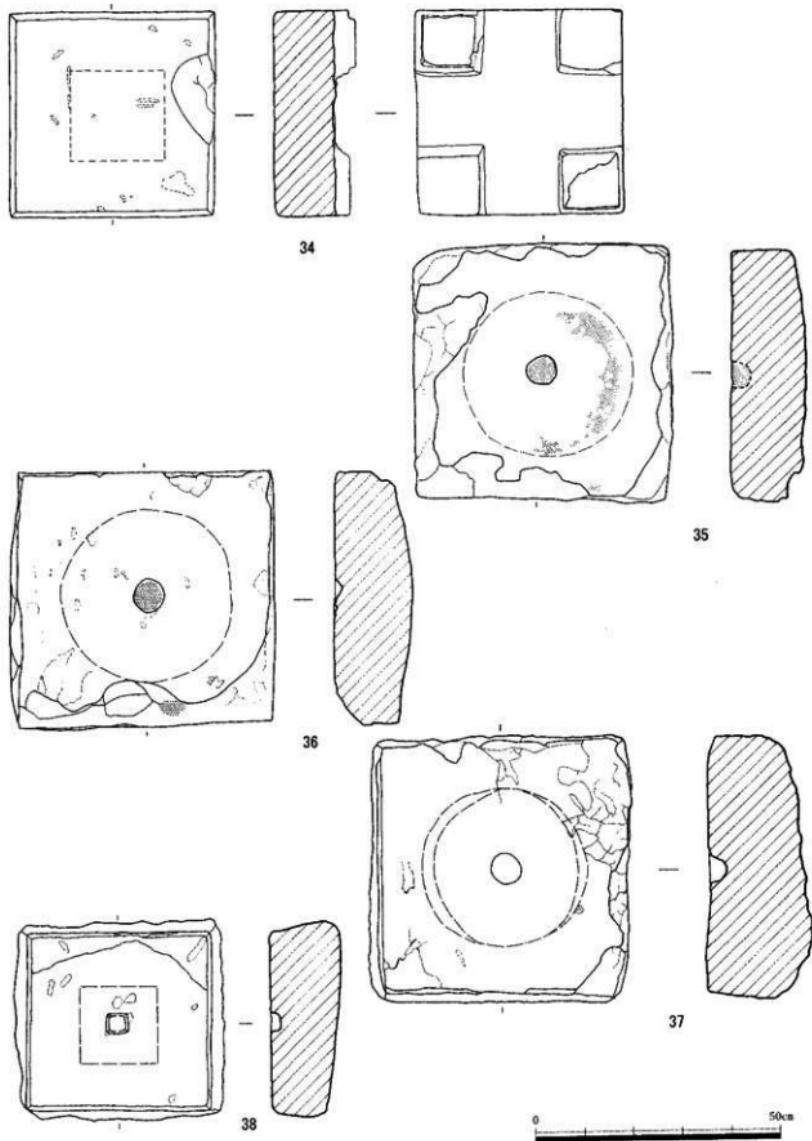


32



33

圖版 123 石製品 7



第 159 図 石製品 8



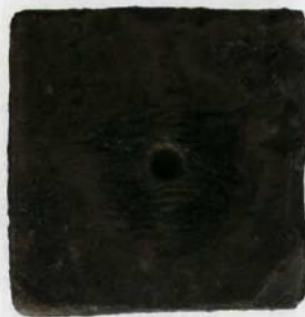
34



35



36

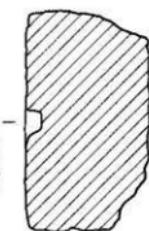


37

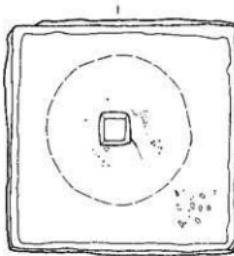


38

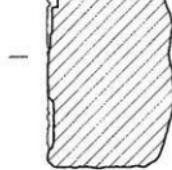
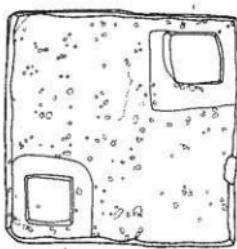
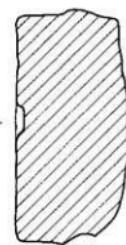
図版 124 石製品 8



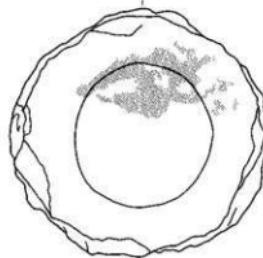
39



40



41



42



第 160 図 石製品 9



39



40

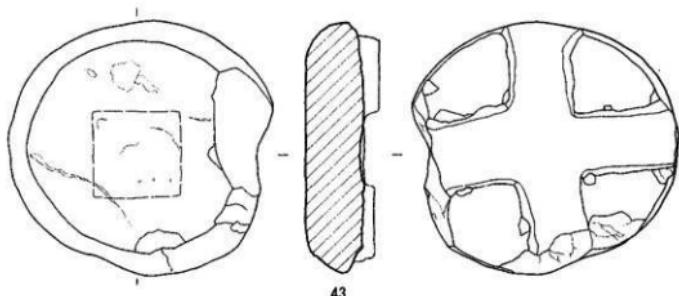


41

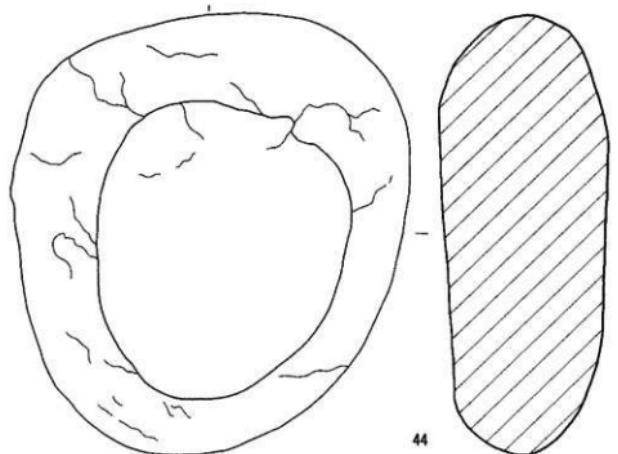


42

図版 125 石製品 9



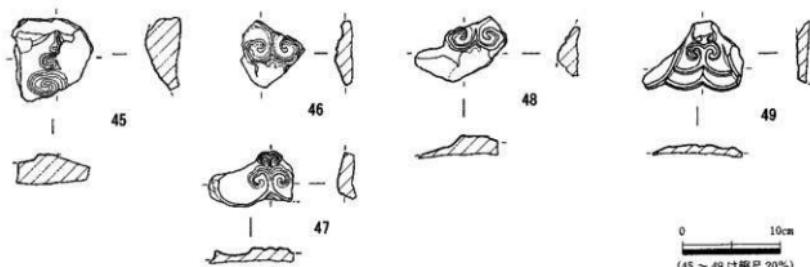
43



44

50cm

(43 ~ 44 拡縮尺 10%)



45

46

48

49

47

0 10cm
(45 ~ 49 拡縮尺 20%)

第 161 図 石製品 10



43



44



45



46



48

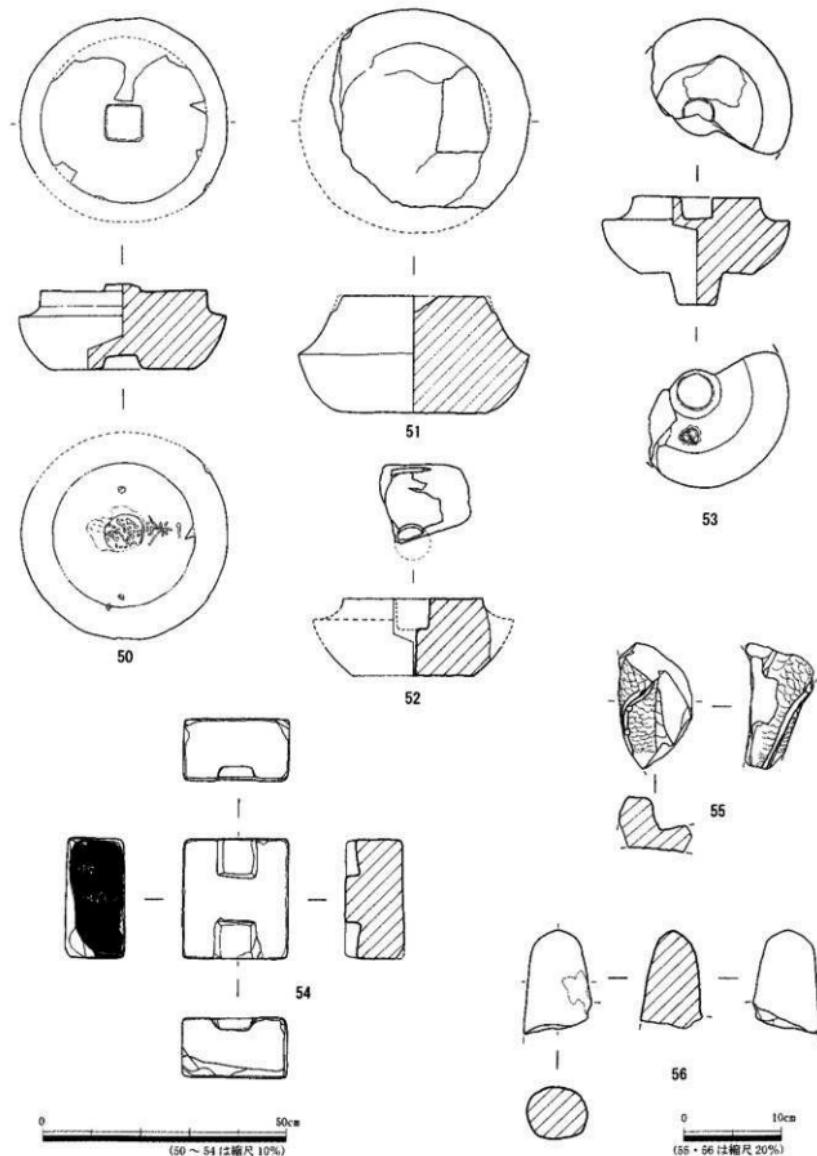


49

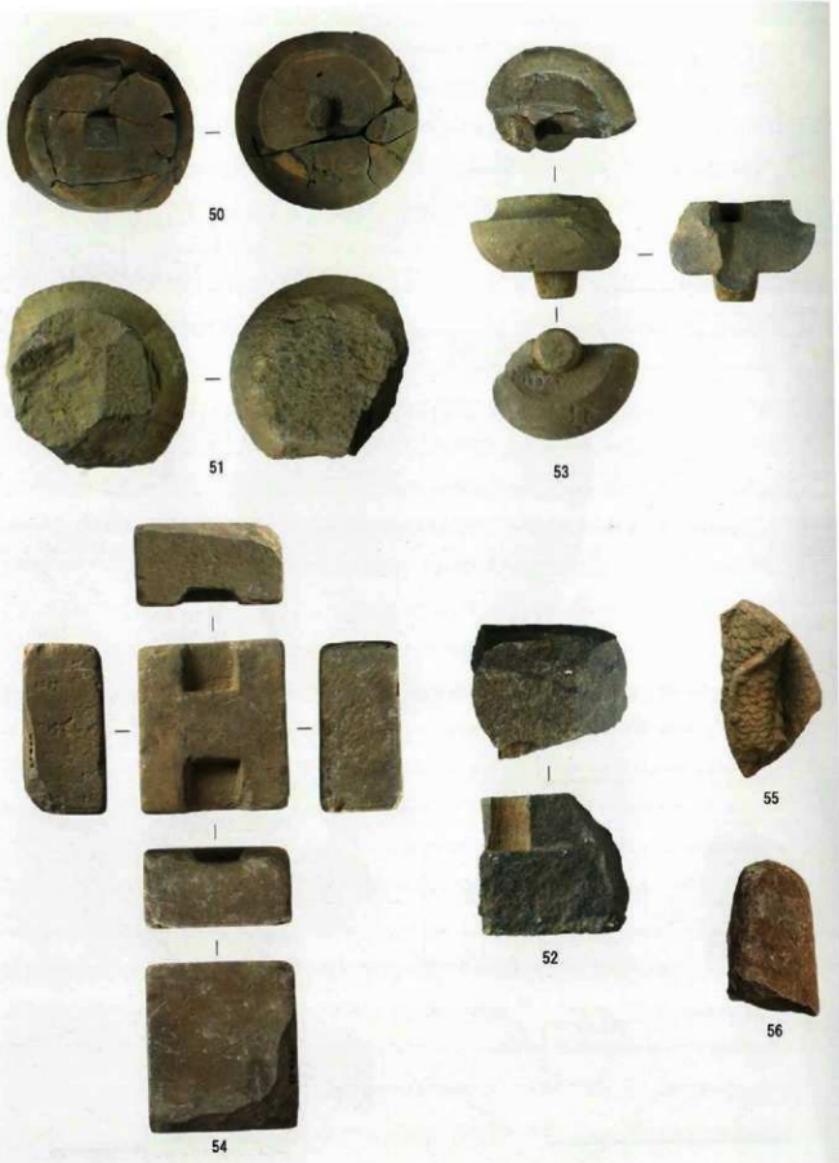


47

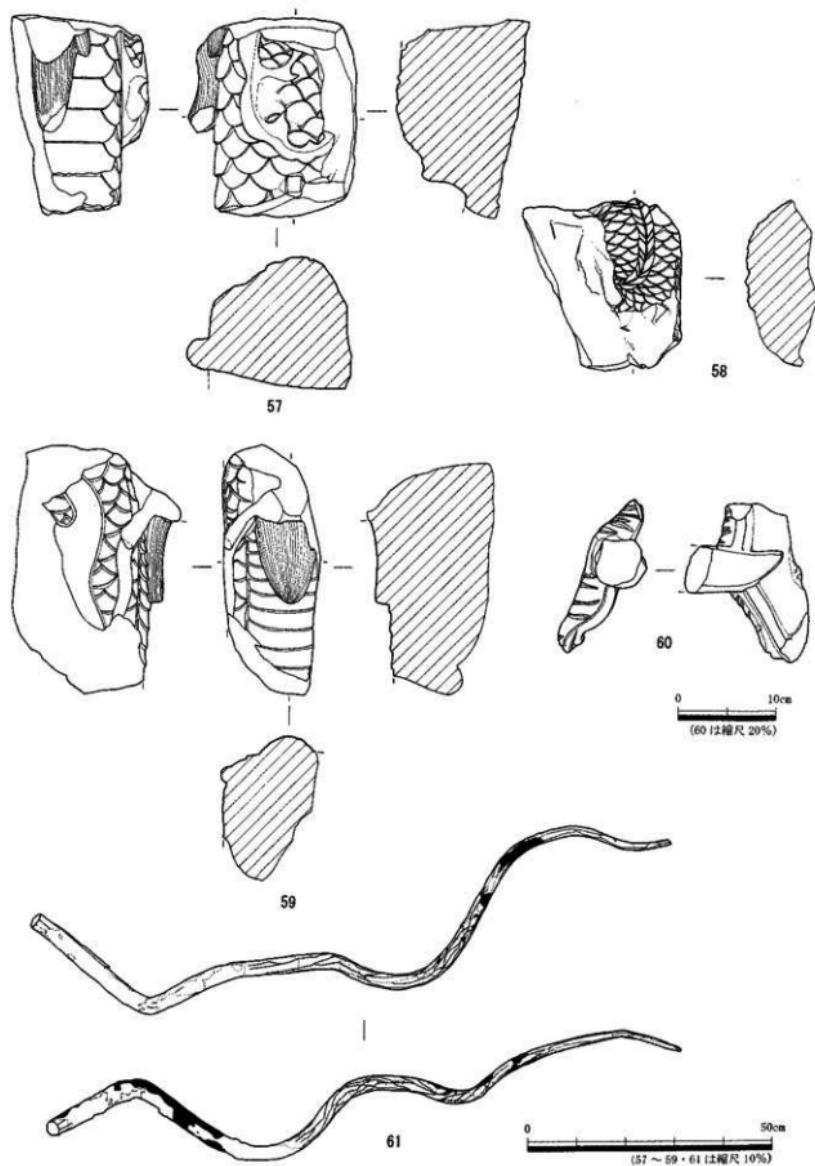
図版 126 石製品 10



第 162 図 石製品 11



図版 127 石製品 11



第 163 図 石製品 12 (※61金属製品)



57

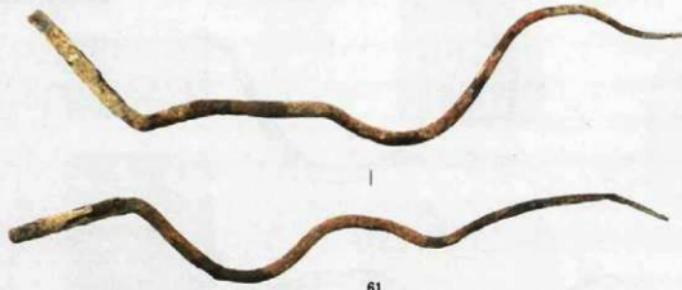


58



60

59



61

圖版 128 石製品 12 (※61金屬製品)



62



63



64



65



66



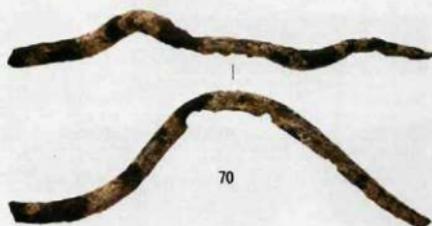
67



68

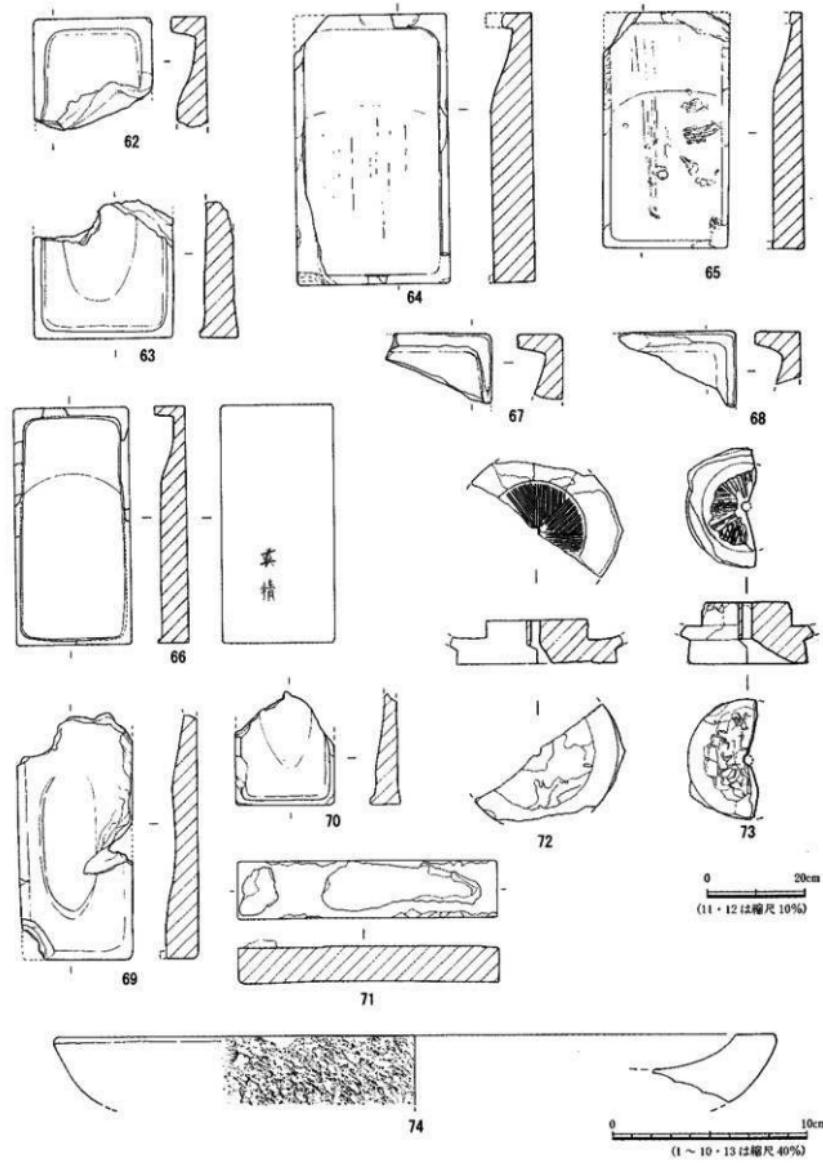


69

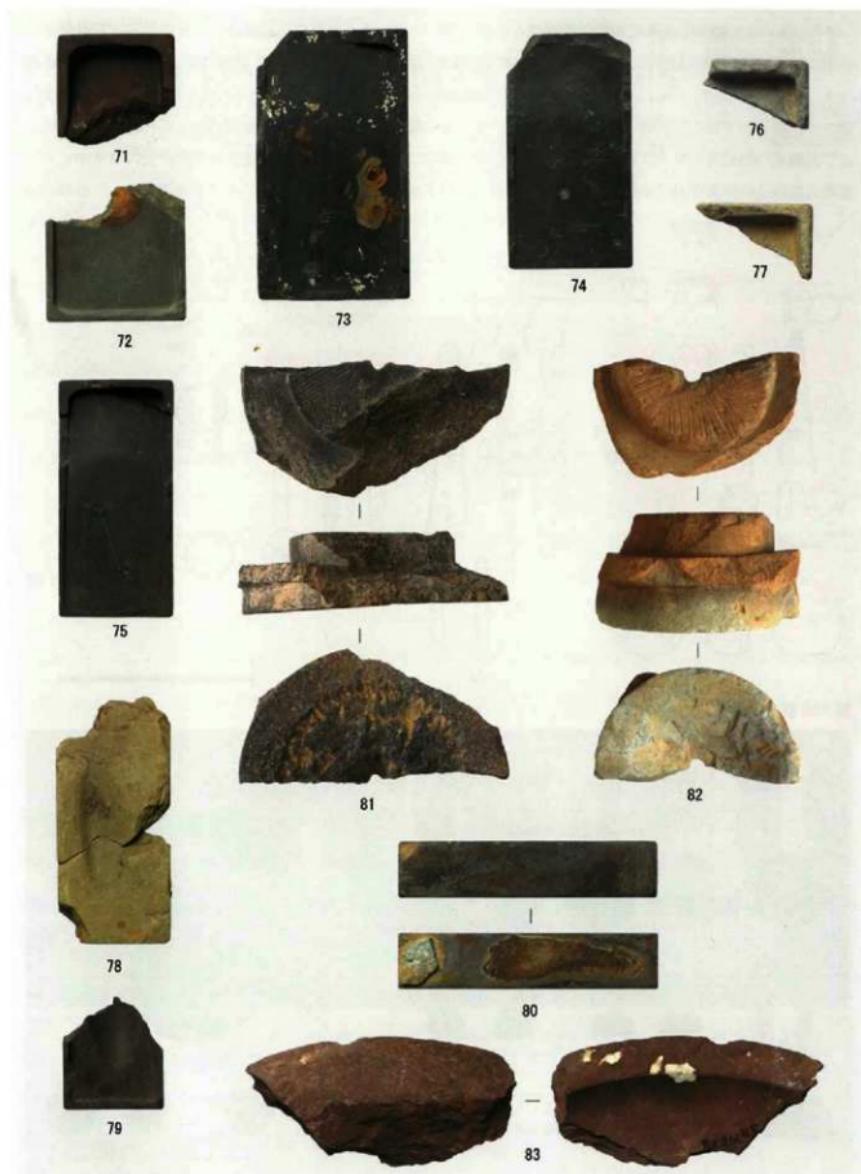


70

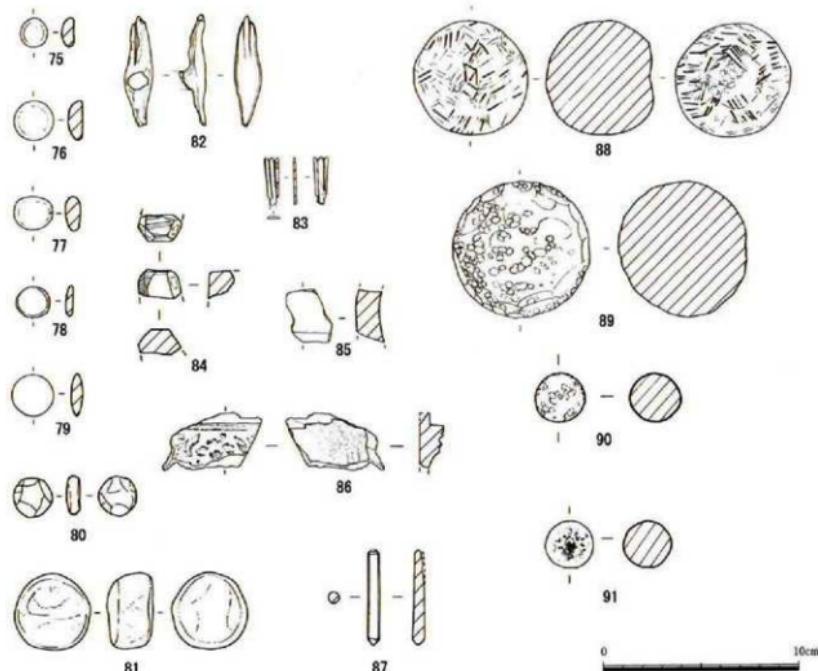
圖版 129 石製品 13 (※70金屬製品)



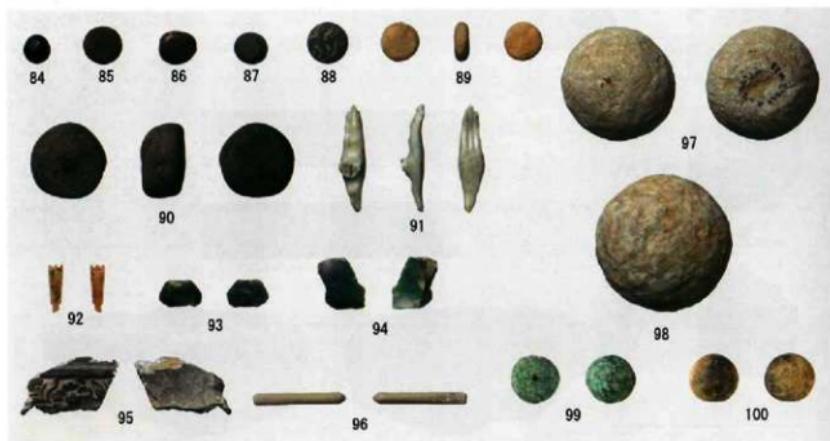
第 164 図 石製品 13



図版 130 石製品 14



第165図 石製品14.弾

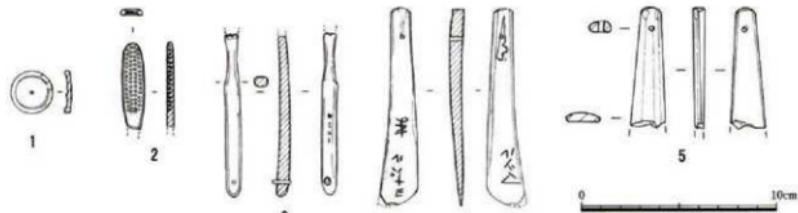


図版131 石製品15.弾

15 骨製品

正殿地区からは全8点の骨製品が確認された（第51表）。そのうち特徴的な5点を第166図に示すとともに、各資料の特徴を第52表に記載した。資料個々の特徴はそれらに参照して頂き、ここでは当地区の出土資料について概観したい。

骨製品のうち、1を含む器種不明の製品を除くと歯ブラシとヘラが確認された。前者については、本国での歯ブラシの本格的使用時期が近代であることから、その時期の資料と目される。一方でヘラは首里城の他地区でもみられるが、4は所有者とみられる記名が釘書きされており、硯など同様の記名がみられる資料から近世と推定される。



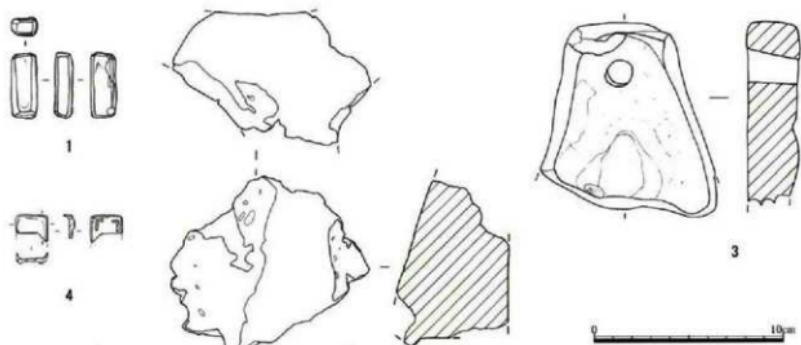
第166図 骨製品



図版132 骨製品

16 土製品

土製品は全 22 点が確認されるが（第 53 表）、そのうち製品の形状を残す 4 点を第 167 図に示し、観察所見を第 54 表に記載した。この中で器種が特定されるのは 4 の角皿のミニチュア製品で、本土の近世遺跡において散見される資料である。



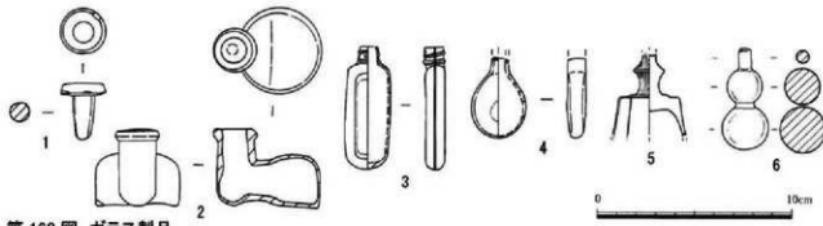
第 167 図 土製品



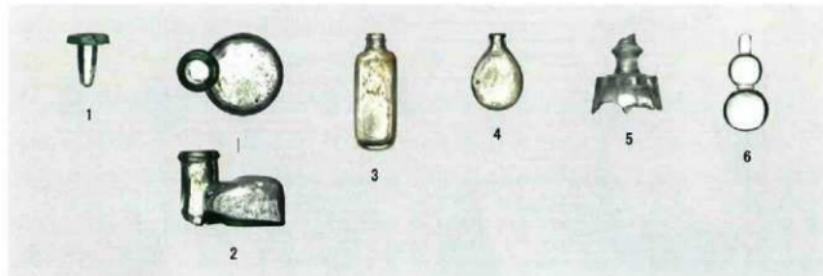
図版 133 土製品

17 ガラス製品

ガラス製品は全 21 点(第 55 表)が出土しているが、その中で残存状態のよい 6 点を取り上げて図示(第 168 図)及び観察表(第 56 表)に記載した。器種の特定できるガラス製品は薬瓶とその蓋(3~5)とインクボトル(2)で、いずれも近代のものとみられる。



第 168 図 ガラス製品



図版 134 ガラス製品

18 自然遺物

①貝類遺体

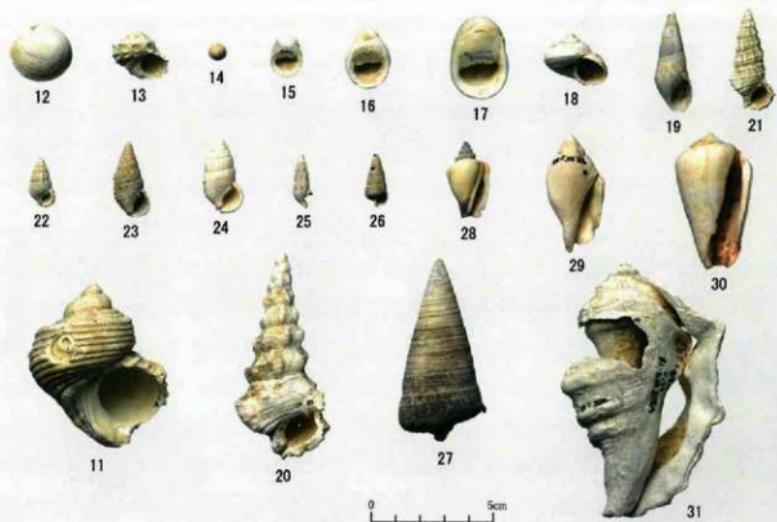
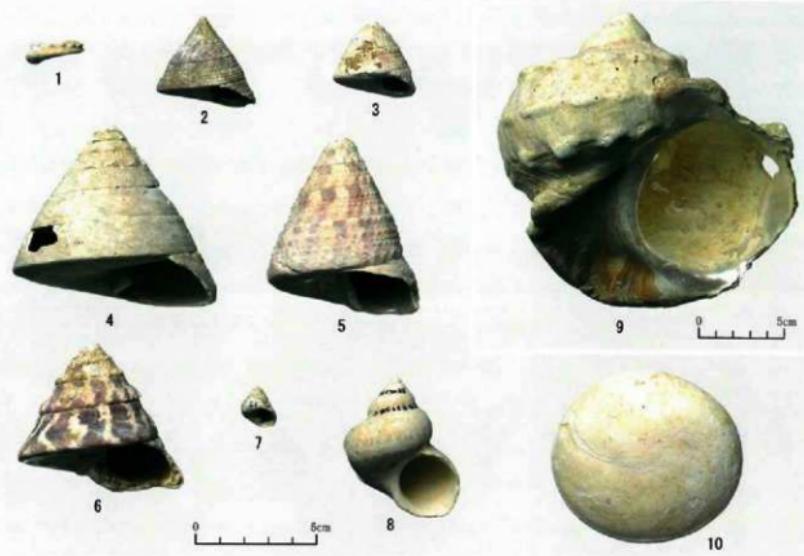
貝類遺体は、発掘調査で他の遺物と共に取り上げたピックアップ資料である。種の同定は当センター所蔵の現生標本や県内出土資料との比較により判断し、生息地は黒住耐二氏の研究（黒住 1987）に基づき分類した。

同定できた資料は巻貝が 75 種、二枚貝が 37 種の計 112 種で、最小個体数は前者が 3,861 点、後者が 2,469 点の総数 6,330 点となる。貝種別にみると、ヤコウガイ（身と蓋の合計）、カンギク、ウミニナカニモリ、アラスジケマンガイが多い（第 57・58 表）。

第58表 哺乳類遺体等種別一覽

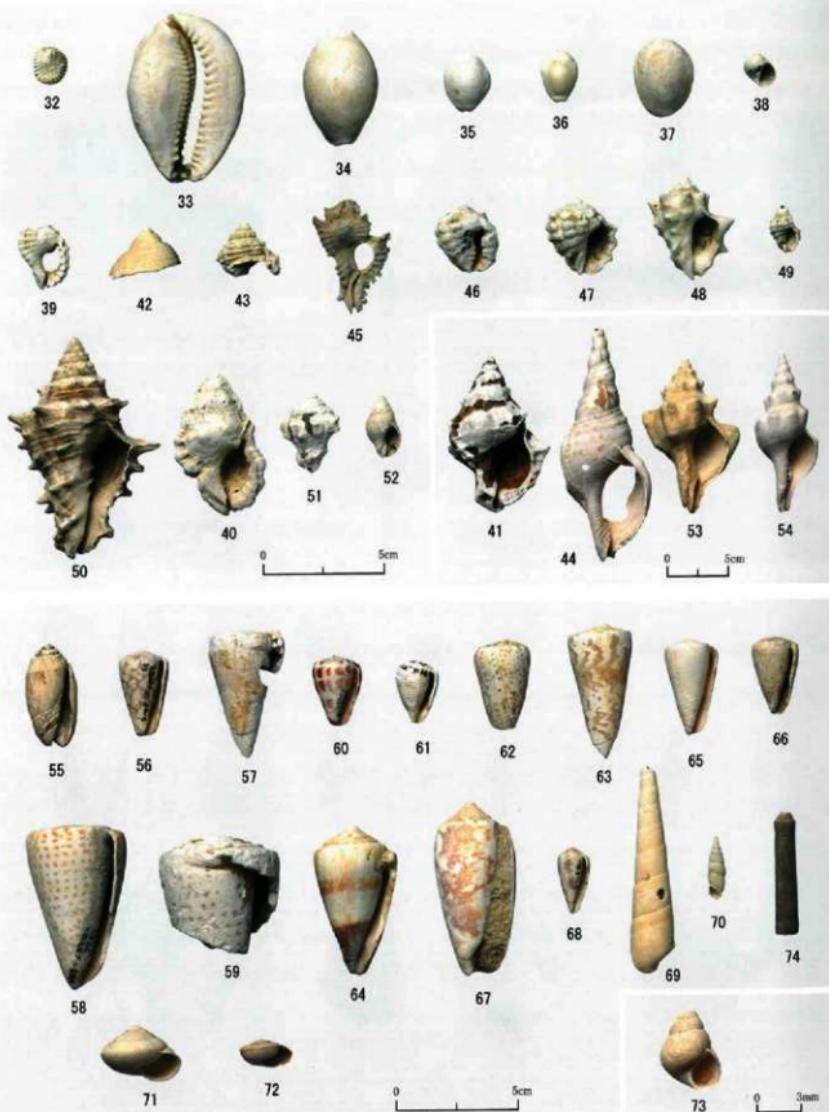
大区分	小区分	底質等
I:外洋・サンゴ礁	0:潮間帯上部 (I-ノッチ、III-マングローブ)	
II:内湾・紅色岩	1:潮間帯中・下部 2:亜潮間帯上縁部 (Iではイノ-) 3:干瀬 (Iにのみ適応) 4:礁面およびその下部	a:岩盤 b:転石 c:岩砂底、砂泥底、砂底
IV:淡水域	5:止水 6:流水	d:マンガローブ植物上 e:淡水の流入する心臓底
V:陸域	7:林内 8:林内・林縫部 9:林縫部 10:海浜部	
VI:その他	11:打ち上げ物 12:化石	

第59表 貝類の生息場所類型（黒住 1987 より作成）



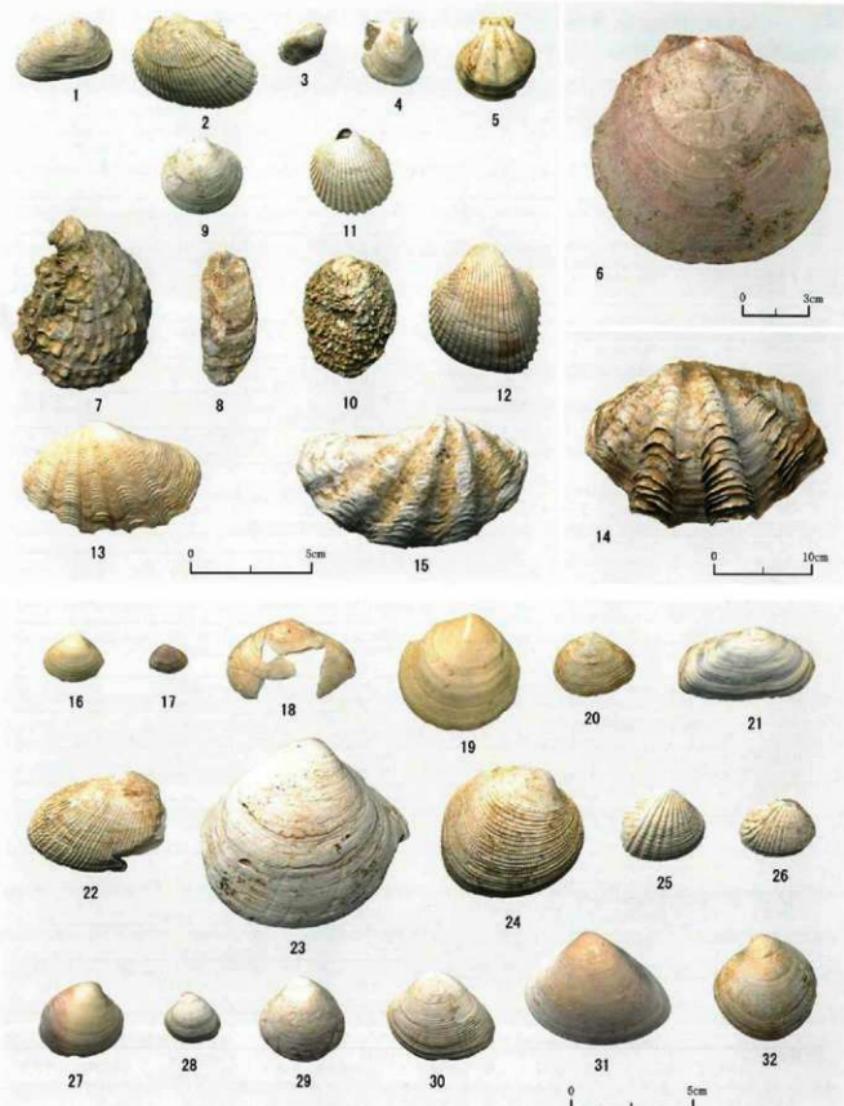
図版 135 貝類遺体 1

1.イガフコイ 2.シキガイ 3.ムラサキガイ 4.ギンガマ 5.ベニリカタ 6.サザナイト 7.オオカツラガイ
8.リュウガイ 9.ヤコガイ 10.ヤコガイの蓋 11.ヨウゼンガイ 12.ヨウゼンガイの蓋 13.カキ 14.カキの蓋
15.モルガマキ 16.アオガイ 17.ニホンマガイ 18.オオカマガシ 19.リウカガコ 20.オノワガイ
21.コニラガイ 22.カミヒニ貝 23.ウニカキ 24.カミヒニ貝 25.イボニミナ 26.カツガイ
27.セコンガイ 28.オケドガイ 29.ミマガキ 30.マガキ 31.スジガイ



図版 136 貝類遺体 2

32.アラクガイ 33.ハマコウガイ 34.ハマコウガイ 35.ハマコウガイ 36.キロガタ 37.ハマコウガイ 38.ホシユリガイ
 39.イソコウガイ 40.ホコリ 41.ホコリホコリ 42.ウツカイ 43.ヒガイ 44.ホコリ 45.ガニビキ
 46.ミヅタガタ 47.アラカガタ 48.ツルイタ 49.コウジン 50.ホコリガタ 51.コニコニタ 52.タベツカバ
 53.イソコウガイ 54.ガタココロ 55.ツルイタ 56.ホコリ 57.ミドリタ 58.アラクシロメ 59.カタハナ
 60.ウツカイ 61.ホコリホコリ 62.ココロ 63.アラクシロメ 64.サギナギリモ 65.セイモ 66.ホコリモ 67.ニキミタ
 68.ヒガイモ 69.ホコリモ 70.ツルイタ 71.ツルイタ 72.ハマコウガイ 73.ハマコウガイ 74.アラカガタ



図版 137 貝類遺体 3

1. イカガイ 2. リュウキュウサザエ 3. リュウキュウビーリガイ 4. ミドリアオリ 5. リュウキュウキンチャク 6. ワヒガイ 7. マンガイの一種
8. カザリガイ 9. ウラナガガイ 10. カザリの一種 11. リュウキュウガル 12. ガラガイ 13. ヒメコガネイ
14. ヒメコガネイ 15. タラミ 16. イハマガイ 17. リュウキュウミノコ 18. ニコカガイ 19. サザラ 20. リュウキュウシラトド
21. マスガイ 22. リュウキュウスズメ 23. シレラミ 24. ヌタガイ 25. フラスジケマガガイ 26. オオヌシイシガガイ
27. コガハマグリ 28. イカハマグリ 29. マコロコロ 30. 31. ハマグリ 32. オオシマ

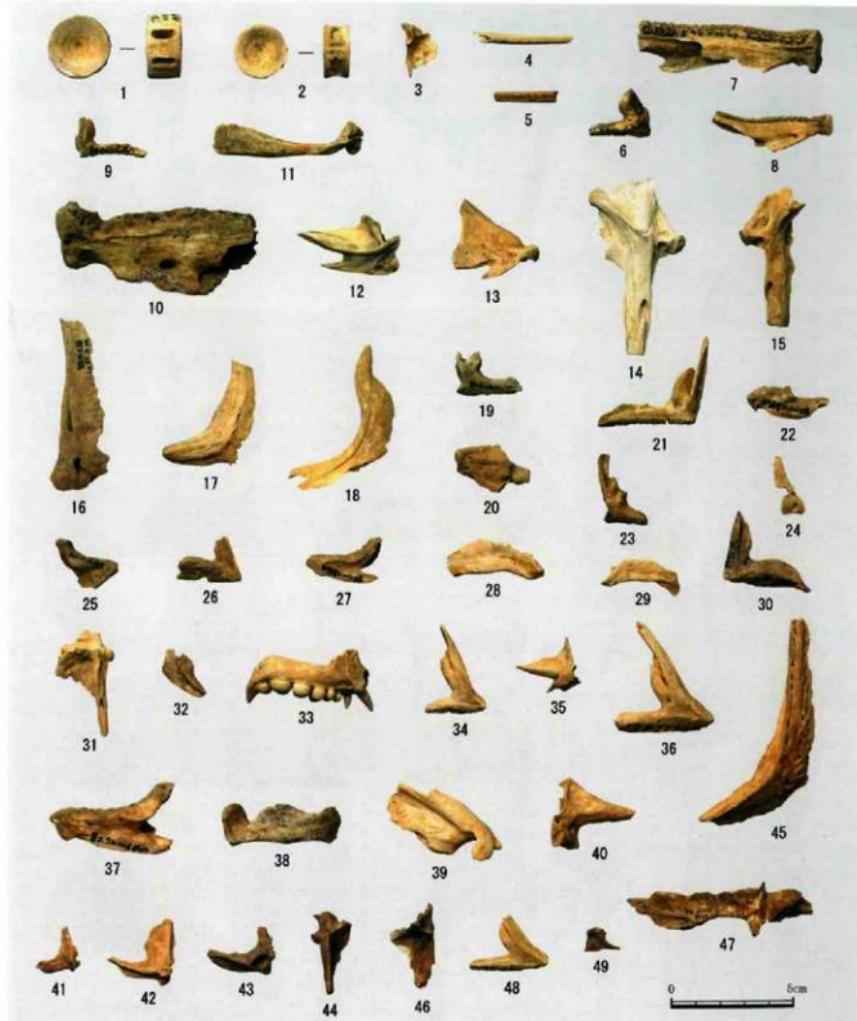
②脊椎動物遺体

脊椎動物遺体も貝類遺体と同様にピックアップ資料である。種の同定は当センター所蔵の現生標本や県内出土資料との比較により判断した。種名については権田岳二氏の成果（沖縄県埋文 2013b・2016）及び菅原広史氏の成果（沖縄県埋文 2010・2013c）などを参考にした。

同定できた資料は軟骨魚綱 2 分類群・硬骨魚綱 44 分類群・爬虫類 2 分類群・鳥類 5 分類群・哺乳類 8 分類群の合計 61 分類群である（第 60・61 表）。

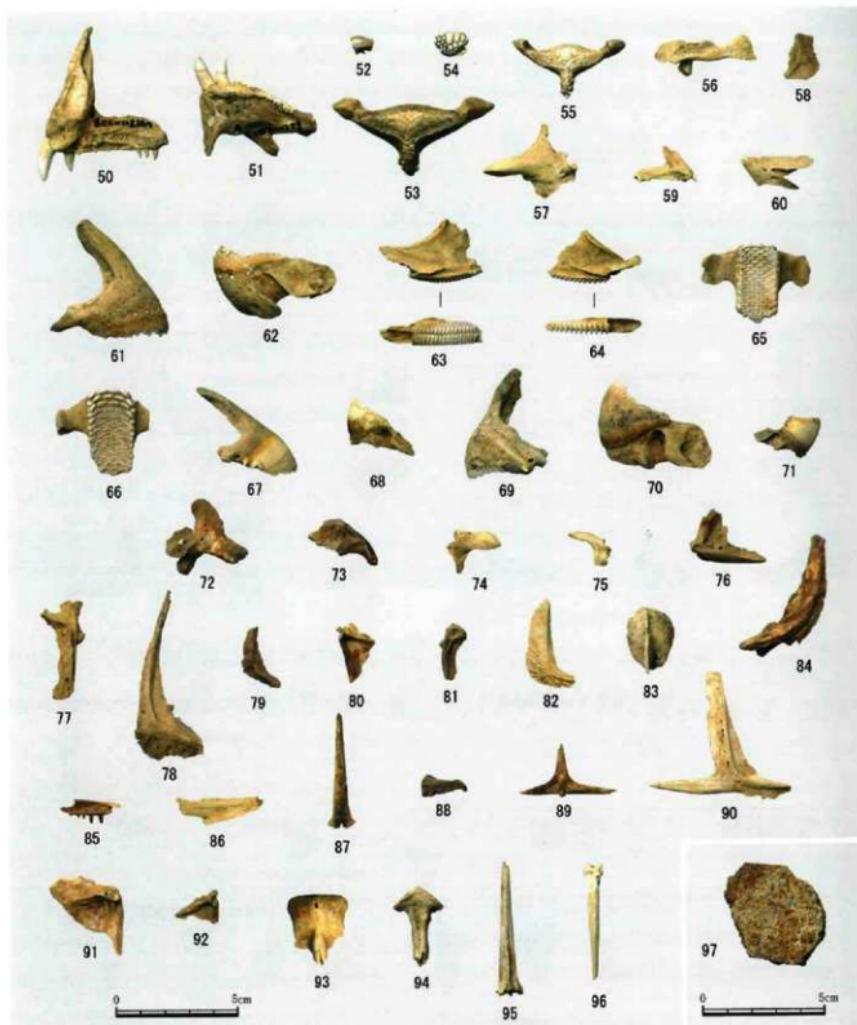
脊索動物門	Chordata	脊索動物門	Chordata
軟骨魚綱	Chondrichthyes	硬骨魚綱	Osteichthyes
メジロザメ科	Carcharhinidae	ブダイ科(続き)	Scaridae
メジロザメ	<i>Carcharhinus plumbeus</i>	ブダイ科A	Scaridae A
エイ上目	Batoidea	ブダイ科B	Scaridae B
エイの一種		ブダイ科C	Scaridae C
硬骨魚綱	Osteichthyes	ブダイ科の一種	
ボラ科	Mugilidae	アイゴ科	Siganidae
ボラ?	<i>Mugil cephalus cephalus?</i>	アイゴ科の一種	
ダツ科	Belontiidae	ニザダイ科	Acanthuridae
ダツ	<i>Strongylura anastomella</i>	ニザダイ科の一種	
ハタ科	Serranidae	カマス科	Sphyraenidae
ハタ科A	<i>Serranidae A (cf. Epinephelus)</i>	カマス科の一種	
ハタ科B	<i>Serranidae B (cf. Plectropomus)</i>	カラギキ科	Monacanthidae
ハタ科の一種		カラギキ	<i>Stephanolepis cirrifer</i>
アジ科	Carangidae	フグ科	Tetraodontidae
ブリ	<i>Seriola quinqueradiata</i>	フグ科の一種	
イヒキアジ	<i>Alectis ciliaris</i>	ハリセンボン科	Diodontidae
エフダイ科	Lutjanidae	ハリセンボン科の一種	
ヒメエフダイ	<i>Lutjanus gibbus</i>	爬虫綱	Reptilia
エフダイ科A	<i>Lutjanidae A</i>	ヘビ	Ophidia
エフダイ科B	<i>Lutjanidae B</i>	ウミガメ	Chelonidae
エフダイ科C	<i>Lutjanidae C</i>	鳥綱	Aves
エフダイ科の一種		カモ科	Anatidae
タイ科	Sparidae	カモ科の一種	
ヘダイ	<i>Sparus sarba</i>	ハト科	Columbidae
クロダイ	<i>Acanthopagrus schlegelii</i>	キジト?	<i>Streptopelia orientalis?</i>
ミナミクロダイ	<i>Acanthopagrus sivicolus</i>	アホウドリ科	Diomedidae
タイワンドダイ	<i>Argyrosomus bleekeri</i>	アホウドリ?	<i>Phoebastria albatrus?</i>
タイ科の一種		キジ科	Phasianidae
エフキダイ科	Lethrinidae	ニワトリ	<i>Gallus gallus domesticus</i>
ヨシシマクロダイ	<i>Monotaxis grandoculis</i>	哺乳綱	Mammalia
アマミエフキ	<i>Lethrinus miniatus</i>	ネズミ科	Muridae
イソフエフキ	<i>Lethrinus atkinsoni</i>	ネズミ	<i>Mus musculus</i>
ハマフエフキ	<i>Lethrinus nebulosus</i>	イヌ科	Canidae
ペラ科	Labridae	イヌ	<i>Canis familiaris</i>
コブダイ	<i>Semicossyphus reticulatus</i>	ウマ科	Equidae
タキペラ	<i>Bodianus perdito</i>	ウマ	<i>Equus caballus</i>
カンムリペラ	<i>Coris aygula</i>	イノシシ科	Suidae
ペラ科A	Labridae A	イノシシ/ブタ	<i>Sus scrofa</i>
ペラ科の一種		ウシ科	Bovidae
シマイサキ科	Teraponida	ヤギ	<i>Capra hircus</i>
コトヒキ	<i>Terapon jurbua</i>	ウシ	<i>Bos taurus</i>
ブダイ科	Scaridae	ジュゴン科	Dugongidae
イロブダイ	<i>Cetoscarus bicolor</i>	ジュゴン	<i>Dugong dugon</i>
ナンヨウブダイ	<i>Chlorurus microrhinos</i>	ヒト科	Hominidae
ナガブダイ	<i>Scarus rubroviolaceus</i>	ヒト	<i>Homo sapiens</i>
(右段に続く)			

第 61 表 脊椎動物遺体種別一覧



図版 138 脊椎動物遺体 1

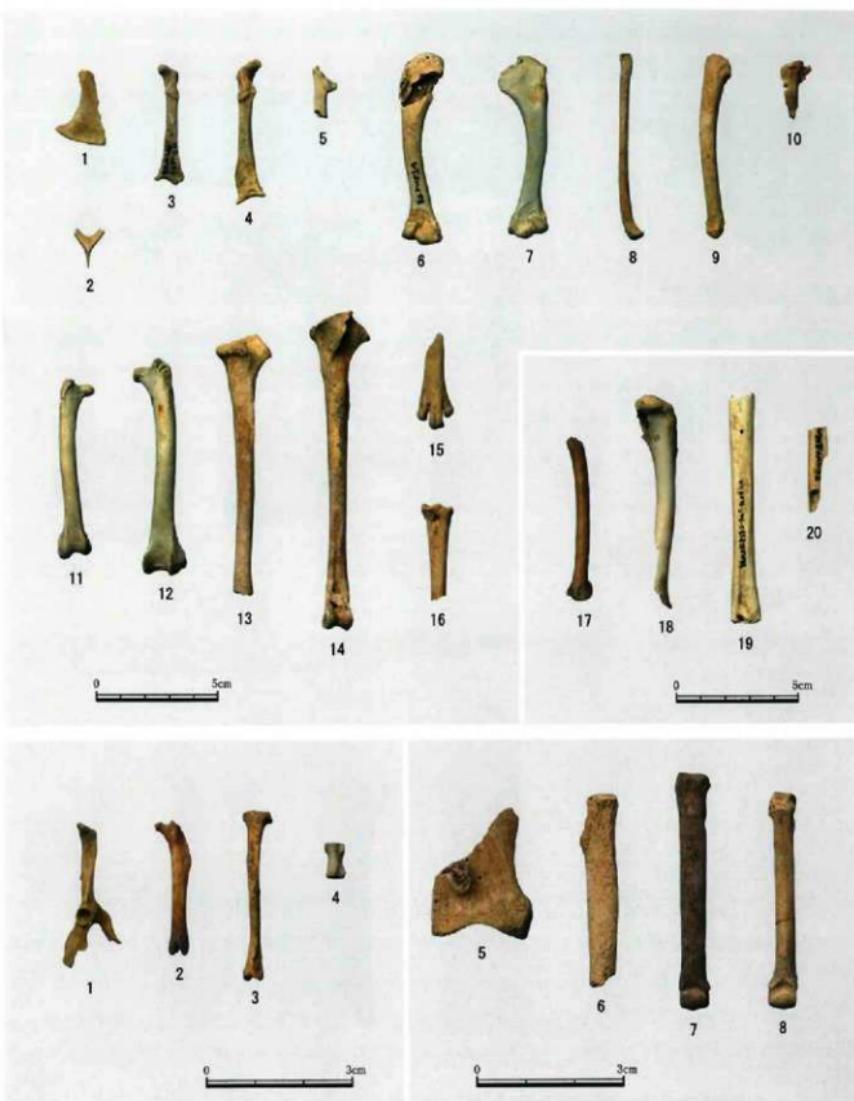
- サカナ メジロザメ 1. 脊椎骨 エイ 2. 脊椎骨 ボラ科ボラ? 3. 主鰓蓋骨 ダツ 4. 右・前上顎骨 5. 左・歯骨 ハタ科A
 6. 左・前上顎骨 7. 左・歯骨 ハタ科B 9. 右・前上顎骨 10. 右・歯骨 ハタ科 11. 左・主上顎骨 12. 左・角骨 13. 右・方骨
 14. 左・舌頭a 15. 右・舌頭 16. 左・前鰓蓋骨a 17. 左・前鰓蓋骨b 18. 左・擬鰓骨 ブリ 19. 右・前上顎骨 イトヒキアジ
 20. 右・歯骨 フエダイ科A 21. 左・前上顎骨 フエダイ科B 22. 右・歯骨 フエダイ科C 23. 右・前上顎骨 ヒメエダイ
 24. 右・前鰓蓋骨 ヘダイ 25. 左・歯骨 クロダイ 26. 左・前上顎骨 27. 右・歯骨 28. 右・主上顎骨 29. 左・主上顎骨
 タイワンドай 30. 右・前上顎骨 タイ科 31. 左・舌頭 ミナミクロダイ 32. 右・前鰓蓋骨 ヨコシマクロダイ 33. 左・前上顎骨
 イソフエフキ 34. 左・前上顎骨 35. 左・角骨 ハマフエフキ 36. 左・前上顎骨 37. 右・歯骨 38. 左・主上顎骨(キズアリ)
 39. 右・口蓋 40. 右・角骨 41. 右・方骨 42-43. 左・方骨 44. 右・舌頭 45. 左・前鰓蓋骨 46. 左・主鰓蓋骨 47. 副櫻骨
 アマミエフキ 48. 左・前上顎骨 コトヒキ 49. 右・主鰓蓋骨



図版 139 脊椎動物遺体 2

サカナ コブダイ 50.右・前上顎骨 51.右・歯骨 52.左・上咽頭骨 53.下咽頭骨 タキベラ 54.左・上咽頭骨 ベラ科A 55.下咽頭骨 ベラ科 56.左・主上顎骨 57.左・角骨 58.右・前鰓蓋骨 カンムリベラ 59.左・前上顎骨 60.左・歯骨 イロブダイ 61.右・前上顎骨 62.左・歯骨 63.左・上咽頭骨 ナンヨウブダイ 64.右・上咽頭骨 65.下咽頭骨 ブダイ科C 67.右・前上顎骨 68.左・歯骨 ブダイ科B 69.左・前上顎骨 70.左・歯骨 ブダイ科C 71.右・歯骨 ブダイ科 72.左・主上顎骨 73.右・口蓋 74.右・角骨 75.左・角骨 76.左・方骨 77.右・舌頭 78.右・前鰓蓋骨f 79.左・前鰓蓋骨 80.右・主鰓蓋骨 アイゴ科 81.右・舌頭f アイゴ属 82.右・前鰓蓋骨d ニザダイ科 83.鱗 スズキ目 84.左・前鰓蓋骨 カマス科 85.左・歯骨 86.左・前上顎骨 カワハギ科 87.背鰭棘 フグの一種 88.左・前上顎骨 ハリセンボン科 89.棘 種不明 90.右・前鰓蓋骨 91.左・主鰓蓋骨 92.左・主鰓蓋骨b 93.鰓骨 94.鰓骨 95.背鰭血管間棘 96.第2背鰭棘

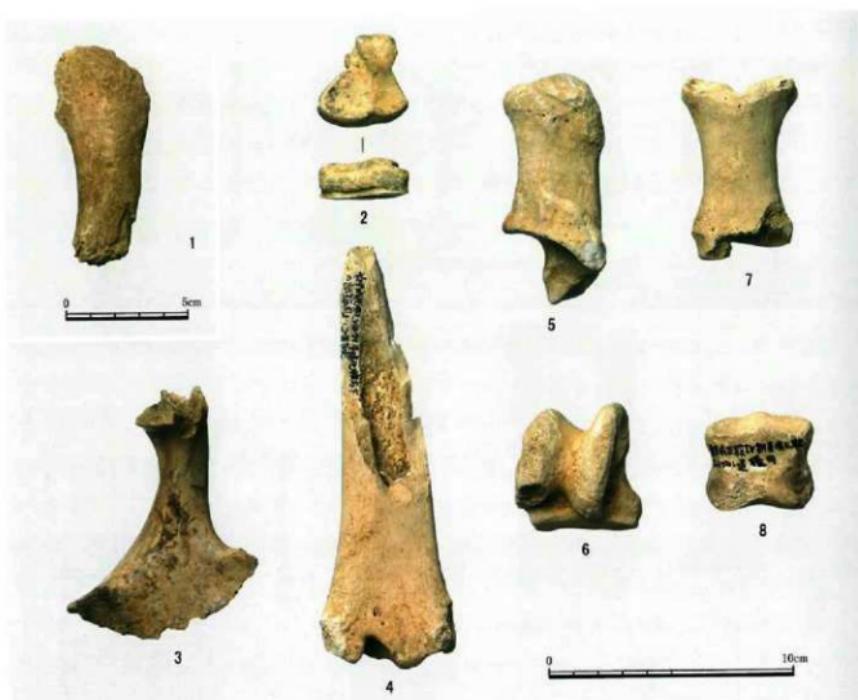
ウミガメ ウミガメ 97.肋骨板



図版 140 脊椎動物遺体 3

上：ニワトリ 1. 胸骨 2. 頸骨 3. 右・鳥口骨 4. 左・鳥口骨 5. 左・肩甲骨 6. 右・上腕骨（キズあり） 7. 左・上腕骨 8. 左・桡骨
9. 右・尺骨 10. 右・中手骨 11. 右・大腿骨 12. 左・大腿骨 13. 右・脛骨 14. 左・脛骨 15. 左・中足骨 16. 右・中足骨
17. 左・尺骨 18. 右・上胸骨 19. 左・脛骨 20. 右・脛骨（カモ類）

下：ネズミ 1. 右・寛骨 2. 左・大腿骨 3. 左・脛骨 4. 尾椎
イヌ 5. 右・肩甲骨 6. 左・中足骨 II 7. 右・中足骨 III 8. 右・中手骨 IV



図版 141 脊椎動物遺体 4

- 上 : ジュゴン
ウマ
下 : ヤギ
- | | |
|------------|------------|
| 1. 肋骨 | 1. 肋骨 |
| 2. 左・第3手根骨 | 2. 左・第3手根骨 |
| 3. 右・腕骨 | 3. 右・腕骨 |
| 4. 左・脛骨 | 4. 左・脛骨 |
| 5. 右・踵骨 | 5. 右・踵骨 |
| 6. 右・中節骨 | 6. 右・中節骨 |
| 7. 左・基節骨 | |
| 8. 右・基節骨 | |
- | | |
|----------|----------|
| 1. 左・上腕骨 | 1. 左・上腕骨 |
| 2. 左・桡骨 | 2. 左・桡骨 |
| 3. 左・尺骨 | 3. 左・尺骨 |
| 4. 右・大脛骨 | 4. 右・大脛骨 |
| 5. 左・大腿骨 | 5. 左・大腿骨 |
| 6. 右・基節骨 | 6. 右・基節骨 |



図版 142 脊椎動物遺体 5

ウシ 1.左・下顎骨 dm₃,dm₄,M₁ 2. 頸椎(キズあり) 3. 軸椎 4. 左・肩甲骨 5. 左・上腕骨 6. 左・橈骨+尺骨 7. 右・尺骨
8. 右・橈側手根骨 9. 左・手根骨 10. 左・腕骨 11. 右・脛骨 12. 右・踵骨 13. 左・第4中心足根骨 14. 左・中足骨
15. 右・基節骨 16. 左・中節骨 17. 左・末節骨



図版 143 脊椎動物遺体 6

イノシシノブタ 1. 左・上顎骨 $M^1 \sim M^3$ 2. 左・下顎骨 C 3. 環椎 4. 横椎 5. 右・扁甲骨 6. 右・上腕骨 7. 左・上腕骨 8. 右・上腕骨 9. 左・尺骨(キズあり) 10. 右・中手骨 II 11. 左・中手骨 III 12. 右・中手骨 IV 13. 左・寛骨 14. 左・寛骨 15. 左・大腿骨(キズあり) 16. 左・大腿骨 17. 右・腓骨(キズあり) 18. 左・胫蓋骨 19. 右・胫蓋骨 20. 左・距骨 21. 左・中足骨 II 22. 左・中足骨 III 23. 右・中足骨 IV 24. 左・中足骨 V 25. 右・基節骨 26. 右・中節骨 27. 右・末節骨

第4章 総括

以上、昭和60・61年度に実施した首里城跡正殿地区の発掘調査成果について報告した。本章では今一度それらを整理するとともに、若干の考察と今後の課題を述べる。

1 遺構について

正殿建物（想定含む）の土台を構成する基壇石積み6基（II～VII期基壇）と、その下層で確認された大和系瓦を多量に伴う包含層（I期基壇）が、今回の調査で得られた最大の成果といえる。これらの発見により、当地区では少なくとも7回にわたって正殿建物（想定含む）の建て替えが行われ、しかも建て替えの度に基壇上面の範囲が西側に拡張していったことが判明した。

I期基壇は一部の包含層で認定したため、建物の規模や基壇の有無は不明であるが、大和系瓦の出土状況から同瓦を葺いた建物の存在が推定される。15世紀中葉以前に位置づけられるこの建物は、現在資料整理中だが平成26年度に実施された鹿世門北地区の調査成果と関連する可能性もあり、最初期の首里城の姿を考えるうえで重要なといえる。ちなみに、かつて首里城の正殿が南面し、美福門を正門としていたとの伝承があることは前述の通りだが、この説を検討するためにも、今回の発見は非常に興味深い。

II～VII期の基壇については、正面に化粧石や階段が取り付くもの（二期基壇・三期基壇・V期基壇・VII期基壇）と、雑石積みで仕上げているもの（IV期基壇・VII期基壇）に大別される。このうち、前者を基壇と判断することに異論はないと思われるが、後者は前述したように、形態的な特徴だと補強用の裏石積みや裏込めに類似しており、また基壇との推定に否定的な意見もみられる。しかし、II～VII期基壇は全て南殿のI～VII期基壇に接続することから、首里城の主要施設である正殿と南殿の関係も考慮した結果として、これらを基壇石積みに位置づけている。

各基壇の年代は、現在のところI期基壇（15世紀中葉以前に遡る）・II期基壇（15世紀中葉の火災で被焼）・VII期基壇（沖縄戦で焼失）の一部を除いて、いずれも明確には記していない。遺物の出土状況から年代を推定することは可能だが、発掘調査から資料整理及び報告書作成までの期間で、遺構の性格変更に伴い注記の読み替えが多数行われたため、ここでは概略を述べる。III～VI期基壇のうち、III期基壇が15世紀中葉～16世紀初頭、IV期基壇が16世紀初頭～17世紀後半、V期基壇が17世紀後半～18世紀初頭と考えられ、VI期基壇は18世紀初頭以降に位置づけられるがVII期基壇との時期差は判然としない。この年代観は、安里進氏が提示した正殿基壇の変遷案（安里1996）にほぼ符号するものの、基壇の変遷と文献史料の内容が合致するか否かに関しては今後の課題である。

その他には、基壇上面の建物跡との関係が想定されるピット群、当該地区的平場造成に伴う土留め石積みの上部とみられる石列、主に生活ゴミの廐棄坑（方言名シーリ）と目される方形石組遺構などの近世までの遺構に加え、熊本鎮台沖縄分遣隊が構築したかねや跡や、沖縄戦時に米軍の砲撃で生じた爆弾破壊跡など、首里城が王城としての機能を失った近代以降の遺構も確認されている。これらも全て正殿の歴史的変遷を知るうえで重要な資料である。

2 遺物について

発掘調査で出土した遺物は、中国・タイ・ベトナム・朝鮮・日本・沖縄の各地で生産された陶磁器類をはじめとして、瓦及び埴・錢貨・煙管・玉類・円盤状製品・金属製品・石製品・骨製品・土製品・ガラス製品・自然遺

物など多種多様で、年代も 14 世紀～20 世紀と幅広い。この中には、かつて正殿があったという当該地区の特性を示すような遺物が多数みられるため、以下にそれらの資料を 4 点に絞って概説する。

最初に挙げられるのは被焼資料である。正殿が歴史上 4 度の火災に見舞われたことは前述の通りだが、特に最初の火災である志魯・布里的乱（1453 年）に由来すると考えられる遺物が、中国産陶磁器のうち青磁・白磁・青花などの中国産陶磁器を中心に確認されている。それ以後の火災に伴う遺物は判然としないが、金属製品の梵鐘片（第 139・140 図）は 4 度目の火災である沖縄戦で溶解したものである。

次に挙げられるのは茶道具である。文献史料によると、尚寧 21（1609）年に琉球を侵略した薩摩藩は茶の湯に力を入れており、琉球も特に 17 世紀後半には茶の湯を盛行していた。本土産陶器の碗（第 67 図 64～73）・沖縄産無釉陶器の碗（第 78 図 3）・石臼（第 164 図 72～74）などは年代的にも合致しており、文献史料の内容を裏付ける遺物として重要である。

3 点目は琉球銭の存在である。今回の調査では大世通寶（初鑄 1454 年：第 132 図 100～104）と世高通寶（初鑄 1461 年：第 131 図 86～96、第 132 図 97～99）が確認されており、前者が 5 点、後者が 14 点出土している。これらは出土量が極端に少なく、首里城内他地区の調査でも発見されない場合が多い。そのような遺物が時期的にまとまつた出土状況をみせることから、琉球銭の集積する場所または施設が正殿付近に存在した可能性も考えられる。

最後に 4 点目として挙げられるのが、瓦類や石製品などの建築部材である。このうち、瓦については大和系瓦と明朝系瓦がそれぞれ注目される。大和系瓦は I 期基壇の包含層から出土したもので、これまで述べてきたように、15 世紀中葉以前の当該地区にあった瓦葺き建物の存在を示唆する遺物として重要である。他方、明朝系瓦は大半が尚質 13（1660）年の火災以降に使用されたと考えられ、膨大な出土量を誇るとともに役瓦などの種類もバラエティに富む。当該地区は島内で最も瓦の出土量が多い消費地遺跡でもあることから、今回の成果は琉球における瓦及び建築の研究に大きく寄与するものといえる。また石製品では、欄干の各種部位（第 152 図 1～5、第 153～157 図、第 161 図 45～49）・礎石及び礎盤（第 158～160 図、第 161 図 43・44、第 162 図 50～53）・龍柱（第 162 図 55・56、第 163 図、図版 129）のような、当該地区的性格を示す特徴的な遺物が多数みられる。ちなみに龍柱については熊本県台沖縄分離隊が切断した痕跡を残すものがあり、それを補修した金属製錠も出土していることは前述した通りである。

3 今後の課題

昭和 59（1984）年度に実施した歓会門及び久慶門内側地域を嚆矢とする首里城跡の発掘調査は、平成 26（2014）年度で一応の区切りを迎えた。当初は沖縄開発庁の首里城城郭等復元整備事業に伴う発掘調査のみであったが、昭和 60（1985）・61（1986）年度の正殿地区を経て、昭和 62（1987）年度からは国営公園整備に先立つ発掘調査が始まり、平成 3（1991）年度からは首里城周辺で県営公園整備に係る発掘調査も着手された。

首里城公園は、平成 30（2018）年度に国営部分の管理・運営を沖縄県に移管する方針であり、整備事業もそれに伴い平成 29（2017）年度での終了が予定されている。これまでの調査成果をまとめた報告書は、国営・県営部分を合計すると 30 冊以上に及んでいるが、事業の終了とは別に、首里城跡の調査成果を総合的に整理・検討する時期に来ていると思われる。これらの調査・研究が進展すれば、首里城の歴史や変遷がより明らかになることに繋がり、現在及び今後の首里城公園の整備・活用にも大きく寄与できるものと考えられる。今回の報告書がその一助となれば幸いである。

引用・参考文献

- 安芸種子 2006 「第3節 東大構内遺跡出土の土人形にみる一考察—工学部14号館地点の人形の様相と各期にみる成形技法—」『東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書7 東京大学埋蔵文化財調査室
- 安里進 1996 「首里城正殿基壇の変遷」『首里城研究』No.2 首里城公園友の会
- 安里進 2013 「首里王府の重要施設改修調整事業」『首里城研究』No.15 首里城公園友の会
- 安里進・上原政昌・家田淳一 1987 「那覇城跡からみた近世琉球菴業の展開」『名護博物館紀要』3 あじまわ 名護博物館
- 新垣力 2003 「沖縄社土の清朝調査」『記要沖縄文研究』1 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 新垣力 2008 「沖縄における「地鉛め」の様相」『廣友会誌』第4号 廣友会
- 新垣力 2010 「沖縄から出土する17~19世紀の貿易陶磁器」『海の道と考古学—インドシナ半島から日本へ—』高志書院
- 新垣力 2011 「無釉陶器の成立と展開」『沖縄県立博物館・美術館×那覇市立菴屋焼博物館 合同企画展 琉球陶器の来た道』沖縄県立博物館・美術館
- 新垣力 2012 「遺跡出土の「柱状形煙管」からみた琉球の喫煙文化」『たばこと塩の博物館 研究紀要第10号 VOCと日蘭交流 V OC遺跡の調査とたばこ』たばこと塩の博物館
- 新垣力 2013a 「17世紀前半~中葉の琉球陶器について—「初期無釉陶器」にみる薩摩焼の影響—」『鹿児島考古』第43号 鹿児島県考古学会
- 新垣力 2013b 「首里城跡の考古学研究~近年の発掘調査成果を中心に~」『第6回鹿児島県考古学会・沖縄考古学会合同年会研究発表会資料集 鹿児島・沖縄考古学の最新動向』鹿児島県考古学会・沖縄考古学会
- 有銘倫子 2011 「沖縄県内における遺跡出土品」『南島考古』第30号 沖縄考古学会
- 池谷望子・内田晶子・高瀬恭子 2006 「朝鮮王朝実錄 琉球史料集成【訳注篇】」柏樹書林
- 石井龍太 2011 「那覇城島出土キセルの基礎的研究~琉球陶器文化の研究~」『東京大学考古学研究会研究紀要』第25号 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室
- 伊仙町教育委員会(編) 2005 「カムミヤキ古窯跡群Ⅴ」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(12)
- 伊從勉 1997 「首里城正殿御所御厨の起源とその改修について:王権儀礼の舞台装置の誕生」『首里城研究』No.3 首里城公園友の会
- 伊從勉 2010 「第五章 遺構からみる古琉球の首里城」『沖縄県史 各論編 第三巻 古琉球』沖縄県教育委員会
- 上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁胎の分類」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 上田秀夫 1991 「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」『関西近世考古学研究』I 関西近世考古学研究会
- 上原静 1986 「グスク時代・近世出土の円盤状製品」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第10号 読谷村教育委員会
- 上原静 1989 「円盤状製品その後の資料」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第13号 読谷村教育委員会
- 上原静 1989b 「首里城跡出土の貝殻」『月刊考古学ジャーナル』No.311 ニュー・サイエンス社
- 上原静 1990 「首里城跡出土のプラスチック湧泉」『文化課紀要』第6号 沖縄県教育委員会文化課
- 上原静 1997 「首里城正殿跡から出土した相国寺巨鐘」『南島史学特論ノート』沖縄国際大学大学院南島史学特論受講生
- 上原静 2007 「琉球列島出土の有孔盤状製品、骨製箇等について」『南島考古』第26号 多和田真淳先生誕辰百年記念特集号 沖縄考古学会
- 上原静 2003 「第4章 グスク時代」『沖縄県史 各論編 第二巻 考古』沖縄県教育委員会
- 上原静 2004 「考古学からみた沖縄諸島の歴史」『グスク文化を考える 世界遺産国際シンポジウム(東アジアの城郭遺跡を比較して)の記録』新人物往来社
- 上原静 2011 「琉球の埴と焼瓦」『南島考古』第30号 沖縄考古学会
- 上原静 2012 「琉球諸島におけるグスク・琉球王国時代の礎石建物(1)一壁石」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第36号 読谷村教育委員会
- 上原静 2013 「琉球古瓦の研究」柏樹書林
- 上原静・平良和輝 2013 「南島考古資料録(3) 近世・近代遺跡出土の文房具関連資料」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第37号 読谷村教育委員会

- 上原静・宮城綾乃 2007 「南島考古資料録（2） グスク時代の鉄礹と骨礹」『南島会誌』第3号 廣友会
- 上原千明 2014 「中近世における釣研究の現状と課題」『南島会誌』第7号 廣友会
- 氏家宏・兼子尚樹 2006 「那覇及び沖縄市南部地域の地質」『地城地質調査報告（5万分の1 地質図編）』独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター
- 内田晶子・高瀬恭子・池谷望子 2009 「琉球伝叢書⑩ アジアの海の古琉球－東南アジア・朝鮮・中国－」榕樹書林
- 江戸遺跡研究会（編） 2001 『因説 江戸考古学研究事典』柏書房
- 大堀勝平 2011 「沖縄の遺跡から出土する石製品について－沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵資料より－」『南島考古』第32号 沖縄考古学会
- 沖縄県教育庁文化課（編） 1985 「金石文－歴史資料調査報告書V－」沖縄県文化財調査報告書第60集 沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育庁文化課（編） 1986a 「旧首里城正門跡位置調査報告書」沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育庁文化課（編） 1986b 「昭和60年度 文化行政要覧」沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育府文化課（編） 1987 「昭和61年度 文化行政要覧」沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育府文化課（編） 1992 「首里城跡 南殿城正門跡の遺構調査」沖縄県文化財調査報告書第107集 沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育府文化課（編） 1995 「首里城跡 南殿・北尾跡の遺構調査報告」同第120集 沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育府文化課（編） 1998a 「首里城跡－京の門跡発掘調査報告書（1）－」同第132集 沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育府文化課（編） 1998b 「首里城跡 銅門跡・奉神門跡の遺構調査報告」同第133集 沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育府文化課（編） 2011 「沖縄のガラス・玉等製品調査資料調査報告書」同第149集 沖縄県教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2003 「首里城跡－右掖門及び周辺地区発掘調査報告書」沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第14集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2005 「首里城跡－二階櫓地区発掘調査報告書－」同第29集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2006 「首里城跡－御内原地区発掘調査報告書－」同第34集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2007a 「首里城跡－御内原西地区発掘調査報告書－」同第44集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2007b 「首里城跡－黃金御殿跡地区発掘調査報告書－」同第45集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2010 「首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（1）－」同第54集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2011a 「中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（2）－」同第58集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2011b 「平成23年度企画展 沖縄の考古学」
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2012 「中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（3）－」同第63集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2013 「中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（4）－」同第67集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2013b 「首里城跡－高麗門西地区・奉神門跡地区発掘調査報告書－」同第68集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2013c 「首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（2）－」同第69集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2014 「首里城跡－御間門東地区発掘調査報告書－」同第72集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2015 「首里城跡－銭倉地区発掘調査報告書－」同第77集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2016 「首里城跡－銭倉東地区発掘調査報告書－」同第80集
- 奥谷壽司（編著） 2000 「日本近海貝類図鑑 Marine Mollusks in Japan」東海大学出版社
- 小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶器研究会』第2号 日本貿易陶器研究会
- 加治頼人 2000 「沖縄の神社」ひろき社
- 桂辰哉 1995 「琉球大学と首里城復元 文化財の保護に気を配る」『首里城復元研究会報』第14号 首里城復元研究会
- 勝連町教育委員会（編） 1986 「勝連指定史跡 勝連城跡 環境整備事業報告書I」
- 龜井明徳 1985 「明代初期影彫御物をめぐる諸問題」『三上次博士喜寿記念論文集 陶磁篇』平凡社
- 川根正教 2001 「寛永通宝銅錢の様式分類」『出土錢貨研究会研究紀要 出土錢貨研究』出土錢貨研究会
- 闇西近世陶磁史研究会（編） 2001 「近世信楽焼をめぐって 研究集会資料集」
- 闇西近世陶磁史研究会（編） 2003 「近世後期における闇西窯業の展開－国焼と京焼－ 研究集会資料集」
- 闇西近世陶磁史研究会（編） 2006 「京焼の成立と展開－押小路、栗田口、御室－ 研究集会資料集」
- 九州近世陶磁学会（編） 2000 「九州陶磁の癡年 九州近世陶磁学会10周年記念」

- 琉球研究会(編) 1974『沖縄文化史料集成5 球陽 読み下し編』角川書店
- 具志堅亮 2014『グスク土器の変遷』『琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集【第1集】琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』六一書房
- 久手堅憲夫 2000『南島文化叢書 22 首里の地名ーその由来と縁起ー』第一書房
- 久保智康 2010『日本の美術 第533号 琉球の金工』ぎょうせい
- 久保弘文・黒住耐二 1995『生態／候索図鑑 沖縄の海の貝・陸の貝』沖縄出版
- 黒住耐二 1987「3. 遺跡出土貝類の生息場所判別化の試み」『石川市吉我地原貝塚 本文編』沖縄県文化財調査報告書第84集 沖縄県教育委員会
- 財團法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室(編) 2003a『沖縄県史ビジュアル版12 古琉球① 古地図にみる琉球』沖縄県教育委員会
- 財團法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室(編) 2003b『唐代宝物編集参考資料7 『明実錄』の琉球史料(二)』沖縄県教育委員会
- 財團法人那覇市文化振興会埋蔵文化財センター(編) 2007『平成19年度財團法人那覇市文化振興会埋蔵文化財センター企画展 図録 常設出土の“近代陶磁”－那覇・美濃の近代1－』
- 佐賀県立九州陶磁文化館(編) 1998『平成10年度企画展 沖縄のやきもの－南海からの香り－』
- 桜井伸也 2006『ガラス瓶の考古学』六一書房
- 史跡首里城跡整備委員会(編) 1988『史跡首里城跡整備基本構想』沖縄県教育委員会
- 島弘 2010『沖縄諸島出土の煙管について』『シンポジウム VOCと日蘭交流-VOC遺跡の調査と嗜好品- 発表要旨』たばこと塩の博物館
- 首里城研究グループ(編) 1997『首里城入門 その建築と歴史』ひるぎ社
- 首里城公園基本計画調査委員会(編) 1984『首里城公園基本計画調査報告書』沖縄県土木建築部
- 首里城公園友の会(編) 2003『首里城の復元へ正殿復元の考え方・根拠を中心につなげて』財團法人海洋博覧会記念公園管理財团
- 新里貴之 2015『宮古諸島上器出現期の様相 グスク時代初期の土器資料の分類・年代観』『2015年度沖縄考古学会研究発表会資料集 いま、宮古の考古学が面白い！－無土器期からグスク時代への移り変わり－』沖縄考古学会
- 鈴木裕子 2015『山上資料からみた朝鮮陶磁 十六世紀以降を中心として』『根津美術館紀要 此君』第六号 根津美術館
- 渕戸哲也 2009『南の境界・琉球の瓦質土器』『中世土器の基礎研究』22 日本中世土器研究会
- 渕戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2007『沖縄における貿易陶磁研究-14~16世紀を中心に-』『全国シンポジウム 中世窯業の諸相へ生産技術の展開と編年へ 補遺編』全国シンポジウム「中世窯業の諸相へ生産技術の展開と編年へ」実行委員会
- 曾凡 2001『福建陶瓷考古概論』福建省地圖出版社
- 平良啓 1994「『沖縄県首里城園』について」『首里城研究』No.1 首里城公園友の会
- 太宰府市教育委員会(編) 2000『大宰府条約跡 XV-陶磁器分類編-』太宰府市の文化財第19集
- 高良倉吉 1988『首里城正殿に関する建築史年譜』『沖縄県立博物館紀要』第14号 沖縄県立博物館
- 高良倉吉 1996『第四節 琉球王国成立期の首里城に関する観察』『前近代における南西諸島と九州-その関係史的研究』多賀出版
- 田中克子 2001『博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁 (その一) 博多出土の薄施釉陶器(茶入)』『博多研究会誌』第9号 博多研究会
- 知念隆博 2003『首里城跡出土鐵貨について』『紀要沖縄埋蔵文化財センター』
- 知念隆博 2004『清朝腹貢について』『紀要沖縄埋蔵文化財センター』2 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 陳建中 1999『箇化民衆青花』文物出版社
- 手塚直樹 1980『伊是名島の陶磁器』『伊是名ウジカ遺跡発掘調査報告書』伊是名村文化振興会報告書第5集 伊是名村教育委員会
- 当真嗣一・上原静 1986『首里城正殿跡の調査』『月刊文化財』昭和61年2月号 (N-269) 第一法規出版
- 当真嗣一・上原静 1987『首里城正殿跡の発掘調査』『紀要』第4号 沖縄県教育委員会文化課
- 当真嗣一・上原静 1988「51 沖縄県首里城正殿跡」『日本考古学年報39 (1986年度版)』日本考古学協会
- 長瀬健起 2006『首里城跡出土鉄貨の鉄種構成について』『紀要沖縄埋蔵文化財センター』4 沖縄県立埋蔵文化財センター

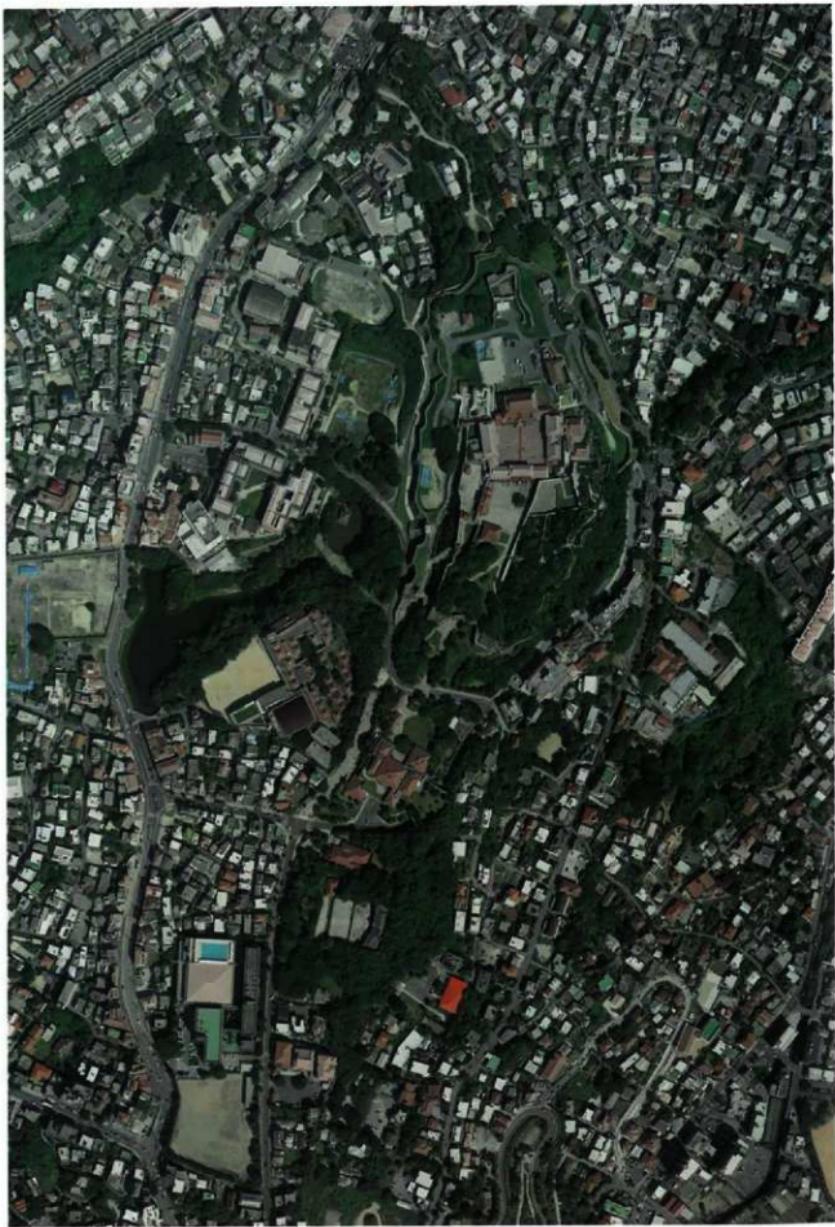
- 今帰仁村教育委員会（編） 1991『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第14集
中坊徹次（編） 2000『日本産 魚類検索 全種の同定 第二版』東海大学出版社
西村昌也・西野範子 2005「ベトナム施術器械の技術・形態的視点からの分類と編年－10世紀から20世紀の統合資料を中心に－」
『上智アジア学』第23号 上智大学アジア文化研究所
乗岡実 2005「備前『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 資料集』全国シンポジウム「中世窯業の諸相
～生産技術の展開と編年～」実行委員会
那覇市教育委員会文化課（編） 1992『鹿嶼古窯群』那覇市文化財調査報告書第23集 那覇市教育委員会
那覇市企画部市史編集室（編） 1982『那覇市史 資料篇第1巻7 家賛資料三』
原田禹雄（訳注） 2005『訳注 琉球國日記』榕樹書林
福建省博物館（編） 1997『南寧州志 福建泉州地区明清官署調査発掘報告之一』福建人民出版社
古川博恭・高里良政 1986『三、地形・地質』『那覇市歴史地図－文化財志皆調査報告書一』那覇市教育委員会
法政大学沖縄文化研究所（編） 2014『沖縄研究資料 29 琉球沖縄本島取扱書』
外間守善・波照崎永吉（編） 1997『定本 琉球国由来記』角川書店
宮城栄治 1996『古都首里のまちづくりに向けて 歴史的変遷の検証－1（「首里市制10周年記念誌」に見える明治以降の変遷）』『首
里城研究』No.2 首里城公園友の会
宮城弘樹 2008『琉球出土銭貨の研究』『出土銭貨』第28号 出土銭貨研究会
宮城弘樹・具志堅充 2007『中世並行期における南西諸島の在地土器の様相』『廣友会誌』第3号 廣友会
三輪茂雄 1978『ものと人間の文化史 25 白（うす）』法政大学出版局
向井亘 2003『タイ黒褐色四耳壺の分類と年代』『貿易陶磁研究』第23号 日本貿易陶磁研究会
向井亘 2012『タイ黒褐色四耳壺の分類と年代』『貿易陶磁研究』第5号 金沢大学国際文化資源学研究センター
諸見友重（訳注） 2011『琉球孤叢書② 訳注 中山世鑑』榕樹書林
森毅 1995「一六・一七世紀における陶磁器の様相とその流通－大阪の資料を中心に－」『ヒストリア』第149号 大阪歴史学会
森田勉 1982『14～16世紀の白磁の型式分類と編年』『貿易陶磁研究会』第2号 日本貿易陶磁研究会
森村健一 1995『福建省漳州窯系青花・五彩・瑠璃地の編年－いわゆる「福建・廣東窯青花」「スクワトウ」「貝須手・赤繪」の変遷
片と日本の遺跡出土品の比較－』『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』3 大阪府埋蔵文化財協会
森本朝子 1994『博多遺跡群出土の天目』『茶物天目－福建省建窑出土天目と日本伝世の天目－』茶道資料館
森本朝子・片山まび 2000『博多出土の高麗・李朝陶磁の分類試案－生産地編年を視座として－』『博多研究会誌（法玲瓈）』第8号
博多研究会
藤田みゆき 2015『近世～近代遺跡出土磁器分析加工品－植毛孔に着目した分類試案の提示と時期差の子察－』同志社大学考古
学シリーズXII 森浩一先生に学ぶ 森浩一先生追悼論集 同志社大学考古学シリーズ刊行会
山本正昭 2000『14、15世紀の磯石・基壙考』『高宮廣衛先生古稱記念論集 琉球・東アジアの人と文化（上巻）』高宮廣衛先生古稱
記念論集刊行会
山本正昭 2004『泉州窯系磁器から見た琉明關係一消費地からの視点で－』『貿易陶磁研究』第24号 日本貿易陶磁研究会
山本正昭・上里隆史 2004『首里グスク出土の武具資料の一考察』『紀要沖縄埋蔵文化財センター』2 沖縄県立埋蔵文化財センター
甦る首里城と復元編集委員会（編） 1993『首里城復元記念誌 甦る首里城 歴史と復元』首里城復元期成会
読谷村教育委員会（編） 1978『座敷跡跡 第3・4次遺構発掘調査』読谷村文化財調査報告書第4集 読谷村教育委員会
琉球大学二十周年記念誌編集委員会（編） 1970『琉球大学二十周年記念誌』琉球大学



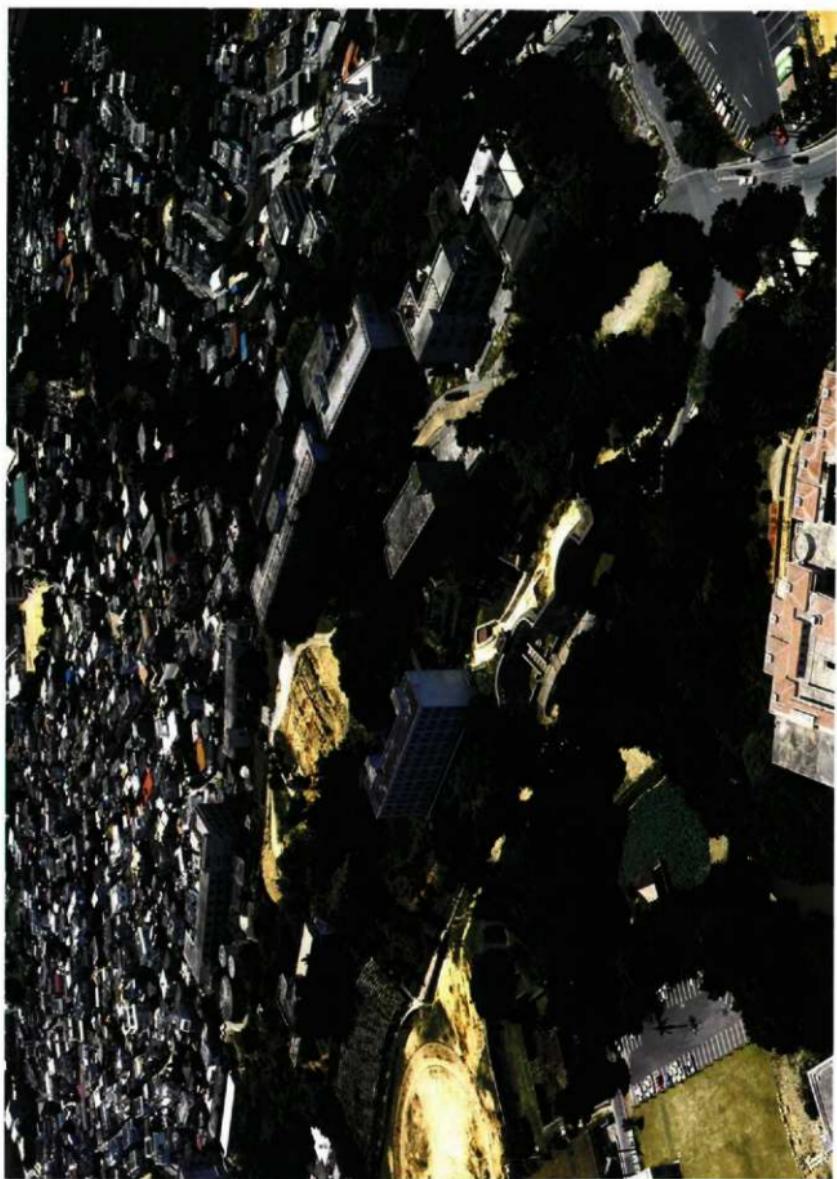
図版 144 空中写真 1

1945年4月2日米軍撮影 (CV20-103-63)

財團法人沖縄県文化振興会 公文書管理部 史料編集室所蔵



図版 145 空中写真 2 国土地理院 2010 年撮影

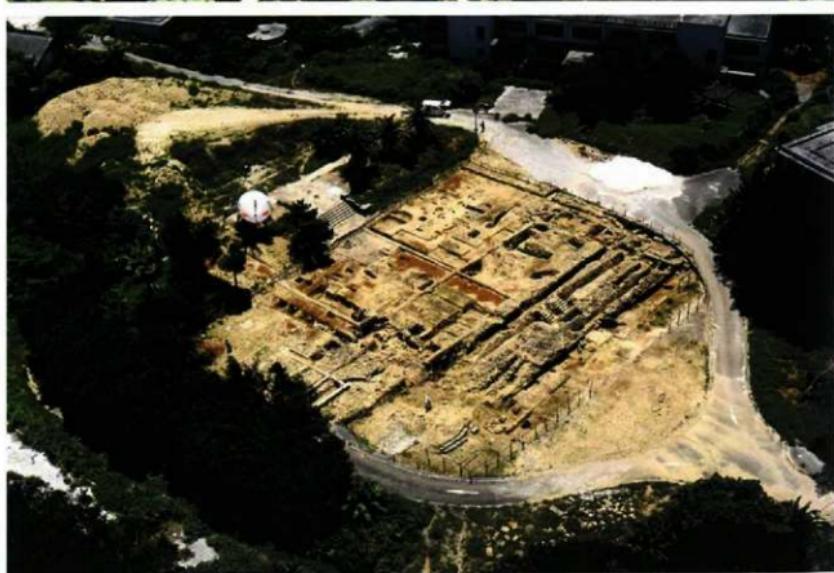


図版 146 空中写真 3 首里城跡全景 (1986 年撮影・北から)

1



2



図版 147 空中写真 4 1. 首里城跡全景（東から） 2. 正殿地区（北から）



図版 148 調査着手前状況 1

1. 龍潭から正殿地区を望む 2. 駐車場地域が正殿地区になる 3. 旧琉大構内案内図



1



2



3

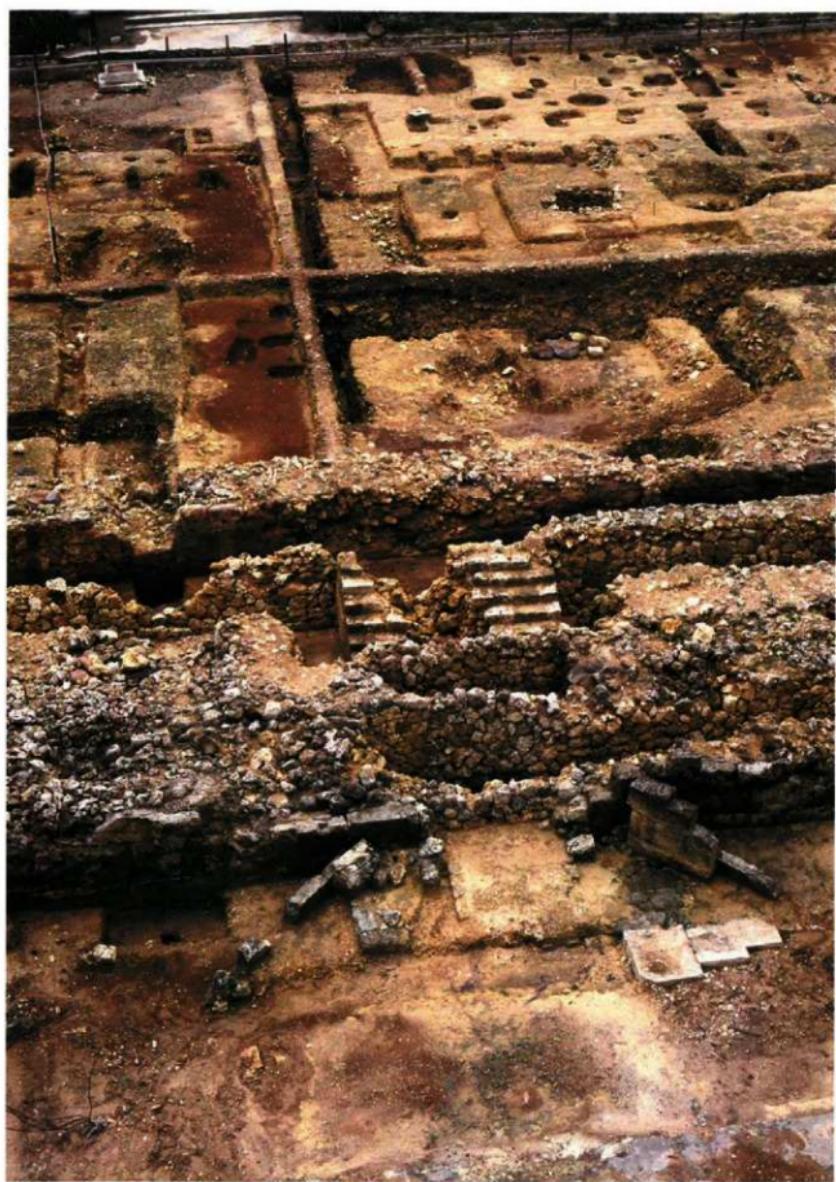
図版 149 調査着手前状況 2
1.着手前(調査区正面) 2.着手前(調査区正面・北から) 3.着手前(調査区正面・南東から)



図版 150 発報調査状況 1 調査区正面（西から）



図版 151 発掘調査状況 2 II～VII期基壇（南から）



図版 152 発掘調査状況 3 II～VII期基壇中央部分（西から）

1



2



図版 153 発掘調査状況 4 1. 調査区西側（西から） 2. 調査区中央部（西から）

1

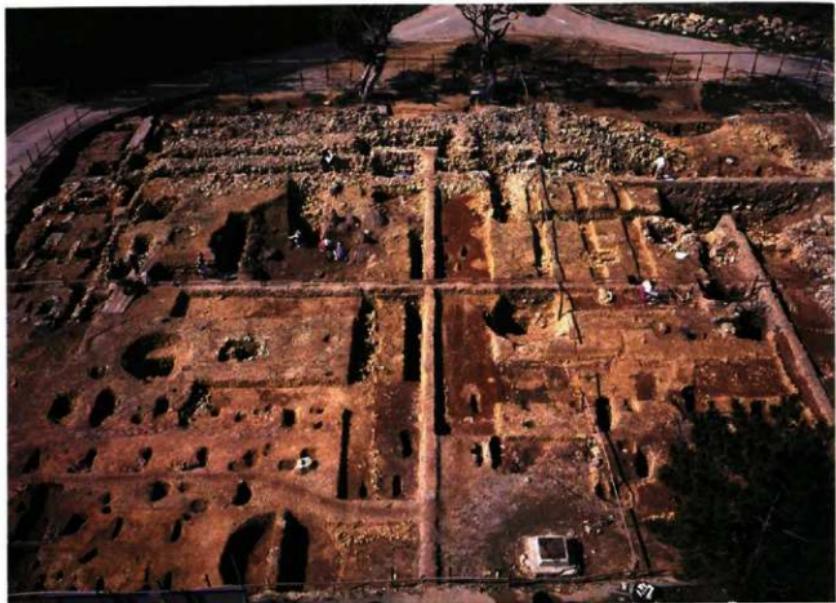


2



図版 154 発掘調査状況 5 1. 調査区南西側 2. 調査区南西側

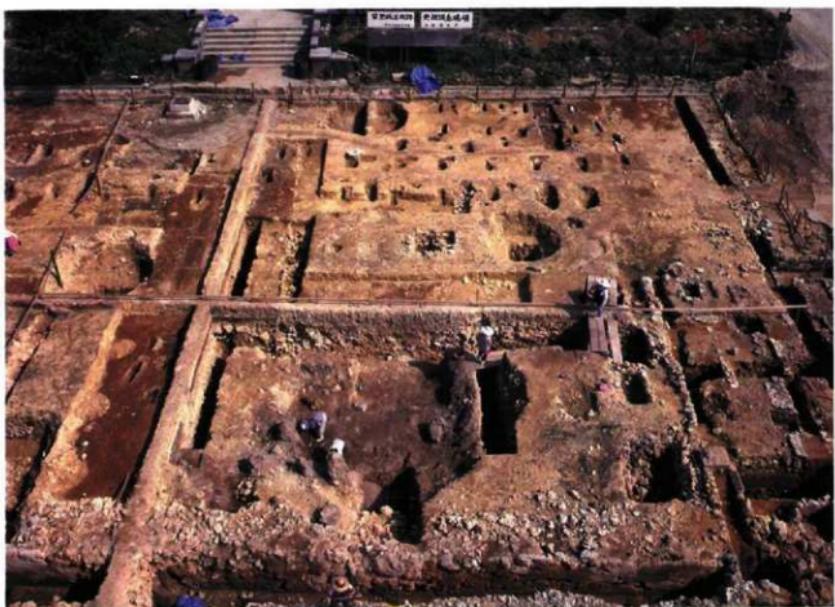
1



2



図版 155 発掘調査状況 6 1. 調査区東側（東から） 2. 調査区北東側（西から）



図版 156 発掘調査状況 7 1. 調査区南東側（西から） 2. 調査区南西側（西から）



1



2



3

图版 157 先掘調查狀況 8 1. VII期基壇南西隅 2. VII期基壇南西侧階段 3. VII期基壇南西隅



図版 158 発掘調査状況 9 1. VII期基壇正面 2. VII期基壇基礎状況 3. VII期基壇階段



1

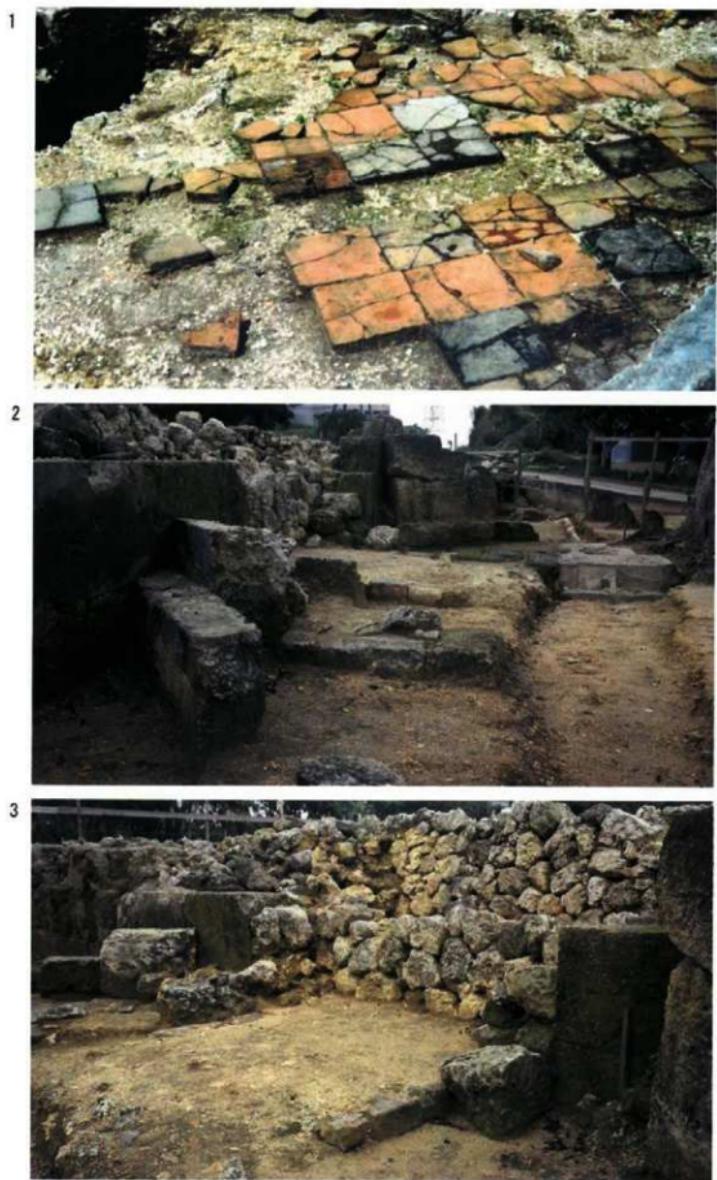


2



3

図版 159 発掘調査状況 10 1. VII期基壇北西隅 2. VII期基壇北西隅 3. VII期基壇階段正面



図版 160 発掘調査状況 11 1. VII期基壇南西隅階段の埠敷 2. VII期基壇 3. VII期基壇



1



2



3

図版 161 発掘調査状況 12 1. VII期基壇の裏に遺存するVI期基壇 2. VI期基壇 3. VI期基壇中央階段



図版 162 発掘調査状況 13 1. VI期基壇北側 2. VI期基壇中央階段 3. VI期基壇中央階段



図版 163 発掘調査状況 14 1. 中央階段の状況 2. V期基壇南側(北から)



1



2

図版 164 発掘調査状況 15 1. II～VII期基壇（南から） 2. IV・V期基壇中央部

1



2



図版 165 発掘調査状況 16 1. II～IV期基壇（南から） 2. II～IV期基壇（西から）



図版 166 発掘調査状況 17 1. III期基壇中央階段 2. III期基壇中央階段側面



1



2

図版 167 発掘調査状況 18 1. II期基壇中央部 2. II期基壇中央部(北から)

1



2



図版 168 発掘調査状況 19 1. II期基壇（南から） 2. VII期の石疊下に重なるII期基壇



1



2

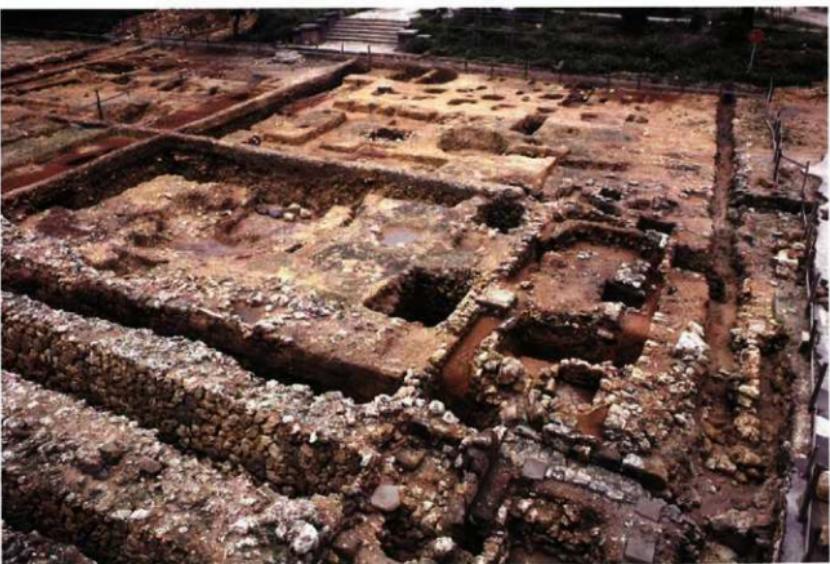
図版 169 発掘調査状況 20 1. VII期南側階段とその下の翼状石垣 2. SP1 石列とその下のⅡ期基壙



図版 170 発掘調査状況 21 I期基壇と瓦層



図版 171 発掘調査状況 22 1. 調査区中央～南側（北から） 2. IV～VI期基壇（北から）



図版 172 発掘調査状況 23 1. 調査区南側（南から） 2. 調査区南側（南西から）

1



2



図版 173 発掘調査状況 24 1. VII期南側渡り廊下礎石 2. VII期階段下の石積

1



2



図版 174 発掘調査状況 25
1. VII期基壇内側に検出された石積 2. VII期基壇内に検出された礎石

1



2



図版 175 発掘調査状況 26 1. 基壇南側で検出された礎石 2. 基壇南側で検出された階段踊り場



1



2



3

図版 176 発掘調査状況 27 1. SP1.2(西から) 2. SP1北西壁面 3. SP1北壁面

1



2



図版 177 発掘調査状況 28

1. SP1北壁面中央の切り石に刻印あり 2. SP1 北東壁面



図版 178 発掘調査状況 29 1. SP3(南西から) 2. SP3(南東から)

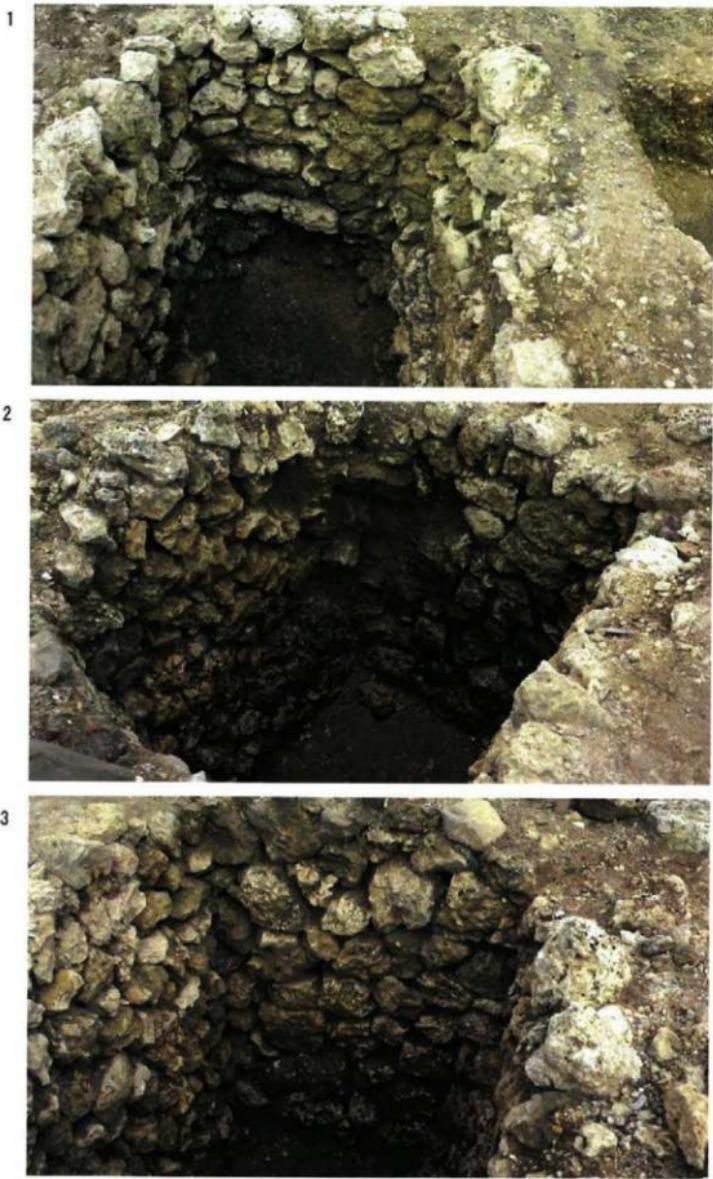
1



2



図版 179 発掘調査状況 30 1. SW1 東壁面 2. SW1 北壁面



圖版 180 發掘調查狀況 31 1. SW2 西壁面 2. SW2 南西壁面 3. SW2 東壁面

1

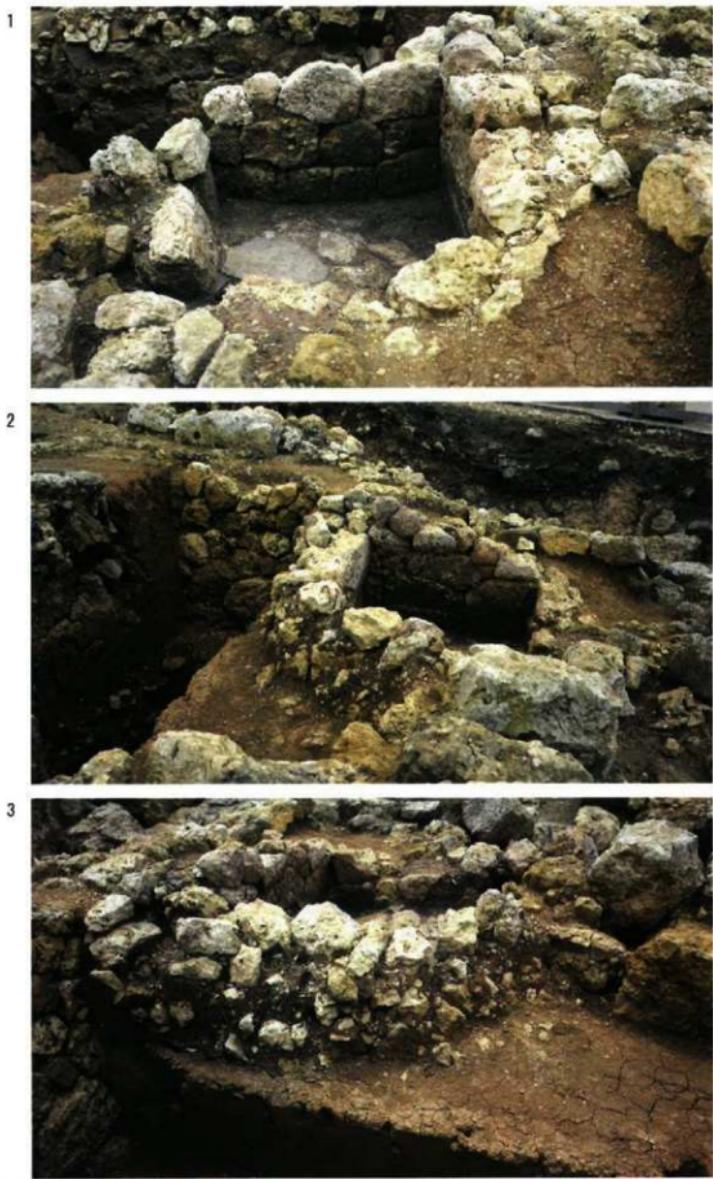


2



図版 181 発掘調査状況 32

1. SW3(北から) 2. SW3から導かれた溝(南から)



図版 182 発掘調査状況 33 1. SW4 東壁面 2. SW4 南面と SP1 南壁面 3. SW4 南面と SP1 西壁面

1



2



図版 183 発掘調査状況 34 1. SW5 と SP1 2. 溝造構



図版 184 発掘調査状況 35 1. SW3 の溝と SW9 2. SW8



図版 185 発掘調査状況 36 1. SW6 北壁面 2. SW6 西壁面

1



2



図版 186 発掘調査状況 37 1. SW7 北壁面 2. SW9 北壁面

1



2



図版 187 発掘調査状況 38 1. SW10 北西壁面 2. SW10 南東壁面

1



2



図版 188 発掘調査状況 39

1. SW12 東壁面 2. SW12 南壁面

1



2



図版 189 発掘調査状況 40 1. SW11 床面の青磁皿と勾玉 2. SW11 床面の根石状況・東面



図版 190 発掘調査状況 41 SW13 と下位翼状石垣北壁面



図版 191 発掘調査状況 42

1. SW12及びⅡ期基壇側面(中央部)・翼状石垣(左隅)

2. SW13の下位から検出された翼状石垣

1



2



図版 192 発掘調査状況 43

1. 調査区北側 2. 調査区北側・翼状石垣

1



2



図版 193 発掘調査状況 44 1. 調査区北側 2. 調査区北側・翼状石垣



図版 194 発掘調査状況 45 蝋燭基礎遺構



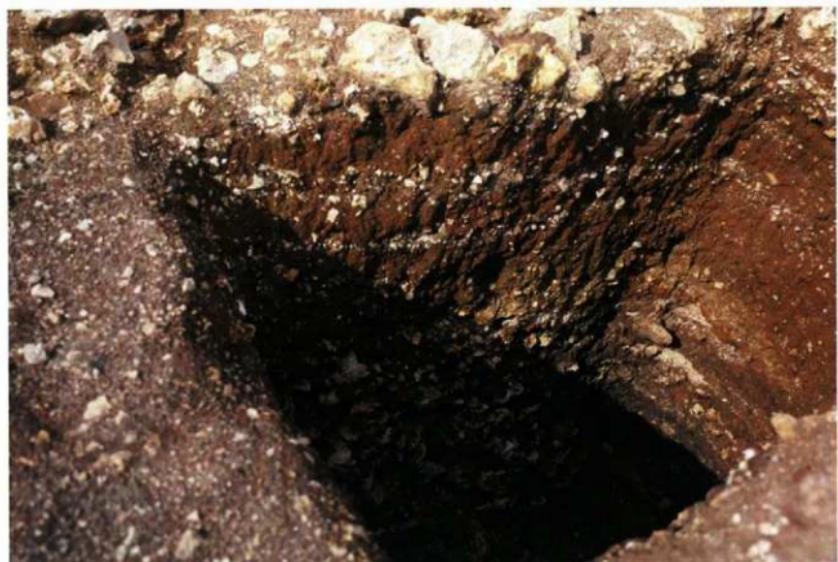
図版 195 発掘調査状況 46

1. 中央觀察竪北面 2. 中央觀察竪北面墻基礎遺構断面

3. 中央觀察竪北面墻基礎遺構断面



1



2

図版 196 発掘調査状況 47 1. 石列と赤土の分布状況 2. 石列下の状況

1

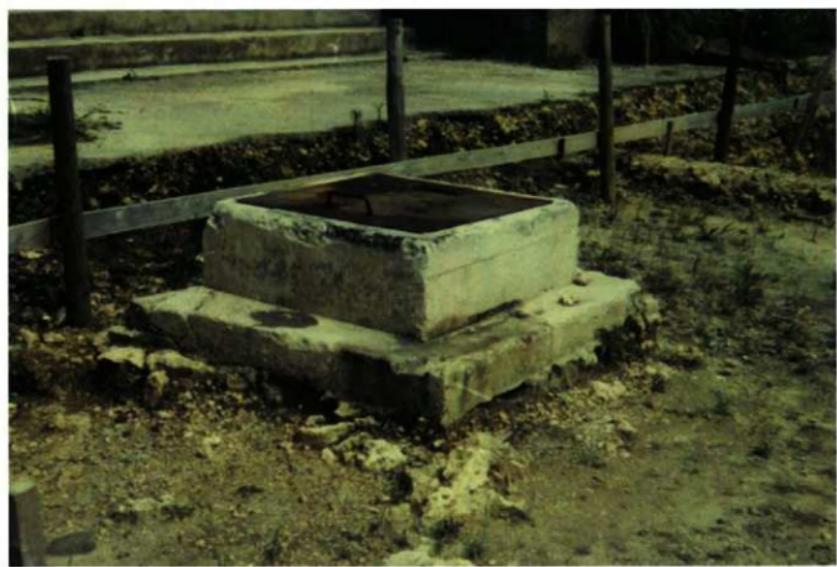
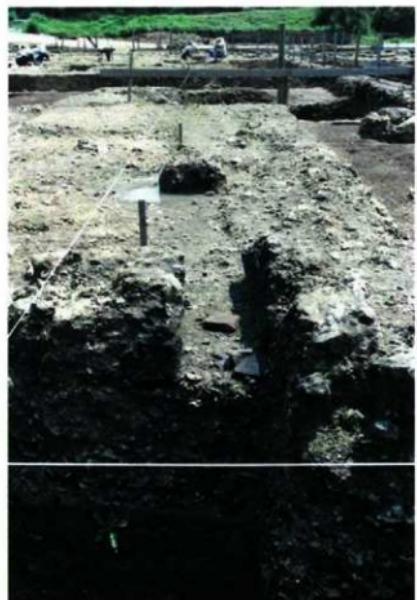


2



図版 197 発掘調査状況 48

1. 赤土地域の石列 2. 瓦の堆積層



図版 198 発掘調査状況 49 1. 石列の下部 2. 調査区東側の雨落溝 3. 井戸



1

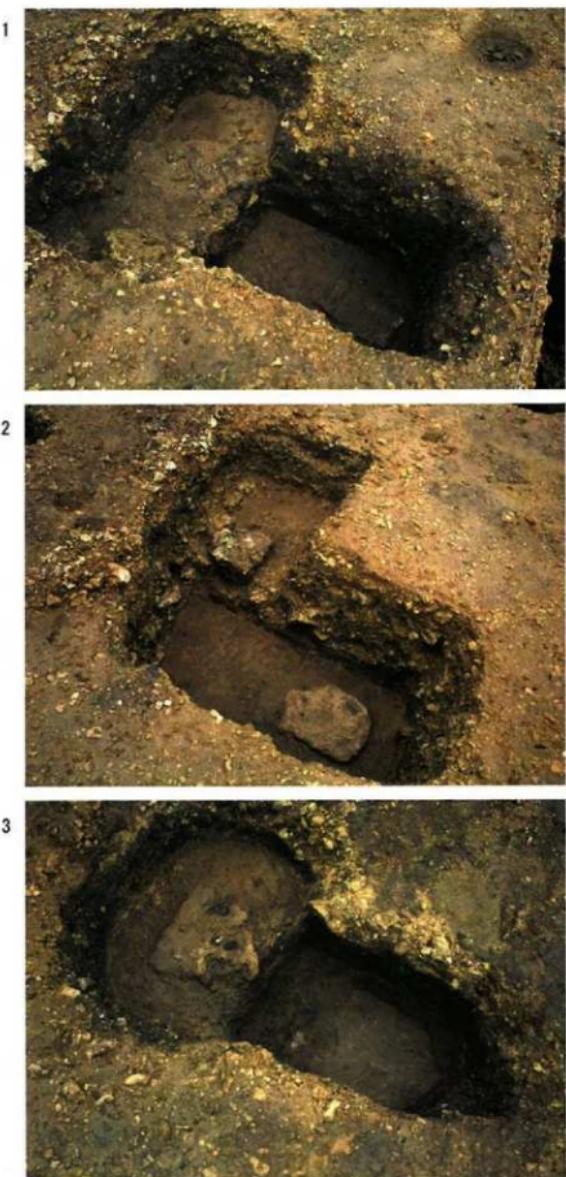


2

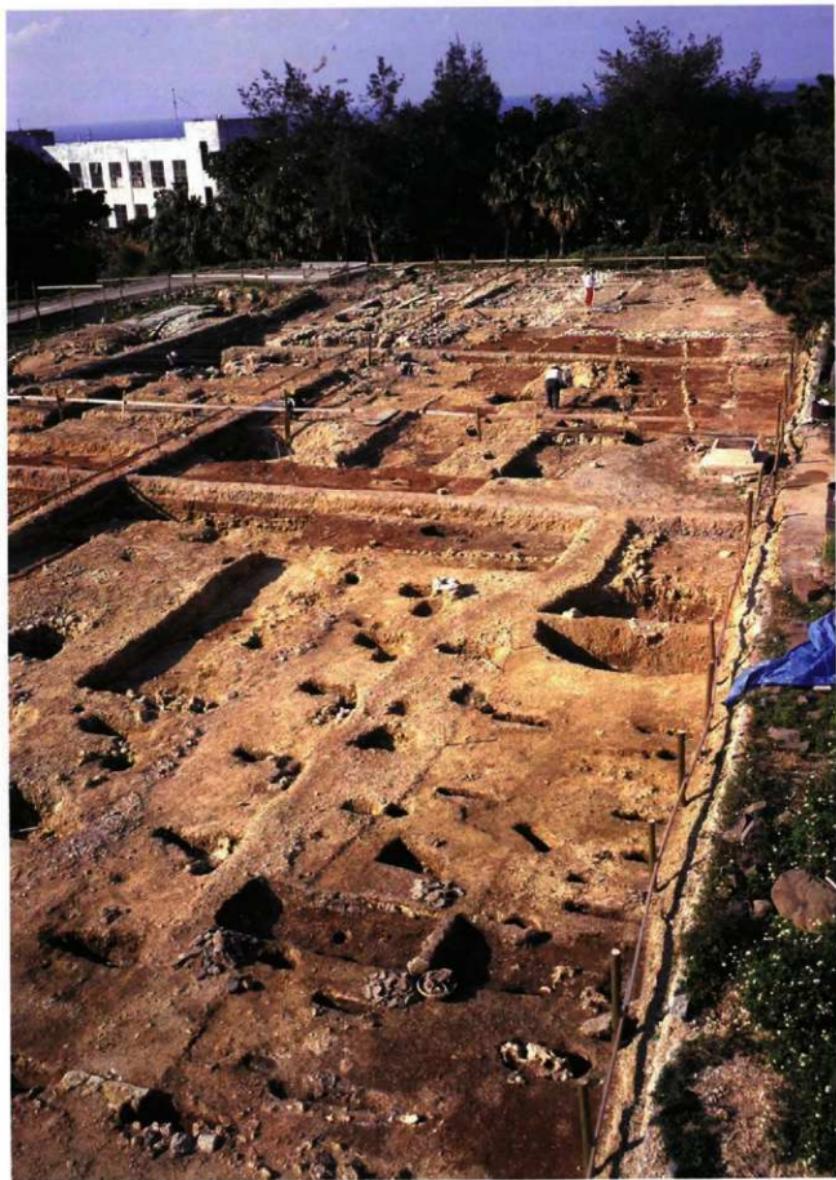


3

図版 199 発掘調査状況 50 1. 廻跡（南西から） 2. 廻跡（南東から） 3. 廻跡（北から）



図版 200 発掘調査状況 51
1~3. 調査区東側(正殿跡後方)に展開する柱穴



図版 201 発掘調査状況 52 調査区東側（南から）



図版 202 発掘調査状況 53 1. 爆弾破壊跡④ 2. 爆弾破壊跡⑤ 3. 爆弾破壊跡③

報告書抄録

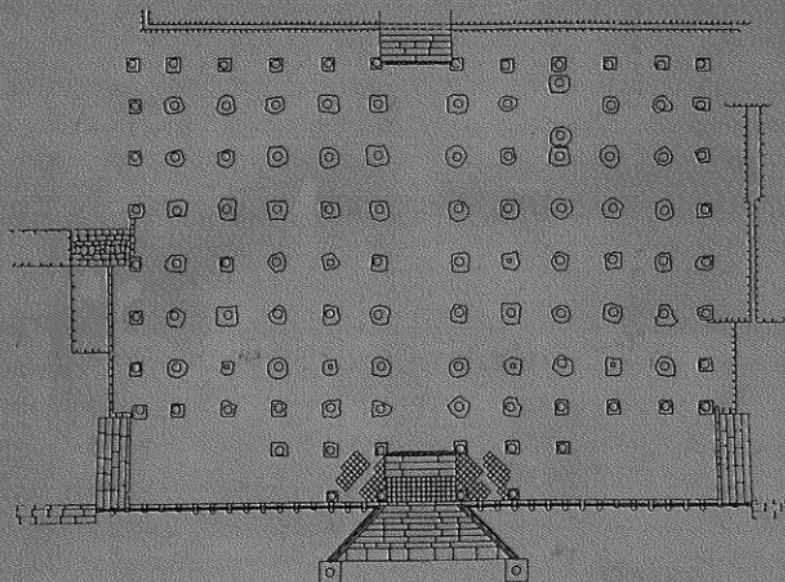
ふりがな しゆりじょうあと							
書 名	首里城跡						
副書名	正殿地区発掘調査報告書						
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第82集						
編著者名	新垣力・山本正昭・大嶋皓平・亀島慎吾・新垣有一郎・上原靜・當眞嗣一						
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター						
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町上原193-7 TEL 098-835-8752 FAX 098-835-8754						
発行年月日	2016年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
首里城跡 (正殿地区)	沖縄県 那覇市 首里当蔵町 3丁目1番	47201	26° 13' 2°	127° 43' 11°	19850725 ~ 19870331	1,350 m ²	史跡首里城跡(正殿地区)遺構確認のための発掘調査
所取遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
首里城跡 (正殿地区)	城跡	グスク時代～ 近代	基壇石積み、蟠燭 地業、石列、方形石 組遺構、かくや跡、 ビット、遺物包含層	中国産・ベトナム産・タイ産・朝鮮 産・本土産陶器及び土器、沖縄 窓櫓器、瓦器、土器、瓦、埴輪、 貨、煙管、玉類、円筒状製品、金属 製品、石製品、骨製品、土製品、ガ ラス製品、自然遺物	7期に及ぶ正殿基壇の 変遷を確認		
要約	<p>正殿建物の基壇を構成する包含層と石積みが複数検出されたため、正殿建物(想定含む)が少なくとも7回建て替えられたことが判明した。基壇は時期別にみると1～4期間に大別され、最も古い1期基壇(大和系瓦が大部に出土する遺物包含層)は15世紀中葉以前に瓦葺き建物が存在した可能性を示唆するものである。その他、1453年に生じた「志魯・有里の乱」で被災したと考えられる2期基壇、正面中央に石階段が取り付けられた3期基壇、全形は不明だが建物及び敷地が西側に拡張していく様相の窓櫓IV～VI期基壇、沖縄戦で焼失した正殿が建てられていたVII期基壇がみられる。当該遺構の中には文獻で確認できないものもあることから、首里城の中枢施設である正殿の変遷を辿るうえで非常に重要な資料といえる。また、これら以外にも施設本體台地部分遺構の青里城軒崩時(1879～1896年)に構築されたかまくら跡、沖縄戦に伴う複数の爆弾破壊跡、戦後に建設された琉球大学施設の基礎など、首里城が王城として使った近代以降の歴史も垣間見ることができる。</p> <p>遺物は境内の他の地区と同様に多種多様な資料が得られている。中でも特筆すべきは、場所の特性を示すような遺物(火災等により被災した遺物、17世紀代の糸道具、琉球瓦、瓦類や右端品にみられる大量の建築部材)の多さが挙げられる。これらは当該地区にかけて存在した正殿建物の規模や構造を物語るだけでなく、正殿という施設の特性格の一端を示していると考えられ、遺構と同様に興味深い資料といえる。</p>						

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第82集

首里城跡

—正殿地区発掘調査報告書—

発行年月日 平成28(2016)年3月31日
編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7
TEL: 098-835-8751・8752
印 刷 有限会社 金城印刷
〒901-0305 沖縄県糸満市西崎町5-9-16

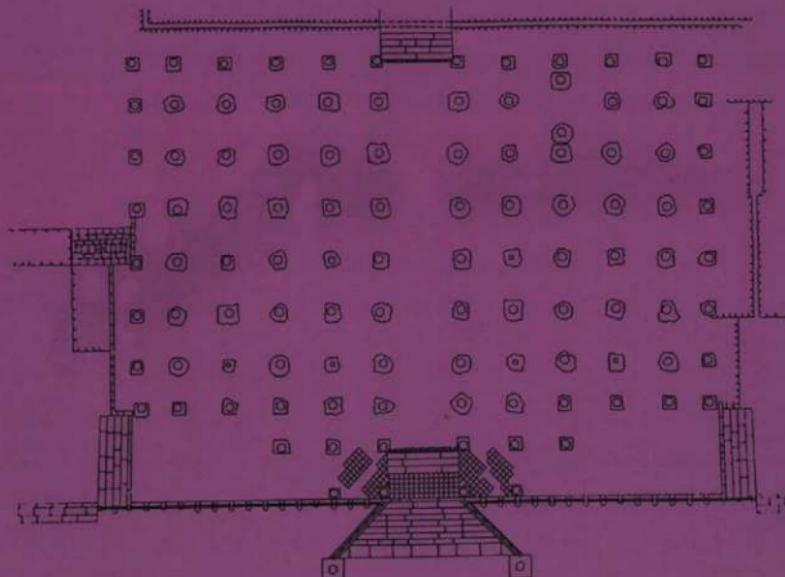


表紙：正殿地区平面図

裏表紙：首里城正殿（沖縄神社御殿）実測平面図 文化庁所蔵



沖縄県立埋蔵文化財センター



表紙：正殿地区平面図

表紙紙：首里城正殿（沖縄神社洋蔵）実測平面図 来文化庁所蔵



沖縄県立埋蔵文化財センター

第1表 青磁集計表

分類	総																					
	A-1		A-1 有文		A-1 無文		A-2			A-3			A-3-a			A-3-b			B		B-1	
	口縁部	側部	底部	底部	口縁部	側部	底部	口縁部	側部	底部	口縁部	側部	底部	口縁部	側部	底部	口縁部	側部	底部	口縁部	側部	
個数	24	4	19	10	86	15	15	1	4	15	31	17	32	1	107	7	1	1	196	73		

分類	総																		
	B-1 有文		B-1 無文		B-2			B-3			B-3-a			B-3-b			C		
	口～縁部	底部	底部	口～縁部	口縁部	側部	底部	口～縁部	口縁部	底部	口縁部	側部	底部	口～縁部	口縁部	側部	口～底部	口縁部	側部
個数	1	12	15	1	40	12	12	1	2	28	72	6	3	61	18	1	30	33	19

分類	総									底									B		B-1		B-1-a		B-1-b	
	D			その他			分類不明			A			A-1			A-2			B		B-1		B-1-a		B-1-b	
	口～縁部	口縁部	側部	底部	口縁部	側部	底部	口縁部	側部	底部	口縁部	側部	底部	口縁部	側部	底部	口縁部	側部	底部	口～縁部	口縁部	側部	口～縁部	口縁部	側部	
個数	1	20	3	4	5	6	3	35	328	98	11	1	5	11	48	19	16	1	4	117	37					

分類	底												C-1		C-2		その他		分類不明	
	B-1-a		B-1-b		B-2-a		B-2-b		B-3		C-1		C-2		その他		分類不明			
	口縁部	底部	口～縁部	口縁部	口縁部	底部	口～縁部	口縁部	底部	口縁部	底部									
個数	3	5	1	15	4	1	4	1	3	55	9	2	11	6	1	17	1	11	111	

分類	底												C-1		C-2		その他		分類不明			
	A			A-1-a			A-1-b			A-2			B			分類不明			A			
	口縁部	側部	底部	口～縁部	口縁部	底部	口縁部	側部	底部	口～縁部	口縁部	底部	口縁部	側部	底部	口縁部	側部	底部	口縁部	側部	底部	
個数	8	42	30	1	133	16	21	1	26	26	65	11	11	17	8	3	1	84	7	4	21	1

分類	底						蓋						小鏡						香炉						型物								
	B			C			櫛			小差			水注			櫛			器台			A			B			C			型物		
	口縁部	側部	底部	口縁部	側部	底部	体部	櫛部	甲部	甲～櫛部	体部	甲～櫛部	櫛部	口縁部	側部	底部	口縁部	側部	底部														
個数	1	1	1	3	2	2	2	4	2	4	5	1	6	1	6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	133	2	3075	

第2表 青磁觀察一覧①

単位:cm

測定番号 図版番号	器種	部位	分類	口縁高 底径	調査事項	旧出土地	新出土地
第29回 図版1 1	碗	口縁部	他	— — —	底邊弁の外反縁。口唇部はやや尖る。縁の様は不明瞭であるが微らみは見られる。内外面共に明緑色釉で厚く施釉される。裏面は赤褐色でやや粗い。	東西トレシチ 東風入り 2番4石列内	出土地不明
第29回 図版1 2	碗	口縁部	A-1	17.3 — —	厚手の無文外反縁。内外面共に粗らく貫入が見られ、明オーライプ灰白色釉で厚く施釉される。裏面は赤褐色でやや粗い。	II期基礎	II期基礎
第29回 図版1 3	碗	口縁部	A-1	21.1 — —	厚手の無文外反縁。口縫部は外反し、周縁部は大きくなじみ。外面脚底下平には無粘着弁文が、内面にはヘラ引きの草文が描かれる。内外面共に明緑色釉で厚く施釉される。裏地は灰白色で堅膜。	2層黒色土混り 赤土層69.95 96	K6-95・96 II層 (黒土混赤土層)
第29回 図版1 4	碗	口縁部	A-3'a	— —	無文の玉縁外縁。全体的に薄手である。内外面共に粗らき貫入が見られ、明オーライプ灰白色釉で厚く施釉される。裏面は灰白色でやや粗い。裏面には小孔が見られる。	中央本東西窯場 現コカル窯址	中央窯場?
第29回 図版1 5	碗	口縁部	A-2	17.3 — —	厚手の外反縁。外側脚底部に文様が見られるが、不明瞭であるため略縦横成は不明。内外面共に細かな貫入がある。内面表面に2次的の火を受けているため変色。砂粒が留着している。明緑灰白色釉で厚く施釉される。裏地は灰白色で堅膜。	K9 K10 100 第基礎正三窯傍中	K9-10-100 II期基礎 正三窯傍中
第29回 図版1 6	碗	口縁部	A-2	17.7 — —	連花文縁。口縫部は外反寸法。やや細めの蓮花文は縮は無く、微らみが見られる。オーライプ灰白色釉で内外面共に厚く施釉される。裏地は灰白色で堅膜。	K6 98 第2層 70~80	K6-98 II層
第29回 図版1 7	碗	口縁部	A-2	15.8 — —	蓮花文縁。脚底に幅広の蓮花文と思われる花弁が描かれる。その上面に2条一綱の圓羅文も見られ、内面にはヘラ引きによる草文が見られる。明オーライプ灰白色釉で厚く施釉される。裏面は灰白色で堅膜。	II期基礎 北側石垣 墓土	II期基礎 北側墓底 1層
第29回 図版1 8	碗	口縁部	A-2	16.2 — —	口縫部は外反する。脚底部は微らみが見られる。外側脚底にヘラ引きの草花文が見られる。内外面共に明緑灰白色釉で厚く施釉される。裏地は灰白色で堅膜。	K6 98 第2層 70~80	K6-98 II層
第29回 図版1 9	碗	口縁部	A-2	— —	口縫部が外反する。外側脚底には楕円化したタラ式蓮文で、内側脚底には草花文が見られる。内外面共に明緑色釉で施釉される。裏地は灰白色で堅膜。	K8 103 表土	K8-103 表土
第29回 図版1 10	碗	底部	A-1 有文	— — 8.0	かくら大筋の内、底面には幅広の脚底部に花文、外側脚底には草花文が見られる。内面表面は灰白色で堅膜。内面表面にオーライプ灰白色釉で施釉される。外底面は薄な蛇の目脚底が見られる。裏地は灰白色で堅膜。外底面に粘土層が留着する。	K2 99 第2層 0/20	K2-99 II層
第29回 図版1 11	碗	底部	A-1 有文	— — 7.5	表面は低く、脚底は厚手となる。やや膨らむ内、底面には圓錐形内に印花文が見られる。内面表面には輪郭線内に印花文が見られる。内面表面に明緑灰白色釉で施釉される。外底面は幅広の脚底が見られる。裏地は灰白色で堅膜。	第1期基礎 北側 石垣の東側の覆土	II期基礎 北側窯底 1層
第29回 図版1 12	碗	底部	A-1 有文	— — 7.3	大筋なりで脚底下部が大きく広がる。内底面には印花文が見られる。内外面共に暗オーライプ色釉を薄く施釉する。外底面は粗らき脚底剥離が見られる。裏地は褐色で粗い。	第3基礎と③ 横 石垣の間	南隣9脚 断解①
第29回 図版1 13	碗	底部	A-1 有文	— — 7.4	大筋なりで脚底下部が大きく広がる。内底面には蓮瓣の印花文が見られる。外側脚底にも草花文と思われる。カーブした脚底剥離が見られる。明オーライプ灰白色釉で厚く施釉される。外底面は蛇の目脚底剥離が見られる。裏地は灰白色で堅膜。外底面に粘土層が留着する。	K4 レンシ 東西基本レンシ	K3-97・98 レンシ3
第29回 図版1 14	碗	底部	A-1 有文	— — 7.3	高さは低く、厚い脚底の底辺は厚手の縁。全面に2次的な火を受けており、表面が灰色、黒斑が見られる。そのため表面の表面は不明瞭である。外底面は円形の輪郭剥離が見られる。裏地は赤褐色で堅膜。外底面に粘土層が留着している。	V期 南東側 石垣下層	V期基礎 K6-100 石垣 下層 F層
第29回 図版1 15	碗	底部	A-2	— — 5.9	高台の「つづり」はやや粗い。高台外側下部は斜面に面取りがされる。内底面には印花文が見られる。外底面は円形の輪郭剥離が見られる。裏地は赤褐色で堅膜。外底面には粘土層が留着している。	II期基礎	II期基礎
第30回 図版2 16	碗	口縁部	A-3'a	20.1 — —	無文外反縁。口縫部は三種類に肥厚する。脚底は微らみを有する。内外面共に暗オーライプ色釉を薄く施釉する。裏地は灰色でやや粗い。	L1 東西レンジ 中央窯場②	
第30回 図版2 17	碗	口縁部	A-3'a	18.0 — —	無文外反縁。口縫部は五枚以上肥厚する。脚底は微らみを有する。内外面共に暗オーライプ灰白色釉を薄く施釉する。裏地は灰白色で堅膜。	I.B 94 下層断続 田堀	I-94 II層
第30回 図版2 18	碗	口縁部	A-3'a	14.5 — —	無文外反縁。口縫部は五枚以上肥厚する。脚底は微らみを有する。内外面共に明オーライプ灰白色釉を薄く施釉する。裏地は灰白色でやや粗い。表面には小孔が多数、見られる。内面には粘土塊が留着する。	II期基礎	II期基礎
第30回 図版2 19	碗	口縁部	A-3'b	16.7 — —	無文外反縁。口縫部は僅かに肥厚する。脚底は微らみを有する。内外面共に明オーライプ灰白色釉を薄く施釉する。裏地は灰白色でやや粗い。表面には小孔が見られる。	SW17	L2-96 SW17
第30回 図版2 20	碗	口縁部	A-3'a	14.8 — —	薄手の無文外反縁。口縫部は三種類に肥厚する。内外面共にオーライプ灰白色釉を薄く施釉する。裏地は灰白色でやや粗い。表面には小孔が多数、見られる。内面には粘土塊が留着する。	道標S3	K2-96 S83
第30回 図版2 21	碗	口縁部	A-3'b	15.2 — —	無文外反縁。口縫部は斜面に面取りされる。内底面には印花文が見られる。外底面共にオーライプ灰白色釉を薄く施釉する。裏地は灰白色でやや粗い。表面には小孔が多数、見られる。内面には粘土塊が留着する。	表 I.0 104	I-104 表接
第30回 図版2 22	碗	底部	A-3'a	— — 6.75	高台外側下部は斜面に面取りされる。内底面には印花文が見られる。外底面共にオーライプ灰白色釉を薄く施釉する。裏地は灰白色でやや粗い。表面には小孔が多数、見られる。内面には粘土塊が留着する。	I.B 94 下層断続 旁壁	I-94 II層
第30回 図版2 23	碗	底部	A-3'a	— — 6.45	高台はやや高く内側し高台内の内側は低い。蓋付は水平に切られ、縁は一定しない。内底面には印花文が見られる。外底面共に明オーライプ灰白色釉を薄く施釉する。裏地は灰白色で堅膜。	中央軸 断続レ 第基础 葉園区	中央窯場⑤ 葉園区
第30回 図版2 24	碗	底部	A-3	— — 5.4	高台は低く、高台の内側面は凹い。蓋付は水平に切られ、縁は一定しない。内底面には印花文が見られる。外底面共に明オーライプ灰白色釉を薄く施釉する。裏地は灰白色で堅膜。	II期基礎	II期基礎

第2表 青磁觀察一覧(2)

単位: cm

層級番号 図版番号	器種	部位	分類	口縁高 底径	觀察事項	旧出土地	新出土地
第30回 図版2 25	碗	底部	A-3-a	- 5.6	高台はやや高く内傾し高台内の内側には深い。窓付は水平に切れ高、高台外周下部は斜めに削取られる。内外面共にオーバー化色袖を施繪している。外面部下部から外底面にかけて剥落となる。裏地は灰褐色で堅韌、器表面には小孔が多數、見られる。	第3基壙と3'横 石柱の間	南端5場 断続①
第30回 図版2 26	碗	底部	A-3-a	- 6.2	高台はやや高く内傾し高台内の内側には深い。窓付は水平に切れ高、高台外周下部から外底面にかけて剥落となる。裏地は灰褐色で堅韌、器表面には小孔が多數、見られる。	II期基壙 北側 ヨグリゾ	II期基壙 北側翼状①
第30回 図版2 27	碗	底部	A-3-a	- 5.3	高台の内側には浅い、2次的に火を受けているため、全体的に火候が良くなっている。窓付は一面、水平に切れられるが、丸く取扱などの跡が見られない。内外面共に明緑色袖を施繪している。外面部下部に鉄の小片が保存している。	表 K10 101	K10-101 表採
第30回 図版2 28	碗	底部	A-3	- 5.0	やや小ぶりな碗。高台は低く、薄い。窓付下部は大きくなっている。窓付は一面、水平に切れられるが、丸く取扱などの跡が見られない。内外面共に明緑色袖を施繪している。表面から外底面にかけて剥落する。裏地は灰白色で堅韌。	中央斜 断面 削合レシナ 系構成	中央觀察地④
第30回 図版2 29	碗	底部	A-3-a	- 5.5	高台の内側には浅い、2次的に火を受けているため、全体的に火候が良くなっている。窓付は水平に切れられるが、丸く取扱などの跡が見られない。内外面共に明緑色袖を施繪している。表面から外底面にかけて剥落する。裏地は灰白色で堅韌。	K9 K10 100 第2基壙	K9-10-100 II期基壙 正面縦構中
第30回 図版2 30	碗	底部	A-3-a	- 6.0	窓付は低い全体的につるはせの形で、窓付の幅は一定ではない。内外面共にオーバー化色袖を施繪する。裏地は灰褐色でやや粗く、大きい気泡が見られる。	II期基壙	II期基壙
第31回 図版3 31	口縁部	B-1	-	-	直口口縁部で外面部窓底に3枚の縫隙が見られる。斜面で断面。内面部窓にはハラ描きの草花が見られる。窓付共に火候が良くなっている。裏地は灰白色で堅韌、内外共に火候が見られる。	表土 L3 103	L3-103 表土
第31回 図版3 32	口縁部	B-1	14.2	-	直口口縁部で外面部窓底に2~3枚の縫隙による草花が見られる。火候は他の外面部窓に比べて高い。裏地は灰白色で堅韌、裏地は灰白色で堅韌。	表土	表土
第31回 図版3 33	口縁部	B-1	12.4	-	直口口縁部で外面部窓底に2~3枚の縫隙による草花が見られる。内面部窓にハラ描きによる草花が見られる。内外共に壁面にオーバー化色袖を厚く施繪する。裏地は灰白色で堅韌。	SW13	L9-90 SW13
第31回 図版3 34	口縁部	B-1	-	-	直口口縁部で外面部窓底に2~3枚の縫隙による草花が見られる。内面部窓にハラ描きによる草花が見られる。内外共に壁面にオーバー化色袖を厚く施繪する。裏地は灰白色で堅韌。	表 K1 95	K1-95 表土
第31回 図版3 35	口縁部	B-1	-	-	直口口縁部で外面部窓底に2~3枚の縫隙による草花が見られる。裏地は灰白色で堅韌、裏地は灰白色で堅韌。	表土 L4 100	L4-100 表土
第31回 図版3 36	口縁部	B-1	-	-	直口口縁部で口縁部窓底に2~3枚の縫隙による草花が見られる。内面部窓にオーバー化色袖を厚く施繪する。裏地は灰白色で堅韌。	II期基壙 前方土石垣 南側翼状石垣	II期基壙?
第31回 図版3 37	口縁部	B-1	13.2	-	直口口縁部で外面部窓に幅広化した蓮瓣文が見られる。内面部窓にオーバー化色袖を厚く施繪する。裏地は灰白色で堅韌。	IV期基壙 化粧石頭	SP3
第31回 図版3 38	口縁部	B-1	14.4	-	直口口縁部で外面部窓に片切割の無縫蓮瓣文が見られる。内面部窓に明緑色袖を厚く施繪する。裏地は灰白色で堅韌。	複混	複混層
第31回 図版3 39	口縁部	B-1	15.4	-	口縁部がややかみに外側にする傾向外面部窓に幅が狭く側の実片切割の無縫蓮瓣文が見られる。内面部窓に火候が良くなっている。裏地は灰白色で堅韌。	10 東西ランチ B10 西端最奥段	L9 不明
第31回 図版3 40	口縁部	B-1	14.6	-	直口口縁部で外面部窓に縫隙の蓮瓣文が見られる。蓮瓣は僅かに感じみを有する。内面部窓に淡緑色袖を施繪する。裏地は灰白色で堅韌。	SW13	L9-96 SW13
第31回 図版3 41	口縁部	B-1	-	-	口縁部がややかみに外側にする傾向外面部窓に片切割の無縫蓮瓣文が見られる。内面部窓に火候が良くなっている。裏地は灰白色で堅韌。	表土 K6 104	K6-104 表土
第31回 図版3 42	口縁部	B-1	-	-	口縁部がややかみに外側にする傾向外面部窓に片切割の無縫蓮瓣文が見られる。内面部窓に明緑色袖を施繪する。裏地は灰白色で堅韌。	第1基壙の北側 礎石化粧の覆土	II期基壙 北側翼状①
第31回 図版3 43	口縁部	B-1	-	-	直口口縁部で外面部窓に片切割の蓮瓣文が見られる。内面部窓に火候が良くなっている。裏地は灰白色で堅韌。	SW3 複土コーラル	K2-96 SW3
第31回 図版3 44	口縁部	B-1~底部	有文	20.2 10.6 8.4	大ぶりの直口口縁部で側面は大きく膨らむ。外面部窓下面に蓮瓣文とその上面に縫隙が1条ずつで窓間に見えれる。内底面には明緑色袖を施繪する。内底面窓に火候が良くなっている。裏地は灰白色で堅韌。器表面には小孔が僅かに見られる。内外共に明オーバー化色袖を厚く施繪する。裏地は灰白色で堅韌。	表 K9 101	K9-101 表採
第32回 図版4 45	口縁部	B-2	-	13.9 7.8 5.3	直口口縁部で外面部窓には片切割の蓮瓣文が見られる。内面部窓に火候が良くなっている。裏地は灰白色で堅韌。内底面窓に火候が良くなっている。裏地は灰白色で堅韌。高台部分の焼成度不良で裏地部は2枚色である。	SW13 内下部	L9-90 SW13
第32回 図版4 46	碗	底部	B-2	-	直口口縁部で外面部窓には片切割の蓮瓣文が見られる。内底面窓に明オーバー化色袖を施繪する。外底面窓に火候が良くなっている。裏地は灰白色で堅韌。高台部分の焼成度不良で裏地部は2枚色である。	L1 98 複混	L1-98 複混層
第32回 図版4 47	碗	口縁部	B-2	-	直口口縁部で外面部窓には片切割の蓮瓣文が見られる。内底面窓に明緑色袖を施繪する。裏地は灰白色で堅韌。	第2基壙 前面	II期基壙 前面
第32回 図版4 48	碗	口縁部	B-2	14.0	直口口縁部で外面部窓に縫隙による強化した蓮瓣文が見られる。内面部窓に淡緑色袖を薄く施繪する。裏地は灰白色で堅韌。	SW4 柱穴	L1-93 柱穴74

注「-」:計測不可

第2表 青磁觀察一覽③

四百三

器種	部位	分類	口径高 底径	觀察事項	出土地	新出土地
第32回 図版4-49	縁部	B-2	15.7 -	口縁部は底から厚化し、側面は膨らみが見られる。外表面には蓮瓣文が見られ、内外面共に明オーバー灰釉を厚く施す。素地は灰白色で堅緻。	KI 99 石綿遺構内	KI-99 SW4
第32回 図版4-50	口縁部	B-3-a	13.9	直口縁部で外面部に縦筋の蓮瓣文が見られる。2次目の火を受けているため、全体的に縦筋並びに縦筋、側面は不規則である。素地は灰白色で堅い。他成は一部不良。	KI 102 縁の壠断削	南端の壠断削④
第32回 図版4-51	口縁部	B-3-a	13.1	直口縁部で外面部は縦筋直下に3片の片切り文の蓮瓣文が見られる。内外面共に明オーバー灰釉を施すし、粗い貫入が見られる。素地は灰白色で堅緻。	I3 96 石灰岩碑	I3-96 石碑?
第32回 図版4-52	口縁部	B-3-a	16.0	直口の直口縁部で内外面共に明オーバー灰釉を施す。粗い貫入が見られる。素地は灰白色で堅緻。	KI 103 灰褐色土層	KI-103 灰褐色土層?
第32回 図版4-53	口縁部	B-3-a	13.6	直口縁部で外面部に細かい網目状の蓮瓣文が見られる。内外面は黄褐色釉で施されている。外表面は2次目の火を受けているため不規則となる。施釉は2種で外面部が一部露胎となる。素地は黄白色でやや堅い。	KI 102 縁の壠断削	南端の壠断削④
第32回 図版4-54	口縁部	B-3-a	-	直口の直口縁部で外面部は縦筋直下に2片の片切り文の蓮瓣文が見られる。内外面共に明オーバー灰釉を施すし、粗い貫入が見られる。素地は灰白色で堅緻。	2期壙 正面部	Ⅲ期基壙
第32回 図版4-55	口縁部	B-3-a	-	直口の直口縁部で縦筋底部に圓窓が1つある。その下部に蓮瓣文の貫入が見られる。内外面共に明緑色釉を施すし、細かい貫入が見られる。素地は灰白色で堅緻。	II期基壙	Ⅱ期基壙
第32回 図版4-56	口縁部	B-3-a	-	直口の直口縁部は細らみを有する。外面部に網目状の蓮瓣文が見られる。内外面共に明オーバー灰釉を施すし、細かい貫入が見られる。素地は灰白色で堅緻。表面は灰白色でやや堅い。	石綿遺構内 (井戸D) L2 X-103, Y-105付近	KI-99 SW4
第32回 図版4-57	口～底部	B-3-b	14.0 7.4 5.6	直口の直口縁部で縦筋底部は常に明るい火が点灯している。内底面には薄い網目状の跡が2つある。内外面共に明緑色釉を施す。細かい貫入が見られる。内面高台下部から外底面にかけて露胎となる。素地は灰白色で堅緻。外表面と高台には粘土塊が残っている。	II期基壙 前方土石用 南側露状石柱内	Ⅲ期基壙?
第32回 図版4-58	口～底部	B-3-b	14.9 7.4 5.2	直口の直口縁部で外面部には常に明るい火が点灯している。内底面には薄い網目状の跡が2つある。内外面共に明オーバー灰釉を施すし、細かい貫入が見られる。素地は灰白色で堅緻。外表面と高台には粘土塊が残っている。	II期基壙 前方土石用 南側露状石柱内	Ⅲ期基壙?
第32回 図版4-59	口縁部	B-3-b	13.1	直口の直口縁部で外面部には先が焦げた網目状の蓮瓣文が見られる。内外面共に明緑色釉を施す。表面には小孔や鳥糞も見られる。2次目の火を受けているため、赤褐色が濃く火が炎していている。素地は黄白色でやや堅い。	KI 102 縁の壠断削	南端の壠断削④
第32回 図版4-60	口～底部	B-3	13.5 6.1 4.6	無文の直口の直口縁部は大きな膨らみ、器高が低い。2次目の火を受けているため、赤褐色は不明瞭である。高台下部から外底面にかけて露胎となる。素地は灰白色でやや堅い。	I3 98	I3-98 表表
第33回 図版5-61	口縁部	C	11.7	口縁部がややかに外反し、口唇部が膨る。2次目の火を受けているため、黒絵、文様は不明瞭である。素地は灰白色で堅緻。	II2層 KI 96	KI-96 Ⅲ層
第33回 図版5-62	底部	C	- 4.4	高台はやや高く、横径は水平に切られた小さな部分。側面は大きめの膨らみを有する。全体的に表面は2次目の火を受けた色である。内外面共に明緑色釉が見られる。素地は白で堅緻。内外面共に細かい貫入が見られる。	II2層 0/20 KI 99	KI-99 Ⅲ層
第33回 図版5-63	口～底部	D	17.7 7.0-7.8 8.3	無文の直口の直口縁部は膨らみを有する。口縁部はやや厚壁化し、高台は低く、厚い。裏面は水平に切られ、縫合部は浅く、内外面共に明緑色釉が見られる。素地は白で堅緻。内底面には土柱跡がまとめて残っている。外表面には粗い貫入が見られる。内底面は灰白色でやや堅い。	不明	出土地不明
第33回 図版5-64	底部	E-2	-	蓮瓣文、口縁部のみを有する。外底面には印花文が見られる。高台の内側は複数の縫合部がある。内底面共に明緑色釉を施す。表面はやや厚壁化しているが、内底面から外底面にかけて縫合部がある。内底面には土柱跡がまとめて残っている。外表面には粗い貫入が見られる。内底面は灰白色でやや堅い。	I3 西～中央 断削、東端最 右柱(切内)	LI-石碑?
第33回 図版5-65	底部	E-3	-	無文の直口の直口縁部は膨らみを有する。内底面には印花文が見られる。高台下部は斜めに面取りされる。内外面共に明オーバー灰釉を施されているが、高台背面が縫合部などに露出する。内底面高台下部から外底面にかけて露胎となる。外表面には粗い貫入が見られる。内底面は灰白色でやや堅い。	第74 柱穴	LI-93 柱穴74
第33回 図版5-66	底部	E-3	-	高台は低く、高台下部の内側は高い。高台下部は斜めに面取りされる。内外面共にオーバー灰釉を施している。高台外側下部から外底面にかけて露胎となる。素地は灰白色でやや堅い。裏面には不透明な字模が見られる。	I3 97 SW13 井戸状石組 外側グリッド	I3-97 SW13
第33回 図版5-67	底部	E-3	-	蓮瓣文、裏面には字模がある。外底面には印花文が見られる。高台の内側は複数の縫合部がある。縫合部は複数ある。内底面は明緑色釉を施している。外表面は粗い貫入が見られる。素地は灰白色で堅緻。高台をを中心に裏表面には焼け付着している。	II期基壙	Ⅲ期基壙
第33回 図版5-68	底部	E-3	-	蓮瓣文、内外面共に明オーバー灰釉を施している。内底面高台下部から外底面まで露胎となる。裏面は黄白色で堅緻。	東方トレンチ プレーブ後方 の凹部	出土地不明
第33回 図版5-69	底部	E-3	-	高台は低く、高台下部は斜めに面取りされる。内底面は花文が描かれ。花文面には不透明な字模が見られる。内外面共に明オーバー灰釉を施している。裏面は黄白色でやや堅い。	KI 100 南隣の 壠断削	南端の壠断削②
第33回 図版5-70	底部	E-3	-	高台は低く、内側でしている。裏面は水平に切れ、縫合部は複数ある。裏面は印花文が描かれている。裏地は白で堅緻。内外面共に明緑色釉を施す。裏面には粗い貫入が見られる。内底面は灰白色で堅緻。	KI 99 Ⅲ層 0/20	KI-99 Ⅲ層
第33回 図版5-71	底部	E-3	-	裏面は水平に切れ、縫合部は複数ある。裏面は印花文が描かれ。裏地は白で堅緻。内外面共に明緑色釉を施す。裏面には粗い貫入が見られる。内底面は灰白色で堅緻。	SW13号 遺構内	I3-96 SW13
第33回 図版5-72	底部	E-3	-	裏面は水平に切れ、縫合部は複数ある。裏面は印花文が描かれ。裏地は白で堅緻。内外面共に明緑色釉を施す。裏面には粗い貫入が見られる。内底面は灰白色で堅緻。	第74 柱穴	LI-93 柱穴74

桂一：斷續不可

第2表 青磁觀察一覧④

単位: cm

番号 図版番号	器種	部位	分類	口縁高 底径	調査事項	旧出土地	新出土地
第33回 図版5 73	瓶	底部	不明	— — 6.8	高台は低く、内面する。器物の幅は一定ではない。外外面に埋蔵痕が見られる。内外面に暗オーラー色灰釉を施す。内面高台途中から内底面にかけて露胎となる。素地は灰白色で堅致。	L1 東西・ランチ 断層 東隅殿美 石列×切内	L1 石列?
第33回 図版5 74	小瓶	口～底部	A	7.4 4.0 3.4	口縁部は大きく外反し、縫合部に埋め込みを有する。高台は低く、厚い。内底面には文様が見られないが不透明である。内外面共にオーラー色灰釉を施す。高台外表面途中から内底面にかけて露胎となる。素地は灰白色で堅致。	不明	出土土地不明
第33回 図版5 75	小瓶	口縁部	A	8.3 — —	口縁部は大きく外反し、縫合部に埋め込みを有する。高台は低く、厚い。内底面には文様が見られないが不透明である。内外面共に明緑色釉を施す。素地は灰白色で堅致。	第2 K1 94	K1-94 II層
第33回 図版5 76	小瓶	口縁部	A	8.9 — —	口縁部は大きく外反し。外面上に縫合部上に継ぎ目のある文様が見られる。内外面共に明緑色釉を施す。素地は灰白色で堅致。	SW3のミゾ 道場の壁上	K2-96 SW3
第33回 図版5 77	杯	口～底部	B	6.7 3.6 3.0	基底部の小柄。口縁部は内側に凹む。脚部は全体的に丸みを帯びる。外外面共に大粒の砂粒が附着する。素地は灰白色で堅致。	L0 94 下層断層 3層	L0-94 III層
第33回 図版5 78	杯	口縁部	C	— — —	口縁部が外反するやや厚手の小杯で脚部は全体的に丸みを帯びる。内外面共に暗オーラー色灰釉を施す。素地は灰白色で高台近くの柄色となる。細密。	K1 99 石畠遺構内	K1-99 SW4
第33回 図版5 79	杯	底部	C	— — 3.4	高台付杯。蓋付は水平に切られる。外表面は明緑色釉。高台内面はオーラー色灰釉で縫に施す。素地は灰白色で堅致。	不明	出土土地不明
第34回 図版6 80	口縁部	A-1	20.9 — —	口折れ蓋で外腹脚部に縫合部が見られる。口折れ部には縫は明瞭に見える。外外面共に明緑色釉を施す。素地は灰白色で堅致。貴人好みの外腹に花文が見られる。	第2 K6 93	K6-93 II層	
第34回 図版6 81	瓶	口～底部	A-2	13.2 3.2 7.0	口折れ蓋で外腹脚部には蓋がやや膨らんだ片切り縫の縫合部が見られる。内底面には開闊内面に花文が見られる。内外面共に明オーラー色灰釉を施す。外底面は口の目袖がされている。高台は白色で堅致。	第Ⅱ基礎	Ⅱ期基礎
第34回 図版6 82	瓶	口～底部	A-2	13.3 3.8 6.8	口折れ蓋で外腹脚部には蓋がやや膨らんだ片切り縫の縫合部が見られる。内底面には開闊内面に花文が見られる。内外面共に明オーラー色灰釉を施す。高台内面端部から外底面にかけて露胎となる。素地は灰白色で堅致。	13-96 石臼宮碑内	13-96 石碑
第34回 図版6 83	瓶	口～底部	A-2	13.8 5.0 5.6	口折れ蓋で外腹脚部に片切り縫の無縫合部が見られる。外底面から内底面高台にかけて露胎となる。内底面は滑らか。断面では外腹と内腹を接する。外底面のみ露胎となる。素地は灰白色で堅致。縫合部に花文が見られる。	SW13	L0-96 SW13
第34回 図版6 84	瓶	口～底部	A-2	12.8 3.8 5.6	口折れ蓋で外腹脚部には蓋がやや膨らんだ片切り縫の縫合部が見られる。高台は低く断面形状は台形状になる。内底面は開闊内面に花文が見られる。内底面は口の目袖が設けられており、内外面共に明緑色釉が見られる。高台は白色で堅致。	10 94 下層断層 第Ⅲ層	L0-94 III層
第34回 図版6 85	瓶	口～底部	A-2	12.8 4.4 5.6	厚手の口折れ蓋。外腹脚部に無縫合部が見られる。内外面共に明緑色釉を厚く施す。蓋付は露胎となる。素地は灰白色で堅致。	SW17	L2-96 SW17
第34回 図版6 86	口縁部	A-2	— — —	口折れ蓋。外腹脚部には蓋が膨らんだ縫合部が見られる。内外面共に明緑色釉を施す。素地は灰白色で堅致。	L0 97 石組埋土 葛色砂層	L0-97 SW15 (葛色砂層)	
第34回 図版6 87	口縁部	A-2	10.0 — —	薄手の口折れ蓋。外腹脚部には蓋が膨らんだ縫合部が見られる。内外面共に淡い青緑色を施す。蓋付は露胎となる。素地は灰白色で堅致。	SW13号 道場内	L0-96 SW13	
第34回 図版6 88	口縁部	B-1-a	13.4 — —	やや厚手の口折れ蓋。脚部が膨らみを有する。脚部に開闊部が1条見られる。内外面共に明緑色釉を厚く施す。蓋付は露胎となる。素地は灰白色で堅致。	第74 桂穴	L1-93 桂74	
第34回 図版6 89	口縁部	B-1-a	17.6 — —	やや厚手の無の外反皿。外腹脚部に明緑色釉を厚く施す。蓋付は露胎となる。素地は灰白色で堅致。	第1号 SW3	K2-96 SW3	
第34回 図版6 90	口縁部	B-1-a	12.3 3.9 6.5	厚手の口折れ蓋。口縁部に浅い切りが見られる。外腹脚部の辺縁部に横縫合部が見られる。外底面は明緑色釉を厚く施しており、蓋付から外底面にかけて露胎となる。素地は灰白色で堅致。高台内面端部は灰白色で堅致となる。	L1 東西・ランチ 第Ⅲコータール	L1 石列?	
第34回 図版6 91	瓶	口～底部	B-1-a	11.8 3.9 6.55	厚手の口折れ蓋。器底は低く、ハバ字形に開く。内外面共に明緑色釉を厚く施す。外底面は明緑色釉を厚く施しており、蓋付から外底面にかけて露胎となる。素地は灰白色で堅致。	第3基礎と③横 石柱の間	南陽9号 断解①
第34回 図版6 92	口縁部	B-1-b	12.7 — —	口縁部は内側に切られ、縫合部が見られる。内腹脚部に黄褐色釉を施す。器表面に小孔が多めに見られる。蓋付は灰褐色で、内腹脚部に窓、貴人が見られる。	第3基礎と③横 石柱の間	南陽9号 断解②	
第34回 図版6 93	瓶	B-1-b	15.0 — —	口縁部が直線化して厚くする。内外面共にオーラー色灰釉を施す。素地は灰白色でやや堅致。内腹脚部に窓、貴人が見られる。	複数	L1-2-99 復元層	
第34回 図版6 94	瓶	B-1-a 合 B-2-a	— — 6.8	口縁部は内側に切られ、縫合部が見られる。蓋付は厚く、内腹脚部に窓、貴人が見られる。内腹脚部に花文が見られる。内腹脚部に窓、貴人が見られる。内外面共に明緑色釉を施す。外底面は明緑色釉を厚く施す。蓋付は灰白色で堅致。	4高須南壁外側 上層	南陽9号 断解③	
第35回 図版7 95	瓶	口～底部	B-2-a	12.4 3.7 5.8	口縁部の花文瓶。縫合部に不規則な凹凸がある。蓋付は低い。内腹脚部は直線化して厚くする。内腹脚部に窓、貴人が見られる。内腹脚部に花文が見られる。内腹脚部に窓、貴人が見られる。外底面は明緑色釉を厚く施す。蓋付は灰白色で堅致。	SW11	K9-97 SW11
第35回 図版7 96	(八角瓶)	口～底部	B-3	15.8 3.6 7.5	腰折れの花文瓶。高台が低く、厚い。内腹脚部は直線化して厚くする。内腹脚部に花文が見られる。内腹脚部に花文が見られる。内外面共に明緑色釉を施す。外底面は明緑色釉を厚く施す。蓋付は灰白色で堅致。	第2 K5 97 + 第2 9-10	K5-97 II層 + II層

注: “+”は計測不可

第2表 青磁觀察一覧(5)

単位:cm

器物番号 国版番号	器種	部位	分類	口縁部 器高 底面	觀察事項	旧出土地	新出土地
第35回 国版7 97	盤	口～底部	C-1	15.6 4.3 9.5	外反曲。2次的に火を受けているため、全体的に文様並に内側膨らみ、肚は不平腹である。 外底面は蛇の目状に施釉される。内外面共に粗い質人が見られる。素地は灰白色で堅脆。	不明	出土地不明
第35回 国版7 98	盤	底部	C-1	— — 7.6	高台は低く、断面形状は台形となる。内底面には2条の開闊と印文が見られる。内外面共に明緑色釉が施釉される。外底面は基本施釉となるが、一部、釉が見られる。素地は灰白色で堅脆。	K1 99 石組道構内	K1-99 SW4
第35回 国版7 99	盤	底部	C-1	— — 7.7	面高は低く、内傾する。脚部に開闊がある。内底面には開闊と印文が見られる。内外面共にオーバー灰白色で施釉する。外底面は蛇の目状に粗い質人が見られる。	II期基層	II期基層
第35回 国版7 100	盤	口～底部	C-2	13.6 3.75 8.0	無外反曲。口縁部が僅に内側膨らむ。内外面共に明黄褐色で施釉される。外底面は蛇の目状に施釉され、堅脆となる。素地は灰白色で粗い。内外面共に細かい質人が見られる。	II期基層	II期基層
第35回 国版7 101	盤	口縁部	C-2	15.8 — —	外反曲で縁部が正統となる。内外面共に薄い青緑色釉を薄く施釉する。内底面には開闊と印文が見られる。内外面共に弓筋垂れが見られる。素地は灰白色でやや粗い。器表面には細かい質人が見られる。	II期基層	II期基層
第35回 国版7 102	盤	底部	C-2	— — 8.2	高台は低く、内傾する。内底面には開闊と印文が見られる。内外面共にオーバー灰白色で施釉する。外底面は脚部に施釉され、堅脆となる。素地は灰白色でやや粗い。	第IV期基層 化粧石下の試掘	試掘①
第35回 国版7 103	盤	底部	不明	— — 5.1	高台は低く、高台内の内側面は高い。高台下部は斜面で削り取られる。内底面には開闊と印文が見られる。内外面共に明緑色釉を施釉する。外底面は脚部に施釉され、堅脆となる。素地は灰白色でやや粗い。器表面には細かい質人が見られる。	K1 102 sondage	南端小場 断解④
第35回 国版7 104	盤	底部	不明	— — 7.6	高台は低く、ペースト状で聞く。内底面には文様が見らるるが、全体形状は正統。内外面共に青緑色釉を施釉する。高台内面の外底面にかけて脚部となるが、施釉は脚部。素地は灰白色で堅脆。内外面共に粗い質人が見られる。	SW17	L2-96 SW17
第35回 国版7 105	盤	底部	不明	— — 6.3	高台が低く、底面は完全に削除され、成形が難で器表面にはかなり凹凸が見られる。内外面共に暗緑色釉で施釉する。從たから外底面にかけて脚部となるが、施釉は脚部。素地は灰白色で堅脆。器表面には細かい質人が見られる。	第1号 SW3 石組構内	K2-96 SW3
第36回 国版8 106	盤	口縁部	A-2	21.5 — —	口折れの盤。器底には墨書き文が見らるる。口折れ部には墨が明顯に見られる。内外面共に淡青緑色釉を薄く施釉する。素地は灰白色で堅脆。器表面の一部には2次的に火を受けたことによって器表面が変色している。	第2基層 前面	II期基層 前面
第36回 国版8 107	盤	口縁部	A-1-a	25.0 — —	口折れの盤で、器底には墨書き文が見らるる。口折れ部には墨が明顯に見られる。内外面共に淡青緑色釉を薄く施釉する。素地は灰白色で堅脆。内外面共に粗い質人が見られる。	南の腰の横 東	南の腰の横 1層
第36回 国版8 108	盤	口縁部	A-1-a	25.2 — —	口折れの盤で口縁部の折り上げは魚。内底面には幅広の墨書き文が窓に見られる。内外面共に明緑色釉を施釉する。素地は灰白色でやや粗い。器表面が墨書き文が窓に見られる。	SW17	L2-96 SW17
第36回 国版8 109	盤	口縁部	A-1-a	23.8 — —	口折れの盤。外底面上面に開闊。内底面には丸窓による墨書き文が見られる。内外面共にオーバー灰白色釉を施釉する。素地は灰白色で堅脆。	第1号 SW3 石組	K2-96 SW3
第36回 国版8 110	盤	口縁部	A-1-a	24.7 — —	口折れの盤で墨書き文が窓に見られる。内外面共にオーバー灰白色釉を施釉する。素地は灰白色で堅脆。器表面には小孔が確かに見られる。	第1号 SW3 石組道構	K2-96 SW3
第36回 国版8 111	盤	口～底部	A-1-a	41.8 7.4 25.3	口折れの盤で口縁部の折り上げは魚。内底面には26本組の丸窓による墨書き文が窓に見られる。内外面共に明緑色釉を施釉する。素地は灰白色でやや粗い。器表面が墨書き文が窓に見られる。	K1 96 石組	K1-96 SW9
第36回 国版8 112	盤	口縁部	A-1-b	23.3 — —	厚の口折れ盤で口縁部の折り上げは魚。白口縁部は花咲状となり、縫隙ある上に24本組の丸窓が見られる。内底面には幅広の墨書き文が窓に見られる。内外面共にオーバー灰白色釉を施釉する。素地は灰白色で堅脆。	第1期基層 北側 翼石廻の襖土	II期基層 北側翼石廻 1層
第36回 国版8 113	盤	口縁部	A-1-b	— — —	口折れの盤で口縁部は肥厚し、僅かに折り上げは魚。内底面には幅広の墨書き文が窓に見られる。白口縁部は花咲状となり、縫隙ある上に24本組の丸窓が見られる。内外面共にオーバー灰白色釉を施釉する。素地は灰白色で堅脆。	II期基層	II期基層
第36回 国版8 114	盤	口縁部	A-2	— — —	平縁の口折れ盤。内外面共に解りやすいオーバー灰白色釉を施釉する。素地は灰白色で堅脆。	4系溝南側外側 土壤	南端小場 断解⑤
第36回 国版8 115	盤	口縁部	A-2	— — —	平縁の口折れ盤。器底に波状文が見られる。内外面共に明緑色釉を厚く施釉する。素地は灰白色で堅脆。器表面には粗い質人が見受けられる。	II期基層	II期基層
第36回 国版8 116	盤	口縁部	A-2	— — —	平縁で厚手の口折れ盤。器底に唐草文が見られる。内外面共に明緑色釉を厚く施釉する。素地は灰白色で一部褐色となり、堅脆。内外面共に粗い質人が見られる。	K1 96 石組	K1-96 SW9
第37回 国版9 117	盤	口縁部	A-2	34.2 — —	平縁で厚手の口折れ盤。内底面部に24本組の丸窓が見られる。内外面共にオーバー灰白色釉を厚く施釉する。素地は灰白色で堅脆。	中央東 断解② 2層米甌	中央腰都跡② II層
第37回 国版9 118	盤	口縁部	B	23.2 — —	口縁部が僅かに外反する盤。口縁部に刻み目文、外底面に開闊と3本組の丸窓がされた蓮瓣文が見られる。内外面共に明緑色釉を施釉する。素地は灰白色で堅脆。	南の腰の横東 表土層	南端小場 1層
第37回 国版9 119	盤	口縁部	B	22.3 — —	直口口縁の盤。口縁部が僅かに外反する。外底面には蓮瓣文が見られる。内外面共にオーバー灰白色釉が施釉される。内外面共に墨書き文が窓に見られる。	I.94 下層断解 33層	I.94 腰廻
第37回 国版9 120	盤	口縁部	B	— — —	直口口縁の盤。器底部が僅かに外反する。外底面には蓮瓣文が見られる。内外面共に墨書き文が窓に見られる。	I.97 石組埋土 褐色砂層	I.97 SW15 (褐色砂層)
第37回 国版9 121	盤	底部	A	— — 10.9	高台は低く、高台の内側面は高い。内底面には開闊面に墨書き文が見られる。内底面には幅広の墨書き文が窓に見られる。内外面共に墨書き文が窓に見られる。	SW17	L2-96 SW17

第2表 青磁観察一覽⑥

第六章

器物番号 国宝番号	器種	部位	分類	口径 高さ 底径	調査事項	旧出土地	新出土地
第37回 國宝9 122	盤	底部	A	- 14.5	高台は低く、断面形状は台形となる。内面部には丸薺の印文が見られる。裏地は灰白色で、一部赤褐色となり、焼結、外面部共に糊・買入が見られる。	II 東西トレンチ 断面 古墳奥壁 石列区切内	II 石列?
第37回 國宝9 123	盤	底部	A	- 18.0	高台は低く、内壁する。大體で底面中央がやや盛り上がる。外面部には蓮瓣の印文等、外面部には直葉状の蓮瓣が見られる。外面部には明綠色釉を施す。外底面には目地の移行部が見られる。裏地は灰白色で堅厚。外底面には輪郭の痕跡が残る。内外面部共に糊・買入が見られる。	II 9.4 下層断面 田畠	II-9.4 盤
第37回 國宝9 124	盤	底部	B	- 16.4	高台は低く、高台内の内壁は低い。全体的に器壁は厚い。内底面に菊花の印文等と内面部に丸薺の印文等が見られる。外面部共に明綠色釉を施す。裏地は灰白色でやや粗い・買入が見られる。	III層	III層
第37回 國宝9 125	盤	底部	B	- 9.4	岸の型の盤。内面部側に丸薺の蓮瓣等が見られる。外面部共に明綠色釉を施す。裏地は灰白色でやや粗い・買入が見られる。	Ⅲ層 3W3 石組構内	K2-96 SW3
第36回 國宝10 126	盃 (酒食盃)	口縁部	A	25.8	口縁部は内傾し、肩部の張りは緩やかである。外面部裏面には輪郭の草花紋が見られる。内外面部共に暗オリーブ灰色釉を施す。外底面は灰白色で堅厚。II 19部のみ焼成となる。	表 K6-98	表 K6-98 表様
第36回 國宝10 127	盃 (酒食盃)	底部	A	- 16.0	底面から脚部へ一定の上り勾は緩やか。外面部下部には輪郭を有した幅広の斜面產生部が見られる。外面部裏面には暗オリーブ灰色釉を施す。裏地は灰白色でやや粗い・買入が見られる。	SW3のモザイク 構造の廻土	K2-96 SW3
第36回 國宝10 128	盃 (酒食盃)	底部	A	- 15.5	底面から脚部へ立ち上がり勾は緩やか。内面部には脚部の一部が埋没し、外面部裏面には縦連き文が見られる。内外面部共に暗オリーブ灰色釉を施す。外面部下部脚部に埋没していて露はない。裏地は灰白色で堅厚。	表 K6-97	表 K6-97 備品
第36回 國宝10 129	盃 (酒食盃)	脚部	A	- -	脚部下部からみられた蓮瓣文が見られる。内面部には脚部の一部が埋没し、外面部裏面には縦連き文が見られる。内外面部共に暗オリーブ灰色釉を施す。裏地は灰白色で堅厚。外面部裏面共に粗い買入が見られる。	表 K6-97~99 土器層	K6-97~99 II 層 (底土層上層)
第36回 國宝10 130	小瓶	口縁部	-	5.4	脚部が丸みを有する小壺で口縁部は直口とする。内外面部共に暗オリーブ灰色釉を施す。口縁部のみ露胎となる。内外面部共に粗い買入が見られる。裏地は灰白色で堅厚。	中央佛寺跡 H6-96 荒尾	佛寺跡②
第36回 國宝10 131	盃	脚部	A-1	- 26.7	脚の無い丸く口の広い盃。脚部はやや高くなる。外面部には脚部を外側と脚部全周を施す。裏地は灰白色で堅厚。外面部裏面共に粗い買入が見られる。	I.0 東西トレンチ 東夷跡より2号古墳 内	石列2~3号
第36回 國宝10 132	盃	甲~脚部	A-1	27.0 16.7	酒呑の蓋。直口。甲部には「フ」字の横文が捺まれる。暗オリーブ灰色釉を甲部から脚部にかけて内面部に施す。脚部はやや内側なる。裏地は灰白色で堅厚。	石畠遺構内 N100 V110	K6-99 SW4
第36回 國宝10 133	盃 (酒食盃)	甲部	A-1	- 17.5	酒呑の蓋。甲部には「フ」字の横文が捺まれる。甲面部中心には印文が捺まれる。外面部裏面には印文が捺まれる。裏地は灰白色で堅厚。内面部裏面には小孔が僅かに見られる。	表 K6-95	表 K6-95 表様
第36回 國宝10 134	盃	甲~脚部	A-2	26.5	端子は下方へ折り、甲部は「フ」字の横文が捺まれる。暗オリーブ灰色釉を甲部から脚部にかけて内面部に施す。脚部はやや内側なる。裏地は灰白色で堅厚。	H6.87.94 第2層 歩上	H6-7-94 II 层 (歩上層)
第39回 國宝11 135	瓶	口縁部	A	-	口縁部は大きく突出する。口縁部は尖り、表・裏の2面が見られる。口縁部裏面には輪郭みを有した蓮瓣文が見られる。外面部には明綠色釉を施す。内面部には12次に火を受けており、器表面が走っている。	第74 柱穴	L1-93 柱穴4
第39回 國宝11 136	瓶 (長頸瓶)	脚部	A	-	像で見て「豆」字が入る様な直筒瓶。内面部には脚部と脚部の横口と足部が見られる。前面には「アラマニ文」と稱され、背面には草花文が捺まれる。素地は灰白色で堅厚。外面部裏面には明綠色釉を施す。裏地は黄白色で堅厚。内面部には糊から買入が見られる。	表 L6-92	L6-92 表様
第39回 國宝11 137	瓶	口縁部	B	9.3	横断部の器形が「舟」形状態に肥厚し、脚部にかかる。外面部裏面には青緑色釉を施す。裏地は灰白色で堅厚。内面部裏面には暗オリーブ灰色釉を施す。裏地は灰白色で堅厚。2次に火を受けられており、器表面が走っている。	第2層 9~20 K2-97	K2-97 B 層
第39回 國宝11 138	瓶	脚部	B	-	脚部裏面には揚げたての蓮瓣文が見られる。裏面の筋は凹凸が見られることが多く押し文字がある。外面部裏面には暗オリーブ灰色釉を施す。裏地は灰白色で堅厚。2次に火を受けられており、器表面が走っている。	II期基層	II期基層
第39回 國宝11 139	瓶	脚部	B	-	外面部裏面には揚げたての蓮瓣文が見られる。裏面の筋は凹凸が見られることが多く押し文字がある。裏地は灰白色で堅厚。2次に火を受けられており、器表面が走っている。	III期基層 中央陪葬路	III期基層
第39回 國宝11 140	瓶	底部	B	6.3	外面部裏面には揚げたての蓮瓣文が見られる。裏面の筋は凹凸が見られることが多く押し文字がある。裏地は灰白色で堅厚。裏地には糊れ跡と思われる砂粒が混在している。	I期基層 隣設路	I期基層
第39回 國宝11 141	瓶	底部	B	4.8	高台は低く、ハハ字状にさしかかる。買入が見られる。器壁は厚い。2次に火を受けられており、器表面が全面的に色付いている。2次、外面部には不純物も多くの溶離している。内面部と買入が混在する。裏地は灰白色で堅厚。	SW3 覆土コフル	K2-96 SW3
第39回 國宝11 142	瀝	把手	-	-	如鉗頭を象った器形が附属する。手等の把手から、全体的に暗オリーブ灰色釉を厚く施す。裏地は灰白色で堅厚。	II期基層	II期基層
第39回 國宝11 143	瀝	把手	-	-	如鉗頭を象った器形が附属する。手等の把手から、全体的に暗オリーブ灰色釉を厚く施す。裏地は灰白色で堅厚。	I期基層	I期基層
第39回 國宝11 144	香炉	口~底部	A	6.6 5.3	口縁部が内側へ折り下る。胴上部から下部にかけては幅広の脚輪部が7条、胴中段部には脚輪部が2条ある。足高部は比較的高い。外面部には明綠色釉を厚く施す。外底面には輪郭の痕跡が見られる。2次に火を行っており、器表面が全面的に色付いている。裏地は灰白色で堅厚。内面部共に粗い買入が見られる。	第2 K5-98	K5-98 B 層
第39回 國宝11 145	香炉	口~底部	B	-	口縁部が内側へ折り下る。胴上部から下部にかけては幅広の脚輪部が7条、胴中段部には脚輪部が2条ある。足高部は比較的高い。外面部には明綠色釉を厚く施す。外底面には輪郭の痕跡が見られる。裏地は灰白色で堅厚。内面部共に粗い買入が見られる。	2層 黒色土混 歩上層 K6-95 96	K-95~96 II 层 (底土混上層)

第2表 青磁觀察一覧(7)

単位:cm

辨認番号 図版番号	器種	部位	分類	口縁高 底径	觀察事項	旧出土地	新出土地
第39回 図版II 146	香炉	口縁部	B	13.5 — —	菱形の香炉。口縁部は内側へL字状に折れる。内外面共にはオーラーク色釉を薄く施釉する。口縁部両辺の施釉は2段で一部、露胎となる。素地は灰白色で堅緻。内外面共に質人が見られる。	石綿断場内 X100 Y110	KD-99 SW4
第39回 図版II 147	鉢	口縁部	—	22.8 — —	直口縁の鉢で口縁部には小さな抉りが見られる。腹底は継ぐ小さな凹みを有する。内外面開口には露胎きの文様が見られる。施釉化した唐草文から内外面共に明色釉を厚く施釉する。素地は灰白色で堅緻。外面にさびれ感が見られる。	第I期基壇 北側 石地の裏塗覆土	II期基壇 北側裏塗 1層
第39回 図版II 148	鉢	口縁部	—	— — —	直口縁の鉢。厚手で内外面の口縁部直下には露胎きの文様が見られる。施釉化した唐草文から内外面共に明オーラーク色釉を厚く施釉する。素地は灰白色で堅緻。	SW10	K4-95 SW10
第39回 図版II 149	鉢	口縁部	—	— — —	輪花紋か。口縁部は直口するが、口縁端部が内側へ僅かに肥厚する。また、小さな抉りが見られる。3本一组の文様で格子状に形成し、その内部に梅荅文が見られる。内外面共に明色釉を厚く施釉する。素地は灰白色で堅緻。	II期基壇 南側の裏塗石組内	II期基壇?
第39回 図版II 150	器台	口縁部	—	27.2 — —	器台の口縁部。口縁部は外側へU字状に外反する。腹底は膨らみを有し、口縁部直下には直角1つの円形透かしが見られる。内外面共に明オーラーク色釉を厚く施釉する。素地は灰白色で堅緻。	表 I.2 99	I.2-99 表採
第39回 図版II 151	器台	脚部	—	— — —	器台の透かし脚部複数分。全体的に厚みがあり、猪の目状の透かしになるとと思われる。透かしを鋸歯のように2枚重ねにして作被が、丸太の上間に2条一組の圓線が彫られる。内外面共に明オーラーク色釉を施釉する。素地は灰白色で堅緻。	表土	表土
第39回 図版II 152	搖籃	口縁部	—	— — —	口縁部が幅かく外反する搖籃。口縁端部が三辺に肥厚する。内面部には猪の目が彫り見られる。内外面共に明オーラーク色釉を施釉する。内面部中部から露胎となる。素地は灰白色で堅緻。	表 I.3 95	I.3-95 表採
第39回 図版II 153	搖籃	口縁部	—	— — —	口縁部が外側へ大きく肥厚する。口縁断面が二角形になり、口唇部は僅かに隆む。内外面共に黄褐色釉を施釉する。口唇部が一部露胎となる。素地は褐色でやや粗い。	中央振跡地 第4層 赤色露り 細褐色土層	中央振跡地(Ⅰ) IV 層(砂褐色土層)
第39回 図版II 154	瓶	—	—	— — —	象嵌の瓶。「山」が表面に刻まれる。暗オーラーク色釉が画面にのみ施釉する。素地は灰白色で堅緻。	不明	出土地不明
第39回 図版II 155	型物	底部	—	— — —	蓮瓣で折ひの底に凹凸での部分から、オーラーク色釉を全体的に施釉する。底の下部のみ露胎となる。素地は灰白色で堅緻。	K7-95 廃瓦	K7-95 廃瓦層

注 1-1:計測不可

第3表 白磁集計表

分類	碗															
	A		B		B-1		B-2		C		C-1		C-2			
	口縁部	胴部	口縁部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部
個数	1	13	1	1	22	6	3	1	2	4	2	1	4	1	1	1

分類	碗								小碗						
	D				E			分類不明	A			B			
	口～底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	口～底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部
個数	4	8	10	1	17	4	2	2	9	1	1	1	1	1	7

分類	小碗						杯						皿			
	C		E		分類不明		A		B		C		不明		A	
	口縁部	胴部	底部	底部	口縁部	口～底部	底部	底部	口～底部	口縁部	口～底部	口縁部	底部	口縁部	胴部	
個数	30	7	9	1	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	4

分類	皿										D						
	B		C-1				C-2				D		D-1				
	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部	
個数	12	7	2	4	20	10	14	1	1	3	27	6	7	3	3	1	6

分類	皿						E					不明				煮			瓶か煮	
	D-2		E			D		D-1		煮		瓶		瓶か煮		瓶		瓶か煮		
	口～底部	口縁部	底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	
個数	1	1	1	1	2	1	1	11	16	2	12	28	8	54	2					

分類	瓶		鋲		器種不明				合計	
			A	B						
	口縁部	底部	胴部	口縁部	底部	口縁部	底部	口縁部	底部	口縁部
個数	2	4	1	1	4	35	7	519		

第4表 白磁觀察一覧①

単位: cm

補綴番号 図版番号	器種	部位	分類	口径 高さ 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第40図 図版12 1	瓶	口縁部	A	- -	口縁部が白透明釉の直縁。口縁部はやや大きめの凸縁となる。口縁部直下に隔壁縫が見られる。器表面に小孔が多く確認できる。素地は灰白色で堅緻。釉薬はやや黄色味を帯びた失透釉が施されている。	L1-98 梶北	L1-98 梶北層
第40図 図版12 2	瓶	口縁部	B-1	- -	口縁部が僅かに外反する直縁。口縁部外面下端が僅かに弧形となる。口縁部直下に隔壁縫が見られる。器表面に小孔が多く確認できる。素地は灰白色で堅緻。釉薬はやや黄色味を帯びた失透釉が施されている。	表 K6-98	K6-98 表様
第40図 図版12 3	瓶	口縁部	B-2	15.8 -	無文外反縁。器表面には僅かに小孔が確認できる。素地は灰白色で堅緻。黒色の粗粒子が混入する。釉薬は透明釉が施されている。内外面共に堅緻・貴人を見られる。	L1 東西トレンド 石門町 反張 右側切口内	L1 石列?
第40図 図版12 4	瓶	底部	B-2	- 5.8	横付で丸く水滴に形成され、台面に内縁が付ける。台面下端は斜めに形成される。外底面に隔壁縫が見られる。器表面に小孔は多く確認でき、また次第に火を受けたと想われる痕跡が見られる。釉薬は透明釉が施される。素地は灰白色で堅緻。	SW17	12-96 SW17
第40図 図版12 5	瓶	底部	C-1	- 3.9	高台形状の瓶の底。高台表面がやや角形状となる。器表面に小孔が多く確認でき、また次第に火を受けたと想われる痕跡が見られる。釉薬は透明釉が施される。素地は灰白色で堅緻。	表 K6-98	K6-98 表様
第40図 図版12 6	瓶	底部	C-1	- 6.7	やや丸い底。瓶足は平面に切削され、高台下端は斜めに形成される。外底面中央部に隔壁縫が見られる。内底面に隔壁縫が見られる。素地は灰白色で堅緻。	I 黒基層の北側 翼石右の土壌	II 黒基層 北側翼状 I 層
第40図 図版12 7	瓶	口～底部	C-2	14.2 6.3 5.2	薄手の無文外反縁。底辺は低く内傾。胴部は大きくなれる。器表面は大小の孔が見られる。釉薬は失透釉が施される。素地は灰白色で堅緻。	表 L6-96	L6-96 表様
第40図 図版12 8	瓶	口～底部	D	14.1 4.2 5.6	直口縁の直口瓶。胴部から口縁部にかけて丸く膨らむ。高台は低く、成形はややひだり。高台内部の内縁は丸く、丸じり。口印が内底面中央部に押されている。透明釉が口縁部から胴下部まで施される。底辺はやや厚く、素地はややくつ麩質に近い。	SW13 内下部	1D-96 SW13
第40図 図版12 9	瓶	口～底部	D	13.2 4.5 5.8	薄手の直口瓶。胴部から口縁部にかけて丸く膨らむ。高台は低く、成形はややひだり。高台内部の内縁は丸く、外縁には輪轉成形跡が確認できる。内底面は低い位置を有して窪みが見られる。透明釉が口縁部から胴下部まで施される。底辺はやや厚く、素地はやや粗く脚質に近い。	表 L2-95	L2-95 表様
第40図 図版12 10	瓶	口縁部	E	-	直口縁で口唇部内側が僅かに厚厚する。素地は灰白色で堅緻。釉薬は灰白色の透明釉が施される。	II 黒基層	II 黒基層
第40図 図版12 11	小瓶	底部	E	- 4.2	小瓶の高台部。高台径は小さく、高台内部の内縁は丸く。外底面から外面脚部にかけて堅緻となる。釉薬は灰白色の透明釉が施される。發付から外底面には特に堅緻となる。	石道遺構内 X100～Y10	K6-99 SW4
第40図 図版12 12	瓶	口縁部	分類不明	13.6 -	口縁部が穴字印に折れる外反縁。胴部はあまり膨らみがない。内底面に器表に小孔が確認できる。釉薬は灰白色の透明釉で素地は堅緻である。	表 L4-101	L4-101 表様
第40図 図版12 13	杯	口縁部	C	7.7 -	小杯。口縁部は大きな外反縁。胴部は膨らみを有する。外底面共に器表に小孔が確認できる。釉薬は灰白色の透明釉で素地は堅緻である。	第IV基層 石化粘土下部試掘	試掘1
第40図 図版12 14	杯 (八角杯)	口～底部	A	7.8 3.5 3.1	八角杯。高台はハハ字の字形に開き、成形が難く、腰部が折れる。外面には相い貴人が見られる。釉薬は灰白色の透明釉が施される。外底面下部から外底面にかけて堅緻となる。素地は灰白色で堅緻。	SW17	12-96 SW17
第40図 図版12 15	小瓶	口～底部	A	7.5 3.0～3.1 3.3	小瓶。口縁部は直口し、胴部は膨らみを有して高台へ移行する。高台の成形はややひだり。小瓶の外観的に火を受けているためか、釉薬が自然色で変色している。素地は灰白色でやや粗く、底辺は脚質に近い。	不明	出土地不明
第40図 図版12 16	杯 (八角杯)	底部	A	- - 4.1	八角杯。高台はハハ字の字形に開き、成形が難く、腰部が折れる。外面には相い貴人が見れているためか、釉薬は自然色で変色している。素地は灰白色でやや粗く、底辺は脚質に近い。	表 L3-103	L3-103 表土
第40図 図版12 17	小瓶	口～底部	B	9.5 4.5 3.5	製作の小瓶。胴下部で折れ、口縁部にかけて丸く膨らむ。全体的に火受けで外反する。全体的に火受けで口縁部は僅かに厚厚する。外底面は丸く、底辺は丸く、底辺は堅緻である。外底面は「大明成化款」の字款が外底面にあって窺われる。釉薬は透明釉で、發付のみ堅緻となる。	不明	出土地不明
第40図 図版12 18	杯	底部	B	- - 4.7	小杯。高台は丸く胴部は直口で、腰部は膨らみを有して高台へ移行する。全体的に火受けで外反する。釉薬は透明釉で、發付から高台外部にかけて堅緻となる。素地は白色で堅緻である。	SW2遺構内	K2-97 SW2
第40図 図版12 19	杯	口縁部	C	7.3 - -	小杯。全体的に薄手で口縁部は外反する。釉薬は透明釉で、素地は白色かつ堅地である。	かわや	かわや
第40図 図版12 20	杯	口～底部	分類不明	4.2 3.0 1.8	口縁部が外反する製作の小杯。外底脚部に周縁で窪みが残る。釉薬は失透釉が施される。全周部に窪みが残る。釉薬は白色で堅緻である。	表 K1-100	K1-100 表土
第40図 図版12 21	瓶	口縁部	分類不明	15.5 -	口折れの瓶か。口縁部が穴字印に外反する縁となる。釉薬は失透釉が施される。素地は白色で堅緻である。内底面共に器表に小孔が確認できる。素地は灰白色の透明釉が施される。瓶下部は堅緻となる。瓶表面に小孔が僅かに見られる。	表 K6-98	K6-98 表様
第40図 図版12 22	瓶	口縁部	C	- -	外反縁で、口縁部外側下面に3条×1回の圈縫が見られる。釉薬は失透釉が施される。素地は白で黑色粗粒子が僅かに見られる。	表 L1-96	L1-96 表様
第41図 図版13 23	瓶	口縁部	A	14.8 - -	口縁部が外反する製作の小杯。外底脚部に周縁で窪みが残る。釉薬は失透釉が施される。素地は灰白色で堅緻である。瓶表面に小孔が僅かに見られる。	K4レシード 東京本町レシード 第2階一フロア層	K3-97・98 II層
第41図 図版13 24	瓶	口縁部	B	15.1 -	腰折れの外反縁。口縁部は厚厚する。素地は灰白色で堅緻。釉薬は灰白色の透明釉が施される。	第2階基層 前面	II階基層 前面

注: “-”: 計測不可

第4表 白磁觀察一覧(2)

単位: cm

補助番号 団体番号	器種	部位	分類	口径 高さ 底径	観察事項	出土土地	新出土地
第41回 団体13 25	瓶	口～底部	C-1	12.4 2.6 5.1	無文多灰施。高台は低く、帯付は水平に切られる。釉薬は淡灰白色の透明釉が施される。内底面は内側に斜め剥離が見られる。外表面は脚下部から外底面にかけて露胎となる。素地は灰白色で堅硬。	不明	出土土地不明
第41回 団体13 26	瓶	胴部	B	- -	織折れの罫で、内外の器表面に黒色の斑点と気泡が見られる。これが次的に火を受けたと思われる。釉薬は被熱により変色しており、素地は灰白色で堅硬。	表 K1-95	K1-95 表探
第41回 団体13 27	瓶	底部	B	- 8.5	高台は低く、低い。高台ゆきの内側には内側には底付は水平となる。内底面には隔壁縫合条が1条見られ、脚内側部には底付焼成後着る。内底面に粗い貫入が見られる。釉薬は淡灰白色の透明白色の透明白色がなされ、素地は灰白色で堅硬。	第2 L0-95	L0-95 II層
第41回 団体13 28	瓶	底部	C-1	- 4.6	高台は低く、低い。底付は水平で底辺となる。隔壁は大きめ(奥)、口縁部へ移行する。内外の器表面には孔が多く見られる。釉薬は淡灰白色の透明白色の透明白色が施され、外表面は高台下部から内底面にかけて、内面は内底面が粗いの目録がなされる。釉薬は脚下部で外表面に輪削れが見られる。素地は灰白色で堅硬。	SW3のヒゾ 遺構の櫻上	K2-96 SW3
第41回 団体13 29	瓶	口～底部	C-1	7.6 1.6 3.4	高台は低く、低い。底付は水平で底辺となる。隔壁は大きめ(奥)、口縁部へ移行する。内底面には重ね焼きの跡の目録や側が施し粗く見られる。器付は水平で形成されない。内外の器表面には孔が多く見られる。透明釉を全般的に施す。釉薬は淡灰白色で堅硬。	K3-96 SW3 第3号石組遺構	K2-96 SW3
第41回 団体13 30	瓶	口～底部	C-2	9.9 2.3 3.8	薄手の透明白色。高台は低く、くつりは低い。釉薬は透明釉を施す。外脚下部から外底面にかけて露胎となる。口縁の一部が次方に火を受けたためか、黒色に変色している。内外の器表面には孔が多く見られる。素地は灰白色で堅硬。	SW13 遺構	L0-96 SW13
第41回 団体13 31	瓶	口縁部	C-2	9.4 - -	口縁部が玉錠状に肥厚する外反差。釉薬は透明釉を施す。外脚下部から外底面にかけて露胎となる。口縁の一部が次方に火を受けたためか、黒色に変色している。釉薬を全般的に施す。釉薬は淡灰白色で堅硬。	SW2遺構内	K2-97 SW2
第41回 団体13 32	瓶	底部	C-2	- 3.7	基底直底の高台となる。釉薬は淡灰白色の透明白色を施す。内底面は円形に輪削れがされ、外表面は脚下部から外底面にかけて露胎となる。素地は灰白色でやや軟い。	第74柱穴	L1-93 柱穴24
第41回 団体13 33	瓶	口～底部	D-1	13.8 2.9 7.0	外反の強度の強さと全体的の薄手である。高台は低く内底付となる。外表面には孔が多く見られ、内底面は粗砂粒が施されている。釉薬は失透明釉を施す。高台下部から発付にかけて露胎となる。素地は灰白色で堅硬。	SW13 内下部	L0-96 SW13
第41回 団体13 34	瓶	口～底部	D-2	19.1 3.3 12.3	無文の透明白色。高台は低く、高台内は浅い。釉薬は失透明釉が施され、高台下部から発付にかけて内外表面に粗い貫入が見られる。	不明	出土土地不明
第41回 団体13 35	瓶	口縁部	E	- - -	薄手の外反差。口縁部は誇張となり、桜花を象る。釉薬は淡灰白色の透明白色が施され、素地は灰白色で堅硬。	SW2遺構内	K2-97 SW2
第41回 団体13 36	瓶	胴部	E	- - -	大崩れの罫。表面には劃花が全体的に見られる。釉薬は透明釉が施される。内外表面に粗砂粒や隔壁などが留着している。素地は淡灰白色でやや軟い。	L1-97 美土	L1-97 美土
第41回 団体13 37	瓶	口縁部	-	7.1 - -	短頸の小瓶。口縁部は横方向に突出し、断面形は三角形となる。肩はやや膨らむ。釉薬は淡灰白色の透明白色を施す。口部のひみ露胎となる。内面は輪削れ成形痕が明顯に見られる。素地は灰白色で堅硬。	第2 R2-96	R2-96 II層
第41回 団体13 38	瓶	脚内面	胴部	- -	やや厚手の透明白色の脚下部。脚内は淡青色の透明白色で、外表面下部部に露胎となる。釉薬は淡灰白色でやや軟い。内外の器表面には孔が見られる。	表 L2-96	L2-96 表探
第41回 団体13 39	瓶	底部	-	- 7.1	厚手の透明白色。高台は低く、高台内は外脚付は浅い。發付は水平に切られるが、幅は一定ではない。素地は淡灰白色で堅硬。釉薬は透明白色を外表面全体に、内面は脚下部まで施す。外表面は2次的に火を受けたためか裏形輪全体に煤が付着する。	第2 K4-98	K4-98 II層
第41回 団体13 40	瓶	底部	-	- 5.6	小窓の透明白色。全体的に薄手で、脚内下部が立ち上がり(?)は浅である。支脚は外表面下部に如意頭形の輪削れの透明白色を模した輪削れである。高台下部に脚内側部が留着する。釉薬は淡灰白色の透明白色を施す。高台下部から発付にかけて露胎となる。素地は灰白色で堅硬。	復元 L1-2-99	L1-2-99 復元層
第41回 団体13 41	透種不明	底部	-	- -	薄形の小特徴。施釉は2層で器表面は凹凸が見られる。釉薬は失透明釉で、底面は露胎となる。素地は灰白色でやや軟い。	表 K5	表探

注:-1:計測不可

第5表 青花集計表

分類	碗				小碗				皿			
	口～底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部	底部
個数	26	408	388	151	2	47	25	45	17	42	22	53

分類	小皿			小杯			盤			瓶			
	口～底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部
個数	1	3	3	2	3	2	1	4	2	4	4	1	8

分類	瓶			梅瓶			壺			小壺			
	頸部	胴部	底部	蓋	口～底部	胴部	蓋	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部
個数	3	125	12	1	1	1	1	1	159	6	1	3	9

分類	瓶小壺	水注			酒会壺			器種不明			合計
		頸部	注口	胴部	底部	口～底部	蓋	口縁部	胴部	底部	
個数	215	1	3	1	1	1	2	1	58	1	1871

第6表 青花觀察一覧①

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第42図 図版14 1	碗	口～底	14.8 6.7 5.8	景德鎮窯系。小野B1群。外面一波涛文、見込み一捺り花文。口縁端部に鉄銷。外面下半、砂付着。	K3 96	K3-96 表採
第42図 図版14 2	碗	底	— 5.7	景德鎮窯系。小野B1群。外面・見込み一花枝文。	表土	表土
第42図 図版14 3	碗	口	12.4 — —	景德鎮窯系。小野B1群。外面一牡丹唐草文。	SW13 円下部	L0-96 SW13
第42図 図版14 4	碗	口	14.7 — —	景德鎮窯系。小野B1群。外面一波涛文。	表 L2 96	L2-96 表採
第42図 図版14 5	碗	口	13.3 — —	景德鎮窯系。小野B1群。	L4 99 表土	L4-99 表土
第42図 図版14 6	碗	口	14.4 — —	景德鎮窯系。小野B1群。外面一梵字文。	L1 98 撥乱	L1-98 撥乱層
第42図 図版14 7	碗	口	12.2 — —	景德鎮窯系。小野B1群。外面一唐草文。	K3 96 第3石組 遺構内	K2-96 SW3
第42図 図版14 8	碗	口	— — —	景德鎮窯系。小野B1群。輪花形。外面一花芯文。	表 K9 96	K9-96 表採
第42図 図版14 9	碗	口～底	15.2 6.9 5.4	景德鎮窯系。小野B1群。外面一鳥梅文、見込み一梅枝文。	SW13	L0-96 SW13
第42図 図版14 10	碗	口	19.3 — —	景德鎮窯系。小野B1群。外面一牡丹唐草文。内面一花菱文、唐草文。	SW13 L1 95 断割	L1-96 SW13断割
第42図 図版14 11	碗	口	13.6 — —	景德鎮窯系。小野B1群。外面一大振りな草花文。呉須がやや薄い。	表 L2 95	L2-95 表採
第42図 図版14 12	碗	口	15.0 — —	景德鎮窯系。沖繩C'類。跨縁口縁。	表 L1 97	L1-97 表採
第43図 図版15 13	碗	底	— — 5.7	景德鎮窯系。沖繩C'類。見込み一獅子文?。ハ字状高台。	SW13	L0-96 SW13
第43図 図版15 14	碗	口～底	14.3 6.2 5.2	景德鎮窯系。森B2群?。外面一鳳凰花文?、内面一花菱文、見込み一花芯文。外底字款方形不明。ベンシルドローイング。	表 K0 96	K0-96 表採
第43図 図版15 15	碗	口～底	15.2 — —	景德鎮窯系。森B2群?。外面一鳥雲文?、内面一花菱文。ダミ塗り。	SW13	L0-96 SW13
第43図 図版15 16	碗	口～底	11.7 6.25 5.4	景德鎮窯系。森B3群。外面一鳥文?、見込み一小ぶりな不明文。ダミ塗り、ベンシルドローイング。	SW13	L0-96 SW13
第43図 図版15 17	碗	口～底	9.2 4.8 4.3	景德鎮窯系。森B3群。外面一鳥文?、見込み一小ぶりな不明文。ベンシルドローイング、高台砂付着。	I期基壇の 北側石垣の覆土	II期基壇 北側翼状 I層
第43図 図版15 18	碗	口～底	10.2 5.5 5.0	景德鎮窯系。森B3群。外面一花鳥風水文?、見込み一花芯文。ダミ塗り、ベンシルドローイング。外底字款、二重圈線内「上品佳器?」。	SW13	L0-96 SW13
第43図 図版15 19	碗	口～底	12.2 6.4 5.6	景德鎮窯系。森B3群。外面一喜字文、見込み一廿文。ダミ塗り、ベンシルドローイング。	SW13	L0-96 SW13
第43図 図版15 20	碗	口	11.3 — —	景德鎮窯系。森B3群。ダミ塗り、ベンシルドローイング。	表 K0 96	K0-96 表採

注「-」:計測不可

第6表 青花觀察一覧(2)

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第43図 図版15 21	碗	口	10.8 — —	景德鎮窯系。森B3群。外面一花枝文。ベンシルドローイング。	表土	表土
第44図 図版16 22	碗	口	10.4 — —	景德鎮窯系。森B3群。外面一花枝文。ベンシルドローイング。	SW13	L0-96 SW13
第44図 図版16 23	碗	底	— — 5.6	景德鎮窯系。森B3群。ダミ塗り、ベンシルドローイング。外底二重圓線。	表土 K1 100	K1-100 表土
第44図 図版16 24	碗	口	11.6 — —	景德鎮窯系(清代)？直口。外面一花芯文。	北側壁面	II期基壇 北側翼状？
第44図 図版16 25	碗	口～ 底	9.85 5.4 4.0	景德鎮窯系(清代)。直口。外面一梵字文、三角文。ダミ塗り、ベンシルドローイング。外底二重圓線。	SW13	L0-96 SW13
第44図 図版16 26	碗	口～ 底	12.2 6.2 5.2	景德鎮窯系。小野B1群か。見込み一鳥文。	南踊り場 V期基壇	VII期基壇 南踊り場
第44図 図版16 27	碗	底	— — —	景德鎮窯系。小野C群。外面一蕉葉文。	不明	出土地不明
第44図 図版16 28	碗	口～ 底	12.8 6.35 5.8	景德鎮窯系。小野D群。胎土灰白色。外面一粗雑なアラベスク風文。	SW13	L0-96 SW13
第44図 図版16 29	碗	口	14.0 — —	景德鎮窯系。小野D群。外面一アラベスク風文。	SW13 下部	L0-96 SW13
第44図 図版16 30	碗	口	12.0 — —	景德鎮窯系。小野D群。呉須が滲む。	SW13	L0-96 SW13
第44図 図版16 31	碗	底	— — 5.8	景德鎮窯系。小野D群。見込み一やや粗雑な十字文。	K3 96 3号石組遺構内 SW3遺構	K2-96 SW3
第44図 図版16 32	碗	口～ 底	12.4 6.05 5.4	景德鎮窯系(清代)？直口。外面・見込み一太目のタッチによる不明文。	表 K0 96	K0-96 表採
第44図 図版16 33	碗	口～ 底	— 7.1 —	景德鎮窯系。直口。外面・見込み一縁取りによる草花文。薄い呉須、ダミ塗り、ベンシルドローイング。	SW13	L0-96 SW13
第44図 図版16 34	碗	口	14.3 — —	景德鎮窯系。直口。外面一満文、牡丹唐草文。	IV期基壇 化粧石前ブール	SP3
第44図 図版16 35	碗	口	13.4 — —	景德鎮窯系。直口。外面一雷文、唐草文。内面一牡丹唐草文。織細なタッチのダミ塗り、ベンシルドローイング。	SW1 遺構内	K2-98・99 SW1
第44図 図版16 36	碗	口	12.3 — —	景德鎮窯系。直口。外面一魚文。ダミ塗り、ベンシルドローイング。	SW13 下部	L0-96 SW13
第44図 図版16 37	碗	口	13.8 — —	景德鎮窯系。直口。ベンシルドローイング。	SW13	L0-96 SW13
第45図 図版17 38	碗	口	12.5 — —	景德鎮窯系。直口。ダミ塗り、ベンシルドローイング。	SW13 下部	L0-96 SW13
第45図 図版17 39	碗	口	10.8 — —	景德鎮窯系。直口。ダミ塗り、ベンシルドローイング。	L0 96 石組 遺構内下部	L0-96 SW13
第45図 図版17 40	碗	口	12.5 — —	景德鎮窯系(清代)？直口。ダミ塗り。	北側壁面	II期基壇 北側翼状？

注「-」:計測不可

第6表 青花觀察一覧③

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第45図 図版17 41	碗	口	12.2 — —	景德鎮窯系(清代)?直口。ベンシルドローイング。	北壁面	II期基壇 北側翼状?
第45図 図版17 42	小碗	口	8.0 — —	景德鎮窯系。直口。筒形。ダミ塗り、ベンシルドローイング。	表 K10 92	K10-92 表採
第45図 図版17 43	小碗	口	8.0 — —	景德鎮窯系。直口。ベンシルドローイング。	表	表採
第45図 図版17 44	碗	口	12.7 — —	景德鎮窯系。直口。ダミ塗り。	表 L2 100	L2-100 表採
第45図 図版17 45	碗	底	— — 6.8	景德鎮窯系。小野B1群。外面・見込み一やや小ぶりの牡丹唐草文。	第II期基壇	II期基壇
第45図 図版17 46	碗	底	— — 5.8	景德鎮窯系。小野C群。外面一満文、見込み一花芯文。	不明	出土地不明
第45図 図版17 47	碗	底	— — 5.0	景德鎮窯系。小野B1群か。高台内傾。見込み一蔓状の草花文?	表土	表土
第45図 図版17 48	碗	底	— — 5.8	景德鎮窯系。小野B1群か。外面一雷文、見込み一ヲマ式蓮弁内に明字?	L1 97 石列覆土	L1-97 石列?
第45図 図版17 49	碗	底	— — 6.2	景德鎮窯系。見込み一草文?	表 L1 96	L1-96 表採
第45図 図版17 50	碗	底	— — 4.6	景德鎮窯系。外面・見込み一草文?	L1 98	L1-98 表採
第45図 図版17 51	碗	底	— — 4.0	景德鎮窯系。外面・見込み一草文?	表 L1 97	L1-97 表採
第45図 図版17 52	碗	底	— — 4.3	景德鎮窯系。見込み一篆文。	表 L1 97	L1-97 表採
第45図 図版17 53	碗	底	— — 7.0	景德鎮窯系。見込み一花芯文。	L1 97 表土	L1-97 表土
第45図 図版17 54	碗	底	— — 5.4	漳州窯系?外底無釉。胎土橙色。見込み一太く粗雑な花芯文。	不明	出土地不明
第45図 図版17 55	碗	底	— — 5.8	景德鎮窯系。外面一ヲマ式蓮弁文、見込み一不明。	表 K9 98	K9-98 表採
第46図 図版18 56	碗	底	— — 4.6	景德鎮窯系。小野E群。外面一草花文、見込み一花弁文?	K3 96 3号 石組遺構内 SW3遺構	K2-96 SW3
第46図 図版18 57	碗	底	— —	景德鎮窯系。小野B1群?	第2 K9 92	K9-92 II層
第46図 図版18 58	碗	底	— — 6.6	景德鎮窯系。小野B1群?	表 L0 95	L0-95 表採
第46図 図版18 59	碗	口~ 底	11.6 7.05~7.1 5.4	景德鎮窯系。鈎縁口縁。いわゆる芙蓉手タイプ。被然痕。見込みがL1-52より広めと思われる。	第2 K4 K5 98 99	K4-5-98-99 II層
第46図 図版18 60	碗	口	13.2 — —	景德鎮窯系。鈎縁口縁。いわゆる芙蓉手タイプ。外面一風景文。文様はL1-59より写実的。	SW13	L0-96 SW13

注「-」:計測不可

第6表 青花觀察一覧④

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第46図 図版18 61	碗	口	12.1 — —	景德鎮窯系。跨縁口縁。いわゆる芙蓉手タイプ。被熱痕。	第2 K4 98	K4-98 II層
第46図 図版18 62	碗	底	— — 4.9	景德鎮窯系。跨縁口縁、いわゆる芙蓉手タイプと思われる。被熱痕。	K5 97 撤乱層	K5-97 撤乱層
第46図 図版18 63	碗	口	— — —	景德鎮窯系。森B3群? 外面一大振りの菊花文か。ダミ塗り。	L5 98 撤乱	L5-98 撤乱層
第46図 図版18 64	碗	底	— — 6.1	景德鎮窯系。森B3群?、63と同タイプか。見込み一大振りの菊花文。字款双魚文。ダミ塗り。	表 L3 101	L3-101 表採
第46図 図版18 65	碗	口～ 底	16.4 6.15 8.2	漳州窯系。胎土一灰白色、釉一灰色、底部より上半。外面一粗雑な横帯文。	表 K0 96	K0-96 表採
第46図 図版18 66	碗	口～ 底	15.0 5.7 6.3	漳州窯系。胎土一灰色、釉一灰白色、底部より上半。外面一粗雑な横帯文。	表 K0 96	K0-96 表採
第46図 図版18 67	碗	口～ 底	15.6 6.5 7.7	漳州窯系。胎土一黄灰色、釉一灰白色、底部より上半。外面一粗雑な横帯文。	表 K2 96	K2-96 表採
第46図 図版18 68	碗	口～ 底	14.4 5.0 5.8	景德鎮窯系。直口。小野C群。外面・見込み一連点文。	表 L2 95	L2-95 表採
第46図 図版18 69	碗	口～ 底	15.1 6.1 6.8	漳州窯系。胎土一橙色、釉一灰色。圓線のみ。	表 L2 96	L2-96 表採
第46図 図版18 70	碗	口	15.4 — —	漳州窯系。胎土一灰白色、釉一灰色。	L0 97 石組埋土 褐色砂層	L0-97 SW15 (褐色砂層)
第46図 図版18 71	碗	口	14.6 — —	漳州窯系。胎土一灰白色、釉一灰色。外面一粗雑な横帯文。	SW13	L0-96 SW13
第46図 図版18 72	碗	口	12.4 — —	漳州窯系。胎土一灰白色、釉一灰色。外面一粗雑な横帯文。	SW13	L0-96 SW13
第46図 図版18 73	碗	口	13.0 — —	漳州窯系。胎土一灰白色、釉一灰色。外面一不明な十字状文。	井戸状石組遺構 外 東側グリット	L0-97 SW13?
第47図 図版19 74	碗	底	— — 6.7	漳州窯系。胎土一灰白色、釉一灰色、底部より上半。外面一粗雑な横帯文。被熱痕?	表 K0 96	K0-96 表採
第47図 図版19 75	碗	底	— — 6.6	漳州窯系。胎土一灰白色、釉一灰色、底部より上半。	SW13 円下部	L0-96 SW13
第47図 図版19 76	碗	口	14.3 — —	福建・廣東系。端反。釉一底部より上半。口縁端部に鉄鏽。	第2 K4 98	K4-98 II層
第47図 図版19 77	碗	口	— — —	福建・廣東系。端反。	K96 柱内 石組遺構内	K2-96 SW9
第47図 図版19 78	碗	口	— — —	福建・廣東系。直口。釉一底部より上半。外面一大振りの花卉文。	L1 95(大)土坑内	L1-95 土坑1
第47図 図版19 79	碗	口	— — —	福建・廣東系。直口。	中央爆弾跡 K6 96 撤乱	爆弾跡②
第47図 図版19 80	碗	底	— — 8.8	福建・廣東系。見込み一蛇の目釉剥ぎ。	K4 97 撤乱	K4-97 撤乱層

注「-」:計測不可

第6表 青花觀察一覧(5)

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第47図 図版19 81	碗	口～底	12.8 5.7 6.6	徳化窯系。端反。外面一草花文。	表 K0 96	K0-96 表採
第47図 図版19 82	碗	口～底	12.4 5.45 6.5	景德鎮窯系(清代)？端反。外面一鳳凰？龍？文。	表 K0 95	K0-95 表採
第47図 図版19 83	碗	口～底	15.3 6.1～6.3 7.7	徳化窯系。見込み一蛇の目釉剥ぎ。外面一円文。	表 K0 95	K0-95 表採
第47図 図版19 84	碗	口～底	14.2 6.2 5.9	漳州窯系。見込み一蛇の目釉剥ぎ。外面一不明文。	表 L2 96	L2-96 表採
第47図 図版19 85	碗	口	11.7 — —	徳化窯系。端反。外面一草花文。	かわや跡の 覆土中	かわや跡 I層
第47図 図版19 86	碗	口	— — —	景德鎮窯系(清代)。端反。外面一雲？文。	表 L0 98	L0-98 表採
第47図 図版19 87	碗	口	— —	福建・廣東系？銹縁口縁。胎土一灰白色、釉一灰色。	表 L6 96	L6-96 表採
第47図 図版19 88	碗	口	— —	景德鎮窯系(清代)。直口。外面一円文。	表 L4 100	L4-100 表採
第47図 図版19 89	碗	底	— —	徳化窯系。端反。外面一蛸唐草文。	表 L2 98	L2-98 表採
第47図 図版19 90	碗	底	— — 6.6	徳化窯系。	L5 98 グリッド カワヤ跡の覆土	L5-98 かわや跡 覆土
第47図 図版19 91	碗	底	— — 7.0	徳化窯系。見込み一蛇の目釉剥ぎ。高台砂付着。	表 L4 100	L4-100 表採
第47図 図版19 92	碗	口	— —	景德鎮窯系(清代)。端反。外面一牡丹唐草文。	L1 98	L1-98 表採
第47図 図版19 93	碗	底	— — 4.6	景德鎮窯系。ベンシルドローイング。	第2 K6 97	K6-97 II層
第47図 図版19 94	碗	底	— — 6.2	徳化窯系。字款「王」？	北側壁面	II期基壇 北側翼状？
第47図 図版19 95	碗	底	— — 6.1	景德鎮窯系。	L1 98	L1-98 表採
第48図 図版20 96	小碗	口～底	9.4 5.1 3.9	景德鎮窯系(明末清初?)。外面一風景人物文。字款「大明成化年製」。	出土地不明	出土地不明
第48図 図版20 97	小碗	口	6.6 — —	景德鎮窯系。外面一雷文。	K9 K10 100 第2基壇 正面礫層中	K9-10-100 II期基壇 正面礫層中
第48図 図版20 98	碗	底	— — 4.6	景德鎮窯系。	L0 96 石組 遺構内下部	L0-96 SW13
第48図 図版20 99	碗	底	— — 4.0	景德鎮窯系。小野B1群？底部凹む。	K3 96 第3 石組遺構内	K2-96 SW3
第48図 図版20 100	碗	底	— — 4.4	景德鎮窯系。字款「嘉靖？」。	第2層 L1 99	L1-99 II層

注「-」:計測不可

第6表 青花観察一覧⑥

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第48図 図版20 101	碗	底	— — —	景德鎮窯系。字款「宜(徳)年(製)?」。ベンシルドローイング。ダミ塗り。	表土 L0 101	L0-101 表土
第48図 図版20 102	小杯	底	— — 3.5	景德鎮窯系?字款不明。	表 L3 104	L3-104 表採
第48図 図版20 103	碗	口	6.6 — —	景德鎮窯系(清代)?直口。	L1 98	L1-98 表採
第48図 図版20 104	碗	底	— — —	景德鎮窯系(清代)?	表土 L2 104	L2-104 表土
第48図 図版20 105	碗	底	— — —	景德鎮窯系。ベンシルドローイング。ダミ塗り。	第2 K9 94	K9-94 II層
第48図 図版20 106	碗	口	— — —	景德鎮窯系(清代)?端反。外面一満文。	第2 K5 92	K5-92 II層
第48図 図版20 107	碗	口	— — —	景德鎮窯系。	表土 L1 100	L1-100 表土
第48図 図版20 108	小碗	口~ 底	9.6 5.0~5.1 5.1	景德鎮窯系(清代?)。ダミ塗り。	北側壁面	II期基壇 北側翼状?
第48図 図版20 109	小碗	底	— — 5.2	景德鎮窯系(清代)。ダミ塗り。	K3 96 石組 第2号造構内 SW3	K2-96 SW3
第48図 図版20 110	小碗	口	— — —	景德鎮窯系(清代)。ダミ塗り。	表 L4 100	L4-100 表採
第48図 図版20 111	小碗	口	6.6 — —	漳州窯系?胎土・釉一灰色。外面一花卉文。	表土 L1 101	L1-101 表土
第48図 図版20 112	小碗	口	— — —	景德鎮窯系(清代)。外面一梵字文。	表 L3 96	L3-96 表採
第48図 図版20 113	小碗	底	— — 4.5	景德鎮窯系(清代)。外面一梵字文。字款不明4字。	表 L2 101	L2-101 表採
第48図 図版20 114	小碗	底	— — 3.5	景德鎮窯系(清代?)。外面・見込みー不明文。字款不明4字。	表 L5 98	L5-98 表採
第49図 図版21 115	小碗	底	— — 5.7	景德鎮窯系(清代?)。外面・見込みー不明文。字款不明1字。	北側壁面	II期基壇 北側翼状?
第49図 図版21 116	小碗	口	9.8 — —	景德鎮窯系(清代?)。ベンシルドローイング。	表土 L1 104	L1-104 表土
第49図 図版21 117	小碗	底	— — 4.5	景德鎮窯系(清代?)。ベンシルドローイング。字款不明。	南側	VII期基壇 南篠り場 階段
第49図 図版21 118	小碗	底	— — 3.9	景德鎮窯系(清代?)。外面一蔓草文。字款不明1字。	南側	VII期基壇 南篠り場 階段
第49図 図版21 119	小碗	口	— — —	景德鎮窯系(清代?)。ベンシルドローイング。	L1 98	L1-98 表採
第49図 図版21 120	小碗	底	— — 4.2	景德鎮窯系(清代?)。見込みー草文。字款不明1字。	表 K0 101	K0-101 表採

注「-」:計測不可

第6表 青花觀察一覧(7)

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第49図 図版21 121	小碗	底	— 4.0	景德鎮窯系(清代?)。見込み一草文。字款不明1字。	出土地不明	出土地不明
第49図 図版21 122	小碗	底	— 5.5	徳化窯系。見込み一3点(?)。字款不明1字。	北側壁面	II期基壇 北側翼状?
第49図 図版21 123	小碗	底	— 4.1	景德鎮窯系(清代)。ダミ塗り。	表土 L4 100	L4-100 表土
第49図 図版21 124	小碗	底	— 2.7	景德鎮窯系。見込み一花枝文。	表 L3 103	L3-103 表採
第49図 図版21 125	小杯	底	— 2.1	景德鎮窯系(清代)。字款不明1字。	SW13 下部	L0-96 SW13
第49図 図版21 126	小杯	口	— —	景德鎮窯系(清代)。口縁端部鉄锈。	表 L1 102	L1-102 表採
第49図 図版21 127	小杯	底	— 1.6	景德鎮窯系(清代)。外面一連点文。	表 K2 104	K2-104 表採
第49図 図版21 128	小杯	口～ 底	4.4 2.55 2.0	景德鎮窯系(清代)。口縁端部鉄锈。高台砂付着。	表 L1 93	L1-93 表採
第49図 図版21 129	皿	口～ 底	11.9 2.6 7.0	景德鎮窯系。小野B1群。外面一唐草文。見込み一玉取獅子文。	SW13	L0-96 SW13
第49図 図版21 130	皿	口～ 底	13.3 2.4 8.2	景德鎮窯系。小野E群。内面一花菱文。	第2 K10 96	K10-96 II層
第49図 図版21 131	皿	口～ 底	15.6 2.85 9.3	景德鎮窯系。小野B1群。見込み一太いタッチの不明文。	K1 99 試掘 第1層瓦礫層	K1-99 SP2
第49図 図版21 132	皿	底	— 7.2	景德鎮窯系。小野B1群。外面一唐草文。見込み一波涛文。	II期基壇 東方のミゾ	III期基壇
第49図 図版21 133	皿	底	— 8.2	景德鎮窯系。小野B1群。見込み一草花文。	表 K5 98	K5-98 表採
第49図 図版21 134	皿	底	— 11.1	景德鎮窯系。小野B1群。見込み一王取獅子文? 舟須滲む。	第3基壇と③横石垣(の間)	南踊り場 断割①
第49図 図版21 135	皿	口～ 底	9.8 2.4 2.6	景德鎮窯系。小野C群。見込み一菊花文。	表 L0 100	L0-100 表採
第50図 図版22 136	皿	口～ 底	9.6 2.2 5.4	景德鎮窯系。小野C群。	S60	出土地不明
第50図 図版22 137	皿	口	10.1 — —	景德鎮窯系。小野C群。	表土	表土
第50図 図版22 138	皿	底	— 3.4	景德鎮窯系。小野C群。	表 K10 101	K10-101 表採
第50図 図版22 139	皿	口～ 底	8.0 1.7 5.2	景德鎮窯系。小野C群。通例より小ぶりだが、底部は広い。内面に花弁状の凹みあり。底部砂付着。	不明	出土地不明
第50図 図版22 140	皿	底	— 5.9	景德鎮窯系。小野C群。通例よりも大振りで、外反口縁の可能性。	IV期基壇	VI期基壇

注「-」:計測不可

第6表 青花觀察一覽⑧

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第50回 図版22 141	皿	口～底	11.8 3.5 5.5	景德鎮窯系。上田A-III類。外面一退化した唐草文、見込み一寿字文。底部に砂付着。	K3 96 3号 石組造構内 SW3造構	K2-96 SW3
第50回 図版22 142	皿	口～底	10.4 2.4 5.7	景德鎮窯系。上田A-III類。内面一花菱文、見込み一草花文。	SW13	L0-96 SW13
第50回 図版22 143	皿	口	10.7 — —	景德鎮窯系。上田A-III類。内面一退化した花菱文。	L0 98 第1コーラル	L0-98 I層 (コーラル層)
第50回 図版22 144	皿	口～底	13.7 3.2～3.3 7.3	景德鎮窯系。上田A-III類。輪花形。内面一花弁文2段、見込み一風景文。	K0 96	K0-96 表採
第50回 図版22 145	皿	口	24.95 — —	漳州窯系？森F群粗製。胎土一橙色、釉一灰色。内面一粗雑な波涛文。	表 K4 96	K4-96 表採
第50回 図版22 146	皿	底	— — 10.6	景德鎮窯系。森F群。見込み一花鳥岩文。高台砂付着。	SW17	L2-96 SW17
第51回 図版23 147	皿	底	— — 5.8	景德鎮窯系。ダミ塗り。	北側壁面	II期基壇 北側翼状？
第51回 図版23 148	皿	底	— — 9.9	景德鎮窯系。ベンシルドローイング。ダミ塗り。	北側壁面	II期基壇 北側翼状？
第51回 図版23 149	皿	口	— —	徳化窯系。	表 L2 96	L2-96 表採
第51回 図版23 150	皿	底	— — 7.2	景德鎮窯系。ベンシルドローイング。ダミ塗り。高台砂付着。	表 L2 96	L2-96 表採
第51回 図版23 151	皿	底	— — 6.1	景德鎮窯系。ベンシルドローイング。ダミ塗り。字款不明1字。疊付鉄錆。	表 K0 95	K0-95 表採
第51回 図版23 152	皿	底	— — 11.0	景德鎮窯系(清代)？ダミ塗り。高台砂付着。	表 K0 96	K0-96 表採
第51回 図版23 153	皿	口～底	15.9 2.5 9.0	景德鎮窯系(清代)？疊付鉄錆。	表土 L4 104	L4-104 表土
第51回 図版23 154	皿	口	15.4 — —	徳化窯系。	表 L5 98	L5-98 表採
第51回 図版23 155	小皿	底	— — 5.45	徳化窯系。外底無軸。	L1 98 撥乱	L1-98 撥乱層
第51回 図版23 156	小皿	口	22.8 — —	景德鎮窯系(清代)？被熱痕。	S60	出土地不明
第51回 図版23 157	盤	口	— — —	景德鎮窯系。いわゆる跨皿。口縁一溝文。外面一花弁状の凹み。	石灰岩 K8 100	III期基壇
第51回 図版23 158	瓶	底	— — 3.7	景德鎮窯系。高台が六角もしくは八角。被熱痕。	第2 K2 96	K2-96 II層
第51回 図版23 159	鉢	口	— — —	福建・廣東系。	第2 K2 96	K2-96 II層
第51回 図版23 160	鉢	底	— — 12.6	福建・廣東系。見込み蛇の目釉剥ぎ。	北側壁面	II期基壇 北側翼状？

注「-」:計測不可

第6表 青花觀察一覧⑨

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第51図 図版23 161	小壺	口	5.15 — —	景德鎮窯系。外面一やや粗雑な牡丹唐草文。	表 L2 95	L2-95 表採
第51図 図版23 162	梅瓶	胴	— — —	景德鎮窯系。	K1 102 踊り場断面	南踊り場 断割④
第51図 図版23 163	瓶	口	6.0 — —	景德鎮窯系。玉壺春瓶。	表 L4 101	L4-101 表採
第51図 図版23 164	瓶	口	5.4 — —	景德鎮窯系。玉壺春瓶。	第2 K10 95	K10-95 II層
第51図 図版23 165	小皿	口	— — —	景德鎮窯系。唐草文から元様式の可能性。ベタ底状の皿か。	SW13 上部	L0-96 SW13 上
第51図 図版23 166	瓶	頸	— — —	景德鎮窯系。玉壺春瓶。頸部—蕉葉文、胴部—ラマ式蓮弁文。	第2層 90-100	II層
第52図 図版24 167	瓶	頸	— — —	景德鎮窯系。玉壺春瓶。頸部—花菱文。	SW2 K3 96	K2-97 SW2
第52図 図版24 168	瓶	頸	— — —	景德鎮窯系。玉壺春瓶。	SW13 円下部	L0-96 SW13
第52図 図版24 169	瓶	胴	— — —	景德鎮窯系。瓢形。	表土 L6 92	L6-92 表土
第52図 図版24 170	瓶	底	— — 6.9	景德鎮窯系。玉壺春瓶。胴部—牡丹唐草文、満文。	SW13	L0-96 SW13
第52図 図版24 171	瓶	底	— — 6.2	景德鎮窯系(清代) ?	L1 98 撥乱	L1-98 撥乱層
第52図 図版24 172	瓶	底	— — 5.0	徳化窯系?	K1 96 石組遺構内	K1-96 SW9
第52図 図版24 173	瓶	底	— — 5.4	景德鎮窯系。外底無釉。	表 L2 95	L2-95 表採
第52図 図版24 174	水注	注口	— — —	景德鎮窯系。急須形か?被熱痕。	第2 K6 75	II層
第52図 図版24 175	水注	胴	— — —	景德鎮窯系。胴部—牡丹唐草文。	第I層 コーラル層 94 K9 K10	K9-10-94 I層 (コーラル層)
第52図 図版24 176	水注	底	— — 8.7	景德鎮窯系。胴部一窓の表現に花枝文。外底砂付着。	K3 96 3号 石組遺構内 SW遺構	K2-96 SW3
第52図 図版24 177	鉢	口	— — —	景德鎮窯系。外面一波濤文。	表土 L1 102	L1-102 表土
第52図 図版24 178	酒会壺	蓋	底 25.4 器高 9.5 符 17.0 搬み 5.0	景德鎮窯系。牡丹唐草文。	I期基壇の畦	II期基壇
第52図 図版24 179	酒会壺	口～底	19.8 32.85 18.7	景德鎮窯系。口縁の唐草文から元様式の可能性あり。	I期基壇の畦	II期基壇
第53図 図版25 180	梅瓶	蓋	底 8.8 器高 7.5 搬み 2.2	景德鎮窯系。唐草文。	不明	出土地不明
第53図 図版25 181	梅瓶	口～底	5.2 32.9 11.8	景德鎮窯系。人物風景文、ラマ式蓮弁文。	不明	出土地不明

注「-」:計測不可

第7表 褐釉陶器集計表

分類	大形壺				中形壺		小形壺		水注		急須		鉢		合計
	口縁部	胴部～把手	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	口縁部	底部	口縁部	底部	口縁部	底部	
個数	251	5	10431	184	1	2	1	1	1	5	1	1	10883		

第8表 褐釉陶器観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第54図 図版26 1	大形壺	口	21.2 — —	沖縄分類5類。平口縁。無耳壺。	東方トレンチ ブレハブ	出土地不明
第54図 図版26 2	大形壺	底	— — 14.5	沖縄分類5類。上げ底。無耳壺。	L0 97 石組 埋土褐色砂層	L0-97 SW15 (褐色砂層)
第54図 図版26 3	大形壺	底	— — 12.4	沖縄分類3類。上げ底。四耳壺。	L1 東西 トレントレンチ	L1 石列?
第54図 図版26 4	大形壺	口	13.5 — —	沖縄分類4類。口縁玉縁状。四耳壺。	表 L6 102	L6-102 表探
第54図 図版26 5	大形壺	胴	— — —	沖縄分類3類。外面-線彫りで文様。四耳壺。	L0 東西 トレントレンチ東隅より 2番灰石列内	石列2・3内
第54図 図版26 6	大形壺	胴	— — —	外面-叩き痕残る。無耳壺。	L3 96 石灰岩碑	L3-96 石積?
第55図 図版27 7	水注	口	13.2 — —	口縁部断面「T」字状。外面-把手の基部あり。	K2 99 SW1 石組遺構内	K2-98・99 SW1
第55図 図版27 8	大形壺	口	18.8 — —	沖縄分類1類。口縁部玉縁状。長頸多耳壺。	中央駐断面トレ 2層東隅	中央観察畦② II層
第55図 図版27 9	大形壺	口	10.3 — —	沖縄分類3類。口縁部玉縁状。四耳壺。	L1 東西 トレントレンチ	L1 石列?
第55図 図版27 10	大形壺	口	11.8 — —	沖縄分類6類。口縁部断面「T」字状。無耳壺。	SW13	L0-96 SW13
第55図 図版27 11	大形壺	口	12.6 — —	沖縄分類3類。口縁部玉縁状。四耳壺。	L1 東西 トレントレンチ断割	中央観察畦②
第55図 図版27 12	大形壺	胴	— — —	沖縄分類1類。幅広の縦耳が付く。長頸多耳壺。	SW17	L2-96 SW17
第55図 図版27 13	大形壺	底	— — 10.8	沖縄分類3類。上げ底。四耳壺。	K5 95・96 第2層 黒褐色土層	K5-95・96 II層 (黒褐色土層)
第55図 図版27 14	大形壺	底	— — 10.5	沖縄分類3類。上げ底。四耳壺。	中央観察畦 第1層最下層	中央観察畦① IV層 (暗褐色土層)
第55図 図版27 15	大形壺	胴	— — —	沖縄分類1類。外面-龍文貼り付け。長頸多耳壺。	L0 94 下層 断割 第3層	L0-94 III層
第55図 図版27 16	中形壺	口	10.0 — —	薄胎施釉陶器。口縁玉縁状。大海茶入か。	L1 東西 トレントレンチ断割	中央観察畦②
第55図 図版27 17	小形壺	底	— — 2.5	薄胎施釉陶器。肩衝茶入か。	表 L1 100	L1-100 表探

注「—」:計測不可

第9表 無釉陶器集計表

分類	鉢			急須		合計
	口～底部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	
個数	1	6	4	2	1	14

第10表 無釉陶器観察一覧

単位: cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第55図 図版27 18	急須	胴	— — —	外面-棒状把手貼り付け。	L0 94 下層 断削 第3層	L0-94 III層
第55図 図版27 19	急須	口	— — —	口縁部を内側に折り返して成形。中形壺の可能性あり。	K1 100 南石段の 躰り場断削	南躰り場 断削②
第55図 図版27 20	鉢	口～底	16.0 6.5 7.6	口縁部外面玉縁状。底部は縁辺が広がる。	表 L2 96	L2-96 表採
第55図 図版27 21	鉢	口	35.2 — —	直口口縁。口唇部に蓋受けの段。	表 K6 95	K6-95 表採

注 「—」: 計測不可

第11表 その他の中国産陶磁器・土器集計表①(色絵)

分類	碗			小碗		皿			小皿		盤		器種不明	合計
	口縁部	胴部	底部	口縁部	口～底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	底部	口縁部	胴部		
個数	7	5	3	2	1	1	1	3	1	2	1	1		28

第11表 その他の中国産陶磁器・土器集計表②(泉州窯系磁器)

分類	皿			合計
	A		B	
	口縁部	胴部	口縁部	
個数	3	1	2	6

第11表 その他の中国産陶磁器・土器集計表③(瑠璃釉)

分類	碗			小碗			皿		小杯			壺
	口～底部	口縁部	底部	口縁部	胴部	底部	底部	口縁部	底部	胴部	底部	
個数	2	4	3	7	2	2	2	1	2	5	1	

分類	瓶			器種不明		合計
	口縁部	胴部	底部	胴部	底部	
個数	1	15	1	7	1	56

第11表 その他の中国産陶磁器・土器集計表④(褐釉染付)

分類	碗			小碗		小杯			合計
	口～底部	口縁部	底部	口縁部	底部	口縁部	腹部	底部	
個数	2	6	2	3	1	3	2	2	21

第11表 その他の中国産陶磁器・土器集計表⑤(青磁染付)

分類	碗	小碗		合計
	底部	口～底部	口縁部	
個数	2	1	2	5

第11表 その他の中国産陶磁器・土器集計表⑥(天目)

分類	碗				合計
	口～底部	口縁部	胸部	底部	
個数	4	98	201	41	344

第11表 その他の中国産陶磁器・土器集計表⑦(三彩)

分類	水注			盤		合計	
	口縁部	胴部	把手	底部	胴部		
個数	1	4	4	1	3	1	14

第11表 その他の中国産陶磁器・土器集計表⑧(緑釉)

分類	皿	瓶	器種不明	合計
	口縁部	胴部	胴部	
個数	1	1	2	4

第11表 その他の中国産陶磁器・土器集計表⑨(銅綠釉)

分類	壺				合計
	口縁部	胸部	底部	蓋	
個数	1	5	1	6	13

第11表 その他の中国産陶磁器・土器集計表⑩(翡翠釉)

分類	壺	瓶	香炉		蓋	器種不明	合計
	胸部	胸部	胸部	底部	撮み	胸部	
個数	2	1	1	2	1	1	8

第11表 その他の中国産陶磁器・土器集計表⑪(鉄絵)

分類	壺
	胸部
合計	5

第11表 その他の中国産陶磁器・土器集計表⑫(土器)

分類	板状製品			合計	
	蓋				
	口縁部	胴部	不明		
個数	149	136	3	288	

第11表 その他の中国産陶磁器・土器集計表⑬(法花)

分類	蓋
	胴部
合計	1

第11表 その他の中国産陶磁器・土器集計表⑭(黒釉磁器)

分類	皿
	口縁部
合計	1

第12表 その他の中国産陶磁器・土器観察一覧①

単位:cm

掲番号 図版番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第56図 図版28 1	色絵	碗	口	11.8 — —	内・外面-上絵付けによる唐草文。	表 K0 96	K0-96 表採
第56図 図版28 2	色絵	碗	底	— — 4.6	外面・見込み-上絵付けによる花唐草文。	表土 K0 96	K0-96 表土
第56図 図版28 3	色絵	碗	口	— — —	内・外面-上絵付けによる不明文様。	K0 K1 100 第2基壇 正面縫層中	K9-10-100 II期基壇 正面縫層中
第56図 図版28 4	色絵	碗	口	— — —	外面-上絵付けによる不明文様。	表 K3-96	K3-96 表採
第56図 図版28 5	色絵	碗	胴	— — —	外面-上絵付けによる花文。	石灰岩 K8-100	III期基壇
第56図 図版28 6	色絵	碗	口	11.0 — —	外面-上絵付けによる草花文・動物文か。	表土 L1-102	L1-102 表土
第56図 図版28 7	色絵	碗	底	— — 6.1	外面-上絵付けによる蓮弁文+花唐草文。	表土 L1-102	L1-102 表土
第56図 図版28 8	色絵	碗	口	11.2 — —	外面-上絵付けによる花文。	表土 K10-101	K10-101 表土
第56図 図版28 9	色絵	碗	胴	— — —	外面-上絵付けによる斜格子文。	表 L0-94	L0-94 表採
第56図 図版28 10	色絵	碗	底	— — —	外面-線刻による不明文様。	表土 L4-100	L4-100 表土
第56図 図版28 11	色絵	小碗	口	8.0 — —	外面-上絵付けによる不明文様。口唇部釉剥ぎ。	S60	出土地不明
第56図 図版28 12	色絵	皿	口～底	14.4 3.4 8.1	外面・見込み-上絵付けによる花唐草文。	表土 L1-98	L1-98 表土
第56図 図版28 13	色絵	皿	底	— — —	外面・見込み-染付けと上絵付けによる文様。	L1 98 拡乱	L1-98 搅乱層
第56図 図版28 14	色絵	盤	口	24.0 — —	内面-上絵付けによる文様。	K8-99	K8-99 表採
第56図 図版28 15	色絵	小皿	底	— — 4.2	見込み-蛇の目釉剥ぎ。腰折れ。	かわや覆土	かわや跡 I層
第56図 図版28 16	色絵	小皿	口	— — —	内面-上絵付けによる不明文様。口唇部釉剥ぎ。	表土 L4-100	L4-100 表土
第56図 図版28 17	泉州磁器	皿	口	— — —	A類端反口線。灰オリーブ色釉を内面～外面胴上部に施釉。	SW17	L2-96 SW17
第56図 図版28 18	泉州磁器	皿	口	14.2 — —	B類内彎口線。灰オリーブ色釉を内面～外面胴上部に施釉。	SW1構構内	K2-98-99 SW1
第56図 図版28 19	瑠璃釉	碗	口～底	12.6 5.6 5.5	外面に瑠璃色釉、見込み・外底を透明釉で掛け分ける。	不明	出土地不明
第56図 図版28 20	瑠璃釉	碗	口～底	12.6 5.5 5.0	外面に瑠璃色釉、見込み・外底を透明釉で掛け分ける。見込みに二重圈線+魚文。	表 K1 94	K1-94 表採
第57図 図版29 21	瑠璃釉	碗	底	— — —	外面に瑠璃色釉、見込み・外底を透明釉で掛け分ける。腰折れ。	L1 98 搅乱	L1-98 搅乱層

注「-」:計測不可

第12表 その他の中国産陶磁器・土器観察一覧(②)

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第57図 図版29 22	瑠璃釉	小碗	口	9.6 — —	外面に瑠璃色釉、内面を透明釉で掛け分ける。端反口縁。	L1 98	L1-98 表探
第57図 図版29 23	瑠璃釉	小碗	底	— — 3.7	外面に瑠璃色釉、見込み・外底を透明釉で掛け分ける。外底-銘款。	表 L0 97	L0-97 表探
第57図 図版29 24	瑠璃釉	小碗	口	— — —	外面に瑠璃色釉、内面を透明釉で掛け分ける。口唇部釉剥ぎ。	表土 L2 100	L2-100 表土
第57図 図版29 25	瑠璃釉	小碗	底	— — 4.5	外面～外底に瑠璃色釉、見込みを透明釉で掛け分ける。	表 L1 101	L1-101 表探
第57図 図版29 26	瑠璃釉	小杯	口	3.9 — —	外面に瑠璃色釉、内面を透明釉で掛け分ける。	表 K0-100	K0-100 表探
第57図 図版29 27	瑠璃釉	小杯	底	— — 2.0	外面～外底に瑠璃色釉、見込みを透明釉で掛け分ける。外底に砂付着。	南側 試掘1	試掘1
第57図 図版29 28	瑠璃釉	碗	底	— — —	見込み、外面に瑠璃色釉、外底を透明釉で掛け分ける。豊付釉剥ぎ。	第2 K4 93	K4-93 II層
第57図 図版29 29	瑠璃釉	瓶	胴	— — —	外面に瑠璃色釉、内面を透明釉で掛け分ける。	L1 98 捜乱	L1-98 捜乱層
第57図 図版29 30	瑠璃釉	瓶	胴	— — —	外面に瑠璃色釉、内面を透明釉で掛け分ける。	L1 98 捜乱	L1-98 捜乱層
第57図 図版29 31	瑠璃釉	碗	底	— — 4.6	外面に瑠璃色釉、見込み・外底を透明釉で掛け分ける。豊付釉剥ぎ。	L4 99 表土	L4-99 表土
第57図 図版29 32	瑠璃釉	壺	底	— — 17.7	外面腰部まで瑠璃色釉を施す。平底。	第2 K2 94	K2-94 II層
第57図 図版29 33	褐色染付	小碗	口	— — —	外面に褐色釉、内面に透明釉を掛け分ける。外面-草花文。	第2 K4 98	K4-98 II層
第57図 図版29 34	褐色染付	小碗	底	— — 5.2	外面に褐色釉、内面、外底に透明釉を掛け分ける。外面-草花文。外底-二重圏線。	表 K0 96	K0-96 表探
第57図 図版29 35	褐色染付	小杯	口	— — —	外面に褐色釉、内面に透明釉を掛け分ける。内面-二重圏線。	表 L4 101	L4-101 表探
第57図 図版29 36	褐色染付	小杯	口	— — —	外面に褐色釉、内面に透明釉を掛け分ける。外面-草花文。	不明	出土地不明
第57図 図版29 37	褐色染付	小杯	底	— — 4.0	外面に褐色釉、内面、外底に透明釉を掛け分ける。外底-山水文。外底-二重圏線内に銘款。	表 L0-101	L0-101 表探
第57図 図版29 38	青磁染付	小碗	口～ 底	9.9 4.9 3.7	外面に青磁釉、内面、外底に透明釉を掛け分ける。見込み-捺花文、外底-銘款。	南側	VII期基壇 南踊り場 階段
第57図 図版29 39	天目	碗	口	10.9 — —	森本朝子分類VII類。「く」字状口縁。	L0 97 石組 埋土褐色砂層	L0-97 SW15 (褐色砂層)
第57図 図版29 40	天目	碗	口～ 底	12.2 6.0 4.8	森本朝子分類VII類。「く」字状口縁。	II期基壇	II期基壇
第57図 図版29 41	天目	碗	口～ 底	11.4 5.6 3.8	森本朝子分類VII類。「く」字状口縁。	表 L6 99	L6-99 表探
第57図 図版29 42	天目	碗	口	11.7 — —	森本朝子分類VII類。直口口縁。	第2 L0 95	L0-95 II層

注「-」:計測不可

第12表 その他の中国産陶磁器・土器観察一覧(③)

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第57図 図版29 43	天目	碗	底	— — 5.3	森本朝子分類IX類。外底露胎。	第1号 SW3 石組構内	K2-96 SW3
第58図 図版30 44	三彩	水注	胴	— —	外面-白化粧後に緑釉+黄釉、鳥文?線刻。	SW13 内下部	L0-96 SW13
第58図 図版30 45	三彩	水注	胴	— —	外面-白化粧後に緑釉+黄釉、胴部に貼付。	表 L4 101	L4-101 表採
第58図 図版30 46	三彩	水注	把手	—	外面-白化粧後に緑釉。把手か	表 L6 96	L6-96 表採
第58図 図版30 47	三彩	水注	底	— —	外面-白化粧後に緑釉。	表 L1 93	L1-93 表採
第58図 図版30 48	三彩	水注	口	4.4 — —	外面-緑釉+黄釉、蓮弁文+草花文か。肩部に把手。	I期 首正 L0 97	I期基壇
第58図 図版30 49	三彩	盤	底	— —	外面-白化粧後に緑釉+黄釉、草花文線刻。	表 L6 96	L6-96 表採
第58図 図版30 50	緑釉	皿	口	— —	内・外面-白化粧後に緑釉。	表 L3 97	L3-97 表採
第58図 図版30 51	緑釉	瓶	胴	— —	外面-緑釉、雲文+草花文十二重圓線を黒土で象徴。	表 L1 95	L1-95 表採
第58図 図版30 52	銅緑釉	壺	蓋	16.0 15.0	外面-銅緑釉、蓮弁文。酒会壺の蓋か。	L0 97 SW13 井戸状石組 東側グリッド外	L0-97 SW13
第58図 図版30 53	銅緑釉	壺	口	16.6 — —	外面-銅緑釉。口唇部釉剥ぎ。	L0 97 井戸状石組 遺構外 東側	L0-97 SW13
第58図 図版30 54	銅緑釉	壺	底	— —	高台際に圓線陽刻。	表 L5 91	L5-91 表採
第58図 図版30 55	翡翠釉	瓶	胴	— —	外面-白化粧後に翡翠釉、文様を黒土で象徴。	K10 98 石組構内	K10-98 SW12
第58図 図版30 56	翡翠釉	香炉	底	— 12.4	外面-白化粧後に翡翠釉。三足香炉。	不明	出土地不明
第58図 図版30 57	鉄繪	壺	胴	— —	外面-白化粧後に草花文。内面-褐色釉。酒会壺か。	IV期基壇 化粧石前 ブル遺構内	SP3
第58図 図版30 58	鉄繪	壺	胴	— —	外面-白化粧後に草花文。内面-褐色釉。酒会壺か。	IV期基壇 化粧石前 ブル遺構内	SP3
第58図 図版30 59	土器	板状 製品	口縁部	— —	円盤状の板状製品。褐釉陶器の蓋か。	第IV期基壇 化粧石下 の試掘	試掘1

注 「-」: 計測不可

第13表 タイ産陶磁器・土器集計表

分類	掲軸陶器											小壺	
	壺												
	A					B					分類不明		
	口縁部	胴～耳	耳	胴部	底部	口縁部	胴～耳	耳	胴部	底部	胴部	底部	
個数	106	7	4	1490	42	32	7	4	712	26	36	1	

分類	掲軸陶器		無輪陶器		鉄繪		半練土器				合計
	瓶		壺		瓶		壺			不明	
	胴部	底部	胴部	胴部	腹み～底	口縁部	腹み	胴部			
個数	7	5	1	1	3	35	7	8		2534	

第14表 タイ産陶磁器・土器観察一覧①

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第59図 図版31 1	楕軸	壺	口	19.7 — —	A類:シーサッチャナライ窯産。口縁断面「T」字状。	K9 K10 100 2期基壇 正面縫層中	K9-10-100 II期基壇 正面縫層中
第59図 図版31 2	楕軸	壺	口	22.1 — —	A類:シーサッチャナライ窯産。口縁断面「T」字状。	第2 K5 92	K5-92 II層
第59図 図版31 3	楕軸	壺	口	21.3 — —	A類:シーサッチャナライ窯産。口縁断面「T」字状。	プレハブ東方 トレンチ	出土地不明
第59図 図版31 4	楕軸	壺	口	17.4 — —	A類:シーサッチャナライ窯産。口縁断面「T」字状。	第IV期基壇 化粧石下試掘 南より2番目穴	試掘2
第59図 図版31 5	楕軸	壺	胴	— —	A類:シーサッチャナライ窯産。横耳付き。	東方トレンチ プレハブ	出土地不明
第59図 図版31 6	楕軸	壺	胴	— —	A類:シーサッチャナライ窯産。耳部分。	第3 L0 94 下層断層	L0-94 III層
第59図 図版31 7	楕軸	壺	口	18.9 — —	A類:シーサッチャナライ窯産。口縁断面玉縁状。	表 L2 96	L2-96 表採
第59図 図版31 8	楕軸	壺	口	18.0 — —	A類:シーサッチャナライ窯産。口縁断面玉縁状。	SW13 L1 95 断割	L1-96 SW13 断割
第59図 図版31 9	楕軸	壺	口	17.8 — —	A類:シーサッチャナライ窯産。口縁断面玉縁状。	IV期 北側翼状 石垣内	V期基壇
第59図 図版31 10	楕軸	壺	胴	— —	A類:シーサッチャナライ窯産。横耳付き。	IV期基壇 化粧石前ブル	SP3
第59図 図版31 11	楕軸	壺	胴	— —	横耳付き。	表 K10 102	K10-102 表採
第59図 図版31 12	楕軸	壺	底	— 25.9	B類:メナムノイ窯産。底部に砂目付着。	IV期基壇 化粧石前ブル 遺構内	SP3
第60図 図版32 13	楕軸	壺	底	— 25.8	B類:メナムノイ窯産。	I期基壇 の北側石垣裏 の覆土	II期基壇 北 側翼状 I層
第60図 図版32 14	楕軸	瓶	底	— 7.4	シーサッチャナライ窯産。楕軸を胴下部まで施釉。	SW13	L0-96 SW13
第60図 図版32 15	楕軸	瓶	底	— 8.5	シーサッチャナライ窯産。楕軸を胴下部まで施釉。	SW13内 下部	L0-96 SW13
第60図 図版32 16	楕軸	瓶	底	— 6.3	シーサッチャナライ窯産。	SW13内 下部	L0-96 SW13
第60図 図版32 17	楕軸	小壺	底	— 3.35	シーサッチャナライ窯産。楕軸を胴下部まで施釉。	表土 K2 102	K2-102 表土
第60図 図版32 18	無軸	壺	胴	— —	パンプーン窯産。外面に陽刻による文様。器壁厚 い。	第2 L2 92 下層断割 トレチ赤土	L2-92 II層
第60図 図版32 19	半鍊土器	蓋	撮~底	— 底 13.0	撮:宝珠形。	表 L5 96	L5-96 表採
第60図 図版32 20	半鍊土器	蓋	撮~底	— 底 13.4	撮:宝珠形。	表土 L1 98 搅乱層	L1-98 表土

注「-」:計測不可

第14表 タイ産陶磁器・土器観察一覧(2)

単位: cm

插図番号 図版番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第60図 図版32 21	半鍊土器	蓋	撮~底	— — 底 11.25	撮: 宝珠形。	L1 98 搅乱層	L1-98 搅乱層
第60図 図版32 22	半鍊土器	蓋	撮	— — —	撮: 乳房状。	第2 L0 96	L0-96 II層
第60図 図版32 23	半鍊土器	蓋	撮	— — —	撮: 乳房状。	K5 98 第2層 60-70	K5-98 II層
第60図 図版32 24	鉄絵	瓶	胴	— —	玉壺春瓶か。	SW13 内下部	L0-96 SW13

注「—」: 計測不可

第15表 ベトナム産陶磁器集計表

分類	青磁	青花						
	碗	碗			蓋		水注	
	口縁部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	胴部	底部
個数	1	3	1	1	1	1	1	1

分類	色絵		鉄絵		合計
	碗	蓋	水注	器種不明	
	口縁部	胴部	胴部	底部	
個数	3	1	2	1	18

第16表 ベトナム産陶磁器觀察一覧

単位:cm

插図番号 図版番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径	觀察事項		旧出土地	新出土地
					—	—		
第61図 図版33 25	青磁	碗	口	— — —	外面-錦蓮弁文。	—	表土 撥乱	撥乱
第61図 図版33 26	鉄絵	水注	胴	— — —	外面-鉄絵で動物文。	—	第2層 黒色土 混り赤土層 K6・97~99	K6~97~99 II層 (黒土混赤土層)
第61図 図版33 27	鉄絵	不明	底	— —	外面-圓線。置物の台座か。	—	第2 K6 98	K6~98 II層
第61図 図版33 28	青花	碗	口	17.8 — —	西村・西野分類断面扁平形トチンB-2 類。外面-呉須と鉄絵で文様。	石組 X100 Y110	—	K0~99 SW4
第61図 図版33 29	青花	碗	口	— — —	西村・西野分類断面扁平形トチンB-2 類。外面-呉須と鉄絵で文様。	—	L1 98	L1~98 表採
第61図 図版33 30	青花	碗	底	— — 6.8	西村・西野分類断面扁平形トチンB-2 類。外面-呉須と鉄絵で文様。	K2 95 No.3 石組遺構 SW3	—	K2~96 SW3
第61図 図版33 31	青花	水注	胴	— — —	外面-呉須で文様。型成形。龍形水柱 か。	—	第2 K6 94	K6~94 II層
第61図 図版33 32	青花	壺	口	2.75 — —	外面-呉須で蓮弁文。	—	表L2 95	L2~95 表採
第61図 図版33 33	色絵	壺	胴	— — —	外面-色絵で蓮弁文。	—	SW13	L0~96 SW13

注「—」:計測不可

第17表 朝鮮産陶磁器集計表

分類	青 磁								合計	
	碗		皿			碗か皿	瓶			
	口縁部	底部	口～底部	口縁部	底部	胸部	胸部	底部		
個数	23	2	1	7	1	28	1	1	66	

※ 第62図・図版34N&52(手塚氏報告資料)は集計に含まない。

第18表 朝鮮産陶磁器観察一覧

単位:cm

捕獲番号 図版番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第61図 図版33 34	青磁	碗	口	— — —	端反口縁。外面-白土象嵌で雷文。内面-白土象嵌で竹管文。	L1 東西トレンド 断割	中央観察畦②
第61図 図版33 35	青磁	碗	口	— — —	直口口縁。外面-白土象嵌。内面-白土象嵌で草文。	L0-94 下層 断割 3層	L0-94 III層
第61図 図版33 36	青磁	皿	口	24.4 — —	直口口縁。外面-白土象嵌で印花文。内面-白土と黒土の象嵌で鳥文か。見込み-白土象嵌で雷文+印花文。	SW17	L2-96 SW17
第61図 図版33 37	青磁	皿	口	26.2 — —	直口口縁。内外面-白土で象嵌。内面に雲文。	L0-94 下層 断割 3層	L0-94 III層
第61図 図版33 38	青磁	皿	口	25.0 — —	直口口縁。外面-白土で象嵌。内面-白土と黒土の象嵌で波文。	SW17	L2-96 SW17
第61図 図版33 39	青磁	皿	口	— — —	直口口縁。内外面-白土で象嵌。	SW17	L2-96 SW17
第61図 図版33 40	青磁	皿	口	— — —	直口口縁。外面-白土象嵌で波文と印花文。内面-白土象嵌で波文+竹管文。	L0-94 下層 断割 3層	L0-94 III層
第62図 図版34 41	青磁	皿	口	— — —	直口口縁。内外面-白土で象嵌。	SW13	L0-96 SW13
第62図 図版34 42	青磁	皿	口	— — —	直口口縁。内外面-白土で象嵌。	SW17	L2-96 SW17
第62図 図版34 43	青磁	皿	口～ 底	18.3 4.1 6.2	直口口縁。外面-白土象嵌で印花。見込み-白土象嵌で飛び跑。黒土の象嵌あり。	L1 東西 断割トレンド 第3コートラル	L1 中央観察畦?
第62図 図版34 44	青磁	碗か皿	胴	— — —	内外面-白土で象嵌。外面は雷文+波文か。	不明	出土地不明
第62図 図版34 45	青磁	碗か皿	胴	— — —	内外面-白土で象嵌。	L1 東西 断割トレンド 東隅最奥右列	L1 中央観察畦?
第62図 図版34 46	青磁	碗か皿	胴	— — —	内外面-白土で象嵌。内面は竹管文。	L0 東西トレンド 東隅最奥区	L0 石列1・2内
第62図 図版34 47	青磁	碗か皿	胴	— — —	内外面-白土で象嵌。内面は雲文。	SW17	L2-96 SW17
第62図 図版34 48	青磁	碗か皿	胴	— — —	外面-白土象嵌で蓮弁文。内面-白土象嵌で印花文。黒土の象嵌あり。	IV層 中央観察アゼ	中央観察畦① IV層 (暗褐色土層)
第62図 図版34 49	青磁	碗か皿	胴	— — —	内外面-白土で象嵌。	K6-7 94 第2層 赤土土層	K6-7-94 II層 (赤土層)
第62図 図版34 50	青磁	皿	底	— — 6.4	外面-白土で象嵌。見込み-白土象嵌で飛び跑。黒土の象嵌あり。	第3層	III層
第62図 図版34 51	青磁	碗	底	— — 6.3	外面-白土象嵌で蓮弁文。内面-白土象嵌で印花文。黒土の象嵌あり。	L0 94 下層断割 第3層	L0-94 III層
第62図 図版34 52	青磁	碗	底	— — 6.6	外面-見込み-白土象嵌で蓮弁文。黒土象嵌あり。手塚直樹氏報告資料。	首里城正殿前	出土地不明
第62図 図版34 53	青磁	瓶	底	— 10.85	外面-白土で象嵌。外底-砂目付着。	K9 98 表土	K9-98 表土
第62図 図版34 54	青磁	瓶	胴	— —	外面-白土象嵌で竹管文。	第3層	III層

注「-」:計測不可

第19表 本土產陶磁器集計表①(磁器)

分類	近世														
	染付														
	碗				小碗			皿			小杯		瓶		
	口～底部	口縫部	胴部	底部	口縫部	胴部	底部	口～底部	口縫部	胴部	底部	口縫部	底部		
個数	2	73	65	25	16	5	7	1	6	6	6	2	1	15	4

分類	近世												
	染付				青磁				色繪				
	蓋	袋物	器種不明	碗	瓶	碗	小碗	皿	瓶	蓋	器種不明	器種不明	胴部
		胴部	胴部	口縫部	底部	胴部	底部	胴部	口縫部		胴部		
個数	6	3	12	1	1	5	1	6	1	1	1	2	2

分類	近代												
	碗				小碗				皿				小皿
	口～底部	口縫部	胴部	底部	口～底部	口縫部	胴部	底部	口～底部	口縫部	胴部	底部	底部
	個数	12	302	156	139	52	383	273	169	23	85	40	94

分類	近代															
	小杯				鉢			瓶			急須			香炉		
	口～底部	口縫部	胴部	底部	口～底部	底部	口縫部	胴部	底部	口縫部	胴部	底部	口～底部	口縫部	胴部	底部
	個数	14	30	5	25	1	1	7	43	7	17	6	8	1	11	4

分類	近代															
	蓋						水滴	箋物				箋物				
	箋物				段重			箋物		箋物		箋物		箋物		
	箋	箋～底部	口～底部	胴部	底部	不明		口～底部	口縫部	胴部	底部	口～底部	口縫部	底部		
個数	6	4	2	2	19	8	24	1	11	2	14	2	2	3		

分類	近代							合計	
	磚子	火入	器種不明						
		底部	口～底部	口縫部	胴部	底部			
		53	1	3	30	82	12	2472	

第19表 本土産陶磁器集計表②(陶器)

分類	碗				碗?		小碗				皿				
	略完形	口～底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	口～底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部		
個数	4	4	40	38	6	1	2	20	12	33	13	10	10		
分類	小皿		大皿			盃				小盃		擂鉢			
	口縁部	底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	口縁部	胴部		
個数	2	2	1	6	2	1	6	53	1	2	2	6	3	2	
分類	急須				瓶				瓶か	鍋		蓋	袋物		
	口縁部	注口	胴部	底部	口縁部	頸部	胴部	底部	底部	口縁部			胴部		
個数	2	3	7	4	4	1	18	3	2	5			5	12	
分類	筒物			人形	人形?	器種不明				合計					
	口縁部	胴部	底部			口縁部	胴部	底部							
個数	3	5	1	2	1	8	146	19	533						

第20表 本土産陶磁器観察一覧①

単位:cm

捕獲番号 図版番号	種類	器種	部位	口径 高径 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第63図 図版35 1	磁器	碗	口～ 底部	15.7 7.4 6.4	染付。外面に雲龍文と圓線、内面に圓線、見込みに荒穢文。 外底面に鉛「...明...」。疊付は釉剥ぎ、砂付着。肥前産で『九州陶磁の編年』II～2期(1650～1660年代)の雲龍見込荒穢文碗。	第2 K10 96	K10-96 II層
第63図 図版35 2	磁器	碗	口～ 底部	14.85 5.9 6.5	染付。やや渋った色調。外面に雲龍文と圓線、内面に圓線、見込みに荒穢文。疊付は釉剥ぎ、砂付着。肥前産で『九州陶磁の編年』II～2期(1650～1660年代)の雲龍見込荒穢文碗。	SW2 遺構内	K2-97 SW2
第63図 図版35 3	磁器	碗	口	13.7 — —	染付。外面に雲龍文と圓線、内面に圓線、肥前産で『九州陶磁の編年』II～2期(1650～1660年代)の雲龍見込荒穢文碗。	表土 L1 101	L1-101 表土
第63図 図版35 4	磁器	碗	口	14.15 — —	染付。外面に簡略化された雲龍文と圓線、内面に圓線。肥前産で『九州陶磁の編年』III期(1650～1680年代)の雲龍見込荒穢文碗。	表 L1 100	L1-100 表探
第63図 図版35 5	磁器	碗	口	8.75 — —	染付。外面に圓線。肥前産で『九州陶磁の編年』II～III期(17世紀後半)とみられる。	表 L4 101	L4-101 表探
第63図 図版35 6	磁器	碗	口	15.0 — —	染付。やや渋った色調。外面に圓線と雲龍文か、内面に圓線。肥前産で『九州陶磁の編年』III期(1650～1680年代)とみられる。	石組遺構 X100 Y110	K9-99 SW4
第63図 図版35 7	磁器	碗	底部	— — 5.9	染付。やや渋った色調。外面に圓線、見込みに花文と圓線。疊付釉剥ぎ、砂付着。肥前産。	表 L4 100	L4-100 表探
第63図 図版35 8	磁器	碗	底部	— — 4.6	染付。やや渋った色調。見込みに不明文様と圓線。疊付釉剥ぎ、砂付着。肥前産。	表 L2 100	L2-100 表探
第63図 図版35 9	磁器	碗	底部	— — 4.6	染付。渋った色調。外面に圓線、見込みに二重圓線。疊付釉剥ぎ。肥前(波佐見)産。	表 L1 97	L1-97 表探
第63図 図版35 10	磁器	碗	口縁部	11.2 — —	染付。やや渋った色調、外反碗。外面に圓線と山水文。肥前産でIII期(1650～1680年代)か。	表 L1 100	L1-100 表探
第63図 図版35 11	磁器	碗	口縁部	13.6 — —	染付。外面に雲龍文。肥前(波佐見)産で『九州陶磁の編年』IV期(1650～1680年代)の雲龍見込荒穢文碗。	表土	表土
第63図 図版35 12	磁器	碗	底部	— — 4.3	染付。外面に不明文様と圓線。見込みは蛇の目状に釉剥ぎされ重ね焼き痕残る。外面疊付部も釉剥ぎ、砂付着。肥前産。	L6 95 表層	L6-95 表土
第63図 図版35 13	磁器	碗	口縁部	15.2 — —	染付。外面に二重圓線と草花文、内面に圓線。なお圓線は黒色強い。肥前産か。	第2 K10 96	K10-96 II層
第64図 図版36 14	磁器	小碗	口縁部	12.0 — —	染付。外面に四方攲文、内面○×文。肥前産で『九州陶磁の編年』IV期(1650年代)以降か。	第2 L1 98	L1-98 II層
第64図 図版36 15	磁器	小碗	口縁部	10.9 — —	染付の筒形碗。外面に雷文と圓線、縱方向の鋸状の削り。肥前産で『九州陶磁の編年』II～1期(1610～1629年代)。	表 K10 96	K10-96 表探
第64図 図版36 16	磁器	小碗	口縁部	9.2 — —	染付。口縁部屈曲の天目碗。外面に圓線と貯文、縱方向の鋸。肥前産で『九州陶磁の編年』II～1期(1610～1630年代)。	表土 L2 96	L2-96 表土
第64図 図版36 17	磁器	小碗	口縁部	7.1 — —	染付。筒形碗。外面に圓線と花文、内面に圓線。肥前産。	L1 98 搬乱	L1-98 搬乱層
第64図 図版36 18	磁器	小碗	口縁部	7.1 — —	染付。筒形碗。口唇部は平坦に整形。外面に圓線と山水文か。肥前産。	表土 K3 103	K3-103 表土
第64図 図版36 19	磁器	小碗	口縁部	— — —	染付。筒形碗。外面に山水文か。肥前産。	表 L6 96	L6-96 表探
第64図 図版36 20	磁器	小碗	口縁部	— — —	染付。天目碗。外面に圓線と山水文。肥前産で『九州陶磁の編年』III期(1650～1680年代)か。	不明	出土地不明

注 (—):計測不可

第20表 本土産陶磁器観察一覧(2)

単位:cm

捕団番号 図版番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第64図 図版36 21	磁器	碗	底部	— 4.2	染付。外面に圓線と草花文?、見込みに二重圓線、外底面に「大明」鉢。豊付軸剥ぎされ砂付着。肥前産で『九州陶磁の編年』Ⅱ～Ⅲ期(17世紀中～後葉)。	第2 K10 95	K10-95 II層
第64図 図版36 22	磁器	碗	底部	— 3.75	染付。外面に草花文と圓線、高台に二重圓線。豊付は軸剥ぎされ砂付着。肥前産。	第2 K5 98	K5-98 II層
第64図 図版36 23	磁器	小杯	口縁部	4.1 — —	染付。型造り。外面に唐草文の蓮弁文。被熟、肥前産で『九州陶磁の編年』Ⅲ期前葉(1750～1760年代)。	第2 K6 98	K6-98 II層
第64図 図版36 24	磁器	皿	口～ 底部	14.4 3.0 6.75	染付。内面に花文、見込みは二重圓線とコンシャク印判による見込み五瓣花文。蛇の目状に輪剥ぎ。肥前産で『九州陶磁の編年』IV期(1690～1780年代)。	L4 98	L4-98 表採
第64図 図版36 25	磁器	皿	底部	— 10.35	染付。外面に唐草文と圓線、内面に蛸唐草文、花菱文、壇状松竹梅文。蛇の目圓形高台、外底面に「…化…」鉢。肥前産で『九州陶磁の編年』V期(1780～1860年代)。	表土 K0 96	K0-96 表土
第64図 図版36 26	磁器	皿	底部	— 9.9	染付。内面に区画文。花菱文、太極文。蛇の目圓形高台。肥前産で『九州陶磁の編年』V期(1780～1860年代)。	K1 102 踊り場 断割	南踊り場 断割④
第64図 図版36 27	磁器	皿	底部	— 7.4	染付。内面に如意文と漬み地に白抜きで草花文(内面には180°逆転されて掲載)。肥前産で『九州陶磁の編年』V期(1780～1860年代)。	表 K10 101	K10-101 表採
第64図 図版36 28	磁器	小碗	口縁部	12.8 — —	染付。外面に丸状の唐草文、内面に丸状の蛸唐草文。肥前産で『九州陶磁の編年』V期(1690～1780年代)。	表土 L2 104	L2-104 表土
第64図 図版36 29	磁器	蓋	底部	— 底: 10.0	染付。外面に蛸唐草文、内面に四方津文とともに素描きで施文。肥前産で『九州陶磁の編年』V期(1780～1860年代)。	不明	出土地不明
第64図 図版36 30	磁器	蓋	底部	— 底: 9.55	染付。外面に唐草文、内面に四方津文と二重圓線を素描きで施文。肥前産で『九州陶磁の編年』IV～V期(1690～1860年代)。	表 L0 100	L0-100 表採
第64図 図版36 31	磁器	瓶	胴部	— —	染付。外面に草花文。外面のみ施釉。肥前産。残存部位不明のため、年代不明。	SW13円上部	L0-96 SW13上
第64図 図版36 32	磁器	瓶	底部	— 6.1	染付。外面に網目文と圓線。被熟により表面劣化。肥前産で『九州陶磁の編年』III期(1650～1680年代)。	第2 K5 98	K5-98 II層
第64図 図版36 33	磁器	瓶	底部	— 5.2	染付。外面に斜格子文?と圓線。内外面とも施釉し、外底部のみ軸剥ぎ。肥前産で『九州陶磁の編年』III期(1650～1680年代)以降。	表土 K0 96	K0-96 表土
第65図 図版37 34	磁器	瓶	胴部	— —	染付。油壺。外面に蛸唐草文。肥前産で『九州陶磁の編年』IV～V期(1780～1860年代)。	表土 L2 101 102	L2-101・102 表土
第65図 図版37 35	磁器	瓶	底部	— 5.6	青磁。外面のみ施釉。豊付軸剥ぎ。肥前産とみられるが年代不明。	K96 柱内 石組遺構内	K2-96 SW9
第65図 図版37 36	磁器	蓋	摘～ 底部	10.2 3.5 3.45	色絵磁器。摘部に「福」とみられる変形字紋、外面には「成化年製」とみられる変形字文「乾」左側「丁」年を組み合わせた変形字文、その他2つの不明文様。摘部豊部軸剥ぎ。肥前産なら18世紀後半から19世紀前半だが中国産の可能性もあり。	基礎石下 断割試掘 K0 100	南踊り場 断割②
第65図 図版37 37	磁器	蓋	摘	— 3.8	色絵磁器。摘部に不明のコンシャク印判。外面には青で如意頭文、黄で唐草文。摘部豊部軸剥ぎ。肥前産で『九州陶磁の編年』IV期(1690～1780年代)。	表 L2 104	L2-104 表採
第65図 図版37 38	磁器	瓶	口縁部	3.3 — —	色絵磁器。口唇部に黄の圓線、頸部に朱で唐草文、文様外は青緑で塗り埋め。肥前産で『九州陶磁の編年』IV期(1650～1680年代)以降。	K1 96 石組	K1-96 SW9
第65図 図版37 39	磁器	碗	口～ 底部	11.0 5.1 4.0	染付。外面竹文と圓線、内面は圓線とその中に崩れた唐草文。豊付軸剥ぎ。肥前産で近代。	L5 98 グリット カワヤの覆土	L5-98 かわや跡 覆土

注 「—」:計測不可

第20表 本土産陶磁器観察一覧③

単位:cm

拂岡番号 国版番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第65国 国版37 40	磁器	碗	口～ 底部	10.6 5.5 4.4	型紙刷り。外面に青海波文地、菱形窓内に十字草花文、圓線。内面に壇落文、圓線、環状松竹梅文。疊付軸刺ぎ。砥部産で近代。	L0 97 SW13 井戸伏石組 遺構外 東側グリット	L0-97 SW13
第65国 国版37 41	磁器	碗	口縁部	10.5 — —	型紙刷り。外面に点描文地、丸形窓内に「福」字文、花文。内面に壇落文、圓線。砥部産で近代。	かわや跡の 覆土中	かわや跡 I層
第65国 国版37 42	磁器	碗	口縁部	10.05 — —	型紙刷り。外面は点描文地、窓内に人物文。内面に壇落文、圓線。砥部産で近代。	かわや跡の 覆土中	かわや跡 I層
第65国 国版37 43	磁器	碗	口縁部	9.5 — —	型紙刷り。外面は草花文、内面に壇落文。砥部産で近代。	第IV～V期 基壇 北側翼状 石垣の覆土	V～VI期 基壇？
第65国 国版37 44	磁器	碗	底部	— 4.4	型紙刷り。外面は青海波文・微塵唐草文地、窓内に花文。外底部に圓線。疊付軸刺ぎ。肥前産で近代。	第IV～V期 基壇 北側翼状 石垣の覆土	V～VI期 基壇？
第65国 国版37 45	磁器	碗	底部	— 3.6	型紙刷り。外面は窓内に青海波文と草花丸文、蓮弁文。疊付軸刺ぎ。肥前産で近代。	第IV～V期 基壇 北側翼状 石垣の覆土	V～VI期 基壇？
第65国 国版37 46	磁器	小碗	口～ 底部	8.4 4.8 3.6	ゴム判。外面は花文、斜格子文、圓線。疊付軸刺ぎで砂付着。瀬戸・美濃産で近代。	第74柱穴	L1-93 柱穴74
第65国 国版37 47	磁器	小碗	口～ 底部	8.6 5.0 3.2	ゴム判。外面は草花文と素描きの圓線。内面は四方捺文。疊付軸刺ぎ。瀬戸・美濃産で近代。	L5 98 グリット カワヤの跡 の覆土	L5-98 かわや跡 覆土
第65国 国版37 48	磁器	小碗	口～ 底部	8.4 4.6 3.15	ゴム判。外面に草花文と圓線。疊付軸刺ぎされ砂付着。瀬戸・美濃産で近代。	かわや跡の 覆土	かわや跡 I層
第65国 国版37 49	磁器	小碗	口～ 底部	8.25 4.9 3.0	ゴム判。外面に色不明の菊花文と青色の不明文様。疊付軸刺ぎ。瀬戸・美濃産で近代。	第74柱穴	L1-93 柱穴74
第65国 国版37 50	磁器	小碗	口～ 底部	5.95 5.6 3.0	筒形碗。ゴム判。外面に米裂文と花文。疊付軸刺ぎ。瀬戸美濃 産で近代。	かわや跡の 覆土	かわや跡 I層
第65国 国版37 51	磁器	小杯	口～ 底部	4.6 1.9 2.0	白磁。口唇部は玉縁状。疊付軸刺ぎ。瀬戸美濃産で近代か。	表土 L3 103	L3-103 表土
第65国 国版37 52	磁器	急須	口縁部	5.75 — —	染付。外面に手描きで草花文。蓋受部軸刺ぎ。肥前産で近代。	K1 石組内	K1-96 SW9
第65国 国版37 53	磁器	急須	底部	— — 6.8	外面に手描きの圓線。基筒底で軸刺ぎ。近代の製品だが产地 不明。	L1 98	L1-98 表採
第65国 国版37 54	磁器	蓋	摘～ 底部	— 3.05 7.9	染付。外面に草花文と二重圓線。内面底部は軸刺ぎ。瀬戸美濃 産で近代。	第74柱穴	L1-93 柱穴74
第66国 国版38 55	磁器	皿	口～ 底部	13.8 2.65 7.8	型紙刷り。内面に樹木文。疊付軸刺ぎ。瀬戸美濃産で近代。	第IV～V期 基壇 北側翼状 石垣の覆土	V～VI期 基壇？
第66国 国版38 56	磁器	皿	口～ 底部	10.95 2.0 6.1	白磁。型造り。疊付軸刺ぎ。瀬戸美濃産で近代。	かわや跡の 覆土中	かわや跡 I層
第66国 国版38 57	磁器	皿	口～ 底部	11.15 2.12 6.5	型紙刷り。内面に水鳥文と枝葉文。口唇部に口説、疊付軸刺 ぎ。瀬戸美濃産で近代。	かわや跡の 覆土上	かわや跡 I層
第66国 国版38 58	磁器	皿	口～ 底部	27.45 3.9 16.4	大皿。型紙刷り。内面は松葉文地に窓絵竹・草花文、見込みは 輪花と環状松竹梅文。外面は圓線と崩れた唐草文が。疊付軸 刺ぎされ砂付着。瀬戸美濃産で近代。	かわや跡の 覆土中	かわや跡 I層
第66国 国版38 59	磁器	鉢	底部	— — 10.6	染付。外面は鳥と圓線、内面は二重圓線と見込み不明文様。 見込みは蛇の目状に軸刺ぎ、疊付軸刺ぎされ、ともに重ね焼き 痕残る。瀬戸美濃産か。近代。	L1 98 払乱	L1-98 撥乱層

注 [-]:計測不可

第20表 本土産陶磁器観察一覧(4)

単位:cm

種類	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
磁器	筒物	口～底部	11.55 7.75 8.5	型紙刷り。外面に山水図文と蓮弁文。豊付軸剥ぎ。瀬戸美濃產で近代。	表 L4 100	L4-100 表採
磁器	筒物	底部	— 10.1	型紙刷り。段重か。外面に不明文様。腰部軸剥ぎ。瀬戸美濃產で近代。	L1 98 撫乱	L1-98 撫乱層
磁器	火入	底部	— 10.5	型紙刷り。外面に散らし花文、蓮弁文、丸文。施釉は外面のみで底部露胎。豊付軸剥ぎし、その後施文。瀬戸美濃產で近代。	表 K0 95	K0-95 表採
磁器	瓶	底部	— 6.0	外面に手描きの線囲。施釉は外面のみで底部露胎。豊付軸剥ぎ。瀬戸美濃產で近代。	表 K1 102	K1-102 表採
陶器	碗	略完形	11.0 8.1 4.6	天目形。内面から外面胴上部まで鉄釉、胴下部は自然釉。底部露胎し、豊付軸剥ぎ。兜巾あり。肥前產で『九州陶器の編年』Ⅱ期(1610～1650年代)。	不明	出土地不明
陶器	碗	略完形	11.0 7.65 4.8	天目形。灰色緻密な胎土。内面から外面胴上部まで灰釉、胴下部は自然釉。豊付軸剥ぎ。肥前產で『九州陶器の編年』Ⅱ期(1610～1650年代)。	SW13	L0-96 SW13
陶器	碗	口～底部	14.35 7.2～7.45 5.5	半球形の碗。卵黄白色で軟質の胎土。灰釉を高台の一部を除き施釉。兜巾あり。被熱。肥前產で『九州陶器の編年』Ⅱ期(1610～1650年代)。	第II層 10/20 K4 98 + 2層 K5 99 20/30	K4-98 II層 + K5-99 II層
陶器	碗	口～底部	12.5 6.5 5.15	半球形の碗。灰色で緻密な胎土。緑釉が施釉され、豊付から外底面が露胎。	北側側面	Ⅱ期基壇 北側翼状？
陶器	碗	底部	12.5 5.9 4.0	半球形の碗。卵黄白色で軟質の胎土。灰釉を高台の一部を除き施釉。兜巾あり。被熱。肥前產で『九州陶器の編年』Ⅱ期(1610～1650年代)。	L0 96 右組遺構内 下部	L0-96 SW13
陶器	碗	口縁部	12.7 — —	半球形の碗。卵黄白色で軟質の胎土。透明釉が施釉されるが、部分的に貫入あり。	SW1遺構内	K2-98-99 SW1
陶器	碗	口縁部	13.4 — —	半球形の碗。灰白色で緻密な胎土。灰釉を施釉。	北側側面	Ⅱ期基壇 北側翼状？
陶器	碗	口～底部	9.7 5.6 3.7	半球形の小輪脚碗。卵黄白色で軟質の胎土。透明釉が施釉されるが、ほぼ全面に貫入あり。高台無釉。外面・見込みに金線で花唐草文を施文。関西系で18c頃。	表土 L2 98	L2-98 表土
陶器	碗	略完形	11.5 7.25 4.65	天目形の碗。灰色緻密な胎土。外底部を除き灰釉を施釉。豊付軸剥ぎ、砂付足。兜巾あり。肥前產で『九州陶器の編年』Ⅱ期(1610～1650年代)。	不明	出土地不明
陶器	碗	略完形	10.7 7.4～7.6 3.9	天目形の碗。灰色緻密な胎土。全面に灰釉を施釉。豊付軸剥ぎ、砂付足。兜巾あり。肥前產で『九州陶器の編年』Ⅱ期(1610～1651年代)。	SW17	L2-96 SW17
陶器	碗	胴部	— — —	天目形の碗。灰黒色で粗粒な胎土。内外面に刷毛目文。肥前產で『九州陶器の編年』Ⅱ期(1650～1690年代)。	表 L5 99	L5-99 表採
陶器	碗	口縁部	16.0 — —	半球形の碗。黄褐色で軟質な胎土。内外面とも灰釉を施釉。	SW13 円下部	L0-96 SW13
陶器	小碗	口縁部	9.8 — —	半球形の小碗。卵黄褐色で緻密な胎土。	表土 K0 100	K0-100 表土
陶器	小碗	底部	— — 3.6	半球形の小碗。卵黄褐色で緻密な胎土。内外面とも自然釉を施釉だが、全面に貫入あり。外底部露胎で兜巾あり。豊付軸剥ぎ。関西系か。	表 K0 95	K0-95 表採
陶器	小碗	口～底部	9.0 3.45 3.3	半球形の小碗。灰色で緻密な胎土。内外面とも灰釉を施釉。砂付足。	表 L4 102	L4-102 表採
陶器	小碗	口縁部	8.6 — —	半球形の小碗。黒灰色で緻密な胎土。内外面とも緑釉を施釉。象嵌で麗襪などを施文。肥前產で『九州陶器の編年』Ⅱ期(1650～1690年代)。	L5 99 撫乱	L5-99 撫乱層
陶器	小碗	底部	— — 4.15	半球形の小碗。灰色で緻密な胎土。内外面とも緑釉を施すが高台無釉。豊付軸剥ぎ、砂付足。巣縞～2条の豪縞。肥前產で『九州陶器の編年』Ⅱ期(1650～1690年代)。	L1 98 撫乱	L1-98 撫乱層

注「-」:計測不可

第20表 本土産陶磁器観察一覧(5)

単位:cm

拂岡番号 図版番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第67図 図版39 81	陶器	小碗	口縁部	11.45 — —	口縁部が船反りする小碗。黄灰色で緻密な胎土。内外面とも灰釉を施釉。	第3基壇と③'横 石垣の間	南端り場 断割①
第67図 図版39 82	陶器	小碗	底部	— — 4.1	筒形の小碗。黄灰色で緻密な胎土。内外面とも灰釉が施釉されるが、高台から外底面まで露胎。	L3.96 石灰岩牌内	L3-96 石積?
第68図 図版40 83	陶器	皿	底部	— — 4.05	灰色で緻密な胎土。内外面とも灰釉が施釉されるが、外面胴下部から底部まで露胎。兜形あり。肥前産で『九州陶器の編年』Ⅰ期(1580~1610年代)。	SW13 内下部	L0-96 SW13
第68図 図版40 84	陶器	皿	口縁部	13.6 — —	灰白色で緻密な胎土。内面に網目紋。外面上部は灰釉が施釉される。肥前産で『九州陶器の編年』Ⅲ期(1650~1690年代)。	表 L2 99	L2-99 表採
第68図 図版40 85	陶器	皿	底部	— — 4.35	灰白色で緻密な胎土。内面に網目紋で見込みが蛇の目状に釉剥離。外面上部は灰釉が施釉される。肥前産で『九州陶器の編年』Ⅲ期(1650~1691年代)。	表 L2 100	L2-100 表採
第68図 図版40 86	陶器	皿	底部	— — 4.5	色絵陶器皿。卵黄褐色で軟質な胎土。透明釉で高台を除く全面を施釉。全面に貫入あり。赤と金で付けられ。文様は残存部位僅少のため不明。関西系。	表 K10 101	K10-101 表採
第68図 図版40 87	陶器	蓋	底部	— — 底 15.2	灰色で粗粒の胎土。内面と外面胴上部まで灰釉。	L2 96	L2-96 表採
第68図 図版40 88	陶器	皿	口縁部	12.2 — —	折線形の皿。灰色緻密な胎土。灰釉を施釉。外面胴下部、内面見込み部は露胎。	K9 97 石組	K9-97 SW11
第68図 図版40 89	陶器	皿	底部	— — 4.6	卵黄褐色で軟質な胎土。貫入のある灰釉を施釉。外面胴下部、内面見込み部は露胎。見込みは凸状。兜形あり。関西系か。	L0 97 石組埋土 褐色砂層	L0-97 SW15 (褐色砂層)
第68図 図版40 90	陶器	大皿	口縁部	— — —	跨縁形の皿。赤褐色粗粒の胎土。内外面に褐釉を施釉。肥前。	L1 98 撥乱	L1-98 撥乱層
第68図 図版40 91	陶器	大皿	胴部	— — —	褐色粗粒の胎土。外面に灰釉。内面に刷毛目文。肥前で『九州陶器の編年』IV期(1690~1780年代)。	L4 99 表土	L4-99 表土
第68図 図版40 92	陶器	擂鉢	口縁部	22.8 — —	口縁部に外帯。暗灰色で粗粒の胎土。表面は赤褐色。備前で4b~5期。	第2 K4 95	K4-95 II層
第68図 図版40 93	陶器	鍋	口縁部	11.8 — —	赤褐色で軟質の胎土。全面に網目紋。	表 L6 96	L6-96 表採
第68図 図版40 94	陶器	鍋	口縁部	13.9 — —	卵黄褐色で軟質な胎土。内外面に灰釉を施釉。口唇部のみ露胎。	表土 L4 101	L4-101 表土
第68図 図版40 95	陶器	壺	口縁部	11.35 — —	褐色緻密な胎土。外面と内面一部に褐釉を施釉。	表 L2 100	L2-100 表採
第68図 図版40 96	陶器	急須	注口部	— — —	上手形の急須。褐色緻密な胎土。外面に褐釉を施釉。白土象嵌により施文。内面注口部に1孔。	表 L0 97	L0-97 表採
第68図 図版40 97	陶器	急須	底部	— — 5.65	灰色で緻密な胎土。外面に灰釉を施釉されるが、底部露胎。白土象嵌により施文。	K0 100 基礎石下 断割試掘	南端り場 断割②
第68図 図版40 98	陶器	急須	底部	— — 4.8	灰色で緻密な胎土。外面に灰釉を施釉されるが、底部露胎。	表 L4 101	L4-101 表採
第68図 図版40 99	陶器	急須	注口部	— — —	胴折形の急須もしくは土瓶。赤褐色でやや軟質な胎土。無釉。内面注口部に3孔。	表 L4 100	L4-100 表採
第68図 図版40 100	陶器	人形?	—	高さ 2.9 縦 2.6 横 2.9	殆ど的人土形。あるいは蓋の把手。瓶の耳部などか。表面は褐色だが、内面は白色で軟質な胎土。無釉。型作り。	第2 K5 95	K5-95 II層

注「-」:計測不可

第20表 本土産陶磁器観察一覧(6)

単位:cm

捕団番号 団版番号	種類	器種	部位	口径 縦高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第68団 団版40 101	陶器	人形	—	縦 3.15 横 3.3 厚 0.2~0.6	土人形の一部でおそらく太夫の右腕部とみられる。灰色で軟質な胎土。型作りで人間の胸と肩。肩に赤等の色付残る。	SW9 遺構内	KI-96 SW9
第69団 団版41 102	陶器	壺	口~ 底部	10.5 18.0 13.1 胸径 17.0	双耳壺。赤褐色で砂の多く混じる胎土。全面黒釉。内面に円形の叩き痕あり。底部に貝目残る。薩摩で17世紀前半頃か。	L0 97 石組埋土 褐色砂層	L0-97 SW15 (褐色砂層)
第69団 団版41 103	陶器	壺	口縁部	9.3 —	黒灰色で砂の多く混じる胎土。外面に褐釉。	表 L1 94	L1-94 表採
第69団 団版41 104	陶器	壺	口縁部	16.3 —	赤褐色で砂の多く混じる胎土。全面黒釉。口唇部に貝目残る。薩摩で17世紀頃か。	表 L0 95	L0-95 表採
第69団 団版41 105	陶器	壺	胸部	— —	黒褐色で砂の多く混じる胎土。内外面とも褐釉。内面に円形の叩き痕あり。外面に貼付で鷺日文。薩摩產。	表 L2 96	L2-96 表採
第69団 団版41 106	陶器	瓶	頸部	— —	青磁。内外面とも施釉。圓線などの施文あり。	SW13	L0-96 SW13
第69団 団版41 107	陶器	瓶か	底部	— 6.65	小瓶か。薄手。灰色で軟質の胎土。外面に褐釉。内面と底部は露胎。平底部。	表 K0 96	K0-96 表採
第69団 団版41 108	陶器	瓶か	底部	— 5.9	小瓶か。赤褐色で軟質の胎土。見込みに自然釉。	L0 97 井戸伏石組 遺構外東側	L0-97 SW13
第69団 団版41 109	陶器	壺	口縁部	6.3 —	小壺か。灰色で砂の多く混じる胎土。外面に褐釉施釉。	SW2 K3 96	K2-97 SW2
第69団 団版41 110	陶器	壺	胸部	— 4.6	油壺。黄褐色で軟質の胎土。外面に灰釉。	L0 97 SW13 外 井戸伏石組 東側グリット	L0-97 SW13
第69団 団版41 111	陶器	壺	胸部	— —	小壺か。褐色で砂粒の多い胎土。外面に褐釉。	K3 96 SW2 第3号石組 遺構内	K2-97 SW2
第69団 団版41 112	陶器	器種 不明	口縁部	15.25 —	灰色で軟質の胎土。内外面に赤色釉を盛布。	第2 L3 98	L3-93 II層
第69団 団版41 113	陶器	瓶	口縁部	8.2 —	白色微密な胎土。白釉が前面に施される。近代。	表土 L2 101	L2-101 表土
第69団 団版41 114	陶器	瓶	口縁部	5.2 —	短颈の瓶。赤褐色で軟質な胎土。外面は透明釉で全体に貫入。内面は白釉。近代。	表土	表土
第69団 団版41 115	陶器	碗?	口縁部	— —	黄褐色で軟質な胎土。緑釉が内外面とも施される。外面口縁部が少し肥大。外面胸部に蓮弁文。近代。	表 L5 97	L5-97 表採
第69団 団版41 116	陶器	器種 不明	底部	— 6.0	黄褐色で軟質な胎土。透明釉が内外面とも施されるが、底部は露胎。外底部に「出雲」「大」印判あり。近代。	L0 97 SW13	L0-97 SW13

注:「—」:計測不可

第21表 沖縄産施釉陶器集計表

分類	碗												
	直口				外反				その他		分類不明		
	口～底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	胴部	底部	
個数	3	125	64	64	16	367	298	289	67	1	1	1	
分類	小碗												
	天目形		直口				外反				角杯		
	口～底部	口～底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部	
個数	1	15	111	3	7	1	76	3	3	5	31	9	30
分類	小碗			皿				大皿			小杯		
	その他			皿				大皿			小杯		
	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	底部
個数	1	34	122	39	307	48	328	21	22	7	1	2	6
分類	蓋			鉢				角鉢		鍋			
	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	口～底部 (把手付)	口縁部 (把手)	口縁部	胴部
	15	82	29	2	89	51	18	3	2	10	1	36	18
個数	15	82	29	2	89	51	18	3	2	10	1	36	18
分類	瓶					水注類			水注類				
	瓶					水注類			急須				
	口～底部	口縁部	胴～底部	胴部	底部	口縁部	胴～底部	底部	口縁部	口縁部～把手	把手	注口	胴部
個数	1	9	1	39	10	2	2	2	73	16	40	44	276
分類	水注類								蓋				
	アンビン			酒注					蓋				
	把手	胴部	底部	口縁部	注口	胴～底部	胴部	底部	搬～底部	底～底部	底	搬	胴部
個数	15	7	1	7	2	3	76	23	7	54	73	18	9
分類	袋物			火鉢			火炉			火取		火入	
	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	口縁部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	底部	口～底部
	2	162	4	21	1	16	1	29	19	15	5	1	2
個数	2	162	4	21	1	16	1	29	19	15	5	1	2
分類	置物	码子	器種不明				合計						
	口～底部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部							
	1	1	3	99	10	4261							

第22表 沖縄産施釉陶器観察一覧①

単位:cm

捕番号 図版番号	器種	部位	口径 高さ 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第70回 図版42 1	碗	口縁部 ～底部	12.8 5.5 6.1	灰釉を内外面ともに胸部まで施釉。内底に蛇の目状に釉を塗布。高台は角形で高台内に1条削りを施す。	L1 98 撫乱	L1-98 撫乱層
第70回 図版42 2	碗	口縁部	13.2 — —	灰釉を内外面ともに胸部まで施釉。外面には鉄釉により抽象化された草花文を施す。	L0 97 井戸状石組 遺構外東側	L0-97 SW13
第70回 図版42 3	碗	底部	— — 6.0	腰部以下は露胎。高台は角形をなす。	表採	表採
第70回 図版42 4	碗	底部	— — 5.5	灰釉を内底から高台脇まで施釉。一部釉薬が高台まで垂れる。内底は鉄釉による圓線が1条巡り、砂が付着。	表土 K0 96	K0-96 表土
第70回 図版42 5	碗	口縁部	12.3 — —	灰釉を全面施釉。口縁内側の釉が一部白く濁る。	K5 98 第I層 60-70	K5-98 I層
第70回 図版42 6	碗	口縁部 ～底部	14.3 6.5 6.3	鉄釉を総釉後、内底を蛇の目状に釉剥ぎ。再度、内外面ともに腰部まで施釉。豊付や内底にアルミナが付着。	K1 96 石組遺構内	K1-96 SW9
第70回 図版42 7	碗	口縁部 ～底部	13.2 6.05 6.2	鉄釉を施釉後、内底を蛇の目状に釉剥ぎ。再度、内外面ともに胸部まで施釉。高台や外底面がよく焼ける。	L0 97 井戸状遺構	L0-97 SW13?
第70回 図版42 8	碗	口縁部 ～底部	14.0 6.0 6.8	白化粧を施し、透明釉で施釉。豊付のみ露胎。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。豊付や内底にアルミナが付着。器表面には気泡がみられる。	かわや跡の 覆土中	かわや跡 I層
第70回 図版42 9	碗	口縁部 ～底部	12.7 5.9～6.0 6.1	白化粧を施し、透明釉で施釉。豊付のみ露胎。内底は蛇の目状に釉剥ぎされ。豊付や内底にはアルミナが付着。外面に呉須による巴文を3つ施す。高台脇辺には化粧時ついで考えられる指跡がみられる。	表 K0 96	K0-96 表採
第70回 図版42 10	碗	口縁部	12.8 — —	白釉で全面施釉。外面に呉須による施文。	第2 L3 99	L3-99 II層
第70回 図版42 11	碗	口縁部	10.9 — —	白釉で全面施釉。外面に呉須による花文を施す。	表 L4 100	L4-100 表採
第70回 図版42 12	碗	底部	— — 6.4	白化粧後、全面施釉。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。内外面ともに圓線が腰部に2条巡り、外面ではさらに草花文を施す。豊付や内底にアルミナが付着。	L1 98 撫乱	L1-98 撫乱層
第70回 図版42 13	碗	口縁部 ～底部	13.2 5.9 6.5	白釉を豊付を除いて総釉。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。外面は丸文や草花文を施す。内外面ともに粗い貫入。内底にはアルミナが付着。	K1 96 石組遺構内	K1-96 SW9
第70回 図版42 14	碗	口縁部	— — —	白釉を全面施釉。内外面に粗い貫入。外面は草花文が施文されていたようだが、一部のみ朱色が残る。	L1 98 撫乱	L1-98 撫乱層
第70回 図版42 15	碗	底部	— — 7.0	白釉を外底や豊付を除いて総釉。内底を蛇の目状に釉剥ぎ後、綠釉を施す。外面は13同様に丸文を施文し、その他器面を綠釉で施釉。豊付や内底にアルミナが付着。	L0 97 井戸状遺構 グリット外	L0-97 SW13?
第70回 図版42 16	碗	底部	— — 7.1	白化粧後、内底から高台内まで施釉。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。外面は線彫による圓線・斜格子文を施文後、呉須と釉を施釉。豊付にアルミナが付着。	表 L4 101	L4-101 表採
第70回 図版42 17	碗	底部	— — 6.5	白化粧後、豊付を除いて総釉。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。外面は呉須により花文を施す。	L1 98 撫乱	L1-98 撫乱層
第70回 図版42 18	碗	底部	— — 5.6	白化粧後、豊付を除いて総釉。内底は蛇の目状に釉剥ぎし、鉄綠釉で圓線を2条施す。外面は綠釉などによる丸文を施す。豊付や内底にアルミナが付着。	第2 L2 99	L2-99 II層
第70回 図版42 19	碗	口縁部	12.7 — —	白釉を施釉後、内底を釉剥ぎ。口縁部に青色の釉を塗布。	表 K4 97	K4-97 表採
第70回 図版42 20	碗	口縁部 ～底部	12.0 5.5 5.3	灰釉を内底から外面胸部まで施釉。高台は角形をなし、豊付には砂が付着。	表 K5 98	K5-98 表採

注「-」:計測不可

第22表 沖縄産施釉陶器観察一覧(2)

単位:cm

捕獲番号 図版番号	器種	部位	口径 高さ 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第70回 図版42 21	碗	口縁部 ～底部	12.0 5.95 5.7	内底にのみ白化粧後、疊付を除いて黒褐釉を施釉。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。疊付にわざかにアルミナが付着。	表 K10 96	K10-96 表採
第71回 図版43 22	小碗	口縁部 ～底部	8.9 4.55 3.8	内底から口唇まで灰釉を施釉し、外面は黒褐釉で施釉。疊付・外底のみ露胎。	表土 K10 100	K10-100 表土
第71回 図版43 23	小碗	口縁部 ～底部	9.1 4.9 4.1	内底から口唇まで灰釉を施釉し、外面は黒褐釉で施釉。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。疊付・外底のみ露胎。	基礎石下断削 試掘 K0 100	南通り場 断削②
第71回 図版43 24	小碗	口縁部 ～底部	9.2 4.9 3.8	灰釉を全面施釉。疊付にアルミナが付着。内外面に細かい貫入がみられる。	IV期基壇	VI期基壇
第71回 図版43 25	小碗	口縁部 ～底部	9.3 4.35 3.7	白釉を全面施釉。口縁部・外底のみ白化粧が施されない。外面腰部に指跡があり、透明釉が掛からないことから施釉時に生じたと考えられる。	南の通り場 東	南通り場 I層
第71回 図版43 26	小碗	口縁部 ～底部	10.2 4.7 4.3	疊付を除いて灰釉を全面施釉。外面は呉須により巴文を施す。	南側	VII期基壇 南通り場 階段
第71回 図版43 27	小碗	口縁部 ～底部	8.7 5.05 4.0	白釉を全面施釉。内底は絞釉による巴文を施す。内外面に粗い貫入。疊付や内底にアルミナが付着。	かわや跡	かわや跡
第71回 図版43 28	小碗	口縁部 ～底部	7.8 4.55 3.8	白釉を全面施釉。内底には呉須により「沖縄神社」を施す。	表 K5 103	K5-103 表採
第71回 図版43 29	小碗	底部	— 3.3	白釉を全面施釉。疊付のみ露胎し、わざかにアルミナが付着。内底には呉須により花文を施す。	不明	出土地不明
第71回 図版43 30	小碗	口縁部 ～底部	8.8 4.1 4.2	白釉を全面施釉。疊付のみ露胎し、アルミナが付着。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。	第2 K2 93	K2-93 II層
第71回 図版43 31	小碗	口縁部 ～底部	7.8 4.4 3.9	疊付を除いて白釉を全面施釉。外面を胴部と腰部で面取りしている。	K1 96 右組遺構内	K1-96 SW9
第71回 図版43 32	小碗	口縁部	9.3 —	灰釉を全面施釉。口唇が小さな玉縁状をなす。	第2層 K3 97 土坑(南側)	K3-97 II層
第71回 図版43 33	小碗	底部	— 3.7	白化粧後、外面には透明釉、外面には黒褐釉を施釉。疊付のみ露胎。	南側	VII期基壇 南通り場 階段
第71回 図版43 34	小碗	口縁部 ～底部	9.6 4.55 3.1	黒褐釉を内底から胴部まで施釉。外底部がわざかに探ける。	表 L2 96	L2-96 表採
第71回 図版43 35	小碗	底部	— 3.7	灰釉を全面施釉。疊付のみ露胎し、アルミナが付着。	不明	出土地不明
第71回 図版43 36	小碗	底部	— 3.8	内面のみ白化粧後、透明釉を施釉。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。外面は黒褐釉を施釉し、疊付のみ露胎。疊付にはアルミナが付着。	不明	出土地不明
第71回 図版43 37	小碗	底部	— 4.2	内面は灰釉を施釉し、内底を蛇の目状に釉剥ぎ。外面は鉄釉で施釉し、疊付のみ露胎。高台内には砂が付着。	表土	表土
第71回 図版43 38	小碗	底部	— 4.2	黒褐釉を内底から腰部まで施釉。高台はハの字状にひらく。	不明	出土地不明
第71回 図版43 39	小杯	口縁部	3.5 —	灰釉を純釉。口唇が小さな玉縁状をなす。	表 K0 100	K0-100 表採
第71回 図版43 40	小杯	底部	— 2.1	内底から外面腰部まで灰釉を施釉。底部はハの字状にひらく。	表 L4 101	L4-101 表採

注「-」:計測不可

第22表 沖縄産施釉陶器観察一覧(3)

単位:cm

捕番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第71図 図版43 41	小杯	底部	— 2.3	灰釉を内底から高台脇まで施釉。一部高台に釉がかかる。	表 L2 99	L2-99 表探
第71図 図版43 42	皿	口縁部 ～底部	14.1 4.0 6.4	灰釉を疊付以外に施釉。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。口縁部の釉が一部白く渦る。	表 K0 95	K0-95 表探
第71図 図版43 43	皿	口縁部	12.4 —	灰釉を内底から外面腰部まで薄く施釉。	表土 L1 101	L1-101 表土
第71図 図版43 44	皿	口縁部	— —	白釉を外外面に施釉。口唇は平坦に形成し、灰釉を施釉。口縁部は波状をなす。	K4 97 第2層 10-20	K4-97 II層
第71図 図版43 45	皿	底部	— —	白釉を全面施釉。疊付のみ露胎。内底を蛇の目状に釉剥ぎ。内底中央は貝殻による圓線が2条巡る。内外面に2条の圓線および草花文を施す。	L5 98 グリット カワヤ跡覆土	L5-98 かわや跡 覆土
第72図 図版44 46	大皿	口縁部	22.2 —	黒褐釉を全面施釉。内体面は輪轍痕が明瞭に残る。	表 K6 96	K6-96 表探
第72図 図版44 47	大皿	底部	— 11.1	外面のみ黒褐釉を施し、外底は高台に沿って釉がみられる。内面は白釉を施釉し、一部粘土が貼付。	表 K0 96	K0-96 表探
第72図 図版44 48	大皿	底部	— 11.6	鉄釉を高台外から疊付まで施釉。内底面は輪轍痕が明瞭に残り、釉薬が点々と重れる。	第2 K9 93	K9-93 II層
第72図 図版44 49	大皿	口縁部	— —	灰釉を全面施釉。口唇部が玉縁状に肥厚する。内外面ともに細かい貫入がみられる。	表土 L4 100	L4-100 表土
第72図 図版44 50	鉢	口縁部	20.0 —	黒褐釉を口唇部から外面に施し、一部白く渦り発色が悪い。内面は白釉を施釉。口縁部は波状をなす。	表 L4 100	L4-100 表探
第72図 図版44 51	鉢	口縁部	26.4 —	黒褐釉を全面施釉。口縁部が蹲縁状をなす。	L0 97 遺構外 西グリッド	L0-97 不明
第72図 図版44 52	鉢	口縁部	27.0 —	口縁部が蹲縁状をなし、その中央より内面は白釉、外面は黒褐釉を施釉。	不明	出土地不明
第72図 図版44 53	鉢	口縁部	15.4 —	黒褐釉を全面施釉。外面は輪轍痕が明瞭に残る。	L1 98 挿乱	L1-98 揿乱層
第72図 図版44 54	鉢	口縁部	19.8 —	内体面から外面口縁部にかけて灰釉を施釉。外体面は黒褐釉が施釉。	表 K0 95	K0-95 表探
第73図 図版45 55	鉢	口縁部 ～底部	18.5 10.1～ 10.2 9.1	灰釉を内底から高台脇にかけて施釉。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。口縁部は波状をなし、釉が白く渦る。疊付にアルミナが付着。	表 L4 100	L4-100 表探
第73図 図版45 56	鉢	底部	— 6.2	灰釉を内体面から外面腰部にかけて施釉。一部釉薬が高台まで重れる。疊付や内底面の一部で砂が付着。	表 L2 104	L2-104 表探
第73図 図版45 57	鉢	底部	— 9.6	内面は灰釉を施釉し、蛇の目状に釉剥ぎ。外面は黒褐釉を施釉し、高台のみ露胎。高台に小孔がみられ、高台外側から内面に向かって穿つ。内面で粘土がたまつており、完全に貫通はしていない。	K5 97 第2層 50-60	K5-97 II層
第73図 図版45 58	鉢	底部	— 11.3	内面は白釉を施し、蛇の目状に釉剥ぎ。外面は黒褐釉を施釉し、疊付のみ露胎。高台は外側を斜位に削る。	L5 98 グリット カワヤ跡の覆土	L5-98 かわや跡 覆土
第73図 図版45 59	鍋	口縁部	16.6 —	口縁部が蹲縁状をなし、蹲縁上面は露胎する。内外面ともに施釉され、内面は輪轍痕が明瞭に残る。	表 K8 96	K8-96 表探
第73図 図版45 60	鍋	口縁部	12.3 —	口縁部は蹲縁状をなし、蹲縁上面は露胎する。内面は白釉を施す。外面は灰釉を施釉後、焰釉を所々に垂らす。	第IV-V期 北側柱状石垣 の覆土	V～VII期基壇？

注「-」:計測不可

第22表 沖縄産施釉陶器観察一覧(4)

単位:cm

捕獲番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第73図 図版45 61	鍋	口縁部 (把手)	17.0 — —	黒褐釉を外面および把手に施す。口縁部は跨縫状をなし、跨縫上面はアルミナが塗布。内面は露胎。	L0 97 表	L0-97 表土
第73図 図版45 62	壺	口縁部	11.25 — —	灰釉を施釉後、黒褐釉を全面施釉。口縁上部のみ露胎。	2層 黒色土混 赤土層 K6 97~99	II層 (黒土混赤土層)
第73図 図版45 63	壺	口縁部	10.8 — —	黒褐釉を口縁部内面から外面にかけて施釉。内面は露胎するが、一部釉薬が垂れる。	表土	表土
第73図 図版45 64	壺	口縁部	12.0 — —	外面のみ黒褐釉を厚く施し、内面は透明釉を薄く施釉。	2層 黒色土混り 赤土層 K6 97~99	K6-97~99 II層 (黒土混赤土層)
第73図 図版45 65	壺	底部	— 10.8	黒褐釉を内底から外面腰部にかけて施釉。内底面は露胎。外底面は黒褐釉により、満巻文を施す。	表土 L4 100	L4-100 表土
第73図 図版45 66	壺	底部	— 11.6	黒褐釉を外面腰部まで施釉。内面は露胎するが、釉が点々と垂れる。外面腰部に指痕あり。	表 K0 100	K0-100 表土
第74図 図版46 67	水注類 (急須)	口縁部	6.0 — —	灰釉を内面口縁部の一部および外面口唇以下に施釉。外面は粗い貫入がみられる。	表 L4 101	L4-101 表採
第74図 図版46 68	水注類 (急須)	口縁部・ 把手	6.95 — —	内外面口縁部を除いて総釉。三角形状の把手に直径7mmの孔を穿ち、周辺に線彫りによる曲線文を1条施す。	L0 97 井戸状遺構 外グリット	L0-97 SW13?
第74図 図版46 69	水注類 (急須)	口縁部・ 把手	5.8 — —	灰釉を内外面口縁部および口唇を除いて総釉。外面は斜釉を点々と垂らす。三角形状の把手に直径7mmの孔を穿つ。	表 K0 95	K0-95 表採
第74図 図版46 70	水注類 (急須)	口縁部	— — —	灰釉を内外面口縁部を除いて総釉。線彫りを施した後、緑釉を塗布。	L5 98 グリット	L5-98 表採
第74図 図版46 71	水注類 (急須)	口縁部	7.2 — —	白釉を内面一部および口唇以下に施釉。外面は線彫りによる圓線・斜沈線を施した後、呉須・鉛釉・緑釉を流し掛ける。	表土 K1 100	K1-100 表土
第74図 図版46 72	水注類 (急須)	口縁部	5.6 — —	灰釉を外面口唇部以下に施釉。外面は線彫りによる2条1組の圓線・斜沈線・厭世沈線を施した後、文様部を黒土で象嵌する。	L0 97 SW13 井戸状石組 東側グリット外 + L4_98	L0-97 SW13 + L4-98 表採
第74図 図版46 73	水注類 (急須)	口縁部	7.0 — —	内外面口縁部から口唇を除いて総釉。外面は線彫りによる2条1組の圓線・菊花文・斜沈線を施した後、文様部を白土で象嵌する。	表 L4 100	L4-100 表採
第74図 図版46 74	水注類 (急須)	底部	— 10.0	白釉を内面にのみ施釉。外面は呉須を胸部まで施す。内底は呉須を散らす。注口のためか胴部に孔が2つ穿たれ、周囲を線彫りによる斜沈線で閉む。	L4 99 表土	L4-99 表土
第74図 図版46 75	水注類 (急須)	底部	— 9.0	白釉を外底を除いて総釉。内底は線彫りによる圓線を施す。外面は呉須・鉛釉・緑釉を流し掛ける。	L1 97 第2層 褐色混泥土層	L1-97 II層 (褐色混練土層)
第74図 図版46 76	水注類 (急須)	底部	— 6.0	黒褐釉を外面腰部に施釉。内面および外底は露胎する。	表 K0-100	K0-100 表採
第74図 図版46 77	水注類 (急須)	底部	— 6.6	外底を除いて灰釉を総釉。外面は粗い貫入がみられる。内底は白釉が点々と垂れる。	K1 96 石組遺構内	K1-96 SW9
第74図 図版46 78	水注類 (急須)	注口	1.9 — 2.55	外面のみ黒褐釉を施釉。急須と注口の接合部の孔は1つあり、直径9mmを行かる。注口は急須器面から丸みをつけて斜め上方へ立ち上がる。	不明	出土地不明
第74図 図版46 79	水注類 (急須)	注口	0.9 — 3.5	外面のみ黒色釉を施釉。急須と注口の接合部に直径5~10mmの孔を3つ穿つ。注口は急須器面から斜め上方に立ち上がる。	南側	VII期墳 南踊り場 階段
第74図 図版46 80	水注類 (急須)	底部	— 5.8	平底。内底は灰釉。外底は黒色釉を腰部まで厚く施釉。内底はわずかに砂が付着。外底は露胎し、中央に「口酒口」と施す。	L2 107 爆弾跡	爆弾跡④

注:「-」:計測不可

第22表 沖縄産施釉陶器観察一覧(5)

単位:cm

種番号 図版番号	器種	部位	口径 高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第74図 図版46 81	水注瓶 (アンピン)	胴部	— — —	黒褐色を内面口縁部を除いて総釉。外面は把手を1つ貼付し、その根元に軸を流し掛ける。	表土 L4 100	L4-100 表土
第74図 図版46 82	水注瓶 (アンピン)	把手	— — —	黒色釉を総釉。	L1 98 摂乱	L1-98 摂乱層
第75図 図版47 83	水注瓶 (酒注)	口縁部	5.3 — —	内外面ともに白釉を施釉後、呉須を流し掛ける。	表 L4 103	L4-103 表採
第75図 図版47 84	水注瓶 (酒注)	胴部～ 底部	— 6.4	外面胴部から高台脇にかけて白釉を施す。内面は露胎。外面は線彫りによる團線や縦位沈線を施し、呉須や緑釉を塗布。	不明	出土地不明
第75図 図版47 85	水注瓶 (酒注)	底部	— 9.7	内面は黒褐色、外面は白釉を施釉する。豊付から高台内ののみ露胎。外面や外底の一部に呉須による施文。	表 K0 100	K0-100 表採
第75図 図版47 86	水注瓶 (酒注)	胴部	— —	外面は白釉を施し、肩部には線彫りによる2本単位の沈線で多角形に文様を施す。直下に呉須により草花文を描き、鉛釉や緑釉を流し掛け。内面は露胎するが一部釉がみられる。	L5 98 グリット カワヤ跡の覆土	L5-98 かわや跡 覆土
第75図 図版47 87	水注瓶 (酒注)	胴部	— —	外面は白釉を施し、線彫りによる團線を2条巡らす。團線には呉須を塗布。團線より上部(口縁部側)は鉛釉・緑釉を流し掛け。内面は露胎。	第2 K8 96	K8-96 II層
第75図 図版47 88	水注瓶 (酒注)	胴部～ 底部	— 7.65	白釉を外面のみ施すが、豊付は露胎。外面は線彫りによる團線・格子文・縦位沈線・斜沈線を施した後、呉須と鉛釉を流し掛ける。	第2 K9 93	K9-93 II層
第75図 図版47 89	水注瓶 (酒注)	底部	— 7.4	内底から胴部にかけ白釉を施釉後、呉須を流し掛け。高台以下は露胎。	表 L1 93	L1-93 表採
第76図 図版47 90	瓶	口縁部～ 底部	3.2 13.35 5.7	灰黒色釉を内面頭部から外面腰部にかけて施釉。外底は露胎。	不明	出土地不明
第76図 図版47 91	水注瓶	口縁部	3.6	内外面ともに鉄釉を総釉。	L5 98 グリッド	L5-98 表採
第75図 図版47 92	水注瓶	口縁部	6.1 —	内外面ともに緑釉を総釉。	第2 L3 98	L3-98 II層
第75図 図版47 93	水注瓶	胴部～ 底部	— 5.0	外面は腰部まで黒褐色釉を施釉。一部釉が外底に付着する。内底は露胎。	表 L2 96	L2-96 表採
第75図 図版47 94	水注瓶	胴部～ 底部	— 8.7	外面のみ白釉を総釉する。外面は線彫りによる團線を2条施した後、呉須を塗布。豊付のみ露胎し、一部アルミナが付着する。	表 L4 100	L4-100 表採
第75図 図版47 95	瓶	底部	— 4.6	外面は外底脇まで暗緑色釉を施釉。内面は露胎。	表 L1 101	L1-101 表採
第75図 図版47 96	瓶	胴部～ 底部	— 5.0	暗褐色釉を外底脇まで施す。内面は露胎。	表土 L1 101	L1-101 表土
第75図 図版47 97	瓶	胴部	—	外面は黒釉を総釉。内面は露胎。	K4-98	K4-98 表採
第75図 図版47 98	灯明具	口縁部～ 底部	5.0 4.3 3.3	内底から外底脇にかけて白釉を施釉。内外面ともに貫入がみられる。内面中央に直径約5mmの釘穴が穿たれる。外底は露胎。	第13 柱穴	K3-93 柱穴13
第75図 図版47 99	灯明具	口縁部～ 底部	4.7 4.6 4.5	内底から外底脇にかけて黒褐色釉を施釉。内面中央に直径約5mmの釘穴が穿たれる。外底は露胎し、砂が付着する。	K0-100	K0-100 表採
第76図 図版48 100	火炉	口縁部	24.0 — —	緑釉を総釉。蹲縁状に口縁を形成し、内面口縁部に突起を貼付。	不明	出土地不明

注「—」:計測不可

第22表 沖縄産施釉陶器観察一覧(6)

単位:cm

捕番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第76図 図版48 101	火炉	口縁部	14.8 — —	褐色で緑釉。内面口縁部に平面三角形状の突起がみられることから、本実は3つ突起を形成すると考えられる。外面口唇下に2条の沈線を施す。	表 L4 100	L4-100 表採
第76図 図版48 102	火炉	口縁部	24.0 — —	外面は口縁上面から綠釉や呉須を施すが、焼成により発色が悪く白く渦る。内面は露胎。	表 L4 101	L4-101 表採
第76図 図版48 103	火炉	口縁部	17.7 — —	暗褐色釉で緑釉。内面口縁部に平面三角形状の突起を有する。	表 L4 100	L4-100 表採
第76図 図版48 104	火炉	口縁部	16.6 — —	褐色を内面胴部から外面にかけて施釉。内面口縁部に平面三角形状の突起を貼付。胴部には紙面の耳を横位に貼付。	南側	VII期堆 南踊り場 階段
第76図 図版48 105	火炉	底部	— — —	黒褐色釉を内底から外面腰部にかけ施釉。	第2層 黒色土混り 素土層 K6 97~99	K6-97~99 II層 (黒土混赤土層)
第76図 図版48 106	火入	口縁部	9.15 — —	筒型の火入で暗褐色釉を口縁内面から外面にかけ施釉。	南踊り場	南踊り場 I層
第76図 図版48 107	火入	口縁部	10.2 — —	筒型の火入で直線的に立ち上がる。銀緑釉を口縁内面から外面にかけて施釉。	L1 98 撥乱	L1-98 撥乱層
第76図 図版48 108	火入	口縁部	— — —	筒型の火入で銅緑釉を口縁内面から外面に掛け施釉。	表 L1 103	L1-103 表採
第76図 図版48 109	火入	口縁部	— — —	黒色釉を緑釉するが、口縁上面のみ露胎。外面口唇下に2条の沈線を巡らす。	II層 10/30 K3 95	K3-95 II層
第76図 図版48 110	火入	口縁部	— — —	外面上に白釉を施すが、口唇部のみ露胎。外面は線彫りによる2本単位の園線・縦位沈線・格子文を施した後、呉須や緑釉を流し掛ける。	表土 K0 100	K0-100 表土
第76図 図版48 111	火入	底部	— 10.2	内溝する火入で白釉を外面胴部のみ施釉。内底および外底は露胎。	かわや跡の 覆土中	かわや跡 I層
第77図 図版49 112	蓋	撮～底	底 6.3 2.8 持 4.9	急須の蓋。暗褐色釉を上面端部まで施釉。	表 K0 100	K0-100 表採
第77図 図版49 113	蓋	底～底	底 7.1 — 持 5.2	急須の蓋。暗緑釉を上面端部まで施釉。撮は欠損し、周辺に孔が2つ穿たれる。	K1 102 踊り場断削	南踊り場 断削④
第77図 図版49 114	蓋	底～底	底 7.6 — 持 6.3	急須の蓋。白釉を上面端部まで施釉。上面は黒象嵌状に丸文や沈線を施す。	K3 96 石組第2号 遺構内 SW3	K2-96 SW3
第77図 図版49 115	蓋	底～底	底 5.6 — 持 4.2	急須の蓋。緑釉を上面端部まで施釉。上面は線彫りによる3本単位の沈線や花文を施す。撮は欠損し、周辺に孔が1つ穿たれる。	表 K7 101	K7-101 表採
第77図 図版49 116	蓋	底～底	6.2 2.9 4.6	急須の蓋。灰釉を上面端部まで施釉。上面は線彫りによる2本単位の園線や草文を施した後、文様部を白土で象嵌する。	表 L4 98	L4-98 表採
第77図 図版49 117	蓋	底～底	7.0 — 4.2	急須の蓋。白釉を上面端部まで施釉。上面は線彫りによる2本単位の園線・区画・斜沈線を施し、呉須・階釉・緑釉を流し掛ける。撮は欠損し、周辺に孔が1つ穿たれる。	表土 L2 98	L2-98 表土
第77図 図版49 118	蓋	撮～底	底 7.9 3.3 持 5.7	急須の蓋。白化粧後、緑釉を上面端部まで施釉。上面は線彫りによる2本単位の園線・丸文を施し、階釉を流し掛ける。撮の周辺に孔が1つ穿たれる。	表 K0 100	K0-100 表採
第77図 図版49 119	蓋	撮～底	底 5.9 1.6 持 4.5	急須の蓋。白釉を上面端部まで施釉。呉須により撮は渦巻文、上面は端部まで波状文を施す。	不明	出土地不明
第77図 図版49 120	蓋	底～底	底 10.7 — 持 9.0	碗に対応する蓋か? 白化粧を全面に施し、上面のみ端部まで透明釉を施釉。上面は線彫りによる2本単位の園線・区画・斜沈線・格子文を施した後、呉須や緑釉を流し掛ける。	L4 99 表土	L4-99 表土

注「—」:計測不可

第22表 沖縄産施釉陶器観察一覧(7)

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第77図 図版49 121	蓋	撮～底	底 11.3 3.6 傍 9.6	碗の蓋。白釉を上面端部まで施釉。上面は鉛釉により6枚の花弁からなる花文を5つ施す。	表 K0 95	K0-95 表採
第77図 図版49 122	蓋	撮～底	底 10.0 1.9 —	急須の蓋。黒褐色釉を上面端部まで施釉。上面に10条の沈線を施す。	不明	出土地不明
第77図 図版49 123	蓋	底部	底 11.9 — —	急須の蓋。黒色釉を上面端部まで施釉。	第2 K4 98	K4-98 II層
第77図 図版49 124	蓋	撮～底	底 一 3.9 傍 8.2	蓋の蓋。黒褐色釉を上面端部まで施釉し、蛇の目状に釉割ぎする。上面端部周辺の露胎部にアルミニウムが付着。	表 L4 100	L4-100 表採
第77図 図版49 125	蓋	撮～底	18.5 5.9 8.4	撮み高台状の蓋。内面腰部から外面腰部にかけ灰釉を施釉。内底は触感底が明顯に残り、わずかに煤けるが外面は丁寧に器面調整を施す。	SW3 覆土 コーラル層	K2-96 SW3
第77図 図版49 126	蓋	底～底	底 11.0 — 傍 10.0	肩部がよく張る。上面端部まで白釉を施釉。呉須により給付けする。	第74 柱穴	L1-93 柱穴74
第77図 図版49 127	蓋	底～底	底 9.4 — —	白釉を総釉。	L1 98	L1-98 表採

注「-」:計測不可

第23表 沖縄産無釉陶器集計表

分類	碗				皿				大皿			
	口～底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部	底部
個数	9	79	15	46	7	25	2	5	2	3		2
分類	鉢				擂鉢				急須			
	口～底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	
個数	3	172	35	26	1	88	128	29	37	46		2
分類	瓶			角瓶			壺			小壺		
	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	把手	胴部	底部	胴部	
個数	30	229	40	2	6	2	115	1	1059	149		3
分類	火鉢					蓋	甕					
	口～底部	口縁部	把手	胴部	底部		口～底部	口縁部	胴部	胴～底部	底部	
個数	1	50	3	17	14	23	3	104	346	1	16	
分類	壺か甕		小甕		瓶子甕		灯明具			土管		筒物
	胴部	底部	口縁部	胴部	口～底部	口縁部	底部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	
個数	11	3		1	1	1	1	4	1	1	5	1
分類	タイル(陶製)		器種不明					合計				
	口縁部	口～底部	口縁部	把手	胴部	底部						
個数	1	1	3	1	111	10		3133				

第24表 沖縄産無釉陶器観察一覧①

単位:cm

掲番号 図版番号	器種	部位	口径高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第78図 図版50 1	碗	口～底部	12.5 6.4 6.5	暗赤褐色で緻密な胎土。口縁部は丸縁で直口し、外面下半にロクロナデが強く残る。見込みには黒色釉が付着し、高台と見込みにサンゴ目の痕あり。初期沖縄産無釉陶器。	化粧石前プール	SP3
第78図 図版50 2	碗	口～底部	16.1 6.1～6.3 7.9	暗赤褐色で緻密な胎土。口縁部は丸縁で僅かに外反。外面下半にロクロナデが強く残る。見込みには飛沫状に黒色釉が付着し、サンゴ目の痕あり。高台は付け高台でロクロケズリで仕上げる。初期沖縄産無釉陶器。	K0 97 石組遺構内	K0-97 SW6
第78図 図版50 3	碗	口～底部	13.8 6.0 6.7	暗赤褐色で緻密な胎土。口縁部は丸縁でS字形に捻られている。高台は付け高台で、高台と見込みには自然釉とサンゴ目の痕あり。天目として使用か。初期沖縄産無釉陶器。	X100 Y110 石組井戸状 遺構内	K0-99 SW4
第78図 図版50 4	碗	口～底部	12.8 6.0 6.3	暗赤褐色で緻密な胎土。口縁部は丸縁で強く外反。外面には自然釉が薄く残る。内面は墨灰色を呈す。高台は付け高台で僅かに歪む。喜納焼か。	表 L2 96	L2-96 表採
第78図 図版50 5	碗	口縁部	14.2 —	茶褐色で緻密な胎土。口縁部は丸縁で僅かに外反。初期沖縄産無釉陶器。	L0 97 石組埋土 褐色砂層	L0-97 SW15 (褐色砂層)
第78図 図版50 6	皿	口～底部	10.4 2.75 5.0	暗赤褐色で緻密な胎土。口縁部は丸縁で外反し底部は平底。外面には薄く鉄泥釉を施釉。燈明皿か。	SW13	L0-96 SW13
第78図 図版50 7	皿	口縁部	9.6 —	暗灰色で緻密な胎土。口縁部は平坦で直口。燈明皿か。	第2基壇 前面	II期基壇 前面
第78図 図版50 8	大皿	口～底部	27.6 4.4 16.6	暗赤褐色で緻密な胎土。口縁部は丸縁で外面底部以外に鉄泥釉を施釉。底部は全面的に剥離。初期沖縄産無釉陶器。	L0 97 石組埋土 褐色砂層	L0-97 SW15 (褐色砂層)
第78図 図版50 9	大皿	口縁部	23.0 —	暗赤褐色で緻密な胎土。口縁部は外反し口唇端部が上方に僅かに尖る。全体的に鉄泥釉を施すが口縁部下部には施釉されず。初期沖縄産無釉陶器。	L0 97 SW13 井戸状石組遺構外 東側グリッド外	L0-97 SW13
第78図 図版50 10	大皿	底部	— 21.0	外面は橙褐色、内面は暗黃灰色を呈す緻密な胎土。内面は灰色を呈し内底部には板ナデが一部みられる。高台は付け高台。	L0 97	L0-97 表採
第78図 図版50 11	大皿	底部	— 8.1	灰茶褐色で緻密な胎土。高台は付け高台で僅かに歪む。外底部に石灰とみられる白色物質が僅かに付着。	表 L0 95	L0-95 表採
第78図 図版50 12	大皿	口縁部	— —	暗赤褐色で緻密な胎土。口縁部は平坦で僅かに外反。全体的に鉄泥釉を施釉し、外面下半には二枚貝とみられる貝目の痕あり。初期沖縄産無釉陶器。	表土 L5 95	L5-95 表土
第79図 図版51 13	大皿	口～底部	30.9 6.1 17.5	暗赤褐色で緻密な胎土。口縁部は丸縁で外反し、外面全体と内面の一部に鉄泥釉が施釉。口縁部上面に貝目が残り、その部分は僅かに凹む。底部は歪み、他側体は溢道具とみられる跡がある。	表 L2 96	L2-96 表採
第79図 図版51 14	鉢	口～底部	12.8 9.7 10.2	暗茶褐色で緻密な胎土。口縁部は短く僅かに外反する。外面上半と内面の一部に鉄泥釉が施釉され、脣部に1条の沈線が巡る。	表 L2 96	L2-96 表採
第79図 図版51 15	鉢	口縁部	16.4 — —	暗茶褐色で緻密な胎土。口縁部は厚く肥厚し、口縁部上面は平坦。脣部に1～2条の沈線が巡る。外面上半に鉄泥釉が施釉され、脣部には黄灰色の釉を部分的に施釉。	SW2 遺構内	K2-97 SW2
第79図 図版51 16	鉢	口縁部	14.9 — —	赤褐色で緻密な胎土。口縁部は短く僅かに外反する。外面には塗釉が施され光沢あり。脣部には1～2条の沈線が巡る。	SW13	L0-96 SW13
第79図 図版51 17	鉢	口縁部	23.2 — —	暗赤褐色で緻密な胎土。口縁部は短い跨状。外面上半には波状文が5条描かれている。	L0 97 表土	L0-97 表土
第79図 図版51 18	鉢	口縁部	15.2 — —	暗赤褐色で緻密な胎土。口縁部は肥厚し内湾。外面は高温に晒されたせいか荒い。内面の一部や破断面には石灰が少量付着。	表 K5 98	K5-98 表採
第80図 図版52 19	鉢	口縁部	25.7 — —	赤褐色で緻密な胎土。口縁部は丸縁で僅かに内湾。口縁部下部に1条の沈線と波状文4条、内面には「六」の下に「一」が書かれた墨書きあり。	L2 104 表土	L2-104 表土
第80図 図版52 20	鉢	底部	— 9.5	茶褐色で緻密な胎土。外面上半に波状文が5条描かれ、外面上半に鉄泥釉を施釉。	K9 K10 100 基壇正面の 上部縦層中	K9-10-100 II期基壇正面 の上部縦層中
第80図 図版52 21	鉢	口縁部	— — —	灰色で緻密な胎土。口縁部は強く外反し跨状。口縁部上面に1条の沈線があり、外面上半には3条の沈線が巡る。口縁部上面と裏面全体に石灰が薄く付着。	第2 K4 98	K4-98 II層
第80図 図版52 22	鉢	口縁部	31.0 — —	暗赤褐色で緻密な胎土。口縁部は強く外反して跨状を呈し、外面上全体に自然釉が薄くかかる。	かわや跡覆土中	かわや跡 I層

注「-」:計測不可

第24表 沖縄産無釉陶器観察一覧(2)

単位:cm

検査番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第80回 図版52 23	擂鉢	口縁部	26.0 — —	暗赤褐色で緻密な胎土。口縁部は丸縁で、口縁部下部を屈曲させ2条の突帯を成形。全体に鉄泥軸を施釉。擂目(9本/1.8cm)。初期沖縄産無釉陶器。擂鉢編年Ⅰ式。	表 L2 96	L2-96 表採
第80回 図版52 24	擂鉢	口縁部	36.8 — —	茶褐色で緻密な胎土。口縁部は蹲縁で、口縁部下部に一条の突帯が巡る。全体に鉄泥軸を施釉。擂目(10本/2cm)。初期沖縄産無釉陶器。擂鉢編年Ⅱ式。	K1 96 石組遺構内	K1-96 SW9
第80回 図版52 25	擂鉢	口縁部	30.9 — —	根褐色で緻密な胎土。口縁部は丸縁で蹲縁。擂目(12本/1.6cm)は密に入る。擂鉢編年Ⅳ式。	か・わ・や・跡の 覆土中	か・わ・や・跡 I層
第81回 図版53 26	擂鉢	口～底部	27.5 12.9 11.2	暗赤褐色で緻密な胎土。口縁部は蹲縁で、口縁部下部に逆方向に自然釉が垂れた跡から伏せ焼きをしたとみられる。擂目(11本/1.6cm)。初期沖縄産無釉陶器。擂鉢編年Ⅱ式。	表 L2 96	L2-96 表採
第81回 図版53 27	擂鉢	底部	— — —	根褐色で緻密な胎土。脚付きの擂鉢で脚部には方向から小孔が開く。外底面には梯状工具により溝巻き状に沈線がある。擂目(13本/3cm)は密にある。擂鉢編年Ⅳ式。	不明	出土地不明
第81回 図版53 28	擂鉢	底部	— — 11.1	根褐色で緻密な胎土。外面下半から底部は板ナギ。擂目(25本/3cm)。擂鉢編年Ⅳ式。	L4 99 撥乱 (表土層)	L4-99 表土
第81回 図版53 29	急須	口縁部	9.6 — —	茶褐色で緻密な胎土。口縁部内面に受部を成形。外面に泥軸を施釉。一部に黄白色軸を施釉。内面に火照れとみられる凹凸が存在。初期沖縄産無釉陶器。	L0 97 石垣理土 褐色砂層	L0-97 SW15 (褐色砂層)
第81回 図版53 30	急須	口縁部	6.6 — —	茶褐色で緻密な胎土。口縁部内面に受部を成形。外面に自然釉が薄くかかる。初期沖縄産無釉陶器。	石組遺構内 X100 Y110	K0-99 SW4
第81回 図版53 31	急須	胴部	— —	暗赤褐色で緻密な胎土。外表面の一部に石灰が付着。把手は貼付。	第IV・V期基壇 北側翼状石垣 の覆土	V～VII期 基壇?
第81回 図版53 32	瓶	口縁部	6.2 — —	赤褐色で緻密な胎土。口縁部は丸縁で口唇部は少し尖る。	L1 98 撥乱	L1-98 撥乱層
第81回 図版53 33	瓶	口縁部	5.3 — —	黒灰色で緻密な胎土。口縁部は僅かに膨らむ。表面にまばらに自然釉がかかる。初期沖縄産無釉陶器。	中央爆弾跡 K6 69 撥乱	爆弾跡②
第81回 図版53 34	瓶	底部	— 5.4	暗赤褐色で緻密な胎土。全体的に分厚く、外底面の造りは非常に粗い。外面に半円状の沈線があるが意図不明。	表土 L5 98	L5-98 表土
第81回 図版53 35	瓶	底部	— 7.3	明赤褐色で緻密な胎土。高台に2個の小孔が並んで存在。外面全体に茶褐色軸を施釉。	S60	出土地不明
第82回 図版54 36	角瓶	口縁部	8.3 — —	灰色で緻密な胎土。外面全面に算本文が施され、角の部分は後付け。表面には厚く自然釉が付着。初期沖縄産無釉陶器。	中央部 爆弾跡	爆弾跡②
第82回 図版54 37	角瓶	胴部	— —	暗灰褐色で緻密な胎土。外面に雷文を施し、角の部分は後付け。初期沖縄産無釉陶器。	K4 97 撥乱	K4-97 撥乱層
第82回 図版54 38	角瓶	底部	— —	黒褐色で緻密な胎土。外面に雷文を施し、角の部分は後付け。底部はナデで仕上げる。初期沖縄産無釉陶器。	第2 L4 99	L4-99 II層
第82回 図版54 39	角瓶	胴部	— —	暗黒褐色で緻密な胎土。外面に雷文を施し、角の部分は後付け。初期沖縄産無釉陶器。	100トレンチ第2 段階の基壇正面 石積内その下	II期基壇
第82回 図版54 40	角瓶	口縁部	— —	黒褐色で緻密な胎土。外面に雷文を施し、角の部分は後付け。初期沖縄産無釉陶器。	中央爆弾跡 K6 69 撥乱	爆弾跡②
第82回 図版54 41	壺	口縁部	15.6 — —	暗赤褐色で緻密な胎土。口縁部が大きく外反して肥厚し、口唇部は外に向く。	表 L2 104	L2-104 表採
第82回 図版54 42	壺	口縁部	17.6 — —	根褐色で緻密な胎土。口縁部は逆L字状で頸部は直立。口縁部側面に沈線が一条巡る。	か・わ・や・跡 の覆土	か・わ・や・跡 I層
第82回 図版54 43	壺	口縁部	17.0 — —	暗赤褐色で緻密な胎土。口縁部は逆L字状で、外面全体に鉄泥軸を施釉。口縁部下部に3条の沈線、肩部外側に縞目文を付け、焼成時に付したとみられる付着物2つあり。初期沖縄産無釉陶器。	表 K3 92	K3-92 表採
第82回 図版54 44	壺	口縁部	10.0 — —	黒灰色で緻密な胎土。口縁部は僅かに膨らむ。初期沖縄産無釉陶器。	K5 97 撥乱層	K5-97 撥乱層

注「—」:計測不可

第24表 沖縄産無釉陶器観察一覧(3)

単位:cm

検査番号 図版番号	器種	部位	口径 高さ 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第82回 図版54 45	壺	口縁部	6.6 — —	黒灰色で緻密な胎土。口縁部は三角形状。内面の器面はまだらに剥離。初期沖縄産無釉陶器。	K3 96 3号 石組遺構内 SW3遺構	K2-96 SW3
第82回 図版54 46	壺	口縁部	6.0 — —	暗赤褐色で緻密な胎土。口縁部上面は平坦で外面端部を引き出す。	L0 97 井戸状石組 東側グリッド外	L0-97 SW13
第82回 図版54 47	壺	口縁部	13.2 — —	暗茶褐色で緻密な胎土。口縁部は玉縁状に厚く肥厚。	表 L6 96	L6-96 表採
第82回 図版54 48	壺	底部	— — 15.6	明赤褐色で砂粒を多く含む胎土。外面上半と内面全体にマンガン釉を施釉。底部の作付けは粗い。	K6 98 第2層 70-80	K6-98 II層
第83回 図版55 49	火炉	口縁部	18.6 — —	暗赤褐色で緻密な胎土。口縁内側に平面三角形の突起を貼付し、全体的に泥軸が窪んでくる。初期沖縄産無釉陶器。	SW13 内下部	L0-96 SW13
第83回 図版55 50	火炉	口～底部	— — —	暗茶褐色で緻密な胎土。口縁部は「く」字に内溝し、胴部に横位に耳を貼付。全体的に火膨れし、底部の作付けは粗く個体の破片が融着。初期沖縄産無釉陶器。	表 L2 96	L2-96 表採
第83回 図版55 51	火炉	底部	— — 11.3	暗茶褐色で緻密な胎土。底部外面に円柱状の脚を3点貼り付けたとみられ、脚の先はナデで仕上げる。初期沖縄産無釉陶器。	表 L2 96	L2-96 表採
第83回 図版55 52	壺	口～底部	— — —	黒褐色で緻密な胎土。円盤形でつまみは外面中央に粘土紐を貼り付けて成形。初期沖縄産無釉陶器。	K2 100 南石段 (基壇)の内側の 基壇石列	南跡り場 断面①
第83回 図版55 53	壺	口～底部	底 17.2	黒褐色で緻密な胎土。円盤形で外面中央につまみを貼り付けた痕跡あり。内面にはサンゴの目跡が僅かに確認できる。初期沖縄産無釉陶器。	表 L5 96	L5-96 表採
第83回 図版55 54	壺	口縁部	— — —	暗茶褐色で緻密な胎土。底と持を持ち、持の端は僅かに内湾。外面に自然釉が窪み焼成時の灰とみられる付着物あり。	L0 97 SW13 井戸状石組 東側グリッド外	L0-97 SW13
第83回 図版55 55	壺	口縁部	底 19.2	暗茶褐色で緻密な胎土。外面中位がくびれ、沈線が1条巡る。自然釉が僅かに窋れる。	表 L2 96	L2-96 表採
第83回 図版55 56	壺	口縁部	撮 6.8	暗茶褐色で緻密な胎土。高台付きの壺を伏せた形態。つまみは付ける高台と同じ形態。初期沖縄産無釉陶器。	表 L2 96	L2-96 表採
第84回 図版56 57	甕	口縁部	79.4	赤褐色で砂粒を多く含む胎土。口縁部は逆L字形で颈部に突帯を一条貼付。	4号甕	L1-2-93 4号甕
第84回 図版56 58	甕	口縁部	— — —	暗赤褐色で砂粒を多く含む胎土。口縁部は貼付で、等間隔に指による押圧文を巡らし、外部下半に龍の一部(タテガミ?)を貼付。62と同一個体で、63・64も同一個体か。	表土 K10 103	K10-103 表土
第84回 図版56 59	甕	口縁部	62.6	暗赤褐色で砂粒を多く含む胎土。口縁部は跨状に強く引き出す。	L8 98 表	表採
第84回 図版56 60	甕	口縁部	— — —	明赤褐色で緻密な胎土。口縁部は貼り付けて成形され、口唇部は僅かに内側に飛び出す。	K1 96 石組遺構内	K1-96 SW9
第84回 図版56 61	甕	口縁部	— — —	暗赤褐色で緻密な胎土。口縁部は外側に折り返す。内外面全体に鉄泥釉を施釉。沖縄産初期無釉陶器。	SW13	L0-96 SW13
第84回 図版56 62	甕	胴部	— — —	赤褐色で砂粒を多く含む胎土。龍の頸部を貼付。58と同一個体。63・64も同一個体か。	L4 100	L4-100 表採
第84回 図版56 63	甕	胴部	— — —	赤褐色で砂粒を多く含む胎土。龍の胴部を貼付。58・62・64と同一個体か。	表 L0 98	L0-98 表採
第85回 図版56 64	甕	胴部	— — —	赤褐色で砂粒を多く含む胎土。4本爪の龍の手を貼付。58・62・63と同一個体か。	K4 97 第2層 10-20	K4-97 II層
第85回 図版56 65	甕	底部	— 20.7	赤褐色で緻密な胎土。内面全体に厚く石灰が付着。	4号カメ	L1-2-93 4号甕
第85回 図版56 66	甕	胴～底部	— 31.0	暗赤褐色で緻密な胎土。外面下半の一部に石灰付着。内面下半に厚く石灰が付着するが、内面底部には付着しない。内面の一部に銅鏡、鉄鏡付着。	1号甕	L0-92 1号甕

注:「-」:計測不可

第25表 陶質土器集計表

分類	皿		鍋						鐵か土瓶		土瓶				
	口縁部	底部	口～底部	口～胴部	口縁部	耳	胴部	底部	胴部	底部	口縁部	耳	注口	胴部	底部
個数	1	6	2	1	99	19	116	5	31	107	12	6	10	49	2

分類	鉢			火炉						蓋			
	口縁部	胴部	底部	口縁部	耳	胴部	底部	突起	口～底部	口縁部	掘み	胴部	底部
個数	32	8	9	54	17	90	27	2	8	133	44	35	1

分類	培塿			甌		土管		七輪		土鉢	器種不明			合計
	口縁部	耳	胴部	口縁部	胴部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部		口縁部	胴部	底部	
個数	2	1	1	3	1	3	1	1	1	1	3	79	16	1035

第26表 陶質土器観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第86図 図版57 1	鍋	口～胴部	20.3 — —	口縁部は「く」の字に折れ曲がり、口縁部外面に細い紐状の把手が付く。全体的にロクロナデが確認でき外面下半にロクロケズリ。外面胴部下半に広範囲にススが付着し、内面の一部に石灰付着。	K1 96 石組 遺構内	K1-96 SW9
第86図 図版57 2	鍋	口縁部	— — —	口縁部外面に細い紐状の把手が付く。僅かに白色粒混入。	SW13 下部	L0-96 SW13
第86図 図版57 3	土瓶	口縁部	8.1 — —	口縁部は短く直立し、全体的に丁寧なロクロナデ。僅かに白色粒、雲母混入。	かわや跡 覆土	かわや跡 I層
第86図 図版57 4	土瓶	口縁部	— — —	口縁部は短く直立し、全体的に丁寧なロクロナデ。肩部に3条の浅い沈線。僅かに白色粒混入。	かわや跡 覆土中	かわや跡 I層
第86図 図版57 5	土瓶	胴部	— — —	稜があり算玉型を呈する。外面下半はロクロケズリ。一部スス付着。	かわや跡 覆土中	かわや跡 I層
第86図 図版57 6	土瓶	注口	— — —	内外面ロクロナデ。注口部は別作いで貼付。	表 K6 96	K6-96 表採
第86図 図版57 7	蓋	口～底部	底19.1 5.45 撮み 6.95	鍋の蓋で高台付きの皿を伏せたような器形。全体的に丁寧なロクロナデ。僅かに白色粒、雲母混入。	L0 97 井戸 状遺構外 西グリット	L0-97 SW13?
第86図 図版57 8	蓋	口～底部	底 8.6 3.35 5.85 5.85 撮み 1.5	土瓶の蓋。底と持があり内外面をロクロナデするが外面は粗いナデ。持はロクロで引き出したか。僅かに雲母混入。	K1 96 石組 遺構内	K1-96 SW9
第86図 図版57 9	蓋	口縁部	— — —	土瓶の蓋。裏面に持があるが非常に低い。全体的に丁寧なロクロナデ。僅かに白色粒混入。	表 L4 101	L4-101 表採
第86図 図版57 10	火炉	口縁部	13.0 — —	口縁部内面に受部を貼付。胴部側面に台形の把手を貼付し、外面には白化粧土焼き落としによる圓線が巡る。受部にスス付着。僅かに白色粒、雲母混入。	表土 L4 100	L4-100 表土
第86図 図版57 11	火炉	口縁部	24.5 — —	底部から簡略に立ち上がり、口縁部は「く」の字に強く内湾。外面には白化粧土焼き落としによる圓線が巡る。内面の一部にはスス付着。僅かに白色粒、雲母混入。	L0 97	L0-97 表採
第86図 図版57 12	火炉	底部	— — 12.8	高台は貼付で台形を呈する。外面には白化粧土焼き落としによる圓線が巡る。内面に墨色付着物あり、僅かに雲母混入。	かわや跡の 覆土中	かわや跡 I層
第86図 図版57 13	火炉	底部	— — 13.2	高台は貼付で台形を呈する。外面には白化粧土焼き落としによる圓線が巡る。外内の一部に白化粧土が付着。僅かに雲母混入。	L0 97 SW13 井戸状石組 遺構外東側 グリット	L0-97 SW13
第86図 図版57 14	鉢	口縁部	— — —	内外面ロクロナデ。口縁部は内湾し、口縁部下部には沈線が1条と波状文が5条巡る。	L0 97	L0-97 表採
第86図 図版57 15	鉢	底部	— — 10.0	内外面ロクロナデ。底部には糸切り痕が残る。僅かに雲母混入。	表土 K9 101	K9-101 表土
第86図 図版57 16	焙烙	口縁部	18.9 — —	全体的に丁寧なロクロナデ。口縁部は僅かに膨らむ。外の一部にスス付着。僅かに赤色粒、雲母混入。	北側 壁面	II期墓壙 北側裏状?

注「—」:計測不可

第27表 瓦質土器集計表

分類	沖縄産														
	蓋	鉢		浅鉢	擂鉢	植木鉢		人形	簡物		火炉			風炉	器種不明
	口縁部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	胴部	口～底部	底部	口縁部	底部	脚	胴部	
個数	1	1	2	1	3	1	1	2	1	2	11	2	1	17	

分類	本土産										合計
	蓋	鉢				擂鉢	火炉		風炉	器種不明	
	胴部	口縁部	胴部	底部	脚	胴部	底部	口縁部	底部	胴部	底部
個数	1	12	8	1	2	1	1	1	1	2	79

第28表 瓦質土器観察一覧

単位:cm

捕団番号 図版番号	器種	部位	分類	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第87図 図版58 1	鉢	口	本土系	30.35 — —	色調(内外一橙色、断一浅黄色)。胎土精良。スタンプによる粗雑な花蓋文。	表土層 K4 100	K4-100 表土
第87図 図版58 2	鉢	口	本土系	— — —	色調(全て灰色)。胎土精良。スタンプによる菊花文と菱文。	K4 K5 96 第1コーラル	K4-5-96 I層 (コーラル層)
第87図 図版58 3	鉢	口	本土系	— — —	色調(内外一鈍黄橙色、断一灰黄)。胎土精良。スタンプによる菊花文。	K5 95 第I層 コーラル層	K5-95 I層 (コーラル層)
第87図 図版58 4	鉢	口	本土系	27.8 — —	色調(内外一灰色、断一淡黄色)。胎土粗砂混入。突帯で区画し、スタンプによる1より丁寧な花蓋文。本土産。	表土 撥乱	撥乱
第87図 図版58 5	鉢	胴	本土系	— — —	色調(全て灰黄色)。胎土赤色粒混入。スタンプによる菊花文。	中央畦断面トレ 2層 東隅	中央觀察畦② II層
第87図 図版58 6	鉢	胴	本土系	— — —	色調(内外一橙色、断一灰黄色)。胎土精良。スタンプによる菊花文と輪花纹。	K5 95 第I層 コーラル層	K5-95 I層 (コーラル層)
第87図 図版58 7	植木鉢	口	沖縄産	— — —	色調(内外一灰色、断一灰黄色)。胎土精良。平面形は方形。外面貼付文が、内面板状ナデ痕が残る。	S60	出土地不明
第87図 図版58 8	植木鉢	胴	沖縄産	— — —	色調(全て灰色)。胎土精良。貼付縫目状突帯。	K10 93 K11 93 第1コーラル	K10-11-93 I層 (コーラル層)
第88図 図版59 9	擂鉢	底	本土系	— 19.3 —	色調(内外一黒色、断一灰色)。胎土細砂混入。擂目4本/1cm。外面ミガキ。	第2 中央觀察畦	中央觀察畦① II層
第88図 図版59 10	擂鉢	胴	沖縄産	— — —	色調(全て灰白色)。胎土精良。擂目5本/1.5cm。	L0 東西トレンチ 断面 東隅最奥 区	L0 不明
第88図 図版59 11	浅鉢	口	沖縄産	— — —	色調(全て浅黄橙色)。胎土赤色粒混入。	L0 東西トレンチ 東隅上V2番区 石列内	石列2・3内
第88図 図版59 12	風炉	脚	沖縄産	— — —	色調(全て灰色)。胎土精良。内面板状ナデ痕が残る。	表 L3 97	L3-97 表採
第88図 図版59 13	鉢	脚	本土系	— — —	色調(内外一橙色、断一灰色)。胎土精良。	第2層 K6 K7 94	K6-7-94 II層
第88図 図版59 14	鉢	脚	本土系	— — —	色調(内外一灰色、断一灰白色)。胎土精良。	K7-8-9 97 第1コーラル	表採
第88図 図版59 15	壺	口	本土系	— — —	色調(全て橙色)。胎土精良。玉縁口緑。	L1 東西トレ 東隅区	中央觀察畦②
第88図 図版59 16	風炉	胴	本土系	— — 27.4	色調(内外一黒色、断一灰白色)。胎土細砂混入。胴部下端。突帯による区画内にスタンプによる花蓋文、連弁文。本土産。	L0 東西第II層 赤褐色土層	L0 不明
第89図 図版60 17	火炉	口	本土系	— — —	色調(内外一橙色、断一黄灰色)。胎土赤色粒混入。18と類するか。平面方形。スタンプによる菊花文だが、2・3・5・6とは原体異なる。内面に粘土絆痕残る。	K7 91 第2層 中央畦断面	K7-91 中央觀察 畦① II層 (黒土混赤土層)
第89図 図版60 18	火炉	脚	本土系	— — —	色調(内外一橙色、断一黄灰色)。胎土赤色粒混入。17と類するか。平面方形。	南東隅(立上り) 一期基壇 コーラル層	I期基壇?
第89図 図版60 19	火炉	口	本土系	14.0 — —	色調(全て灰色)。胎土細砂混入。ローリング受ける。	第IV期基壇 化粧石下の試掘 南より2番目穴	試掘2
第89図 図版60 20	火炉	底	本土系	— — 14.2	色調(全て灰白色)。胎土赤色粒混入。	第3層 下層断面 L6 94	田層
第89図 図版60 21	火炉	口	本土系	— 4.75 —	色調(内外一黑色、断一灰白色)。胎土細砂混入。	表土 L3 95 撲乱	L3-95 表土

注「-」:計測不可

第29表 カムイヤキ集計表

分類	壺		器種不明 胸部	合計
	口～底部	胸部		
個数	1	1	6	8

第30表 カムイヤキ観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第89図 図版60 22	壺	口縁～ 底部	9.4 14.0 8.5 胴径15.0	口縁外面から頸部にかけて、輪轍痕。肩～胴部部分に叩き痕。胴下半部は調整痕をナデ消し。全体的に厚い。内面には抑え痕が残る。(新里B類資料)	不明	出土地不明

注「-」:計測不可

第31表 土器集計表

分類	沖繩產							合計	
	鍋	臺or甕	深鉢	器種不明					
	胴部	頭部	口縁部	口縁部	頭部	胴部	底部		
個数	1	1	1	8	1	129	15	156	

第32表 土器観察一覧

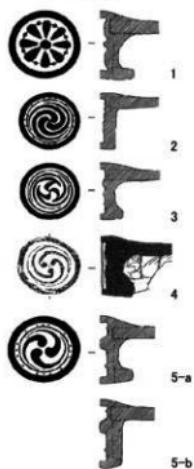
単位:cm

補図番号 図版番号	器種	部位	分類	口径 器高 底径	観察事項	旧出土地	新出土地
第89図 図版60 23	深鉢	口縁部	貝塚 前期?	— — —	頸部が屈曲し、屈曲部には指頭痕。口縁内部には工具を用いてのナデ調整あり。混入物が多い。貝塚時代前期の土器か?	L0-94 断割 第4層 最下層	L0-94 IV層
第89図 図版60 24	不明	口縁部	グスク?	— — —	口縁部は僅かに肥厚。屈曲部から口唇部までが短い。口唇部は平坦にナデ調整。外面は工具を用いて調整。指ナデ部分もあり。内面は指ナデ調整。調整部に棱が残存。	L0-94 断割 第4層 最下層	L0-94 IV層
第89図 図版60 25	壺or甕	頸部	グスク	— — —	頸部が屈曲し、屈曲部の内面には、調整により棱をもつ。口縁外面は工具を用いてナデ調整。口縁内面は指ナデ調整されるが、わずかに工具調整痕が残存。内面頸部以下は、指ナデ。	2層 黒色土 混り赤土層 K6-95-96	K6-95-96 II層 (黒土混赤土層)
第89図 図版60 26	不明	頸部	宮古式 土器	— —	外面は黒色を呈し、磨き調整し、光沢がある。内面頸部上部は削り、底部下はナデ調整。	SW13	L0-96 SW13
第89図 図版60 27	不明	胴部	宮古式 土器	— —	外面は黒色を呈し、磨き調整し、光沢がある。内面は丁寧にナデ調整されるが、一部に工具調整痕が残る。粘土紐接合部に白砂のラインが残る部分が一部分ある。	SW13	L0-96 SW13
第89図 図版60 28	不明	底部	グスク	— 11.7	外底は未調整。外面腰部に工具調整痕。内面はナデ調整を行なうが、粘土を引きずった痕跡が一部に残る。	中央畦 断割トレ 第Ⅲ層 東隅区	中央観察畦② Ⅲ層

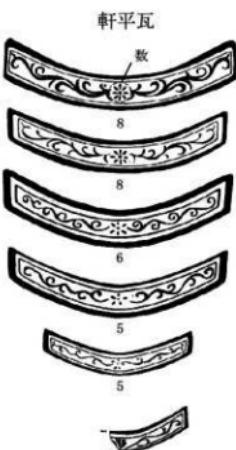
注「—」:計測不可

凡例(第33表 瓦集計表 大和瓦・明朝系役瓦)

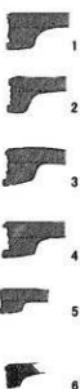
軒丸瓦



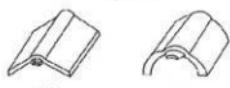
大和系瓦



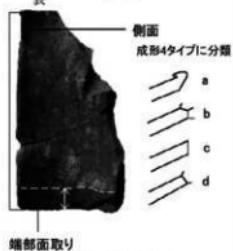
軒平瓦



雁振瓦

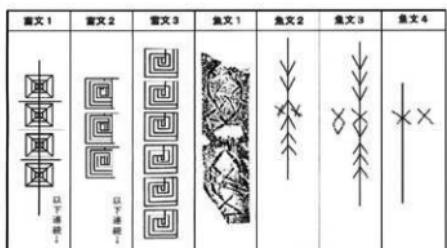
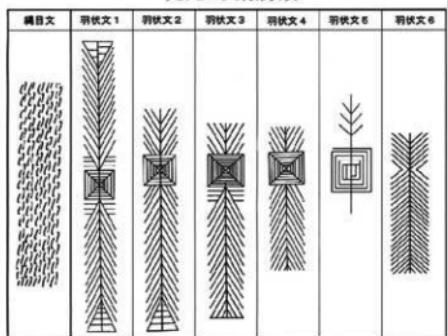


平瓦



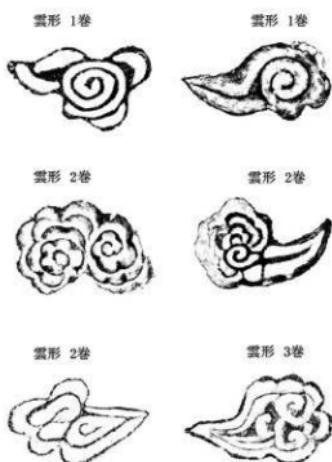
端部面取り
・面取りの幅(矢印部分)を測る。
幅が一定でない場合は、中間の幅をとる。

丸瓦の文様分類



明朝系瓦

役瓦(雲形・花形) 拓本



第33表 瓦集計表①(高麗系瓦)

分類	軒丸瓦	軒平瓦	丸瓦										
	灰色	灰褐色	灰褐色					赤褐色					
	瓦頭部片	瓦頭部片	羽状文 (縦目)		羽状文 (横目)			文様不明	羽状文 (縦目)		羽状文 (横目)	文様不明	端部 中央片
			玉縁欠落 角1つ	箇部	玉縁欠落 中央片	箇部	端部 面長6.5cm	箇部	玉縁欠落 中央片	箇部	箇部	箇部	
個数	1	3	1	3	1	2	1	5	1	4	3	1	1

分類	平瓦											
	灰褐色											
	癸酉年文 + 羽状文(縦目)	癸酉年文 + 羽状文(横目)	大天片	大天片 + 羽状文(縦目)	羽状文 (横目)			羽状文 (横目)				
	箇部	箇部	箇部	箇部	箇部	廣端 角1つ	廣端 中央片	箇部	廣端 角1つ	廣端 中央片	箇部	
個数	9	10	12	1	1	3	5	3	60	2	4	5

分類	平瓦										
	灰褐色						赤褐色				
	羽状文 (横目)						大天片	大天片 + 羽状文(横目)	格子文	格子文 + 羽状文(横目)	
	廣端角1つ			廣端中央片			箇部	箇部	箇部	箇部	箇部
個数	1	1	3	1	1	1	2	2	1	5	1

分類	平瓦										
	赤褐色						褐色				
	羽状文 (横目)		文様不明		廣端 角1つ	廣端 角1つ	廣端 長さ 3.3cm	癸酉年文	癸酉年文 + 羽状文(縦目)	癸酉年文 + 羽状文(横目)	格子文 + 羽状文(横目)
	箇部 中央片	箇部	廣端 中央片	箇部				箇部	箇部	箇部	箇部
個数	1	14	1	16	2	4	1	1	2	1	1

分類	平瓦					有段式平瓦	合計	
	褐色				褐色			
	羽状文 (縦目)		羽状文 (横目)		羽状文(横目)			
	廣端 中央片	廣端中央片	箇部	廣端中央片				
個数	1	1	3	3	1	1	274	

第33表 瓦集計表②(大和系瓦)

瓦の種類 色調 部位の計測値 算出式移 動調の被覆量 残存状況	瓦の瓦 灰 色												青 部												
	瓦緑泥～瓦墨												青部												
	瓦灰泥～瓦墨												青部												
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性												耐候性											
耐候性		耐候性																							

※()は、重量。重量の計測は、表土出土の箇部に関してのみ。☆は、有孔を1点含む。

第33表 瓦集計表③(大和系瓦)

瓦の種類 色調 記位 部位・計量 実測・目視 判別・取扱 現存状況	瓦																				
	灰色										褐色										
	黄瓦～銀瓦										不純物～頃瓦										
	無										無										
	無										無										
	王経瓦 4cm×16cm										王経瓦 4cm×16cm										
	溝瓦										又種不明(或化)										
	側面										側面(縦)										
	側面										側面										
	2.1～2.5	平明			不可	2.1～2.5	2.6～3.0	3.1～3.5	不明		1.6～2.0	2.1～2.5	2.6～3.0	3.1～3.5	4.1～5.0	不明	不明	2.6～3.0	3.1～3.5	4.1～5.0	不明
表面の幅		表面の幅			表面の幅	表面の幅			表面の幅		角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角
1.1～1.0		1.1～1.0			1.1～1.0	1.1～1.0			1.1～1.0		1.1～1.0	1.1～1.0	1.1～1.0	1.1～1.0	1.1～1.0	1.1～1.0	1.1～1.0	1.1～1.0	1.1～1.0	1.1～1.0	1.1～1.0
中央片		中央片			中央片	中央片			中央片		角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角
中央片		角1つ			角1つ	角1つ			角1つ		角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角
中央片		角1つ			角1つ	角1つ			角1つ		角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角
個数		1	1	2	1	3	1	3	1	1	1	1	2	4	3	2	1	2	1	5	8
		1	1	2	1	3	1	3	1	1	1	1	2	4	3	2	1	2	1	5	8
		1	1	2	1	3	1	3	1	1	1	1	2	4	3	2	1	2	1	5	8
		1	1	2	1	3	1	3	1	1	1	1	2	4	3	2	1	2	1	5	8

※()は、重量。重量の計測は、表土出土の箇部に関してのみ。☆は、有孔を1点含む。

第33表 瓦集計表④(大和系瓦)

瓦の種類 色調 形状 部位の計測値 開口部寸法 側面の経年変化 残存状況	瓦棟用												瓦棟大落												角 直 曲 斜 不規則 不明		
	瓦棟長 4~5cm												瓦棟長 5cm以上														
	羽状文(横)						羽状文(横)						羽状文(横)						羽状文(横)								
	羽状文(横)						羽状文(横)						羽状文(横)						羽状文(横)								
	四脚			四脚			四脚			四脚			四脚			四脚			四脚			四脚					
	直	直	直	直	直	直	直	直	直	直	直	直	直	直	直	直	直	直	直	直	直	直	直	直	直		
	2.1~2.5	2.6~3.0	3.1~3.5	3.6~4.0	4.1~4.5	4.6~5.0	5.1~5.5	5.6~6.0	6.1~6.5	6.6~7.0	7.1~7.5	7.6~8.0	8.1~8.5	8.6~9.0	9.1~9.5	9.6~10.0	10.1~10.5	10.6~11.0	11.1~11.5	11.6~12.0	12.1~12.5	12.6~13.0	13.1~13.5	13.6~14.0	14.1~14.5		
	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角	角		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25		
個数	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	4	1	1	1	2												

互生種類	瓦 瓦																						
	褐色						暗褐色~深褐色																
側面 背面 側面の斑紋 斑紋 側面の斑紋 斑紋状況	羽状文(穂)			羽状文(粒)			羽状文(穂)			羽状文-2			溝文(糸)		文様不規(漸化)								
	刺繡	刺繡			刺繡	刺繡			刺繡	刺繡	刺繡	刺繡	刺繡	刺繡									
	不明	2.1~2.5			2.1~3.0			3.1~3.5	3.6~4.0	4.1~5.0	不明			0.0~1.5	2.1~3.5	不明	2.1~2.5	不明					
	面数9幅			面数9幅			面数9幅			面数9幅			面数9幅			面数9幅							
2.1~2.4	4.1~5.0	5.1~6.0	6.1~7.0	計数不可		3.1~4.0	4.1~5.0	5.1~6.0	4.1~5.0	5.1~6.0	6.1~7.0	7.1以上	4.1~5.0	5.1~6.0	6.1~7.0	計数不可		3.1~4.0	4.1~5.0	5.1~6.0	6.1~7.0	計数不可	
高1つ	高1つ	高1つ	中高片	角1つ	角1つ	中央片	角1つ	角1つ	角1つ	角1つ	角1つ	中央片	角1つ	角1つ	角1つ	角1つ	角1つ	角1つ	角1つ	角1つ	角1つ	角1つ	角1つ
個 数	5	3	2	3	4	2	1	1	1	1	1	1	3	1	1	1	2	2	1	1	1	1	1

※()は、重量、重量の計測は、表土出土の箇部に関してのみ。☆は、有孔を1点含む。

第33表 瓦集計表⑤(大和系瓦)

瓦の種類 色調	平 瓦																																		
	灰 色												白 色																						
	広幅部						頭部						脚部																						
部位 部位の計測範 部品文様 刺繡の縫合状 現状	側面a bタイプ						側面c dタイプ						側面e fタイプ						側面g hタイプ																
	側面a bタイプ						側面c dタイプ						側面e fタイプ						側面g hタイプ																
	側面a bタイプ						側面c dタイプ						側面e fタイプ						側面g hタイプ																
	側面a bタイプ						側面c dタイプ						側面e fタイプ						側面g hタイプ																
	側面a bタイプ						側面c dタイプ						側面e fタイプ						側面g hタイプ																
	側面a bタイプ						側面c dタイプ						側面e fタイプ						側面g hタイプ																
	側面a bタイプ						側面c dタイプ						側面e fタイプ						側面g hタイプ																
	側面a bタイプ						側面c dタイプ						側面e fタイプ						側面g hタイプ																
	側面a bタイプ						側面c dタイプ						側面e fタイプ						側面g hタイプ																
	側面a bタイプ						側面c dタイプ						側面e fタイプ						側面g hタイプ																
個 数	11	24	40	39	11	328	68	584	76	16	1329	(33.04kg)	1	5	2	1	29	77	57	28	8	1	4	1	12	23	3	5	1	1	1	1	1	18	56

瓦の種類 色調	平 瓦																																			
	灰 色												白 色																							
	脚部						広幅部						頭部						脚部																	
部位 部位の計測範 部品文様 刺繡の縫合状 現状	側面a bタイプ						側面c dタイプ						側面e fタイプ						側面g hタイプ																	
	側面a bタイプ						側面c dタイプ						側面e fタイプ						側面g hタイプ																	
	側面a bタイプ						側面c dタイプ						側面e fタイプ						側面g hタイプ																	
	側面a bタイプ						側面c dタイプ						側面e fタイプ						側面g hタイプ																	
	側面a bタイプ						側面c dタイプ						側面e fタイプ						側面g hタイプ																	
	側面a bタイプ						側面c dタイプ						側面e fタイプ						側面g hタイプ																	
	側面a bタイプ						側面c dタイプ						側面e fタイプ						側面g hタイプ																	
	側面a bタイプ						側面c dタイプ						側面e fタイプ						側面g hタイプ																	
	側面a bタイプ						側面c dタイプ						側面e fタイプ						側面g hタイプ																	
	側面a bタイプ						側面c dタイプ						側面e fタイプ						側面g hタイプ																	
個 数	31	5	3	8	10	192	27	31	9	261	41	377	100	26	1	1021	(12.69kg)	2	4	2	1	12	20	82	24	4	3	7	36	10	3	1	14	1	6	1

瓦の種類 色調	平 瓦														
	緑 色														
	脚部														
部位 部位の計測範 部品文様 刺繡の縫合状 現状	側面a bタイプ						側面c dタイプ								
	側面a bタイプ						側面c dタイプ								
	側面a bタイプ						側面c dタイプ								
	側面a bタイプ						側面c dタイプ								
	側面a bタイプ						側面c dタイプ								
	側面a bタイプ						側面c dタイプ								
	側面a bタイプ						側面c dタイプ								
	側面a bタイプ						側面c dタイプ								
	側面a bタイプ						側面c dタイプ								
	側面a bタイプ						側面c dタイプ								
個 数	3	3	4	2	1	1	6	24	63	67	26	1	12	866	(8.3kg)

* ()は、重畠。重量の計測は、表土出土の箇部に關してのみ。☆は、有孔を1点含む。

第33表 瓦集計表⑥(明朝系軒丸瓦)

色 調 釉 接合材 分類	褐色(生焼色)		灰 色																				
	釉薬無し		釉薬なし																				
	接合材無し		接合材無し																				
	I	不明	I	II	III	IV			V			不明	I	II	IV	V							
	B	不明	A	C	A	A	A	B	C	D	A	B	不明	不明	A	A	C	D	A	B	C	不明	不明
個 数	1	1	3	1	2	1	2	1	4	3	2	6	8	4	1	2	1	1	18	3	1	1	35

色 調 釉 接合材 分類	灰 色			赤 色																					
	釉薬なし		マンガン釉 (黒釉)		釉薬なし																				
	セメント材			漆喰材		接合材無し			漆喰材			漆喰材													
	III	V	不明	V		V		VI		不明	V		VI		VII	VIII	不明								
	A	A	B	不明	B	B	C	不明	A	B	不明	不明	B	C	不明	A	B	不明	B	A	B	不明			
個 数	2	1	2	2		1	1	1	2	3	6	3	18	2	25	9	18	11	12	1	6	5	51		

色 調 釉 接合材 分類	赤 色																						
	釉薬なし		マンガン釉(黒釉)																				
	セメント材			接合材無し			漆喰材			漆喰材			漆喰材										
	V		VI		VII	VIII	不明	IV	V	VI	VII	不明	IV	V	VI								
	B	C	A	B	不明	A	A	不明	E	C	不明	A	不明	A	不明	B	C	不明	A	B	不明		
個 数	1	11	5	7	2	1	3	20	1	7	2	3	2	1	23	1	1	2	69	13	18	10	11

色 調 釉 接合材 分類	赤 色														合 計		
	マンガン釉(黒釉)																
	漆喰材		セメント材														
	VII	VIII	不明	IV	V		VI	VII	VIII	VII	VIII	不明					
	A	B	C	不明	A	C	不明	A	B	不明	A	B	C	不明			
個 数	7	1	1	117	1	124	4	7	10	1	5	1	3	54	834		

第33表 瓦集計表⑦(明朝系軒平瓦)

色 調 葉 軸 接合材 分類	灰 色																					
	軸葉なし																					
	接合材無し										漆喰材								セメント材			
	I				II				V		不明				II				V			
	A	B	A	B	D	A	B	不明	不明	不明	A	B	C-1	C-2	A	B	不明	不明	A	A	B	B-1
個 数	3	1	4	2	2	4	3	3	13	1	1	1	1	3	12	20	9	1	2	4	1	1

色 調 葉 軸 接合材 分類	灰 色								赤 色													
	マンガン軸(黒軸)								軸葉なし													
	接合材無し				漆喰材				セメント材				接合材無し				漆喰材				セメント材	
	V		V		V	不明	II	V	不明	IV	V	不明	III	V	不明	III	V	不明	A	B	C	不明
	B	A	B	不明	不明	C-3	B	C	不明	不明	A	B	C	不明	不明	A	B	C	不明	不明	不明	不明
個 数	1	1	3	1	1	1	6	4	19	2	1	15	9	33	40	1	5	2	9	6		

色 調 葉 軸 接合材 分類	赤 色													合 計								
	マンガン軸(黒軸)																					
	接合材無し				漆喰材				漆喰材				セメント材									
	V		V		V	不明	II	V	不明	V	不明	II	V	不明	V	不明	V	不明	A	B	C	不明
	B	不明	不明	B	A	A	B	C	不明	不明	A	B	C	不明	不明	A	B	C	不明	不明	不明	不明
個 数	17	40	10	1	6	2	81	19	176	68	1	30	4	34	20			761				

第33表 瓦集計表⑧(明朝系丸瓦)

第33表 瓦集計表⑨(明朝系丸瓦)

色 調 業 部 面取 り数 接合材	赤 色																																					
	マン ガン 級 (黒 色)												無し																									
	端 部										端 部																											
	面取り有り 2cm~4cm未溝		面取り有り 2cm~4cm未溝		面取り有り 4cm~6cm未溝		面取り無し																															
	漆喰付着	セメント材付着	漆喰付着	セメント材付着	セメント材付着	漆喰付着	セメント材付着	漆喰付着	セメント材付着	漆喰付着																												
	角1つ	平丸片	角1つ	平丸片	中丸片	角1つ	中央片	角1つ	中央片	角1つ	中央片	角1つ	中央片	角1つ	中央片	角1つ	中央片	角1つ	中央片	中央片																		
	9	16	32	60	1	4	2	1	85	185	3	211	196	6	2	8	4	1	142	156	4																	
	個 数																																					
玉 線 級																																						
色 調 業 部 面取 り数 接合材	無し																																					
	端 部										玉 線 級																											
	面取り有り 4cm~5cm(中)		玉 線 級 5cm以上(大)																																			
	面取り不明		面取り一回		面取り二回		面取り不明		玉 線 級 大落ち																													
	漆喰付着	セメント材付着	漆喰付着	セメント材付着	漆喰付着	セメント材付着	漆喰付着	セメント材付着	漆喰付着																													
	角2つ	中央片	角1つ	中丸片	角1つ	中丸片	角1つ	中央片	角1つ	中央片	角1つ	中央片	角1つ	中央片	角1つ	中央片	角1つ	中央片	角1つ	中央片																		
	1	6	3	8	2	2	5	2	16	1	9	2	2	1	1	5	8	7	2	2	187																	
	個 数																																					

色 調 業 部 面取 り数 接合材	赤 色																														
	無し												端 部																		
	玉 線 級										玉 線 級 大落ち																				
	面取り有り 4cm~5cm(中)		玉 線 級 5cm以上(大)																												
	面取り不明		面取り一回		面取り二回		面取り不明		玉 線 級 大落ち																						
	漆喰付着	セメント材付着	漆喰付着	セメント材付着	漆喰付着	セメント材付着	漆喰付着	セメント材付着	漆喰付着																						
	角2つ	中央片	角1つ	中丸片	角1つ	中丸片	角1つ	中央片	角1つ	中央片	角1つ	中央片	角1つ	中央片	角1つ	中央片	角1つ	中央片	角1つ	中央片											
	1	6	3	8	2	2	5	2	16	1	9	2	2	1	1	5	8	7	2	2	187										
	個 数																														

色 調 業 部 面取 り数 接合材	赤 色																																
	無し												端 部																				
	端 部										端 部																						
	面取り有り 4cm~5cm(小)		玉 線 級 4cm木溝(小)																														
	面取り一回		面取り二回		面取り不明		玉 線 級 大落ち										面取り有り 1cm木溝		面取り有り 2cm~2cm未溝		面取り有り 2cm~3cm未溝												
	漆喰付着	セメント材付着	漆喰付着	セメント材付着	漆喰付着	セメント材付着	漆喰付着	セメント材付着	漆喰付着	セメント材付着	漆喰付着	セメント材付着	漆喰付着	セメント材付着	漆喰付着	セメント材付着	漆喰付着	セメント材付着	漆喰付着	セメント材付着	漆喰付着												
	角1つ	中丸片	角1つ	中丸片	角1つ	中丸片	角1つ	中丸片	角1つ	中丸片	角1つ	中丸片	角1つ	中丸片	角1つ	中丸片	角1つ	中丸片	角1つ	中丸片	中丸片												
	3	1	85	44	153	5	4	4	1	47	60	5295	(643.2kg)	1	1	1	1	2	1	3	1	5	1	1	1	1	1	4	2	8	(0.7kg)	15952	(740kg)
	個 数																																

※ ()は、重畠。重畠の計測は、表土出土の箇部にに関してのみ。☆は、有孔を1点含む。

第33表 瓦集計表⑩(明朝系平瓦)

色 調 業 部 位 統 合 材	褐色										灰色																					
	マンガル板面		釉面無し		マンガル板面		釉面無し		マンガル板面		釉面無し		マンガル板		釉面無し		マンガル板		釉面無し													
	広場部					英園部					英園部					広場部																
	西1・緑瓦面 横長さ1.1~1.9cm					西1・緑瓦面 横長さ1.1~1.9cm					西1・緑瓦面 横長さ1.1~1.9cm					西1・緑瓦面 横長さ1.1~1.9cm																
	計測不可					不明瓦底					不明瓦底					不明瓦底																
	漆喰付着					漆喰付着					漆喰付着					漆喰付着																
	漆喰付着					漆喰付着					漆喰付着					漆喰付着																
	角1つ					角1つ					角1つ					角1つ																
	漆喰付着					漆喰付着					漆喰付着					漆喰付着																
	角1つ					角1つ					角1つ					角1つ																
個数	1	1	1	1	3	2	9	1	7	1	10	24	(1.5kg)			1	1	6	2	1	4	1	2	4	1	9	15	4	12	2		

色 調 業 部 位 統 合 材	黒 色										白 色																			
	釉 面 無し					広 場 部					釉 面 有り					広 場 部														
	西1・緑瓦面 横長さ1.1~1.9cm					西1・緑瓦面 横長さ2.0cm以上					西1・緑瓦面 横長さ1.1~1.9cm					西1・緑瓦面 横長さ2.0cm以上														
	庄筋と瓦面の差額 3.5~4.0cm未満					庄筋と瓦面の差額 4.0~4.5cm未満					庄筋と瓦面の差額 4.5~5.0cm未満					庄筋と瓦面の差額 2.0~2.5cm未満														
	漆喰付着					セント材 付着					漆喰付着					セント材 付着														
	角1つ					角1つ					角1つ					角1つ														
	角1つ					角1つ					角1つ					角1つ														
	角1つ					角1つ					角1つ					角1つ														
	漆喰付着					セント材 付着					漆喰付着					セント材 付着														
	角1つ					角1つ					角1つ					角1つ														
個数	1	9	2	22	4	1	1	1	1	1	1	6	1	1	1	33	12	1	3	1	35	1	3	5	1	43	13	3	1	4

色 調 業 部 位 統 合 材	黒 色										白 色																								
	釉 面 有り					庄 筋					漆 喚 瓦					不 明 瓦																			
	西1・緑瓦面 横長さ1.1~1.9cm					庄 筋					漆 喚 瓦					不 明 瓦																			
	庄筋と瓦面の差額 4.0~4.5cm未満					庄筋と瓦面の差額 2.0~2.5cm未満					庄筋と瓦面の差額 2.5~3.0cm未満					庄筋と瓦面の差額 3.0~3.5cm未満																			
	漆喰付着					セント材 付着					漆喰付着					漆喰付着																			
	角1つ					角1つ					角1つ					角1つ																			
	角1つ					角1つ					角1つ					角1つ																			
	角1つ					角1つ					角1つ					角1つ																			
	漆喰付着					セント材 付着					漆喰付着					セント材 付着																			
	角1つ					角1つ					角1つ					角1つ																			
個数	8	8	8	1	3	3	0	2	3	9	17	6	11	3	7	21	20	1	23	3	2	7	6	11	1	1	2	22	1	73	65	2	1	8	4

色 調 業 部 位 統 合 材	黒 色										白 色																
	釉 面 有り					庄 筋					漆 喚 瓦					不 明 瓦											
	西1・緑瓦面 横長さ1.1~1.9cm					庄 筋					漆 喚 瓦					不 明 瓦											
	庄筋と瓦面の差額 4.0~4.5cm未満					庄筋と瓦面の差額 2.0~2.5cm未満					庄筋と瓦面の差額 2.5~3.0cm未満					庄筋と瓦面の差額 3.0~3.5cm未満											
	漆喰付着					セント材 付着					漆喰付着					漆喰付着											
	角1つ					角1つ					角1つ					角1つ											
	角1つ					角1つ					角1つ					角1つ											
	角1つ					角1つ					角1つ					角1つ											
	漆喰付着					セント材 付着					漆喰付着					セント材 付着											
	角1つ					角1つ					角1つ					角1つ											
個数	300	433	88	91	2	5	3	1	3	1	1	3	5	1	1	3	2	1	1	1	1	1	1	9	68	9	4

※ ()は重量。重量の量測は、表土出土の筒部に關する。

第33表 瓦集計表⑪(明朝系平瓦)

色 調 種 類 部 位 組 合 材	赤 色																			
	マニ ガン 軸																			
	広 延 道																			
	漆-油柱板 幅51.1～13cm																			
柱頭と柱脚の距離 30～33cmの高さ		柱頭と柱脚の距離 35～46cmの高さ				柱頭と柱脚の距離 40～51cmの高さ		柱頭と柱脚の距離 52～63cmの高さ		柱頭と柱脚の距離 25～36cmの高さ		柱頭と柱脚の距離 30～41cmの高さ		柱頭と柱脚の距離 35～46cmの高さ						
油噴付着	セメント付着	接着材なし	油噴付着	セメント付着	接着材なし	油噴付着	セメント付着	接着材なし	油噴付着	セメント付着	接着材なし	油噴付着	セメント付着	接着材なし	油噴付着	セメント付着	接着材なし			
角1つ	中央丸	角2つ	角1つ	中央丸	角1つ	中央丸	角1つ	中央丸	角1つ	中央丸	角1つ	中央丸	角1つ	中央丸	角1つ	中央丸	角1つ	中央丸		
脚	55	23	1	31	27	8	3	1	28	7	2	17	12	8	4	9	8	12	5	3
脚	55	23	1	31	27	8	3	1	28	7	2	17	12	8	4	9	8	12	5	3

色 調 補 葉 部 位 組 合 材	赤 色												複数用 (複数用 横幅22cm以上)																								
	マジ ガン 柄						輪 壁 斜																														
	古 風 伝						古 風 伝																														
	不明風伝			細江直型			細江直型の輪壁 2.8~3.5cm横幅			細江直型の輪壁 3.0~3.5cm横幅			細江直型の輪壁 3.5~4.0cm横幅																								
							細江直型の輪壁 3.5~4.0cm横幅			細江直型の輪壁 4.0~4.5cm横幅			細江直型の輪壁 4.5~5.0cm横幅																								
							油喰付着	セメント付着	油喰付着	セメント付着	油喰付着	セメント付着	油喰付着	セメント付着	油喰付着																						
	角12× 中央丸	角12× 半丸丸	角12× 中央丸	角12× 中央丸	角12× 中央丸	角12× 中央丸	角12× 中央丸	角12× 中央丸	角12× 中央丸	角12× 中央丸	角12× 中央丸	角12× 中央丸	角12× 中央丸	角12× 中央丸	角12× 中央丸																						
	角12× 中央丸	角12× 半丸丸	角12× 中央丸	角12× 中央丸	角12× 中央丸	角12× 中央丸	角12× 中央丸	角12× 中央丸	角12× 中央丸	角12× 中央丸	角12× 中央丸	角12× 中央丸	角12× 中央丸	角12× 中央丸	角12× 中央丸																						
	鋼	28	27	18	40	429	205	166	83	11	8	4	1	1	35	23	13	9	10	13	10	8	43	8	21	18	14	7	2	1	2	3	1	1	1	1	1

色 調 種 部 位 細 工 組 合 材	赤 色												
	緑・緑紅色 線長3.0cm以上						緑・緑紅色 線長3.1～1.0cm						
	黒葉の葉脈 3.0～3.5cmの葉			黒葉の葉脈 3.5～4.0cmの葉			黒葉の葉脈 4.0～4.5cmの葉			黒葉の葉脈 4.5～5.0cmの葉			
油ぬけ材 付着	セラミック 材質	油ぬけ材 付着	セラミック 材質	結合材無し	セラミック 材質	油ぬけ材 付着	セラミック 材質	油ぬけ材 付着	セラミック 材質	油ぬけ材 付着	セラミック 材質	油ぬけ材 付着	
馬1頭	馬1頭	馬1頭	馬1頭	中馬匹	中馬匹	馬1頭	馬1頭	馬1頭	馬1頭	馬1頭	馬1頭	馬1頭	
鋼	6	9	7	2	1	1	2	5	4	1	2	29	18
鋼	6	9	7	2	1	1	2	5	4	1	2	29	18
鋼	12	11	10	6	9	34	30	37	33	31	43	29	18
鋼	16	14	16	22	7	9	6	130	7	1	10	4	7
鋼	16	14	16	22	7	9	6	130	7	1	10	4	7

※()は、重量・重量の計測は、表土出土の箇部についてのみ。

第33表 瓦集計表⑫(明朝系平瓦)

色 調 板 表 及 細 工 種 合 材	赤 色										大 和 風 で																										
	被覆なし			マニ ガン 被覆		被覆刷し			マニ ガン 被覆		被覆刷し			マニ ガン 被覆			赤																				
	正 壁 面		裏 壁 面		床 面		天井 面		床 面		天井 面			床 面		天井 面		マニ ガン 被覆																			
	床面刷		天井面刷		被覆なし		被覆刷無		被覆なし		被覆刷無			被覆なし		被覆刷無		赤																			
	床面被覆		天井面被覆		被覆なし		被覆刷無		被覆なし		被覆刷無			被覆なし		被覆刷無		マニ ガン 被覆																			
	床面被覆		天井面被覆		被覆なし		被覆刷無		被覆なし		被覆刷無			被覆なし		被覆刷無		赤																			
側 板	1	1	22	13	1	2	1	30	16	2	1	2	8	1	8	3	9	43	(1.3kg)	1	1	2	7	2	1	8	1	21	12	1	7	2	1	1	2	2	1

※()は、重量。重量の計測は、表土出土の箇部に関してのみ。

第33表 瓦集計表⑬(明朝系平瓦)

色 調 葉 緑 植 被 材 合 成 樹 脂 板	大 扇 風 で																																						
	赤 色																																						
	綠 葉 無																																						
	白 色																																						
	藍 色																																						
	黃 色																																						
	西×細田板 横長2.1m×1.0m			西×細田板 横長2.0cm以上			西×細田板 横長2.1~2.8m			西×細田板 横長3.0m以上																													
	瓦張と瓦の距離 3.5~4cm未溝			瓦張と瓦の距離 2.0~3.5cm未溝			瓦張と瓦の距離 2.0~3.5cm未溝			瓦張と瓦の距離 3.0~3.5cm未溝																													
	瓦張と瓦の距離 2.0~2.5cm未溝			瓦張と瓦の距離 2.5~3.0cm未溝			瓦張と瓦の距離 3.5~4cm未溝			瓦張と瓦の距離 4.0~4.5cm未溝																													
	透地×透地 セメント 付着			透地×透地 セメント 付着			透地×透地 セメント 付着			透地×透地 セメント 付着																													
	透地付着 セメント 付着			透地付着 セメント 付着			透地付着 セメント 付着			透地付着 セメント 付着																													
	角1つ 中央片 角1つ 中央片 角1つ 中央片			角1つ 中央片 角1つ 中央片 角1つ 中央片			角1つ 中央片 角1つ 中央片 角1つ 中央片			角1つ 中央片 角1つ 中央片 角1つ 中央片																													
側 数	10	4	3	2	1	1	3	2	1	1	1	2	5	27	5	11	12	28	18	26	17	1	14	1	9	7	1	1	5	3	13	6	1	2	2	3	266	293	199

※()は、重量。重量の計測は、表土出土の箇部に関してのみ。

第33表 瓦集計表⑩(明朝系役瓦)

分類 色 釉 葉 接合材 大きさなど	雲形												
	灰色				赤色								
	釉葉なし				釉葉なし				マンガン釉(黒釉)				
	漆喰材		セメント材		漆喰材		セメント材		漆喰材				
	大形品	大形品	不明品 (破損大)	大形品	不明品 (破損大)	中形品	小形品	中形品	小形品	不明品 (破損大)	2巻	3巻	不明
	2巻	不明	不明	不明	不明	不明	1巻	3巻	3巻	不明	2巻	3巻	不明
	個数	1	1	1	1	1	4	1	1	1	1	2	2

分類 色 釉 葉 接合材 大きさなど	雲形				花形			L字瓦		飾瓦花形								
	赤色				褐色 (生焼色)	灰色	赤色	灰色		赤色		灰色						
	マンガン釉(黒釉)							釉葉なし		マンガン釉 (黒釉)		釉葉なし						
	セメント材							接合材無し		漆喰材		漆喰材						
	大形品							大きさ・巻数・形状 不明				漆喰材						
	大形品	小形品		不明品 (破損大)				大きさ・巻数・形状 不明				漆喰材						
	1巻	不明	1巻	2巻	3巻			大きさ・巻数・形状 不明				漆喰材						
	個数	1	14	3	2	9	27	1	1	1	2	3	1	1				

分類 色 釉 葉 接合材 大きさなど	龍頭部		役瓦		大形丸瓦		合計	
	赤色	灰色	灰色	赤色	赤色	マンガン釉(黒釉)		
	釉葉なし		釉葉なし		マンガン釉(黒釉)			
	漆喰材		漆喰材		漆喰材			
	漆喰材		漆喰材		漆喰材			
	個数	1	1	1	1	103		

第34表 瓦観察一覧①

種類番号 国宝番号	造瓦 系統	種類	部位	分類	色調	観察事項	旧出土地	新出土地
第92回 国宝61 1	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	I-A	灰褐色	瓦当上部の資料。珠文が小さく多い。丸の耳状の花弁がみられる。	不明	出土地不明
第92回 国宝61 2	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	I-B	褐色	瓦当面を残す破片。丸瓦部がはまれている。褐色。瓦当面には前方への指揮で跡が明瞭。	不明	出土地不明
第92回 国宝61 3	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	I-C	灰褐色	瓦当を三分の二ほどを留める資料。灰褐色。額は被覆しているが、裏面全体に指揮がまだ残る。	表 L1-98	L1-98 表採
第92回 国宝61 4	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	II-A	灰褐色	瓦当面の側縁を残す破片。丸瓦部がはまれている。灰褐色。瓦当面には側縁への指揮で跡が明瞭。	660	出土地不明
第92回 国宝61 5	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	II-A	灰褐色	瓦当面の側縁を残す破片。丸瓦部がはまれている。灰褐色。瓦当面には側縁への指揮で跡が明瞭。	表土 K5-103	K5-103 表土
第92回 国宝61 6	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	II-A	灰褐色	正方形の花弁跡で、楽音を呈する。瓦当部の縁片。瓦当面は側縁で樂音。器體の厚さ1.7cm。	L-97	出土地不明
第92回 国宝61 7	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	IV-A	灰褐色	瓦当面の縁片。文様は牡丹。全体に扁平になる。花弁は三山状に円く表現される。裏面は側縁で樂音。	660	出土地不明
第92回 国宝61 8	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	IV-A	灰褐色	花弁の一部のみを残す瓦当縁片。三山状の花弁を残す。	660	出土地不明
第92回 国宝61 9	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	IV-E	赤褐色	外見がはげて、中の瓦当面のみを残した資料。文様は全体に扁平になる。花弁は三山の表現にならぬ。瓦当裏の成形は指揮で行はれ、やや凹凸面にならぬ。	表 K10-102	K10-102 表採
第92回 国宝61 10	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	IV-C	灰褐色	瓦当面はほぼ完全で、丸瓦の頭部が残る資料である。文様面(25×29mm)は瓦当面と文様自体も重じて、新たに合った文様面に花弁は二山形を呈している。瓦当面は指揮で成形のため凹凸を呈している。瓦当厚1.1cm。	不明	出土地不明
第92回 国宝61 11	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	IV-C	灰褐色	花文様部分のみを残して大きく被覆した瓦当資料。花弁が二山形状を見る文様。	K9-97	K9-97 表採
第92回 国宝61 12	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	IV-D	灰褐色	瓦当を欠落するものの、丸瓦の接合が残り、全体の状況を押さええることの出来る資料である。器體部分は裏面に向かって反曲する。文様は具象的である。山形状の花弁がある。赤褐色で樂音を呈せる。瓦当厚14.2mm。	SW13 内下部	L9-96 SW13
第93回 国宝62 13	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	IV-E	灰褐色	上記の文様顕型と同様であるが、文様全体の扁平化と花文様の輪廓がはらわれる。花弁は二山状で、花芯に輪郭が被付する。瓦当厚15.8mm。	K9-97 石鏡遺構内	K9-97 SW6
第93回 国宝62 14	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	V-A	灰褐色	ほぼ全体の器と合わせて瓦当資料である。文様は扁平化と花文様の輪廓がはらわれる。花弁は二山形状で、花芯に輪郭が被付する。瓦当厚15.0mm。器體の付着がある。	K5-97 Ⅱ層	K5-97 Ⅲ層
第93回 国宝62 15	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	V-B	灰褐色	器の風化から残る瓦当破片。文様は牡丹文。瓦当裏は側縁でによる痕跡がある。瓦当厚15.0mm。	不明	出土地不明
第93回 国宝62 16	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	V-A	灰褐色	牡丹文様の瓦当破片である。文様は比較的の明瞭。文様は14個である。瓦当裏には成形時の指揮が残る。瓦当厚15.0mm。器體の付着がある。	表 K8-102	K8-102 表採
第93回 国宝62 17	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	V-B	赤褐色	文様を僅かに残す瓦当小片である。文様は牡丹文様。	表 K10-102	K10-102 表採
第93回 国宝62 18	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	V-B	赤褐色	瓦当表面を失いた資料。瓦当裏面は概く整形痕が跡跡に残る。瓦当断面は丸山形で底を呈する。文様は牡丹。瓦当厚14.5mm。器體の付着を認め。	表 K9-100	K9-100 表採
第93回 国宝62 19	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	V-C	赤褐色	瓦当の成形および文様などが丁寧な作りである。牡丹の花弁は二山形状。瓦当裏面の側縫形の平滑。断面は丸山形で底を扁平である。瓦当厚15.0mm。瓦当裏面。裏面にマンガの糸を付せる。	L1-102 表採	L1-102 表採
第93回 国宝62 20	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	V-C	赤褐色	瓦当の縁部に斜面断面の台形状になる。文様はあくまで瓦当面がきれいである。文様(4.5×4.5mm)の瓣形。花弁は二山形状である。瓦当裏面の側縫形も平滑。瓦当裏面の瓣形を示す。瓦当厚15.0mm。瓦当裏面。裏面とともにマングル糸を付せる。セメント付。	660	出土地不明
第93回 国宝62 21	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	VI-A	赤褐色	器體を大きく欠損した瓦当資料。瓦当面は厚くマングルを施しているため瓣形になる。瓣形の瓣は粗く、荒れていいる。瓣形は欠落しているが、瓣形当面から丸山形の瓣形が複数残されている。瓦当厚14.6mm。	第62 柱穴	K9-93 住穴62
第94回 国宝63 22	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	VI-A	赤褐色	瓦当面はほぼ完全に残る。瓦当面と丸瓦との接合角度は113度である。瓦当厚14.7mm。瓣形(アセメント)付着あり。瓦当面には複数の丸山形が瓣形を呈する。瓦当裏は側縫で瓣が粗く残る。マングル糸を施す。	K1-100 呉探	K1-100 表採
第94回 国宝63 23	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	VI-A	赤褐色	瓦当の瓣部を欠損した軒丸瓦資料。瓦当面は瓣がマングルを施しているため瓣形になる。瓣形の瓣は粗く、荒れていいる。瓣形は欠落しているが、瓣形当面から丸山形の瓣形が複数残されている。瓦当厚14.6mm。	不明	出土地不明
第94回 国宝63 24	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	VII-A	赤褐色	瓦当面の瓣部が凸山形でなく丸山形である。瓦当面の文様は凹印が明瞭。瓦当裏は指揮で瓣が粗いまま残され、瓣面がなる。瓦当厚15.0mm。セメント付着あり。製作段階で瓦当の天地側で瓣を削除して瓣を削除した痕跡(瓣跡)が残る。瓣形の瓣形がある。	L1-98	L1-98 表採
第94回 国宝63 25	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	VII-A	赤褐色	瓣が厚く削除した牡丹文様。外縫より高く盛り上がるが瓣長。瓦当厚15.0mm。保存状況に応じて瓣模様(瓣面)が剥離して存在している。マングル糸を施す。	L1-102	L1-102 表採

第34表 瓦觀察一覧(2)

種類番号 国歴番号	造瓦 系統	種類	部位	分類	色調	觀察事項	旧出土地	新出土地
第94回 国歴63 26	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	V-A	赤色	軒丸瓦を複数したような複数資料で、瓦当面と丸瓦との接合角度が90度でなく、瓦当面と丸瓦の接合部に表現したタイプで、隣接2つタイプである。本タイプは文様がある。本当面には指輪の痕跡が覗き、丸瓦部の長軸部さ24.0mmである。木ハシを使用していることが確認できる。	第62柱穴 K9-93 柱穴62	
第94回 国歴63 27	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	V-B	赤色	瓦当様式は不明、裏面の機工整形が良好で美しい。切山はみられない。額部付断面が台形に形成する。瓦当径約14.5cm。	不明	出土地不明
第94回 国歴63 28	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	V-B	赤色	軒丸瓦の繋ぎであるが、瓦当面と丸瓦との接合角度が90度を確認できる資料である。瓦当面の文様は内厚で鮮明。器面にはセメント・マングル等の付着物がみられる。	不明	出土地不明
第94回 国歴63 29	明朝系	軒丸瓦	瓦当部	V-C	赤色	大軒丸瓦である。瓦当面と丸瓦との接合角度はほぼ90度である。瓦当面の文様は鮮明。瓦当面の成形不良で、断面は台形になる。マングル等の痕跡がある。瓦当部は外周約18.0cm、外囲幅約1.9cm、津波等に付着している。軒先に付設された種類である。	不明	出土地不明
第95回 国歴64 30	明朝系	軒平瓦	瓦当部	I-A	灰色	瓦当の左端部分の破片。厚手成形。平瓦の四端部分には横・横幅で成形が確認される。瓦当面に22箇所で痕跡で板が明確。	表 L4-100 L4-100 表採	
第95回 国歴64 31	明朝系	軒平瓦	瓦当部	I-B	灰色	瓦当の右端部分の破片。厚手成形。平瓦の四端部分には横幅で成形が確認される。瓦当面に22箇所で痕跡で板が明確。	660	出土地不明
第95回 国歴64 32	明朝系	軒平瓦	瓦当部	II-B	灰色	瓦当の右端部分の破片。厚手成形。平瓦の四端部分の造形は類似。瓦当面の剥離がみられる。等高的な文様等が確認される。	X100 V100 石組戸口状遺構内	K0-99 SW4
第95回 国歴64 33	明朝系	軒平瓦	瓦当部	II-C-3	赤色	瓦当の左端部分の破片。厚手成形。瓦当面は横幅で断面が顕著にみられる。文様は菊のリザード型の複数種である。	表 K0-96	K0-96 表採
第95回 国歴64 34	明朝系	軒平瓦	瓦当部	II-D	灰色	右側の部分が欠けており以上は左側面をよく扱った資料である。外縁に2箇所の小窓がある。瓦当面には横幅で断面が顕著にみられる。文様全体に剥離が見られる。鋸歯の付着板がみられる。	不明	出土地不明
第95回 国歴64 35	明朝系	軒平瓦	瓦当部	III-A	灰色	瓦当全端に残る資料で、瓦当部は少々欠ける。厚手成形。其当面は横幅で、文様は全体的に平均である。	L0-96 SW13	L0-96 SW13
第95回 国歴64 36	明朝系	軒平瓦	瓦当部	V-A	灰色	厚手成形。瓦当の右端部分を僅かに欠いた資料。文様全体は如前。瓦当の厚みは外周部で極端に薄くなる。裏面は横幅で断面が明確である。	L1-98 横乱層	L1-98 横乱層
第95回 国歴64 37	明朝系	軒平瓦	瓦当部	V-B-1	灰色	瓦当の左端部分の破片。厚手成形。平瓦の四端部分には横幅や横幅圧扁が確認される。瓦当面には横幅で断面が明確。	不明	出土地不明
第95回 国歴64 38	明朝系	軒平瓦	瓦当部	V-A	赤色	瓦当の左端部分を僅かに欠いた瓦当資料。瓦当成形が薄手成形。花口は向かって下の左端文様はやや左回りの文様を傾く。	第2 K5-94	K5-94 II層
第96回 国歴64 39	明朝系	軒平瓦	瓦当部	V-A	灰色	ほぼ全端を残す瓦当資料。隕石の付着があり、瓦当は風化で薄れ、瓦当面には横幅で断面が確認される。瓦当面には横幅で断面が確認されている。	南第3柱穴 K4-94 柱穴3	
第96回 国歴64 40	明朝系	軒平瓦	瓦当部	V-A	赤色	顎の付着を全くもじのひげば成形の瓦当面。瓦当の厚みは均一。津波の付着があり、平瓦部の横幅圧扁はそのままで残されている。	不明	出土地不明
第96回 国歴64 41	明朝系	軒平瓦	瓦当部	V-C	赤色	瓦当裏は横幅で成形が明瞭で、指の凹凸が現れる。瓦当の厚みは薄くなる。平瓦部の横幅圧扁はそのままで残されている。	不明	出土地不明
第96回 国歴64 42	明朝系	軒平瓦	瓦当部	V-B	赤色	瓦当裏面に黒色のマングン釉を施す。瓦当面は横幅で削りあわせあり。	表 K10-99 K10-99 表採	
第96回 国歴64 43	明朝系	軒平瓦	瓦当部	V-B	赤色	瓦当裏面に黒色のマングン釉を施す。瓦当面は横幅で削りあわせあり。	不明	出土地不明
第96回 国歴64 44	明朝系	軒平瓦	瓦当部	IV-A	赤色	瓦当の一部片で、左側の文部面を残す。漆喰を一部に付着する。	660	出土地不明
第97回 国歴64 45	明朝系	丸瓦	玉縁部 ～端部	—	灰色	玉縁長さ5.5cm、器面には横幅、セメントの付着あり。玉縁裏の面取りは一回、器端部の面取りは極めて薄くなれる。幅は約2.0cm、器壁の厚さ2.0cm。	SW13 遺構周辺	L0-96 SW13
第97回 国歴64 46	明朝系	丸瓦	玉縁部	—	灰色	玉縁長さ5.4cm、玉縁側の磚片資料、器壁の厚さ1.9cm。		
第97回 国歴64 47	明朝系	丸瓦	玉縁部	—	灰色	玉縁側の磚片資料、器壁は平端に成形、軒丸瓦の丸瓦蹴片である。軒丸面直径約1.8cm、玉縁長さ4.0cmと短く、器壁の厚さ1.9cm。	K0-97 石組遺構内	K0-97 SW6
第97回 国歴64 48	明朝系	丸瓦	玉縁部	—	灰色	玉縁側の破片。玉縁裏の面取りは長く一回、器壁の面取りは横幅であるが、約1.9cmである。玉縁長さ4.0cm、器壁の厚さ2.0cm。	K0-97 石組遺構内	K0-97 SW6
第97回 国歴65 49	明朝系	丸瓦	玉縁部 ～端部	—	赤色	器壁全体にマングン釉を施す。器内にセメントの付着あり。玉縁長さ5.0cm、器部裏面の面取りは面取りがなく、ややむれの面で広くなる。玉縁裏の面取りは二回ある。器壁の厚さ2.0cm。	K5-98 II層	K5-98 II層
第97回 国歴65 50	明朝系	丸瓦	玉縁部 ～端部	—	赤色	玉縁長さ4.5cm、玉縁裏の面取り一回。器部裏面の面取りは約1.0cmの面取りがあり。漆喰付着あり。	不明	出土地不明
第97回 国歴65 51	明朝系	丸瓦	玉縁部 ～端部	—	赤色	玉縁裏の面取りは一回、玉縁長さ約5.0cm、器部裏面の面取りは約1.0cmの面取りあり。漆喰付着あり。	K4-97 II層	K4-97 II層

第34表 瓦觀察一覧(3)

種類番号 国故番号	造瓦 系統	種類	部位	分類	色調	觀察事項	旧出土地	新出土地
裏98国 國故65 52	明朝系	丸瓦	端部	—	赤色	大型の丸瓦蓋部破片。凹面端部の面取りは薄く約4.5cmと幅広く行われている。内面の表面は側で成形されている。漆喰の付着は認められない。	SP2 遺構 K1 95 赤土グール断面	K1-99 SP2
裏98国 國故65 53	明朝系	平瓦	広端部～ 狭端部	—	灰褐色	台形を呈する一つの角を失った平瓦資料。凹面には漆喰端部に压痕や板縫のものが短縦形になった状況が見られる。平瓦の器壁の厚みは1.6cm。	I0 97 SW13 石組井戸状 遺構	I0-97 SW13
裏98国 國故65 54	明朝系	平瓦	広端部～ 狭端部	—	灰褐色	ほぼ完全形の平瓦。凹面には漆喰端部に压痕の厚みが7mm並び、また、両側には丸瓦の重ね部分がみられる。凸面の両端には側で成形時の指標として現れる粗い筋が残る。器壁の厚みは1.4cm。	I0 東西レシチ 第2層 赤褐	I0 不明
裏98国 國故65 55	明朝系	平瓦	広端部～ 狭端部	—	赤色	ほぼ完全形の平瓦。平面部は台形。両側には丸瓦の重ね部分が残っている。漆喰の付着あり。器壁の厚みは1.4cm。	不明	出土地不明
裏98国 國故65 56	明朝系	平瓦	広端部～ 狭端部	—	赤色	僅かに側端部の角を失った平瓦。凹面には漆喰端部に压痕の厚みが6mm並んでいる。また、丸瓦の重ね部分が赤色として両側に残る。器壁の厚みは1.5cm。	不明	出土地不明
裏98国 國故65 57	明朝系	平瓦	端部	—	赤色	平瓦の器壁破片。凹面側に赤い痕がある。	表 K9-104	K9-104 表採
裏99国 國故66 59	明朝系	役瓦	—	畫形	赤色	完全形。手づな成形で、尾は直線を描く。画は左書きである。側面には漆喰に食い込んだ0.6cmの深さがみられる。器壁の厚みは2.0cm。	複瓦 L1 98	L1-98 複瓦層
裏99国 國故66 60	明朝系	役瓦	—	畫形	赤色	完全形。手づな成形で、尾は直線を描く。画は左書きである。側面には漆喰に食い込んだ0.6cmの深さがみられる。器壁の厚みは1.8cm。	表土 L3 103	L3-103 表土
裏99国 國故66 61	明朝系	役瓦	—	畫形	赤色	完全形。手づな成形で、尾は直線を描く。画は左書きである。側面には漆喰に食い込んだ0.5cmの深さがみられる。器壁の厚みは2.2cm。	K5-102 表土	K5-102 表土
裏99国 國故66 62	明朝系	役瓦	—	畫形	赤色	完全形。手づな成形で、尾は直線を描く。漆喰に食い込んだ0.7cmの深さがみられる。器壁の厚みは2.3cm。	560	出土地不明
裏99国 國故66 63	明朝系	役瓦	—	畫形	赤色	完全形。手づな成形で、尾は直線を描く。漆喰に食い込んだ0.5cmの深さがみられる。器壁の厚みは2.1cm。	I0 99	I0-99 表採
裏99国 國故66 64	明朝系	役瓦	—	畫形	赤色	完全形。手づな成形で、尾は直線を描く。漆喰に食い込んだ0.5cmの深さがみられる。器壁の厚みは2.6cm。	不明	出土地不明
第100国 國故67 65	明朝系	役瓦	—	畫形	赤色	尾部が欠落。手づな成形。漆喰に食い込んだ0.6cmの深さがみられる。器壁の厚みは2.7cm。	表 I0 100	I0-100 表採
第100国 國故67 66	明朝系	役瓦	—	畫形	赤色	完全形。手づな成形で、尾は直線を描く。漆喰に食い込んだ0.4cmの深さがみられる。器壁の厚みは2.6cm。	第1コーラル K9 94	K9-94 I 層 (コーラル層)
第100国 國故67 67	明朝系	役瓦	—	畫形	赤色	尾部が欠落。手づな成形。漆喰に食い込んだ0.6cmの深さがみられる。器壁の厚みは2.7cm。	560	出土地不明
第100国 國故67 68	明朝系	役瓦	—	畫形	赤色	完全形。手づな成形で、尾は直線を描く。漆喰に食い込んだ0.5cmの深さがみられる。器壁の厚みは2.2cm。	不明	出土地不明
第100国 國故67 69	明朝系	役瓦	—	畫形	赤色	完全形。手づな成形で、側面には底墻に食い込んだ0.7cmの深さがみられる。器壁の厚みは2.0cm。	I1 98 複瓦層	L1-98 複瓦層
第100国 國故67 70	明朝系	役瓦	—	畫形	赤色	完全形。手づな成形で、尾は直線を描く。漆喰に食い込んだ0.5cmの深さがみられる。器壁の厚みは2.6cm。	560	出土地不明
第100国 國故67 71	明朝系	役瓦	—	畫形	赤色	完全形。手づな成形で、側面には底墻に食い込んだ0.7cmの深さがみられる。器壁の厚みは2.6cm。	第2 I4 97	I4-97 II 層
第101国 國故68 72	明朝系	役瓦	—	畫形	赤色	完全形。手づな成形で、尾は直線を描く。側面には漆喰に食い込んだ0.8cmの深さがみられる。器壁の厚みは3.6cm。	K9 100 表土	K9-100 表土
第101国 國故68 73	明朝系	役瓦	—	畫形	赤色	尾部が欠落。手づな成形。側面には漆喰に食い込んだ0.9cmの深さがみられる。器壁の厚みは3.6cm。	カセキ カセキ跡	カセキ跡
第101国 國故68 74	明朝系	役瓦	—	畫形	赤色	資料の半分を欠損。表面の縫合部は凹凸がありしている。側面には漆喰に食い込んだ0.5cmの深さがみられる。器壁の厚みは3.0cm。	第2 K3 95	K3-95 II 層
第101国 國故68 75	明朝系	役瓦	—	畫形	赤色	資料の半分以上を欠損。輪は高く側溝をさせている。側面には漆喰に食い込んだ0.5cmの深さがみられる。器壁の厚みは3.0cm。	複瓦 + 560	複瓦層 出土地不明
第101国 國故68 76	明朝系	役瓦	—	畫形	赤色	完全形。輪は太く、厚さ表現する。尾は曲線を描く。側面には漆喰に食い込んだ1.3cmの深さがみられる。器壁の厚みは5.5cm。	不明	出土地不明
第101国 國故68 77	明朝系	役瓦	—	畫形	灰褐色	尾の部分を欠損する。側面には漆喰に食い込んだ1.3cmの深さがみられる。また、針金ノットの留め部分が所に形成され、針金も残った状態で出土した。器壁の厚みは4.8cm。	不明	出土地不明
第101国 國故68 78	明朝系	役瓦	—	花形	赤色	牡丹の花、花芯や花びら等が模様彫刻されている。側面には漆喰に食い込んだ1.0cmの深さがみられる。器壁の厚みは5.3cm。	不明	出土地不明
第101国 國故68 79	明朝系	役瓦	—	花形	灰褐色	783回復の牡丹の花の資料である。たゞ、表面の風化がすみ、縫合部は見えかかっている。側面には漆喰に食い込んだ0.9cmの深さがみられる。器壁の厚みは3.9cm。	第62 柱穴	K9-93 柱穴262

第34表 瓦觀察一覧(4)

種類番号 国領番号	造瓦 系統	種類	部位	分類	色調	観察事項	旧出土地	新出土地	
第102國 國領69 80	明朝系	背瓦	—	龍頭部	赤色	瓶頭部に付く施錠状にならむので、先端が尖る部分が弓刀所造形されている。ただし、これは器部で他に「つまみ」や「折れなど」といっても明らかではない。全体に施錠に付着が認められる。	L4 99 復原(素土層)	L4-99 黄土	
第102國 國領69 81	明朝系	役瓦	—	飾瓦花形	灰色	革袋の縫と小葉の造形が認られるほか、先に紹介した花形と側面ともにとみられる。	不明	出土地不明	
第102國 國領69 82	明朝系	役瓦	—	無瓦花形	赤色	造形的には先の小葉を付くものと同じなので、同一體か、もしくは同様の業をなすものとみられる。一部に施錠の付着を認める。	不明	出土地不明	
第102國 國領69 83	明朝系	役瓦	—	龍頭部	灰色	角状突起の縫を追跡するので、瓶頭のため全体縫は明るいが、器部は良好。器頭の厚み2.1cm。	II 既成縫 南側取	II 開基縫?	
第102國 國領69 84	明朝系	役瓦	—	役瓦	灰色	複数形態・形状の瓦系資料である。ただし、結構して全体縫は明るいが、たぶん、表面に施錠の付着を認める。忍壁の厚み2.5cm。	第Ⅲ K3 93	K3-93 II層	
第102國 國領69 85	明朝系	役瓦	—	大形丸瓦	赤色	丸瓦の碎片であるが、表面が著しく大きい。先頭部の瓦の瓦片部分で2.9cm、凸面には施錠の使用を明確にとどめている。忍壁の厚み1.8cm。	不明	出土地不明	
第102國 國領69 86	大和系	軒丸瓦	瓦当部	5a	灰色	瓦縫部分を大きく与える資料である。瓦当面には「二つ巴」の左巴文があり、外側には「十」の模様がみられる。瓦当面と丸瓦の接合は丸瓦腰面を折り込む形で接合され、丸瓦の筋が隠されている。	中央横断縫⑤	中央横断縫⑤	
第102國 國領69 87	大和系	軒丸瓦	瓦当部	1	灰色	丸瓦の瓦縫と瓦底凹凸が認められる。瓦当面の筋は丸瓦の筋で連結されている。丸瓦の瓦底部分は2.0cm、筋は薄れこり、瓦の面に対し、丸瓦の筋が小さいため統合された形で接合され、丸瓦の筋が隠されている。	不明	出土地不明	
第102國 國領69 88	大和系	軒丸瓦	瓦当部	5a	灰色	瓦当部の縫跡である。文様は巴文。文様は左巴と右巴の交差五資料である。	複瓦	複瓦層	
第103國 國領70 89	大和系	軒平瓦	瓦当部	1	灰色	瓦当面に白鷺子が施錠付着し当初の面をよく残す。唐草文の縫は縦と、本綱的となる。中心部の縫は連続さ6mmある。筋部には竹状の丸文があり施錠つけられ、筋の厚さは2.0cm。指標での調整をしていている。平瓦の面と瓦当との縫は施錠のなれの筋には短い、面取りがなされている。	不明	出土地不明	
第103國 國領70 90	大和系	軒平瓦	瓦当部	3	灰色	瓦当面に白鷺子が施錠付着し当初の面をよく残す。唐草文の縫は縦と、一握の筋が描かれる。筋の長さ1.3cm。	L1 東西 断削トレンチ	L1 中央横断縫?	
第103國 國領70 91	大和系	軒平瓦	瓦当部	2	灰色	瓦当の右側部分の縫跡、裏・頂部の状況がみられる。巻上げ形になり、一握の筋が描かれる。筋の長さ1.3cm。	L1 東西断削トレンチ	L1 中央横断縫?	
第103國 國領70 92	大和系	軒平瓦	瓦当部	4	灰色	中央側の瓦が青瓦の荷物、左側に施錠する縫は4枚。表面には白鷺子の付着をみる。筋の長さ1.5cm。平瓦頭と瓦当部の縫に面取りを認められる。筋は指標で。	L1 東西断削トレンチ	L1 甲突横断縫?	II 基層 歩道に瓦の上に土層
第103國 國領70 93	大和系	軒平瓦	瓦当部	4	灰色	中央側の瓦が青瓦の荷物、左側に施錠する縫は4枚。表面には白鷺子の付着をみる。筋の長さ2.0cm。平瓦頭と瓦当部の縫に面取りを認められる。筋は指標で。	L1 東西断削トレンチ	L1 中央横断縫?	
第103國 國領70 94	大和系	屋根瓦	平瓦頭	II型	褐色	瓦頭は次第に高く、高面頭表面に羽状文様、面頭には屋根の指標で整形窓がある。器壁の厚み2.3cm。	L1 東西断削トレンチ	L1 中央横断縫?	
第103國 國領70 95	大和系	屋根瓦	平瓦頭	I型	褐色	平瓦頭の裏面に施錠の抵抗圧頭が認められる。筋間隔23.0cm、筋の厚み1.8cm。	中央横断縫 東西軸 第4層 褐色土層	中央横断縫① IV層(褐色土層)	
第104國 國領71 97	大和系	屋根瓦	平瓦頭	II型	褐色	平瓦頭と瓦当部の残る残錠資料で、両頭部分を認める。表面の羽状切口は不明。瓦頭面に瓦取り付けを行っている。器壁の厚み2.2cm。	L1 東西断削トレンチ	L1 中央横断縫?	
第104國 國領71 98	大和系	屋根瓦	平瓦頭	II型	褐色	表面は浅薄で、本末の大さきは不明。器壁の厚み2.0cm。	L1 東西断削トレンチ	L1 中央横断縫?	
第104國 國領71 99	大和系	屋根瓦	丸瓦部	II型	褐色	表面は浅薄で、表面には羽状切口が認められる。筋間隔23.0cm、筋の厚み1.8cm。	K2 99 細 井戸状遺構	K2-99-99 SW1	
第104國 國領71 100	大和系	屋根瓦	平瓦頭	II型	褐色	表面と同様に羽状切口が認められる。表面には羽状の羽状切口が認められる。筋間隔の厚み2.3cm。	B-T	出土地不明	
第104國 國領71 101	大和系	屋根瓦	玉縁部	II型	褐色	平瓦頭は大きくなっている。平瓦頭は大きくなれる。器壁の厚み2.4cm。	L1 東西断削トレンチ	L1 中央横断縫?	
第104國 國領71 102	大和系	屋根瓦	玉縁部	I型	褐色	平瓦頭と丸瓦部の残る残錠資料で、表面の羽状切口は鮮明。丸瓦部分の表面には屋根の指標で整形窓の羽状切口が隠れる。筋頭にも面取りが行われている。器壁の厚み2.3cm。	L1 東西断削トレンチ	L1 中央横断縫?	
第105國 國領72 103	大和系	屋根瓦	平瓦頭	I型	褐色	平瓦頭は平坦になる。筋(面頭)側には刺し網状の抵抗圧頭がみられる。筋頭の厚み1.8cm。	中央横断縫 東西軸 第4層 褐色土層	中央横断縫① IV層(褐色土層)	
第105國 國領72 104	大和系	屋根瓦	玉縁部	I型	褐色	玉縁の長さ3.5cm。器壁の厚み2.5cm。	SW II 屋瓦層	L0-96 SW13?	

第34表 瓦観察一覧(5)

種類番号 国版番号	造瓦 系統	種類	部位	分類	色調	觀察事項	旧出土地	新出土地
第105國 國版72 105	大和系	雁板瓦	丸瓦部	B型	褐色	半焼進行している。平瓦面は大きく凸面する。凹面表面には同次叩き文様がある。前面には隣位の指標で楕形の筋縫が明顯に残る。器壁の厚み2.5cm。	B 1層 南側	出土不明
第105國 國版72 106	大和系	雁板瓦	丸瓦部	B型	褐色	半焼進行している。平瓦面は大きく凸面する。凹面表面には同次叩き文様がある。前面には隣位の指標で楕形の筋縫が明顯に残る。器壁の厚み2.5cm。	KO-K1 120-121 雁土	出土不明
第105國 國版72 107	大和系	平瓦	広端部	c	褐色	前面では右角資料。器壁の厚み2.1cm。	LJ 東西トレ 東隅K	中央範囲時②
第105國 國版72 108	大和系	平瓦	広端部	d	褐色	前面では右角資料。器壁の厚み2.2cm。	LJ 東西断削トレンチ	LJ 中央範囲時?
第105國 國版72 109	大和系	平瓦	狭端部	-	灰褐色	器壁の厚み1.8cm。魚文様あり。	LJ 東西断削トレンチ	LJ 中央範囲時?
第105國 國版72 110	大和系	平瓦	狭端部	-	褐色	1.4cmの孔が穿たれる。器壁の厚み1.6cm。	LJ 東西断削トレンチ	LJ 中央範囲時?
第106國 國版73 111	大和系	平瓦	広端部	d	褐色	前面では左角資料。器壁の厚み1.5cm。	LJ 東西断削トレンチ	中央範囲時?
第106國 國版73 112	大和系	平瓦	狭端部	b	褐色	端面に直取り有り、幅4.1cm。表面に白砂粒子が付着する。胎土中央は黒色。器壁の厚み1.5cm。	LJ 東西断削トレンチ	中央範囲時②
第106國 國版73 113	大和系	平瓦	広端部	b	灰褐色	端面に直取り有り、幅4.1cm。表面に白砂粒子が付着する。胎土中央は黒色。器壁の厚み2.2cm。	LJ 東西断削トレンチ	LJ 中央範囲時?
第106國 國版73 114	大和系	平瓦	完全形 二分	b	灰褐色	端面に直取り有り、幅4.1cm。表面に白砂粒子が付着する。胎土中央は黒色。器壁の厚み2.1cm。全長30cm。	不明	出土不明
第106國 國版73 115	大和系	平瓦	広端部	b	灰褐色	端面に直取り有り、幅4.1cm。表面に白砂粒子が付着する。胎土中央は黒色。器壁の厚み1.5cm。	LJ 東西断削トレンチ	LJ 中央範囲時?
第106國 國版73 116	大和系	平瓦	広端部	c	灰褐色	前面では左角資料。器壁の厚み2.5cm。	LJ 東西断削トレンチ	LJ 中央範囲時?
第106國 國版73 117	大和系	平瓦	広端部	a	褐色	前面では左角資料。器壁の厚み1.9cm。	LJ 東西断削トレンチ	中央範囲時②
第107國 國版74 118	大和系	平瓦	広端部	b	灰褐色	前面では右角資料。器壁の厚み1.9cm。	LJ 東西断削トレンチ	LJ 中央範囲時?
第107國 國版74 119	大和系	平瓦	広端部	b	灰褐色	前面では右角資料。器壁の厚み2.1cm	LJ 96 第5層 コーラル粘土層	LJ 96-100 (コーラル層)
第107國 國版74 120	大和系	丸瓦	玉縁部	寅文 3	灰褐色	側面側が一段残る。文様は上縁側部ということがあり、鉢明である。腹面圧痕の間隔12.5cm。器壁の厚み1.6cm。	II葉基盤の 北側石柱の層土	II葉基盤 北側翼足 1層
第107國 國版74 121	大和系	丸瓦	玉縁部	寅文 3	灰褐色	端落側をいたる丸瓦資料である。文様は寅文縁は不明瞭になる。側で強く残されていることによる。前面の筋縫は不明瞭である。器壁の厚み1.5cm。	LJ 東西断削トレンチ	LJ 中央範囲時?
第107國 國版74 122	大和系	丸瓦	簡部	寅文 2	灰褐色	端落側の複数で、端部直取りは計測できない。	LJ 東西トレ 東隅K	中央範囲時②
第107國 國版74 123	大和系	丸瓦	端部	寅文 2	褐色	側面から簡部の資料。端部の直取り幅4.7cm。器壁厚み1.6cm。	LJ 東西断削トレンチ	LJ 中央範囲時?
第107國 國版74 124	大和系	丸瓦	端部	寅文 2	灰褐色	側面から簡部の資料。端部直取りの幅6cm。	K2 100 南石原系(3)の 内側の基盤石岩	南端埋立 断削①
第107國 國版74 125	大和系	丸瓦	簡部	寅文 3	灰褐色	側面側が残る。器壁の厚み2.1cm。	SW13 II葉瓦層	LJ 96 SW13
第107國 國版74 126	大和系	丸瓦	端部	寅文 1	灰褐色	端部の直取り幅5cm。端圧痕の横糸の間隔12cm。色調は灰褐色を呈するが、胎土は黒色を帯びる。	LJ 東西断削トレンチ	中央範囲時②
第107國 國版74 127	大和系	丸瓦	玉縁部	羽吹文 輕い	灰褐色	行進式の丸瓦瓦片である。凸面上面側に鉢明に文様が残る。前面にはお日がみられる。	LJ 東西断削トレンチ	LJ 中央範囲時?
第108國 國版75 128	大和系	丸瓦	端部	寅文 1	灰褐色	簡部の正面取扱いは鉢明。前面の側面側の筋縫が明顯でない。前面の側面側の筋縫が明顯でない。前面の側面側の筋縫が明顯でない。	LJ 東西断削トレンチ	LJ 中央範囲時?
第108國 國版75 129	大和系	丸瓦	簡部	寅文 1	灰褐色	簡部の正面取扱いは鉢明。前面の側面側の筋縫が明顯でない。前面の側面側の筋縫が明顯でない。	LJ 東西断削トレンチ	LJ 中央範囲時?
第108國 國版75 130	大和系	丸瓦	端部	寅文 2	褐色	側面の正面取扱いは鉢明。前面の側面側の筋縫が明顯でない。前面の側面側の筋縫が明顯でない。	LJ 東西トレ 東隅K	中央範囲時②
第108國 國版75 131	大和系	丸瓦	玉縁部	羽吹文 1~6	灰褐色	端落側の刃文様は削り仕上げたため鉢明でない。前面の側面側の筋縫が明顯でない。前面の側面側の筋縫が明顯でない。	先史窯跡 1層 端褐色土層	中央範囲時① II葉(端褐色土層)
第108國 國版75 132	大和系	丸瓦	端部	羽吹文 1~6	灰褐色	風化が進行しているため、全体に不鮮明。器壁の厚み1.3cm。前面に魚文様がみられる。	II葉堆の 北側石柱の層土	II葉基盤 北側翼足 1層

第34表 瓦觀察一覧(6)

種類番号 国版番号	造瓦 系統	種類	部位	分類	色調	観察事項	旧出土地	新出土地
第109回 国版75 133	大和系	丸瓦	三縁部	羽状文 2	褐色	端部側をういた丸瓦資料である。文様は葉脈型で、横幅は端部側で最も広く、横の間隔2cmである。器壁の厚み1.8cm、三縁の長さ3cm。	LJ 東西 断剝レシテ	LJ 中央範囲吧?
第109回 国版75 134	大和系	丸瓦	簡部	羽状文 2	褐色	両側面を残す資料。器壁の厚み1.6cm。	LJ 東西 断剝レシテ	LJ 中央範囲吧?
第109回 国版76 135	大和系	丸瓦	三縁部	羽状文 2	褐色	端部側をういた丸瓦資料である。文様は葉脈型で、横幅は端部側で最も広く、横の間隔2cmである。器壁の厚み1.8cm、三縁の長さ3cm。	LJ 東西トレンチ 第3層コートル層	LJ 石列?
第109回 国版76 136	大和系	丸瓦	簡部	羽状文 2	褐色	器壁の厚み1.6cm。	LJ 東西断剝 東隅	中央範囲吧②
第109回 国版76 137	大和系	丸瓦	三縁部	羽状文 類い	褐色	三縁側の端部。筒部の凸面側に鋸形の文様を残す。器壁の厚み1.7cm。	LJ 96 第1コートル	LJ 96-1層 (コートル層)
第109回 国版76 138	大和系	丸瓦	端部	羽状文 類い	褐色	丸瓦の端部側資料である。凹面の端柱筋は端柱間隔2.5cm、横柱間隔3.5cm、端柱取り幅0.3cm、器壁の厚み1.3cm。	II期基礎の 北側石垣の層土	II期基礎 北側翼状 1層
第109回 国版76 139	大和系	丸瓦	端部	羽状文 類い	褐色	丸瓦の端部側資料である。凹面の端柱筋は端柱間隔3.0cm、横柱間隔4.2cm、端柱取り幅0.3cm、器壁の厚み1.7cm。	LJ 東西断剝レ	LJ 中央範囲吧?
第109回 国版76 140	大和系	丸瓦	端部	羽状文 類い	褐色	丸瓦の端部側資料である。端柱取り幅0.3cm、器壁の厚み2cm。	LJ 東西 断剝レシテ	LJ 中央範囲吧?
第110回 国版77 141	大和系	丸瓦	端部	羽状文 類い	褐色	丸瓦の端部側資料である。端柱取り幅0.3cm、器壁の厚み2.1cm、全体に褐色味の強い灰色であるが、胎土は明瞭な黒色である。	LJ 東西 断剝レシテ	LJ 中央範囲吧?
第110回 国版77 142	大和系	丸瓦	端部	羽状文 類い	褐色	丸瓦の端部側資料である。端柱取り幅0.3cm、器壁の厚み1.6cm、全体に褐色味の強い灰色であるが、胎土は明瞭な黒色である。	LJ 東西断剝レ	LJ 中央範囲吧?
第110回 国版77 143	大和系	丸瓦	三縁部	羽状文 類い	褐色	器壁を残す資料、而取の仕上げ。凹面の端柱筋、縫隙の間隔2cm、横柱の間隔2.5cm、三縁の長さ3cm、器壁の厚み1.4cm。	LJ 東西断剝トレンチ	LJ 中央範囲吧?
第110回 国版77 144	大和系	丸瓦	三縁部	羽状文 類い	褐色	器壁を残す資料である。端柱の間隔3cm、横柱の間隔4cm、三縁の長さ3cm、器壁の厚み1.8cm。	LJ 東西断剤レ	LJ 中央範囲吧?
第110回 国版77 145	大和系	丸瓦	三縊部	羽状文 類い	褐色	三縊の長さ4cm、凹面の端柱筋、縫隙の間隔2.5cm、横柱の間隔2.5cm、器壁の厚み1.8cm。	LJ 東西断剤レ	LJ 中央範囲吧?
第110回 国版77 146	大和系	丸瓦	三縊部	羽状文 類い	褐色	凹面の端柱筋、縫隙の間隔2.5cm、横柱の間隔2.2cm、三縊の長さ4cm、器壁の厚み1.6cm。	LJ 東西断剤トレンチ 第3層 コートル層	LJ 中央範囲吧?
第110回 国版77 147	大和系	丸瓦	三縊部	羽状文 類い	褐色	筒部凹面の端柱筋は玉縄裏まで鮮明に及んでいる。縫隙の間隔2.5cm、横柱の間隔2cm、三縊の長さ4cm、器壁の厚み2.1cm。	LJ 東西断剤トレンチ	LJ 中央範囲吧?
第110回 国版77 148	大和系	丸瓦	三縊部	羽状文 類い	褐色	玉縄裏の長さ4.5cm、凹面の端柱筋、縫隙の間隔2cm、横柱の間隔2.2cm、器壁の厚み2.1cm。	LJ 東西断剤レ	LJ 中央範囲吧?
第111回 国版78 149	大和系	丸瓦	三縊部	羽状文 類い	褐色	筒部凹面の端柱筋は玉縄裏まで鮮明に及んでいる。端柱を欠いた丸瓦資料である。三縊長さ4cm、筒部高10.7cm。	表係	表係
第111回 国版78 150	大和系	丸瓦	三縊部	羽状文 類い	褐色	全表面が剥離している資料で、裏面に箆跡跡の二所を残しているのみ。丸瓦の全长4.2cm、三縊長さ4.5cm、筒部高4cm。	不明	出土地不明
第111回 国版78 151	大和系	丸瓦	三縊部	羽状文 4	褐色	玉縄側の筒部資料である。三縊の長さ4cm、凹面の端柱筋、縫隙の間隔2.5cm、横柱の間隔2.5cm、器壁の厚み1.8cm。	LJ 東西断剤レ	LJ 中央範囲吧?
第111回 国版78 152	大和系	丸瓦	三縊部	羽状文 4	褐色	端柱側を欠いた丸瓦資料である。三縊の長さ4cm、筒部の間隔3.5cm、器壁の厚み1.8cm、胎土中央が灰白色を呈する。	LJ 東西断剤レ	LJ 中央範囲吧?
第112回 国版79 153	大和系	丸瓦	簡部	羽状文 4	褐色	端柱側と器壁を欠く。三縊の面取りを残す。凹面の端柱筋、縫隙の間隔3cm、横柱の間隔1.9cm。	LJ 東西 断剝レシテ	LJ 中央範囲吧?
第112回 国版79 154	大和系	丸瓦	簡部	羽状文 6	褐色	面取りを残す丸瓦。三縊の面取りを残す。凹面の端柱筋、縫隙の間隔1.3cm、横柱の間隔2cm、器壁の厚み1.3cm、胎土中央が灰白色。	LJ 東西断剤レ	LJ 中央範囲吧?
第112回 国版79 155	大和系	丸瓦	簡部	羽状文 6	褐色	面取りを残す丸瓦。三縊の面取りを残す。凹面の端柱筋、縫隙の間隔1cm、横柱の間隔1.5cm、器壁の厚み1.8cm、胎土中央が灰白色。	LJ 東西断剤レ	LJ 中央範囲吧?
第112回 国版79 156	大和系	丸瓦	三縊部	羽状文 類い	褐色	両側面を残す資料。器壁の厚み2.2cm、三縊の長さ3.5cm。筒部には破損があり、それが修理された跡がある。三縊長さ4cm、凹面の端柱筋は縫隙の間隔2cm、横柱の間隔3cm。	II期基礎の 北側石垣層	II期基礎 北側翼状 1層
第112回 国版79 157	大和系	丸瓦	三縊部	羽状文 類い	褐色	筒部面を残す資料。器壁の厚み1.8cm、三縊の長さ3cm、凹面の端柱筋、縫隙の間隔1.7cm、横柱の間隔2cm、胎土中央が灰白色。	LJ 東西 断剤レシテ	LJ 中央範囲吧?
第112回 国版79 158	大和系	丸瓦	端部	調目文	褐色	端柱幅5.5cm、側面部資料、面取りがなされている。器壁の厚み1.6cm。	不明	出土地不明
第112回 国版79 159	大和系	丸瓦	端部	調目文	褐色	端柱幅5.5cm、側面部資料、器壁の厚み1.3cm。	LJ 東西断剤レ	LJ 中央範囲吧?

第34表 瓦觀察一覧(7)

種類番号 国故番号	造瓦 系統	種類	部位	分類	色調	觀察事項	旧出土地	新出土地
第113回 国故79 160	大和系	丸瓦	端部	圓口文	灰褐色	端部幅5.8cm、側面部資料。器壁の厚み1.7cm。	LJ 東西南断面トレ	LJ 中央範例時?
第113回 国故80 161	大和系	丸瓦	玉縁部	圓口文	灰褐色	玉縁の形状を知る資料。玉縁裏にも網状の細紋板が残る。器壁の厚み1.9cm。	LJ 東西南 断面トレンチ	LJ 中央範例時?
第113回 国故80 162	大和系	丸瓦	玉縁部	圓口文	灰褐色	一方の側面部を残す。面取りがなされる。圓口切は端部の中央に向かう側で削形が強いのか薄くなら。斜し網の範囲幅約34cmと幅広い。器壁の厚み1.7cm。	LJ 東西南断面	LJ 中央範例時?
第113回 国故80 163	大和系	丸瓦	玉縁部	圓口文	灰褐色	両側面を残す資料。器壁の厚み1.9cm。	LJ 東西南 断面トレンチ	LJ 中央範例時?
第113回 国故80 164	大和系	丸瓦	玉縁部	圓口文	灰褐色	玉縁と端部を残す。資料。端部中央は微く整形で表面は日文様が薄くなれる。圓口切は2方向の斜め網状の細紋板が残る。ほぼ両面で横絞り(23cm)である。器壁の厚み1.8cm。	LJ 東西南 断面トレンチ	LJ 中央範例時?
第113回 国故80 165	高麗瓦	軒丸瓦	瓦当部	—	灰褐色	瓦当面には正面形と側面形の差異の一端と、圓面に残された圓脚するる印文が確認される。瓦当裏は平面である。器壁は素面で黒化し、摩滅が認められる。	不明	出土地不明
第113回 国故80 166	高麗瓦	軒平瓦	瓦当部	—	灰褐色	瓦当面には正面形と側面形の差異の一端と、圓面に残された圓脚するる印文が確認される。瓦当裏は平面である。器壁は素面で黒化し、摩滅が認められる。	中央範例時 第2層 稲荷色土層	中央範例時① II層(暗褐色土層)
第113回 国故80 167	高麗瓦	軒平瓦	瓦当部	—	灰褐色	瓦当面の破片で、瓦当裏は2方向の斜め網状の細紋板が残る。瓦当裏は正面形と側面形の差異の一端と、圓面に残された圓脚するる印文が確認される。器壁の厚み2.4cm。	中央範例時 第2層 稲荷色土層	中央範例時① II層(暗褐色土層)
第113回 国故80 168	高麗瓦	軒平瓦	瓦当部	—	灰褐色	瓦当面には正面形と側面形の差異の一端と、圓面に残された圓脚するる印文が確認される。瓦当裏は正面形と側面形の差異の一端と、圓面に残された圓脚するる印文が確認される。器壁の厚み2.1cm。	中央範例時 第4層 茶下層	中央範例時① IV層(暗褐色土層)
第113回 国故80 169	高麗瓦	丸瓦	玉縁部	羽吹文 粗目	灰褐色	166, 167と同様の筒状文様が残る瓦当資料。瓦当裏面は平面に整形、器面の黒化が進んでいる。	中央範例時 第4層 茶下層	中央範例時① IV層(暗褐色土層)
第113回 国故80 170	高麗瓦	丸瓦	玉縁部	羽吹文 粗目	灰褐色	三種類の資料で、玉縁端部が残す。端部は大きめで、凹凸の羽吹文の文様が文様が残る。器壁の厚み2.4cm。	中央範例時 第4層 茶下層	中央範例時① IV層(暗褐色土層)
第113回 国故80 171	高麗瓦	丸瓦	端部	羽吹文 粗目	灰褐色	器全体に黒化がすむ。僅かに内面に羽吹文様が残る。器壁の厚み1.8cm。	中央範例時 第IV層 稲荷色土層	中央範例時① IV層(暗褐色土層)
第114回 国故81 172	高麗瓦	丸瓦	端部	—	灰褐色	端部破片で、側面が僅かに残る。器壁の厚み1.3cm。	中央範例時 第IV層 稲荷色土層	中央範例時① IV層(暗褐色土層)
第114回 国故81 173	高麗瓦	平瓦	端部	癸酉年 文片 羽吹文 粗目	灰褐色	凸面側に癸酉年文様と羽吹文がみられる破片である。器壁の厚み2.3cm。	K7 91 第2層 中央範例時	K7-91 中央範例時① II層(墨赤色土層)
第114回 国故81 174	高麗瓦	平瓦	端部	癸酉年 文片 羽吹文 粗目	灰褐色	凸面側に癸酉年文様と羽吹文がみられる破片である。器壁の厚み2.3cm。	第IV層 中央範例時	中央範例時① IV層(暗褐色土層)
第114回 国故81 175	高麗瓦	平瓦	端部	癸酉年 文片 羽吹文 粗目	灰褐色	癸酉年の一部を残す資料で、凸面側には微かに残る羽吹文が確認できる。離型材の白砂粒が付着。器壁の厚み1.6cm。	10 東南 断面 トレンチ 壁より4番目 石灰質經済土層 Ⅲ層	L9-94 断面 トレンチ 壁より4番目 石灰質經済土層 Ⅲ層
第114回 国故81 176	高麗瓦	平瓦	端部	癸酉年 文片 羽吹文 粗目	灰褐色	癸酉年文片が残る。器壁の厚み1.7cm。	中央範例時 第II層 稲荷色土層	中央範例時① II層(暗褐色土層)
第114回 国故81 177	高麗瓦	平瓦	端部	癸酉年 文片 羽吹文 粗目	灰褐色	癸酉年の一部を残す資料で、凸面側には微かに残る羽吹文が確認できる。羽吹文様がみられる。器壁の厚み3.5cm。	第53 柱穴	K7-94 柱穴53
第114回 国故81 178	高麗瓦	平瓦	端部	癸酉年 文片 羽吹文 粗目	灰褐色	凸面には摩滅が進んでるが羽吹文が確認できる。凸面には右上から左下方向に粘土巻き板が痕跡としてみられる。	中央範例 第2層 稲荷色土層	中央範例時① II層(暗褐色土層)
第114回 国故81 179	高麗瓦	平瓦	端部	羽吹文 粗目	灰褐色	凸面側に羽吹文が残る資料である。器壁の厚み1.6cm。	中央範例時 第2層 稲荷色土層	中央範例時① II層(暗褐色土層)
第114回 国故81 180	高麗瓦	平瓦	端部	羽吹文 粗目	灰褐色	側面の一部を残す資料で、凸面側には微かに残る羽吹文が確認できる。離型材の白砂粒が付着。器壁の厚み1.6cm。	Ⅱ層 壁 北側石垣の壁土	Ⅱ層 壁 北側石垣の壁土
第114回 国故81 181	高麗瓦	有段式 平瓦	端部	羽吹文 粗目	灰褐色	僅かに接合部の段部を残す。端部は厚く2.4cm。凸面には羽吹文が確認できる。	不明	出土地不明
第114回 国故81 182	高麗瓦	平瓦	端部	大矢片	灰褐色	凸面側に大矢文様と斜状打捺文がみられる破片である。器壁の厚み2cm。	S60	出土地不明
第114回 国故81 183	明鏡瓦	丸瓦	玉縁部	—	赤褐色	玉縁長さ5.5cm。器面にマッポン釉と僅かに焼成の付着がみられる。圓形が明顯に現れる。「△」記号あり。器壁の厚み1.4cm。	K10 10-99 第2層 10-30	K10-10-99 II層
第114回 国故81 184	明鏡瓦	丸瓦	玉縁部	—	赤褐色	玉縁長さ5cm。玉縁側の資料。器面にマッポン釉と僅かに焼成の付着がみられる。圓形が明顯に現れる。「△」記号あり。器壁の厚み1.5cm。	S60	出土地不明
第114回 国故81 185	明鏡瓦	丸瓦	玉縁部	—	赤褐色	玉縁側の破片資料。器面にマッポン釉と僅かに焼成の付着がみられる。「×」記号あり。器壁の厚み1.2cm。	表土 K0 102	K0-102 表土
第114回 国故82 186	明鏡瓦	平瓦	端端部	—	赤褐色	平瓦の後端部破片。口)記号あり。無で断形が明顯。器壁の厚み3.1cm。	不明	出土地不明

第34表 瓦観察一覧⑧

種別番号 図版番号	造瓦 系統	種類	部位	分類	色調	觀察事項	旧出土地	新出土地
第1158 図版82 187	明頃系	平瓦	箇部	—	赤色	平瓦の箇部資料。茎列して2条文差す沈線がみられる。器壁の厚み1.3cm。	不明	出土地不明
第1158 図版82 188	明頃系	平瓦	挿嘴部	—	赤色	角1つを残す平瓦の挿嘴部破片。格子状の沈線がみられる。側面整形が明確。器壁の厚み1.2cm。	表 L2 98	L2-98 表様
第1158 図版82 189	明頃系	平瓦	挿嘴部	—	赤色	平瓦の挿嘴部破片。僅かに捺喰が付着する。不明沈線あり。器壁の厚み1.6cm。	L4 98	L4-98 表様
第1158 図版82 190	明頃系	平瓦	箇部	—	赤色	平瓦の箇部破片。沈線が複数に複数みられる。ナガから捺喰が付着する。器壁の厚み1.4cm。	660	出土地不明
第1158 図版82 191	明頃系	平瓦	箇部	—	赤色	平瓦の箇部破片。文差す捺喰がみられる。背面に捺喰が付着する。器壁の厚み1.4cm。	表土 L2,3,4 182-183	表土
第1158 図版82 192	明頃系	平瓦	箇部	—	赤色	平瓦の箇部破片。背面にマンガル軸の付着する。背面に記号あり。器壁の厚み1.7cm。	表土 L2 103	L2-103 表土
第1158 図版82 193	明頃系	平瓦	箇部	—	赤色	平瓦の箇部破片。マンガル軸の付着がみられる。器面に「富山」と落が刻まれている。器壁の厚み1.6cm。	660	出土地不明
第1158 図版82 194	明頃系	平瓦	箇部	—	赤色	平瓦の箇部破片。マンガル軸の付着が僅かにみられる。器面に墨書きで文字が表記されている。器壁の厚み1.2cm。	K5 94 第2層 10-20	K5-94 Ⅱ層
第1158 図版82 195	明頃系	殺瓦	—	1字瓦	灰色	残存形態64.状の丸五系資料である。ただし、破損のため全体縁は不明だしがたい。器壁の厚み2.1cm。	660	出土地不明

第35表 塚集計表

色調 接合材 分類部 位	赤色 漆塗材																																															
	分類 I		分類 II		分類 III												分類 IV																															
	A	C	不明	角無L	Aa			Ab			Ba			Bb		Ca		Cb		Da		Db		ABa		Abb		A		Ba		Bb		Ca		Cb		Da										
角2 角無L 完形	完形	角1	角2	角3	角無L	完形	角1	角2	角3	角無L	角1	角2	角無L	角1	角2	角無L	角1	角2	角無L	角2	角1	角2	角無L	角1	角無L	完形	角1	角2	角3	角無L	角2	角無L	完形	角1	角2	角無L	完形	角2	完形	角2	角無L	角2	角2					
個数	1	2	1	2	3	95	10	1	25	2	35	10	1	12	23	2	5	9	2	1	3	2	1	1	4	1	4	273	429	77	89	4	2	15	1	7	5	2	2	4	4	2	3	5	1	4	1	1

色調 接合材 分類部位	赤色																																												
	漆 増 材						接合材無し																																						
	分類 IV			分類 V (練瓦)			分類 I				分類 II		分類 III						分類 IV																										
	Db	不明b	不明b	完形	角1	角2	角3	角無し	A	B	C	不明	角無し	Aa	Ab	Ba	Bb	Ca	ABa	ABb	不明a	不明b																							
個数	1	99	134	1	105	154	1	17	4	1	12	1	1	1	2	1	3	3	10	36	11	2	23	2	38	5	7	27	2	13	13	1	4	1	1	3	170	2	323	60	115	2	2	3	9

第36表 塙觀察一覧①

撮影番号 図版番号	色調	接合材	残存状況	分類	観察事項	旧出土地	新出土地
第116図 図版83 1	赤色	無し	角1	I-A	厚さ5.5cm、突起部厚さ、4.2cm、蓋状。下面にL字状突起を有する。	II期基壇 北側石垣の覆土	II期基壇 北側翼状 I層
第116図 図版83 2	灰色	漆喰 有り	角1	I-B	上面長21.2cm、下面長19.0cm、全体の厚さ9.9cm。T字状突起を有する。	K7 94・95 第1層 コーラル層	K7-94・95 I層 (コーラル層)
第116図 図版83 3	赤色	無し	角1	I-B	厚さ4.9cm、突起部厚さ2.9cm、側面に段、下面にL字突起を有する。		不明
第116図 図版83 4	灰色	無し	角1	I-B	厚さ9.5cm、突起部厚さ1.2cm、下面に突起を有する。		出土不明
第116図 図版83 5	灰色	無し	角1	I-B	上面長23.4cm、下面長22.5cm、厚さ9.0cm、突起部厚さ5.8cm、側面に段、突起を有する。	表土 K8 103	K8-103 表土
第117図 図版84 6	灰色	漆喰 有り	角2	I-C	ほぼ完形。厚さ5.3cm、突起部厚さ2.5cm、側面に段、下面に突起を有する。		出土不明
第117図 図版84 7	灰色	無し	角1	II	厚さ3.1cm、突起部厚さ1.2cm、側面に段、下面に突起を有する。	SW13 下部	L0-96 SW13
第117図 図版84 8	灰色	漆喰 有り	角無し	II	厚さ3.3cm、突起部厚さ、3.3cm。側面に段、下面に突起を有する。	4基壇 南壁外側 上層	南蹴り場 断面⑤
第117図 図版84 9	灰色	漆喰 有り	角無し	II	厚さ3.1cm、突起部厚さ3.1cm。側面に段、下面にL字状の突起を有する。		出土不明
第117図 図版84 10	灰色	漆喰 有り	完形	III-Ab	上面長27.0cm、下面長26.9cm、厚さ4.6cm。調整が丁寧で上下面の調差が少ない。上面には石灰質の薄膜が、側面に漆喰が付着する。		出土不明
第117図 図版84 11	灰色	無し	角2	III-Ab	上面長25.5cm、下面長24.8cm、厚さ6.5cm。上面・側面にわずかなく石灰質の薄膜が付着する。調整は良好。	IV期基壇 北側翼状石垣内	V期基壇
第118図 図版85 12	赤色	漆喰 有り	角2	III-Ab	上面長25.5cm、下面長24.8cm、厚さ4.2cm。上面にわずかなく石灰質の薄膜が付着する。調整はやや粗い。	L0 97 I期基壇の 北側面	II期基壇 北側翼状 I層
第118図 図版85 13	灰色	漆喰 有り	完形	III-Aa	上面長25.0cm、下面長24.0cm、厚さ3.6cm。全体にわずかなく石灰質の薄膜が付着する。調整は良好。	V期基壇 南蹴り場	VII期基壇 蹴り場
第118図 図版85 14	灰色	漆喰 有り	角2	III-Aa	上面長24.0cm、下面長23.5cm、厚さ3.1cm。上面・下面に石灰質の薄膜が付着。調整は良好。	K1 98 石組造構内	K1-98 SW5
第118図 図版85 15	赤色	漆喰 有り	完形	III-Aa	上面長24.5cm、下面長23.5cm、厚さ3.2cm。調整はやや粗い。	中央観察畦 東西軸 第IV層 暗褐色土層	中央観察畦① IV層 (暗褐色土層)
第118図 図版85 16	灰色	漆喰 有り	完形	III-Bb	上面長22.5cm、下面長22.0cm、厚さ4.5cm。上面に石灰質の薄膜が付着。調整は良好。○大のスタンプあり。		出土不明
第118図 図版85 17	赤色	無し	角1	III-Bb	上面長23.4cm、下面長22.5cm、厚さ3.3cm。上面・下面に石灰質の薄膜が付着。調整は良好。	SW13 下部	L0-96 SW13
第118図 図版85 18	灰色	無し	完形	III-Ba	上面長23.5cm、下面長22.5cm、厚さ3.4cm。下面に石灰質の薄膜が付着。調整は良好。側面にヘラ記号「×」。		出土不明
第118図 図版85 19	赤色	漆喰 有り	角2	III-Ba	上面長22.5cm、下面長22.0cm、厚さ3.1cm。下面にわずかなく石灰質の薄膜が付着。調整は良好。側面にヘラ記号「//」。	表土 L5 97	L5-97 表土
第119図 図版86 20	赤色	無し	角2	III-Ca	上面長25.2cm、下面長25.0cm、厚さ3.9cm。調整は良好。	IV期基壇 化粧石前ブール 遺構内	SP3

注「-」:計測不可

第36表 塙觀察一覧(2)

捕獲番号 図版番号	色調	接合材	残存状況	分類	観察事項	旧出土地	新出土地
第119図 図版86 21	灰色	漆喰 有り	角2	III-Cb	上面長24.5cm、下面長23.8cm、厚さ4.4cm。全体に漆喰が付着しており、間に漆喰を挟む。割加工。調整はやや粗い。	正面部	出土地不明
第119図 図版86 22	赤色	無し	角1	III-Ca	上面長15.5cm、下面長13.6cm、厚さ3.6cm。漆喰の付着がみられない、側面の調整がやや粗い。	第2 L3 97	L3-97 II層
第119図 図版86 23	灰色	漆喰 有り	角2	III-Db	上面長25.0cm、下面長24.7cm、厚さ3.6cm。全体に漆喰が付着する。調整はやや粗い。	52号 穴	K7-94 柱穴52
第119図 図版86 24	赤色	漆喰 有り	完形	IV-A	縦長さ31.0cm、横長さ11.0cm、厚さ4.3cm。表面の縦位に漆喰が、裏面に薄く石灰質の薄膜が付着。調整はやや粗い。	不明	出土地不明
第119図 図版86 25	赤色	漆喰 有り	角2	IV-Ba	縦長さ22.0cm、横長さ16.5cm、厚さ3.3cm。表面に厚く漆喰が付着する。調整は粗い。	不明	出土地不明
第120図 図版87 26	赤色	漆喰 有り	完形	IV-Bb	縦長さ33.0cm、横長さ17.0cm、厚さ4.4cm。全体に漆喰が付着するが、一方の側面には漆喰が付着しない。調整は良好。	不明	出土地不明
第120図 図版87 27	灰色	漆喰 有り	完形	IV-A	縦長さ24.0cm、横長さ12.0cm、厚さ3.4cm。全体に漆喰が付着する。調整はやや粗い。	表土	表土
第120図 図版87 28	灰色	漆喰 有り	完形	IV-Ba	縦長さ29.0cm、横長さ16.5cm、厚さ3.8cm。全体に漆喰が付着するが、一方の側面には漆喰が付着しない。調整は良好。	表 L1 102	L1-102 表採
第120図 図版87 29	灰色	漆喰 有り	完形	IV-Bb	縦長さ33.5cm、横長さ16.5cm、厚さ3.7cm。全体に漆喰が付着する。調整はやや粗い。	表土 K10 101	K10-101 表土
第120図 図版87 30	赤色	漆喰 有り	完形	IV-Ca	縦長さ34.0cm、横長さ21.5cm、厚さ3.8cm。器面の半分に漆喰が付着する。調整は良好。	正面部	出土地不明
第120図 図版87 31	赤色	漆喰 有り	完形	IV-Ca	縦長さ34.0cm、横長さ18.0cm、厚さ3.5cm。表面の一つの側面と裏面全体に漆喰が付着する。調整は良好。	不明	出土地不明
第121図 図版88 32	赤色	漆喰 有り	完形	IV-Ca	縦長さ29.5cm、横長さ18.5cm、厚さ3.1cm。表面の一つの側面と裏面全体に漆喰が付着する。調整は良好。	不明	出土地不明
第121図 図版88 33	灰色	漆喰 有り	完形	IV-Cb	縦長さ32.0cm、横長さ21.5cm、厚さ4.1cm。表面の一つの側面と裏面全体に漆喰が付着する。調整はやや粗い。	不明	出土地不明
第121図 図版88 34	灰色	漆喰 有り	角2	IV-Cb	縦長さ26.0cm、横長さ22.5cm、厚さ4.0cm。全体に漆喰が付着する。調整はやや粗い。	不明	出土地不明
第121図 図版88 35	赤色	漆喰 有り	完形	IV-Cb	縦長さ32.0cm、横長さ18.0cm、厚さ4.3cm。全体に石灰質の薄膜とマンガン軸が付着する。調整は良好。	表土 K4 103	K4-103 表土
第122図 図版89 36	赤色	漆喰 有り	角2	IV-Da	縦長さ18.0cm、横長さ22.0cm、厚さ3.0cm。全体に漆喰とわずかにマンガン軸が付着する。調整は良好。	不明	出土地不明
第122図 図版89 37	赤色	漆喰 有り	角無し	IV-Db	縦長さ19.0cm、横長さ20.0cm、厚さ4.0cm。全体に漆喰とわずかにマンガン軸が付着する。調整は良好。	表土 L0 100	L0-100 表土
第122図 図版89 38	赤色	漆喰 有り	完形	I-不明	縦長さ22.0cm、横長さ11.0cm、厚さ6.0cm。煉瓦。わずかに石灰質の薄膜が付着する。調整は良好。	表 L3 92	L3-92 表採

注「-」:計測不可

第37表 錢貨集計表

時代 銭種	前漢		新		唐		前蜀		後周		北宋									
	四銖半兩 三分錢		貨泉		乾元重寶		開元通寶		光天元寶		周通元寶		太平通寶		淳化元寶		咸平元寶		祥符通寶	
	完形		破片		完形		破片		破片		完形		破片		完形		破片		完形	
個数	1	1	1	8	15		1	1	1	3	2	3	2	3	4	2	2	3		

時代 銭種	北宋																		
	祥符元寶 or 通寶	天禧通寶	天聖元寶	明道元豐	景祐元寶	皇宋通寶	至和元寶	聖和通寶	嘉祐元寶	嘉祐通寶	治平元寶								
	破片	完形	完形	破片	破片	破片	完形	破片	完形	完形	破片								
個数	1	2	3	15	1	1	3	18	1	2	1	1	5	2	5				

時代 銭種	北宋																		
	熙寧元寶	熙寧元寶 (折二)	元豐通寶	元豐通寶 (折二)	元祐通寶 or 元 通寶	元祐通寶	紹聖元寶	元符通寶	聖宋元寶	大觀通寶	政和通寶								
	完形	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	完形								
個数	16	11	1	14	15	1	3	1	10	12	2	2	2	4	9	4	15		

時代 銭種	北宋					南宋					元		明						
	政和通寶 (折二)	宣和通寶	淳熙元寶	紹熙元寶	開禧通寶	嘉定通寶	皇宋元寶	景定元寶	至大通寶	大中通寶	洪武通寶	洪武通寶 (折二)							
	破片	破片	破片	破片	破片	破片	破片	破片	破片	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片			
個数	1	1	1	1	1	1	4	1	1	1	1	2	45	23	1	2			

時代 銭種	明					清					琉球			輪錢	無文錢	不明銭	付着銭	付着銭 (無文銭)
	永樂通寶	宣德通寶	康熙通寶	乾隆通寶	道光通寶	大世通寶	世高通寶											
	完形	破片	完形	完形	破片	完形	完形	破片	完形	完形	破片	完形	破片					
個数	28	12	1	1	1	1	5	13	1	4	19	11	33	206	27	4		

時代 銭種	江戸					明治					大正					
	寛永通宝					10年	17年	20年	23年	31年(1898)	一錢	半錢	3年	5年	8年	9年
	1期	2期	3期	新	二銖	半銖	半銖	五銖	一錢		十銖	一銖	一銖	一銖	一銖	
個数	14	2	3	2	14	1	2	1	1	1	1	2	2	1	1	2

時代 銭種	大正										昭和									
	10年		11年		12年		13年		14年		年代不明		十銖	一錢	7年	10年	11年	13年	14年	15年
	一錢	五銖	一錢	五銖	一錢	五銖	一錢	五銖	一錢	一錢	一錢	一錢	一錢	五銖	五銖	十銖	十銖	一錢	一錢	
個数	3	1	2	1	1	1	1	1	3	10	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1

時代 銭種	昭和								満州國 大同3年			米国		合計				
	16年				17年				16・18年		五銖 (アルミニウム貨)		一錢	五分 白銅貨		1セント		
	一錢	五銖	一錢	五銖	一錢	五銖	一錢	五銖	一錢	一錢	一錢	一錢	一錢	一錢	一錢	一錢	一錢	
個数	1	9	1	1	1	1	1	1	2	3	1	5		1	1	1	802	

第38表 錢貨觀察一覽①

単位:mm, g

辨別番号 図版番号	錢貨名	初鑄年代	法量				残存	旧出土地	新出土地
			錢徑	孔径	錢厚	重量			
第125回 國版90 1	四銖半兩 三分銖	前漢B.C.175 年	24.02	8.41	1.17	2.30	完形	II期基壇前面100トレンチ 第2段階の基壇 正面石積内その下	II期基壇
第125回 國版90 2	貨泉	新A.D.14年	23.00	6.93	1.78	2.92	完形	遺構No.2 II期基壇化粧石前	III期基壇
第125回 國版90 3	開元通寶	-	24.48	6.44	1.39	3.52	完形	II期基壇 化粧石前	III期基壇
第125回 國版90 4	開元通寶	-	24.38	6.55	1.23	3.34	完形	石灰岩 K6 101	IV期基壇
第125回 國版90 5	開元通寶	-	25.29	6.66	1.28	2.22	破片	表土 K1 K2 92	K1・2-92 表土
第125回 國版90 6	開元通寶	-	24.20	7.08	0.96	2.92	完形	表土 K6 103⑩	K6-103 表土
第125回 國版90 7	開元通寶	唐845年	25.64	6.25	1.85	4.13	完形	No.2 II期基壇 正面部⑪	III期基壇
第125回 國版90 8	光天元寶	前蜀918年	23.55	6.59	1.04	2.07	破片	第2層 20cm K6 93	K6-93 II層
第125回 國版90 9	周通元寶	後周955年	24.97	6.39	1.06	3.15	完形	表土 K2 92-93⑫	K2-92-93 表土
第125回 國版90 10	太平通寶	北宋976年	24.55	5.75	1.21	3.32	完形	遺構No.2 II期基壇化粧石前⑬	III期基壇
第125回 國版90 11	淳化元寶	北宋990年	25.05	5.81	1.42	3.85	完形	遺構No.1 II期基壇化粧石前⑮	III期基壇
第125回 國版90 12	咸平元寶	北宋998年	24.69	5.56	1.46	3.93	完形	II期基壇 化粧石前	III期基壇
第125回 國版90 13	咸平元寶	-	24.83	5.89	1.15	2.98	完形	遺構No.1 II期基壇化粧石前⑯	III期基壇
第126回 國版91 14	祥符通寶	北宋1009年	26.33	5.50	1.23	3.85	完形	遺構No.1 II期基壇化粧石前⑰	III期基壇
第126回 國版91 15	祥符元寶	北宋1009年	25.66	6.02	1.39	3.33	完形	II期基壇 化粧石前	III期基壇
第126回 國版91 16	祥符元寶	-	26.03	6.20	1.43	4.08	完形	II期基壇 正面部	III期基壇
第126回 國版91 17	天禧通寶	北宋1017年	25.76	5.85	1.45	3.25	完形	擾乱層	擾乱層
第126回 國版91 18	天聖元寶	北宋1023年	24.83	6.67	1.30	3.26	完形	第II層 ⑦ 0-10 K6 95	K6-95 II層
第126回 國版91 19	天聖元寶	-	25.78	7.14	1.63	4.13	完形	表土 K4 101⑩	K4-101 表土
第126回 國版91 20	景祐元寶	北宋1034年	25.36	7.25	0.98	2.03	破片	表土 K1 K2 92	K1・2-92 表土
第126回 國版91 21	皇宋通寶	-	25.10	6.49	1.51	3.98	完形	石灰岩 K6 101	IV期基壇
第126回 國版91 22	皇宋通寶	北宋1038年	24.80	5.71	1.16	3.05	完形	No.8 表土	表土
第126回 國版91 23	至和通寶	北宋1054年	-	6.78	1.22	1.87	破片	表土 K1 K2 92	K1・2-92 表土

注「-」:計測不可

第38表 錢貨観察一覧(2)

単位:mm, g

検査番号 国版番号	錢貨名	初鑄年代	法量				残存	旧出土地	新出土地
			錢径	孔径	錢厚	重量			
第126國 国版91 24	嘉祐通寶	北宋1056年	25.02	7.10	1.27	3.16	完形	遺構No.5 III期基壇前面 K9 K10 100 第2基壇	IV期基壇
第126國 国版91 25	治平元寶	北宋1064年	24.74	6.31	1.43	3.77	完形	V期基壇前面100トレンチ 第2段階9基壇正面 石板内その下	II期基壇
第126國 国版91 26	治平元寶	-	-	-	1.22	1.49	破片	表土 No14	表土
第126國 国版91 27	熙寧元寶	北宋1068年	25.33	6.47	1.30	3.78	完形	II期基壇 東方のゾ	III期基壇
第127國 国版92 28	熙寧元寶	-	24.17	5.90	1.65	4.55	完形	表土 K7 99	K7-99 表土
第127國 国版92 29	熙寧元寶	-	23.99	6.30	1.22	2.94	完形	遺構No.2 II期基壇化粧石前	III期基壇
第127國 国版92 30	熙寧元寶	-	23.82	6.24	1.33	3.05	完形	擾乱層	擾乱層
第127國 国版92 31	熙寧元寶 折二	-	31.72	8.02	1.22	6.13	完形	第II層① 10-20 K3 93	K3-93 II層
第127國 国版92 32	元豐通寶	-	24.91	6.45	1.50	4.58	完形	遺構No.3 III期基壇前面 K9 K10 100 第2基壇正面 礫層中	K9-10-100 II期基壇 正面礫層中
第127國 国版92 33	元豐通寶	北宋1078年	24.82	6.58	1.34	3.53	完形	No.9-3.4 表土	表土
第127國 国版92 34	元豐通寶	-	24.76	5.87	1.41	4.41	完形	C観察トレ	中央観察トレンチ3 礫層
第127國 国版92 35	元豐通寶 折二	-	28.30	6.75	1.77	7.67	完形	かわや跡の覆土中	かわや跡 I層
第127國 国版92 36	元祐通寶	-	23.90	5.02	1.72	4.76	完形	遺構No.1 II期基壇化粧石前②	III期基壇
第127國 国版92 37	元祐通寶	北宋1086年	25.43	5.46	1.21	3.85	完形	II期基壇 化粧石前	III期基壇
第127國 国版92 38	元祐通寶	-	24.97	6.63	1.73	4.24	完形	テストピットK8 100 石灰岩塊層	III期基壇
第127國 国版92 39	元祐通寶	-	25.19	5.77	1.62	4.24	完形	II期基壇 正面部	III期基壇
第127國 国版92 40	紹聖元寶	-	-	6.32	1.35	1.58	破片	表土 K1 96	K1-96 表土
第127國 国版92 41	紹聖元寶	北宋1094年	-	5.66	1.29	2.09	破片	K10 94 土括 50cm	K10-94 土括5
第128國 国版93 42	元符通寶	-	24.14	6.58	1.53	3.75	完形	K2 92.93 表土	K2-92-93 表土
第128國 国版93 43	元符通寶	北宋1098年	25.05	6.65	1.26	3.54	完形	No.12 表土	表土
第128國 国版93 44	聖宋元寶	北宋1101年	24.24	6.57	1.20	3.75	完形	中央断削壁 K7 91 第2層	中央観察壁② II層
第128國 国版93 45	大觀通寶	北宋1107年	24.81	5.93	1.41	2.96	破片	K2 92 93 表土	K2-92-93 表土
第128國 国版93 46	政和通寶	-	24.71	5.91	1.32	3.31	完形	表土 K6 101	K6-101 表土

注「-」:計測不可

第38表 錢貨觀察一覧(3)

単位:mm, g

検査番号 図版番号	銭貨名	初鑄年代	法量				残存	旧出土地	新出土地
			錢径	孔径	錢厚	重量			
第128回 図版93 47	政和通寶	北宋1111年	24.27	5.67	1.37	3.57	完形	39号 柱穴	K2-91・92 柱穴39
第128回 図版93 48	政和通寶 折二	-	-	-	1.57	2.98	破片	I期基壇柱 51号 柱穴39	K7-93 柱穴51
第128回 図版93 49	宣和通寶	北宋1119年	-	-	1.23	1.15	破片	表土 L1 102	L1-102 表土
第128回 図版93 50	紹熙元寶	南宋1190年	-	5.89	1.31	2.14	破片	表土 K1 K2 92	K1・2-92 表土
第128回 図版93 51	淳熙元寶	南宋1174年	24.43	6.06	1.28	2.34	破片	No.15 表土	表土
第128回 図版93 52	開禧通寶	南宋1205年	-	-	1.19	1.54	破片	第II層⑥ 20cm K6 93	K6-93 II層
第128回 図版93 53	嘉定通寶	南宋1208年	-	-	1.20	2.19	破片	表土 K1 K2 92	K1・2-92 表土
第128回 図版93 54	皇宋元寶	南宋1253年	-	5.52	1.34	2.00	破片	表土 K3 92⑤	K3-92 表土
第128回 図版93 55	景定通寶	南宋1260年	24.78	6.55	1.17	2.27	破片	表土 K1 K2 92	K1・2-92 表土
第129回 図版94 56	至大通寶	元1310年	-	4.77	2.30	3.54	破片	遺構No.3 III期基壇前面 K9 K10 100 第2基壇 正面縦層中⑤	K9・10-100 II期基壇 正面縦層中
第129回 図版94 57	大中通寶	明1361年	25.06	5.33	1.60	4.06	完形	表土 K5 99⑤	K5-99 表土
第129回 図版94 58	洪武通寶	-	22.65	5.13	1.62	3.69	完形	表土 L2 102	L2-102 表土
第129回 図版94 59	洪武通寶	-	23.37	5.77	1.86	4.01	完形	(III期基壇前面)K9 K10 第II基壇 正面縦層中	K9・10-100 II期基壇 正面縦層中
第129回 図版94 60	洪武通寶	-	23.27	5.54	1.59	3.45	完形	搅乱層	搅乱層
第129回 図版94 61	洪武通寶	-	24.08	5.80	1.68	4.11	完形	テストピットK8 100 石灰岩塊層	III期基壇
第129回 図版94 62	洪武通寶	-	23.16	5.55	2.15	3.66	完形	II期基壇 化粧石前	III期基壇
第129回 図版94 63	洪武通寶	-	23.72	5.37	1.58	4.03	完形	テストピットK8 100 石灰岩塊層	III期基壇
第129回 図版94 64	洪武通寶	-	23.73	5.36	1.84	4.15	完形	II期基壇 化粧石前	III期基壇
第129回 図版94 65	洪武通寶	-	22.49	4.08	1.74	3.50	完形	II期基壇前面100トレンチ 第2段階の基壇 石積のその下	II期基壇
第129回 図版94 66	洪武通寶	-	21.33	4.11	1.74	2.94	完形	II期基壇前面100トレンチ 第2段階の基壇 正面石積内その下	II期基壇
第129回 図版94 67	洪武通寶	-	23.14	6.43	1.68	3.91	完形	II期基壇 正面部	III期基壇
第129回 図版94 68	洪武通寶 折二	-	29.57	5.80	2.13	8.48	完形	中央部爆弾跡	爆弾跡②
第130回 図版95 69	洪武通寶 折二	-	-	-	1.66	4.41	破片	表土層 K3-92	K3-92 表土

注「-」:計測不可

第38表 錢貨觀察一覽(4)

單位:mm, g

辨認番號 圖版番號	錢貨名	初鑄年代	法量				殘存	旧出土地	新出土地
			錢徑	孔徑	錢厚	重量			
第130回 圖版95 70	洪武通寶 折二	-	-	-	1.79	3.89	破片	L0~1.98 撥亂層	L0~1~98 撥亂層
第130回 圖版95 71	洪武通寶	-	-	-	2.13	2.07	破片	(III期基壇 前面) K9 K10 100 第2基壇 正面裸層中	K9~10~100 II期基壇 正面裸層中
第130回 圖版95 72	洪武通寶	-	-	-	2.03	1.02	破片	表土 K1 96	K1~96 表土
第130回 圖版95 73	永樂通寶	-	25.61	5.06	1.26	3.33	完形	遺構No.1 II期基壇 化粧石前①	III期基壇
第130回 圖版95 74	永樂通寶	-	25.95	5.02	1.25	3.83	完形	第II層② 0~20 K4 97	K4~97 II層
第130回 圖版95 75	永樂通寶	-	24.92	5.13	1.34	3.77	完形	表土 L2 102	L2~102 表土
第130回 圖版95 76	永樂通寶	-	25.45	5.03	1.67	4.76	完形	石灰岩裸層 K8 100 (III期基壇)	III期基壇
第130回 圖版95 77	永樂通寶	-	25.89	4.82	1.57	4.19	完形	I期基壇 階段蛙	II期基壇
第130回 圖版95 78	永樂通寶	-	25.53	4.63	1.92	6.23	完形	II期基壇 化粧石前	III期基壇
第130回 圖版95 79	永樂通寶	明1408年	24.91	4.98	2.01	5.34	完形	No.17 表土	表土
第130回 圖版95 80	永樂通寶	-	25.58	4.70	1.78	4.34	完形	II期基壇 正面部	III期基壇
第130回 圖版95 81	永樂通寶	-	-	5.40	1.20	2.90	完形	第II層 0/10 K9.95	K9~95 II層
第130回 圖版95 82	宣德通寶	明1433年	24.99	4.40	1.61	3.62	完形	遺構No.3 II期基壇 正面部②	III期基壇
第131回 圖版96 83	康熙通寶	清1662年	21.17	4.63	1.06	1.95	完形	表土 K0 98②	K0~98 表土
第131回 圖版96 84	乾隆通寶	清1736年	23.31	5.40	0.97	1.74	破片	表土 K2 96	K2~96 表土
第131回 圖版96 85	道光通寶	清1821年	21.88	5.19	1.84	3.44	完形	第II層④ 10~20 K2 93	K2~93 II層
第131回 圖版96 86	世高通寶	-	23.00	4.92	1.09	2.57	完形	II期基壇 化粧石前	III期基壇
第131回 圖版96 87	世高通寶	-	23.66	4.49	1.45	4.23	完形	遺構No.1 II期基壇 化粧石前②	III期基壇
第131回 圖版96 88	世高通寶	-	22.56	4.34	1.20	2.74	完形	II期基壇 正面部	III期基壇
第131回 圖版96 89	世高通寶	琉球1461年	23.27	4.49	2.79	5.95	完形	No.3 石組遺構 SW3	K2~96 SW3
第131回 圖版96 90	世高通寶	-	23.22	3.76	1.73	3.12	完形	II期基壇 正面部	III期基壇
第131回 圖版96 91	世高通寶	-	23.50	4.60	1.49	4.28	完形	II期基壇 正面部	III期基壇
第131回 圖版96 92	世高通寶	-	24.18	4.13	2.09	4.12	完形	II期基壇 正面部	III期基壇

注「-」：計測不可

第38表 錢貨觀察一覽(5)

単位:mm, g

辨認番号 図版番号	錢貨名	初鑄年代	法量				残存	旧出土地	新出土地
			錢徑	孔径	錢厚	重量			
第131図 図版96 93	世高通寶	-	24.04	4.64	1.40	3.43	完形	II期基壇 正面部	III期基壇
第131図 図版96 94	世高通寶	-	23.44	4.06	1.24	2.76	完形	II期基壇 正面部	III期基壇
第131図 図版96 95	世高通寶	-	23.94	4.20	2.06	5.13	完形	II期基壇 正面部	III期基壇
第131図 図版96 96	世高通寶	-	23.38	3.95	1.49	3.29	完形	II期基壇 正面部	III期基壇
第132図 図版97 97	世高通寶	-	23.18	4.20	1.50	2.68	完形	II期基壇 正面部	III期基壇
第132図 図版97 98	世高通寶	-	23.90	4.63	0.99	2.18	完形	II期基壇 正面部	III期基壇
第132図 図版97 99	世高通寶	-	22.74	3.95	1.24	2.28	破片	II期基壇 化粧石前	III期基壇
第132図 図版97 100	大世通寶	-	23.85	5.05	1.81	5.14	完形	II期基壇 化粧石前	III期基壇
第132図 図版97 101	大世通寶	琉球1454年	23.66	5.14	1.65	4.49	完形	No.1 II期基壇 化粧石前⑧	III期基壇
第132図 図版97 102	大世通寶	-	23.90	5.54	1.32	4.03	完形	II期基壇 正面部	III期基壇
第132図 図版97 103	大世通寶	-	23.99	4.60	1.68	4.26	完形	II期基壇 正面部	III期基壇
第132図 図版97 104	大世通寶	-	23.71	4.60	1.50	3.50	完形	II期基壇 正面部	III期基壇
第132図 図版97 105	寛永通寶 1期	-	25.68	5.50	1.70	3.97	完形	搅乱層	搅乱層
第132図 図版97 106	寛永通寶 1期	-	25.17	5.36	1.40	4.50	完形	L1 98 搅乱層	L1-98 搅乱層
第132図 図版97 107	寛永通寶 1期	-	24.90	5.21	1.61	4.05	完形	No.18-2 表土	表土
第132図 図版97 108	寛永通寶 1期	-	23.22	5.14	1.30	3.59	完形	中央部爆弾跡	爆弾跡②
第132図 図版97 109	寛永通寶 2期	-	25.20	5.31	1.55	4.26	完形	表土 L2 103	L2-103 表土
第133図 図版98 110	寛永通寶 2期	-	24.71	5.68	1.21	3.16	完形	表土 K5 103 ③	K5-103 表土
第133図 図版98 111	寛永通寶 2期	-	25.62	4.96	1.92	4.43	完形	L1 98 搅乱層	L1-98 搅乱層
第133図 図版98 112	寛永通寶 3期	-	23.21	6.37	1.06	2.30	完形	No.18-6 表土	表土
第133図 図版98 113	寛永通寶 3期	-	25.57	5.53	1.22	3.71	完形	No.18 表土	表土
第133図 図版98 114	寛永通寶 3期	-	22.65	6.20	0.90	2.07	完形	No.18 表土	表土
第133図 図版98 115	寛永通寶 3期	-	22.95	6.73	1.04	2.37	完形	基壇前面100トレンチ 第2階段基壇正面 石板内その下	II期基壇

注「-」:計測不可

第38表 錢貨觀察一覧(6)

単位:mm, g

検査番号 図版番号	銭貨名	初鑄年代	法量				残存	旧出土地	新出土地
			錢径	孔径	錢厚	重量			
第133図 図版98 116	無文銭	-	22.57	6.50	1.48	2.51	完形	擾乱層	擾乱層
第133図 図版98 117	無文銭	-	21.74	6.71	1.14	2.30	完形	II期基壇 正面部	III期基壇
第133図 図版98 118	無文銭	-	20.44	7.17	0.81	1.45	完形	No.21-1 表土	表土
第133図 図版98 119	無文銭	-	17.44	8.19	0.65	0.65	完形	K9 100	K9-100 表採
第133図 図版98 120	無文銭	-	15.05	8.56	0.63	0.39	完形	第2層 50~60 K6 97	K6-97 II層
第133図 図版98 121	輪銭	-	10.60	6.25	0.74	0.16	完形	SW9 潜構内	K1-96 SW9
第133図 図版98 122	輪銭	-	10.89	7.38	0.56	0.13	完形	SW9 潜構内	K1-96 SW9
第133図 図版98 123	輪銭	-	8.03	5.03	0.45	0.04	完形	表土 L4 101	L4-101 表土
第133図 図版98 124	半銭	明治20年	22.28	-	1.07	3.33	完形	表土 L1 97	L1-97 表土
第134図 図版99 125	一銭	明治31年	28.00	-	1.53	6.56	完形	表土層 K4-97	K4-97 表土
第134図 図版99 126	二銭	明治10年	31.82	-	2.34	13.29	完形	L1 98 摶乱層	L1-98 摶乱層
第134図 図版99 127	五銭 (菊5銭白銅 貨)	明治23年	20.54	-	1.84	4.38	完形	L0 97 SW13 井戸状構外 東側グリット	L0-97 SW13
第134図 図版99 128	一銭	大正13年	23.05	-	1.42	3.71	完形	V期基壇 南跡⑨場	VI期基壇 跡⑨場
第134図 図版99 129	五銭	大正10年	19.21	3.64	1.35	2.61	完形	表土 K6 101	K6-101 表土
第134図 図版99 130	十銭	大正10年	23.32	-	1.39	3.65	完形	表土 K6 101	K6-101 表土
第134図 図版99 131	十銭	大正10年	22.07	5.00	1.26	2.91	完形	L0 99 砲弾に上る擾乱層	L0-99 爆弾跡④
第134図 図版99 132	一銭	昭和7年	23.32	-	1.43	3.65	完形	No.19-5	出土地不明
第134図 図版99 133	一銭	昭和16年 (アルミニウム 貨)	16.10	-	1.60	0.65	完形	表土 K5 103	K5-103 表土
第134図 図版99 134	五銭	昭和14年	19.21	3.82	1.50	2.66	完形	表土 L2 101	L2-101 表土
第134図 図版99 135	五銭	昭和17年	19.10	-	1.63	1.03	完形	表土 L2 102	L2-102 表土
第134図 図版99 136	十銭	昭和14年	22.18	4.30	1.74	3.93	完形	L1 102 摶乱	L1-102 摶乱層
第134図 図版99 137	5分白銅貨 大満州大同 3年	20.08	-	1.37	3.38	完形	表土 L4 100	L4-100 表土	
第134図 図版99 138	1セント	-	19.02	-	1.36	2.99	完形	表土 K2 103	K2-103 表土

注「-」:計測不可

第39表 煙管集計表

分類	羅宇煙管											
	雁首											
	円筒形未成品		面取り		面取り火皿のみ		指圧パイプ形		丸形			
	瓦軸用	瓦質	沖無		沖無		沖無		沖施		中国産?	
			黒褐	赤褐色	黒褐	赤褐色	黒褐	透明釉	緑釉	瑠璃釉	透明釉	瑠璃釉
個数	1	1	20	9	2	1		1	7	7	2	1

分類	羅宇煙管															
	雁首						吸口									
	丸形火皿のみ		古泉編年 III・IV	古泉編年 IV	古泉編年 V	古泉編年 VI	太形									
	沖施						沖施			染付 (本土產 肥前)	中國產?					
	自然釉						灰釉	黃釉	透明釉		瑠璃釉					
個数	1	1	1	3	1	1	1	1	5	6	1	1				

分類	羅宇煙管					延べ煙管	合計		
	吸口								
	古泉編年 IV	古泉編年 V	古泉編年 VI	古泉編年 IV~VI	分類不明 金屬製				
個数	1	3	2	1	1	2	85		

第40表 煙管觀察一覧

単位:cm, g. ○は残存長

拂岡番号 国販番号	材質	分類	部位	法螺								観察事項	旧出土地	新出土地		
				全長	高さ 幅	外 内	接続部径 外 内	吸口 外 内	重量							
第135回 国販100 1	瓦	円筒形	雁首	-	3.90 2.65	-	-	-	-	31.66	灰瓦を軸用、一面に布目模様。加工:力押状に加工。全面研磨。円筒形拂管雁首の未成品。片側底。	PV聚氯乙烯 化粧石蕊アーチ 道構内	SP3			
第135回 国販100 2	瓦質	円筒形	雁首	-	3.85 2.65	-	-	-	-	36.29	片側底互換製品を軸用。一部に 表面面倒。加工:下面に切断面倒。 それ以外の各面面倒。綫条痕残 円筒形拂管雁首の未成品。	SW3	K2-96 SW3			
第135回 国販100 3	沖無 (黒鉛)	面取り	雁首	3.30	-	(1.45)	1.00	1.45	1.05	-	5.74	面取り加工。	不明	出土不明		
第135回 国販100 4	沖無 (黒鉛)	面取り	雁首	3.75	-	1.90	1.45	1.15	0.85	-	7.85	火薬内面に煤付着。	不明	出土不明		
第135回 国販100 5	沖無 (黒鉛)	面取り	雁首	4.45	-	1.75	1.40	1.50	0.95	-	10.69	部分的に綫条痕残。火薬底面に 煤付着。	第21.4.99	L4-99 II層		
第135回 国販100 6	沖無 (黒鉛)	面取り	雁首	4.40	-	1.75	1.25	1.45	0.95	-	11.01	火薬底面に煤付着。	第21.2.98	L2-98 II層		
第135回 国販100 7	沖無 (赤鉛)	面取り	雁首	3.15	-	1.50	1.05	1.50	0.85	-	6.83	火薬外縁部に煤付着。首部火薬 側に張り出しある。	L4.97	L4-97 表採		
第135回 国販100 8	沖無 (赤鉛)	面取り	雁首	3.40	-	1.65	1.05	(1.40)	(0.90)	-	5.18	火薬外縁部に煤付着。火薬上面・ 雁首接合部変色。	表L6.96	L6-96 表採		
第135回 国販100 9	沖無 (赤鉛)	面取り	雁首	(4.00)	-	1.50	1.10	-	-	-	4.94	火薬上面変色。	KI-96 石組 道構内	KI-96 SW9		
第135回 国販100 10	沖無 (黒鉛)	-	雁首	4.75	-	2.75	1.20	1.90	0.85	-	27.80	首部両側面に指痕痕。	第2 K8.99	K8-99 II層		
第135回 国販100 11	沖無 (透明 糊)	太形	吸口	3.40	-	-	-	1.40	1.05	0.60	0.40	7.35	胎土:灰白色。口付先端部のみ変 色。	第78 柱穴	L1-93 柱穴74	
第135回 国販100 12	沖無 (黄鉛)	太形	吸口	2.10	-	-	-	1.25	0.80	0.70	0.20	2.33	胎土:灰白色。	表L5.95	L5-95 表採	
第135回 国販100 13	沖無 (透明 糊)	丸形	雁首	(2.50)	-	1.25	1.00	-	-	-	3.38	胎土:灰白色黑色拉出しある。火薬 内面に煤付着。	KI- 石組内	KI-96 SW9		
第135回 国販100 14	沖無 (透明 糊)	太形	吸口	3.10	-	-	-	1.70	1.10	0.65	0.40	4.50	小口部棘刺が。胎土:灰白色黑色 輪出しある。火薬内面に煤付着。	井戸 99 井戸内遺構外 西クリット	L0-99 SW137	
第135回 国販100 15	沖無 (緑鉛)	丸形	雁首	2.20	-	1.30	1.10	1.40	1.05	-	4.65	小口部棘刺が。胎土:灰白色黑色 輪出しある。火薬内面に煤付着。	KI.96	KI-96 表採		
第135回 国販100 16	沖無 (緑鉛)	太形	吸口	2.60	-	-	-	1.40	0.85	0.55	0.35	2.87	小口部棘刺が。胎土:灰白色黑色 輪出しある。小口部有孔。	L5.98 グリット	L5-98 表採	
第135回 国販100 17	沖無 (緑鉛)	丸形	雁首	2.40	-	1.20	1.05	1.25	0.90	-	3.38	研磨状の装飾あり。胎土:灰白色。 片側底。	不明	出土不明		
第135回 国販100 18	中塗? (透明 糊)	太形	吸口	-	-	-	-	-	-	0.60	0.35	0.63	小口部棘刺が。胎土:灰白色。小 口部片口付部。	表L2.97	L2-97 表採	
第135回 国販100 19	中塗? (透明 糊)	丸形	雁首	(3.05)	-	-	-	-	-	(1.10)	(0.80)	2.52	全面白塗。胎土灰白色。半剝。	SW13 下層	L0-96 SW13	
第135回 国販100 20	鋼	古泉 V型	雁首	4.85	-	1.90	0.80	0.90	0.70	-	12.86	縁邊、火薬部陥落着。側面に溶着の 縁残。首部火薬側に火薬部によ る大きな凹みがある。	C鏡察レ- ンジテ-3 鏡層	中央鏡察 レンジテ-3 鏡層		
第135回 国販100 21	鋼	古泉 V型	吸口	5.85	-	-	-	1.00	0.80	0.60	0.45	7.25	鍛造。	灰土層 L5.98	L5-98 灰土	

注「-」:計測不可

第41表 煙管の形状・素材別数量一覧

形状	素材	瓦質・瓦軸用	中国産?	本土産染付	沖施	沖無	銅	合計
羅字煙管	雁首	円筒形	2					2
		面取り				32		32
		丸形		2	17			19
		指圧パイプ形				1		1
		小計	2	2	0	33	0	54
	吸口	古泉編年Ⅲ・Ⅳ					1	1
		古泉編年Ⅳ					1	1
		古泉編年Ⅴ					3	3
		古泉編年Ⅵ					1	1
		小計	0	0	0	0	6	6
延べ煙管	非金属製	太形		1	1	13		15
		古泉編年Ⅳ					1	1
		古泉編年Ⅴ					3	3
		古泉編年Ⅵ					2	2
		古泉編年Ⅳ～Ⅵ					1	1
		分類不明					1	1
		小計	0	0	0	0	8	8
合計		2	3	1	30	33	16	85

第42表 玉類集計表

分類	勾玉							水晶製	数珠玉				ガラス製	玉	
	丁字頭	勾玉			未成品	水晶製			水晶製		ガラス製	ガラス製			
	ガラス製 結晶質 石灰岩製	翡翠製	ガラス製	蠟石?製	水晶製	水晶製	ガラス製		水晶製	水晶製	ガラス製	ガラス製			
	灰白	灰白	濃緑	青	水	薄黄緑	半透明		半透明	半透明	半透明	半透明	木		
個数	1	1	1	1	1	1	1		1	1	1	2	2		

分類	小玉													ガラス製?	ガラス製		
	水晶製	ガラス製								ガラス製?		ガラス製					
	I類	I類								I類		II類					
	半透明	青	水	緑	赤	黄	黒	白	緑	不明	黄	青	水	赤	黄	黒	白
個数	2	28	28	2	14	15	2	1	21	1	1	30	130	6	4	1	3

分類	小玉												器種不明	合計			
	ガラス製																
	II類		III類		IV類		V類										
	緑	不明	青	水	緑	青	水	青	水	黄	黒	半透明	緑				
個数	25	1	12	18	2	1	11	2	11	1	1	1	2	1	391		

第43表 玉類観察一覧

単位:mm, g

捕獲番号 図版番号	器種	色	外径 内径 高さ	重量	観察事項	旧出土地	新出土地
第136図 図版101 1	勾玉	灰白色	4.5×5.5 17.0	30.00	素材:ガラス製。頭部3条、くびれ部1条の刻線あり(丁字頭)。頭部穿孔は片側方向主体。整形精緻。	K9 97 Grit 第2層 0~20 石組内	K9~97 SW11
第136図 図版101 2	勾玉	灰白色	- 14.0	11.00	素材:結晶質石灰岩。頭部欠損。整形精緻。	K2 95 No.3 石組遺構 SW3	K2~96 SW3
第136図 図版101 3	勾玉	濃緑色	- 1.0 5.5	1.80	素材:翡翠。小形。頭部は両面より穿孔。整形精緻。	No.3 石組 SW3	K2~96 SW3
第136図 図版101 4	勾玉	薄黄緑色	- 3.5 16.0	6.60	素材:蠟石か。頭部のみ残存。両面より穿孔も貫通に達せず、未完成の可能性あり。整形精緻も研磨の痕跡残。	第2 K8 96	K8~96 II層
図版101 5	数珠玉?	半透明	22.4 2.9 14.4	9.10	素材:ガラス。レンズ状に整形され中心に槽あり。中心部に製作時の軸棒の孔残る。表面極めて平滑。	K3 96 第3 石組遺構内	K2~96 SW3
図版101 6	数珠玉?	半透明	10.4 2.2 12.3	2.00	素材:ガラス。肧玉状に整形。中心部に製作時の軸棒の孔残る。表面極めて平滑。	IV期基壇 化粧石前 ブール 遺構内	SP3
図版101 7	小玉 I類	半透明	7.1 1.7 7.2	0.50	素材:水晶。断面形はほぼ正円。中心部に両面からの穿孔あり。表面平滑。内面は無数にひび割れ。	No.3 石組 SW3	K2~96 SW3
図版101 8	小玉 I類	黄色	10.4 3.2 10.3	1.20	素材:ガラス。黄色に塗装も部分的に剥落し、半透明の素材面露出。塗装剥落部に螺旋状の筋が残。	II期基壇 化粧石前	III期基壇
図版101 9	小玉 I類	黄色	9.7 1.9 9.2	1.20	素材:ガラス?。黄色に塗装もほぼ剥落し、黒灰色の素材面露出。螺旋状の筋明顯。	II期基壇 化粧石前	III期基壇
図版101 10	小玉 I類	赤色	5.4 1.0 5.0	0.10	素材:ガラス。表面平滑で螺旋状の筋はほとんど確認できない。	表土 L0 100	L0~100 表土
図版101 11	小玉 I類	青色	8.0 2.9 5.7	0.40	素材:ガラス。螺旋状の筋はほとんど確認できない。	K2~98 第一層	K2~98 I層
図版101 12	小玉 I類	白色	8.3 3.3 6.3	0.40	素材:ガラス。白色の塗装も一部剥落し、半透明の素材面が露出。螺旋状の筋明顯。	表土 L3 104	L3~104 表土
図版101 13	小玉 I類	緑色	6.0 2.6 5.1	0.20	素材:色ガラス。側面3カ所に凹みを作出し、溝巻状に整形した透明ガラスを充填。	表土 K9 100	K9~100 表土
図版101 14	小玉 I類	緑色	5.4 1.9 4.3	0.10	素材:色ガラス。表面は微細な発泡痕が残る。螺旋状の筋が確認でき特に中央部は凸状に肥大。	K6 99	K6~99 表土
図版101 15	小玉 I類	緑色	4.6 1.5 2.9	0.10	素材:色ガラス。表面は平滑で、螺旋状の筋は確認されない。	南側	VII期基壇 南踊り場 階段
図版101 16	小玉 I類	緑色	4.2 1.6 2.7	0.08	素材:色ガラス。整った形状だが、片側の穿孔面は平坦。螺旋状の筋明顯。	K3 96 第3 石組遺構内	K2~96 SW3
図版101 17	小玉 II類	水色	2.9 1.1 2.2	0.01	素材:ガラス。水色に塗装。表面には発泡痕があり、白色の素材面が露出。	K2 98 第1層	K2~98 I層
図版101 18	小玉 II類	水色	2.3 1.0 1.5	0.01	素材:ガラス。表面平滑で、螺旋状の筋明顯。	K2 98 第1層	K2~98 I層
図版101 19	小玉 III類	水色	2.6 1.0 1.9	0.01	素材:ガラス。表面平滑。製作時の螺旋状に積み重ねたガラス紐の跡が明顯に残る。	K2 98 第1層	K2~98 I層
図版101 20	小玉 III類	水色	3.5 1.3 3.0	0.06	素材:ガラス。表面平滑。製作時の螺旋状に積み重ねたガラス紐の跡が明顯に残る。	K2 98 第1層	K2~98 I層
図版101 21	小玉 III類	青色	2.4 1.4 1.5	0.01	素材:ガラス。表面平滑。製作時の螺旋状に積み重ねたガラス紐の跡が明顯に残る。	K2 98 第1層	K2~98 I層

注「-」:計測不可

※I類:ほぼ円形を呈するもの II類:扁平系を呈するもの III類:2つ以上の玉がコイル状に連なっているもの

IV類:被熱により複数の玉が溶着しているもの V類:被熱により変形しているもの

第44表 円盤状製品集計表

分類	中国産陶磁器					中国產 土器	本土產 施釉陶器	タイ產褐釉陶器	
	中国產 青磁	中国產 白磁	中国產 青花	中国產 施釉陶器?	中国產 褐釉陶器			タイ產 褐釉陶器 (シーサン チャナライ)	タイ產 褐釉陶器 (メナムノイ)
個数	8	1	3	1	53	2	1	5	2

分類	沖縄產陶器	瓦			ガラス	細粒砂岩	合計
		明朝系瓦 (灰)	明朝系瓦 (赤)				
個数	5	5	9		1	1	97

第46表 円盤状製品観察一覧

単位:mm, g

種収番号 図版番号	分類	法量				素材	観察事項	旧出土地	新出土地
		幅	横	厚さ	重量				
第137図 国版102 1	cc	18.0	19.3	4.6	2.1	中国産、青磁、 胴部、清代	略円形、内外面両方より剥離。一部底破損面が残。	表 K7 101	K7-101 表探
第137図 国版102 2	cc	30.0	30.3	4.3	6.0	中国産、青磁、 胴部、明代	略方形、主に外面向り剥離。一部底破損面が残。	L1 東西レンヂ 東磯石門区55号内	L1 石列⑨
第137図 国版102 3	cc	25.0	32.0	14.7	29.0	中国産、青磁、 大形品胴部、明代	略方形、主に外面向り剥離。剥離面少。一部底破損面が残。	L0 97 丹戸炭 石組造構外側内	L0-97 SW13
第137図 国版102 4	cc	52.0	50.5	13.0	64.7	中国産、青磁、直腹	略円形、内外面両方より全周を剥離。	4号南窓等側 上層	南端り層 剥離⑤
第137図 国版102 5	ew	43.3	45.0	12.4	28.5	中国産(福建)、白磁、 直腹	略円形、主に外面向り全周を剥離。	K9 97 石組造構内	K9-97 SW6
第137図 国版102 6	ew	26.0	25.0	3.9	3.4	中国産(福建)、青花、 胴部、清代	略円形、主に外面向り全周を剥離。	表土 K0 103	K0-103 表土
第137図 国版102 7	ew	16.5	16.0	4.5	1.3	中国産(福建)、青花、 胴部、清代	略円形、主に外面向り全周を剥離。	SW13号 造構内	L0-96 SW13
第137図 国版102 8	ew	13.4	14.0	3.0	0.8	中国産(福建)、青花、 胴部、清代	略円形、内外面より全周を剥離。	L1 98	L1-98 表探
第137図 国版102 9	chr	23.0	22.0	8.0	5.5	中国産、青釉、 胴部、明代	略円形、内外面より全周を剥離。	SP2	K1-99 SP2
第138図 国版103 10	chr	28.7	33.0	8.4	12.0	中国産、青釉、 胴部、明代	略円形、内外面より全周を剥離。	第3号基壙 化粧石下試掘	試掘①
第138図 国版103 11	chr	28.3	31.2	7.6	10.0	中国産、青釉、 胴部、明代	略円形、内外面より全周を剥離。	SW13号 造構内	L0-96 SW13
第138図 国版103 12	chr	40.5	38.0	9.4	17.9	中国産、青釉、 胴部、明代	略円形、内外面より全周を剥離。	表 K10 102	K10-102 表探
第138図 国版103 13	chr	55.0	53.5	9.0	37.0	中国産、青釉、 胴部、明代	略円形、内外面より全周を剥離。	表 K3 92	K3-92 表探
第138図 国版103 14	cp	39.0	40.6	7.4	15.0	中国産、土器、 蓋、明代	略円形、主に外面向り一部を剥離。側面一部に墨縁跡、輪 底による破損面。	K1 102 舞り断面取 ぬ端り層 剥離④	
第138図 国版103 15	cp	39.0	41.0	10.0	17.0	中国産、土器、 蓋、明代	略円形、側面研磨。	0~29 K2 97	K2-97 II層
第139図 国版103 16	thr	38.0	40.0	12.0	26.0	タイ産(ジーサーチャナラ イ)、樹脂、胴部、 15~16c	略方形、主に内面向り剥離。側面一部に転用以前の破損面 性。	第3号基壙(3)積 石屋の間内5~6層 下層	南端り層 削除①下層
第139図 国版103 17	thr	31.0	34.0	10.0	11.0	タイ産(ジーサーチャナラ イ)、樹脂、胴部、 15~16c	略円形、主に内面向り剥離。側面一部に転用以前の破損面 性。	IV基壙化粧石前 ブル	SP3
第139図 国版103 18	thes	28.0	28.0	10.0	12.5	タイ産(スマルトイ)、樹 脂、胴部、15c	略円形、主に内面向り剥離。側面一部に転用以前の破損面 性。	不明	出土地不明
第139図 国版103 19	gt	27.6	28.1	14.9	12.0	沖縄産、灰色瓦、近世	略円形、全面研磨。	L1 98 沖縄層	L1-98 沖縄層
第139図 国版103 20	rt	50.2	53.9	17.4	54.5	沖縄産、青色瓦、 近世近代	略方形、主に内面向り剥離。側面一部に転用以前の破損面 性。	南端り層 葵土	南端り層 I層
第139図 国版103 21	rt	70.5	73.5	12.6	74.0	沖縄産、施釉瓦、 近世近代	略円形、主に外面向り剥離。側面一部に転用以前の破損面 性。	表土 L0 97	L0-97 葵土
第139図 国版103 22	rt	35.6	34.0	12.0	17.0	沖縄産、赤色瓦、 近世近代	略円形、主に内面向り剥離。側面一部に転用以前の破損面 性。	表土 K10 103	K10-103 表土
第139図 国版103 23	rt	51.4	53.6	11.8	38.0	沖縄産、赤色瓦、 近世近代	略円形、主に外面向り剥離。側面一部に転用以前の破損面 性。	かづや崎の層	かづや崎 I層
第139図 国版103 24	ose	35.0	35.0	11.5	21.0	沖縄産、施釉陶器、 胴部、近世近代	略円形、内外面より剥離。側面一部に転用以前の破損面 性。	表 L5 96	L5-96 表探
第139図 国版103 25	ose	48.5	50.0	8.0	31.0	沖縄産、施釉陶器、 胴部、近世近代	略円形、主に外面向り剥離。側面一部に転用以前の破損面 性。	表土 L6 93	L6-93 葵土
第139図 国版103 26	ose	61.0	64.5	12.0	68.0	沖縄産、施釉陶器、 胴部、近世近代	略円形、主に内面向り剥離。側面一部に転用以前の破損面 性。	L2 107 修跡	修理跡④
第139図 国版103 27	gr	19.5	17.0	5.0	3.0	ガラス、胴部、近現代	略三角形、主に内面向り全面剥離。	不明	出土地不明
第139図 国版103 28	cig?	36.0	30.0	7.5	14.5	中国産?、青釉、明代?	略円形、内外面より剥離。側面一部に転用以前の破損面 性。	2期基壙正面部	基壙底

第47表 金属製品集計表

分類	個数
梵鐘	163
鋼釘 角釘頭が丸字	17
鋼釘 角釘頭が平頭四角	9
鋼釘 角釘頭が円形	102
鋼釘	23
鋼釘? リングに近いタイプ	1
鋼釘 座がついているタイプ	3
鋼釘 現代釘(丸)	43
釘 破損品(タイプ分類不能)	18
釘と座(完形)	6
座臺	21
リング	18
錠	2
取手状金具類	13
文様 板状飾り金具※	53
文様 板状コーナー部飾り金具※	15
板状柱状部飾り金具	15
板状無文金具類 (カット有り)※	321
調度品鍵金具類	4
板状製品 (八双金物の一部等)	36
小札	103
甲冑の一部	63
鎖帷子	33
半管状製品 (ヨロイの縁金具)	54
笠鞆	3
刀の鐔・切羽	5
刀	1
鎌	3
鋼弾	3
鋼鏡	1
鋼器	3
鋼製印	1
ジーファー(かんざし)	8
角棒状製品	12
鋼線・針金	64
球状薬莢	1
砲弾破片	1007
現代 緩	10
現代ボルト・ネジ	9
現代ボタン	10
板状無文金具類(ブリキ)	69
現代その他現代製品	46
鉄滓	17
不明鋼塊(焼け)	57
龍の髯	2
不明製品	23
小計	2491

分類		個数
I類	A (20~24cm)	905
	B (16~19.5cm)	1321
	C (15cm)	482
	D (12~13cm)	365
	E (10~11cm)	163
	F (7~8cm)	107
	G (6cm)	73
	G' (4cm)	41
II類	カット A	17
	カット B	37
	カット C	24
	カット D	54
	カット E	126
	カット F	103
	カット F' (7~8cm 補)	3
	カット G	50
釘	カット G'	16
	極太 A	1
	極太 B	1
	極太 C	2
	極太 D	3
	極太 G	1
	L字釘	7
	その他	10
洋釘	不明	1555
	Aタイプ	5
	Bタイプ	20
継	A (10cm)	角 13 丸 62
	B (13cm)	角 17 丸 2
	C (16cm)	角 23 丸 6
	D (21cm)	角 6 丸 1
	不明	21
小計		11047
鉄筋・鉄片		514
現代金具		205
爆弾・破片		1424
鉄塊		25
はりがね		178
鉄クズ		150
小計		2496
合計		16034

※ ヨロイの飾り金具も含む

第48表 金属製品観察一覧①

拂団番号 図版番号	種類	旧出土地	新出土地
第141図 図版104 1	梵鐘破片	不明	出土地不明
第141図 図版104 2	梵鐘破片	不明	出土地不明
第141図 図版104 3	梵鐘破片	不明	出土地不明
第141図 図版104 4	梵鐘破片	不明	出土地不明
第141図 図版104 5	梵鐘破片	第2層 70~80 K5 98	K5-98 II層
第141図 図版105 6	梵鐘破片	不明	出土地不明
第141図 図版105 7	梵鐘破片	不明	出土地不明
第141図 図版105 8	梵鐘破片	不明	出土地不明
第141図 図版105 9	梵鐘破片	不明	出土地不明

第48表 金屬製品觀察一覽②

单位:cm.

埋蔵品番 図版番号	種類	縦	横	厚さ	重量	観察事項	旧出土地	新出土地
第141回 図版106 10	釘	7.50	0.70	0.65	15.61	頭部は幅1.5cm、厚さ0.4cm、頭部は円形で扁平となる。頭部は六角形、先端部はくぼみ四角形の断面形状となる。	I.I. 93 表土	I.I. 93 表土
第141回 図版106 11	釘	6.00	0.39	0.35	5.47	頭部は幅0.8cm、厚0.30cm、丸釘。頭部から先端部にかけては四角形の断面形状となる。	I.I. 103 表土	K10-103 表土
第141回 図版106 12	釘	4.22	0.70	0.65	12.21	頭部は幅1.5cm、厚さ0.4cm、頭部は円形で扁平となる。頭部から先端部にかけては六角形の断面形状となる。	表土 K5 96	K5-96 表土
第141回 図版106 13	釘	5.92	0.45	0.40	19.43	頭部は幅0.7cm、厚0.65cm、頭部から先端部にかけては四角形の断面形状となる。全体的に四角形の断面形状となる。	K2 95 表土層	K2-95 表土
第141回 図版106 14	釘	4.10	0.20	0.20	1.66	頭部は幅0.5cm、厚さ0.25cm、頭部は半球状となる。全体的に四角形の断面形状となる。		II層
第141回 図版106 15	釘	3.39	0.30	0.29	2.47	頭部は幅0.5cm、厚さ0.4cm、頭部は片側に彎曲する。全体的に四角形の断面形状となる。	I.I. 101 表土	I.I. 101 表土
第141回 図版106 16	釘	2.30	0.15	0.15	0.47	頭部は幅0.3cm、厚さ0.1cm、頭部は半球状となる。全体的に四角形の断面形状となる。先端部は削れる。		不明 出土地不明
第141回 図版106 17	有孔釘	2.25	0.45	0.25	2.92	頭部は幅1.0cm、厚さ0.30cm、孔は直径0.7cm、横0.3cm。先端部を錐状に変形させた棒状の製品。断面形状は西角形となる。	I.I. 96 表土	I.I. 96 表土
第141回 図版106 18	有孔釘	2.95	0.30	0.30	3.94	頭部は幅1.15cm、厚さ0.65cm、孔は直径0.75cm、横0.7cm。有孔の新製品。留め具か。	KO 98 表土	KO-98 表土
第141回 図版106 19	軸	3.40	4.15	3.30	36.07	孔は幅1.3cm、横2.0cm。横状製品と環を止められた金具が結合により接着する。		II期墓壙
第141回 図版106 20	軸	4.25	2.60	0.40	7.06	花の部分は、幅2.15cm、横2.2cm、I字状の釘に花苞を象った笠が付く。釘は頭部に設を有し、四角形の断面形状となる。	表土 KO 100	KO-100 表土
第141回 図版106 21	不明	2.05	2.35	0.10	1.80	孔径12.0cm。孔口には切妻見られる鋸歯。錐状に曲面を有する。	K5 97 楽器層	K5-97 楽器層
第141回 図版106 22	不明	1.60	2.45	0.05	1.85	両端部を丸く丸めた錐長の鋼板で、一部が大きくなり欠損する。	表土層 K3 97	K3-97 表土
第141回 図版106 23	針金	5.00	0.90	0.60	31.34	針金は、幅1.7cm、横3.3cm、厚0.45cm。調度品等に付属する鋼製の取っ手の一端と取っ手を留める有孔の頭で鍛造が進み、接着している。	L.I. 107 傷跡	傷跡④
第141回 図版106 24	針金	4.52	8.70	0.40	36.94	有孔金具の長さは、右、幅2.3cm、横0.3cm、左は、幅2.3cm、横0.3cm。鋼製の取っ手とそれを留める有孔の頭が両端に付く。持ち手の断面形状は八角形となる。	I.I. 100 表土	I.I-100 表土
第141回 図版106 25	針金	7.19	10.91	0.70	63.12	鋼製の取っ手。断面形状は円形で、持ち手には僅みを有し、左右対称となる。	I.O. 100 表土	I.O-100 表土
第141回 図版106 26	取っ手	8.10	3.60	0.90	80.52	鋼製の取っ手。端部には有孔の頭が付く。取つ手の両端部は錐と接続されるため、ややくびり直角手に彫曲する。全形は左右対称となる。		出土地不明
第141回 図版106 27	笠と板	4.60	4.60	-	10.42	笠と板。笠は有縫で先端は二又に分かれ、折りたて。笠は大振りで、板状。輪郭は輪花状となる。輪郭には輪郭に外側へ斜めに沈線状に波紋が見られる。		出土地不明
第141回 図版106 28	縫	10.15	0.50	0.25	13.30	断面形が長方形状となる。やや小型の縫。両端部は尖る。	表土 I.I. 100	I.I-100 表土
第141回 図版106 29	飾り金具	2.05	7.05	0.09	7.78	孔径10.2cm～0.25cm。頭部は幅広のねじ型頭形となり、3か所の内円孔が付いており、外側に直角に金具を差す。糸子は円柱形で、糸子に平行に切合いで縫合する。糸子は古墳草文に見られる複数の糸子打ちが先駆していっていることが分かる。	K5 97 楽器層	K5-97 楽器層
第141回 図版106 30	飾り金具	4.65	3.70	0.15	14.79	孔径10.2cm。頭などの調度品の飾り金具。頭部は幅広のねじ型頭形となり、3か所の内円孔が付いており、外側に直角に金具を差す。糸子は円柱形で、糸子に平行に切合いで縫合する。糸子は古墳草文に見られる複数の糸子打ちが先駆していっていることが分かる。	K5 97 表土層	K5-97 表土
第141回 図版106 31	飾り金具	2.40	9.10	0.15	24.01	孔径10.2cm、頭の周囲に縫い目が付いた金具。頭部は「三つ巴」に縁どられ、もう一方の端部には直角にならん。頭部に取つてあるため、断面形状が二字状となる。頭部に小孔が2か所に見つかる。表面に直角にえぐみ草文が見られ、笠頭部に糸子を差す。糸子は円柱形で、糸子に平行に切合いで縫合する。糸子は糸子同士でつながっており、隙間を見られない。また糸子同士で糸子打ちが先駆していっていることが分かる。	K3 97 第2層 8～20	K3-97 II層
第141回 図版106 32	飾り金具	6.35	6.60	-	36.07	孔径10.2cm～0.25cm。頭は、幅2.5cm、横0.75cm。頭部は幅広のねじ型頭形となり、3か所の内円孔が付いており、外側に直角に金具を差す。平面形状が二角形である。大型の横状頭部が取つて置かれており、頭部の内側の頭部が押されてしまっている。裏面に頭部内側像と思われる、円柱のねじ型頭形が付いて板状の頭部が衝刺している。	K6 96 楽器 中央側傷跡	傷跡⑤
第141回 図版106 33	飾り金具	5.20	4.60	0.40	33.48	孔径10.2cm、頭の周囲に縫い目が付いた金具。頭部は幅広のねじ型頭形となり、3か所の内円孔が付いており、外側に直角に金具を差す。裏面に頭部内側像と思われる、円柱のねじ型頭形が付いて板状の頭部が衝刺している。	K5 97 表土層	K5-97 表土
第141回 図版106 34	不明	2.60	29.70	0.55	334.23	孔径10.2cm、頭の周囲に縫い目が付いた金具。頭部は幅広のねじ型頭形となり、3か所の内円孔が付いており、外側に直角に金具を差す。各々に丸穴が開けられ、糸子は円柱形で、糸子に平行に切合いで縫合する。と思われる。	2層 70～80 K5 98	K5-98 II層

第48表 金属製品観察一覧③

単位:cm, g

排番号 図版番号	種類	幅	横	厚さ	重量	観察事項	旧出土地	新出土地
第142図 図版107 35	飾り金具	8.25	24.71	0.10	154.02	二又に分かれた飾り金具で、中央部が折れることから角部に直ぐ勾欄等に行く金具。側面に沿って等間隔に円凹孔が見られる。端部は魚尾状となり、筋目状の見られる。表面には割れ縫の唐草文が見られ、空間部には魚子を模す。また深く削れていない魚ヶ子を見られ、「C」字代に「の」字の形も見られる。魚ヶ子はあまり肥でなく、削れ目が見られる。表面は鋸歯状の凹凸があり、魚ヶ子は複数の凹凸で構成されている。表面は鋸歯状の凹凸があり、魚ヶ子は複数の凹凸で構成されている。	K4 97 II層	K4-97 II層
第142図 図版107 36	飾り金具	11.28	39.00	0.90	243.56	表面29.45cm、バー孔は、幅1.5cm、横1.5cm、調度品の脚部に付いた飾り金具。表面は鋸歯状で、各側面に2つの円凹孔が見られる。また、筋目状の見られる。表面は鋸歯状の凹凸があり、表面は魚尾状となり、上部は直線状となる。また、一部に凹凸の脚部品が留められている。表面は鋸歯状の凹凸があり、魚ヶ子は複数の凹凸で構成されているため、火彫れが著しく、ほとんど原形を留めている。	K10 L1 99 第II層 0-20	II層
第142図 図版107 37	飾り金具	20.50	33.90	0.1/0.15	106.85	表面19.15cm×0.3cm、バー孔は、幅7.5cm、横1cm、端部または腰の部方に付いた飾り金具。側面には2孔所、正面には16×2円の円凹孔が見られる。「L」字代に中央に雲巻文、中央から縫目にかけて連華草文が彫り込まれる。各側面は丸く裁め、内側は雲巻文と縫目があり、2つの縫目の正真正負の筋目透かしが見られる。魚ヶ子は規則的に打たれており、「C」字代に「の」字の形も見られる。また深く削れていない魚ヶ子も見られ、「C」字代に「の」字の形も見られる。表面には鋸歯状の凹凸が見つかる。	L1 98 I層	L1-98 I層
第142図 図版107 38	紐	2.60	45.45	1.80	1921.65	正面の前の大綱眼を下方に突いていた着御綱の跡。1890年代に大綱柱が切断されて以降設置されたものと見られる。表面には鋸歯状の横構造が残り、先端部は平坦に仕上げている。	正面	出土地不明
第143図 図版108 39	兜	12.60	25.75	高さ 12.60	1816.07	兜の鉢と頭縛子。鉢は末広がりの矧板を重ね合わせて構成される。鉢には頭縛子が留められ、頭縛子は直角彫、詰化が見込み、変形が著しい。	I期基礎 中央階段跡	II期基礎
第143図 図版108 40	兜	8.70	10.30	0.60	84.30	兜の鉢の一例。末広がりの矧板を重ね合わせて構成される。	不明	出土地不明
第143図 図版108 41	八双金物、小札	2.05	5.90	0.15	17.15	乳径19.3cm～0.45cm、八双金物と小札が2枚に丸く受けたため留めする。小札の裏面は平坦で、2列に縫に孔が並ぶ。孔径は4mm程度である。八双金物は挽鉄により2枚で彫られており、端部は魚尾状で筋目透かしが見られる。端部は魚尾状となり、もう一方は直線に折れるところから、調度品に取りくらべ金物。横構造は弧状となる。	不明	出土地不明
第143図 図版108 42	鍔(小札)	1.85	3.45	0.10	7.69	乳径12.4cm～0.6cm、バー孔は、幅0.7cm、横2.5cm。無文の八双金物。表面は鍔織され、丸孔2カ所並び、端部は筋目透かしと見られる。端部は魚尾状となり、もう一方は直線に折れるところから、調度品に取りくらべ金物。横構造は弧状となる。	C型竈門・I- 中央階段跡	中央階段跡・I- 横構造
第143図 図版108 43	鎧金物小	2.00	8.70	0.10	13.83	乳径18.1cm～0.8cm、表面に鍔織金を施した金物が、唐草文の透し彫りで、端部は斜り曲がら。横構造は弧状となる。	I2-96 表土	I2-96 表土
第143図 図版108 44	鍔(小札)	1.50	3.70	0.10	5.40	約の乳径12.8cm、厚0.05cm、幅0.7cm、横0.25cm。乳径12.4cm、バー孔は0.5cm、幅0.4cm。表面には鍔織金となりながら孔並びで筋目透かしが見られる。片端のみ魚尾状となる。乳孔の側が附屬し、笠部は鍔織金され、先端部は2又に分かれ、表面には毛束の蓮華文が見られ、魚ヶ子は横方向に並行に行はれて、跡跡は見られない。	右袖門接続 右袖D型附	出土地不明
第143図 図版108 45	飾り金具	1.50	11.35	0.10	10.96	約の乳径12.8cm、厚0.05cm、幅0.7cm、横0.25cm。乳径12.4cm、バー孔は0.5cm、幅0.4cm。表面には毛束の唐草文が見られる。魚ヶ子は横方向に並行に行はれており、表面に見られるが、筋目透かしと見られる。唐草文は魚ヶ子を切っていることから、筋目透かしは2又に分かれ、表面には毛束の蓮華文が見られ、魚ヶ子は横方向に並行に行はれて、跡跡は見られない。	K3 97 表土	K3-97 表土
第143図 図版108 46	八幡鏡	6.40	5.50	0.55	30.28	兜鉢の天辺の穴に付く八幡鏡と坂口鉢の一例。座面と円孔の留め具。	II期基礎	II期基礎
第143図 図版108 47	取っ手	1.80	2.50	-	4.28	花の部分は、幅1.6cm、横1.7cm。手輪(輪の部分)の幅は、絶2.1cm、横1.7cm、厚さ0.25cm。闇と開閉。闇は断面形状が円形で、闇蓋は菊花を象る。留め具の側面は扁平な錐状で先端は2又に分かれ。	K5 97 第II層	K5-97 表土
第143図 図版108 48	障子子	9.82	5.80	0.25	61.90	乳径は1.6cm～0.6cm、障子子は後方部分が突出する。肩上の接続部に紙留めの円孔が見られる。2枚の間に受けており、表面に隙間が沿っている。	II期基礎	II期基礎
第144図 図版109 49	胸板	9.60	22.65	0.30	265.45	乳径は1.6cm～0.6cm、幅0.15m～0.55m。胸板は八双金物が縫合により接着している。肩上の側面を2枚が左右2つに分けることができる。また左側面端部が上方に突出する。右肩の側面の縫合部で「襷織」が見られる。八双金物の草花文が見られるが不規則、他の箇所は千鳥格の形状となる。	不明	出土地不明
第144図 図版109 50	冠板	11.65	10.40	0.45	122.52	乳径は2.5cm～0.55cm。乳孔は、幅0.5cm、横0.45cm。板状の製品。断面形状は弧状に凸曲し、表面には鋸歯状の凹凸がある。乳孔は上方へ突出する。肩上の縫合部を透かす孔が2つある。見られる。横構造は弧状に凸曲する。	不明	出土地不明
第144図 図版109 51	不明	6.70	8.65	0.10	48.64	板状の製品で、上に2本の筋が入る。断面形状は弧状に凸曲し、表面には鋸歯状の凹凸がある。先端部が2又に分かれ、表面が複数の凹凸がある。	不明	出土地不明
第144図 図版109 52	矧板か	4.55	4.20	0.35	18.90	兜の鉢を構成する矧板の一部。端部を重ねあわせており、小孔が1カ所見られる。	右袖門接続 右袖D型附	出土地不明
第144図 図版109 53	鍔	9.45	5.60	0.20	38.98	乳径は20.3cm～0.45cm。孔は、幅0.5cm、横0.45cm。板状の製品。断面形状は弧状に凸曲する。凸部は2次に丸く受けられており、火彫れが著しい。また、孔も見られるが、錆化による破損の可能性もある。	不明	出土地不明
第144図 図版109 54	不明	3.70	4.00	0.30	6.67	三枚の板状製品が接着する。	不明	出土地不明
第144図 図版109 55	矧板か	10.25	14.15	0.55	130.02	乳径20.15cm～0.45cm。板状製品で5カ所の円孔が見られる。兜の鉢を構成する矧板の一部。	不明	出土地不明
第144図 図版109 56	矧板か	6.40	8.45	0.30	42.20	乳径20.1cm～0.2cm。板状製品で2カ所の円孔が見られる。断面形状は弧状に凸曲する。兜の鉢を構成する矧板の一部。	不明	出土地不明

第48表 金属製品観察一覧④

単位:cm, g

排列番号 図版番号	種類	縦	横	厚さ	重量	観察事項	旧出土地	新出土地
第145回 図版110 57	鉢形か ら	3.35	3.55	0.10/0.3 5	6.02	縁取りが見られる板状製品。端部に孔が見られ。鉢底が鋸歯状である。板状の一部か。	不明	出土地不明
第145回 図版110 58	不明	13.60	11.25	0.70	179.74	孔径:20.3cm。板状製品で円孔が円周に並んで見られる。端部が一部、L字状に折れる。	不明	出土地不明
第145回 図版110 59	鉢形子	2.80	3.40	0.15/0.4 0	7.15	鉢形子、2次的に火を受けており。一部がくびり変形、変色している。南蛮鉢。	不明	出土地不明
第145回 図版110 60	鉢形子	3.90	5.95	0.2/0.75	18.82	鉢形子、2次的に火を受けており。一部が変形、変色している。南蛮鉢。	不明	出土地不明
第145回 図版110 61	鉢形子	3.35	2.65	0.80	12.99	鉢形子、2次的に火を受けており。一部が変形、変色している。南蛮鉢。	不明	出土地不明
第145回 図版110 62	鉢形子	3.25	4.30	0.25/0.8 5	9.28	鉢形子、2次的に火を受けており、全体的にくびり変形、変色している。南蛮鉢。	不明	出土地不明
第145回 図版110 63	小札	7.75	6.70	1.05	66.84	札頭が斜めになる伊予札で7枚が鋸歯により留着している。14枚の円孔が見られ、2列に並ぶ。それは相互の孔が並なるように留着している。	不明	出土地不明
第145回 図版110 64	小札	8.70	8.35	0.15/1.1 0	78.89	札径:20.15cm~0.3cm。札頭が斜めになり、端部が鋸歯する基石頭の伊予札で11枚が鋸歯により留着している。それは相互の孔が並なるように留着している。	不明	出土地不明
第145回 図版110 65	小札	3.65	2.65	0.20	5.48	札径:20.15cm~0.4cm。札幅がやや広い小札。円孔が7カ所見られる。	右横門接続 石板D埋泊	出土地不明
第145回 図版110 66	小札	5.50	2.65	0.30	12.33	札径:20.05cm~0.15cm。札尻は平行する。円孔は10カ所見られる。やや厚みを有する。	右横門接続 石板D埋泊	出土地不明
第145回 図版110 67	小札	4.05	2.70	0.15	6.04	札径:20.15cm~0.25cm。札尻は平行する。円孔は6カ所見られる。	右横門接続 石板D埋泊	出土地不明
第145回 図版110 68	小札	4.10	2.65	0.20	7.94	札径:20.05cm~0.2cm。札尻は平行する。円孔は3カ所見られる。	右横門接続 石板D埋泊	出土地不明
第145回 図版110 69	小札	6.70	1.85	0.25	10.20	札径:20.1cm~0.35cm。札頭が斜めになる小札。円孔は12カ所見られる。	不明	出土地不明
第145回 図版110 70	小札	6.15	1.95	0.40	8.89	札径:20.05cm~0.3cm。札尻は平行し。札頭が斜めになる基石頭の小札。円孔は13カ所見られる。札頭側の5孔のみ残が大きい。	不明	出土地不明
第145回 図版110 71	小札	6.50	2.25	0.30	14.37	札径:20.1cm~0.25cm。札尻は平行し。札頭は2円弧状の膨らみが2つ連続する矢筈頭の小札。確認できる円孔は12カ所。	右横門接続 石板D埋泊	出土地不明
第145回 図版110 72	小札	6.85	2.15	0.50	15.70	札径:20.15cm~0.25cm。札尻は平行し。札頭が斜めになる基石頭の小札。	右横門接続 石板D埋泊	出土地不明
第145回 図版110 73	小札	6.30	1.90	0.40	9.98	札径:20.05cm~0.3cm。札尻は平行し。札頭が斜めになる小札。円孔は21カ所確認でき。札頭側の孔径が大きい。	不明	出土地不明
第145回 図版110 74	小札	5.85	1.90	0.45	10.18	札径:20.05cm~0.25cm。札尻は平行し。札頭が斜めになる小札。円孔は23カ所確認でき。表面に施された墨の一部を残る。	不明	出土地不明
第145回 図版110 75	小札	6.35	2.05	0.30	12.11	札径:20.15cm~0.2cm。札頭が斜めになる小札。円孔は22カ所確認できる。	右横門接続 石板D埋泊	出土地不明
第145回 図版110 76	小札	5.15	1.85	0.45	9.91	札径:20.15cm~0.5cm。札頭が斜めになる小札。円孔は37カ所確認できる。	不明	出土地不明
第145回 図版110 77	小札	4.35	1.90	0.30	5.21	札径:20.15cm~0.3cm。札頭が斜めになる小札。円孔は17カ所確認できる。	不明	出土地不明
第145回 図版110 78	小札	2.40	1.80	0.20	2.00	札径:20.35cm~0.4cm。札頭が斜めになる薄手の小札。円孔は5カ所確認できる。	不明	出土地不明
第145回 図版110 79	小札	2.80	1.95	0.20	3.64	札径:20.15cm。札頭が斜めになる薄手の小札。円孔は4カ所確認できる。	右横門接続 石板D埋泊	出土地不明
第145回 図版110 80	小札	3.00	2.00	0.30	4.12	札径:20.1cm~0.2cm。円孔は25カ所確認できる。	不明	出土地不明
第145回 図版110 81	小札	3.75	1.75	0.25	3.81	札径:20.15cm~0.25cm。札尻は平行し。円孔は10カ所確認できる。	不明	出土地不明
第145回 図版110 82	小札	3.35	2.05	0.25	4.99	札径:20.05cm~0.25cm。円孔は4カ所確認できる。	不明	出土地不明
第145回 図版110 83	小札	2.50	1.70	0.15	1.97	札径:20.2cm~0.3cm。札尻は平行する薄手の小札。円孔は6カ所確認できる。	不明	出土地不明

注「-」:計測不可

第48表 金属製品観察一覧(5)

単位:cm, g

排番号 図版番号	種類	組	横	厚さ	重量	観察事項	旧出土地	新出土地
第16回 図版111 84	切羽	3.95	2.15	0.35	11.28	葉孔は縦2.4cm、横0.65cm、外形は複円形状で中央に台形状の孔が見られる。外側に向て厚みが薄ず。	I2-162 表土	I2-162 表土
第16回 図版111 85	不明	3.80	4.05	0.30	18.47	葉孔は縦2.05cm、横0.45cm、外形は木瓜状で中央に扁平な複円形状の孔が見られる。	I0-98 極乱層	I0-98 極乱層
第16回 図版111 86	切羽	5.50	2.90	0.35	13.97	板状製品で方形の孔が1カ所見られる。	I0-100 表土	I0-100 表土
第16回 図版111 87	切羽	3.20	1.85	0.30	6.63	木瓜形の切羽の一例。	表土 K1 K2-94	K1-2-94 表土
第16回 図版111 88	刃の持	7.10	4.25	0.30	52.95	外形が木瓜形の持。鍔は肥厚し、中央に長方形状の孔が見れる。筋目透かしが2方向あり、その間に花形の透かしが見られる。筋の形はやや歪になる。	K2-94 銅鋳レシチ 第1・II層	K2-94 銅鋳レシチ 第1・II層
第16回 図版111 89	持	6.55	7.15	0.55	40.16	外形が木瓜形の持。鍔は肥厚する。筋目透かしが2カ所見られる。	不明	出土地不明
第16回 図版111 90	刀	30.70	3.30	0.80	329.74	薙刀などの長柄武器の刀身。鍔が入り切っ先は丸味が見られる。筋の近くは大きく屈曲しており、実は欠損している。	不明	出土地不明
第16回 図版111 91	銅鏡	7.35	11.65	0.20/0.9 0	155.65	鏡面と鏡縁で鏡面には圓線と内区と外区は共に階級の菊花文が施し、ちつと複雑に見られる。全体的に欠損や歪みが多い。	K1-96 表土	K1-96 表土
第16回 図版111 92	鏡の頭部	4.80	-	0.20	117.17	中国産の青銅製品。鏡面で上下端は肥厚し、立ち上がりは直である。外縁は4段の菊花文で全て施められる。頭部によじみが見られる。頭部蓋や鏡かの一部か。	K4-97 II層	K4-97 II層
第16回 図版111 93	銅鏡	3.75	3.15	0.10/0.4 0	16.41	中國産で大型銅製品の一部。翼文の一面と思われる文とその近くに畫文帯が見られる。	I1-98 極乱	I1-98 極乱層
第16回 図版111 94	銅製印	1.90	1.10	1.05	5.88	小型の銅製印。印面は印相体で筋が彫り込まれる。筋は方柱状で筋で構成されるように見えりがあり、上部に横方向の孔が見られる。	K6-98 I 層	K6-98 I 层
第16回 図版111 95	銅器	-	-	-	41.73	銅鏡の鏡边缘。かなり大振りな台形線。侧面に銅塊が留着する。	K5-97 II層	K5-97 II層
第16回 図版111 96	鏡	9.55	3.10	0.85	36.99	鉄鏡。断面形は方形で縁が厚線で見られる。先端は平入り状となる。裏の大半は欠損している。	不明	出土地不明
第16回 図版111 97	鏡か	4.30	0.40	0.40	2.11	棒状の鉄製品。断面形は円形となる。裏の裏か。	不明	出土地不明
第16回 図版111 98	鏡か	3.05	0.55	0.55	1.32	棒状の鉄製品。断面形は円形となる。裏の裏か。	不明	出土地不明
第16回 図版111 99	不明	5.50	0.20	0.20	1.36	頭部は幅0.6cm、孔は幅0.5cm、横0.3cm。頭部が深窓となる棒状の銅製品。断面形は円形となる。	頭1号 SW3 石組遺構内	K2-96 SW3
第16回 図版111 100	不明	6.45	0.20/0.4 0	0.15	0.81	孔は幅0.3cm、横0.25cm。頭部に円孔があり。頭部は小窓状となる銅製品。断面形は円形となる。	II期墓堆 化粧石棺	III期墓堆 化粧石棺
第16回 図版111 101	銀め具か	2.20	0.25	0.25	1.95	頭部は幅0.65cm、横1.1cm、厚20.35cm。頭部の留め具か。頭部の断面形は円形で、頭部は分脚状となる。	表土 LA-100	LA-100 表土

注(1):計測不可

第48表 金属製品観察一覧⑥(鉄釘)

単位:cm, g

掲番号 図版番号	種類	分類	頭部幅 頭部厚	縦 横 厚さ	重量	旧出土地	新出土地
第147図 図版112 102	角釘 I類	A	1.15 1.70	20.70 1.00 1.00	106.17	L1 98 表土	L1-98 表土
第147図 図版112 103	角釘 I類	A	1.20 1.70	20.20 0.90 0.90	108.45	表土 K8-103	K8-103 表土
第147図 図版112 104	角釘 I類	B	1.20 1.70	17.50 0.80 0.90	84.58	L1-100 混乱層	L1-100 混乱層
第147図 図版112 105	角釘 I類	B	1.20 1.65	17.20 0.85 0.85	85.50	混乱層 L1 102	L1-102 混乱層
第147図 図版112 106	角釘 I類	C	1.10 1.65	15.20 1.00 0.90	76.64	L1 100 混乱層	L1-100 混乱層
第147図 図版112 107	角釘 I類	C	1.15 1.65	14.75 0.90 0.85	69.62	表土 L1 100	L1-100 表土
第147図 図版112 108	角釘 I類	D	1.10 1.45	12.80 1.10 0.75	54.69	第2層 K6 98	K6-98 II層
第147図 図版112 109	角釘 I類	D	0.90 1.30	12.10 0.90 0.70	41.11	K10-101 表土	K10-101 表土
第147図 図版112 110	角釘 I類	E	1.00 1.25	10.95 0.90 0.70	40.79	表土 L0 101	L0-101 表土
第147図 図版112 111	角釘 I類	E	1.10 1.35	9.40 0.85 0.80	42.68	表土層 K6 98	K6-98 表土
第147図 図版112 112	角釘 I類	F	1.45 1.10	6.65 0.60 0.65	9.64	表土 K3-103	K3-103 表土
第147図 図版112 113	角釘 I類	F	1.00 0.60	7.15 0.50 0.45	5.72	L5 98 カワヤの覆土	L5-98 かわや跡 覆土
第147図 図版112 114	角釘 I類	G	1.20 1.15	4.85 0.50 0.50	6.02	表土層	表土
第147図 図版112 115	角釘 I類	G	0.85 0.90	4.90 0.60 0.55	3.28	表土層	表土
第147図 図版112 116	角釘 II類	カットB	1.45 1.65	18.40 1.20 1.30	136.83	表土 K4 104	K4-104 表土
第147図 図版112 117	角釘 II類	カットB	—	19.1 0.95 0.90	81.52	表土 K6 98	K6-98 表土
第147図 図版112 118	角釘 II類	カットC	—	15.50 0.90 0.90	82.05	表土 L1 100	L1-100 表土
第147図 図版112 119	角釘 II類	カットC	—	15.10 1.00 1.00	87.69	表土 K0 100	K0-100 表土
第147図 図版112 120	角釘 II類	カットC	1.45 0.95	14.70 0.70 0.55	30.80	L4 100 表土	L4-100 表土
第148図 図版113 121	角釘 II類	カットD	1.50 1.40	12.85 1.20 1.05	86.81	K5 97 表土	K5-97 表土
第148図 図版113 122	角釘 II類	カットD	—	11.70 1.05 0.80	31.30	K9-104 表土	K9-104 表土
第148図 図版113 123	角釘 II類	カットD	1.20 0.60	11.50 0.75 0.50	25.18	表土 L0 102	L0-102 表土
第148図 図版113 124	角釘 II類	カットE	—	9.95 0.70 0.40	13.42	表土 L1 102	L1-102 表土

注「-」:計測不可

第48表 金属製品観察一覧(7)(鉄釘)

単位:cm, g

採取番号 図版番号	種類	分類	頭部幅 頭部厚	縦 横 厚さ	重量	旧出土地	新出土地
第148図 図版113 125	角釘 II類	カットE	1.35 0.85	9.30 0.90 0.80	31.83	表土 L4 100	L4-100 表土
第148図 図版113 126	角釘 II類	カットF	—	7.10 0.65 0.55	11.88	擾乱	擾乱層
第148図 図版113 127	角釘 II類	カットF	—	8.30 0.55 0.45	9.54	表土 K4-98	K4-98 表土
第148図 図版113 128	角釘 II類	カットG	—	5.50 0.45 0.35	4.32	L2-97 表土層	L2-97 表土
第148図 図版113 129	角釘 II類	カットG	1.00 0.60	6.00 0.50 0.45	6.07	表土 3	表土
第148図 図版113 130	角釘 II類	カットF	1.35 1.10	7.60 0.60 0.65	13.19	L2-100 表土	L2-100 表土
第148図 図版113 131	角釘 II類	カットF	0.95 0.50	6.95 0.55 0.40	6.64	表土 L2 101	L2-101 表土
第148図 図版113 132	角釘 II類	カットG'	0.65 0.35	4.35 0.45 0.45	3.05	石灰岩繊層 No66	出土地不明
第148図 図版113 133	角釘 II類	カットG'	0.75 0.65	4.05 0.65 0.60	3.85	石灰岩繊層 No67	出土地不明
第148図 図版113 134	角釘 II類	カットG'	0.40 0.30	3.80 0.45 0.30	1.54	石灰岩繊層 No64	出土地不明
第148図 図版113 135	角釘 II類	カットG'	0.95 0.55	4.10 0.85 0.65	2.62	石灰岩繊層 No65	出土地不明
第148図 図版113 136	角釘 III類	極太D	1.75 1.85	13.90 1.45 1.15	102.33	表土 L1 102	L1-102 表土
第148図 図版113 137	角釘 III類	極太D	1.85 1.55	13.95 1.40 1.20	133.21	表土 K10-103	K10-103 表土
第148図 図版113 138	角釘 III類	極太D	2.30 2.30	12.80 1.40 1.20	128.37	表土 L1 102	L1-102 表土
第148図 図版113 139	角釘 III類	極太C	2.15 1.90	14.40 1.10 1.00	142.79	表土 L3 101	L3-101 表土
第148図 図版113 140	角釘 III類	極太G	2.90 2.05	6.45 1.50 1.10	42.74	第2層 60~70 K5 98	K5-98 II層
第148図 図版113 141	角釘	その他	—	11.10 1.45 0.95	76.30	L4-93 表土	L4-93 表土
第148図 図版113 142	角釘	その他	1.40 0.55	7.25 1.15 0.55	24.14	表土 L0 102	L0-102 表土
第148図 図版113 143	角釘	その他	1.25 0.55	7.00 1.15 0.55	21.50	第2層 K5-99 0/20	K5-99 II層
第148図 図版113 144	角釘	その他	1.25 0.40	7.25 0.95 0.40	15.97	表土 K6-96	K6-96 表土
第148図 図版113 145	角釘	その他	1.35 0.60	6.80 1.15 0.55	20.04	表土 L0 100	L0-100 表土
第149図 図版114 146	角釘	不明	—	8.90 0.70 0.79	23.27	表土 L4 102	L4-102 表土
第149図 図版114 147	角釘	不明	1.30 1.80	6.10 1.15 0.95	24.92	表土 K10 101	K10-101 表土

注「-」:計測不可

第48表 金属製品観察一覧⑧(鉄釘)

単位:cm, g

掲出番号 図版番号	種類	分類	頭部幅 頭部厚	縦 横 厚さ	重量	旧出土地	新出土地
第149図 図版114 148	角釘	不明	—	13.20 1.00 1.00	55.20	石敷 K0 96	K0-96 II層
第149図 図版114 149	角釘	不明	—	12.25 0.95 1.05	49.66	表土 K10 101	K10-101 表土
第149図 図版114 150	角釘	不明	—	5.75 0.60 0.70	8.25	表土 K0 103	K0-103 表土
第149図 図版114 151	洋釘	—	0.90 0.15	10.20 0.45 0.45	11.95	K6-98 第2層 80/90	K6-98 II層
第149図 図版114 152	洋釘	—	0.85 0.45	7.80 0.45 0.45	5.44	K6-98 第2層 80/90	K6-98 II層
第149図 図版114 153	洋釘	—	1.10 0.25	9.60 0.50 0.50	11.51	K6-98 第2層 80/90	K6-98 II層
第149図 図版114 154	洋釘	—	0.95 0.30	10.40 0.45 0.45	11.47	K6-98 第2層 80/90	K6-98 II層
第149図 図版114 155	洋釘	—	0.85 0.35	7.95 0.40 0.40	5.57	K6-98 第2層 80/90	K6-98 II層
第149図 図版114 156	洋釘	—	1.80 0.55	7.15 1.05 1.05	35.20	表土 K5 103	K5-103 表土
第149図 図版114 157	角釘 IV類	—	—	18.60 1.05 0.80	82.15	L2 102 表土層	L2-102 表土
第149図 図版114 158	角釘 IV類	—	—	13.85 0.95 0.80	124.29	L1-98 撥乱	L1-98 撥乱層
第149図 図版114 159	鍔	A(角)	—	10.20 0.80 0.90	36.54	第2層 0/20	II層
第149図 図版114 160	鍔	A(角)	—	10.10 0.60 0.75	22.82	第2層 0/20 K4-98	K4-98 II層
第149図 図版114 161	鍔	B(角)	—	13.05 1.05 1.05	86.59	第2層 K5-98 0-20	K5-98 II層
第149図 図版114 162	鍔	B(角)	—	12.65 0.15/1.00 1.05	91.12	第2層	II層
第149図 図版114 163	鍔	C(角)	—	15.05 0.25/1.00 1.05	114.00	第2層 10~60 K8 96	K8-96 II層
第149図 図版114 164	鍔	C(角)	—	15.65 0.05/0.95 0.90	101.08	第2層 40/50 K4 97	K4-97 II層
第150図 図版115 165	鍔	C(角)	—	16.00 0.05/0.85 0.90	114.48	K3-97 第2層	K3-97 II層
第150図 図版115 166	鍔	C(角)	—	15.65 0.15/0.85 0.85	70.08	K3-95 第2層	K3-95 II層
第150図 図版115 167	鍔	不明	—	15.8 0.20/1.00 1.00	90.90	K7-92 第2層	K7-92 II層
第150図 図版115 168	鍔	B(角)	—	15.30 0.10/0.90 0.90	114.43	L2-99 第2層	L2-99 II層
第150図 図版115 169	鍔	A(角)	—	10.40 0.05/0.85 0.85	49.95	第2層 K4-97	K4-97 II層
第150図 図版115 170	鍔	A(角)	—	10.45 0.05/1.00 0.95	54.41	K5-97 第2層	K5-97 II層

注「—」:計測不可

第48表 金属製品観察一覧⑨(鉄釘)

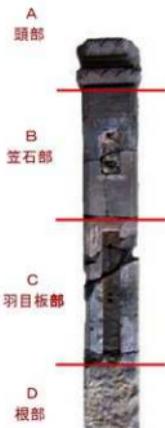
単位:cm, g

採取番号 図版番号	種類	分類	頭部幅 頭部厚	縦 横 厚さ	重量	旧出土地	新出土地
第150回 図版115 171	有孔釘	A	1.40 0.45	7.90 1.00 0.70	16.43	L0-102 表土	L0-102 表土
第150回 図版115 172	有孔釘	A	1.45 0.65	7.80 1.05 0.65	23.66	L1-101 表土	L1-101 表土
第150回 図版115 173	有孔釘	A	1.45 0.50	7.70 1.05 0.50	20.47	L2-100 表土	L2-100 表土
第150回 図版115 174	有孔釘	B	3.05 0.90	10.40 0.95 0.85	64.13	L4-100 表土	L4-100 表土
第150回 図版115 175	有孔釘	A	1.75 0.35	5.90 0.55 0.30	4.42	K4-97 第2層	K4-97 II層
第150回 図版115 176	有孔釘	B	3.50 1.20	12.80 1.15 1.20	110.17	K4-100 表土	K4-100 表土
第150回 図版115 177	有孔釘	B	3.20 0.90	12.35 0.95 0.85	59.40	K4-100 表土	K4-100 表土
第151回 図版116 178	現代金具	-	-	10.75 1.50 0.40	16.31	K4-97 第2層	K4-97 II層
第151回 図版116 179	現代金具 + 有孔釘	B	有孔釘: 1.65/0.60 現代金具: -	有孔釘: 4.70/1.10/0.95 現代金具: 11.05/1.45/0.60	34.38	K4~5-95 第2層 0/10	K4~5-95 II層
第151回 図版116 180	有孔釘	B	2.50 1.70	6.10 1.00 1.65	57.69	K10-101 表土	K10-101 表土
第151回 図版116 181	有孔釘	B	2.85 0.95	9.05 1.05 0.85	64.11	L0-98 混乱層	L0-98 混乱層
第151回 図版116 182	有孔釘	B	3.00 1.10	9.20 0.95 1.10	66.78	L1-101 表土	L1-101 表土
第151回 図版116 183	有孔釘	B	2.65 0.80	9.65 0.40 0.75	32.39	擾乱層	擾乱層
第151回 図版116 184	有孔釘	B	3.15 1.15	10.30 1.10 1.00	64.98	L1-102 表土	L1-102 表土
第151回 図版116 185	有孔釘 + 鋼線	B	-	10.80/10.60 - -	285.27	L0-99 第2層 50/60	L0-99 II層
第151回 図版116 186	有孔釘	B	3.20 1.75	7.60 1.30 1.70	127.25	L0-102 表土	L0-102 表土

注「-」:計測不可

凡例(第49表 石製品集計表①の高欄残存部位)

親柱(獅子頭)



親柱(逆蓮頭)



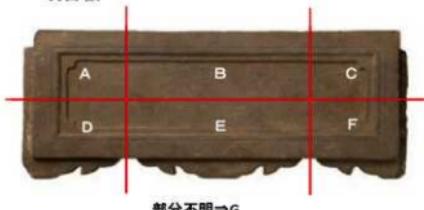
束柱



笠石



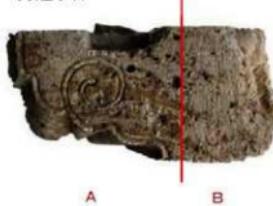
羽目板



地覆石



持送り石



第49表 石製品集計表②

分類	硯						硯?		
	赤色頁岩製 (赤闇硯)	赤色頁岩製 (赤闇硯)	粘板岩製	凝灰岩製	頁岩製	頁岩製 (高島硯?)	赤色頁岩製	粘板岩製	
個数	14	7	11	4	3	3	1	3	
分類	石臼			石臼?	文鎮	基石			
	赤色頁岩製	凝灰岩製	輝石安山岩製	細粒砂岩製	粘板岩製	ガラス製	粘板岩製	珪質頁岩 製?	
個数	2	1	1	1	1	8	2	1	
分類	基石?		胸	胸?	石筆	砥石			砥石?
	メノウ製	閃綠岩製	土製	旋軸陶器製	緑色岩製	蠟石製	粘板岩製	凝灰岩製	頁岩製 砂岩製
個数	1	1	1	2	1	2	6	1	12 1
分類	磨製石斧	敲石	凹石	石盤	石盤?	不明石器片		不明石製品	スクレイバ---
	輝綠岩製	細粒砂岩製	砂岩	粘板岩製	粘板岩製	緑色岩製	輝綠岩	不明火成岩	不明 砂岩
個数	1	1	1	8	2	1	1	1	1
分類	火打石?		玉器			石球			合計
	チャート製	結晶質 石灰岩製	森翠製	蠟石製	石材不明	細粒砂岩製	琉球石灰岩	サンゴ石	
個数	1	1	2	1	1	12	1	3	133

※基石と胸は石製以外の資料も含む。

※第165図№90・図版131№99の鋼弾は第47表金属製品集計表に含まれる。

※第165図№91・図版131№100の土弾は第53表土製品集計表に含まれる。

第49表 石製品集計表③(石材)

分類	石材												
	翡翠	水晶	石英	綠色 千板岩	古生代 石灰岩	結晶片岩	軟玉	砂岩	砂岩 (縣外)	片岩	頁岩	綠色岩	泥岩
個数	4	1	1	11	4	4	1	43	1	22	3	7	3

分類	石材			玉砂利					合計
	粘板岩	細粒砂岩 (自然面有)	不明	砂岩	粘板岩	頁岩	綠色岩	不明	
個数	10	55	16	17	3	2	2	4	214

第50表 石製品観察一覧①

単位:cm

標団番号 図版番号	器種	部位／分類	残存長 残存幅 厚さ	観察事項	旧出土地	新出土地
第152図 図版117 1	高欄	羽目板	32.6 71.0 7.4	石材:繩粒砂岩(ニービスフニ)。片側側面欠損。装飾:下面雲形。側面に柱接合のための凸部有、漆喰付着。表面風化のためかやや暗褐色を呈する。	K? 103	出土地不明
第152図 図版117 2	高欄	羽目板	32.5 78.3 7.2	石材:繩粒砂岩(ニービスフニ)。完形。装飾:下面雲形。側面に柱接合のための凸部有、漆喰付着。	不明	出土地不明
第152図 図版117 3	高欄	羽目板	32.5 73.5 7.0	石材:溶結凝灰岩か。両端欠損。装飾:下面雲形。加工時の痕跡顯著。	不明	出土地不明
第152図 図版117 4	高欄(階段)	羽目板	34.2 51.0 7.7	石材:繩粒砂岩(ニービスフニ)。部分的に欠損。湾曲、階段部分の部材か。下面雲形。側面に柱接合のための凸部有。	不明	出土地不明
第152図 図版117 5	高欄	羽目板	14.9 11.5 4.4	石材:繩粒砂岩(ニービスフニ)。下端部の一部のみ。下面雲形。	不明	出土地不明
第152図 図版117 6	石碑?	—	13.1 9.9 6.6	石材:繩粒砂岩(ニービスフニ)。下部の一部のみ。背面に敲打痕残。背面に花文。正面には文字が陰刻「…薄斎、…平象、…賀眉」	S60	出土地不明
第153図 図版118 7	高欄	親柱	96.6 14.7 12.6	石材:繩粒砂岩(ニービスフニ)。完形。方形、頭部は逆蓮頭+蓮弁文。側面に笠石・羽目板のはぞ穴有。はぞ穴と下端部に漆喰付着。	不明	出土地不明
第153図 図版118 8	高欄	親柱	83.3 15.0 12.3	石材:繩粒砂岩(ニービスフニ)。下部欠損。方形、頭部は逆蓮頭+蓮弁文。側面に笠石・羽目板のはぞ穴有。はぞ穴に漆喰付着。	不明	出土地不明
第153図 図版118 9	高欄	親柱	23.5 15.4 14.0	石材:溶結凝灰岩?。頭部のみ残。逆蓮頭。	正面部	出土地不明
第153図 図版118 10	高欄	親柱	23.6 14.4 14.8	石材:繩粒砂岩(ニービスフニ)。頭部のみ残。蓮弁文+唐草文。片側側面のみ漆喰付着。	不明	出土地不明
第154図 図版119 11	高欄	親柱	34.2 14.8 12.4	石材:繩粒砂岩(ニービスフニ)。下部欠損。装飾:座獅子+蓮弁文+蓮弁文。笠石のはぞ穴残。	不明	出土地不明
第154図 図版119 12	高欄	親柱	88.2 14.8 12.5	石材:繩粒砂岩(ニービスフニ)。座獅子のみ欠損。装飾:座獅子+蓮弁文+蓮弁文。笠石・羽目板のはぞ穴残。羽目板側は2段。はぞ穴付近に漆喰付着。	不明	出土地不明
第154図 図版119 13	高欄	束柱	66.0 26.0 19.6	石材:繩粒砂岩(ニービスフニ)。完形。握蓮部に葉脈文。羽目板のはぞ穴残。下端部に漆喰付着。	不明	出土地不明
第155図 図版120 14	高欄	束柱	60.2 24.6 19.4	石材:溶結凝灰岩?。完形。握蓮部に葉脈文。羽目板のはぞ穴残。下端部に漆喰付着。	正面部	出土地不明
第155図 図版120 15	高欄	束石握蓮	21.6 30.3 23.1	石材:繩粒砂岩(ニービスフニ)。完形。下部は柱と結合のため凸形。	不明	出土地不明
第155図 図版120 16	高欄	束石握蓮	20.6 27.1 15.0	石材:繩粒砂岩(ニービスフニ)。一部欠損。下部は柱と結合のため凸形。凸部は敲打痕残。	不明	出土地不明
第155図 図版120 17	高欄	束石握蓮	23.4 — 10.8	石材:繩粒砂岩(ニービスフニ)。右半欠損。下部は柱と結合のため凸形。凸部は漆喰付着。	K1 99?	出土地不明
第155図 図版120 18	高欄	束石握蓮	23.05 11.9 11.95	石材:繩粒砂岩(ニービスフニ)。中央部のみ残。下部は柱と結合のため凸形。凸部は漆喰付着。	K0-97 石組遺構内	K0-97 SW6

注 「—」:計測不可、():推定

第50表 石製品観察一覧②

単位:cm

標団番号 図版番号	器種	部位／分類	残存長 残存幅 厚さ	観察事項	旧出土地	新出土地
第156図 図版121 19	高欄	笠石	12.4 164.3 12.6	石材: 錐粒砂岩(ニービヌフニ)。完形。平面形方形。側面形T字。親柱接合部は凸形。	不明	出土地不明
第156図 図版121 20	高欄	笠石	12.5 122.2 12.8	石材: 溶結凝灰岩。両端欠損。平面形方形、側面形T字。親柱接合部は凸形。	不明	出土地不明
第156図 図版121 21	高欄(階段)	笠石	11.9 130.6 12.8	石材: 溶結凝灰岩。片側端部欠損。平面形方形、側面形T字。親柱接合部は凸形。片側端縁湾曲により階段部と推定。	表土?	表土
第156図 図版121 22	高欄	地覆石	9.15 75.7 12.6	石材: 錐粒砂岩(ニービヌフニ)。略完形。方形。両端部に漆喰付着。全面研磨。	不明	出土地不明
第156図 図版121 23	高欄	地覆石	9.7 76.5 13.0	石材: 錐粒砂岩(ニービヌフニ)。略完形。方形。両端部に漆喰付着。全面研磨。	不明	出土地不明
第157図 図版122 24	高欄	持送り石	30.8 64.0 24.8	石材: 疏麻石灰岩。表面に石切時の痕跡残。表裏に溝巻文彫刻。縦形波形。上部に親柱の基部残。	不明	出土地不明
第157図 図版122 25	高欄	束柱	19.6 16.7 -	石材: 錐粒砂岩(ニービヌフニ)。破片。表面に敲打痕。側面2箇所にはぞ穴有り。柱印部か。	K10-92 2層 褐色土層	K10-92 II層
第157図 図版122 26	高欄?	不明	14.0 13.1 12.15	石材: 錐粒砂岩。接着のための漆喰付着。装飾なし。	SW1遺構内	K2-98・99 SW1
第157図 図版122 27	高欄?	不明	22.2 13.5 10.0	石材: 錐粒砂岩。接着のための漆喰付着、同目的で鉄芯が刺さる。装飾なし。	不明	出土地不明
第157図 図版122 28	高欄	親柱頭部?	20.5 20.0 19.45	材質: 漆喰。下端欠損。隅丸の円筒形。部位不明だが形状からは親柱頭部に似る。	正面部?	出土地不明
第158図 図版123 29	礎石	—	37.0 36.5 15.0	石材: 錐粒砂岩(ニービヌフニ)。平面形方形に加工、表面磨面だが加工痕残。上面中央に方形の柱痕跡あり。	不明	出土地不明
第158図 図版123 30	礎石	—	27.0 27.5 18.2	石材: 錐粒砂岩(ニービヌフニ)。平面形方形に加工、表面磨面。上面中央に方形の柱痕跡あり。	不明	出土地不明
第158図 図版123 31	礎石	—	38.0 38.0 10.6	石材: 錐粒砂岩(ニービヌフニ)。平面形方形に加工、表面磨面。上面中央に円形の凹みあり。上面中央に八角形の柱痕跡あり。	正面部	出土地不明
第158図 図版123 32	礎石	—	45.4 44.3 24.0	石材: 錐粒砂岩(ニービヌフニ)。平面形方形に加工、表面磨面。上面中央に方形の凹みあり。上面中央に方形の痕跡あり。	不明	出土地不明
第158図 図版123 33	礎石	—	30.0 42.2 22.7	石材: 錐粒砂岩(ニービヌフニ)。平面形方形に加工、表面磨面。上面中央に方形の凹み僅かにあり。上面に円形の柱痕跡あり。	不明	出土地不明
第159図 図版124 34	礎石	—	39.3 39.3 17.0	石材: 錐粒砂岩(ニービヌフニ)。平面形方形に加工、側面磨面。上面中央のみ加工痕残。上面中央に方形の柱痕跡あり。下面四隅に方形の脚あり。	不明	出土地不明
第159図 図版124 35	礎石	—	52.0 51.0 15.5	石材: 錐粒砂岩(ニービヌフニ)。平面形方形に加工、表面磨面。上面中央に円形の凹みあり、漆喰が埋まる。上面に円形の柱痕跡あり、部分的に漆喰が付着。	不明	出土地不明
第159図 図版124 36	礎石	—	52.0 51.0 16.0	石材: 錐粒砂岩(ニービヌフニ)。平面形方形に加工、表面磨面。上面中央に円形の凹みあり、漆喰が埋まる。上面に円形の柱痕跡あり、部分的に漆喰が付着。	不明	出土地不明

注:「-」:計測不可。():推定

第50表 石製品観察一覧③

単位:cm

標団番号 図版番号	器種	部位／分類	残存長 残存幅 厚さ	観察事項	旧出土地	新出土地
第159図 図版124 37	礎石	—	51.0 51.5 21.5	石材: 錐粒砂岩(ニービスフニ)。平面形方形に加工、表面磨面。上面中央に円形の凹みあり。上面に円形の柱痕跡あり、この部分のみ加工痕残。	不明	出土地不明
第159図 図版124 38	礎石	—	37.0 38.0 14.8	石材: 錐粒砂岩(ニービスフニ)。平面形方形に加工、表面磨面。上面中央に方形の凹みあり。上面中央に方形に添着付着、柱痕跡か。上面中央に十字の変色部あり。	不明	出土地不明
第160図 図版125 39	礎石	—	42.0 48.1 25.5	石材: 錐粒砂岩(ニービスフニ)。風化素材利用のためか多孔質。平面形方形に加工、表面磨面。上面中央に方形の凹みあり。上面に円形の柱痕跡あり。	不明	出土地不明
第160図 図版125 40	礎石	—	45.5 46.0 23.0	石材: 錐粒砂岩(ニービスフニ)。平面形方形に加工、表面磨面。上面中央に方形の凹みあり。上面に円形の柱痕跡あり。	不明	出土地不明
第160図 図版125 41	礎石	—	45.0 44.0 25.0	石材: 錐粒砂岩(ニービスフニ)。風化素材利用のためか多孔質。平面形方形に加工、侧面磨面。上面2角部に方形の凹みあり。	不明	出土地不明
第160図 図版125 42	礎石	—	51.1 52.5 19.6	石材: 錐粒砂岩(ニービスフニ)。板状の自然縫を利用。側面打剥形により略円形。上面に円形の柱痕跡あり。	不明	出土地不明
第161図 図版126 43	礎石	—	51.5 51.0 15.0	石材: 錐粒砂岩(ニービスフニ)。円形の自然縫を上面平坦に加工、加工痕残。上面に方形の柱痕跡あり。下面には十字状の突起あり。	不明	出土地不明
第161図 図版126 44	礎石	—	90.5 83.0 33.0	石材: 錐粒砂岩(ニービスフニ)。自然縫を利用。中央部に平坦面。上面に柱痕跡あり。	不明	出土地不明
第161図 図版126 45	礎盤 (下)	装飾部	8.5 8.1 3.5	石材: 錐粒砂岩(ニービスフニ)。陽刻により連弁彫刻。礎盤より剥落。	表 K2 102	K2-102 表採
第161図 図版126 46	礎盤 (下)	装飾部	6.7 6.25 1.8	石材: 錐粒砂岩(ニービスフニ)。陽刻により連弁彫刻。礎盤より剥落。	不明	出土地不明
第161図 図版126 47	礎盤 (下)	装飾部	5.0 8.7 1.65	石材: 錐粒砂岩(ニービスフニ)。陽刻により連弁彫刻。礎盤より剥落。	S60	出土地不明
第161図 図版126 48	礎盤 (下)	装飾部	5.5 8.2 2.1	石材: 錐粒砂岩(ニービスフニ)。陽刻により連弁彫刻。礎盤より剥落。	表採	表採
第161図 図版126 49	礎盤 (下)	装飾部	7.1 10.0 1.25	石材: 錐粒砂岩(ニービスフニ)。陽刻により連弁彫刻。礎盤より剥落。	S60	出土地不明
第162図 図版127 50	礎盤 (上)	—	最大径 42.4 高さ 17.8	石材: 錐粒砂岩(ニービスフニ)。表面磨面。上面中央に方柱形の突起有。下面中央に円形の凹み。これら凹凸のみ加工痕残。下面に路「一番」。	表 L0 100	L0-100 表採
第162図 図版127 51	礎盤 (上)	—	最大径 (47.0) 高さ 24.0	石材: 錐粒砂岩(ニービスフニ)。平面形円形に加工、側面磨面。上面欠損。下面には加工痕残。	不明	出土地不明
第162図 図版127 52	礎盤 (上)	—	最大径 (41.2) 高さ 15.8	石材: 輝緑岩。破片。表面磨面。中央部にはぞ穴有。	SW1	K2-98・99 SW1
第162図 図版127 53	礎盤 (上)	—	最大径 (38.7) 高さ 22.3	石材: 錐粒砂岩(ニービスフニ)。表面磨面。上面中央に円形の凹み、下面中央に円柱形の突起有。これら凹凸のみ加工痕残。	不明	出土地不明
第162図 図版127 54	不明	—	24.9 21.8 12.0	石材: 錐粒砂岩(ニービスフニ)。方形に整形、表面磨面。両側中央部に凹部。側面に刻銘「奉行」「首美城領主」。	不明	出土地不明

注.「-」:計測不可。():推定

第50表 石製品観察一覧④

単位:cm

標図番号 図版番号	器種	部位／分類	残存長 残存幅 厚さ	観察事項	旧出土地	新出土地
第162図 図版127 55	龍柱 (上)	掌	12.2 7.5 5.25	石材: 細粒砂岩(ニービスフニ)。表面に細かい鱗を陽刻。掌部の剥落片か。	不明	出土地不明
第162図 図版127 56	龍柱 (上)	角	10.2 6.7 5.4	石材: 細粒砂岩(ニービスフニ)。突起上に整形され、表面は研磨。形状より角部か。	不明	出土地不明
第163図 図版128 57	龍柱 (上)	胴体部	40.9 34.9 25.5	石材: 細粒砂岩(ニービスフニ)。表面風化のため変色。頭鈸、腹板、前脚、胴部鱗を陽刻。側面下部にはぞぞ穴有り。古写真より下部龍柱との固定用の鋸の固定孔か。これら特徴より大龍柱胴部。	不明	出土地不明
第163図 図版128 58	龍柱 (下)	尾部	34.5 30.7 14.7	石材: 細粒砂岩(ニービスフニ)。龍鱗等を陽刻。古写真より下部龍柱の尾の巻き付け部片か。	不明	出土地不明
第163図 図版128 59	龍柱 (上)	胴体部	49.0 20.0 27.0	石材: 細粒砂岩(ニービスフニ)。頭鈸、腹板、鱗、火焔を陽刻。古写真より上部龍柱の胴体部破片。	不明	出土地不明
第163図 図版128 60	龍柱 (上)	爪	17.2 6.2 5.8	石材: 細粒砂岩(ニービスフニ)。表面磨面。古写真より上部龍柱の爪部片。	不明	出土地不明
第163図 図版128 61	龍の鱗	触覚鱗	全長約170	素材: 鉄。基部に塗付接着、固定用か。形状より触覚鱗。 ※集計は金属製品に含まれる。	不明	出土地不明
図版129 62	龍柱 (上)	胴体部	7.8 4.4 2.7	石材: 溶結凝灰岩。鱗を陽刻。	表 K1 102	K1-102 表採
図版129 63	龍柱 (上)	胴体部	8.3 7.6 3.6	石材: 溶結凝灰岩。鱗・背鱗を陽刻。	表 L1 102	L1-102 表採
図版129 64	龍柱 (上)	胴体部	28.6 16.9 10.4	石材: 細粒砂岩(ニービスフニ)。龍鱗等を陽刻。	正面部	出土地不明
図版129 65	龍柱 (上)	鱗	9.2 6.5 2.9	石材: 細粒砂岩(ニービスフニ)。古写真より鱗の破片。	表 L2 102	L2-102 表採
図版129 66	龍柱 (上)	角部	10.6 3.7 3.9	石材: 細粒砂岩(ニービスフニ)。表面研磨。形状より角部か。	表土 L1 102	L1-102 表土
図版129 67	龍柱 (上)	鱗	8.4 9.0 5.8	石材: 細粒砂岩(ニービスフニ)。鱗を陽刻。形状より頬鈸の破片か。	IV 基壇化 柱石前ブール 爆弾跡④	SP3
図版129 68	龍柱 (上)	胴体部	23.8 22.4 13.2	石材: 細粒砂岩(ニービスフニ)。鱗を陽刻。	L2 107 爆弾跡	爆弾跡④
図版129 69	龍柱	胴体部	6.3 7.0 5.4	石材: 溶結凝灰岩。龍鱗を陽刻。胴体部片。	表土 K5 103	K5-103 表土
図版129 70	龍の鱗	触覚鱗	全長 63.5	素材: 鉄。基部欠損。 ※集計は金属製品に含まれる。	不明	出土地不明

注: 〔-〕: 計測不可, (): 推定

第50表 石製品觀察一覧(5)

単位:cm, g

標図番号 国版番号	種類	材質	残存長 残存幅 厚さ	重量	觀察事項	旧出土地	新出土地
第164図 62 国版130 71	硯	赤色頁岩	5.7 6.1 1.8	93.83	陸部欠損。製作痕跡: 全周に研磨による線条痕。使用痕跡: 池部に墨付着。	表 K0 96	K0-96 表採
第164図 63 国版130 72	硯	頁岩	7.1 7.2 2.0	182.81	池部欠損。製作痕跡: 全周に研磨による線条痕。使用痕跡: 陸部中央に凹み。銘: 背面に片切形による銘残るが、残存極小で内容不明。	表 L4 101	L4-101 表採
第164図 64 国版130 73	硯	粘板岩	13.9 7.9 2.15	510.40	略完形。製作痕跡: 全周に研磨による線条痕。銘: 背面に使用者とみられる氏名の釘書「岩井キエ」。石材・銘より本土産、近代。	第2 I,3 96	I,3-96 II層
第164図 65 国版130 74	硯	粘板岩	12.2 6.45 1.65	258.50	略完形。製作痕跡: 全周に研磨による線条痕。石材より本土産か。	K5 96 第1層	K5-96 I層
第164図 66 国版130 75	硯	粘板岩	12.2 5.9 1.6	222.43	略完形。製作痕跡: 全周に研磨による線条痕、陸部中央部に使用による磨面。使用痕跡: 陸部下部に短軸方向に続いた刻線。池部に墨付着。銘: 背面に使用者とみられる氏名の釘書「渡口真精」。石材・銘より本土産、近代。	不明	出土地不明
第164図 67 国版130 76	硯	凝灰岩	3.4 5.49 2.35	37.95	池部破片。製作痕跡: 池部隅に研磨による線条痕。石材より本土産。	I,0 L1 98 搅乱層	I,0-1-98 搅乱層
第164図 68 国版130 77	硯	凝灰岩	4.0 6.0 2.35	34.68	池部破片。製作痕跡: 全周に研磨による線条痕。石材より本土産。	かおや擾 I層	かおや跡 I層
第164図 69 (高島硯 か)	硯	頁岩	12.6 5.8 1.2	202.95	池部上端欠損。製作痕跡: 全周に研磨による線条痕、黒色に塗色。使用痕跡: 陸部中央に使用による凹み、凹部内に刻込み、墨付着。銘: 背面に「石井開」片切形、使用者とみられる氏名の釘書「…康方」。石材・銘より幕末頃の赤間硯。	表 K1 101	K1-101 表採
第164図 70 国版130 79	硯 (赤間硯)	赤色頁岩	5.9 5.2 1.55	74.71	池部欠損。製作痕跡: 全周に研磨による線条痕。使用痕跡: 陸部中央に使用による凹み有、凹部内に刻込み、墨付着。銘: 背面に「赤間開」片切形、使用者とみられる氏名の釘書「…康方」。石材・銘より幕末頃の赤間硯。	不明	出土地不明
第164図 71 国版130 80	文鎮	粘板岩	2.95 13.39 1.8	149.19	完形。製作痕跡: 全周に研磨による線条痕、黒色に塗色。使用痕跡: 部分的に塗色消失。一面に自然面残、同面に他の石材付着。	不明	出土地不明
第164図 72 国版130 81	石臼 (茶臼)	輝石安山岩	22.1 31.4 8.4	4.84 (kg)	下臼部の破片。推定径19.2cm、高さ9.0cm。残存部位より主溝推定8分画、副溝は2条だが不規則。加工痕: 底面が加工時のバミ痕残、臼部外周・皿部に滑面。使用痕: 主溝・副溝とも摩耗。	不明	出土地不明
第164図 73 国版130 82	石臼 (茶臼)	凝灰岩	24.7 14.9 8.0	4.32 (kg)	下臼部の破片。推定径16.4cm、高さ12.6cm。残存部位より主溝推定8分画、副溝は2条だが不規則。加工痕: 底面が加工時のバミ痕残、臼部外周・皿部に滑面。使用痕: 主溝・副溝とも摩耗。	不明	出土地不明
第164図 74 国版130 83	石臼	赤色頁岩	口径 37.2 — —	312.83	下臼の受け皿部とか。製作痕跡: 外面・底部バミ痕、内面研磨による線条痕あり。	第62 柱穴	K9-93 柱穴62
第164図 75 国版131 84	墓石	ガラス (黒色)	1.65 1.5 0.7	2.06	完形。製作痕跡: 下面に切断痕。使用痕跡: なし。鏡餅型(上原分類)。	不明	出土地不明
第164図 76 国版131 85	駒	施釉陶器	2.0 2.05 0.7	4.22	完形。製作痕跡: 前面及び下面縁邊に研磨による線条痕、背面に黒色の色褪れ。使用痕跡: 背面を除き塗色消失。鏡餅型(上原分類)。	表土	表土
第164図 77 国版131 86	墓石?	メノウ	1.75 2.0 0.8	4.08	完形。製作痕跡: なし。使用痕跡: なし。自然縁(上原分類)。	表土	表土
第164図 78 国版131 87	墓石?	閃綠岩	1.6 1.75 0.4	1.78	完形。製作痕跡: 表面に研磨による線条痕あり。使用痕跡: なし。レンズ型(上原分類)。駒の可能性もある。	K3 96 SW2 第2 石組 遺構内	K2-97 SW2
第164図 79 国版131 88	墓石	粘板岩	2.15 2.2 0.6	3.74	完形。製作痕跡: 表面に研磨による線条痕あり。使用痕跡: なし。レンズ型(上原分類)。	表土 L1 102	L1-102 表土

注 「-」:計測不可

第50表 石製品観察一覧(⑥)

単位:cm、g

補図番号 図版番号	種類	材質	残存長 残存幅 厚さ	重量	観察事項	旧出土地	新出土地
第図165 80 図版131 89	碁石?	土製	2.0 2.0 0.7	3.02	完形。製作痕跡:表面に研磨による線条痕あり。使用痕跡:片側表面中央部に僅かに滑面化した凹み、指痕?自然縫(上原分類)。駄の可能性もあり。	SW9 遺構内	K1-96 SW9
第図165 81 図版131 90	駄?	緑色岩 (県外産)	4.0 3.9 2.9	57.14	完形。製作痕跡:全周に磨面。使用痕跡:片側表面中央部に僅かに滑面化した凹み。	第2 K6 98	K6-98 II層
第図165 82 図版131 91	玉器	結晶質 石灰岩	5.7 1.95 1.35	8.54	破片。製作痕跡:全面磨面、指間のみ粗磨面。使用痕跡:なし。鳥の足部か?	K1 96	K1-96 表採
第図165 83 図版131 92	玉器	蠶石	2.4 0.7 0.15	0.28	下端欠損。製作痕跡:全周に研磨に伴う微細な線条痕。使用痕:なし。表裏面に長軸方向の線2条陰刻。	不明	出土地不明
第図165 84 図版131 93	玉器	翡翠	1.5 2.2 1.8	5.61	破片。製作痕跡:全周に削り痕、多面体形に面取り。使用痕跡:なし。	不明	出土地不明
第図165 85 図版131 94	玉器	翡翠	2.75 2.95 1.25	10.46	碗もしくは盤。胸部片。製作痕跡:全周に磨面及び微細な研磨による線条痕。使用痕:なし。	表 L2 99	L2-99 表採
第図165 86 図版131 95	玉器	不明	3.0 5.1 1.25	19.80	破片。製作痕跡:前面磨面。背面バ痕残。使用痕跡:なし。装飾:草花文内巻。背面バ痕より別製品へのめ込み式の装飾部品か?	不明	出土地不明
第図165 87 図版131 96	石筆	蠶石	4.9 0.6 0.6	3.20	上部欠損。製作痕跡:削り・研磨により身面部取り。使用痕跡:なし。	表土 L4 102	L4-102 表土
第図165 88 図版131 97	石球	細粒砂岩 (ニーピス フニ)	5.85 5.9 5.3	245.24	完形。製作痕跡:全周にバ痕及び敲打痕。一部のみ平坦に粗研磨。使用痕:なし。	4基壇南壁 外側上部	南跡り場 断剖⑤
第図165 89 図版131 98	石球	細粒砂岩 (ニーピス フニ)	7.0 7.05 6.6	421.81	完形。製作痕跡:全周に敲打痕。使用痕:なし。	K2 100 南石 段(基壇)の内 側の基段石列	南跡り場 断剖①
第図165 90 図版131 99	弾	銅製	2.5 2.55 2.65	68.23	完形。製作痕跡:中央部一箇所に突起。切断痕? 使用痕:なし。 ※累計は金属製品に含まれる。	第2基壇	II期基壇
第図165 91 図版131 100	弾	土製	2.4 2.48 2.5	14.89	完形。製作痕跡:なし。使用痕跡:煤付着。下面に平坦面あり。 ※累計は土製品に含まれる。	表土 L3 92	L3-92 表土

注「-」:計測不可

第51表 骨製品集計表

分類	ボタン	歯ブラシ	骨ペラ	不明 (ボタン?)	合計
個数	3	2	2	1	8

第52表 骨製品観察一覧

単位:cm, g

抽図番号 図版番号	種類	材質	法量				観察事項	旧出土地	新出土地	
			縦	横	厚さ	重量				
第166図 図版132 1	不明 (ボタン?)	不明	2.15	2.15	0.25	1.43	完形。製作痕跡: 内面にケズリ痕、凹み、外縫ミガキ。使用痕:なし。	かねや跡の 覆土中	かねや跡 I層	
第166図 図版132 2	骨ブラシ	ウシ?	4.45	1.15	0.35	2.24	柄部欠損。製作痕跡: 植毛のための穿孔、研磨。使用痕:なし。	南側	VII期基壇 南通り場 階段	
第166図 図版132 3	骨ブラシ	ウシ?	8.35	0.80	0.70	5.29	ブラシ部欠損。製作痕跡: 植毛のための穿孔、基部穿孔、研磨。使用痕: 基部孔に無残。銘:「オハヨー」。	L0-98 撥乱	L0-98 撥乱層	
第166図 図版132 4	骨ペラ	ウシ?	10.10	1.90	0.60	10.40	製作痕跡: 全面研磨、基部穿孔。使用痕跡: 利部先端欠損。釘書: 表「ヨナバル ○」裏「マフル」。	南側	VII期基壇 南通り場 階段	
第166図 図版132 5	骨ペラ	ウシ?	6.20	1.45	0.55	6.58	利部欠損。製作痕跡: 全面研磨、基部穿孔。横幅は1.00cm~1.45cm~1.80cm。	L5-98 撥乱	L5-98 撥乱層	

第53表 土製品集計表

分類	建材			羽口	土器	ミニチュア 土製品	不明 土製品	器種不明	合計
	モルタル	漆喰	瓦質						
個数	7	7	3	1	1	1	1	1	22

第54表 土製品観察一覧

単位:cm, g

件名番号 図版番号	種類	材質	素地	法量				観察事項	旧出土地	新出土地
				幅	横	厚さ	重量			
第16766 図版133 1	器種不明	土製	にぶい黄褐色、高質、白色 粘土土質	3.45	1.35	0.90	5.80	下端欠損。方形に面取り、全面ミガキ。表面中央部に凹み。 面種不明。	K1-96	K1-96 表採
第16766 図版133 2	建材	瓦質	明赤褐色、瓦質、なめらか 多量	9.40	10.45	5.50	316.53	下・右側面欠損。残存面はいずれも平坦面。詳細不明。	K2-96 SW2 石皿遺構内 (井戸口)	K2-97 SW2
第16766 図版133 3	建材	モルタル	—	10.30	7.10	2.60	179.68	正面及び下面を除く側面は磨面。特に正面顯著。焼成後正面から等孔。面種不明。	表土 L1-100	L1-100 表土
第16766 図版133 4	ミニチュア 土製品	土製	淡黄色、泥質	1.50	1.70	0.25	0.72	平欠、塑合せ。正面・側面に自然縫。底部剥落。本土産 (關西方面)、古墳。	SW4遺構内	K0-1-99 SW4

第55表 ガラス製品集計表

器種 分類	ガラス瓶					化学用品 管	器種不明	合計
	薬瓶	栓	蓋	インクボトル	ボトル			
個数	6	4	1	2	1	4	3	21

第56表 ガラス製品観察一覧

単位:cm, g

挿図番号 図版番号	器種	縦 横 厚さ	重量	観察事項	旧出土地	新出土地
第168図 図版134 1	栓	2.90 幅 1.05 外径 2.30	8.69	淡緑色。栓部は端部に向かって細化、型成形。近現代。	不明	出土地不明
第168図 図版134 2	インクボトル	3.95 5.35 幅 4.35 —	43.88	淡緑色。型成形、長軸方向で溶着。外径2.2cm、内径1.3cm。近現代。	L1 98 撥乱層	L1-98 撥乱層
第168図 図版134 3	薬瓶	6.30 2.30 1.00	10.93	透明。口部細口スクリューキャップ。型成形、長軸方向で溶着。口径0.9cm。近現代。	不明	出土地不明
第168図 図版134 4	薬瓶	4.10 2.80 1.00	4.84	透明。口部欠損。型成形、長軸方向で溶着。口径0.10cm。近現代。	不明	出土地不明
第168図 図版134 5	蓋	4.20 3.80 —	23.56	透明。型成形。化粧瓶蓋。最大幅は3.8cm。近現代。	不明	出土地不明
第168図 図版134 6	栓	5.25 栓状径 0.60 円径 小1.80 円径 大2.35	27.68	型成形。瓢箪状だが器種等不明。	SW1 遺構内	K2-98・99 SW1

注「-」:計測不可

第57表 貝類遺体等集計表①(巻貝)

調査名 科名 種名 生態地	種別調査																								
	ヒヨコ目		ニシキテグロ目															サザエ科				アマオブネ科			
	ヒヨコ目	ニシキテグロ目	ムラサキウズ	ムラサキウズ	ゲンチャハマ	ベニシリタナ	カラハマツ	モナツガ	モナツガ	モナツガ															
イボアリゲ	ニシキテグロ		ムラサキウズ															サザエ科				アマオブネ科			
1-2a	1-2a		1-3a		1-4a		1-4a		1-4a		1-4a		1-4a		1-4a		モナツガ				モナツガ				
1-2b	1-2b		1-3b		1-4b		1-4b		1-4b		1-4b		1-4b		1-4b		モナツガ				モナツガ				
元相	相田	相田	元相	相田	相田	相田	相田	相田	相田	相田	相田	相田	相田	相田	相田	相田	モナツガ	モナツガ	モナツガ	モナツガ	モナツガ	モナツガ	モナツガ	モナツガ	
合	計	0	0	1	7	3	0	3	1	2	14	1	0	0	25	33	0.5	2	0	1	1	0	0	0	0
最小の個体	1	8	3	3	1	98	2	1	134	74	220	100	6	10	4	2	21	1							

網名 科名 種名 生態地	概 要 表														タケノコガサ科				
	マクダラ科		イガ科							タケノコガサ科					セキセリ科	アフリカナマイモ科	ナンバシ・ハイビスカス科		
	チフジ科	クロバチ科	モカシナシ	ブノボリ・クロザメ	クワフジキモ	マグダワ科	セガタキ科	ゴマツノイモ	アカシマツナシ	ヤナギナガリイモ	セゼイモ	キヌタガワイモ	コシキミナシ	アソロイモ	イセガホトキモ	タケノコガサ科	セキセリ科	アフリカナマイモ科	ナンバシ・ハイビスカス科
元形	根葉 繊片	元形	根葉 繊片	元形	根葉 繊片	元形	根葉 繊片	元形	根葉 繊片	元形	根葉 繊片	元形	根葉 繊片	元形	根葉 繊片	元形	根葉 繊片	元形	根葉 繊片
合計	21	0	0	23	0	3	0	0	2	0	0	1	2	7	0	0	23	0	0
筋目数	2			3		3			1		7		3		3		1		1
筋目数	2			3		3			1		7		3		3		1		1

調査 科目 種類 生息地	西ノ瀬			東ノ瀬			登録不明	合計		
	ナガミツバメイ科			ワカザンシウ カサギ科						
	バンダナガミツバメイ			オスカサキ モカサギ						
	V-9			IV-9						
	定期	縮尺	定期	縮尺	定期	縮尺				
	合計	1	0	0	76	8	0	3		
最小個体数	1	98		1	4	4	2708	1147		
							3331	1331		

* 個体数は完形と級頭を足した数。

第57表 貝類遺体等集計表②(二枚貝)

網名 科名 種名 生息地	二枚貝網															
	フネガイ科				イダガ科				ウグイスガイ科				イタヤガイ科			
	エガイ	ワタケイガ科	ミツウタガ科	ヒラタガ科	ヒラタガ科	ヒラタガ科	ヒラタガ科	ヒラタガ科	ヒラタガ科	ヒラタガ科	ヒラタガ科	ヒラタガ科	ヒラタガ科	ヒラタガ科	ヒラタガ科	
	I-1-a		II-2-c		I-1-a		I-1-a		I-1-a		I-1-c		I-1-c			
生糸	先形	棘頭	棘	先形	棘頭	棘	先形	棘頭	棘	先形	棘頭	棘	先形	棘頭	棘	
片	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	
左	右	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	
右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	
合計	3	1	2	1	2	1	0	0	0	1	4	1	2	0	0	16
最小個体数	5	5	3	1	1	1	5	1	1	3	4	1	0	0	0	4

網名 科名 種名 生息地	二枚貝網															
	ウタガイ科				イタヤガ科				ヒカゲイ科				ホウザルガイ科			
	ルタガイの一種	オハゲガノリ	カキの一種	ウツツガニガイ	ヒカゲイの一種	ホウザルガイ	ウタガイ	カワラガイ	ヒカゲイ	ホウザルガイ	ウタガイ	カワラガイ	ヒカゲイ	ホウザルガイ	ウタガイ	
	I-2-a		I-1-a		I-1-a		I-2-c		VI		II-2-c		II-2-c			
生糸	先形	棘頭	棘	先形	棘頭	棘	先形	棘頭	棘	先形	棘頭	棘	先形	棘頭	棘	
片	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	
左	右	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	
右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	
合計	4	2	3	0	12	0	1	0	0	10	2	0	9	72	66	14
最小個体数	7	1	1	1	10	1	1	1	1	9	16	0	0	3	1	0

網名 科名 種名 生息地	二枚貝網															
	シャコガイ科															
	ヒメコロガイ	セレシャコガイ	オオシラミミ(シラミ)	シラヌヌ	シヤコガイ科不明	イソハマグリ	リュウキウウナミズク	ヒジハナガイ科	ヒジハナガイ	ヒジハナガイ	ヒジハナガイ	ヒジハナガイ				
	I-1-a		I-2-c		I-1-a		I-2-c		I-1-c		II-1-c					
生糸	先形	棘頭	棘	先形	棘頭	棘	先形	棘頭	棘	先形	棘頭	棘	先形	棘頭	棘	
片	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	
左	右	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	
右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	
合計	6	6	1	0	4	23	18	15	11	21	2	0	0	0	1	1
最小個体数	7	36	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	

網名 科名 種名 生息地	二枚貝網														
	ニッコウガイ科						シオサザナ科			シジミ科			マルスダレガイ科		
	ニッコウガイ	サザリ	ミツウタガリ	マスガガイ	リュウキウウナミズク	シレラシ	ヒメタガ	ヒジハマグリ	ヒジハマグリ	ヒジハマグリ	ヒジハマグリ	ヒジハマグリ			
	II-2-c		I-2-c		I-2-a		II-1-c		III-1-c		II-2-c				
生糸	先形	棘頭	棘	先形	棘頭	棘	先形	棘頭	棘	先形	棘頭	棘	先形	棘頭	棘
片	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右
左	右	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右
右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右
合計	0	0	1	0	0	1	0	0	0	5	0	1	0	0	0
最小個体数	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

網名 科名 種名 生息地	二枚貝網														
	マルスダレガイ科														
	アラスジケンガイ	ホスジケンガイ	ユカヅタマガニ	イオウタマガニ	マラオナシ	スダレハマグリ	ハマグリの一種	ヒジハマグリ	ヒジハマグリ	ヒジハマグリ	ヒジハマグリ	ヒジハマグリ			
	III-1-c		II-1-c		II-2-c		III-1-c		I-2-c		II-1-c				
生糸	先形	棘頭	棘	先形	棘頭	棘	先形	棘頭	棘	先形	棘頭	棘	先形	棘頭	棘
片	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右
左	右	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右
右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右	左	右	右
合計	1408	1217	484	341	433	36	27	9	3	2	3	4	1	11	4
最小個体数	1892	45	8	11	1	4	4	2	4	1	1	1	0	0	18

網名 科名 種名 生息地	二枚貝網						合計	
	マルスダレガイ科							
	ハマグリ	オカシマニ	ヒジハマグリ	ヒジハマグリ	ヒジハマグリ	ヒジハマグリ		
	II-2-c	II-1-c	先形	棘頭	棘	先形	1767	
生糸	左	右	右	左	右	左	1647	
片	左	右	右	左	右	左	608	
左	右	右	右	左	右	左	823	
右	左	右	右	左	右	左	0	
合計	40	55	62	58	159	11	15	
最小個体数	124	19	8	11	2	2	2469	

第60表 脊椎動物遺体集計表①(魚類)

		目・科・種名・部位		個 数	
メジロザメ目	メジロザメ科	メジロザメ	脊椎骨		6
エイ目	科不明	エイの一種	脊椎骨		10
ボラ目	ボラ科	ボラ?	主鰓蓋骨	R	L
ダツ目	ダツ科	ダツ	前上頸骨	R	L
スズキ目	ハタ科	A	歯骨	R	L
			前上頸骨	R	L
		B	歯骨	R	L
			前上頸骨	R	L
		ハタ科の一種	歯骨	R	L
			主上頸骨	R	L
			角骨	R	L
			方骨	R	L
			舌顎	a	R
			舌顎	R	L
			前鰓蓋骨	a	R
			前鰓蓋骨	b	R
			前鰓蓋骨	R	L
			主鰓蓋骨	R	L
		フエダイ科	擬頸骨	R	L
			鰓骨		1
	アジ科	ブリ	前上頸骨	R	L
		イチキアジ類	歯骨	R	L
スズキ目	タイ科	ヒメフエダイ	前鰓蓋骨	R	L
			前上頸骨	R	L
		A	前上頸骨	R	L
			歯骨	R	L
		B	前上頸骨	R	L
			歯骨	R	L
		C	前上頸骨	R	L
			舌顎	R	L
		ヘダイ	前上頸骨	R	L
			歯骨	R	L
		クロダイ	前上頸骨	R	L
			歯骨	R	L
		ミナミクロダイ	主上頸骨	R	L
			前上頸骨	R	L
		タイワンダイ	前鰓蓋骨	R	L
			前上頸骨	R	L
	フエフキダイ科	タイ科の一種	主上頸骨	R	L
			舌顎	R	L
		ヨコシマクロダイ	前上頸骨	R	L
			前鰓蓋骨	R	L
		アミミフエフキ	前上頸骨	R	L
			舌顎	a	R
		イソフエフキ	舌顎	b	R
			舌顎	R	L
		ハマフエフキ	前上頸骨	R	L
			角骨	R	L
			前上頸骨	R	L
			歯骨	R	L
			主上頸骨	R	L
			口蓋	R	L
			歯骨	R	L
			a	R	L
			b	R	L
			c	R	L
	シマイサキ科	コトヒキ	方骨	R	L
			方骨	R	L
			舌顎	R	L
			前鰓蓋骨	R	L
			主鰓蓋骨	R	L
			副櫛骨		10
			c	R	L

第60表 脊椎動物遺体集計表②(魚類)

目・科・種名・部位				個数		
ベラ科	コブダイ	前上顎骨	R	L	17	
		歯骨	R	L	2	
		上咽頭骨	R	L	1	
		下咽頭骨			6	
	タキペラ	上咽頭骨	R	L	1	
		前上顎骨	R	L	1	
		歯骨	R	L	1	
	A	下咽頭骨			2	
		前上顎骨	R	L	1	
	ベラ科の一種	歯骨	R	L	1	
		主上顎骨	R	L	5	
		角骨	R	L	8	
		前鰓蓋骨	i	R	1	
		前上顎骨	R	L	4	
スズキ目	イロブダイ	歯骨	R	L	1	
		上咽頭骨	R	L	1	
		下咽頭骨			4	
	ナンヨウブダイ	上咽頭骨	R	L	4	
		下咽頭骨			4	
	ナガブダイ	上咽頭骨	R	L	1	
		下咽頭骨			9	
	A	前上顎骨	R	L	7+(1)	
		歯骨	R	L	4	
		前上顎骨	R	L	8	
	B	歯骨	R	L	12	
		前上顎骨	R	L	6	
		歯骨	R	L	1	
ブダイ科	ブダイ科	主上顎骨	A	R	4	
		主上顎骨	B	R	9	
		主上顎骨	R	L	1	
		口蓋	a	R	2	
		口蓋	b	R	1	
	ブダイ科の一種	口蓋	R	L	5	
		角骨	A	R	8	
		角骨	B	R	6	
		方骨	R	L	6	
		舌顎	R	L	6	
スズキ目	ブダイ科?	前鰓蓋骨	f	R	1	
		前鰓蓋骨	R	L	4	
		主鰓蓋骨	R	L	7	
		主上顎骨	R	L	2	
		前鰓蓋骨	c	R	1	
	アイゴ科	舌顎	f	R	1	
		前鰓蓋骨	d	R	1	
	ニザダイ科	擬頸骨	R	L	1	
		主鰓蓋骨	R	L	1	
カマス科	鱗				10	
	前上顎骨				1	
	歯骨				2	
	前鰓蓋骨				1	
	スズキ目					
フグ目	カワハギ科	背結棘				2
	フグ科	前上顎骨				1
	ハリセンボン科	棘				5
	科・種不明	口蓋	b	R	8	1
		方骨	R	L		1
		舌顎	a	R	1	1
		舌顎	c	R	L	1
		舌顎	d	R	L	2

第60表 脊椎動物遺体集計表③(魚類)

目・科・種名・部位				個数
	a	R	L.	
前鰓蓋骨	a	R	L.	1
	e	R	L.	2
	f	R	L.	1
	g	R	L.	1
	a	R	L.	1
	b	R	L.	2
	主鰓蓋骨	R	L.	2
上咽頭骨	R	L.	1	3
	R	L.		1
擬頸骨	R	L.		1
	鰓骨			6+①
	背鰭棘			7
	臀鰭血管間棘			22
	第2臀鰭棘			19
	脊椎骨			795+③
	尾椎			28
合計				1677

注 ○:キズあり

第60表 脊椎動物遺体集計表④(ウミガメ)

種類	部位	個数
ウミガメ	肋骨板	1
		1
		1
		1
		1
		2
	指骨	1

第60表 脊椎動物遺体集計表(5)(ニワトリ)

部位	右	左	不明	
鎖骨	0	0	1	
鳥口骨	完存	1	2	0
	近位端	1	2	0
	近位部～遠位端	0	1	0
	遠位端	1	0	0
	椎体	0	0	1
肩甲骨	近位端	0	1+①	0
胸骨		0	0	1
上腕骨	完存	①	1	0
	両骨端はずれ	0	[1]	0
	近位端	3	1	0
	近位部	0	2	0
	近位部～遠位端	1	0	0
	近位部～遠位部	1	1	0
	近位部～骨体	0	1	0
	骨体	3	2	0
	骨体～遠位部	0	2	0
	骨体～遠位端	5	4+②	0
橈骨	遠位部	1	2+①	0
	遠位端	4	2	0
尺骨	完存	0	1	0
	近位端～遠位部	0	1	0
	骨体	3	0	0
	骨体～遠位端	1	2	0
	遠位端	3	1	0
大腿骨	完存	1	0	0
	近位端	1	1	0
	近位端～骨体	1	0	0
	近位部	0	1	0
	近位部～遠位部	0	1	0
	近位部～遠位端	1	0	0
	近位部～骨体	0	1	0
	骨体	4	4	0
	骨体～遠位端	2	7	0
	遠位端	1	0	0
中手骨	近位端	1	0	0
大腿骨	完存	1	1	0
	近位端	2	1+①	0
	近位端～骨体	5+③	2	0
	近位端～遠位部	0	2	0
	近位部	3	0	0
	近位部～遠位部	2	1	0
	近位部～骨体	2	1	0
	骨体	3	3	0
	骨体～遠位部	2	2	0
	骨体～遠位端	3	1	0
遠位部	遠位部	1	0	0
	遠位端	0	1+②	0

部位	右	左	不明	
脛骨	完存	0	1	0
	近位端	①	0	0
	近位端～骨体	2	4	0
	近位端～遠位部	1	1	0
	近位部～骨体	1	0	0
	近位部～遠位部	1	0	0
	近位部～遠位端	1	0	0
	骨体	10	10	0
	骨体～遠位部	5	1	0
	骨体～遠位端	5	4+①	0
中足骨	遠位部	0	2	0
	遠位端	1	6+①	0
	近位端	1	2	0
	近位端～骨体	0	3	0
	近位部	1	0	0
	骨体	3+(♂1)	3+(♀1)	0
合計	遠位部	2	0	0
	遠位端	2	2	0
	破片	1	0	0
合計		107	109	3

※ ○:キズあり、(♀):メス、(♂):オス、[]:幼

第60表 脊椎動物遺体集計表⑥(トリ)

種類	部位	右/左	残存部位	個数
カモ類?	上腕骨	右	近位部～骨体	1
	脛骨	右	骨体	1
キジバト科	尺骨	右	完形	1
アホウドリ?	橈骨	右	骨体	1
トリ	上顎骨	-	-	1
				1
	上腕骨	左	近位端～遠位部	1
		右	近位端～骨体	1
		右	骨体	①
	尺骨	左	近位部～遠位端	1
		左	骨体	1
		左	遠位端	1
	脛骨	左	骨体	1
		左	骨体～遠位部	1

※ ○:キズあり

第60表 脊椎動物遺体集計表⑦(ネズミ)

部 位	残存部位	右/左	個 数
寛骨	完形	右	1
大軸骨	近位端～遠位骨端はずれ	左	1
	完形	左	1
脛骨	両骨端はずれ	右	1
尾椎		—	1

第60表 脊椎動物遺体集計表⑧(イヌ)

部 位	右/左	残存部位	個 数
肩甲骨	右	遠位端	1
橈骨	左	近位端	1
中手骨Ⅲ	右	完形	1
中手骨Ⅳ	右	完形	1
中足骨Ⅱ	左	近位端	1
中足骨Ⅲ	右	完形	1

第60表 脊椎動物遺体集計表⑨(ジュゴン)

部 位	個 数
肋骨	1
	1
	2
	1
歯	2

第60表 脊椎動物遺体集計表⑩(ウマ)

部 位		右	左	不明
下顎骨	M ₂	1	0	0
肋骨	破片	0	0	2
肩甲骨	破片	1	0	0
肩甲骨?	破片	0	1	0
橈骨	骨体	0	1	0
手根骨	第3	0	1	0
寛骨	脇骨部～臼部	1	0	0
	臼部	1	0	0
	坐骨	0	1	0
大腿骨	近位骨端のみ	2	0	0
	遠位部	1	0	0
	破片	2	0	0
脛骨	近位端	0	1	0
	近位部	0	1	0
	遠位端	0	2	0
距骨		2	1	0
踵骨	完形	1	0	0
	近位端～遠位部	1	0	0
中手骨	骨端のみ	①	0	0
基節骨		1	1	0
中節骨		1	0	0
部位不明	破片	0	0	1
合 計		16	10	3

注 ○:キズあり

第60表 脊椎動物遺体集計表⑪(ヤギ)

部 位	右/左	残存部位	個 数
下顎骨	左	—	1
上腕骨	左	遠位端	1
橈骨	左	近位端	1
	左	遠位部	1
	左	遠位端	1
尺骨	左	近位端	1
大腿骨	右	近位部～遠位部	1
	左	近位端～遠位部	1
基節骨	右	完形	1

第60表 脊椎動物遺体集計表⑯(ウシ歯)

部 位	右/左	残存部位	個 数
上顎骨	右	dm ¹	1
		M ¹	1
		dm ³	1
		dm ⁴	1
		p ¹	1
	左	p ³	1
		M ²	1
		M ³	1
			1
			1
下顎骨	右	I	2
		P ₂	1
		P ₃	1
		M ₂	1
			1
	左	I	2
		dm ₃ , dm ₄ , M ₁	1
		M ₁	1
		M ₂	1
		M ₃	1
			1
		不明	齒
			2

第60表 脊椎動物遺体集計表⑬(ウシ)

部 位	右	左	不 明
頸骨			
側頭骨	0	1	0
下顎骨	2	1	0
窓突起	1	0	0
破片	1	0	0
椎体	環椎	0	0
軸椎	0	0	2
頸椎	0	0	2+②
胸椎	0	0	8
胸椎 線突起	0	0	1
腰椎	0	0	2
椎体	0	0	3
肋骨	近位～	0	0
助骨	0	0	6+③
軟骨	0	0	3+(5)
破片	0	0	①
肩甲骨	臼部	0	1
近位端	1	0	0
骨体	3	1	0
遠位部	0	1	0
破片	4+①	3	0
上腕骨	近位骨端のみ	1	0
遠位部	4	3	0
遠位骨端のみ	0	1	0
破片	3+①	2	0
橈骨	近位端	1	0
近位端～骨体	1	0	0
近位部	1	0	0
骨体	0	1+①	0
遠位骨端のみ	0	1	0
橈骨+尺骨	近位部	0	1
尺骨	近位骨端はずれ～遠位部	1	0
近位端～骨体	1	0	0
近位部～遠位部	1	0	0
破片	2	0	0
機側手根骨	完存	1	0
手根骨	完存	0	2
中手骨	近位端～骨体	0	1
骨体	1	0	0
破片	0	0	1
寛骨	腸骨部	0	1
臼部	2	4	0
破片	1	3	0
大腿骨	近位骨端のみ	1	2
近位骨端はずれ	0	1	0
近位端	1	0	0
骨体	2	0	0
遠位部	0	2	0
遠位端	1	0	0
破片	1+①	7	2

部 位	右	左	不 明	
脛骨	近位骨端のみ	1	1	0
	近位部	1	2+①	0
	骨体	{1}	0	0
	骨体～遠位部	0	3	0
	遠位部	2	0	0
	遠位骨端はずれ	1	0	0
踵骨	破片	4	7	1
		2	0	0
		足根骨	第4中心	0
中足骨	近位端	1	0	0
	近位端～遠位部	0	2	0
	骨体	0	2	0
	遠位端	1	0	0
基節骨	破片	1	3	3+①
		5	4	0
	完存	0	4	0
	遠位端	0	1	0
末節骨		0	1	0
	部位不明	破片	0	0
合 計			62 74 56	

注 (): 破片、○: キズあり、〔): 劣

第60表 脊椎動物遺体集計表⑭(ウマかウシ)

部 位	右/左	残存部位	個 数
		頸骨片	1
肩甲骨	左	破片	1
大腿骨	左右不明	遠位骨端のみ	1

第60表 脊椎動物遺体集計表⑯(イノシシノブタ歯)

部 位	右/左	残存部位	個 数
上顎骨	左	M ^{1~3}	1
	右	M ²	1
	左	M ³	1
下顎骨	左	I ₂	1
	左	C	1

第60表 脊椎動物遺体集計表⑯(イノシシノブタ)

部 位		右	左	不明
頭骨	側頭骨	1	1	0
	上顎骨	1	1	0
下頸	下顎骨	1	1	0
	筋突起	0	1	0
椎体	頸椎	0	0	2
	頸椎	0	0	1
	胸椎	0	0	5
	腰椎	0	0	5
	椎体	0	0	8
	仙骨	0	0	2
	破片	0	0	3
	肋骨	15+②	14+①	0
肩甲骨	骨体	5	8	0
	骨体～遠位部	0	1	0
	遠位端	2	4	0
上腕骨	近位端	1	1	0
	近位骨端はずれ	1	0	0
	近位骨端はずれ～遠位部	0	1	0
	近位部～骨体	0	1	0
	骨体	2	4	0
	骨体～遠位部	0	①	0
	遠位部	1	1	0
	遠位端	2	2	0
桡骨	破片	4	2	0
	近位端	1	0	0
	近位端～骨体	0	1	0
	近位端～遠位骨端はずれ	1	1	0
	近位骨端はずれ	1	0	0
	近位部～骨体	0	2	0
	骨体	0	2+①	0
	骨体～遠位端	1	0	0
尺骨	遠位骨端はずれ	0	1	0
	骨体～尺骨・骨体	0	1	0
尺骨	近位骨端はずれ	0	1	0
	近位骨端はずれ～骨体	0	①	0
	近位部～遠位部	①	0	0
	骨体	2	2	0
中手骨	II	6	2	0
	III	1+①	7+①	0
	IV	5	6	0
	V	1	1	0

部 位		右	左	不明
鷲骨部		5	0	0
臼部		2	2	0
寛骨	臼部～坐骨	0	1	0
	坐骨	1	0	0
	骨体	1	3	①
大腿骨	近位骨端はずれ	0	①	0
	近位骨端はずれ～骨体	1	0	0
	近位部～骨体	1	0	0
	近位部～遠位部	1	0	0
	骨体	3	4	0
	骨体～遠位部	1	0	0
	骨体～遠位骨端はずれ	0	1	0
	遠位部	0	1	0
脛骨	遠位骨端はずれ	1	0	0
	遠位骨端のみ	1	1	0
	破片	2	0	1
	膝蓋骨	1	0	0
腓骨	近位端骨端欠	0	①	0
	近位部	0	1	0
	近位部～骨体	1	0	0
	骨体	5	2+①	0
	骨体～遠位部	①	0	0
	骨体～遠位端	1	0	0
	遠位骨端はずれ	0	1	0
	遠位端	①	2	0
距骨	破片	0	1	0
	遠位骨端のみ	0	1	0
	距骨	0	1	0
	踵骨	6	2	0
中手・中足骨	中手・中足骨	6	4	3
	II	1	5	0
	III	4	1	0
	IV	3	1	0
基節骨	基節骨	4	4	0
	中節骨	1	0	0
	末節骨	2	1	0
	部位不明	0	0	1
合 計			116	118
				32

注 ○:キズあり

第60表 脊椎動物遺体集計表⑯(ヒト)

部位	個数
歯	1

第60表 脊椎動物遺体集計表⑩(ヘビ)

部 位	個 数
脊椎骨	43
肋骨	76

第60表 脊椎動物遺体集計表⑯(種不明)

部 位	個 数
尾椎	1
部位不明	1